

多紀郡西紀町

西木之部遺跡

近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書 XV

1993年3月

兵庫県教育委員会

多紀郡西紀町

にし き の べ 西 木 之 部 遺 跡

近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書 XV



1993年3月

兵庫県教育委員会



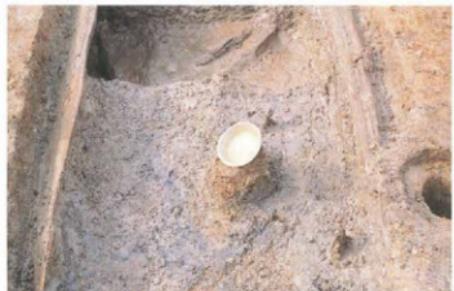
調査区遠景（南から）



調査区全景〔手前：C地区、奥：A地区〕(北から)



A地区全景（東から）



左) SD 65土器出土状況（東から）



右) 丸瓶出土状況（東から）



左) B地区北半部全景



右) B地区南半部全景



左) SK16 (東から)



右) SE2 (南から)



C地区全景（南から）



左) SE 2 (北から)



右) 下層面遺物出土状況 (北から)



勾玉：S 121・S 122・C 4，紡錘車：S 119，素文鏡：M3，M17，丸柄：M 1



例　言

1. 本書は、兵庫県多紀郡西紀町東木之部に所在する、西木之部遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、近畿自動車道舞鶴線建設に伴い日本道路公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が昭和56年に確認調査を実施し、昭和57年から昭和60年に全面調査を実施した。
3. 遺構名称は種類に応じて、土坑・土塙墓・その他=S K・S X、堅穴住居=SH、掘立柱建物=S B、井戸=S E、溝=S Dの記号を冒頭に付し、検出した順に番号をつけた。
4. 全面調査は、A地区、B地区、C地区に分け実施した。遺構名は、地区ごとに付したため遺構名称は重複している。
5. 遺物番号のうち、弥生時代から古墳時代初頭の土器は1~999番代の番号、古墳時代~奈良時代の土器は1000番代の番号、平安時代~鎌倉時代の土器は2000番台の番号を付した。その他の遺物は、金属製品がMを、木製品はWを、土製品はCを、石器・石製品はSを冒頭に付し、地区別ではなく通し番号を付した。
6. 描図・図版に用いた標高値は日本道路公団が設置したB. M (T P) を使用し、方位は磁北である。座標北は磁北からN 7° 30' E (昭和57年現在) である。
7. 本書の執筆者名については、本文目次の末尾に明記している。
8. 本書に用いた写真は、遺構については調査担当者が撮影した。遺物写真の撮影は、写真家、森昭氏に委託し撮影した。
9. 出土品の整理作業は、調査担当者であった十市橋重喜（平成2年5月死去）が中心となって昭和60年より開始したが、平成2年度より永口富夫・村上泰樹・岸本一宏・平田博幸が整理を担当し、図面等の作成にあたった。
10. 本書の編集は、池田正男・村上泰樹がおこない、松木謙美がこれを補助した。
11. 本遺跡より出土した墨書き器の判読は、小林基伸氏（兵庫県立歴史博物館）の協力を得た。深く感謝するしだいである。

本文目次

例　　言.....	i
本文目次.....	ii
挿図目次.....	iii
表目次.....	v
図版目次.....	v
写真図版目次.....	vii
第1章 発掘調査の経緯	(池田正男) 1
第2章 遺跡の環境	(池田)
第1節 地理的環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	6
第3章 A地区の調査	
第1節 弥生時代から古墳時代の遺物.....	(多賀繁治) 29
第2節 奈良時代の遺構・遺物.....	(平田博幸) 30
第3節 平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物.....	(村上泰樹) 47
第4章 B地区の調査	
第1節 弥生時代から古墳時代の遺構・遺物.....	(村上・多賀) 67
第2節 奈良時代の遺構・遺物.....	(平田) 81
第3節 平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物.....	(村上) 87
第5章 C地区的調査	
第1節 弥生時代から古墳時代の遺構・遺物	(村上・多賀) 101
第2節 奈良時代の遺構・遺物	(平田) 111
第3節 平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物	(村上) 129
第6章 その他の遺物	
第1節 古墳時代の土器	(平田) 143
第2節 木 器	(平田) 146
第3節 土製品	(村上) 150
第4節 金属器	(村上) 151
第5節 石器・石製品	(藤田 淳) 155
第7章 ま　と　め	
第1節 弥生時代から古墳時代の土器相	(多賀) 185
第2節 奈良時代の西木之部遺跡について	(平田) 185
第3節 平安時代から鎌倉時代の西木之部遺跡	(村上) 189

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	7	第36図 SII1出土の土器	73
第2図 奈良時代遺構全体図	31	第37図 SH3・4出土の土器	74
第3図 器高指数（1）	34	第38図 SH5・6出土の土器	74
第4図 器高指数（2）	35	第39図 SK16出土の土器	75
第5図 器高指数（3）	36	第40図 SK7出土の土器	75
第6図 器高指数（4）	37	第41図 SK11・12出土の土器	76
第7図 柱穴内出土の土器	39	第42図 SK15出土の土器	76
第8図 SD65出土の土器	41	第43図 SD27・29出土の土器	79
第9図 SD70出土の土器	43	第44図 SD34B出土の土器	79
第10図 墨書き器	45	第45図 出土位置不明の土器	80
第11図 I期の遺構	46	第46図 奈良時代の遺構	82
第12図 P1	47	第47図 SE2	83
第13図 SD65	49	第48図 SD20・24出土の土器	84
第14図 SD18・23・36・53	50	第49図 土馬	86
第15図 II期の遺構	51	第50図 平安時代～鎌倉時代の遺構	87
第16図 SB8柱穴出土の土器	52	第51図 SB3柱穴	88
第17図 SD27出土の土器	53	第52図 SB4柱穴	89
第18図 SK28・34出土の土器	53	第53図 SB5柱穴	89
第19図 SB4・9出土の土器	61	第54図 SE1	91
第20図 柱穴群出土の土器	61	第55図 SE2	91
第21図 SD21・36・52・63出土の土器	61	第56図 SX1・2・3	92
第22図 SD35出土の土器	62	第57図 P186	93
第23図 SD65出土の土器（1）	63	第58図 SB3出土の土器	94
第24図 SD65出土の土器（2）	64	第59図 SB4出土の土器	95
第25図 SD69出土の土器	65	第60図 SB5・6出土の土器	95
第26図 包含層（1）	65	第61図 SB7	95
第27図 包含層（2）	65	第62図 SA1	95
第28図 中国製磁器	66	第63図 SD1・2・6・7出土の土器	96
第29図 弥生時代～古墳時代の遺構	67	第64図 SE1出土の土器	97
第30図 SH1	68	第65図 SE2出土の土器	97
第31図 SH2・3	69	第66図 B12遺物群出土の土器	97
第32図 SII4	70	第67図 K9遺物群出土の土器	98
第33図 SH5	71	第68図 緑釉	99
第34図 SK16	71	第69図 合子	99
第35図 SK7・11・15	72	第70図 柱穴群出土の土器	99

第71図 弥生時代～古墳時代の遺構	101	第109図 SD100A・B	135
第72図 SH150・52	102	第110図 SE1	135
第73図 SD30・34	103	第111図 SE4	136
第74図 SD60	104	第112図 SK26	136
第75図 SD71	104	第113図 SB21	137
第76図 SD91	105	第114図 柱穴出土の上器（1）	137
第77図 SX1	105	第115図 柱穴出土の土器（2）	138
第78図 SK5	106	第116図 SE1出土の土器	139
第79図 SK20	107	第117図 SE5出土の土器	139
第80図 SH50出土の土器	108	第118図 SD5出土の土器	139
第81図 SD60出土の土器	108	第119図 SD4・7出土の上器	140
第82図 SD72出土の土器	109	第120図 SD8出土の土器	140
第83図 SD91・92出土の土器	109	第121図 SD23出土の上器	140
第84図 SX1出土の土器	109	第122図 SD29出土の土器	141
第85図 SK5・20他出土の土器	110	第123図 SD100B出土の土器	141
第86図 柱穴出土の土器	110	第124図 緑 紬	141
第87図 余良時代の遺構	112	第125図 中国製磁器	142
第88図 SE3	114	第126図 A地区出土の土器	143
第89図 SF2内遺物出土状況	115	第127図 B地区出土の土器	144
第90図 SE2	116	第128図 C地区出土の土器	145
第91図 SE2井戸枠実測図	117	第129図 出土木器（1）	146
第92図 SD5出土の土器（2）	120	第130図 出土木器（4）	149
第93図 SD5出土の土器（3）	121	第131図 A地区 SD65出土土製品	150
第94図 SD5出土の土器（4）	122	第132図 B地区 出土土製勾玉	150
第95図 その他の溝出土の土器	122	第133図 A地区 出土金属器	151
第96図 SE2出土の上器（2）	123	第134図 B地区 出土金属器（1）	151
第97図 SE1・SE3出土の土器	125	第135図 B地区 出土金属器（2）	152
第98図 各土坑出土の土器	126	第136図 B・C地区 出土金属器（1）	153
第99図 円面鏡	128	第137図 B・C地区 出土金属器（2）	153
第100図 墨書き土器	128	第138図 C地区 出土金属器	154
第101図 平安時代～鎌倉時代の遺構	129	第139図 石 器（1）	156
第102図 P1	130	第140図 石 器（2）	158
第103図 P1	131	第141図 石 器（3）	159
第104図 P11・15	131	第142図 石 器（4）	161
第105図 P18	131	第143図 石 器（5）	164
第106図 P3	132	第144図 石 器（6）	165
第107図 P6・11・12	133	第145図 石 器（7）	165
第108図 SD5	134	第146図 石 器（8）	168

第147図 石 器 (9)	169	第155図 石 器 (16)	178
第148図 石 器 (10)	170	第156図 石 器 (17)	179
第149図 石 器 (11)	171	第157図 石 器 (18)	180
第150図 石 器 (12)	172	第158図 石 器 (19)	181
第151図 石 器 (13)	173	第159図 奈良時代の西木之部遺跡.....	185
第152図 石 器 (14)	175	第160図 奈良時代の遺構.....	186
第153図 石 器 (15)	176	第161図 建物址標軸方位.....	190
第154図 石 製品.....	177	第162図 平安～鎌倉時代の遺構変遷.....	191

表 目 次

表1. 周辺遺跡地名表.....	8	表8. C地区出土土器観察表(奈良時代)	209
表2. 出出土器分類表.....	54	表9. A地区出土土器観察表(平安～ 鎌倉時代)	213
表3. A地区出土土器観察表(弥生土器 ～土師器).....	193	表10. B地区出土土器観察表(平安～ 鎌倉時代)	214
表4. B地区出土土器観察表(弥生土器 ～土師器).....	194	表11. C地区出土土器観察表(平安～ 鎌倉時代)	216
表5. C地区出土土器観察表(弥生土器 ～土師器)	202	表12. B地区出土土器観察表(古墳時代)	218
表6. A地区出土土器観察表(奈良時代)	204	表13. 石器集計表	219
表7. B地区出土土器観察表(奈良時代)	208	表14. 石器一覧	219

図 版 目 次

図版1 調査区全体図
図版2 遺跡周辺の地形
図版3 A地区全体図
図版4 C地区全体図
図版5 A地区包含層出土の弥生～古墳時代の土器(1)
図版6 A地区包含層出土の弥生～古墳時代の土器(2)
図版7 B地区土器集中群出土の弥生～古墳時代の土器(1)
図版8 B地区土器集中群出土の弥生～古墳時代の土器(2)
図版9 B地区土器集中群出土の弥生～古墳時代の土器(3)
図版10 B地区土器集中群出土の弥生～古墳時代の土器(4)

- 図版11 B地区包含層出土弥生～古墳時代の土器(1)
- 図版12 B地区包含層出土弥生～古墳時代の土器(2)
- 図版13 B地区包含層出土弥生～古墳時代の土器(3)
- 図版14 B地区包含層出土弥生～古墳時代の土器(4)
- 図版15 B地区包含層出土弥生～古墳時代の土器(5)
- 図版16 包含層出土弥生～古墳時代の土器(6)
- 図版17 B地区出土地不明弥生～古墳時代の土器
- 図版18 C地区包含層出土弥生～古墳時代の土器
- 図版19 A地区包含層出土奈良時代の土器(1)
- 図版20 A地区包含層出土奈良時代の土器(2)
- 図版21 A地区包含層出土奈良時代の土器(3)
- 図版22 A地区包含層出土奈良時代の土器(4)
- 図版23 A地区包含層出土奈良時代の土器(5)
- 図版24 A地区包含層出土奈良時代の土器(6)
- 図版25 A地区包含層出土奈良時代の土器(7)
- 図版26 A地区包含層出土奈良時代の土器(8)
- 図版27 B地区造構内出土奈良時代の土器
- 図版28 B地区包含層出土奈良時代の土器(1)
- 図版29 B地区包含層出土奈良時代の土器(2)
- 図版30 C地区柱穴内出土奈良時代の土器
- 図版31 C地区SD5出土の土器(1)
- 図版32 C地区SE2出土の土器(1)
- 図版33 C地区包含層出土奈良時代の土器(1)
- 図版34 C地区包含層出土奈良時代の土器(2)
- 図版35 C地区包含層出土奈良時代の土器(3)
- 図版36 C地区包含層出土奈良時代の土器(4)
- 図版37 A地区包含層出土平安～鎌倉時代の土器
- 図版38 B地区包含層出土平安～鎌倉時代の土器(1)
- 図版39 B地区包含層出土平安～鎌倉時代の土器(2)
- 図版40 C地区包含層出土平安～鎌倉時代の土器
- 図版41 出土木器(2)
- 図版42 出土木器(3)

写真図版目次

卷首カラー(1)	卷首カラー(3)	卷首カラー(4)
上) 調査区遠景	上) B地区北半部全景	上) C地区全景
下) 調査区全景	中) B地区南半部全景	中) SE2
卷首カラー(2)	中) SK16	下) 下層面遺物出土状況
上) A地区全景	下) SE2	卷首カラー(5)
中) SD65土器出土状況		上) 勾玉・筋銚車・素文鏡・丸軸
下) 丸軸出土状況		下) 緑 猫
写真図版 1 遺跡の周辺		
上) 遺跡周辺の航空写真	上) SB1	写真図版 8 B地区奈良時代遺構(1)
下) 遺跡遠景	中) SE2	
写真図版 2 A地区奈良～平安時代遺構	下) SE2	
上) A地区全景	写真図版 9 B地区平安～鎌倉時代遺構(2)	
中) 奈良時代建物址群	上) 南地区的遺構	
下) 平安時代SD35・65	中) P189素文鏡出土状況	
写真図版 3 A地区平安～鎌倉時代遺構(1)	下) B12遺物群	
上) 建物址群	写真図版10 B地区平安～鎌倉時代遺構(3)	
中) 谷地形出土木製品(1)	上) SE 1	
下) 谷地形出土木製品(2)・谷地形出土丸軸	中) SE 1 断面	
写真図版 4 A地区平安～鎌倉時代遺構(2)	下) SE 2	
上) I期の遺構(溝・建物群)	写真図版11 C地区弥生～古墳時代遺構(1)	
中) SD65土層断面	上) SH50・51	
下) SD65	中) SD30・34	
写真図版 5 B地区弥生～古墳時代遺構(1)	下) SD60	
上) SH1	写真図版12 C地区弥生～古墳時代遺構(2)	
中) SH2～4	上) SD91	
下) SH4	中) SX 1	
写真図版 6 B地区弥生～古墳時代遺構(2)	下) SK20	
上) SH5	写真図版13 C地区奈良時代遺構(1)	
中) SK16	上) SB1・SA1・SD62	
下) SK16	下) SB2～5・SE2・SD36～37・SK12	
写真図版 7 B地区弥生～古墳時代遺構(3)	写真図版14 C地区奈良時代遺構(2)	
上) 第10土器集中群	上) 奈良時代遺構群	
中) 第8・9土器集中群	中) SB2～4建物群	
下) 第1～4土器集中群	下) SB1・SA1・SD62	

写真図版15 C地区奈良時代遺構(3)

- 上) SB1
- 中) SB2
- 下) SB3

写真図版16 C地区奈良時代遺構(4)

- 上) SE3
- 下) SE3断面

写真図版17 C地区奈良時代遺構(5)

- 上) SE2
- 中) SE2
- 下) SE2最下位の井幹

写真図版18 C地区奈良時代遺構(6)

- 上) SE2北半部断面
- 中) SE2北半部断面
- 下) 北西隅木組状況・北東隅木組状況

写真図版19 C地区奈良時代遺構(7)

- 上) SE2北西隅木組状況・北東隅木組状況
- 下) 南西隅木組状況・南東隅木組状況

写真図版25 A地区弥生～古墳時代の土器(包含層)

写真図版26 B地区弥生～古墳時代の土器(遺構)

写真図版27 B地区弥生～古墳時代の土器(遺構)

写真図版28 B地区弥生～古墳時代の土器(包含層)

写真図版29 B地区弥生～古墳時代の上器(包含層)

写真図版30 C地区弥生～古墳時代の土器(遺構)

写真図版31 C地区弥生～古墳時代の土器(包含層)

写真図版32 B地区古墳時代の土器(包含層)

写真図版33 B地区古墳時代の土器(包含層)

写真図版34 A地区奈良時代の土器(遺構)

写真図版35 A地区奈良時代の上器(SD65)

写真図版36 A地区奈良時代の土器(包含層)

写真図版37 A地区奈良時代の上器(包含層)

写真図版38 A地区奈良時代の土器(包含層)

写真図版39 A地区奈良時代の土器(包含層)

写真図版40 A地区奈良時代の土器(包含層)

写真図版41 A地区奈良時代の土器(墨書き器)

写真図版42 A地区奈良時代の土器(墨書き土器)

写真図版20 C地区奈良時代遺構(8)

- 上) SE2井幹内上層面遺物出土状況
- 中) 上層面出土の土器
- 下) 上層面出土の蔓

写真図版21 C地区奈良時代遺構(9)

- 上) SE2井幹内下層面遺物出土状況
- 中) 下層面出土の楕筒
- 下) 上層面出土の壺串

写真図版22 C地区奈良時代遺構(10)

- 上) SE2下層面出土の土器
- 中) 下層面出土の台状木製品
- 下) 下層面出土の蔓

写真図版23 C地区平安～鎌倉時代遺構(1)

- 上) SB8, SD5・7
- 中) SB11～14・19, SD23
- 下) SB15・17

写真図版24 C地区平安～鎌倉時代(2)

- 上) SE1
- 中) SE4
- 下) SD5・7断面

- 写真図版43 A地区奈良時代の土器(墨書き土器)・古墳時代の土器(包含層)
- 写真図版44 B地区奈良時代の土器(遺構)
- 写真図版45 B地区奈良時代の土器(包含層)
- 写真図版46 B地区奈良時代の土器(包含層)
- 写真図版47 B地区奈良時代の土器(包含層)
- 写真図版48 C地区奈良時代の土器(Pit内)
- 写真図版49 C地区奈良時代の土器(SD5)
- 写真図版50 C地区奈良時代の土器(SE2)
- 写真図版51 C地区奈良時代の土器(包含層)
- 写真図版52 C地区奈良時代の土器(包含層)
- 写真図版53 C地区奈良時代の土器(包含層)
- 写真図版54 A地区平安～鎌倉時代の土器(遺構)
- 写真図版55 A地区平安～鎌倉時代の土器・土製品・金属器
- 写真図版56 B地区平安～鎌倉時代の土器(遺構)
- 写真図版57 B地区平安～鎌倉時代の土器(遺構)
- 写真図版58 B地区平安～鎌倉時代の土器(包含層)
- 写真図版59 B地区平安～鎌倉時代の土器(包含層)
- 写真図版60 B地区平安～鎌倉時代の土器(包含層)
- 写真図版61 B地区中国製磁器(1)
- 写真図版62 B地区中国製磁器(2)
- 写真図版63 B地区中国製磁器(3)
- 写真図版64 石器(1)
- 写真図版65 石器(2)
- 写真図版66 石器(3)
- 写真図版67 石器(4)
- 写真図版68 石器(5)
- 写真図版69 石器(6)
- 写真図版70 石器・石製品
- 写真図版71 金属器

第1章 発掘調査の経過

昭和30年代後半に始まる、東海道・山陽新幹線、東名、名神高速道路等の基幹道路の建設、大規模住宅団地の造成・建設、農業基盤整備事業といった国をあげての公共事業は、國土の構造改革を進めた結果日本は、高度経済成長を遂げ、GDPを世界第2位に押し上げることとなった。

そのような背景の中で兵庫県においては、昭和40年代になると、國は、県内を東西に中国山地を越すように走る中国縦貫自動車道の建設にかかり、昭和49年には神崎郡福崎町まで供用開始を図った。続いて山陽自動車道の建設を進める。一方兵庫県は、昭和50年代前半には三田市青野ダムの建設に着手する。そして、丹波地域の市町においては、農業基盤整備事業が広範囲で展開された。このように揖丹地域においては、國及び地方自治体が、線・点・面を起点として、國土の構造改革に取り組んでいた。

そこに新たに丹波・丹後地方と京阪神地域を結ぶ幹線道路として高速自動車道・近畿自動車道舞鶴線（以下「近舞線」と略称する）が計画された。この近舞線は、中国縦貫自動車道の吉川ジャンクションから京都府舞鶴インターチェンジまで総延長76.5km、日本列島を南北に横断する道路である。このうち福知山市～三田市間（53.8km）は、昭和48年10月に工事施行命令が出された。昭和52年9月に福知山市～丹南町（41.2km）と、同54年3月に丹南町～三田市（12.6km）間の路線決定が行われ、日本道路公团により近畿自動車道舞鶴線設計図が発表された。

兵庫県教育委員会は、道路建設計画に先立ち、昭和48年度、兵庫県内埋蔵文化財分布調査と合わせて日本海太平洋連絡道・播但自動車道予定地内の埋蔵文化財分布調査を、埋蔵文化財に造詣の深い有識者を遺跡分布調査者に指名して実施した。その成果は、昭和49年3月末日、兵庫県教育委員会発行の『特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表 第3分冊』に集約された。

昭和53年、近舞線の建設設計図が具体化するに至り、日本道路公团から依頼を受けた兵庫県教育委員会は、路線内の遺跡分布調査を昭和53・56年度に実施し、それに伴って遺跡確認調査を実施した。その結果、昭和60年度までに、三田市2地区、多紀郡15地区、水上郡15地区の新たな遺跡が確認され、多紀郡西紀町内では、本遺跡の他に、沢の浦古墳群、若塚古墳群、上板井古墳群、板井・寺ヶ谷造跡、内場山墳墓群の発掘調査を行った。

昭和56年度、兵庫県教育委員会が、丹南町東河内、西紀町東木ノ部、上板井、小坂地区を対象として計画路線、及び西紀サービスエリア建設予定地内の遺跡分布調査を実施したところ、No32、33地点の西木之部遺跡、No31地点の西木之部散布地において、土器の散布が認められ、確認調査が必要と判断された。東木ノ部地区は、平安時代以降摂関家領丹波国宮田庄に属し、東寺領大山庄に隣接していたため、両庄の間では用水や山林をめぐって用水相論・境相論などの紛争が絶えなかった。このことは、『東寺百合文書』に代表される中世文書に残され、特に荘園絵図「丹波国大山庄用水差図案」（徳治3（1308）年に描かれているなど、まさに歴史の舞台となったところである。文献資料に見る歴史事実と、発掘調査の成果の合一が望まれた。

そこで昭和57年度にNo32地点、33地点、31地点の順で確認調査、そしてNo32地点の全面調査を実施した。

西木之部遺跡B地点（No32地点）は、西紀サービスエリア建設予定地を対象として昭和57年4月12日～6月11日の期間、坪掘りによる第1次確認調査を実施した。しかし、坪掘り調査では、遺構の範囲が

不明瞭であるため、トレンチによる第2次確認調査に切り替え、8月18日に終了した。

その結果、サービスエリア内ほぼ全域に遺構・遺物包含層が確認された。具体的には地形は、大きく3つの谷で構成されており、南の谷をA地点、東の谷をB地点、西の谷をC地点とした。さらに、地形により上段・中段・下段の3カ所に細分した。時代的には弥生時代中期・古墳時代前期・奈良時代・平安時代・鎌倉時代の遺構や遺物が確認された。

B地点下段部分（約1,000m²）については、確認調査後の8月19日から12月17日の期間、引き続いて第3次全面調査を行った。

遺構は、平安時代末から鎌倉時代初頭の建物跡4棟、溝9条、井戸2基、土壙3基が検出された。遺物は、須恵器（壺、楕、小皿）、土師器（小皿、楕、羽釜）、瓦器（楕、小皿）などや、白磁楕、青磁、小皿などの輸入陶磁器も検出された。

続いて、西木之部遺跡（No33地点）は、昭和56年度の分布調査結果では、東木ノ部の向谷山塊から派生する尾根先端に瘤状の盛り上がった地点を確認し、その立地、形状から古墳と推定された。樹木伐開後の、5月10日～17日の期間に確認調査を実施した。調査は、尾根先端部に、幅1m、北東南西の順に延長8、12、10、24mのトレンチを十文字に設定した。その結果、古墳と判断すべき墓壙、溝、外部施設等の検出に努めたが確認できなかった。

西木之部散布地（No31地点）は、東河内から孤山と呼ばれる独立丘を北端とする水田地域である。11月8日～25日の期間において、調査対象面積約16,000m²、47カ所の坪穴（グリッド）を設定した。調査の結果、ピット、柱穴等の遺構・遺物が確認できなかつたため遺跡は存在しないものと判断された。

昭和58年度は、西木之部遺跡B地点（No32地点）の第4次調査を、B地点の上・中段を調査対象として行った。調査の期間は、昭和58年4月12日～10月20日の期間である。この年をもってB地点の調査は終了した。

上段からは、弥生時代中期の塗棺墓1基、弥生時代末から古墳時代前期にかけての堅穴住居跡6棟、ほかにピット、溝、古墳時代後期の土壙を検出した。

中段では、住居跡の遺構は、検出されなかつたが、土壙、貯蔵穴、掘立柱建物跡（2×2間）が認められた。遺構および包含層中からの出土遺物は、膨大な量および、主として、壺、壺、高杯、器台、鉢、ミニチュア土器等の器種があり、弥生時代末から古墳時代前期にかけての遺物が主体である。石器は、石斧、石包丁、石鏃、石錐が出土した。奈良時代末から平安時代初頭の遺構は、井戸1基が確認された。木組みの方形井側をもち、横板を井籠組にして4段以上積み重ねた構造である。平安時代末から鎌倉時代初頭の遺構には、製鐵関連遺構、柱穴が確認された。遺物は、綠釉陶器、灰陶陶器、須恵器、土師器、瓦器等が、特異なものとして土馬が出土した。

昭和59年度は、A地区・C地区を対象として第5次の全面発掘調査を実施した。

A地区は、昭和60年1月6日から3月27日の期間にわたり発掘調査を実施した。調査面積は、約3,500m²である。大きく旧石器時代、弥生時代後期から古墳時代前期、奈良時代末から鎌倉時代初頭の3時期に分けられる。

旧石器時代の遺構・遺物については、2m×2mの坪6カ所と幅2mのトレンチ4本を設定して確認した。その結果、A地区全体に始良丹沢火山灰とその上下の泥炭層が広がっていることが明確になり、火山灰直下の泥炭層からチャート製ナイフ型石器が出土した。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺構には、方形堅穴住居跡2棟の他、ピット群、溝、土壙がある。

遺物は、壺、甕、高杯、器台等が出土した。

奈良時代から鎌倉時代については、1、8世紀末から9世紀初頭、2、10世紀、3、12世紀末から13世紀初頭の3期の遺構面および遺物包含層を確認した。A地区の中央を走る谷は、1の時期では自然流露であったものを、2・3では人工的な溝に切り替えるなどの所見を得た。

遺構は、掘立柱建物跡10棟、柱穴群、溝、土壙等を検出した。特に10世紀代の木樋をもつ溝(SD-65)からは、多数の縄輪陶器等が出土し、貴重な資料を提供した。遺物は、縄輪陶器のほか、須恵器、土師器、瓦器、青磁、白磁、墨青上器、青銅製丸鉗等がある。また、曲物、木皿未製品、ツチノコ、建築部材等の多くの木製品が出土した。

C地区は、昭和59年12月17日から昭和60年3月30日の期間に調査を実施した。調査対象面積約4,200m²である。

この地区は、縄文時代草創期、弥生時代後期から古墳時代前期、奈良時代末から平安時代初頭、平安時代末から鎌倉時代初頭の4時期の遺構面からなる複合遺跡である。

縄文時代草創期に属する尖頭器が1点出土した。そのため、43ヵ所の坪を設定し、確認調査を実施した。その結果調査地南側の約1,000m²の範囲で、フレーク、チップ等が出土し、遺物包含層の広がりを確認した。

弥生時代後期から古墳時代前期、竪穴住居跡4棟、壺棺1基、溝4条が検出された。

奈良時代末から平安時代初頭に属する掘立柱建物跡7棟、溝1条、木組み井戸2基が検出された。特に調査区南西隅で検出された井戸からは、隆平永宝(延暦15(796)年)、齊串3点が环・楕等とともに出土した。

平安時代末から鎌倉時代初頭の遺構は、掘立柱建物6棟、木組み井戸、溝等が全城にわたって検出された。

昭和60年3月30日に、5年間にわたる発掘調査は、多大なる成果を得て終了した。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

西木之部遺跡（註1）は、篠山盆地の西北、兵庫県多紀郡西紀町東木ノ部・西木ノ部鏡音寺の坪に所在する。座標は、北緯35度05分23秒、東經135度10分14秒である。

西木之部遺跡の位置する篠山盆地は兵庫県の東部、京都府に接する県境に位置し、旧国名は、丹波國である。この盆地は、丹波高地の中央にあり、東西約12km、南北約4km、盆地底標高200mの舟底状を呈する。地層が摺曲作用を受けて、盆地の中央部を東西に向斜軸が走り、現在篠山川が流れている。そして、盆地内を東西方向に白髪岳断層が、南北方向には阿草断層といった断層線が走る構造盆地である。

盆地の周囲を北から時計回りに標高600m～700m級の三嶽、小金ヶ嶽、八ヶ尾山、雨石山、櫛ヶ嶽、三国岳、弥十郎ヶ嶽、三国ヶ岳、愛宕山、虚空藏山、白變岳、金山、黒頭峰、夏栗山、西ヶ嶽等の山々が囲み、かつて平野部は、中生代白亜紀中期に堆積した篠山層群によって、淡水の湖が存在した。この篠山層群は、平野の中央に島状に点在する独立丘陵や盆地周縁の丘陵部を構成している。平野部は東西の高低差が少なく、南北の高低差が大きい。篠山盆地には、鼓峠、板坂峠、原山峠、天引峠、天王峠、古坂峠、山越峠、草野坂（日出坂）、三本峠、小峠、鐘ヶ坂、瓶割峠（国領坂）、佐中峠、栗柄峠などの峠があり、盆地に入るには急峻な峠を登りきらなければならない山の道がある。

篠山盆地には大別して2つの水系、加古川水系と武庫川水系がある。

加古川水系は、盆地中央を南北に二分して流れる篠山川が東の三国岳の山塊に源を発し、緩やかに西流する。比高差400～500mの周囲の山々から流れ出る大山川、宮田川、藤岡川、黒岡川、畠川、春日江川、藤坂川、朝井川は南に流れ、また、辻川、曾地川、奥谷川、小枕川、住吉川などが北流して篠山川に合流する。そして篠山川は、小瀧から急流となり、高低差約100mの峡谷を下って氷上郡山南町上瀧・下瀧に達し、井原橋付近で佐治川と合流し加古川となる。

一方、武庫川水系は、後述する篠山川と河川争奪を演じた武庫川が、南の愛宕山系から流れ出る龍藏寺川から真南条川（武庫川）となり、途中で田松川や天神川などの支流を合わせながら、三田・宝塚・西宮から大阪湾に注ぐ。河川の傾斜は、丹南町当野付近でわずか1000分の3といったきわめて緩やかなものである。

川の道をたどり篠山盆地に入るには、急峻な加古川ルートと比高差のない武庫川ルートを選択することによってたどり着くことができる。

このことは、主要交通路が、武庫川ルートに沿ってJR福知山線や国道176号線が、篠山盆地へ、篠山盆地からJR福知山線は川の道、加古川ルートを経て山南町へ、国道176号線は山の道、丹南町道入鍾ヶ坂から柏原町へと、諸説あるが旧山陰道をたどる。

篠山盆地における古地形を神戸大学の野村亮太郎（註2）・田中廣吾教授（註3）の説により復元すると、大局的にみて高位段丘に川代段丘面、低位段丘に大山段丘面、最低位段丘の宮田段丘面の三段の段丘面が確認される。川代段丘面は現在の流れと逆向きの西から東に傾き、大山段丘面は、篠山盆地底の大部分を占め、北から南へ微かに傾斜している。そして、宮田段丘面は現在の篠山川沿いに東から西へ低くなっている。そのため篠山盆地の水は、ウルム氷期後半、川代段丘面、大山段丘面の形成時に、

武庫川を通じて南方向に流れていた。

ウルム氷期竜寒期に盆地底の堆積物、すなわち弁天土が堆積した。その原因として、武庫川沿いの盆地底における麓面の発達・拡大によって堆積がはじまり、そして、篠山盆地は排水不良から湖水となつた。

この頃、陸地部と湿地部の境界近くに、西木之部遺跡から北へ600mに位置する板井寺ヶ谷遺跡（標高214m）が喩まれた。

その後、今から1万4～5千年前、武庫川と加古川間ににおける河川争奪現象が生じ、篠山盆地の水は川代峡谷沿いに溢れ、加古川へ流入した。篠山湖の消滅後、盆地底の埋積が完了し、段丘化が進行することになり、宮田段丘面が形成されることとなる。

西木之部遺跡の立地する地域は、東側に南流する宮田川によって形成された河岸段丘宮田面上に位置する。遺跡の立地は、堆積による埋没の進んだ谷状地形にあり、南からA地区・C地区・B地区がそれぞれ約100m離れて立地する。

こうして地理的に見ると、篠山盆地は、古くから奈良、京都の都、商業都市大坂にも近く播磨、摂津に接する関係から、律令期の地方機關である多紀郡衙、小野駅家、長柄駅家と古代山陰道、東寺領大山庄、戦国期の八上城、江戸時代の篠山城など、交通の要衝、政治・経済の中心として歴史の舞台に重要な位置を占めている。

註

註1 兵庫県教育委員会「板井寺ヶ谷遺跡－旧石器時代の調査－」兵庫県文化財調査報告書第96-1号 1991(平成3)年

註2 野村亮太郎「篠山盆地の地形発達」「板井寺ヶ谷遺跡－旧石器時代の調査－自然科学編」兵庫県文化財調査報告書第96-1 1991(平成3)年

註3 田中廣啓「兵庫県における山麓部の地形形成」「板井寺ヶ谷遺跡－旧石器時代の調査－自然科学編」兵庫県文化財調査報告書第96-1 1991(平成3)年

第2節 歴史的環境

1. はじめに

昭和30年代に始まる高度経済成長を如実に示すものとして、国を挙げて高速道路・新幹線網の拡充・拡大、住宅地等の造成等に係る大規模開発整備事業等を日本列島いたるところで展開した。山国篠山盆地も例外ではなく、昭和40年代に始まる農業基盤整備事業や住宅団地開発事業、昭和50年代後半には「近畿自動車道舞鶴線」建設事業が実施された。

西木之部遺跡は、昭和57年から59年にかけて近畿自動車道舞鶴線の建設に先立ち発掘調査を実施した。その結果、主に奈良時代（8世紀）から鎌倉時代（13世紀初頭）にかけて営まれた集落遺跡であることが判明した。

篠山盆地の古代史といえば、福原潛次郎（会下山人）著『多紀郷土史話』昭和9（1934）年、奥田栄々齊著『多紀郷土史考』上・下巻・昭和33（1953）年、宮川満編『大山村史（本編・資料編）』昭和39（1964）年、そして『多紀文化顕彰会』等に集う郷土史研究者の発表、会報『放光』を通して、古墳時代の雲部車塚古墳や谷間地に存在する横穴式石室墳を中心にして、研究が進められてきた。

ところが、大規模開発事業に先立ち、文化財保護に伴う法令の整備が図られると、県・各市町、及び郡教育委員会にも専門職員が配置された。その結果皮肉にも多くの遺跡が発掘され、歴史を塗り替えることとなった。

そこで、篠山盆地（篠山町・丹南町・西紀町・今田町）における最近の発掘調査の成果を踏まえ、西紀町宮田川水系において展開された歴史事象を基軸に据え、篠山盆地を舞台にして展開された歴史を織りなして綴っていきたい。

2. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、兵庫県多紀郡内において今まで皆無であったが、昭和58（1983）年宮田川水系にある西紀町板井寺ヶ谷遺跡（註1）が発見された。この遺跡の発見は、近畿地方において、石器群が始良火山灰との層位的関係をもって検出された初めての例として大きな意味をもつものである。

石器は、陸地部で暗灰色火山灰と黄色粘土、湿地部で泥炭Ⅱ・泥炭Ⅲと灰色粘土の層二面から出土し、始良丹沢火山灰の上下に文化層が認められた。

上層火山灰の上に位置する暗灰色火山灰からは、サヌカイト製角錐状石器、チャート製ナイフ形石器、削器、搔器、加工痕のある剥片など約750点が発掘された。石器の石材は、サヌカイト・チャート・凝灰岩を使用しており、その約6割がサヌカイト、その他が4割である。遺構は、調査区中央で検出され、礫群3群（計7基）、土壙1基がある。炭素14年代法によると約2万年前と推定される。

下位火山灰の下に位置する黄色粘土層からは、サヌカイト・チャート両石材素材のナイフ形石器、凝灰岩製局部磨製石斧、削器、搔器、楔形石器、錐状石器、使用痕のある剥片など約2500点が発掘された。石器の石材はサヌカイトとチャートのほか頁岩、凝灰岩、砂岩、水晶などがあり、サヌカイトが約4割、チャートが約6割を数える。チャート・サヌカイトの2群の石器群は、二つの異なった伝統文化に属する集団の所産と考えられる。炭素14年代法によると約2万5千年前と推定される。



第1図 周辺遺跡分布図

表1. 周辺遺跡地名表

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	西木之部遺跡	18	久後ノ下遺跡	35	宿山古墳群
2	内場山遺跡	19	城垣内A遺跡	36	三子塚1・2号墳
3	板井・寺ヶ谷遺跡	20	西向遺跡	37	北野遺跡
4	上板井遺跡	21	神尻古墳群	38	山田2号墳
5	上板井古墳群	22	庄谷窯跡	39	出谷遺跡
6	沢の浦古墳群	23	猫塚窯跡	40	人浦2号墳(消滅)
7	箱塚古墳群	24	池谷窯跡	41	桂ヶ谷遺跡
8	小坂古墳群	25	ダイジョウダニ窯跡	42	諏訪山古墳
9	東山古墳	26	トチガタニ窯跡	43	赤土の坪窯跡
10	四王寺谷古墳群	27	五反田窯跡	44	大塚古墳
11	乗竹古墳群	28	三河谷窯跡	45	住吉川右岸遺跡
12	杭谷古墳群	29	才藏坊窯跡	46	味間南窯跡
13	安養寺古墳群	30	石住東谷窯跡	47	諏訪腰山古墳
14	向山古墳	31	清水谷窯跡	48	西山北古墳(消滅)
15	宮田1号墳	32	天内谷窯跡	49	長者ケ谷1号墳
16	大師山古墳群(6号墳)	33	小丸山古墳	50	庄境1・2号墳
17	口阪本遺跡	34	半鐘塚古墳群		

3. 縄文時代

篠山湖の消滅に伴い、篠山川による新しい河岸段丘が形成されるなか、板井寺ヶ谷遺跡から縄文時代の草創期に属するサヌカイト製尖頭器、篠山町藤岡山遺跡(註2)から、チャート製木葉形尖頭器、サヌカイト製削器、その他剥片約80点が出土。柳葉形尖頭器は、篠山町沢田遺跡(註3)や和田(註4)から出土。また篠山町矢代(註5)や今田町黒石(註6)から有舌尖頭器が、採集されている。

藤岡山遺跡は、篠山町春日江、篠山川の支流である春日江川の右岸、微高地に立地する旧石器・縄文・弥生時代にかけて複合する遺跡である。中期前半に位置する鷹島式土器に比定される爪形文土器、石匙が出土している。後期は、磨消縄文を地文とする中津式、あるいは3本の沈線で曲線的な文様を描く福田K II式に属する土器片が多数出土しており、この遺跡の最も栄えた時期と思われる。晩期は、滋賀里IV式に属する口縁部に一条の刻目突帯をもつ深鉢形土器があり、また小さな刻目を付す突帯文土器が採集されている。後葉の船橋式に属するものかと思われる。

また、同町筱見遺跡(註7)においては、北白川上層式に属し、後期中葉に属する口縁部が肥厚して内湾する、いわゆる縁帶文土器や櫛状把手をもつ深鉢の破片、頭部から胴部にかけて磨消縄文を加えている上器が出土。晩期中葉を中心として、薄手の沈線文、条痕文を施した深鉢形土器、丸底の上器片などかなり大型の土器片が出土、口頭部がゆるやかにくの字状に外反し、さらに頭部から張り出す胴部をもつもの、後は不明瞭、口唇部には二枚貝の条痕を横走させるもの、また、竈による沈線をエの字状に継ぐ2条、横に4条施し、交点には丸い竈削りを行うものなどがあり、竈内で滋賀里IIからIII a式にかけて編年される。

4. 弥生時代

紀元前3世紀頃より水稻耕作・弥生式土器・金属器を伴った弥生文化が成立した。北九州に伝播された水稻耕作は急速に西日本一帯に広まり、縄文文化の中に根を下ろした。篠山盆地において、その文化的受容を示す証左に恵まれていない。今のところ、弥生時代の前期新段階にいたって稻作文化が伝えられたことは、次の遺跡において確認された。

口坂本遺跡（註8）は、西紀町口坂本、独立丘陵を背にする微高地に立地する。前期・中期後半、古墳時代に属する溝、土壙、ピットなどが検出されている。弥生時代の遺物としては、前期・中期の甕・甌・鉢・高坏、そして石包丁などが出土している。

四の坪遺跡（註9）は、丹南町岩崎、扇状地に立地し、遺構は確認されていない。前期（畿内第I様式新段階）から中期（畿内II・III様式）に営まれた遺跡である。遺物としては突唇をもつ甌・逆L字状の甌の口縁部破片他が採集された。

篠山盆地の中央部、篠山川の北と南の平地に点在する2遺跡にすぎないが、水稻耕作が導入され、定着を始めたことが明らかである。

中期になると、遺跡数は増加する。主な集落遺跡名を掲げると、西紀町口坂本遺跡（中期後半）、同内場山遺跡（中期後半～後期）（註10）、同板井寺ヶ谷遺跡（中～後期）（註11）、丹南町長安寺遺跡（中期後半～後期）（註12）、同出谷遺跡（中期、土壤状遺構）（註13）、同桂ヶ谷遺跡（中～後期）（註14）、同住吉川岸遺跡（中期）（註15）、同谷山遺跡（中～後期）（註16）、同竜円寺遺跡（中～後期、住居跡）（註17）、同庄境1号墳下層（中期、住居跡）（註18）、篠山町細工所遺跡（中～後期）（註19）、同下彼見遺跡（中期～後期）（註20）など、中期から後期へと継続して営まれる遺跡が多い。

代表的なものとして、宮田川水系に属する内場山遺跡は、西紀町下板井、独立丘陵の標高240m上に立地し、尾根先端部の緩斜面上に築かれた集落遺跡である。斜面地に築いているため、遺構の残り状況は悪い。時期が明確なものは、中期後半から後期初頭の円形プランをもち、周壁溝をもつ堅穴住居4棟がある。この同じ尾根先端部に、弥生時代終末期は墳丘墓「内場山墳丘墓」が築かれるが、このような遺跡の立地は、いわゆる畿内地方の「高地性集落」に該当するが、ここでは一般的な集落の姿を見るのである。

谷山遺跡は、丹南町谷山小杉の坪、森ヶ淵、中の坪、東吹才ケ鼻の坪を中心にして、小枕川が扇状地を形成して篠山川に注ぐ河岸段丘上に立地する集落遺跡である。東西に走る排水路やそれに平行する田松川排水路の交点周辺に集中して土器等が採集された。排水路の断面には、炭化した葉を包含する溝状遺構、豎穴状の遺構がある。中期の畿内第III・IV様式に属する櫛描文・円線文土器や、石庖丁、石礫、スクレイバー状石器、砥石、すり石、スプーン状木器、木製柄部残欠、カゴ状編み物残片、自然木多數、炭化した木の葉、木実（クルミ、トチ）他が出土した。

谷山遺跡に隣接する竜円寺遺跡（註21）が、小枕川が形成した扇状地、及び氾濫原上に営まれている。中期から古墳時代にかけての集落遺跡である。中期の住居跡は、S B06と名づけられた直径7.5mの円形住居跡である。谷山遺跡との関連を深く考える遺跡である。また、S B16は、3×3間の總柱建物で、柱間1.5m、柱穴径60cmを測る。第V様式段階の大型高床倉庫と考えられている。

篠山盆地の自然地形を見ると、盆地周辺の谷間から流れ出る中小河川は扇状地を形成している。弥生時代の農業共同体は、水系を中心にして水の管理と共同作業等を通して存立したと思われる。多くの集落跡が、盆地周縁の中位段丘面、沖積地、丘陵上等に点在する事実は、次第に篠山川の氾濫低位面や冲積地に水田を開いて水稻耕作を展開していたことを物語っている。当然そこには拠点集落を中心にして、

各集落がネットワークされていたのであろう。その例として、宮田川水系では上板井遺跡、大山川水系では桂ヶ谷遺跡、小枕川水系では谷山遺跡（童円寺遺跡）などの拠点集落が存在したのではないか。

後期になると、中期から継続する遺跡と、新たな遺跡が出現する。西紀町上板井遺跡（註22）、丹南町北野遺跡（註23）、同池尻谷遺跡（註24）、同小枕遺跡（註25）、篠山町東浜谷遺跡（註26）、同寺内庵寺（註27）、同森池北遺跡（旧河道）（註28）、同西八上九の坪遺跡（註29）などである。

拠点集落を中心にして、一層の発展が見られる。隣接する大山川水系を見ると、大山川の右岸、丹南町北野から大山下にかけての約6haにおよぶ段丘上位面に北野遺跡は立地する。発掘調査の結果、弥生時代および古墳時代の竪穴住居跡30棟以上が確認された。この台地上には恐らく数百棟の竪穴住居跡が存在すると推定されている。

注目する遺構として、Cトレンチ01竪穴住居跡がある。この住居跡は、規模も大きく、住居内には大小の円形竪穴住居が重複していた。小形の住居跡は、直径4.5mを測り、この竪穴住居を建て替え、あるいは廃棄されたのちに、大形の直径11m、ほぼ正円形を呈する巨大な住居が検出された。炉跡が屋内中央部に、さらに住居の北東部横面から、出入り口と見られる窓も確認された。住居規模が他に比べて格段に大きいことや、内部に他の住居にはない炉が存在するなど、当住居が集落内にあって特別なものであった。その性格を調査担当者は、世帯を統率する家長的な人間の住む家屋と位置づけ、この大型住居を中心にして数棟の住居群を単位とする共同体が構成されていたとしている。遺物は、住居内床面または遺構内埋土から後期の畿内第V様式に併行する壺、甕、高坏が出土している。

長安寺遺跡は、丹南町長安寺、大山川左岸、尾根端部の舌状小台地上に立地する。中期後半の土壙、柱群などがあるが、後期には、隅丸方形を呈した南北延4.4m、4本柱構造、中央ピット、周溝をもった竪穴住居が発見されている。

上板井遺跡は、小坂川と宮田川流域に発達した上位段丘上に立地する後期後半の集落遺跡である。居住地区である竪穴住居跡等の集落と、生産の場である水田跡、水田畔に伴う矢列跡や人口水路が検出されている。また、弥生時代後期末から古墳時代前期の河道が発見され。遺物は多量の土器と共に、鍬、鋤、田舟、木包丁等の農具類、槽、桶の容器類、板材、丸材、角材、杭、梯子等の建築材、斧等の工具類、そして銅鐵形木製品、甕なども見つかっている。

このように後期には、扇状地や丘陵状に立地を求めて、集落が営まれている。

弥生時代の農耕祭祀について若干触れておきたい。篠山盆地には、前述の上板井遺跡出土の銅鐵形木製品は注目しておきたい遺物であるが、今のところ農耕祭祀に伴う銅鐸、銅劍、銅戈といった武器型祭器や木製の祭器等は発見されていない。篠山盆地周辺に位置する三田市けやき台の丘陵上に立地する平方遺跡（註30）において、中期後半（畿内第IV様式）に属する土製小銅鑄鉄型一対と石舌が出土している。また氷上郡春日町野上野字野々間（註31）から、「聞く銅鐸」と総称される外縁付鉢二式銅鐸（四区画袈裟襷文、高さ20.8cm）と扁平鉢式銅鐸（四区画袈裟襷文、高さ21.1cm）とが、1.8m隔てて丘陵端の埋納溝の中から出土、同町野村（註32）からは、銅劍を模した銅劍形石劍が出土している。篠山盆地を取り囲む周辺の遺跡から銅鐸等による農耕祭祀を推測せしめる遺物の出土は、篠山盆地に於いても行われていた可能性を示すものと受け取れるのではないだろうか。今後の発見に期待したい。

5. 古墳時代

（1）集落遺跡について

大山地区においては、丘陵部の末端部分や河岸段丘上に集落を形成している。

西木之部遺跡の立地する西紀町と現在丹南町大山地区は、かつて奈良時代以降河内郷と呼ばれていた。その根拠なことは、後述するが、河内郷に点在する遺跡、なかでも官田川水系の遺跡を中心に取り上げ、歴史的環境を時代区分に沿って概観していきたい。

雄花遺跡（註33）は、丹南町大山上、丘陵突出部の延長微高地に立地する。集落の全体は不明であるが、並列した形で隅丸方形を呈する堅穴住居跡が2棟検出された。A住居跡は4本柱の構造で、南北辺4.5m、東西辺4.8m、床面積約21m²である。B住居跡は、4本主柱の構造で、南北辺5.2m、東西辺4.6m、床面積24m²である。両住居跡共に屋内に竈、貯蔵穴、周壁溝をもたないのが特徴である。所属年代は、6世紀中頃と推定される。

西向遺跡（註34）は、丹南町町之田、一印谷の舌状にのびた尾根の先端、標部に広がる緩慢な傾斜台地に立地する。この西向遺跡からは、山麓をとりまくように住居跡が4棟が発掘された。各住居跡共に一辺約5～7m、北側中央部に造り付けの竈をもつ4本柱の堅穴住居跡である。住居跡内からは須恵器製の杯身、杯蓋、土師器製の壺などが出土し、特に第4号住居跡からは鉄鍔が出土した。6世紀後半頃の住居跡である。

内場山遺跡は、古墳時代になると、「内場山墳墓群」が築かれたのち、古墳時代後期末（6世紀末から7世紀初頭）に、尾根先端部に団地状に、屋内に竈を有する堅穴住居4棟が築かれている。例として、14号住居跡は、方形の住居跡で、南北6.1m、東西5.8mを測る。4本柱構造であり、北辺には造りつけの竈をもつものである。

籠原遺跡（註35）は、丹南町大山上籠原の河岸段丘上に立地する。堅穴住居跡9棟、掘立柱建物6棟を検出した。S B11は、方形の住居跡である。竈がなく、近くに隅丸長方形の焦土塚を伴っている。住居跡内より、須恵器の蓋坏とともに埴輪が出土している。所属年代は6世紀初めと推定されている。最大の堅穴住居であるS B02の住居跡は、拡張及び建て替えを行い隅丸方形を呈し、一辺6.5m、短辺長5.0mを測り、南側中央壁壇に造り付けの竈を備えている。また西側中央部にはベッド状施設を有し、床面には炭化物及び柱の一部と考えられる炭化材を検出した。7世紀前半に所属年代を求めることができる。

出谷遺跡は、丹南町出谷、大山川河口の河岸段丘上に立地する。S B01掘立柱建物は、柱間距離1.80m前後で、梁行3間×桁行4間の平面プランを有するものである。所属年代は、7世紀前半と推定される。S B03掘立柱建物は、柱間距離1.80m前後で、梁行3間×桁行3間ほかが出土した。遺物には、円面鏡他須恵器・土師器片が出上している。7世紀初頭から末にかけてのものである。

竈円寺遺跡は、古墳時代前期の住居跡が1棟、中期が2棟、後期が4棟発掘された。前期の住居跡S B04は、隅丸方形と円形住居の中間に円形から方形に移る過渡期のものと考えられる。中央ピットを有し直径6.5m、4本柱の住居跡である。

これらことから、篠山盆地における住居の平面形態が、第V様式の最終段階か、古墳時代初頭の庄内並行期に、円形から方形に徐々に移行するものと理解される。6世紀末から7世紀初頭の住居には竈を有していることは確実となった。

（2）古墳について

① 前期の古墳

前期の古式古墳といわれる定型化した古墳は、篠山盆地においては見つかっていない。弥生時代以後、農業を生活基盤に据えた社会は、自然的境界や水系などによって自己完結的な範囲内に於いて、結束する地域集団を育み形成された。弥生時代から古墳時代にかけてどのように墓制が変化し、そこに葬られ

た被葬者の性格を捉えていきたい。

弥生時代中期に築かれた雲部車塚古墳周底帯の遺跡は、篠山町東本荘の平地、周底帯（南側辺）築造以前の面より、5基の土壙墓を検出した。北に主軸を向け、副葬品を持たない共同墓地である。

弥生時代後期から終末にかけて墳墓群が築かれた。黒田坪墳墓群（註36）は、篠山町西八上黒田坪の尾根上に立地する3基の方形台状墓である。墳丘は、尾根筋に直交した溝を掘り、段造成して墓域を区画し、若干の盛土を施している。1号墓は、径約10mの方形を呈する。中心主体である1号主体の周囲に箱形木棺を直葬する2～5号主体4基と土器棺墓1基、計6基の埋葬施設をもつ。埋葬時の祭祀に伴い破砕された土器片が出上。2号墳は、墳丘の長さ約11mで、3基の埋葬施設をもつ。1号主体は割竹形木棺、2・3号主体は小土壙墓等である。1号主体より埋葬に伴う漆の破片と埋葬後の供獻祭祀に伴う高坏他の土器片が出上。3号墓は、南北径8.3m、東西径10m、中央に箱形木棺を直葬している。棺内に鉄劍（1）が副葬され、埋土中から祭祀に伴う土器片が出土した。この墳墓は、1号から3号墓の順に三世代の首長墓と考えられている。

内場山墳丘墓（註37）は、西紀町下板井、内場山山頂（標高244m）の尾根先端に単独で占地する墳丘墓である。墳形は長方形を呈し、墳頂部は広く、墳丘規模は上端18.5×14.2m、下端21.6×19.5mである。墳丘は現状では盛土が認められず、ほとんど削り出しによって造り出されている。墳丘上には大型の木棺墓6基（S X-9～14）、小型の木棺墓1基（S X-15）、土壙墓1基（S X-16～18）、土器棺墓3基（6個体）の計13基の主体部があり、さまざまな埋葬施設が混在して構成される。

墳丘墓は、大型の木棺墓を中心に整然と並び、その間を埋めるように小型の木棺墓・土壙墓・土器棺墓が位置するもので、極めて短期間に連続的に築かれたことが想定される。なかでも木棺墓S X-10は、組合式木棺を直葬しており、副葬品として素環頭大刀（1）、鉗（1）、針状鉄器（1）、不明鉄器（1）、鉄鎌（17）の一群と袋状鉄斧（1）、鉄鎌（17）の一群がある。墓壇上面には、棺上祭祀に伴う供獻土器15点余（壺・鉢・高坏・器台など）、赤色顔料の付着した砥石、炭化米が出土している。所属時期は、弥生時代終末ないし古墳時代初期の「庄内式の新段階」あたりと推測されている（註38）。

この墳丘墓における墳形・埋葬施設などは、丹波・丹後・但馬地域に共通する墓制に則ったもの、供獻行為にみられる祭祀形態は、山陰から北陸にかけての日本海側に広がりをもつことが判明した。また、副葬品の素環頭大刀や鉄劍のように政治的な関係で入手したと考えられる製品が含まれている。さらに、土器棺には、他地域の上器が含まれていることから、他地域との交流等を積極的に図っている。このようなことから、内場山墳丘墓の被葬者は地域の政治・交流を掌握する在地の首長と言える。

これら調査結果から、弥生時代後期から古墳時代初期にかけて篠山盆地においては、尾根上に、墓域を示す区画を施し、墳墓を築いている。中心主体は、墓壇を穿ち、箱形木棺・組合式木棺を直葬している。そして土器を用いた棺上祭祀を行うなど、地域の伝統的な墓制を見ることができる。

黒田坪墳墓群3号墓の被葬者は、鉄劍。内場山墳墓群のS X-10被葬者は、鉄劍、大刀、鉄鎌、袋状鉄斧といった鉄製武器を副葬している。これらを持つことが権威の象徴であると理解され、地域を統括する首長と理解してよいのではなかろうか。その時期は、3世紀代と推定される。

②中期の古墳

ア 木棺直葬墓

5世紀の中期に入ると、内場山墳墓群から北へ800mに位置する上板井古墳群（註39）は、西紀町上板井、標高291mの山頂に築かれた円墳2基である。1号墳は径14m、墳丘は、尾根を削り出し墳形を

整え、葺石を貼っている。主体部は、割竹形木棺を直葬した1～3号主体部と、箱式石棺の4号主体部が方形に配置されていた。1号主体部からは鉄剣（1）、鉄斧（1）、鏃（1）、2号主体部からは鉄剣（1）、鉄鎧（1）、不明鉄製品（3）、3・4号主体部は副葬品はない。2号墳は、約13mの楕円形を呈する。墳丘は、尾根を削りだして墳形を整える。主体部は1基、箱式の組合式木棺を直葬している。副葬品には、内行花文鏡（1）、勾玉（1）、管玉（2）、ガラス小玉（29）が棺内から、棺外から鐵刀子（1）が出土した。また墓壙埋土上面の落ち込み中から高坏（10数点程）の破片が出土している。古墳群の築造年代は4世紀末から5世紀前半頃と推定されている。

統いて大師山6号墳（註40）は、宮田川左岸に位置し、上板井古墳群から東へ約1000m、西紀町宮田の尾根上（標高約300m）に立地する、自然地形を利用した古墳である。主体部は二段墓壙をもち、長さ4m、幅0.6mの割竹形木棺を直葬している。副葬品はなく、棺底部及び棺底は赤色顔料を塗布していた。下段の墓壙据方、北側西端から鉄斧（2）、鉄鎧（10）、鉄鎧（3）、鉄鎌（2）などの農耕具類、南側西端から勾玉（116）、管玉（2）、ガラス丸玉（1）、小玉（53）、珠文鏡（1）、小型微製鏡、鉄鎌（2）などの装飾品類、鉄剣（1）、鉄刀（1）の鉄製武器類が出土した。築造時期は、5世紀中葉の第3四半期と推定されている。

内場山埴丘墓から約1世紀の後、宮田川水系における墳墓は、上板井古墳群、大師山6号墳へと系譜をたどることができる。これらの古墳は、半野部を一望できる比高差100m以上の尾根上に立地する。埴丘は地山成形により築いた円墳である。上板井2号墳では、墓壙上面から高坏片が出土し、棺上祭祀も何える。内部主体は、上板井1号墳主体部において、割竹形木棺、組合式木棺、箱式石棺の複数埋葬が行われ、副葬品は、武器・工具の組み合わせであるが、上板井2号墳、大師山6号墳に比較すると、貧弱である。2号主体部では、單独埋葬が行われ、組合式木棺を直葬し、内行花文鏡と玉等の装飾品類、刀子が副葬されるようになる。大師山6号墳は、副葬品はないが、棺外に珠文鏡、鉄鎧、鉄鎧などを中心に鉄製武器類、装飾品類など豊富である。

墳墓を、立地、規模、墳形、外部施設、内部主体、出土遺物等を基本項目として検討すると、4世紀末から5世紀前半に築造された上板井1・2号墳、大師山6号墳は、弥生時代から古墳時代の墓制、言い換えると内場山埴丘墓の系譜を引く墓制が營まれていたと理解される。それは在地的な様相を強く示すものと思われる。宮田川水系を基盤とする地域首長として君臨する首長墓であろう。

イ 築内型古墳

突如として篠山盆地の東方の地に、前方後円墳・雲部車塚古墳が出現する。篠山盆地に畿内中枢地域と同様の古墳が築かれる。この古墳の出現は、一般民衆とは隔絶した権力者の登場を意味するだけではなく、古墳の築造に象徴される大和政権による地方支配化を表している。ここでは、畿内型古墳の系譜を捉えることとしたい。

雲部車塚古墳は、篠山町東本荘の平地に立地する神戸市五色塚古墳につぐ県下第二位の前方後円墳である。全長139m、後円部径80m、前方部幅89mを測る。墳丘には、造り出し部ではなく、2段築成である。周濠は、琵琶形を呈する。

陪塚は、北（円墳）・南陪冢（方墳）と板塚古墳の3基が現存しているが、かつて隔塚1基、鳥居塚2基他が存在した可能性がある。

石室は、後円部上やや南に位置し、深さ約1mのところに竪穴式石室が存在する。さらにもう1基堅穴式石室が後円部中央北側に存在する可能性がある（註41）。天井石は5枚、石室の規模は、東西の長さ

約5.2m、東側の南北の幅約1.5m、高さ約1.5mを測る。側壁は、割石積みである。石室中央には、長持形石棺が安置され、石棺には朱が塗布されていたらしい。石棺蓋石の長さ約2.1m、石棺東側の高さ約0.8m、西側の高さ約0.9mを測るやや小形の石棺である。蓋石は開けられていない。

長持形石棺は、組合式石棺である。蓋石は上面をかまぼこ状に呈し、縄掛突起が6個、長側石は2枚、縄掛突起各2個、短側石は2枚、方形突出部は外側の東に1個、西に2個有り、底石は下面に隠れてい。石材は不明である。下面には、「海石」が敷き詰められていた。奈良県宮山古墳、大阪府津章城山古墳例のように短い竪穴式石室に豪壮な組み合わせ式長持形石棺を納めたものであり、残された岡(註42)により長持形石棺は福岡県月ノ岡古墳や京都府久津川車塚古墳例に似ている。

石室側壁と、長持形石棺の間に、甲冑が東北隅、西北東隅、西南隅に立位で副葬されている。そして四方の側壁全面には釘状工具によって、刀・劍・矛が掛けられていた。副葬品として、発掘当時の記録によると、刀(34)、劍(8)、矛(2)、胄(4)、甲(5)、鉄鎌(107)がある。築造年代は、5世紀第2四半期と推定される。

都出比呂志氏は、「五世紀の段階で、河内の「応神陵」、和泉の「仁德陵」、攝津の「繼体陵」、播磨の「五色塚古墳」、丹波の「雲部車塚古墳」などの巨大な古墳が、大和、河内などの国単位に一つないし1グループという有り方で出現する。これらは古墳分布上からいえば、四世紀代の首長系列とつながらないことが多い。それは大和の佐紀古墳群、河内の古墳群、和泉の百舌古墳群のように、巨大古墳が1グループを成して、周辺地域と隔絶する現象の中に端的に見られる。このような国単位の巨大古墳および古墳群は、(中略) 前期古墳の段階以上に、いくつも共同体を支配化においていた。大王家とそれととりこまれた官僚層の古墳群であろう。」(註43)と書かれている。

北条古墳(註44)は、篠山町細工所、尾根の先端部分に立地する一辺約30mの方墳である。雲部車塚古墳から東方へ約1200mに位置する。主体部は、粘土被と推測されている。埴丘からは形象埴輪である駆形埴輪片が出土している。この埴輪は、奈良県宮山古墳出土の駆形埴輪と酷似する。築造年代は、雲部車塚古墳より遅るものと推測される。

続いて、新宮古墳(註45)は篠山町郡家、平野部に立地する。新宮神社境内が古墳である。周濠の幅17m、墳丘の径約56m、高さ約7m、全体の徑約84mを測り盆地最大の円墳である。外部施設として埴輪と葺石を有する。内部主体については、「篠山領地誌」によると、「新宮大明神ノ社 往古ハ山上ニ在リ、社跡ヲ掘て石棺ヲ得タリ、蓋ヲ開イテ視ルニ甲冑太刀有リ甚ダ腐朽ス・・・」と記され、石棺内に甲冑と太刀があったらしい。また、周濠に隣接して基石塚(註46)、徑20m、周濠の幅9m、高さ3.5mが築かれた。新宮古墳、基石塚が一对のものと理解してよいだろう。両古墳とともに築造年代は5世紀後半と推測される。

畿内型古墳の構成要素として、立地、規模、墳形(前方後円形等)、周濠、埴輪、葺石、石室(竪穴式石室・長持形石棺等)等があげられる。各古墳がこれらの項目全てに該当しないが、畿内大和政権の篠山盆地進出を物語る古墳である。5世紀前半に北条古墳に橋頭堡を築いたのち、雲部車塚古墳の被葬者は、旧丹波国を支配範囲とするほどの統括者として君臨する。その後、新宮古墳に継続される。

次に、畿内型古墳に属するとは言えないが、注目しておく古墳がある。

よせわ1号墳(註47)は、篠山町脇の尾根の先端部に立地する。墳形は不明である。主体部は裸床をもつ粘土被と推定される。江戸時代の文久2(1862)年3月、深さ3尺(約1m)のところから三角縁画文帶神獸鏡(1)、鈴付鏡板(1)、環鏡(2)、鉄製品が出土した。

特に三角縁画文帶神獸鏡は、径約20cm、鏡背内面に六神像と四獸形を配し、その外に半円方格帯、櫛齒文帯、禽獸飛龍文帯を巡らす、縁は三角縁である。熊本県江田船山古墳出土の画文帶神獸鏡の踏み返し鏡である（註48）。築造年代は、馬具の型式編年から5世紀後半と推測される。

宝地山2号墳は、様山上上宿他の比高差約300mの尾根上に立地する円墳である。この古墳群は、前方後円墳2基（全長30m以上、後円部径約19m以上）と円墳12基で構成される宝地山古墳群（註49）の1基である。木棺直葬で七鉢鏡を副葬していた。5世紀末に築造されたと理解される。

ウ 木棺直葬と須恵器

5世紀中頃、朝鮮半島から渡來した工人集団は、大阪府阪南丘陵で須恵器生産を開始した。その後、5世紀中葉から後葉にかけて次第に地方に窯を築いたといわれている（註50）。

鷺山盆地における初期須恵器は、丹南町竜寺遺跡（集落跡）から出土した环身（TK73型式）が、もっとも古く、次に同野田ノ坪遺跡出土の把手付無蓋高環（TK208型式）が続く（註51）、西暦5世紀中葉から後葉に生産されたものである。

鷺山盆地最古の須恵器窯は、丹南町一印谷に所在する鷺谷窯（1基）（註52）である。灰原、溝状構築、掘立柱建物跡2棟などが発掘され、遺物は环蓋・高環・範などである。窯の操業時期はTK47型式併行期の5世紀末であり、継続して生産はされなかった。その後、丹南町味間北赤土の坪窯跡・波賀野大蔵窯跡（註53）に、築窯されるのはTK217型式併行期の7世紀中葉である。

古墳出土の最も古い須恵器は、長者ヶ谷1号墳（註54）である。この古墳は、丹南町綱掛の尾根上に立地する円墳で、主体部は、組合式木棺である。遺物は、墓壙上面出土の土器群と副葬品、棺内及び墓壙棺底横より大刀（2）、鉄劍（1）、鉄鎌（21）が出土。前者は、墓壙内に棺を納め、墓壙を埋め戻した段階で須恵器の有蓋高環（1）・环蓋（8）および土師器の高環（2）・長頸壺（1）などを配したものである。特に有蓋高環に長頸壺、高環の上に环蓋を乗せ、墓上祭祀が行われた。築造時期は、須恵器の型式TK23から5世紀後葉と推定される。

宮田1号墳（註55）は、前述の大師山6号墳と同じ宮田川左岸、西紀町宮田の標高239m尾根上に立地する。墳形は削平されたため不明である。主体部は組合式を木棺を直葬する。墓壙内には、棺内中央北側からガラス玉（4）、白玉（2）の玉類と金耳環（2）、棺中奥部東側から銅劍（1）、刀子（1）、鉄鎌（2）、西側部付近から小型微製鏡（1）、珠文鏡か）、鉄鎌（1）が出土している。墓壙棺上において、埋納土膾を掘り、その中に円筒埴輪とともに破碎供獻された須恵器甕・短頸壺・広口壺を供獻している。南側墓壙棺に須恵器环蓋・耳环・土師器甕・短頸壺が完形のまま出土した。その状況は、土師器甕を重ねて置き、傍らに須恵器环蓋を伏せ、耳环及び土師器短頸壺をこれらの横に添えた状態で出土している。須恵器の型式は、TK47型式に属する。須恵器が墓上祭祀の破碎供獻土器として棺上祭祀に使われた。

6世紀前葉に位置づけられる。

大滝2号墳（註56）は、丹南町大山下大滝、三乳山から舌状に延びた尾根を利用して築かれた全長20mの前方後円墳である。後円部中央に二列にならべた溝状の石組があり、この石組に接して家形埴輪の破片と大形甕が出土した。円筒埴輪列は一段のみ古墳をめぐっている。前方部と後円部の東側のくびれ部には、埴輪片が広く散布し、前方部の南側には円筒埴輪棺が埋葬されていた。

主体部は第1主体部と第2主体部があり、共に木棺直葬墓である。第1主体部は後円部のほぼ中央に位置する。墓壙の規模は、長さ3.2m、東側幅約0.6mである。この墓壙に棺台石を4つ配して置き、各2個の棺台石上に木棺をおいたものと想定されるが、木棺の型式は不明である。棺台石上の木棺を西木

棺、東木棺とすると、西木棺が据えられた棺台石の周囲には、南側壁付近に、鉄剣（1）、鉄刀（1）、鉄鎌（10）、鉄鎌（1）、小刀（1）、鏡（2）、中央に鉄斧（1）、ガラス小玉（91）、中央下部に小形重圓文鏡（1）が出土している。東木棺は、棺台石付近から大刀（1）、鏡（1）が出土した。また、棺台石に挟まれた間から土師器壺（1）が発見された。

墓壇上面、西木棺の棺上祭祀に使われたと思われる須恵器壺蓋（7）、有蓋高坏（8）、甕（1）、壺（1）、土師器短頸甕（1）と馬具（1）が出土した。同様に東木棺上北部から須恵器有蓋高坏（1）・坏身（2）が、南部から須恵器坏身（2）、坏蓋（5）が出土した。

第2主体部は、前方部のほぼ中央にある。墓擴等は検出できず、遺物のみが出土している。北壁部に鉄刀（1）、南壁部より鉄鎌（5以上）、馬具（轡=鏡板・引手・引手壺、銅金具）が出土している。北部から須恵器（壺・甕・蓋・坏身）が検出された。TK47型式併行期に属し、築造年代は、6世紀前葉と推定される。

また、埴輪円筒棺が、墳丘東側のくびれ部から出土。円筒埴輪の破片と粘土で包まれた施設があり、円筒埴輪がその両端を埴輪片でふさいだ状態で横になっていた。埋葬時期は、古墳の築造と時期差のないものと考えられる。

真南条3号墳（註57）は、丹南町真南条上に位置する。丘陵上に築かれた4基の円墳で構成される真南条上古墳群の一つである。墳形は、長径約9.5m、短径約8.0mの楕円形を呈する。墳丘は、盛上で構築され、墳丘上に削竹形木棺を直葬したもので4基認められた。主体部の長さ3m内外の長大なものでS X03を除き赤色顔料が認められた。棺上には埋納土器群A～Eが供献され、棺内には須恵器の壺蓋・坏身が被葬者の枕として転用された。

構築類に記すと、主体部S X02は、棺内頭部に玉類とともに須恵器壺蓋・坏身を枕に転用し、棺外の頭部付近に、埋納土器群AとB、同じく足部にCが供献された。Aは、須恵器壺蓋（3）、坏身（3）・広口壺（1）、土師器碗（1）、Bは、須恵器壺蓋（9）、坏身（6）、Cは、須恵器壺蓋（5）、坏身（4）である。その数32個体である。

主体部S X07は、棺内頭部に須恵器壺蓋・坏身を枕として転用し、鉄鎌（1）を、中央部から刀子（1）、足部には鉄斧（1）、鉄鎌（1）、鉄鎌（30）を副葬している。棺外足部付近には、埋納土器群Eが供献された。Eは、須恵器壺蓋（9）、坏身（8）と土師器碗（1）が18個体出土した。

主体部S X04は、棺内頭部に須恵器壺蓋・坏身を枕としている。棺外頭部付近には、埋納土器群Fが供献された。須恵器の広口壺（1）等が出土している。棺上には、鉄製鍬先（鍬先）、鉄鎌（1）が出土している。

主体部S X03は、棺内頭部に須恵器坏身を枕とし、腹部に刀子（1）、足部に鉄鎌（7）を副葬していた。棺外の頭部付近に埋納土器群Dが供献された。Dには、須恵器壺蓋（2）、坏身（1）、把手付碗（1）、提瓶（1）、土師器製広口壺（1）が出土した。その数は、6個体である。

古墳の築造時期は、須恵器の型式がMT15型式併行期からTK10型式併行期に相当するところから6世紀中葉と推定される。

須恵器の型式編年に従って木棺直葬墳を時系列に列べ、新しい土器須恵器が古墳にどのような形で副葬されるのか探ると、5世紀後葉、TK23型式併行期になると須恵器は、副葬品としてではなく、棺上祭祀の破碎供獻土器として使用された。6世紀前葉、TK47型式併行期には、棺上に墓壇を穿って埋納された。そして、6世紀中葉にはMT15型式併行期に至って須恵器が棺上の墓上祭祀の土器として、ま

た棺内に副葬された。これ以後、須恵器が主体部の副葬品として使用されるようになった。

弥生時代からの墓制である木棺直葬墓は、篠山盆地の丘陵上等に点在する。小さな円墳、複数の埋葬主体部、玉類、鉄製武器・工具・農具、土師器、須恵器などを少量副葬するものである。これら個々の墳墓では、優劣差が見られるが、その差が篠山盆地における単位集団の中でどのような位置を占めていたのか解明するところにまでいたっていない。今後の課題と思われる。

③ 後期の古墳

ア 横穴式石室

横穴式石室は現在、畿内において5世紀後半から6世紀初頭にかけて採用されたと言われている。そして、古墳時代後期、6世紀に入ると、約200基近くの横穴式石室墳が、山頂、尾根上、山腹、山麓、田の中などの限られた地域に群集して点在する。

初期の横穴式石室の特徴として、大阪府堺市泉塙塚古墳、同枚方市河内芝山古墳、同南河内郡山陵町藤ノ森古墳など狭道は短く、玄室は方形あるいは長方形の平面形をもち、側壁は板石あるいは小石塊を積み上げたもので持ち送りが強いものである。

このような特徴を有する古墳としては、大正7・8(1918・9)年頃に調査された丹南町大山紹尻、尾根上に立地する紹尻2号墳ではないかと推測している。この古墳は、墳形が前方後円墳で南に狭道を開く横穴式石室である。当時の記録によると「横は底部では長さ13尺5寸、幅6尺有り、狭道は3尺5寸の幅であるが発掘していないため長さは測定することができない・・・横は小さい片麻岩で美しく積み、深さ7尺、蓋石は中央に、3尺に、4尺、厚さ2尺許りの巨石1枚を覆い、その他は壙を弯形に積んでいるから、この1枚の石を支えに兜せかけている。」(註58)と記し、持ち送りのはげしい片麻岩の板石を積み上げた側壁に、天井石を1枚乗せた構造を伺い知ることができるが、「記録」である。

次に郡内の特色のある古墳群を列記すると、篠山町曾宇字中の谷間に立地する曾地古墳群は、洞中1・2・3号墳、四十九古墳、東山古墳の5基で構成される。この古墳群には、径30m、高さ4mの円墳で全長17mにも達する長大な横穴式石室を有する洞中1号墳、全長30m、後円部径17m、高さ4mの前方後円墳、片袖式の横穴式石室を有する洞中2号墳、箱式石棺を主体部とする東山古墳、径15m、高さ3mの四十九古墳などが点在している。また同町小立の山腹に立地する岩井山群集墳は、径10m前後の円墳で、横穴式石室を主体部とする9基で構成されるものである。なかでも、岩井山3号墳の石室内には、奥壁に石棚が設けられている例は、郡内ではこの古墳のみである。

篠山盆地における横穴式石室墳の調査例は極めて少なく箱塚3・4号墳、庄塚1・2号墳、沢の浦1・2号墳の6基を数える。そのうち宮田川水系に属する古墳は、箱塚3・4号墳、沢の浦1・2号墳である。

箱塚古墳群は、4基で構成される古墳群である。箱塚3・4号墳(註59)は、宮田川の右岸、西紀町小坂の山麓に立地する。箱塚3号墳は、斜面裾部に立地する直径12mの円墳、埋葬施設は東方向に開口する左側袖型、あるいは無袖型の横穴式石室で残存長約7.4mを測る。出土遺物として、須恵器坏身(7)、坏蓋(10)、高坏(3)、短颈壺(5)、脚付長颈壺(3)、平瓶(1)、甕(1)、甕(1)のほか土師器坏(3)、鉄鎌(1)がある。6世紀後半から7世紀前半まで追葬が行われた。

箱塚4号墳は、二重に外護列石が巡り、その間を二段に円筒埴輪、形象埴輪が樹立する径20mの円墳である。横穴式石室の全長10.9m、玄室の全長3.6m、幅2.1mを測る。石室内からは、須恵器坏身(31)、坏蓋(21)、高坏(4)、短颈壺(5)、壺(3)、提瓶(1)、甕(3)、甕(1)のほか土師器坏(3)、大刀(1)、

鉄鏡（22）、刀子（1）、馬具（9）、耳環（6）、玉類（260）が出土し、特に須恵器の装飾付脚付子持ち壺は注目に値する。須恵器の年代から6世紀中葉から後葉にかけて製造された。なお2号墳は、山麓に築かれた横穴式石室を内部主体とする径16mの円墳である。

庄境2号墳（註60）は、丹南町大沢新の山腹に立地する。方形に近い外護列石をめぐらした全長5.6m、幅1.5mの無袖式横穴式石室を有する。遺物としては、須恵器の杯壺（18）、杯身（18）、高坏（4）、提壺（4）、広口壺（1）、直口壺（1）、土師器の碗（1）、耳環（1）、盤（1）、鉄鏡（13）が出土。6世紀後半から7世紀初頭に製造された。

庄境1号墳（註61）は、直径約10mの円墳で最高6段の外護列石をもつものである。石室の全長4.7m、幅2.1mの無袖式横穴式石室である。埋葬面は2面確認されている。上層の第2次床面では、須恵器の坏壺（9）、杯身（7）、高坏（3）、壺（1）、横瓶（1）、土師器の長頸壺（1）、鉄鏡（2）、鉢具U字形金具の兵庫鏡（1）、刀（1）、刀子（1）、銀環（1）、銅（1）が出土している。なかでも銅は、縦5.7cm、横5cmを測り、無窓で、倒卵形を呈する。图像として三重圓線の間に銀象嵌によりC字状文を二列に施す。下層の第1次床面からは、須恵器の坏壺（14）、杯身（10）、高坏（4）、台付碗（1）、土師器の高坏（1）、素環鏡板付壺（1）、耳環（5）、鉄鏡（4）、釘（1）、鉢具（3）、兵庫鏡（2）、馬具の引手（1）が出土。製造年代は、6世紀末から7世紀初頭と推定されている。2号墳に比べ若干年代が下がる。

沢の浦1・2号墳（註62）は、西紀町上板井に所在する、共に径約10mの円墳で内部主体は無袖式の横穴式石室である。1号墳は、墳丘に外護列石がめぐり、石室の規模は現存長3.6m、幅約1.2mである。石室内からは須恵器の杯身（9）、坏壺（4）、壺（1）、短頸壺（4）、土師器の碗（1）、鉄鏡（11）、刀子（6）などが出土している。7世紀初頭の製造と考えられる。

2号墳は、1号墳同様、外護列石がめぐり、石室の規模は全長約5.7m、幅約1.1mである。石室内には須恵器の杯身（26）、坏壺（21）、無蓋高坏（1）、短頸壺（5）、広口壺（1）、壺（1）、提壺（1）、平瓶（2）、壺（1）、小形壺（1）、小形脚付き長頸壺（1）、小形提壺（1）、陶棺（1）、土師器の碗（4）、大刀（刀身1口、刀装具3点）、鉄鏡（14）、刀子（2）、鏡（2）、銅（1）、耳環（6）が第2・3次の追葬時に石室の入り口や奥壁に集積されていた。遺物の集積状況から3回の埋葬が確認された。

第1次の埋葬面は明確に検出されていないが、第2次埋葬においては、前述の須恵器他、銀環（6）、太刀（1）と銅（1）、柄頭縁金具、鞘尻金具等の刀装具を検出した。銅は、縦8.9cm、横6.5cmを測り、鉄製で、八窓の倒卵形を呈し、表面には溝文及び魚鱗文の銀象嵌文様が施された。この刀は把頭縁金具の存在から頭椎大刀であったとされている。第3次の埋葬では小児用の砲弾形陶棺（1）が玄室奥に安置された。

古墳の製造と第1次埋葬は、6世紀末から7世紀初め、第2次埋葬が7世紀前葉、第3次埋葬が7世紀中葉と推測される。砲弾型陶棺は、横穴式石室墳における最終埋葬の様相を知ることができる。

イ 宮田川水系の古墳群

宮田川水系に点在する古墳を列挙しておきたい。（第1図参照）

下ノ谷古墳群は、西紀町東竹、宮田川方向に向かって派生した丘陵尾根に点在する4基の古墳で構成される古墳群である。下ノ谷1・2号墳は、低墳丘の円墳である。主体部は木棺直葬と推定されている。同3・4号墳は、横穴式石室を内部主体とする円墳である。共に径15mを測る。

市山ノ坪古墳は、西紀町小坂、尾根端部に築かれた横穴式石室を内部主体とする円墳である。墳丘復元径12m、石室長9mである。

西ヶ谷 1 号墳は、西紀町垣屋、尾根頂部に立地する横穴式石室を内部主体とする円墳である。径 20m、石室長 6.3m、羨道長 4m を測る。同 2 号墳は、山麓より少し上がった急傾斜地に立地する横穴式石室を内部主体とする円墳である。径 14m、羨道長 4m、玄室長 3.5m、石室は、持ち送り式の積み石である。

杭谷 1 号墳は、西紀町乗竹の山麓に立地する横穴式石室を内部主体とする円墳である。径 15m、石室は無袖、石室長 9m を測る。同 2 号墳は、谷中央部に立地する横穴式石室を内部主体とする円墳である。径 12m、石室の全長約 6m を測る。

四王寺谷 1 号墳・2 号墳は、西紀町小坂四王寺奥の山麓に築かれた横穴式石室を内部主体とする円墳である。1 号墳は、墳丘に葺石があり、その残存長は 10m、石室残存長 6.4m、玄室長 1.2m、玄室の幅 1.1m を測る。2 号墳は、墳丘長は 13m、石室は無袖、石室長 9m、玄室長 5.5m、玄室の奥壁幅 1.5m を測る。

東山古墳は、西紀町小坂、山麓に築かれた横穴式石室を内部主体とする円墳である。径 15m、石室は無袖、石室長 10m、羨道長 6m、羨道幅 1.2m、玄室長 4m、玄室の奥壁幅 1.5m を測る。

小坂古墳群は、西紀町小坂の尾根部に立地する。横穴式石室を内部主体とする円墳 4 基で構成される。この古墳群は、径 10m 前後、石室の全長約 7.3m、幅約 0.9m という極めて小さな無袖式の石室である。築造年代は 7 世紀後半以降の終末期の古墳である。

宮田川水系の周辺には、谷間地、山麓や尾根先端部に古墳が築かれた。その古墳は、円墳のみであり、下ノ谷 1・2 号墳を除いて、横穴式石室墳が点在している。築造年代は、箱塚古墳群、沢の浦古墳群と同様の 6 世紀後半から 7 世紀前半頃に築かれたものと考える。そして、最終末に沢の浦 2 号墳出土の砲弾型陶棺の埋葬や小坂古墳群が築かれた。そこには他を圧する古墳は、見あたらない。

この横穴式石室墳を築いた入たちは、地域社会の中に、首長を中心とする有力農民層が家族墓を築いたのであろう。

5 律令体制

天智朝の近江令（668 年完成）、天武・持統朝の飛鳥淨御原令（689 年施行）を経て、701 年（大宝元）、律・令ともに完備した大宝律令が完成し、ここに律令法による中央集権的政治体制は確立した。中央には 2 宮 8 省などの役所が置かれ、地方は国・郡・里に分けられて、国司・郡司・里長がそれぞれ治めた。

丹波国は、和銅 6（713）年、旧丹波国から丹後國（5 郡）が分割された。丹波国において京都府に属する桑田・船津・天田・何鹿郡の 4 郡と兵庫県は多紀・赤穂郡の 2 郡、計 6 郡と決められた。京都府龜岡市に市の役所、郡衙を置き、各郡には郡衙が置かれた。

（1）郡衙

郡衙は、郡域内における政治の拠点をなす官衙（役所）施設である。『令集解』儀制令五行条古記や『上野国交替実録帳』などの資料によって「郡庁・正倉・館・研家」などの機能の異なる建物群で構成されていた。

郡には役人として郡司がおかれた。彼らは在地豪族から任用され、租・庸・調の徵税や運京・勸農を中心として、一部検察にまでおよぶ多くの職務を担っていた。郡司には大領・小領・主政・主帳などの別があり、国司の名をうけて郡内の行政にあたるもので、かつて国造や県主などであったような、この地方の古くからの有力土豪がこれに登用され、特に多紀氏・日置氏・桑原氏などが多く任命されたようである。（註 64）

多紀郡の郡衙に宛てた延喜15年（915）の東寺伝法供家牒によると、「検校大領日置公」・「郡老権大領多紀臣」・「郡老口置公」・「点議大領日置公」・「主政桑原」・「帳主帳多紀臣」らの名が記述されている。そのほか平安時代の文書によると、多紀・日置・山田等の諸氏がしばしば郡司になっており、これらの諸氏による世襲が見られる。当時の多紀郡の行政はこれら有力士衆によって世襲的に行われ、彼らが郡の実権を握っていたものと考えられる。のちに大山庄をめぐる東寺との対立においても、中心になって働き、在地における自分の勢力を伸ばすことに努めたようである。

多紀郡衙の所在地については、篠山町郡家に求める説が有力であるが、具体的には所在を確定するまでに至っていない。農業基盤整備事業によって発見された篠山町東浜谷遺跡（註65）は、篠山盆地の中央部、壺ヶ岳の南麓の丘陵に位置する。隣接して郡家という大字名がある。発掘調査の結果、遺構を検出するにはいたらなかった。弥生土器・須恵器・土師器がイの坪、門田の坪、寺の下の坪に分布していることが確認された。土器には、須恵器の壺坏・高坏・壺・壺蓋・甕・円面鏡があり、壺蓋・壺身・高坏の3点に「郡」の刻印を押している。また壺蓋・壺身の内面に「厨」と墨書きされた土器片4点、字の判読できないもの7点、壺蓋を鏡に転用した鏡6点がある。土器の總年から奈良時代後半と推測される。「郡」の刻印土器は郡衙で使用することを前提として製作されたことを示し、墨書きの「厨」は厨家の存在を推定させるものである。また円面鏡や転用鏡は、識字層の存在を明らかにすること。それらの土器は、奈良時代後半に年代を求められること。そして郡衙関連地名としての郡家という地名が隣接するなどから、多紀郡衙は東浜谷遺跡周辺に存在する可能性は高いものと考えられる。

（2）郷名

丹波の国多紀郡は、弘仁～承和頃（810～848年）、つまり9世紀前半に書かれた『倭名類聚鈔』によると篠山盆地には、郷名として草上・宗部・真慈・河内・神田・桑原・日置・余部の8郷があった。このことを証拠づける史料として、奈良県高市郡明日香村川原・小山田出土の木簡（註66）に大宝律令施行以前の文字史料として、「旦波國多貴草□」（表）、「單漢人部□□□」（裏）があり、次に平城宮跡出土（註67）の「丹波國多紀郡真慈里」（表）、「多紀臣大足三斗 次金村三斗 并一俵和銅五年」（裏）と記した和銅5（712）年の荷札木簡などから草上郷・真慈郷の存在が裏付けられる。

では、この8郷がそれぞれ篠山盆地のどの地域にあたるのか、現在は諸説があり確定していない。ただ、西木之部遺跡を含む西紀町は、後述する丹南町大山地区において展開された東寺領大山庄との係わりの中で、河内郷に属することは明らかである。

（3）山陰道

篠山盆地を横断する主要交通路として古代山陰道が設けられていた。この山陰道は「延喜式（兵部省）」諸国伝馬条によると平安京の都から老ノ坂峠を越えて丹波国桑田郡（現龜岡市）に入り、船井郡園部町を通り天引峠を越え、兵庫県多紀郡篠山町におよんだ。そして丹南町から鐘ヶ坂峠を越えて氷上郡柏原町へ、同郡氷上町・青垣町から遠坂峠を越え、但馬国朝来郡山東町に入り、因幡国岩美郡岩美町へと通じていたとされている。駅家は、平安京から大枝駅・野口駅を経て、篠山盆地に入ると、小野駅・長柄駅があったとされ、當時馬8匹。他に伝馬として、多紀郡・氷上郡には5匹置かれていた。郡内における古代山陰道は、「歴史の道」調査事業の報告（註68）を参考にすると、天引峠を下りたところから、ほぼ直線的に東西に走り、宿住を過ぎ、小野新・小野奥という集落に至る。そこに現在、多紀文化顕彰会の手で「史蹟 延喜式小野駅址」と記した標柱が立てられ顕彰されている。この場所が小野駅を示す根拠はないけれども、現在の小野新という集落辺りを小野駅と推定することは、前後の駅間隔、郡内東部

に小野という地名はここしかないところから、可能性は極めて高いのではなかろうか。そして、さらに古代山陰道は、西に走り日置へと篠山盆地の南側を東西に走るが、その先は不明である。

次の駅家、長柄駅については、篠山町西浜谷、西浜谷下小西ノ坪遺跡（註69）におく説が有力である。昭和63年、宅地造成に伴い西浜谷小西ノ坪遺跡が発掘され、奈良時代の掘立柱建物跡7棟、井戸の遺構を検出した。中心となる建物として、 2×5 間の大型の掘り方をもつ建物や、横板組井戸は注目に値する。遺物として奈良時代後半以降の墨書き土器9点、漆書き土器2点、転用硯2点を含む須恵器・土師器がある。井戸から出土した墨書き土器3点に「永丙」と書かれたもの。木製の皿の底部に「永丙」と書いたもの1点がある。

郡衙に係わる東浜谷遺跡が北約800mの位置にあり、「郡家」という地名や駅家「長柄駅」と考え合わせると建物跡等が駅家跡と断定することは困難であるが、一部を構成していることは推測可能である。

統いて、古代山陰道は西浜谷から西に進み、西紀町宮田から丹南町大山へと、篠山盆地の北側を東西走することとなる。このことについて、竹岡林氏（註70）は、古代山陰道は、長柄駅から宮田を経て現在の県道長安寺・篠山線を通り、北野新田地区より旧大阪街道に入り、追入地区より金山を越える説を立てられている。この説に従うとすれば、西本之部遺跡の北約150mを東西に山陰道が走る。当遺跡は街道筋に位置することとなる。

（4）寺院跡

篠山盆地には、奈良・平安時代に属する寺院跡は、2箇所確認されている。篠山城をはさんで北に篠山町寺内・寺内庵寺、南に丹南町野中・竜円寺遺跡である。

寺内庵寺（註71）は、黒岡川の西岸の平地に立地し、「堂の前の坪」、「堂裏の坪」、「東門の坪」等寺を推定する字名が存在する。しかしながら発掘調査においては、柱穴や瓦窓等の遺構しか存在せず、塔、金堂、講堂といった主要伽藍や基壇、礎石も今の所見つかっていない。しかし、中心部分が未調査であることから、今後の解明に期待がもたれる。

遺物としては、大量の瓦、須恵器・土師器・瓦器等が主に瓦窓の中から出土した。瓦には、八葉單弁蓮華文軒丸瓦、軒平瓦、八葉複弁蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、八葉三重弁蓮華文軒丸瓦、同軒平瓦、道具瓦等がある。瓦の型式編年から7世紀後半から8世紀にかけて創建され、平安時代末に廃絶したと考えられる。隣接して八木田の坪（註72）に瓦窓跡がある。寺内庵寺に瓦を供給した窓跡である。

竜円寺遺跡（註73）は、小枕川が形成した扇状地上に立地する。「寺前の坪」「觀音前の坪」といった字名がある。遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝状遺構4、土塁9、瓦窓（平瓦窓）2基、その他多数のピットからなる。

掘立柱建物跡3棟は、S B17が、梁行2間×桁行5間、柱間距離は2.1m程である。S B18は、梁行2間×桁行2間、総柱建物、柱間距離1.8m。S B19は梁行4間×桁行2間+αの掘立柱建物、柱間距離は2.1m程である。両者共に8世紀代にその時期を求めることができる。

遺物としては瓦、須恵器、土師器、磚、鉄製品等が出土した。創建時を示す水切り瓦に似た八葉複弁蓮華文軒丸瓦、八葉單弁蓮華文軒丸瓦（寺内庵寺と同様）、重圓文軒丸瓦、重輪文軒平瓦、あるいは唐草文軒平瓦、それに続く重圓文軒丸瓦と重輪文軒平瓦、道具瓦として短振瓦、面土瓦などがあり、須恵器の杯、壺蓋、棱鏡、円面鏡、淨瓶の注口、有孔円板等も多数出土しており土器、瓦の年代から奈良時代中頃に創建され、平安時代へと継続して営まれた遺跡である。遺物等から見ると、寺跡と推測するには充分と思われるが、基壇等の遺構が全く存在しないなど確定するに至っていない。

竜円寺遺跡より東へ約1200m、瓦屋の坪に瓦窯、下地瓦窯（註74）がある。

1号窯は、全長約9m、焚き口幅0.84mの瓦専業窯と考えられる。灰原からは、純目痕跡のある平瓦と、重圓文軒丸瓦と重廓文軒平瓦が出土。所属年代は奈良時代後期である。

2号窯は、丘陵斜面を利用して反地下水式の瓦窯である。この窯は、残存状況が極めて悪く、上端部2m強、焼成部の床面から最も深い所で約30cm程度確認されたにすぎない。

竜円寺遺跡出土上瓦当と同様の瓦当が出土するところから、下地瓦窯は、竜円寺遺跡へ供給するための瓦窯であったことは明らかである。

（5）条里制

条里制の遺跡を残す風景は、昭和40年代まで、郡内の至るところで見ることができたが、近年のは場整備事業によって、見ることができなくなっている。篠山盆地の条里遺構を研究した上田洋行氏は、その著「丹波多紀の条里と大山荘西田井村」（註75）によると、「東北の隅より南へ6坪、西へ廻り地進して12まで進むちどり坪」であると結論づけている。このことを踏まえて、西木之部遺跡周辺の坪名を見ると、宮田川に沿って北（上流）から南に、一の坪、二の坪、三の坪、四の坪、五の坪、その西隣に八の坪がある。条里の施行に際して、北東隅を一の坪として北から南へ、次に南から北へと千鳥に設定されたことを示している。

（6）古代豪族

篠山盆地の古代豪族を知る資料がある。岸俊男（註76）によると、正倉院に現存する丹波国多紀郡のものらしい戸籍簡（註77）には、多紀臣、和邇部、大宅部の同地存在が確かめられる。「古事記」によって、古代豪族と天皇の后妃関係を見ると、もっとも多く後の后妃を入れているのは和邇氏と葛城氏であり、皇室と和邇氏が密接な関係にあったことがわかる。和邇氏は、奈良盆地北東部を占拠する有力豪族であった。その勢力はやがて山城、近江を足がかりに西方に伸張し、やがて7世紀前半に、その管下に属した地方豪族を統合して天押帝日子命を始祖とする同族系譜が作られた。その系譜「孝昭記」によると「兄大押帝日子命者、春日臣・・・多紀臣・・・」と春日臣ら16氏を同族とするものであり、その中に多紀臣が記されている。このことから篠山盆地の多紀臣は有力豪族である和邇氏と同祖である関係が設定されている。

これら氏族の系譜の体系は、大和に在地して政権の中核を構成するキミ、オミ、ムラジの各氏族を中心として形成されているものであり、いわば地方の諸氏族と大和のいざれかの有力氏族との間には同祖関係が設定されている。

（7）須恵器の生産

8世紀に入ると石住・高倉・印谷・町之田において須恵器生産が行われていた。

須恵器窯跡は、大山川左岸の大山谷・印谷・池尻谷の各谷に分散して9箇所が点在する。その内大山谷に段林窯跡・池谷窯跡・清水谷窯跡・才藏坊窯跡・五反田窯跡・トチガタニ窯跡・三河谷窯跡の7箇所、印谷にダイジョウダニ窯跡、町之田に庄谷窯跡の各1箇所が確認されている（註78）。各窯では、坏蓋、坏身などを焼成しており、器種は限定される。特に注目すべき遺物として、才藏坊窯跡から「郡」を刻印した土器片が採集されている。これは、陽刻した郡という印を土器底部に押捺したもので鏡字「郡」の刻印土器片である。各窯跡の操業年代は、才藏坊、五反田の2窯が8世紀前葉から中葉にかけて、段林、清水谷窯が中葉、ダイジョウダニ、庄谷の2窯が中葉から後葉にかけて、池谷窯が後葉を中心として、そしてトチガタニ、三河谷は、池谷窯跡に後続するものと考えられる。

要約すると、8世紀の初め、奈良時代に入ると河内郷の大山谷・石住地区に窯業し、生産を開始した。「郡」の刻印土器の発見は、同様の刻印土器が採集された東浜谷遺跡と生産地と消費地との関係があると理解される。それは、郡等地方行政機関へ納める製品を生産する窯と推測され、河内郷は官営の工房跡と言えるのではないか。9世紀中頃、大山庄が成立する頃には終焉した。窯業生産の終息と荘園の成立、この推移は何を意味するのか課題であろう。

6 荘園

(1) 大山庄と河内郷

丹南町大山地区は、かつて中世荘園として栄えた東寺領大山庄があった。もとは藤原良房の所領であったが、真言宗開祖「空海」が建てた綜芸智積院を空海死後、弟子である実惠が充却し、その代絶1,400貫文で丹波国大山地域の田園を、東寺の伝法料田として買得したものである。9世紀中頃の承和12(845)年「民部省府案」(註79)によると垂田9町余、林野35町、計44町余が東寺領として承認された。東寺は荘家を建て、荘官を任命して經營に努め、永久2(1114)年、太政官牒が下され、60町余の一色田が確立された。

「民部省府案」によると、まず大山庄の四至は、「東限公田」、「西限刑山峯」、「南限川」、「北限大山峯」と記している。そのうち、東は「公田」とあり、その公田というのは明らかでなく、『大山村史』(註80)によると、康和4(1102)年7月15日、国司、下司代などが立ち会いのもとに、大山庄の四至・坪付が確立されるが、その資料である大山庄立券坪付によると「東公田并深理川」とあり、この深理川が全体の地形から宮田川と推測され、大山庄の東境は、宮田川及びそれに沿った西側一帯の公田と推測されている。西の「刑山峯」は北西境にある金山、南の「川」は、西流する篠山川、北の「大山峯」は、村の北東境にそびえる黒頭峯や夏栗山と考えられ、大山庄の庄域は、篠山川と宮田川に囲まれた丹南町大山地区と西紀町の一部が河内郷に該当すると思われる。西木之部遺跡は河内郷に属していたと理解される。

そして、前述の『倭名類聚鈔』(9世紀前半)には、その当時の8つの郷名が記載されている。それはちょうど東寺が田法料田として大山地区の田園を買い求めた頃であり、「同省府案」によると買得した地域が「河内郷地一条三大山里一大山田東半五段」であると記して河内郷に属していること。また長和2(1013)年「大山庄解」(註81)によると東寺領大山庄の庄田は「多紀郡西県河内郷」にあるとしている、大山庄は、河内郷に属することは明確である。

(2) 宮田庄と大山庄との争い

貞觀年間(859~877)に摂政藤原良房の所領となって以来、摂関家領丹波国宮田庄は、鎌倉時代初期から近衛家領として続いた荘園である(註82)。

河内郷に属していた東寺領大山庄と近衛家領宮田庄は、隣接するがために四至の「東限公田」において用水争論、境争論などの紛争が生じることとなった。例えば、平安時代の天正2(1132)年8月、関白藤原忠通が御室宮覚法親王に措置をしたことを伝えた「関白藤原忠通御教書」(註83)が残されている。それは、宮田庄寄人(庄民)が摂家の威をかりて、大山庄に滋訪を行ったことについて、東寺は御室宮覚法親王を通じて滋訪の停止を求めたところ、時の関白藤原忠通が、要求にもとづいて宮田庄側に非法を停止する命令を出している。

また、大山庄西田井村(現東河内・明野・大山下の付近一帯)の付近は、用水の便が悪く、隣莊宮田庄から供せられる余流によって灌漑を行ってきた。承安3(1173)年以来、大山庄側は用水供給を受ける代償として、宮田庄民が、大山庄内で草木採取することを認めてきた。しかしながら東寺領大山庄に

承久の乱（1221年）の後、中沢基政が地頭職につくと勢力を伸長する行動に出、宮田荘預所・雜掌との対立を激化させた。例えば、建治2年（1276）12月、基昌率いる人々が宮田庄西木之郷村に乱入して、往古の木を伐採しようとしたところ、宮田庄預所の代官源三郎入道西善とその従者との間で喧嘩が発生し、西善を殺す事件が起きた。この事件は、宮田庄雜掌の訴えによってその後長く争われ、永仁年間（1293～1299年）には、大山庄地頭は、宮田庄民の草木採取を禁止し、宮田庄側は、西田井村への用水供給を停止するなどして対抗した。そのため西田井村の耕地は荒廃の危機に直面することになった。永仁3年（1295）年、地頭中沢氏との間で、下地中分が行われるや、東寺は、宮田庄側と、用水問題に関する交渉を再開した。東寺側としては、宮田庄民の草木採取の条件にかえて、一町五反歩の田地を宮田側へ渡すことを提案し、徳治3年（1308）5月には、用水契約を結ぶに至った。この交渉の過程において、「丹波国大山荘用水差図」が作成された。

（3）田堵と負名

最後に有力農民等の台頭について、『教養の日本史』（註84）から、引用して自立する農民の存在を確認しておきたい。

『戸籍・計帳による人別支配が解体する中で、10世紀に入ると、国衙支配下では、土地支配を基盤とした新たな徵税制度が成立した。それは、9世紀を通じて地方で成長した富豪層などの有力農民の耕営する田地（口分田・整田）を、国衙が検田を通じて把握し、その面積に応じて從来の出租・出學利穀・調庸などの租税を官物・臨時雜役として徵収する仕組みであった。このような国衙によって把握された富豪層は、その經營する田地分の租税を請け負ったのであり、彼らは「負名」とよばれた。

932（承平2）年9月22日の丹波国牒によれば、この年、丹波國多紀郡で東守領大山荘の置であった僧平秀・勢豈が、国衙に納入すべき調絹を納入せずに、山野に逃げたので、丹波国衙は平秀・勢豈の稻各二百束を差しあさるという事件がおこった。その事情は国衙側の言い分によれば、次のようなことであった。同郡の余部郷は、もともと狭くて百姓に班給するだけの土地がないので、付近の他の郷の土地を余部郷に住んでいる百姓の口分田として班給していた。そこで、余部郷の百姓が負担すべき調絹は、その口分田を耕作する「堪百姓」の「名」につけて徵収することになっており、平秀や勢豈もそのような堪百姓の一人として、国衙の帳簿に登録されて年來調絹を納めてきたのだが、このたびは逃げかくれて納入しようとしないので、その分の稻を差しあされたのだ、と。

ここでは、調が人頭税としてではなく、かつて班給された口分田を基準として、それを耕作する国衙台帳登録農民＝堪百姓に賦課されていることが知られるのであり、国衙側から見れば、平秀や勢豈は「名」の責任者、すなわち負名であったのである。一方、他の史料では彼らは「田刀」＝田堵と呼ばれている。

平秀も勢豈もこのよう、自ら直接經營にあたり、農具や種苗などの營料・食料を自己の手中に握ることにより、数町の耕地を近在の中小農民に割り振りして使役するという農業經營の専門家＝田堵として莊園經營に携わる一方、負名として国衙に編入されるようになったのである。」と記述し、負名としての有力農民が跋扈している様子を窺うことができる。

（4）集落と遺跡

丹南町大山は、地頭と領家の「下地中分」以降領家「東寺」の中心經營地となった地域である。このころの建物跡が確認されている。

前述した西向遺跡は、大山地区のほぼ中央に位置し、一印谷集落の入り口にあたる。11世紀後半から12世紀初頭の頃には、掘立柱建物2棟とピット群がある。2棟の建物は、2×3の南北棟で桁行、梁行

ともに2.10m前後を測る。2棟とも同一プランをもつことから屋と考えられている。12世紀から13世紀前半と考えられる遺構として掘立柱建物群4棟がある。建物3及び5が2×3間、建物4が3×4間、建物6が3×4間で東側に庭をもつ大型の建物である。これらは、複数の屋と納屋・倉庫といった付属建物からなる建物群と考えられている。

臼谷遺跡（註85）は、丹南町大山上、大山川左岸の山裾に立地し、西側から延びた舌状の2つの尾根に囲まれた谷間にある。3棟の掘立柱建物と集水土壌1ヶ所を確認した。掘立柱建物S B01は、2×4間の規模をもつ南北棟、S B02は、2×1間+αの縦柱建物、S B03は、2×3間の縦柱建物である。これらの点から、12世紀後半から13世紀を中心とした集落遺跡と推測され、大山庄の開発が、9・10世紀に大山谷を中心として始まり、領域支配が確立するのが12世紀初めとされている。臼谷遺跡も莊城開発が進展するこの時期と相前後して成立した集落と考えられる。

7. むすび

西木之部遺跡の地理的環境を第1節に、歴史的環境をこの節に記述してきた。この節は篠山盆地に於いて原始、古代、中世の時代に展開された歴史を西紀町宮田川水系を中心にして、篠山盆地全域、河内郷、大山庄・宮田庄にふれ探ってきた。

それでは、西木之部遺跡とはどのような遺跡なのか遺構・遺物を通して、この報告書の明らかにしたい。

註

註1 兵庫県教育委員会「板井寺ヶ谷遺跡」兵庫県文化財調査報告書第96・1冊 1991（平成3）年

註2 深井明比古「兵庫における先上器時代終末から縄文時代草創期の石器群の様相」『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』1980（昭和55）年

多紀都教育事務組合教育委員会「壹部藤岡山遺跡予察調査報告書」1973（昭和48）年

註3 篠山町教育委員会 山本明彦氏より教示

註4 篠山町教育委員会 山本明彦氏より教示

註5 篠山町教育委員会 山本明彦氏より教示

註6 今田町教育委員会 河野克人氏より教示

註7 山本明彦「下見見南部遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』1986（昭和61）年

註8 西紀・丹南町教育委員会「芦波・口阪本遺跡」1981（昭和56）年

註9 山本三郎「四の坪遺跡」『日本考古学年報』第26巻 1975（昭和50）年

註10 兵庫県教育委員会「内場山城跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』1988（昭和63）年

註11 兵庫県教育委員会「板井寺ヶ谷遺跡」兵庫県文化財調査報告書第96・1冊 1991（平成3）年

註12 西紀・丹南町教育委員会「大山庄内埋蔵文化財調査概要報告書」西紀・丹南町文化財調査報告第10集 1992（平成4）年

註13 西紀・丹南町教育委員会「大山庄内埋蔵文化財調査概要報告書」西紀・丹南町文化財調査報告第10集 1992（平成4）年

註14 宮川清編「大山村史(本編・資料編)」1964（昭和39）年

註15 芦田茂「住吉川岸遺跡(味真南△地点)」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』1986（昭和61）年

註16 篠山町教育委員会「古代祖先のあゆみ」1980（昭和55）年

- 註17 西紀・丹南町教育委員会『野中（龜円寺遺跡）追跡発掘調査実績報告書』1986（昭和61）年
池田正男・芦田茂「龜円寺遺跡（第3次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』1983（昭和58）年
- 註18 兵庫県教育委員会『庄塚1号墳』兵庫県文化財調査報告第41冊 1987（昭和62）年
- 註19 篠山町教育委員会『古代祖先のあゆみ』1980（昭和55）年
- 註20 大槻伸「下籠見遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』1983（昭和58）年
- 註21 西紀・丹南町教育委員会『野中（龜円寺遺跡）追跡発掘調査実績報告書』1986（昭和61）年
池田正男・芦田茂「龜円寺遺跡（第3次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』1983（昭和58）年
- 註22 兵庫県教育委員会『上板井遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第76冊 1990（平成2）年
- 註23 西紀・丹南町教育委員会『大山荘内埋蔵文化財調査概要報告書』西紀・丹南町文化財調査報告第10集 1992（平成4）年
- 註24 西紀・丹南町教育委員会『大山荘内埋蔵文化財調査概要報告書』西紀・丹南町文化財調査報告第10集 1992（平成4）年
- 註25 西紀・丹南町教育委員会 芦田茂・内田辰博氏より教示
- 註26 兵庫県教育委員会『丹波王地瓦窯』兵庫県文化財調査報告第25冊 1984（昭和59）年
- 註27 兵庫県教育委員会・篠山町教育委員会『篠山町寺内遺跡発掘調査現地説明会資料』1976（昭和51）年
- 註28 篠山町教育委員会『古代祖先のあゆみ』1980（昭和55）年
- 註29 篠山町教育委員会『古代祖先のあゆみ』1980（昭和55）年
- 註30 平方遺跡調査担当者深井明比古、櫻宮正氏教示
- 註31 種定淨介「野野間鋼鉢」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』1984（昭和59）年
- 註32 余田邦夫「丹波春日町出土の磨製石剣」『考古学雑誌』第4卷第4号 1969（昭和44）年
- 註33 西紀・丹南町教育委員会『大山荘内埋蔵文化財調査概要報告書』西紀・丹南町文化財調査報告第10集 1991（平成4）年
- 註34 西紀・丹南町教育委員会『大山荘内埋蔵文化財調査概要報告書』西紀・丹南町文化財調査報告第10集 1991（平成4）年
- 註35 西紀・丹南町教育委員会『大山荘内埋蔵文化財調査概要報告書』西紀・丹南町文化財調査報告第10集 1991（平成4）年
- 註36 篠山町教育委員会『黒田坪墳墓群』 1993（平成5）年刊行予定
- 註37 関崎正造・市橋重喜他「内湯山城跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』1988（昭和63）年
- 註38 岸本一宏氏教示
- 註39 兵庫県教育委員会『上板井古墳群』兵庫県文化財調査報告第34冊 1986（昭和61）年
- 註40 西紀・丹南町教育委員会『大師山6号墳・宮田1号墳発掘調査概要報告書』西紀町・丹南町文化財調査報告第14集 1993（平成5）年刊行予定
- 註41 木永雅雄「古墳の航空大観」1975（昭和50）年 学生社
- 註42 木戸勇助「車塚一帯」1910（明治43）年
- 註43 都出比吉志「横穴式石室と群集墳の発生」『古代の日本 5近畿』1970（昭和45）年 角川書店
- 註44 多紀学生地方史研究会『北條古墳』1970（昭和45）年
- 註45 多紀郡教育事務組合教育委員会『新宮古墳群石塚調査概報』1970（昭和45）年 『篠山領地誌（一名貞享記）』1687（貞享4）年

- 註46 多紀郡教育事務組合教育委員会『新宮古墳墓石碑調査概報』1970（昭和45）年
- 註47 前田豊郎・中野卓郎『よせわ古墳』1978（昭和53）年
- 註48 村川行弘『過去の出土遺物等の再点検』『古代学研究』第90号1979（昭和54）年
村川行弘『三角縁圓文帶神獸鏡の創作』『大阪経済法科大学論集』第8号 1979（昭和54）年
- 註49 宇杉幸希『多紀郡内古墳の移動と三大古墳群の設定』『篠山歴史研究会月報』No.5 1982（昭和57）年
- 註50 田辺昭三『須恵器大成』1981（昭和56）年 角川書店
- 註51 岡崎正雄氏教示
- 註52 西紀・丹南町教育委員会『長者ヶ谷1号墳』西紀・丹南町文化財調査報告第8集1989（平成元）年
- 註53 西紀・丹南町教育委員会『丹南町道塗分布地図』西紀・丹南町文化財調査報告第12集 1993（平成5）年刊行予定
- 註54 西紀・丹南町教育委員会『大師山16号墳・宮田1号墳発掘調査概要報告書』西紀町・丹南町文化財調査報告第14集 1993（平成5）年刊行予定
- 註55 西紀・丹南町教育委員会『大師山16号墳・宮田1号墳発掘調査概要報告書』西紀町・丹南町文化財調査報告第14集 1993（平成5）年刊行予定
- 註56 富田好久・亥野謙『大瀧2号墳』西紀・丹南町文化財調査報告第2集 1981（昭和56）年
- 註57 真南条上3号墳調査担当者西口和彦、別府洋・氏教示
- 註58 福原澄次郎（会下山人）著『多紀鄭士史話』1934（昭和9）年
- 註59 西紀町郷土史研究会『西紀町埋蔵文化財概要－近畿自動車道関係埋蔵文化財調査を中心－』1986（昭和61）年
- 註60 兵庫県教育委員会『近畿自動車道関係埋蔵文化財調査報告（1）－庄境2号墳－』兵庫県文化財調査報告第20番 1983（昭和58）年
- 註61 兵庫県教育委員会『庄境1号墳』兵庫県文化財調査報告第41冊 1987（昭和62）年
- 註62 兵庫県教育委員会『沢の浦古墳群』兵庫県文化財調査報告第48冊 1987（昭和62）年
- 註63 多紀郡教育事務組合教育委員会『波賀尾群集分布調査報告書』1973（昭和48）年
- 註64 宮川満編『大山村史（本編・資料編）』1964（昭和39）年
- 註65 兵庫県教育委員会『丹波王地瓦窯』兵庫県文化財調査報告第25冊 1984（昭和59）年
- 註66 白石太一郎・前川実知雄『飛鳥豪農学校庭出土の木簡』『青陵』権原考古学研究所略報『青陵』22号 1973（昭和48）年
- 註67 『平城宮発掘調査出土木簡概報』12 1978（昭和53）年
狩野久「唐末付札について」『木製研究』3 1981（昭和56）年
- 註68 兵庫県教育委員会『山陰道』歴史の遺産報告書第3集 1993（平成5）年刊行予定
- 岡本丈夫「古道が語る－丹波・延喜の道の－考察－」『兵庫県の歴史』第24号1988（昭和63）年
- 註69 篠山町教育委員会『西浜谷下小西ノ坪遺跡』1989（平成元）年
- 註70 竹岡林『丹波国』藤原麻・郎編『古代日本の交通路』3、1978（昭和53）年 大明堂註71 寺内遺跡調査4入会『寺内通信』I～V』1977（昭和52）年
- 註72 故大江道弘氏より教示
- 註73 池田正男・芦田茂『竈内寺遺跡（第3次調査）』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』1983（昭和58）年
池田正男『竈内寺遺跡』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度』1982（昭和57）年
- 註74 兵庫県教育委員会『丹波王地瓦窯』兵庫県文化財調査報告第25冊 1984（昭和59）年
- 註75 上田洋行『丹波多紀の条里と大山荘西井村』『歴史手帳』1980～8巻8号（昭和55）年 名著出版

- 註76 岸後男「古代豪族」『世界考古学大系3』、1959（昭和34）年
- 註77 「正倉院文書」(758または764年丹波国多紀郡(?)戸籍)
- 註78 西紀・丹南町教育委員会『大山莊埋蔵文化財調査概要報告書』西紀・丹南町文化財調査報告第10集 1992（平成4）年
- 註79 京都府立総合資料館編『國錄東百合文書』1970（昭和45）年 吉川弘文館
京都府立総合資料館編『續國錄東百合文書』1974（昭和49）年 吉川弘文館
- 註80 官川満編『大山村史（本福・資料編）』1964（昭和39）年
- 註81 『東寺文書』1013（長和2）年『大山莊解』
- 註82 細見末雄『丹波の莊園』1980（昭和55）年 名著出版
- 註83 京都府立総合資料館編『國錄東百合文書』1970（昭和45）年 吉川弘文館
京都府立総合資料館編『續國錄東百合文書』1974（昭和49）年 吉川弘文館
- 註84 竹内誠・佐藤和彦・君島和彦・木村茂光編『教養の日本史』東京大学出版会1987（昭和62）年
- 註85 西紀・丹南町教育委員会『大山莊埋蔵文化財調査概要報告書』西紀・丹南町文化財調査報告第10集 1992（平成4）年

第3章 A地区の調査

第1節 弥生時代から古墳時代の遺物

1. 遺物（図版5・6）

北西隅付近包含層出土土器（1～23）

北西隅包含層からは壺・蓋・鉢・器台が出土している。1は長頸壺である。丸みを帯びた体部に斜め上方に直線的に立ち上がる頸部がつく。タタキ成形でつくられ、体部上半のタタキ目はナデ消されている。内面は横方向のハケで仕上げる。2・3は斜め方向に立ち上がる頸部に外反する口縁部がつき、口縁端部を上方に拡張する広口壺である。2の口縁端部はわずかにつまみ上げられるだけであるが、3はさらに上方に二次口縁を付加し、完全な複合口縁となる。4は偏球形の壺の体部である。

5・6は壺蓋である。いずれも傘形の体部に粘土を付加し、つまみ上げたつまみ部が付く。内面は縱方向のハケで仕上げる。7は短く外反する口縁部をもった短頸広口壺である。8は肩の張った体部に端部をつまみ上げ面をなす口縁部がつく大型の壺である。9は口縁端部を大きく上方に拡張した鉢に低い脚台が付く台付鉢である。鉢部内面にはヘラケズリの痕跡が認められる。10は口縁部を欠くが、9と同様な台付鉢であろう。11・12は低い脚部の破片である。おそらく9・10と同様な台付鉢の脚台であろう。13は口縁部を上方に拡張する鉢である。14は底部に1孔を穿った有孔鉢である。

15・16は脚部と受け部が貫通した小型器台である。15は受け部の縫部が外反する。17～22は大型の器台である。17・18は受け部の端部を上方に拡張し擬凹線を施す。脚部には透孔があり、17は4方向に、18は3方向に穿つ。19は受け部端部を外反させる。20は受け部の端部を内側に拡張する。脚部には3段3方向に透孔を穿つ。21は受け部の縫部を上下に大きく拡張し、端面には擬凹線を施す。22は口縁端部を上下に拡張し、端面に竹管文を3段に施す。1段目はC字形であり、2・3段目は連続してS字形になる。23は高杯の脚部である。細身の脚部に漏斗形の縫部が付く。失われた杯部は恐らく口縁部を上方に拡張した複合口縁の椀形になるであろう。外外面ともにハケで仕上げられる。

以上の土器は1の長頸壺や20の器台がやや古い様相を持ち、弥生時代後期前半まで上がる可能性があるが、大半は後期後半～終末期のものである。

その他包含層出土土器（24～31）

24は弥生時代中期末の広口長頸壺である。外反する頸部に上下に拡張する口縁部がつく。頸部には凹線文が施され、口縁部端面には円形浮文が貼付される。25は口縁部縫部を下方に拡張する器台の受け部である。弥生時代後期後半～終末期のものであろう。26・27は口縁部の縫部を上方に拡張する壺である。26は外面をハケで仕上げる。27はタタキ成形であり、内面に横方向のヘラケズリで仕上げる。28は単純なくの字形の口縁をもつ壺である。体部外面は縱方向のハケで、口縁部内面は横方向のハケで仕上げる。これらの壺は弥生時代終末期後半のものである。29は外面にタタキ目、内面に縦方向のヘラケズリが認められる壺の底部である。30は台付鉢の脚台部である。31はミニチュアの壺である。

第2節 奈良時代の遺構・遺物

1. 遺構(図版3)

A地区では、調査区の中央部に比較的大型の溝(S D 1)が流れ、その北側に掘立柱建物址(S B 1～5)が集中する状態で検出された。調査区が東に向かって下がる小さな谷地形のため、後世の削平を多く受けている可能性も高いが、溝(S D 1)の南西側には一切建物は建てられていなかったようである。また、谷口部となる北東部にも建物址はなく、上層の状況から判断してこの部分は水田であったものと思われる。

掘立柱建物群は、溝(S D 1)によって3分割された高所地のうち北西の高所地上にS B 1が建ち、北東のそれにはS B 3～5の建物址が存在するため、2群に分かれることになる。いずれの建物址も、桁行をほぼ東西の方向にとっており、大きな方向の振れは少ない。

S B 1

柱間1.5m前後の、2×2間の純柱建物址である。柱掘方は円形に近い方形である。東と南の面をS D 1によって区画され、背後にS A 1を伴うため、ほぼ周囲から孤立した状態となる。さらに、S D 1によって分割された北西の高所地上に建つ唯一の建物のため、一段と隔離化された感が強い。

S B 2

北東の高所地上では最も上手(西)に建つ。2×3間の南北棟であるが、桁行の中の間が1.2mと短いため、梁間との格差が目立たない。5棟の建物址のなかでは唯一の隅柱建物址であり、梁間柱間約1.5m、桁行柱間(中の間を除く)1.3m前後を測る。

S B 3

S B 2から東に約3m離れて建つ、2×4間の東西棟純柱建物址である。柱間は梁・桁とも1.3m強の等間となる。東柱は中央の1柱が確認されているのみのため、中央の梁間柱によつて区切られる二室構造の建物となる可能性もあるが、ここでは純柱の建物を復元しておく。



S B 4

S B 3の南東隅柱に接するように、その南東部に建つ。規模的にはS B 3に類似する。間数は梁行が2間、桁行が3間の東西棟純柱建物址である。梁行柱間は1.5m強であり、桁行柱間は1.8～2.0mと長くなる。その梁間柱間も、北側の柱間が広くなる作りとなっている。



S B 5

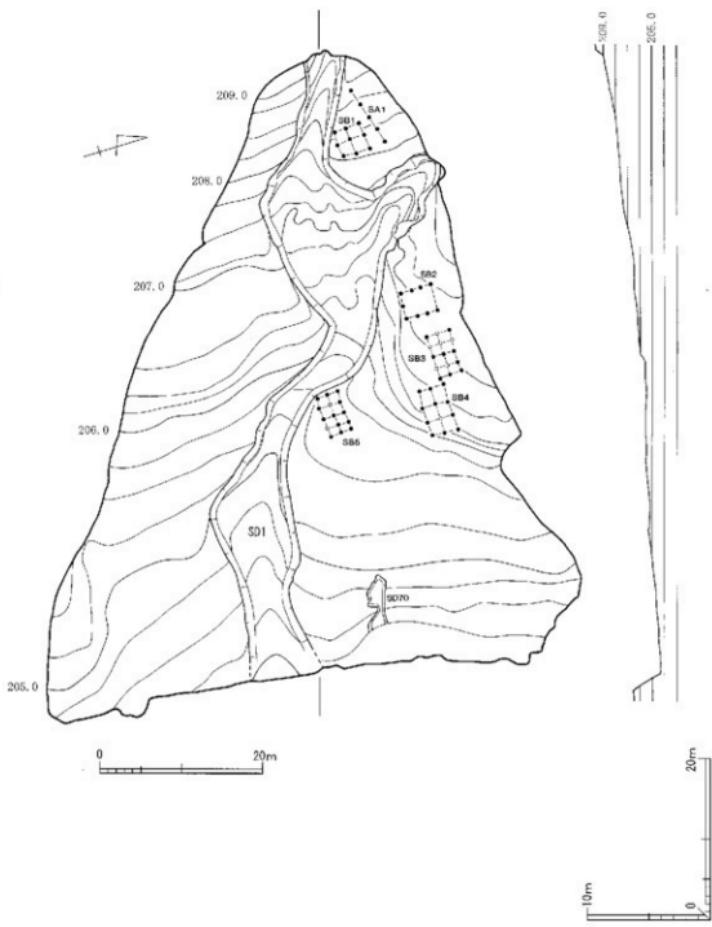
北東高所地の中ではS B 2～4が比較的近接しているが、このS B 5のみが10mほど南に離れ、西の梁間をS D 1に接する形で位置する。2×4間の規模であるが、柱間の距離が1.2～1.5mと不規則となり、S B 3・4より一回り小さな建物址となる。



S A 1

S B 1に付随すると思われるが、建物址の柱通りとは方向をわずかに振り、地形に即して東西方向となる。4間分が設けられているが打ち込みによるものではなく、掘立柱構造となる。





第2図 奈良時代遺構全体図

溝（SD 1）

調査区の中央部を、北西から南東に向かって流れる溝状の遺構である。最初の段階には護岸等の人工的な手は加えられておらず、自然地形に沿って蛇行しながら流れる自然流路の形を呈している。最深部

の北西部では幅約5m、深さ約30cm程度であるが、南東端では幅が約倍になり、深さは1m弱となる。北西端から約18mのところで北に向かう溝と分岐するため、結果的に調査区内を3つの高所地に分割することとなる。内部からは、奈良時代前半を中心とした遺物（多くは須恵器）が出土する。

2. 遺物（図版19～26）

今回の西木之部遺跡3地点（A・B・C地点）の発掘調査によって、多数の奈良時代に属する土器が出土した。B地区は出土土器の器種・数量ともかなり少ないので、他の2地点では数量的にも比較的まとまった器種構成の土器を取り上げることができた。

兵庫丹波における同時期の土器の調査研究は、須恵器を中心として散発的に行われているのが現状であり、まだ十分な編年も確立していないのが現状である。特に多紀郡内では「東浜谷遺跡」、「竜円寺遺跡」の様に官衙あるいはそれに準ずると思われる遺跡が調査されているものの、土器の編年を確立するに足る良好な資料は未だ公にされていない。そこで今回の報告書においては、同じ兵庫丹波に属し多紀郡の西に位置する氷上郡内で、同じ近畿舞鶴線建設工事に伴い発掘調査された「七日市遺跡」、「山垣遺跡」の資料を参考しながら記述することとする。

また、器種の分類ならびに器種名については、「平城宮」のそれに従うものとする。ただし、「平城宮」にみられない特殊なものに付いては、独自の呼称を用いる。さらに、各土器の口径・器高をはじめとする寸法ならびに調整手法・その他特徴については最後の土器観察一覧表に記載する。

型式の設定

上記した参考遺跡の資料を基に、本遺跡出土土器の型式の設定を試みてみたいと思う。数量的に多い杯A・杯Bを型式設定の指標として分類を行うと、大きく4型式に分類することが可能となる。時間的にも第1型式が最古となり、以後第4型式へと移行する。ここでは杯A・杯Bの型式的な特徴をまずかけ、器高指数・細部の形態差等により細分を行う。杯A・杯Bとも須恵器が大多数を占め、上部器の資料が著しく少ない状況にあるため、ここに記す型式設定は須恵器に関するものと限定する。

第1型式

「平城宮」I型式に並行すると思われる型式の土器群である。「春日七日市遺跡」（以後「七日市」）のⅢ・Ⅳ型式、「山垣遺跡」（以後「山垣」）のI型式に相当するものである。

杯Aでは前代の特徴を残すa形態と、第2型式以降主流となり口縁部がわずかに外湾しながら開くb形態、さらにその中間的なc形態の3形態に細分することができる。b形態は底径が他の2形態に比較してかなり大きくなるが、底体部にはまだ十分な丸味を残している。口縁部には大きく外湾するものと、ほぼ直線的に開くものがみられる。a形態は小さな平底となり、底体部が極小さな高台状となる。体部は著しく丸味を持ち、口縁部は内湾するものと内湾の後大きく外湾するものが多数を占める。口径による細分では、口径12.5～13.5cmのIと、12cm前後のII、さらに9.5～11cmのIIIとなる。器高指数による細分の状況はみられないため、法量的にはほぼI型式で納まっているようである。形態的細分と口径差による細分を重ねてみると、a形態は小口径となり、b形態は大口径、c形態が中口径となることがはっきりする。

杯B臺には、「平城宮I」段階に含まれる形態のものであるが、数量的にはかなり少數である。天井部に丸味を残し、口縁端部は断面三角形となり、外面が狭い平坦面となって内傾する。つまみは高く、比

較的太いものが付けられる。杯Bは底体部境をかなり上方から削り込んで、体部に丸味を持たせている。脚部が太く、底面を強くヨコナデするため断面は台形型となり、内面接地する。法量による分類では、口径16.5～17.5cmのI、15～16cmのII、13～14cmのIII、11～12cmのIVという4型式に細分できる。器高指数はIからIVに向うにしたがって増加するが、法量的には4型式とも一法量でおさまる。

第2型式

『平城宮II型式』、『七日市』のIV、『山垣』II～IIIにあたると思われる。

杯Aでは第1型式のa・c形態はなくなり、b形態ばかりとなる。前型式のような底体部境の丸味はほとんどなくなり、底部との境が明確となる。ただその中でも、底部が若干下がり気味となり古い要素を残す一群と、ほぼフラットとなる新しい一群が存在するようである。口縁部の形態は直線的に開くものと、上半で小さく外湾するものが共存する。口径的には14cmまでのIと、11.5～13cmまでのII、10cm前後のIIIの3つに分れる。数量的にはIIが全体の8割近くを占め、IとIIIが各1割づつの割合となる。

杯B蓋の天井部は高く、なかには第1型式より丸味を持つものもみられる。この段階になると、杯蓋口縁端部は細長く垂下するようになる。そのため、一段と器高が高まったような錯覚を受ける。天井部と口縁部境の外面には、口縁端部をつまみ出す際の小さな屈曲を持つb形態と、屈曲のないa形態がみられる。つまみは若干スマートになり、天井との接合部が大きくくびれる。杯Bは依然底体部境をヘラケズリして丸く仕上げる。脚部は底面のヨコナデが弱くなり、ほぼ平坦になる。接地も基本的にはまだ内面接地の傾向が残るもの、水平接地に近いものが多くなり、太く短いものが主流となる。口縁部には第1型式同様、a形態とb形態がみられる。口径の大きさからみると、口径15～16cmのI、13～14.5cmのII、12～12.5cmのIII、9.5～11cmのIVのように第1型式同様に4形態に細分することができる。法量的にはいずれも一法量であり、IからIVに向うに従って器高指数の増大がみられる。

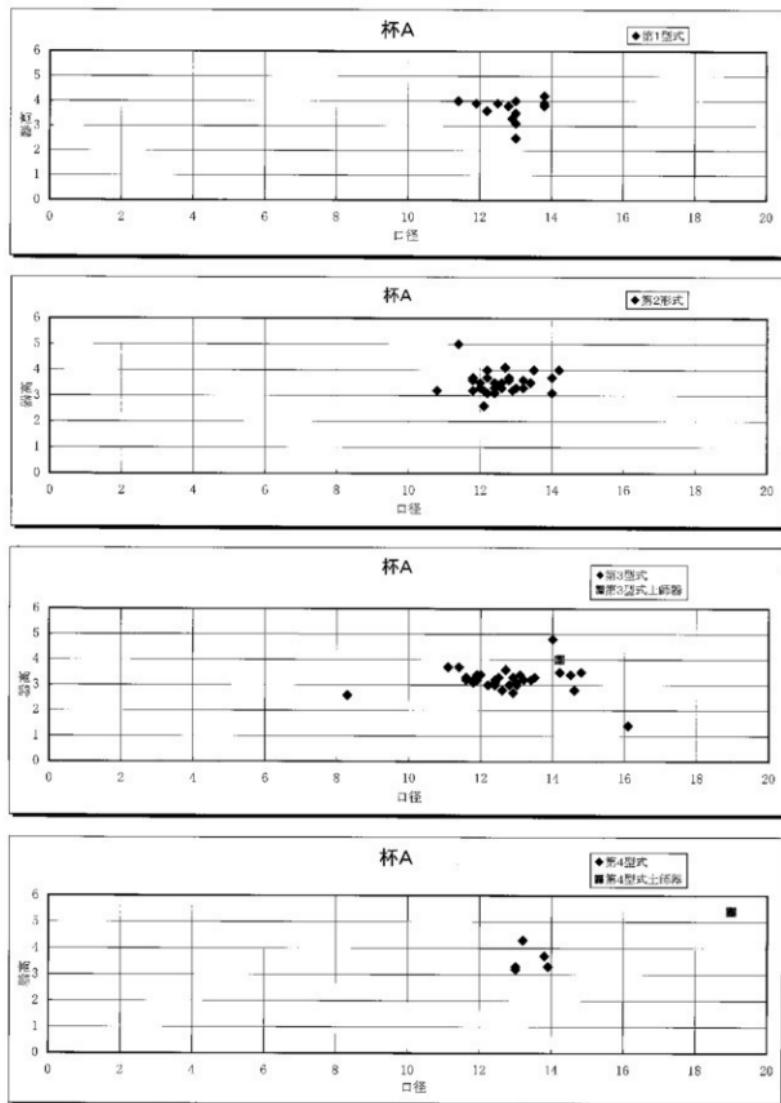
第3型式

『平城宮III型式』、『七日市』のVにあたると思われる。

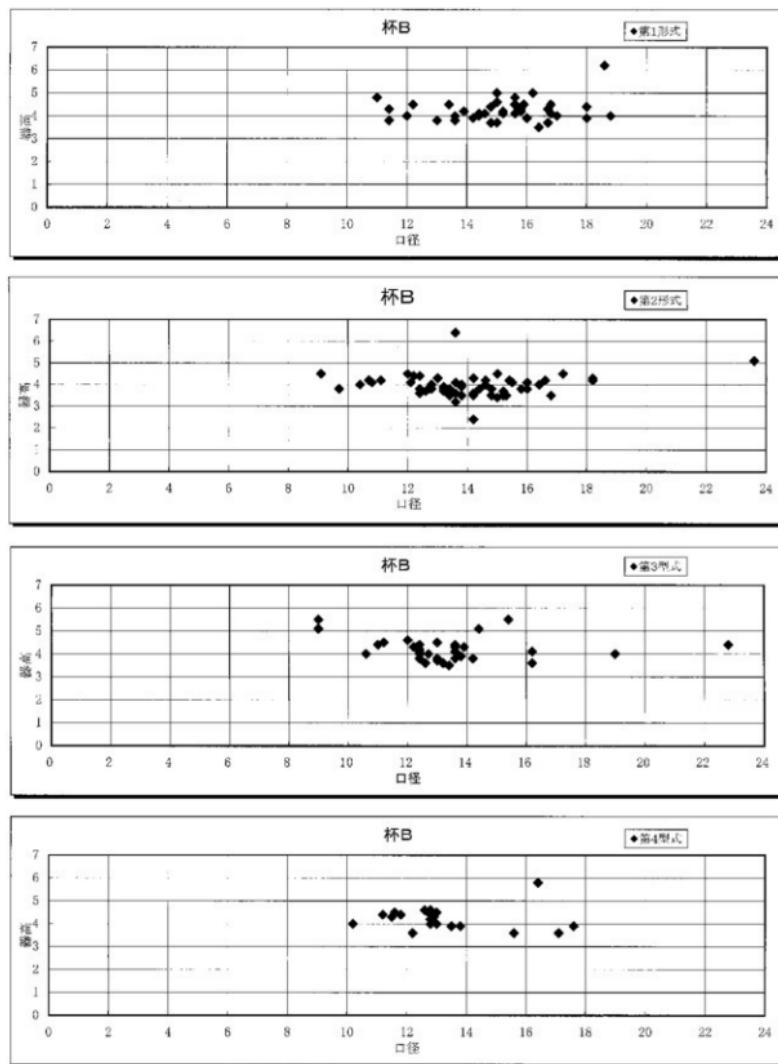
杯Aの口縁部と底部の境が一段と明確になり、底部は完全に平底となる。口縁部には、外面に小さな段を持った後極わずかに外湾する形態と、全体が緩やかに外湾する形態、さらに直線的に開く形態のものがみられる。口径的な区分からみると、径14cm前後のI、10cm以下のIIIが少なく、第2型式同様径11.5～13cm強のIIがその中心となる。

杯B蓋の天井部と口縁部境の形態には前型式同様、a形態とb形態がみられる。口縁端部は垂下が短く、外開きが主流となる。全体的に天井部が扁平になることと相俟って、器高はかなり低くなる。1210天井部に平坦面を持つようになるのもこの型式からである。杯Bは底体部境のヘラケズリ調整が行われなくなるため、全体的に丸味がなくなり角を持った形態となる。体部は直線的に開き、口縁部はb形態がその主流となる。脚部は短くなり外付きとなり、ほぼ水平接地する。口径により細分を行うと、口径15～16.5cmのI、10cm前後のIVは從前どおり細分することができるが、IIとIIIについては口径範囲の広い同一形態として捕らえざるをえない状況となる。ここにいたって、II・IIIを同一形態とする3形態細分に集約される。この3形態とも一法量で、IからIVに向って指數が増加する傾向は前2型式と同様である。

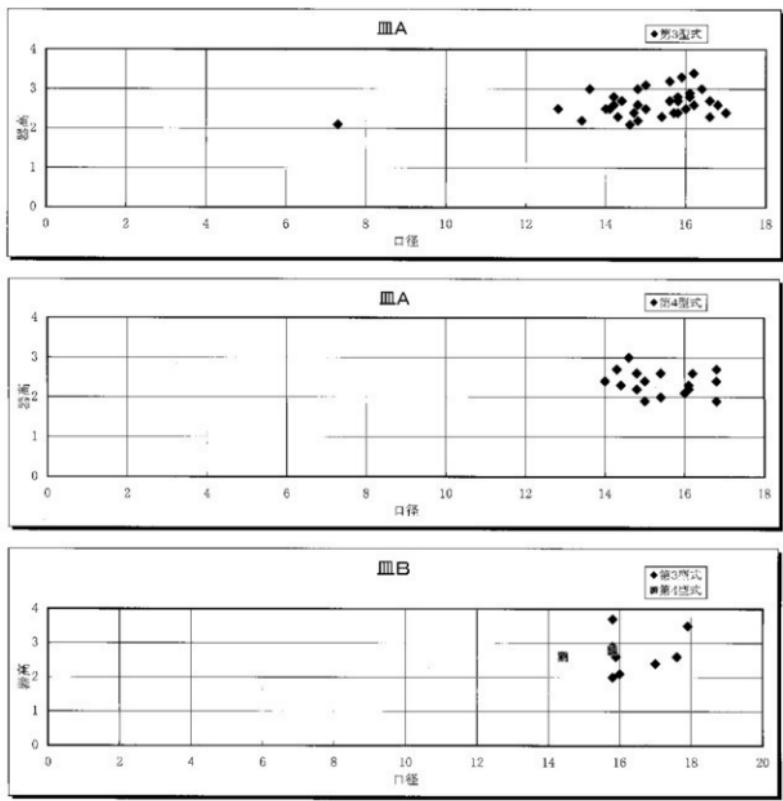
III Aには底体部境が丸味を持つa形態と、境の比較的明瞭なb形態がある。底部が下方に若干膨らむため、前者の形態のものは一段と丸味が強まる。杯Aの形態的特徴などから判断して、前者は型式的に古い要素が強く、後者はそれに継続するものと思われる。杯A同様、底体部境の器壁は内側に肥厚する。



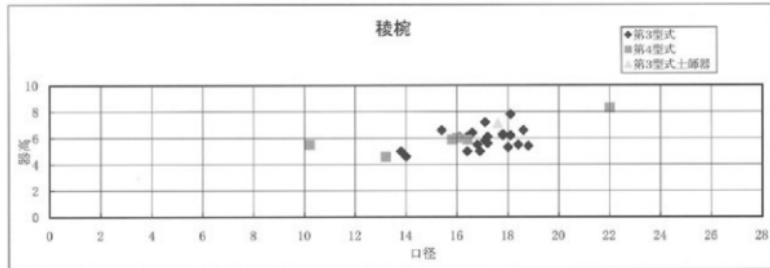
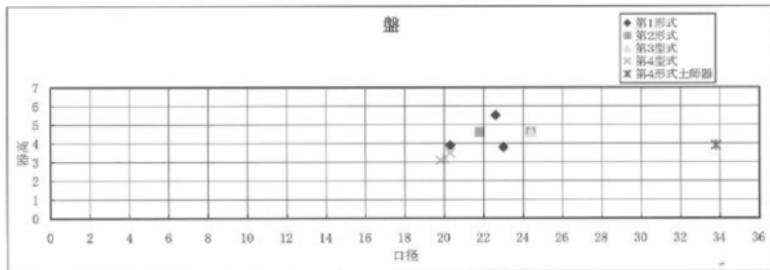
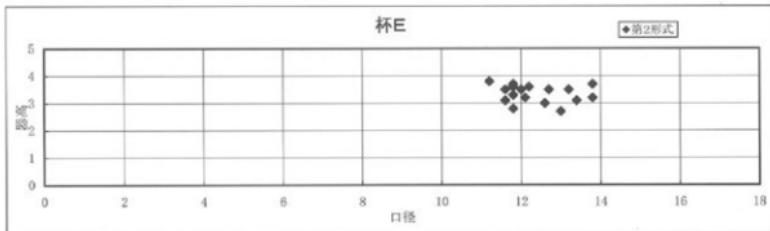
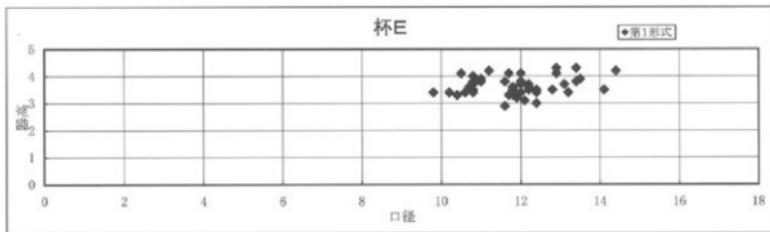
第3図 器高指數(1)



第4図 器高指数(2)



第5図 器高指数 (3)



第6図 器高指数(4)

第4型式

本遺跡における奈良時代の最終段階にあたり、「平城宮VI型式」、「七日市」のVIに想定することができる。

杯Aは点数は少なく、形態的な特徴を捕らえることがかなり困難となる。口縁部はほとんどが直線的に開くものとなる。口径的には直径13~14.5cmのI、11~12cmのII、10cm前後のIIIに分かれる。

杯B蓋の扁平度は著しく高くなり、口縁部付近まで天井部が広がるようになる。口縁部はb形態がその大勢を占めるところとなり、口縁端部は大きく外に開きながら短く垂下するかもしくは、丸く下方に肥厚する程度となる。よって、器高は第3型式よりさらに低くなり、天井内面が口縁端部からわずかに高まる程度となるものもみられる。さらに極少数であるが、つまみを持たない形態が出現するのもこの型式になってからである。杯Bの脚部は太短く、完全に底体部地に取り付けられる。よって、底体部地のコーナーが完全になくなるものも現れる。口縁部は直線的に開くため、b形態のみとなる。口径指数により細分を行うと、口径16~18cmのI、12~14cmの(II・III)、10cm前後のIVと3形態に分類されることは、第3型式と同様の状況にある。

皿Aは口縁部が直線的、あるいは外湾気味に開く。底体部地はまだ若干の丸味を残すものと完全に塊が明確化されるものがあるが、後者は極少数である。底部は完全に平底となる。

以上各型式の特徴をのべてきたが、杯Aの法量的な特徴づけは以下のとおりとなる。

①・口径的には、第4型式まではI・II・IIIの3類に区分される。

②・4型式を通じて、3類とも器高は3~4cmの間におさまっている。よって、時代が下がると伴に器高指数が減少するという傾向は認められない。また当然のことながら、口径が小さくなるに従って器高指数が増加する。

③・口径区分の変化を型式別にみると、第1型式から第2型式にかけて、口径が1cmあまり大きくなる傾向がみられる。この傾向は次の第3型式にも持続するが、第4型式になると再び縮小の状況にある。

④・口径区分による数量的な変化をみると、第1型式では3類ともほぼ均一的な数量関係にあるが、第2・第3型式となるとI・IIIの数量が減少し、IIが著しく増加する。そして第4型式ではIIが減り、Iが増加する。

杯Bは各形態とも1法量で納まり、IVの器高指数がもっとも高い状況にあることも第1型式から一貫した状態である。

A地区は井戸・溝・土塗等の大型で深い遺構が少ないため、遺物を出土した遺構は掘立柱建物址(SB3)・建物にならないPIT群・5号竪穴住居址・SD(溝)65・SD70のみであり、遺物の大多数は包含層からの出土である。

a. SB3出土の土器

SB3の柱穴掘方内より、杯B・椀B・稜挽蓋・盤蓋(いずれも須恵器)が出土している。

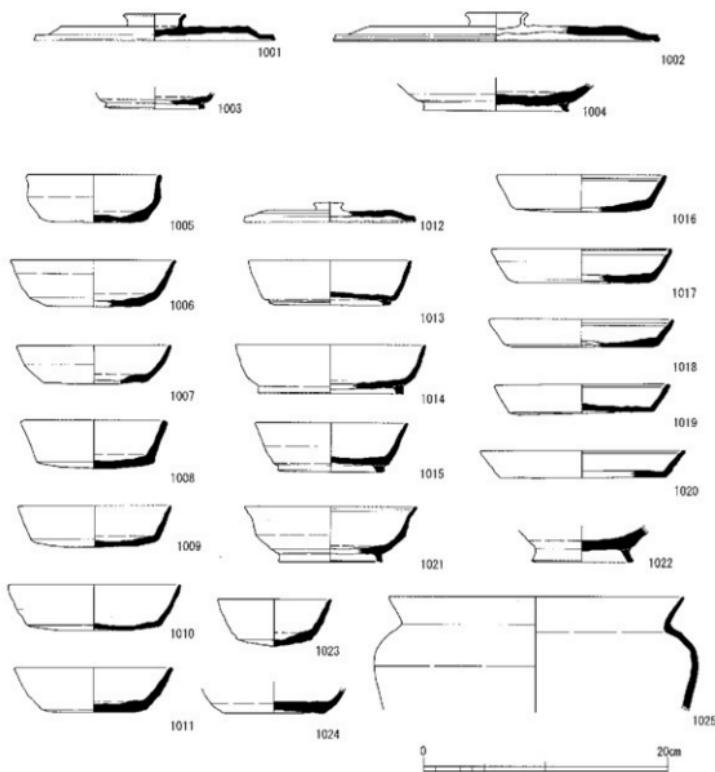
第3型式：杯B(1003)底部のみであるが、底径が約7.4cmとなるためIVに分類されるものである。

第4型式：稜挽蓋(1001)口縁部は段を持った後水平に開き、端部は短く垂下する。環状把手が付く。

盤蓋(1002) 端部は1001同様に水平に開き、端部も外方に開きながら短く垂下する。

杯B(1004) 脚部は底体部地の直ぐ内側に付く。脚部は細短く、わずかに外開きとなる。

b. 建物址にならない柱穴内出土の土器



第7図 柱穴内出土の土器

建物址にならない柱穴内から出土した土器のうち図化できたものはいずれも須恵器であり、杯A・杯E・杯蓋・杯B・皿A・稜枕・水瓶・壺Cがある。

第1型式：杯E（1005・1006・1023）1005はc形態のⅢ、1006はb形態のI、1023はa形態のⅢ類。

第2型式：杯E（1007・1024）b形態のIである。1024は口縁部が不明なため形態は不明。

杯A（1008・1009）いずれとも古相のⅡ類である。

杯B（1013・1014）口縁部はb形態で、器高指数的には1014はI類、1013はII類。

皿A（1016）底部が膨らむ形態である。

壺C（1025）肩部が大きく張り口縁部が「く」の字形に外反する。

第3型式：杯A（1010）口縁部が直線的に伸びるⅡ類である。

杯B（1015）口縁部はわずかなa形態となる。Ⅲ類。

皿A（1017・1018・1019）底部は平坦となるが、底体部境が丸味を持つ。

水瓶（1022）脚部径は約8.4cmと小さいが、外開きに高く伸びる。体部以上を欠損する。

第4型式：杯A（1011）底径の小さくなるI類。

杯B蓋（1012）天頂部を欠損する。口縁端部が軽く垂下する。

皿A（1020）その底体部境も明確な稜となる。

c. S D65出土の土器

須恵器がほとんどを占める。器種としては杯A・杯B・同蓋・盤蓋・皿A・鉢D・鉢・椀B・壺K・壺D・高杯・円面鏡等である。さらに、杯A 2点をはじめ計4点の墨書き土器も出土している。また、7世紀の杯Hも2点出土しているため、この項において記述するものとする。

7世紀：杯II（1031・1032）口径は小さく、器高は高い。体部は丸味を持ち、口縁部は外反する。

第1型式：杯E（1033・1034）口縁部はc形態となり、Ⅱ類に分類される。

杯B（1042）口縁部はb形態。Ⅱ類に属する。

鉢（1048）底部から肩部へと錐形に移行し、肩部が強まる。肩部外面には沈線が一条巡る。

鉢（1049）口縁部は大きく外反し、縁部は内傾する狭い平坦面となる。

壺K（1052）底径が比較的大きく、体部もわずかに内湾しながら肩部から続く。

壺D（1053）頸部は短く、口縁は口広の形態となる。脚部は断面が若干逆台形で内面接地。

壺C（1054）口縁部は短く直立する。肩部最大径はその中央にあり、底部径も大きい。

第2型式：杯E（1035・1036）1035はc形態の口縁形態を残し、I類に属する。1036はa形態から連続する形態であり、Ⅱ類となる。

杯蓋（1040・1041）1040はⅣ類となる。1041は（Ⅱ・Ⅲ）類である。

杯B（1043）a形態となるⅡ類に属する。

椀B（1050）底体部境が丸味を持ち、長く外開きの脚部が付く。体部も若干内湾する。

第3型式：杯A（1037・1038）1037は口縁部が外反するI類、1038は直線的に開くⅡ類である。

杯蓋（1039）口縁端部が著しく外開きとなる（Ⅱ・Ⅲ）類の蓋である。

皿A（1045）口縁部は直線的に外反し、底部も落ち込みがない。底体部境が明確である。

鉢D（1047）体部は直線的に開く。口縁部は直線的に開き、片口を作る。

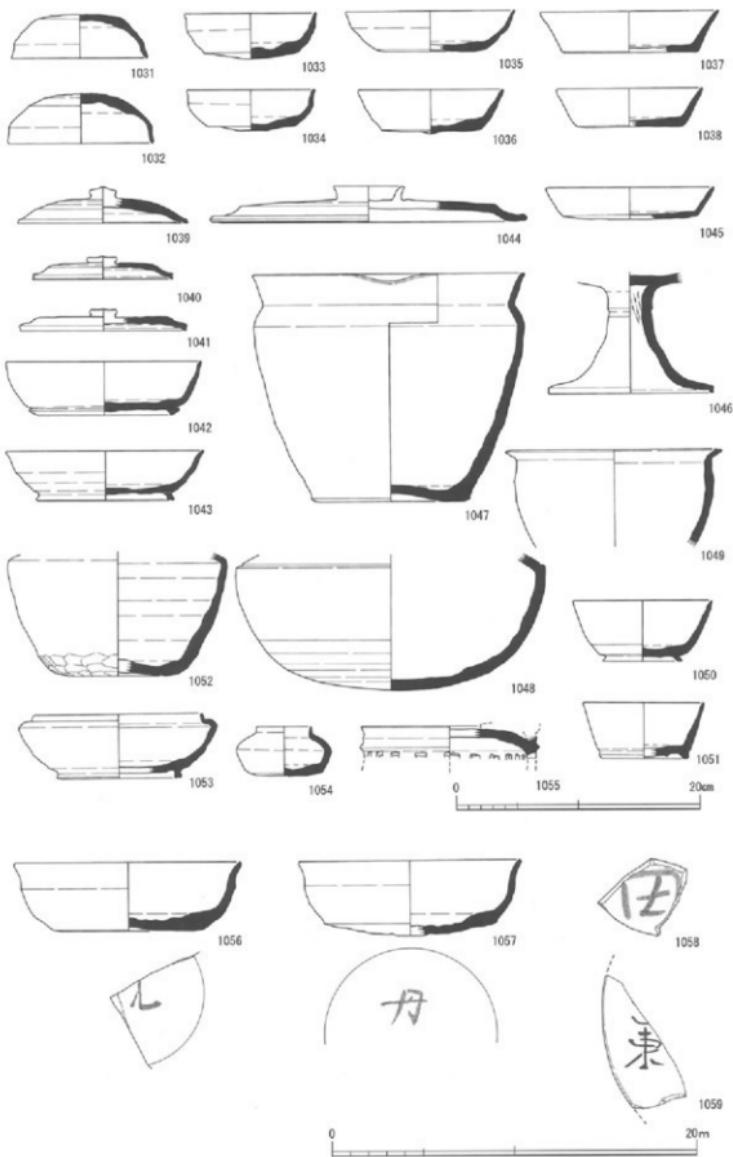
第4型式：盤蓋（1044）口縁部は段を持って水平に開く。口縁端部はわずかに肥厚して丸くおさまる。

円面鏡（1055）陸から海へと緩やかに移行する。堤の外側は2段に外反し、脚部とは稜によって境をなす。脚部には細い長方形の透かしが穿たれる。

墨書き土器

第1型式：杯E（1056・1057）いずれとも口縁部はc形態であり、I類に属する。1057の底部外面には「丹」の墨書きが認められ、さらに一文字あったものと思われるが、欠損する。1056は大半を欠損するため判読はできない。

1058・1059は破片のため器種は判断できないが、1058には「田」の、1059には「東」の墨書きが読める。ただ、いずれも上下を欠損するため、文字の意味は不明である。



第8図 S D65出土の土器

d. S D70出土の土器

出土土器の図化できたものは、須恵器杯A、皿A、杯B、鉢Dの5点である。

第2型式：杯A（1060）口縁部はb形態であり、古相のII類に属する。

杯B（1062・1063）いずれも口縁部はb形態となる。1062皿類に、1063はIV類に属する。

杯B蓋（1012）天頂部を欠損する。口縁端部が極度に垂下する。

皿A（1020）その底体部境も明確な稜となる。

第3型式：皿A（1061）底体部境にわずかに丸味を残す。

鉢D（1064）肩の張りは小さく、口縁部は比較的緩やかに外反する。

e. 包含層出土の土器

遺構からの上器の出土は少ないが、包含層内からは多量の土器が出土している。器種的にも豊富で、杯、皿、盤、斜楕、碗A・B・C、鉢A・D・F・その他鉢類、壺蓋、壺A・B・C・E・K・L・M・その他の壺類、平瓶、高杯、壺A・B、瓶等が出土している。また、墨書き器も多く出土している。

第1型式：杯E（1065～1084）1082～1084はa形態のIII類である。1068・1071はb形態のI類であり、

1065・1066・1069・1070はc形態となる1072～1074・1077～1079はb形態のII類となる。

1076・1080はc形態のIII類・1081はb形態のIII類となる。

杯A（1085～1093）前型式の影響を残し、1085・1086がI類で他はII類となる。1085・1087・1089・1092の口縁部がa形態となる。1093は精製品である。

盤蓋（1147）天井部が丸く、器高も高い。端部は小さく屈曲した後短く垂下し、外面に狭い垂直面をなす。端部上端にはしっかりとした稜をもつ。

盤B（1148・1156）1148は口縁部がa形態となり、脚部は短いが外開きに付く。1156は長い脚部が垂下し、b形態に口縁部が長く立ち上がる。

杯G蓋（1159・1160）两者とも器高が低く扁平で、端部は屈曲せず、折り返して内側にかえりを作り出している。かえりは端部以下には垂下せず、その内側で納まる。

杯G（1161）底部はわずかに三角形となり、口縁部は大きく内湾し、底体部境が肥厚する。

碗A（1162）口縁が外反気味に開き、底体部境を著しく丸く作る。

杯B壺（1163～1166・1176）1163～1165は杯B I類に、1166はIII類に、1176はIV類。

杯B（1167～1175・1177）1168・1169・1174の口縁部はa形態、他はb形態となる。口径的には1167が唯一I類、1168～1175がII類。IV類は1177のみ。

碗A（1263・1264）1263は底部外面を不定方向にヘラケズリし、一段階占い型式となるか。

壺蓋（1277）高く大型の宝珠形つまみが付く。口縁部は直角に長く垂下する。

壺A（1278）口縁部は短く直立し、肩部は体部の中央で大きく張る。底部に脚部が付く。

壺K（1281～1283・1287）1281の口縁部外には沈線が二条巡り、肩部には一条がみえる。脚部は内面接続する。1282は口縁部が短く、頭部の径は大きい。頭部外面には退化した沈線がみられる。

壺C（1295・1296）1295は脚部を持たない。1296は扁平な算盤玉型となり、高台を持つ。

壺E（1297）体部は底部に向かって細くなる。平底の底部には短く垂下する脚部が付く。

高杯（1302・1303）杯部は杯Aの第1型式と同形態。脚柱部は短く、裾は水平に広がる。

壺A（1311）口縁部外には二条一对による三帯の沈線帯により四分割され、最上帯と中央帯

との間に、縦方向の櫛目が施される。

第2型式：杯E（1067・1075）1067はa形態のⅢ類、1075はc形態でⅡ類である。

杯A（1094～1100）1094～1100は平底の新相を強く保持する。1093・1095・1097・1100はa形態で他はb形態であり、そのすべてがⅡ類となる。

盤B（1150・1151）口縁部はわずかにa形態の特徴を残す。

杯B蓋（1178～1184・1202）1178～1180はI類とセットになる。1181～1183はII類に伴い、1184はIII類に、1202はIV類の蓋となる。

杯B（1185～1201・1203）1185・1186・1189～1201はa形態。IV類にはa形態の口縁部を持つものが確認されていない。1185～1187がI類、1188～1199がIII類、1200・1201～1203がIV類となる。このうち、1188・1192・1196・1201の脚部は第1型式の特徴を強く残す。

土器器杯B（1248）唯一の出土例である。須恵器I類よりかなり大型となる。口縁部はa形態である。口縁部外面は3分の2まで横方向のヘラミガキ。内面には一段の斜放射状暗紋と、見込みに螺旋状暗紋が施される。著しい精製品である。

碗C（1265）全体的に丸味を帯びる。脚部は水平接地する。

碗B（1268・1269）口縁端部が小さく外反する。脚部は外開きとなり、水平接地する。

鉢（1272）頸部は小さくくびれ、「く」の字に外反する口縁部には片口を作りだす。

鉢F（1275）体部は緩やかに内湾しながら開く。円盤状となる底部外側には刺突文が付く。

壺蓋（1276）杯Aを伏せたような形状。天井部は平坦で、口縁端部は揃んで内傾する。

壺A（1279）口縁部は短く直立し、端部が小さく外反する。

壺K（1284・1285）1284の肩部上部は球形となる。1285の口縁部は片口状となる。

壺（1291）口縁部は「く」の字に外反し、肩部は撫で肩となる。

壺E（1298）肩部径に対する口径が大きくなる。

平瓶（1301）天井部に瓣形の把手が付くと思われる。口縁部には一条の沈線が巡る

高杯（1304・1305）脚裾部はラッパ状に開き、中央部外側には一条の沈線が巡る。

壺B（1306）口縁部は内外面に小さな段を持つ。

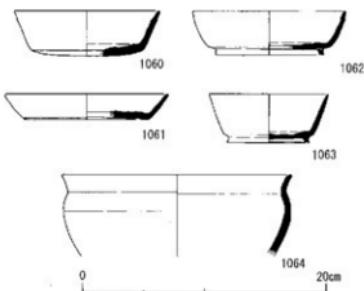
瓶（1314）底部径の広いバケツ形となる。中央部や下方に扁平な把手が一対付く。

第3型式：杯A（1101～1112）1101～1103・1104・1110の口縁部はa形態、1108がIII類の他はII類。

皿（1117～1138）1117～1125はa形態。1135～1138はb形態であり、形式的に次型式への萌芽が見える。1117～1119・1121・1122・1125・1135・1136・1138は口縁端部の内側に沈線が一条巡る。

皿B（1144・1145）皿Aのa形態の杯部であり、1144の口縁端部内側に一条の沈線。

盤B（1149）口縁部は直線的に開く。底体部境は斜めとなり、太い脚部が垂直する。



第9図 S D70内出土の上器

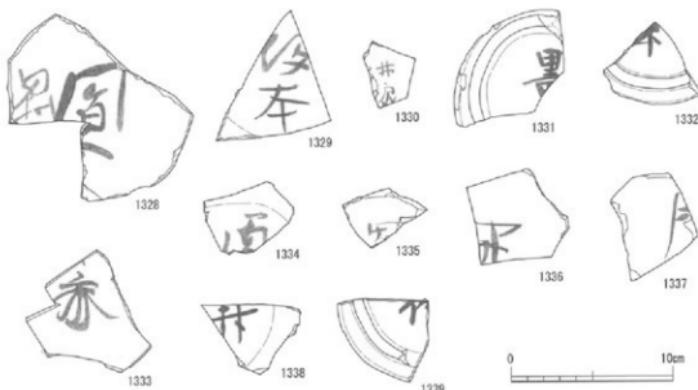
- 杯B蓋（1204～1210・1227）1204はI類に、1205～1210は（II・III）類に、1227はIV類。
- 杯B（1211～1226）口徑的にはI類は1211・1212、（II・III）類は1213～1226である。1216は脚部の形態から、また1226・1228は口縁部の特徴から前型式の特徴を最もよく残す。1216・1223・1226・1228はa形態の口縁部となるが、大勢はb形態である。
- 稜椀蓋（1249）外反する環状把手が付く。口縁部は緩やかに湾曲し、端部は長く垂下する。
- 稜椀（1251～1258）すべての口縁端部内面に一条の沈線が巡る。1255の体部外面には籠撚きによる斜放射状文が施される。口径により19cm程度の大型（1251）と、16cm前後の中型（1252・1253・1255～1258）、14cmの小型（1254）に細分できる。大型・小型品は各1点づつであり、中型品が主流をしめる。
- 土師質棱椀（1250）遺存状況が悪いため調整等はまったく不明。口縁端部内面に一条の沈線。
- 椀C（1266）口縁部は直線的に開き、端部が小さく外反する。
- 鉢A（1270）口縁部の内反は第1型式以上となり、端部は丸く納まる。
- 鉢D（1274）肩部は口徑程度に張り出す。底部は大きな平底となる。
- 壺A（1280）比較的長目の口縁部はわずかに内傾する。頭・体部は直線的となり、肩が張る。
- 壺L（1286）口縁端部は上下に肥厚し、その外面は外傾する平坦面となる。
- 壺M（1288・1289・1290）1288は体部最大径の肩部が体部の中央に付き、1289はやや上方に付く。底部は平底で、短い脚部が付く。1290は高台状の底部となる。
- 鉢（1292）口縁部は「く」の字に外反する。肩部は頸部の直下にある。
- 壺（1293・1294）1293は肩がほとんど張らず、1294は大きく内湾しながら開く。底部は平底である。壺N等の肩部となる可能性が高い。
- 壺E（1299）体部は大きく開き、口径が大きい。
- 壺B（1307・1308）口縁端部は狭い平坦面となる。1308の頸部は少し落ち込む。
- 第4型式：杯A（1113～1116）数量的にかなり少なく、口縁部はt形態となる。1115のみII類となる。
- 皿（1139～1143）第3型式と比べると相対的に扁平となる。1143以外は口縁端部内側に沈線が一条巡る。
- 皿B（1146）底体部境の丸味はなくなり、そのすぐ内側で脚部が垂下して付く。
- 盤B（1153）脚部が付くと思われる箇所に、突堤状の隆起が水平に付く。
- 杯B蓋（1229～1235・1246・1247）1229がI類、1230～1235は（II・III）類となり、1246・1247はIV類。
- 杯B（1236～1245・1228）1236～1238はI類となり、1239～1245は（II・III）類となる。口縁部はb形態のみで、a形態は存在していない。
- 稜椀（1259～1262）体部下半の脚らみがなくなり、口縁部のみが外湾する。そのために稜線が不明確となり、口縁部の開きも大きくなる。口縁端部内面に一条の沈線が巡る。
- 椀C（1267）口縁部は直線的に大きく開く。脚部は底体部境付近から短く垂下する。
- 壺B（1309・1310・1312）口縁端部は下方に小さく肥厚し、外面に外傾する狭い平坦面をなす。1310は口縁端部が内側に小さく肥厚する。1312は肩部最大径が下方へ移る。この最大径直下に、一对の把手が付いていたものと思われる。

包含層内からは、25点の墨書き土器が出土している。いずれも須恵器であり、器種としては杯A、杯蓋、杯B、盤蓋、鉢類、皿A、稜梳蓋、接椀さらにはそれらの細片である。

第1型式：杯蓋（1316）杯1類に伴う。天井部に「今井」の墨書きがあり、さらに一字分の墨痕あり。

第2型式：杯A（1318）II類の古相に属する。底部中央に「今井」の墨書きがみられる。

第3型式：杯B（1319・1320）1319は（II・III）類に属する。底部外面に墨書きが認められるが、文字は



第10図 墨書き土器

不明である。1320も（II・III）類に属する。底部外面の中央部に二文字を確認できる。上は「復」であり、下の字は「西」冠までは判読できる。

盤蓋（1317）天井部中央寄りに文字がみられるが、判読できない。

鉢（1321）体部下半以下である。底部外面に「井」の墨書きある。

皿A（1322）底部外面の底体部境付近に「井家」の墨書きがある。

接椀（1327）底部外面の中央部に「□井」の墨書きがあるが、文字の下半以下を欠損するため、文字の連続性は不明である。

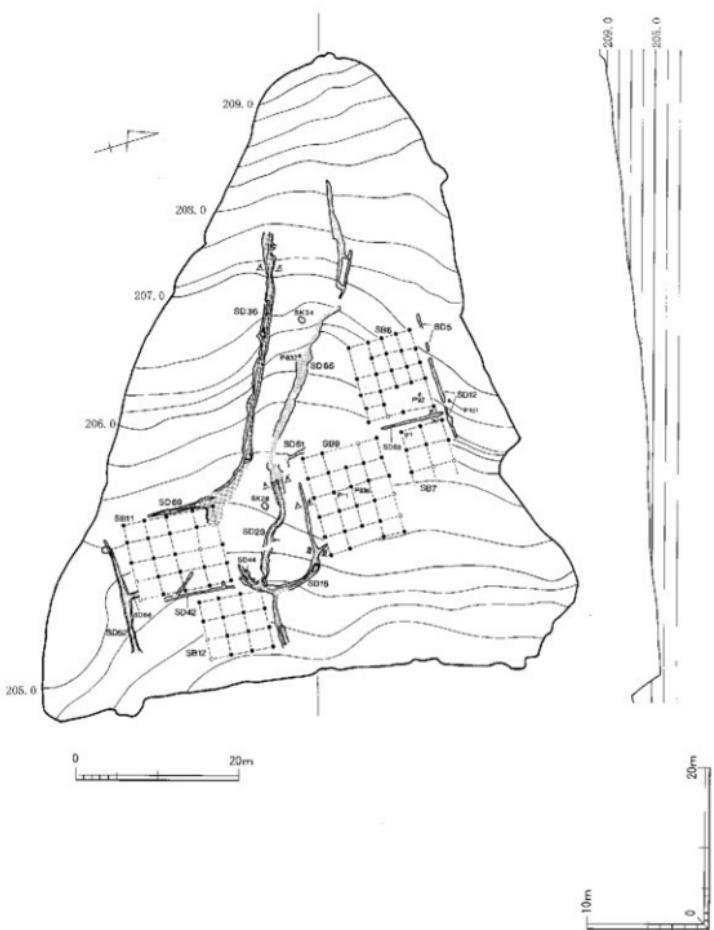
第4型式：杯蓋（1315）つまみの直ぐ下方に「井」の墨書きがある。（II・III）類の蓋である。

皿A（1323～1325）1323は底部外面の底体部境付近に「伎」の文字がみられる。文字の上方が欠損するため、一文字かどうかは判断できない。1324は底部外面の中央寄りに墨書きがみられるが判読できない。1325は底部外面中央に墨書きがあるものの、文字の大半が欠損するため正確な文字の判読ができない。

形式不明：接椀蓋（1326）つまみ部分のみのため、型式は不明である。天井部外面の環状把手内に「井」の墨書きがある。

器種不明細片：1328はかなり左側に「田村」、右側には大型の則天文字が書かれるが判読できない。1329は上の文字は不明であるが、下の文字は「□本」であろうか。1330は上が「井□」であるが、下は判読できない。1333はその上にも筆の当たりがあるためもう一文字以上あるものと思われるが判読不能である。1338は「村」と判読できる。133～1337・1339は墨痕は認められるものの、欠損のため判読できないが、1333・1334・1337は則天文字である。

第3節 平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物



第11図 I期の遺構

1. 遺構(図版3)

平安時代から鎌倉時代に該当する遺構は、柱穴・溝がある。これらの遺構のうち、柱穴は600個以上を数える。柱穴は密集し、複雑に重複した状態で確認されたため、掘立柱建物として識別できたのが9棟である。同地区的地形は、西を高位として東側に展開する谷部が形成され、その北側と南側には尾根が展開している。

北側の尾根部分は比較的緩やかであるのに対し、南側のそれは、かなり傾斜をもつ。同地区的西端と東端では4m以上の高低差がある。

このような傾斜地上に掘立柱建物が築かれているため、谷部には大規模な排水路を掘り、建物周囲には雨落ち溝のような小溝を設けるなど、排水機能に配慮している。

これらの遺構群は、重複関係・出土遺物および掘立柱建物については、建物方向から判断してⅠ期・Ⅱ期の2時期に大別した。

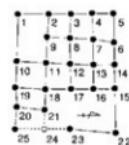
I期の遺構

5棟の掘立柱建物と13条の溝からなる。

掘立柱建物は、調査区の中央を東西に流れる溝、SD65・SD36をはさんだ北側と南側に分かれて占地している。北側に位置する掘立柱建物は、SB6・SB7・SB9で桁行方向を東西方向にもつ。南側に位置する掘立柱建物、SB11・SB12はほぼ真北に桁行をもつ。

SB6

調査区の中央部北寄りに位置する。消滅した柱穴を含め、25個の柱穴で構成される4間×4間の建物と推定される。梁行(南北方向)で約7.8m、桁行(東西方向)で9.8mを測る。桁行のP1とP10間、P15とP22の間、P22とP23の間および桁行のP17とP23の間の柱穴が確認できず、建物の南西隅と北東隅に土間と考えられる空間をもつ建物と理解している。柱間は梁行で、1.5m～2.5m、桁行は平均で1.7m～4mである。柱の掘方は径25cm～30cmの円形を呈し、確認面からの深さは20cm～25cmと浅い。棟軸方位は、ほぼ東西方向を示す。



SB7

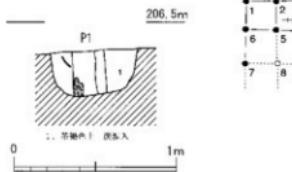
調査区の中央部北寄りに位置し、SD53をはさんで西側でSB6と隣接する。

7個以上の柱穴で構成される2間×2間以上の建物と推定される。

梁行(南北方向)で約5.0m、桁行(東西方向)で5.2m以上を測る。柱間は梁行が2.5m前後、桁行が2.2m～2.8mである。

柱穴の掘方は、径25cm～50cmの円形である。

棟軸方位は、ほぼ東西方向を示す。



第12図 P1

S B 9

調査区の中央部南寄りに位置し、北と西北部でそれぞれ S B 6・S B 7 に隣接する。南側では、本建物の排水溝の可能性がある S D 18 と隣接する。消滅あるいは未確認の柱穴を含め28個の柱穴で構成される 3 間 × 5 間の建物と推定される。梁行（南北方向）約 9.3m、桁行約 12.4m の大型の建物である。柱間は 梁行が 2.3m～5.0m、桁行が 2.5m 前後である。柱穴の掘方は、径 40cm～60cm の円形である。棟軸方位はほぼ東西方向を示す。



S B 11

調査区南東隅に位置する。西側・南側・東側には、本建物の排水溝あるいは区割り溝の可能性がある S D 69・S D 52・S D 42 が隣接する。消滅あるいは未確認の柱穴を含め 25 個の柱穴で構成される 4 間 × 4 間の総柱建物と推定される。梁行（東西方向）約 9.3m、桁行（南北方向）約 11.2m の大型の建物である。柱間は 梁行が 2.1m～2.3m、桁行が 2.5m～3.1m である。柱穴の掘方は、径 30cm～50cm の円形を呈する。

棟軸方位は、N 5° E を示す。



S B 12

調査区の南東隅に位置する。西側は S D 42 を境にして S B 11 と隣接する。消滅あるいは未確認の柱穴を含め 16 個の柱穴で構成される、3 間 × 3 間の総柱建物と推定される。梁行（東西方向）7.3m、桁行（南北方向）9.3m の小型の建物である。柱間は 梁行が 2.0m～2.5m、桁行が 2.8m～3.5m である。柱穴の掘方は、径 25cm～30cm の円形を呈する。棟軸方位は N 5° E を示す。



S D 23・65

調査区の中央部を西から東へ流れる溝である。調査区の西から東へ展開する谷部の中央を流れる溝である。調査の都合で、溝名を分けたが、両溝は同一の溝である。溝の西端は標高 208m 付近から始まり、標高 205.5m 付近でいったん途切れ、S D 23 に繋がる。S D 23 の東端は 204.5m 付近まで続く。溝の東端と西端では、約 3.5m の比高差がある。

S D 65 は溝幅 35cm～50cm 前後で、確認面からの深さは 20cm～45cm を測り、高位に行くほど深くなっている。溝内には長さ 70cm～1m、幅 20cm 前後、厚さ 2cm の板材を、径 3cm、長さ 30cm 前後の丸杭で固定した護岸施設が行われている。

S D 23 は、幅 1.4m 前後、確認面からの深さは 35cm 前後と浅い。両溝は調査区の中央を高位から低位に向けて流れ、溝の規模も大きく、また S D 65 は板材による護岸施設が施されているなど、同地区の主要な排水路の機能を有する溝と考えられる。

S D 5・12

調査区の北側を東西に流れる溝である。調査の都合で両溝名を分けたが、S D 5 と S D 12 は同一の溝

である。溝幅は20cm~40cm、深さは最深部で20cm前後と浅い。

S B 6・7の北辺と1.2mの間隔をあけ、ほぼ平行に流れる。

S B 6・7の雨落ち溝と考えられる。

S D18

調査区の東側を東西方向に流れる溝である。

溝の西端は、溝幅40cm、確認面からの深さ25cmで、鋭角に掘り込まれている。

溝の東端は、S D23とつながっている。

溝幅は75cm、確認面からの深さは15cmである。溝の西側部分は、S B 9の南辺と、ほぼ1mの間隔をおいてほぼ平行に流れている。

S B 9の雨落ち溝と考えられる。

S D36

調査区の南側斜面の裾部を東西方向に流れる溝である。溝の東端は、S D69と接する。



第13図 SD65

S D42

調査区の南東部を南北方向に流れる溝である。

溝幅は30cm~50cmで、確認面からの深さは25cm前後である。

S B11の東辺に50cm前後の間隔で平行して流れしており、溝の一部は枝分かれして同構造内に延びている。

S B11の雨落ち溝と考えられる。

SD52

調査区の南東隅に位置する東西方向に流れる溝である。

溝幅は30cm~50cm、深さは20cmである。

溝は1m~2.5mの間隔で、S B11の南辺に沿うように掘られ、ほぼ中央でS B11内に延びる溝、S D66につながる。同建物に伴う排水路と考えられる。

SD53

調査区北側に位置する、南北方向に流れる溝である。

S B6の東辺とS B7西辺の間に位置し、あるいは両建物を区切る溝の可能性がある。

溝幅は50cm、確認面からの深さは、10cm前後と浅い。

SD59

調査区の南東隅に位置する南北方向に流れる溝である。

溝の北端はS D36とつながっている。S B11西辺と近接しており、同建物に伴う雨落ち溝と考えられる。

溝幅は40cm~70cm、深さは20cm前後である。

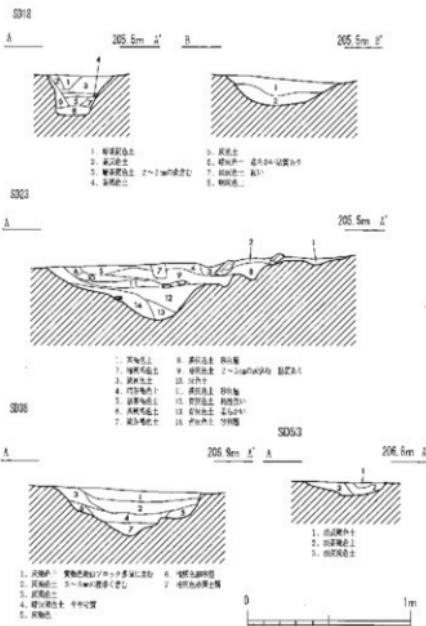
II期の遺構

柱穴、雨落ち溝などの排水溝6条、土坑2基の遺構が確認された。

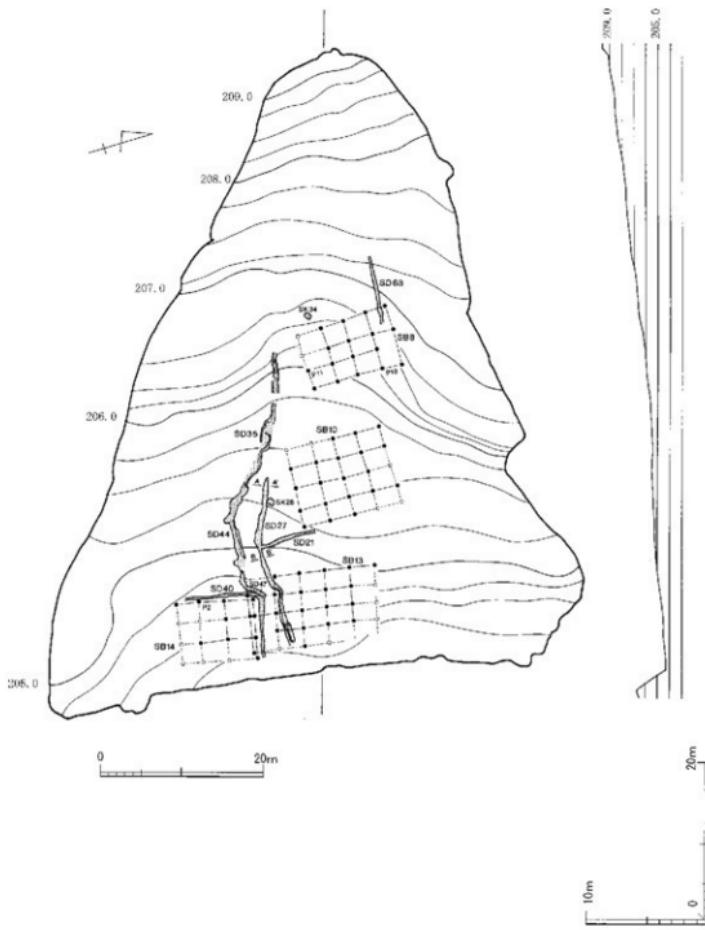
柱穴のうち、この時期に相当する掘立柱建物は4棟識別できた。

建物の占地をみると、調査区の中央を東西に展開する谷部に集中しており、前代とは異なった占地状況である。いずれも棟軸方位を南北方向にもつ総柱建物で、建物の構造も前代とは異なる様相を示す。建物の棟軸方位をみると、ほぼ北を示す一群（S B8・10）と東へ振る一群（S B13・14）に分けることが可能である。しかし直接両建物群間の重複関係がないことや出土遺物に時期差が認められないことから、両建物群の新旧関係は不明である。また、棟軸方位を東へ振るS B13・14についても、身舎が重なりあっており、時期差を認めることが可能である。

溝は谷部に沿って流れる排水路の機能を持つ大型の溝（S D35・44）と建物の排水に伴う小溝があり、その構成は前代と同じである。しかし、当地区内の排水の基幹となる溝内には前代で認められた護岸の施設はない。



第14図 SD18・23・36・59



第15図 II期の遺構

土坑は2基確認されている。いずれも短軸50cm・長軸1m未満の楕円形の土坑で、その機能は明らかではない。

S B 8

調査区の中央に位置し、掘立柱建物群の中では、最も高位に位置する。

消滅あるいは確認できなかった柱穴を含め、19個の柱穴で構成される

3間×4間の建物と推定される。

梁行き7.5m、桁行11.2mを測る。

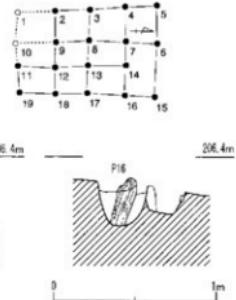
柱間は桁行が2.5m～3.0m、梁行が2.0m～2.5mで

ある。

柱穴掘方は径25cm～30cmの円形を呈し、確認面から
の深さは10cm～15cm前後である。

P11・16では径15cm前後の柱根が遺存していた。

棟軸方位はN 1° Eを示す。



第16図 S B 8 柱穴

S B 10

調査区の東寄りに位置する。消滅あるいは確認できなかった柱穴を含
め25個の柱穴で構成される4間×4間の純柱建物と推定される。

梁行10.0m、桁行12.5mを測る。柱間は桁行が2.5m～3.0m、梁行が
2.5mである。柱穴掘方は径30cm～40cmの円形を呈する。

棟軸方位は、N 3° Eを示す。



S B 13

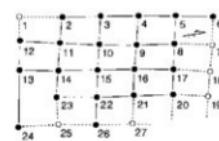
調査区の東端に位置する。建物の南側でS B 14と身合が重なる。

消滅あるいは未確認の柱穴を含め27個以上の柱穴で構成される4
間×5間ほどの建物と推定される。

梁行8.8m、桁行15.8m前後の大型の建物である。

柱穴の掘方は径30cm前後の円形を呈する。

棟軸方位はN 10° Eを示す。



S B 14

調査区の南東隅に位置する。建物の北側でS B 13と身合が重なる。消滅ある
いは未確認の柱穴を含め16個の柱穴で構成される純柱建物と推定される。

梁行7.2m、桁行9.4前後の小型の建物である。柱間は、桁行が2.8m～3.5m、
梁行が1.6m～2.0mである。

柱穴掘方は径25cm～30cmの円形を呈する。

棟軸方位はN 12° Eを示す。

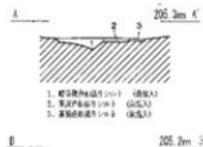


S D 21

調査区の東寄りに位置する南北方向に流れる溝である。

溝の北端は、S B10の南東隅に近接しており、同建物に伴う溝と考えられる。

溝幅は30cm前後と狭く、確認面からの深さも10cm前後と浅い。



S D 27

調査区の東側を東西方向に流れる溝である。溝の中程で南北方向に流れるS D21とつながっている。

溝幅は50cm前後で、確認面からの深さは、5cm～15cmである。



第17図 S D 27川土の土器

S D 35・44・47

調査区南側の谷部と緩斜面の境に沿って東西方向に流れる大型の溝である。

調査の都合で溝名を分けたが、連続した1条の溝である。溝の北端はL字型にはしのS D40とつながっている。溝幅は80cm～1.0m、確認面からの深さは30cm前後である。

S D 40

調査区の南東隅に位置し、S B14の西辺と北辺を囲むようにL字型に屈曲した溝である。溝の北西隅でS D44とつながる。溝幅30cm～60cmで、確認面からの深さは30cm前後である。

S D 63

調査区の西寄りに位置し、東西方向に流れる溝である。溝の中では最も高位にある。溝幅は30cm前後で、確認面からの深さは、20cm前後である。

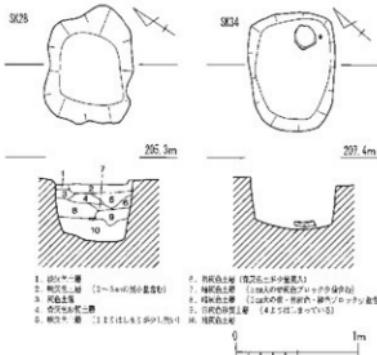
S K 28

調査区の東寄りに位置する。

南側はS D27と接し、北側はS B10が近接する。東側にはS B13が近接する。

長軸方向95cm、短軸方向65cm、確認面からの深さ50cmを測る。

平面形は不整な楕円形を呈する。



S K 34

調査区の中央部に位置する。

長軸方向97cm、短軸方向70cm、確認面からの深さは、42cmを測る。

平面形は隅丸長方形を呈する。

第18図 S K 28・34

表2. 出土土器分類表

須恵器

規A1 (へら切り)

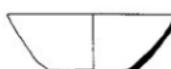
分類	基準	細分類	基準	土器No.	口径	器高	底径	底／口	高／口
I類	突出した平高台 内底部の境に弱い段差	a 直線的立ち上がり		2060	13.4	5	5.8	0.43	0.37
				2061	15.8	5.4	7.6	0.48	0.34
				2130	13.3	4.3	6.9	0.52	0.32
				2455	13	5.2	7.5	0.58	0.4
			平均値	13.9	5	7	0.5	0.36	



b 体部内側、口縁端反	2008	12.8	4.2	7.2	0.56	0.33
	2093	13.8	4.7	6.5	0.47	0.34
	2094	14.3	5.1	7.7	0.54	0.36
	平均値	13.6	4.7	7.1	0.52	0.34



I類	突出した平高台 内底部の境に弱い段差	a 直線的立ち上がり	2058	14	5.4	7.2	0.51	0.39
			2129	13.2	4.9	7	0.53	0.37
			2131	14.3	4.9	7	0.49	0.34
			2456	14	5.6	7.8	0.56	0.4
			2053	13.8	4.1	7	0.51	0.3
			2054	14.1	4.1	7	0.5	0.39
			2055	13.2	4.4	6.5	0.46	0.33
		平均値	13.8	4.8	7.1	0.51	0.35	



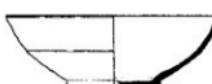
b 体部内側、口縁端反	2011	14.8	5.0	7.1	0.48	0.38
	2057	14	4.8	6.4	0.46	0.34
	平均値	5.2	6.8	0.47	0.36	



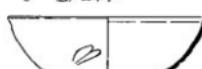
II類	退化した平高台 内底部の境に弱い段差	2454	12.2	3.9	5.9	0.48	0.32
		2133	14	5	5.5	0.39	0.36



分類	基準	細分類	基準	土器No.	口径	器高	底径	底／口	高／口
I	突出した平高台。 内底部の境に弱い段差	a 底／口径大		2012	14.1	4.8	6.8	0.48	0.34
				2059	13.1	4.9	6.8	0.44	0.37
				2132	12.7	4.5	5.5	0.43	0.35
				2134	12.8	4.2	5.8	0.45	0.33
				2135	13.8	4.8	5.5	0.4	0.35
				2136	17.4	6	7.9	0.45	0.34
				2216	11.8	4	5.3	0.45	0.34
				2453	11.8	4.6	6.1	0.52	0.39
				2462	14.2	5.2	6.4	0.45	0.37
		平均値		13.5	4.8	6.1	0.45	0.35	



b 底／口径小	2303	12.7	5.2	4.2	0.33	0.41
	2304	16.1	6.1	6.2	0.39	0.38
	2452	11.6	4.4	4.5	0.39	0.38
	2464	14.6	5.6	5.8	0.4	0.38
	平均値	13.8	5.3	5.2	0.38	0.39



II類	退化した平高台。 内底部の境に僅かに段差	a 底／口径大		2002	15.8	5.6	6.7	0.45	0.35
				2139	15.2	5.8	6.2	0.41	0.38
				2141	15	5.1	5.9	0.39	0.34
				2178	16.6	4.5	4.6	0.28	0.27
				2183	15.4	5.3	6	0.39	0.34
				2228	16.2	5.4	5.9	0.36	0.33
				2306	11.6	3.9	5	0.43	0.34
				2308	14.8	5.1	6.2	0.42	0.34
				2311	15.9	5.9	5.8	0.36	0.37



2312	15.1	5.1	6.5	0.43	0.34
2313	15.8	5.6	6.4	0.41	0.35
2353	16.1	5	6	0.37	0.31
2354	15.6	5.1	5.5	0.37	0.35
2355	16.2	5.8	6.2	0.38	0.36
2392	16.8	5.3	6.6	0.39	0.32
2403	15.9	4.9	6	0.38	0.31
2408	15.8	5.3	6	0.38	0.34
2412	15.6	4.9	6	0.38	0.31
2459	13.7	4.5	5.8	0.42	0.33
2461	13.5	5.1	5.4	0.40	0.38
平均値	15.3	5.2	6	0.39	0.34

b 壁／口径小

II類 底部平底
内底部段差なし

2016	15.3	5.2	5.8	0.35	0.34
2017	15.8	5.3	5.1	0.32	0.34
2142	15.4	5.3	4	0.26	0.31
2307	15.6	4.7	5.4	0.35	0.3
2309	15.5	5.2	4.8	0.31	0.34
2310	14.9	5.5	4.6	0.31	0.37
2401	15.4	5.3	5.2	0.34	0.34
2409	16	4.3	4	0.25	0.27
2458	13.6	4.4	5.1	0.38	0.32
2460	13.6	4.5	6.2	0.46	0.33
2463	15.8	5.3	5.3	0.34	0.34
平均値	15.2	5	5	0.33	0.33

2140	15.3	5.1	5.9	0.39	0.33
2152	16.2	5.1	6	0.37	0.31
2153	15	5.9	5	0.33	0.39
2171	16.8	4.5	6.6	0.39	0.27
2172	16.2	4.9	5.2	0.32	0.3
2173	16.4	4.8	6.5	0.4	0.29
2186	16.2	4.7	5.6	0.35	0.29
2188	15.8	5.6	5.2	0.33	0.35
2190	16.8	5.2	5.1	0.3	0.31
2206	16	5.1	6.2	0.39	0.32
2207	15.8	5	7	0.44	0.32
2215	15.2	5	5.6	0.37	0.33
2314	15.1	4.7	6.1	0.4	0.31
2315	15.6	5.3	6	0.38	0.34
2316	16	5.2	6.9	0.43	0.33
2317	15	4.9	6.1	0.41	0.33
2318	15.2	4.7	5.5	0.35	0.31
2319	17	4.7	6.6	0.39	0.28
2320	15.6	4.9	5.4	0.35	0.31
2321	16.4	4.8	6.3	0.38	0.29
2322	15.8	4.9	6.6	0.42	0.31
2383	13.9	4.3	6.5	0.47	0.31
2387	16.7	5.5	5.5	0.33	0.33
2391	16.3	5.1	5.8	0.36	0.31
2393	16.7	5.6	5.4	0.38	0.34
2398	16.8	5.5	6	0.36	0.33
2404	15.6	4.9	6	0.38	0.31
2405	16.6	4.9	6	0.36	0.3
2457	14	4.7	6.4	0.46	0.34
2465	16.6	4.8	5.5	0.33	0.29
2466	16.2	5.1	6.1	0.4	0.31
2467	15.5	5.1	6.5	0.42	0.33
2468	16.6	4.8	5.8	0.35	0.29
2469	15.6	5.2	5.2	0.33	0.33
2470	16	5.1	6	0.38	0.32
2471	15.4	4.8	6.3	0.41	0.31
平均値	15.9	5	6	0.38	0.32

杯A1 (ヘラ切り)

分類	基準	細分類	基準	土器No.	口径	器高	底径	底／口	高／口
I類 内溝する体形									



2006	14.1	3.8	6.5	0.46	0.27
2020	13.9	3.4	7	0.5	0.24
2021	13.6	3.2	5.8	0.43	0.24
2033	14.2	3.6	5.6	0.39	0.25
2035	13.4	3.4	6.2	0.46	0.25
2042	13.2	4.1	6.5	0.49	0.31
2043	12.8	3.6	7.1	0.55	0.28
2115	14.1	3.9	7.6	0.54	0.28
2118	13.7	3	6.2	0.45	0.22
2119	13.6	3.5	7.2	0.53	0.26
2214	13.6	4	7	0.51	0.29
2382	13.9	3.3	8.4	0.6	0.24
平均値	13.7	3.6	6.8	0.49	0.26

I類 外反する口縁

a 底径の小さいもの



2005	12.8	3.3	5.6	0.44	0.26
2019	13.3	3.4	7.4	0.56	0.26
2022	13.6	3	6.9	0.51	0.22
2024	13.3	3.2	6.8	0.51	0.24
2028	13.7	2.8	5.8	0.42	0.2
2029	13.4	3	7	0.52	0.22
2030	13.2	3.5	6.5	0.49	0.27
2031	12.8	3	6.6	0.52	0.23
2032	13.9	3.3	6.6	0.47	0.24
2034	14	3.7	6.5	0.48	0.26
2037	13.7	3.2	6.6	0.48	0.23
2038	13.6	3.5	6.5	0.48	0.26
2039	12.8	3.4	6.9	0.51	0.27
2041	12.8	3.2	6.8	0.53	0.25
2044	13.3	3.7	5.2	0.39	0.28
2046	14	3.8	7.5	0.54	0.27
2047	13.8	3.5	6.8	0.49	0.25
2048	13.5	3.8	6.4	0.47	0.28
2049	12.8	3.6	6.5	0.52	0.28
2050	13.2	3.6	6.7	0.51	0.27
2051	14.2	4	6.7	0.47	0.38
2052	14.4	3.7	7.1	0.49	0.26
2091	13.7	3.7	7.2	0.53	0.27
2092	13.3	3.7	6.9	0.52	0.28
2096	13.8	3.3	5	0.36	0.24
2099	13.3	3.6	7.6	0.57	0.27
2103	12.3	3.1	6.3	0.51	0.23
2104	13.2	3.1	6.6	0.5	0.23
2105	13.4	3.5	7	0.52	0.26
2106	13	3.5	6.2	0.48	0.27
2108	13.7	3.1	7.1	0.52	0.23
2112	14.5	3.8	7.4	0.51	0.26
2114	13.3	3.5	6.5	0.49	0.26
平均値	13.4	3.4	6.6	0.49	0.25

b 底径の大きいもの



2009	14.9	3.4	8.8	0.59	0.23
2023	14.2	2.8	8	0.56	0.2
2025	14.8	3	9.3	0.63	0.2
2026	14.4	3	8.4	0.58	0.21
2027	14.2	3.1	8.2	0.58	0.22
2036	14.4	2.8	8.2	0.57	0.19
2040	12.9	2.9	8	0.62	0.22
2045	14.2	3.4	8.6	0.61	0.24
2109	14.2	3.4	8	0.56	0.24
2110	14.4	3.2	8.4	0.58	0.23
2111	14.9	3.9	8.6	0.58	0.26
2113	14.1	3.6	8.5	0.6	0.26
2117	14.8	3.2	7.8	0.53	0.22
平均値	14.3	3.2	8.4	0.58	0.22

杯A2（糸切り）

2450	11.4	3.4	6.2	0.54	0.3
2451	11.7	3.4	5	0.43	0.29
平均値	11.4	3.4	5.6	0.49	0.29



杯B 高台

a 高台から体部の境括れ顯著 内湾



2101	15.8	5.4	8.4	0.53	0.34
2125	13.8	5	6.8	0.49	0.36
2128	18.6	8	10.2	0.55	0.43
平均値				0.52	0.38

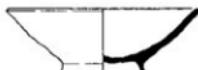
b 高台から体部の境括れやや顯著 口縁外反



2064	15.1	5.6	7.6	0.5	0.37
2127	15.6	5.9	7.6	0.49	0.38
2406	13	4.4	6.9	0.53	0.34
平均値				0.51	0.36

c 高台から体部の境括れ無し 口縁外反

2062	16.8	5.8	8.4	0.5	0.36
2063	15.4	5.1	5.8	0.44	0.33
2123	15.4	5.4	6.3	0.41	0.35
2124	15.8	5.1	8.9	0.56	0.32



2126 14.3 5.3 6.8 0.48 0.37
平均値 15.5 5.3 7.4 0.48 0.34

図A1 (底部糸切り)

分類	基準	細分類	基準	土器No.	口径	器高	底径	底/口	高/口
I類	平高台			2286	8	2.2	4.1	0.51	0.28
				2298	9	2.3	5.4	0.6	0.26
				2299	8.8	1.9	4.4	0.5	0.22
				2399	8.2	2.3	4.1	0.5	0.28
				2400	9.2	2.4	4.3	0.47	0.26
				2448	9.4	2.6	4	0.43	0.28
				2449	9.2	2.9	3.9	0.42	0.32
				平均値	8.8	2.3	4.4	0.5	0.26



II類 平底

a 口縁が大きく立ち上がる



2151	8.2	1.8	5.4	0.66	0.22
2170	8.2	1.7	4.6	0.66	0.21
2205	7.6	1.8	5.2	0.68	0.24
2211	7.4	1.8	4.4	0.59	0.24
2212	7	2	4	0.57	0.29
2213	7.9	2.1	4.5	0.57	0.27
2226	7.2	2.1	4.5	0.63	0.29
2283	8.4	2.2	4.7	0.56	0.26
2284	7.7	2.2	4.2	0.55	0.29
2285	8.5	2.4	4.2	0.49	0.28
2287	7	1.9	4.3	0.61	0.27
2288	7.6	2	4.3	0.57	0.26
2289	7.8	2.2	5.4	0.69	0.28
2290	7.6	1.8	5.2	0.68	0.24
2291	7.5	1.8	4.3	0.57	0.24
2292	8.3	1.5	4.6	0.55	0.18
2296	8.8	1.9	5.8	0.66	0.22
2390	7.8	2.3	4.6	0.59	0.29
2410	8.2	2	5	0.61	0.24
2417	8.1	1.9	4.7	0.58	0.23
平均値	7.9	2	4.6	0.59	0.25

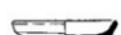
b 口縁が短く立ち上がる



2294	8.7	1.8	6	0.69	0.21
2295	8.8	1.9	5.8	0.65	0.22
2210	7.5	1.7	5.2	0.69	0.23
平均値				0.68	0.22

図A2

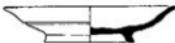
丸底



2194	8.4	1.7			0.2
2293	10	2.3			0.23
平均値					0.22

III-B

鶴高台



2097	14	3.3	7.4	0.53	0.24
2120	14.2	3.6	6.0	0.42	0.25
2121	15.8	3.0	7.0	0.51	0.22
平均値				0.49	0.24

黒色土器B

盤

分類	基準	細分類	基準	土器No.	口径	器高	底径	底/口	高/口
I類	高台	a 高台貼り付け		2168			7.4		



b 回転糸切り→断面△形高台貼り付け

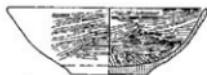


2250	15.6	6.4	6.6	0.42	0.41
2263	15	5.5	7.0	0.47	0.37
2389			5.2		
2421			5.0		
2447	15.7	6.0	6.5	0.41	0.38
平均値	15.4	6.0	6.3	0.43	0.39

II類 平高台

a 高台径大

2247	16.1	5.7	6.0	0.37	0.35
2249			7.2		



b 高台基小(須恵器始模様)	2095			4.4		
	2248	15.6	5.1	5.0	0.32	0.33
	2264			5.0		
平均値				5.4		



分類	基準	細分類	基準	土器No.	口径	巻高	底径	底/口	高/口
	回転糸切り	a 平高台		2446	9.6	1.8	5.2	0.54	0.19



b 平底	2244	9.4	1.6	7.2	0.77	0.17
	2245	9.4	2.1	6.5	0.69	0.22
	2262	9.4	1.8	7.5	0.8	0.19
平均値		9.4	1.8	7.1	0.75	0.2

分類	基準	細分類	基準	土器No.	口径	巻高	底径	底/口	高/口
I類 内外面に縦文		a 斜面方形の高台		2096	16.2	5.3	9	0.56	0.33



b 斜面三角形の高台	2169	15.6	5.8	5.4	0.35	0.37
	2281	14.8	5	6	0.41	0.34
	2351	15.7	5.4	6.5	0.41	0.34



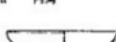
c 退化した斜面三角高台	2001	11.8	4.5	4.2	0.36	0.38
	2225	7.2	2.1	4.5	0.63	0.29



I類 外面の縦文なし		退化した斜面三角高台		2187	11.6	4.8	5.6	0.48	0.41
				2197	10	5.3	5.2	0.52	0.58

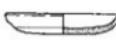


分類	基準	細分類	基準	土器No.	口径	巻高	底径	底/口	高/口
I類 丸底		a 内湾		2167	9.2				



	2286	8.2	1.5						0.18
	2268	8.2	1.4						0.17
	2270	8.9	1.8						0.2
	2272	9.2	2.1						0.23
	2375	8.8	1.6						0.18
	2441	7.6	1.6						0.21
	2442	7.8	1.6						0.21
	2443	7.5	1.4						0.19
平均値		8.4	1.6						0.2

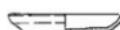
b 外反	2149	8.4	1.8						0.21
	2150	8.5	1.7						0.2
	2157	8.2	1.1						0.13
	2166	8.3	2						0.24
平均値		8.1	1.5						0.23



2223	8.6	2		0.23
2265	7.7	1.8		0.23
2273	9.1	1.7		0.19
2274	8.5	2		0.21
2377	7.7	2.4		0.31
2439	7.8	1.6		0.21
平均値	8.3	1.8		0.22

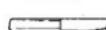
II類 平底気味

a 内溝



2003	8.2	1.9		0.23
2193	9.3	1.8		0.19
2267	7.9	1.8		0.23
2269	8.5	1.8		0.21
2271	8.9	1.8		0.2
2275	9.4	1.6		0.17
2276	9.4	1.6		0.17
2376	8.9	1.8		0.2
2437	8.7	1.6		0.18
2438	8.4	1.4		0.17
2444	7.6	1.5		0.2
2445	9.1	2		0.22
平均値	8.7	1.7		0.20

b 垂直に立ち上がる



2204	8.4			
2243	8.1	1.5		0.19
2277	7.7	2.4		0.31
2440	8.6	1.4		0.16

杯

分類	基準	細分類	基準	土高No.	口径	最高	底径	底/口	高/口
高台付き				2278	5.6	2.5	3.7	0.66	0.45
				2279	6.4	2.5	4.2	0.66	0.39
				2280	6.7	3.1	3.5	0.52	0.46



土器器

杯A

分類	基準	細分類	基準	土高No.	口径	最高	底径	底/口	高/口
I類 ヘラ切り				2240	14.4	3.2	7.6	0.53	0.22
				2241	14.8	2.9	8.6	0.58	0.2
				2261	14.6	3.6	7.2	0.49	0.25
				2434	15.8	4	5.4	0.34	0.25
				平均値	14.9	3.4	7.2	0.49	0.23

II類 糸切り

a 体部に条縫をもつ

2363		9.5		
2364		7.2		

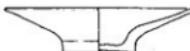


b 体部に条縫をもたない

2416	16.4	3.6	7.6	0.46	0.22
2372	14.9	4.5	7.4	0.50	0.30

托形

分類	基準	細分類	基準	土高No.	口径	最高	底径	底/口	高/口
a 大きいもの				2189	16.8	4.3	6.7	0.40	0.26
				2436	15.1	3.7	5.8	0.38	0.25



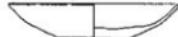
b 小さいもの

2147	9	3.5	3.6	0.40	0.39
2221	8.5	2.9	4.3	0.51	0.34
2374	11.3	3.1	4.7	0.50	0.30
2435	9.0	2.0	4.3	0.48	0.22
平均値				0.47	0.31



大皿

分類	基準	細分類	基準	土高No.	口径	最高	底径	底/口	高/口
I類 糸切り				2165	14.2	2.7	5.4	0.38	0.19



II類 指揮さえ

2148 15.8



2164	18.2
2203	13.2
2415	15.4
平均値	14.4

小類 分類	基準	細分類	基準
I類 条切り		a 退化した平高台	



b 平底



c 短く立ち上がる口縁



土器No.	口径	器高	底径	底／口径	高／口径
-------	----	----	----	------	------

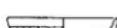
2159	8.2	1.2	5.2	0.63	0.15
2162	8.2	1.7	5.2	0.63	0.21
2192	7.8	1.1	4.8	0.62	0.14
2201	7.8	1.4	3.0	0.38	0.18
2252	7.8	1.5	5.0	0.64	0.19
2253	8.2	1.6	5.6	0.64	0.18
2254	8.2	1.5	4.0	0.49	0.18
2255	5.7	1.8	4.3	0.75	0.32
2356	10.8	1.5	5.6	0.52	0.14
2357	10.5	1.8	5.5	0.52	0.17
2358	10.8	2.3	6.0	0.56	0.21
2369	10.3	1.9	6.2	0.6	0.18
2395	8.2	1.5	3.6	0.44	0.18
2414	8.0	1.9	4.0	0.5	0.24
平均値	8.6	1.6	4.9	0.57	0.19

I類 指揮さえ

a 口縁内湾



b 短く立ち上がる口縁



2158	7.6	1.0		0.13
2200	7.6	1.1	5.6	0.74
2218	8.2	1.5	5.2	0.63
2232	9.5	1.3	6.3	0.66
2256	9.8	1.2	6.3	0.64
2425	8.0	1.0	6.1	0.75
平均値	8.5	1.2	5.9	0.7

2175	8.9	1.4		0.16
2176	8.8	1.3		0.15
2198	9.3	1.8		0.19
2202	9.4	1.9		0.2
2413	8.6	1.4		0.16
平均値	9	1.6		0.17

2160	9.4	1		0.11
2180	8.6	1.2		0.14
2181	8.6	1.3		0.15
2184	8.6	1.5		0.17
2196	8.8	1.6		0.18
2251	7.4	1.3		0.18
2365	8.9	1.8		0.2
2366	8.7	1.6		0.18
2422	7.6	1.6		0.21
2423	8.2	1.5		0.18
2424	8.2	1.5		0.18
平均値	8.4	1.4		0.17

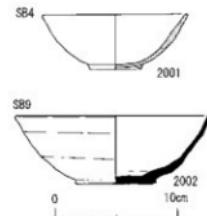
2. 遺物

A地区では掘立柱建物4・9の柱穴、SD21・36・63・35・65・69から須恵器・縁箱・黒色土器・瓦器・土師器・中国製磁器が出土している。このうち、中国製磁器を除く土器については、表2の土器分類をもとに説明を行う。

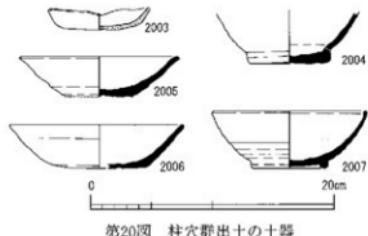
SB4・9

SB4の柱穴(P11)内より、退化した断面三角形の高台をもつ瓦器碗Ic(2001)が出土している。側体の2/3以上残存していたが、外面の摩滅が著しく、暗文の有無については不明である。

SB9もやはり柱穴(P2)内より平高台の須恵器碗(2002)が出土している。回転糸切り手法を用いた碗で、退化した平高台をもち、内面底部と体部の境にわずかな段差をもつ。口径に比べ高台径も大きく碗A2 IIa類に分類できる。



第19図 SB4・9
出土上の土器



第20図 柱穴群出土の土器

柱穴群

消滅した柱穴が

あるため、建物として識別できなかった柱穴からは、完形土器を含め比較的遺存状況の良好な土器が出土している。P936出土の瓦器皿(2003)は、完形であるが、摩滅が著しく調整は明らかではない。

半底気味で、口縁が内湾して立ち上がる皿IIa類に分類できる。

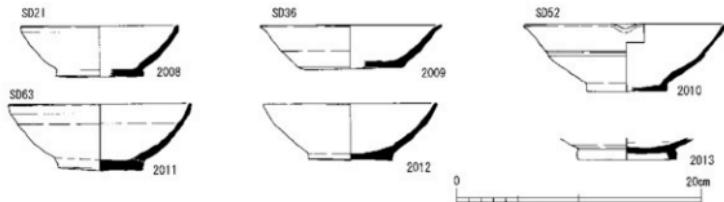
P893柱穴内より出土した須恵器杯(2004)は、口縁が欠損しているため、詳細な分類ができなかつたが、回転ヘラ切り手法を用いた杯A1類の範疇に属する。

P832の須恵器杯(2005)とP92出土の須恵器杯(2006)はともに回転ヘラ切り手法を用いる。(2005)は口縁が外反して開く杯A1 IIa類に、(2006)は体部が内湾する1類に分類できる。

P151出土の須恵器碗(2007)は、輪高台をもつ碗である。本来なら碗B類として分類すべきであるが、出土点数が極めて少ないので分類表からは除外している。

SD21

須恵器碗(2008)が出土している。底部回転ヘラ切りの碗で、口縁が外反するA1 I b類の碗である。



第21図 SD21・36・52・63出土の土器

SD36

須恵器杯（2009）が出土している。底部回転ヘラ切りで外反する口縁をもつ。また底径／口縁の半の大きい特徴をもつ杯A 1 II b類である。

SD52

（2010）は回転糸切りの平高台をもつ椀A 2類の範疇に該当する。片口をもつ特殊な器形である。

SD33

底部回転ヘラ切り椀（2011）と糸切り椀（2012）の両者が出土している。2011はA 1 II b類、2012はA 2 I a類に該当する。これ以外に縁軸皿（2013）と思われる破片が出土している。高台内まで施釉された古相の縁軸である。

SD35

溝内より出土した瓦器皿（2014・2015）は平底気味の底部をもつ皿II類の範疇に分類される。2016・2017の回転糸切り平高台椀は、いずれも内底にわずかに段差をもち底径／口径の比率の小さい椀A 2 II b類に分類できる。

SD65

SD65は、A地区のなかで、最も多くの土器が出土した遺構である。その内訳は、須恵器杯・椀と縁軸が中心である。とくに縁軸は、西木之部遺跡全体のなかでも質・量ともに最大の出土である。

縁軸の詳細は、第5章 第5節で詳細に報告されているためふれず、ここでは須恵器について述べる。須恵器は、杯と椀が主体である。

杯

回転ヘラ切り手法を採用したA 1類の杯は34点出土している。さらにその器形的特徴から、丸底様で口縁が内湾するI類（2020・2021・2033・2035・2042・2043）と平底で外反するII類に分けられる。口縁が外反するII類の杯は、底径の大小でa類・b類の二つに細分できる。底径6.6cm前後の小さい底径のa類、底径8.4cm前後の大きい底径のb類である。

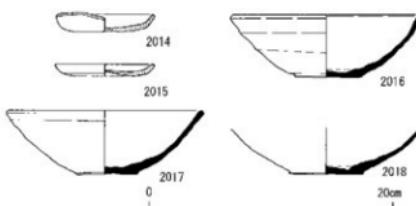
a類は、2019・2022・2024・2028～2032・2034・2037～2039・2041・2044・2046～2052の21点が該当し、杯全体の60%以上を占める。b類は、2023・2025～2027・2036・2040・2045の7点で、全体の20%を占め、I類とほぼ同じ占有率である。SD65の出土杯のなかで、主体となるのは杯A 1 II a類ということになる。

IIa類の杯（2028）とII b類（2023）の外面には、墨書で文字が描かれている。字の内容は、遺存状況が悪く不明である。また2041のIIa類の杯は、内面に墨痕があり転用硯と判断している。同類2051・2060はヘラ記号が施されている。この内、2051の底部には板状のものを押しつけたような圧痕が残る。

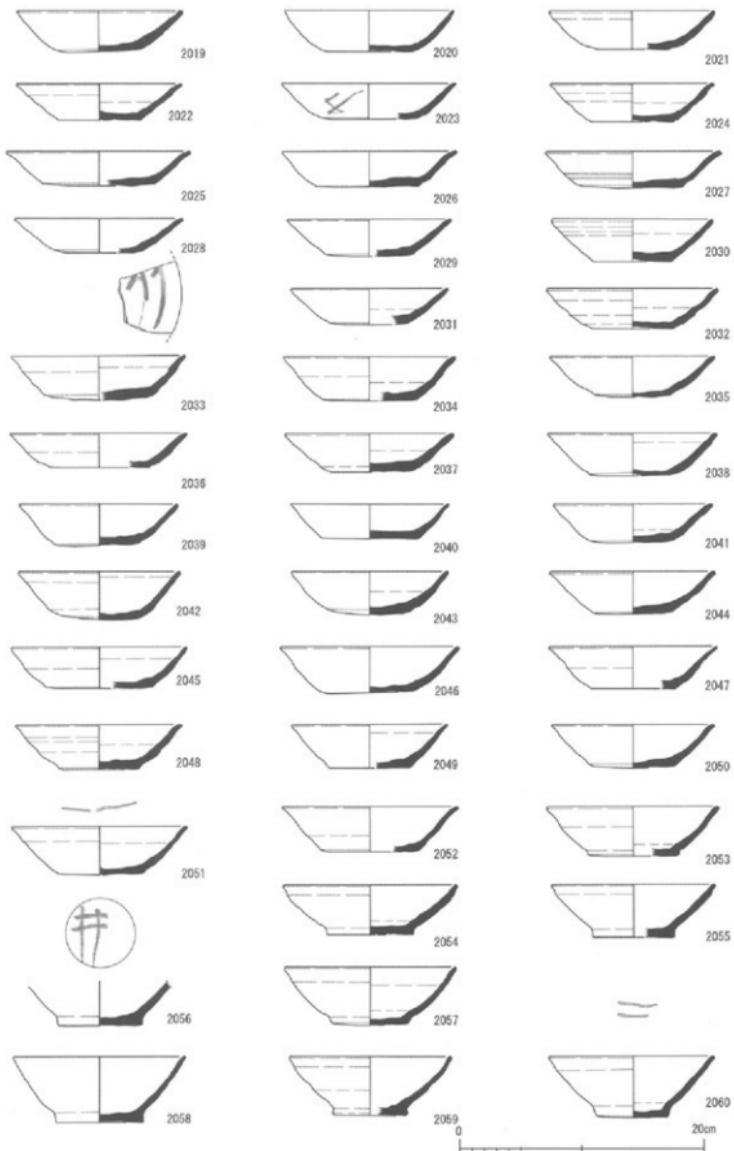
輪高台をもつ杯B類は3点確認している。高台と体部の境にわずかに括れが認められるb類（2064）と括れのないc類（2062・2063）に分類できる。

椀

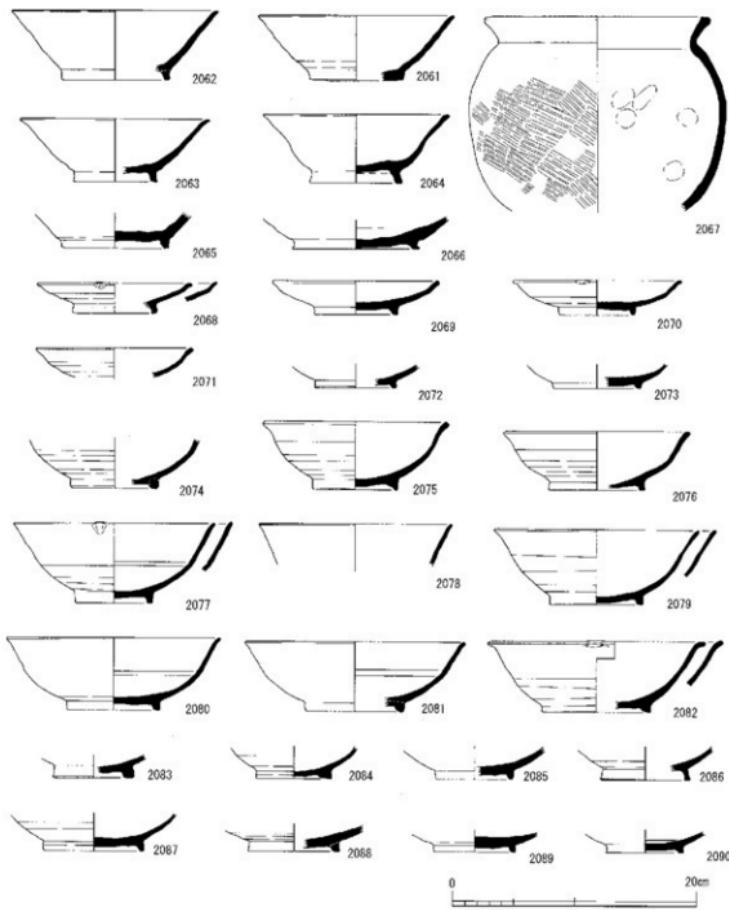
椀は、回転ヘラ切りの平高台をもつ椀A 1類と回転糸切りのA 2が出土している。



第22図 SD35出土の土器



第23図 S D65出土の土器（1）



第24図 SD65 (2) 出土の土器

A 1類の楕は、突出した平高台で、内底に強い段差をもち、体部が直線的に斜め上方に立ち上がる I a類（2060・2061）と内底の段差が弱い II類がある。II類の楕は、さらに体部が直線的に立ち上がるa類（2053～2055・2058）と、口縁が外反するb類（2057）に分かれる。また、回転糸切り手法の突出した平高台をち、内底に段差をもつ楕A 2 Ia類があるが、先のA 1 II b類楕と同様、その量は極めて少なく、楕の主体は、A 1 II a類である。2056の楕の内底には「井」と書かれた墨書き土器が出上している。

SD69

溝内から出土した土器は、須恵器杯・楕である。

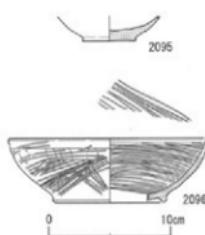
杯は、底部回転ヘラ削り手法で、底径／口縁の小さいA1 IIa類（2091・2092）のみである。とくに2092の杯は、体部外面にヘラ記号が記され、また外底部に板目状の圧痕が残る。

椀は、回転ヘラ切りのA1類（2093・2094）が出土している。いずれも突出した平高台で、内底に強い段差をもち、体部が内湾気味に立ち上がるIb類に分類できる。

包含層

包含層からは、須恵器の杯・椀・瓶・耳皿、黒色土器、瓦器、中国製磁器が出土している。また、須恵器杯A・杯B、皿Bのなかには墨書が書かれたものが確認されている。

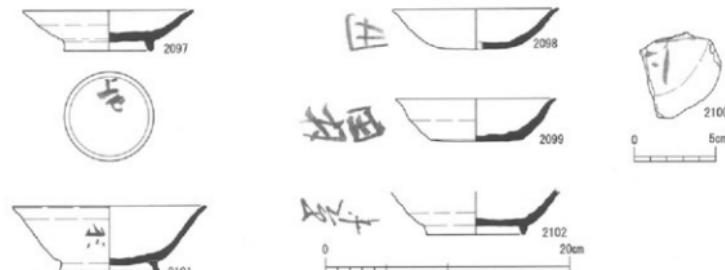
黒色土器は、回転糸切り手法の平高台をもつ椀II類（2095）がある。



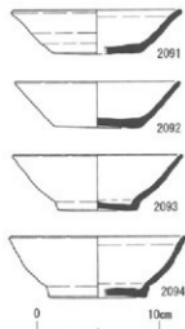
第26図 包含層（1）
括れが顯著なa類である。外側の墨書は『村』と理解している。

杯は、底部回転ヘラ切のA1類がある。体部の内側するI類（2115・2118・2119）と外反する体部のII類がある。II類は底径の小さいa類（2103～2106・2108・2112・2114）と底径の大きいb類（2109～2111・2117）に細別できる。IIa類に分類した杯のなかには、2106のように体部に沈線が巡るものがある。2111・2114・2115は内面に墨痕が残っており、転用観と考えられる。

輪高台をもつ杯B類は、高台から体部の境の括れが顯著なa類（2125）、括れのないc類（2123・2124・2126）とその中間の形態であるb類（2127）がある。



第27図 包含層（2）



第25図 SD69出土の土器

高台は径が4.4cmと小さなものの、b類の範疇でおさまるものである。瓦器は、内外面に暗文が施され、断面方形の高台が貼り付けられた椀Ia類（2096）がある。

2096～2102は、墨書き土器である。2097は輪高台をもつ皿Bで、高台内に文字が書かれている。また、内面には墨痕が残り転用観と考えられる。2098・2099は底部回転ヘラ切りの杯A1類で底径の小さなIIa類である。このうち2099は外側に『田村』と書かれ、内面には墨痕が残り、転用観と考えられる。

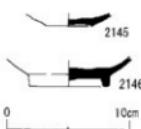
2101・2102は輪高台をもつ杯Bで、2101は高台と体部の境の括れが顯著なa類である。外側の墨書は『村』と理解している。

碗は、回転ヘラ切りの平高台をもつ碗A 1類と回転糸切り底の碗A 2類がある。

A 1類は、2130のような内底に強い段差をもち、直線的に立ち上がる口縁をもつIa類、口縁が外反するIIa類（2129・2131）がある。A 2類は、底径／口縁率が大きなIa類（2132・2134～2136）、退化した平高台をもち、底径／口縁率の大きなIIa類（2137・2139・2141）、底径／口縁率の小さいIIb類（2142）をはじめ当地区的最終段階の碗である、底部半底の皿類（2140）がある。碗A 2類のなかには2136のように外面に一条の沈線を巡らすものもある。

壺は、肩部から削部にかけて二条突帯を巡らせた2143と、突帯のない2144がある。いずれも底部回転ヘラ削りである。

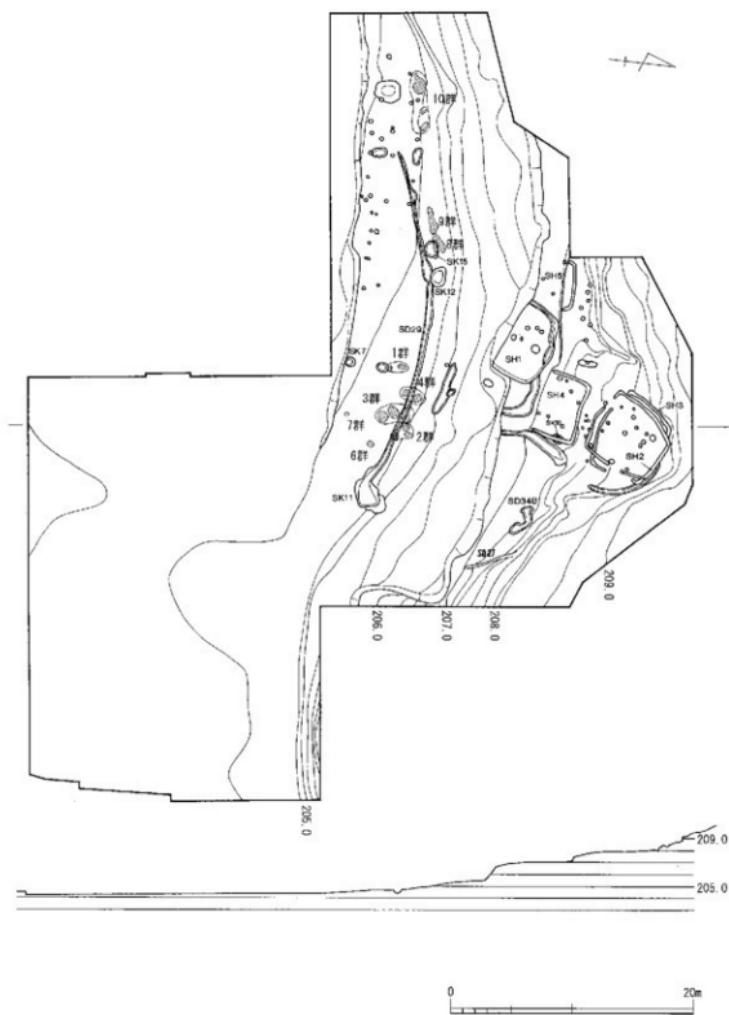
中国製磁器は、青白磁の皿（2145）、白磁碗が出土している。2145の皿は、胎土が白色で緻密である。また、釉調も透明感があり、精巧な作りであることから、景德鎮産と考えている。



第28図 中國製磁器

第4章 B地区の調査

第1節 弥生時代から古墳時代の遺構・遺物



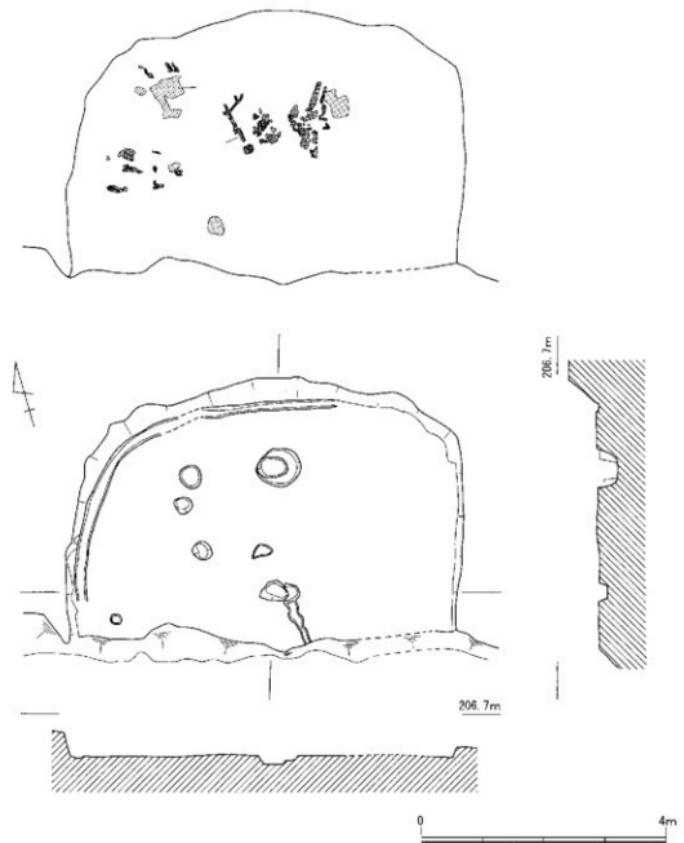
第29図 弥生時代～古墳時代の遺構

1. 遺構

B地区で検出した遺構は、弥生時代末の竪穴住居(SH1~5)、弥生時代中期後半の壺棺墓(SK1)中期前半の土坑(SK15)、弥生時代末の土坑(SK11・12・15)、古墳時代前期の土坑(SK7)1基、弥生時代末の溝(SD27・29・34B)がある。

竪穴住居

竪穴住居は5棟確認された。その分布は、B地区北側に南向きに開口する谷部に集中している。SH1・4・5は住居跡の南半部を後世の搅乱により消失している。また谷奥に位置するSII2・3は周壁溝のみ残っており、全体的に遺存状況は悪い。



第30図 SH1

SII1

調査区北側の谷部開口付近に位置し、検出した竪穴住居のなかで最南端に位置する住居跡である。住居の南側は、後世の擾乱を受け消滅しており、全体の1/2程度が遺存している。住居跡の平面形は隅丸方形と考えられる。床面には炭化材と焼土が出土しており、焼失住居と考えられる。住居跡の北東隅壁下に周壁溝の痕跡が確認された。柱穴は住居跡北側で1穴確認した。規模は、東西方向6.2m、南北方向4.4m以上である。壁高は26cm前後である。遺物は、弥生時代終末期前半の壺・甕・鉢・器台・高环が出土している。

SII2・3

調査区北側の谷部の最深部に位置し、検出した竪穴住居のなかでは最北端に位置する。遺存状況がきわめて悪く、周溝のみ確認した。周溝は重複しており、SII 2 がSH3を切っている。

周溝から判断してSH2の平面形は東西方向5.2m、南北方向6.4mの隅丸方形と考えられる。中央より北側には炭が堆積し、さらに南縁付近には焼土を確認した。周溝は幅16~32cmで、深さは16cm前後である。柱穴は4穴確認している。

周溝の状況からSH 3 は南北方向5.6m、東西方向5.4mの隅丸方形と考えられる。周溝幅12~24cm、深さ10cmである。



第31図 SH2・3

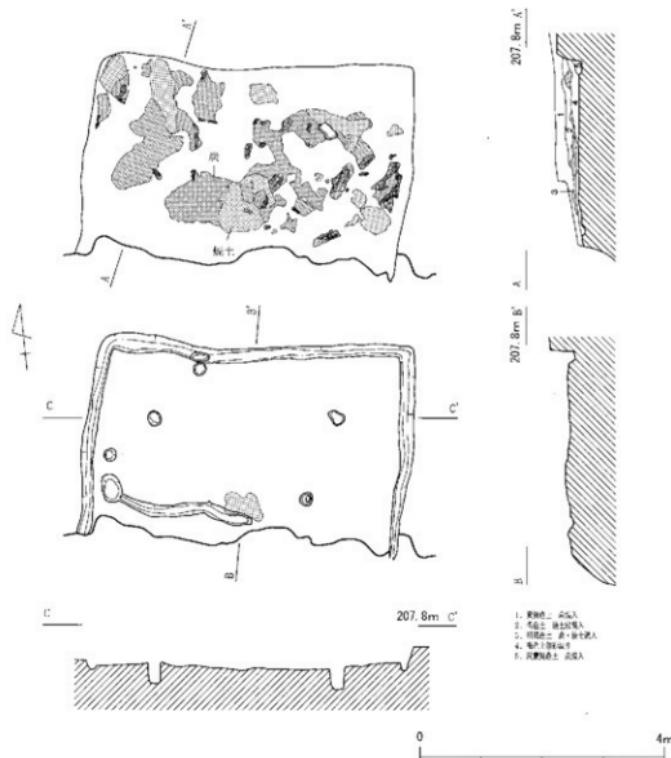
遺物は、SH 2 より壺が出土しているほか、帰属住跡の不明なものとして鉢と山陰型の瓶が出土している。弥生時代終末期の所産である。

SH 4

調査区北側の南に開口する谷部に位置する。北側はSH 2・3、南側にはSH1が近接する。東縁はSK16を切っている。南半部が後世の擾乱により消失しているため全容は明らかではないが、平面形は南北方向2.9m以上、東西方向5.4mの方形を呈すると考えられる。壁下には幅24cm、深さ16cmの周溝が巡る。床面には炭と焼土、炭化材が遺存しており、焼失住居である。また柱穴は2穴確認した。遺物は弥生時代終末期の壺・高坏・鉢・器台が出土している。

SH5

調査区北側の南に開口する谷部に位置する。住跡の大半を後世の擾乱によって消失し、わずかに住跡の北端部のみ遺存していた。壁下には幅16cm、深さ8cmの周溝が認められる。床面には炭と炭化材が認められ、焼失住居と考えられる。遺物は弥生時代後期後半～終末期の高坏が出土している。



第32図 SH 4

甕棺墓

弥生時代中期後半の甕棺墓を1基検出
した。

SK16

調査区北側の南に開口する谷部に位置する。南北部分をSH4に切られているため全容は明らかではないが、東西方向60cm、南北方向50cm以上の楕円形の墓壙である。最深部の深さは40cmである。墓壙内には高环の环部を蓋にした甕が埋置されていた。甕・高环ともに弥生時代中期後半の所産である。

土 抗

弥生時代中期後半から古墳時代前期の土抗を3基検出した。いずれも調査区中央部の平坦面上にある。

SK7

調査区のほぼ中央部に位置する。南北方向82cm、南北方向70cm、深さ30cmの南北方向に長い楕円形を呈する。

遺物は、古墳時代前期の甕が出土している。

SK11

調査区のほぼ中央部に位置する。土抗の西端はSD29重複しているが、新旧関係は不明である。

東西方向2.7m、南北方向1.86m、最深部の深さ28cmの東西方向に長い楕円形を呈する。

遺物は土抗底より弥生時代終末期後半の甕・鉢・壺・高环が出土している。

SK15

調査区の西よりに位置する。南側はSD29と接する。東西方向1.4m、南北方向1.1mの東西方向に長い楕円形を呈する。深さは16cmと浅い。

遺物は弥生時代中期前半の甕が出土している

溝

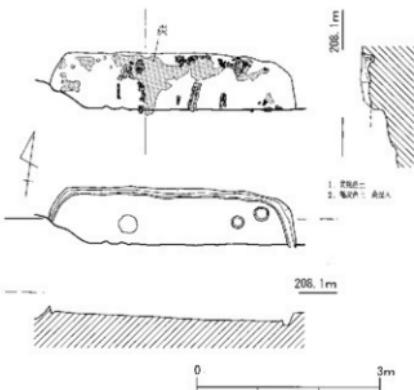
弥生時代後期後半から終末期の溝を2条検出した。

SD27

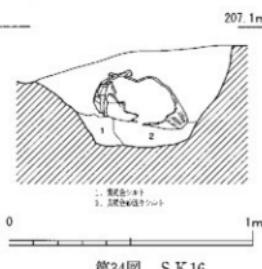
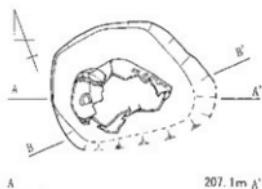
調査区の北側、南に開口する谷部の東斜面に位置する。溝幅は25~30cmで南に下るに従い幅を減じている。溝の断面形は浅い丸底状を呈し、深さは20cm前後である。

溝の南端は後世の攪乱により破壊されている。

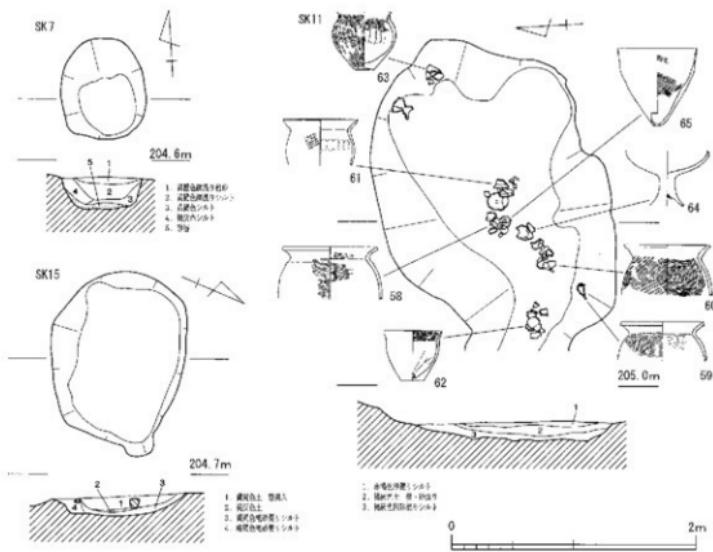
遺物は弥生時代後期後半から終末期の甕が出土している。



第33図 SH 5



第34図 SK 16



第35図 SK 7・11・15

SD29

調査区の中央を南北方向にはしる溝である。溝は北側に膨らみ孤を描く。溝の東端はSK11と切り合っている。新旧関係は不明である。また溝の中程ではSK12に切られている。溝幅は30~80cmを測り、西側にいくに従い幅を減じる。溝の断面形は逆台形を呈し、深さは25~46cmで東側部分が深くなる。

遺物は、弥生時代終末期後半の甕・壺・鉢などが出土している。

SD34B

SD7と同様、南に開口する谷部の東側斜面に位置する。SD7よりは裾部に近い位置にある。

溝はL字状に屈曲する。溝幅は40~80cmで屈曲部分が狭くなる。溝の断面形は逆台形を呈し、深さは30cm程度である。

遺物は弥生時代終末期の脚付鉢が出土している。

土器集中群(第1~10土器集中群)

調査区西側部分で10ヵ所の土器が集中する箇所が確認された。いずれの土器群も遺構検出面を被う包含層中よりの出土である。各集中群から出土した土器は遺存状況が比較的良好で、こうした土器のあり方は人為的に投棄された様相を示すが、調査でこの点は明らかにはできなかった。

土器集中群より出土した土器は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の間にわたる。また集中群ごとに時期的なまとまりをもつものが多い。

2. 遺物(図版7~17)

S H 1 (32~40)

壺・甕・鉢・器台・高杯・筋鉢車が出土している。32は外反する口縁部の唇を上に拡張する広口壺である。33は短く直立する頸部に外反し、縁部を上方に拡張した口縁がつく広口甕である。34~36は甕である。34は端部を上方に拡張し、端面には凹線文を施す。35は口縁部の端部が面をなす。36は単純なくの字形の口縁部をもつ甕である。外面を擬方向のハケで仕上げる。37は受け部の口縁部下に粘土を付加して拡張した器台である。端面には模様波状文を施し、内面は丁寧なヘラミガキで仕上げる。38は小型の高杯の杯部である。口縁端部を上方に拡張する。39は強く外反する杯部をもつ高杯である。

40は土器片を円形に加工して孔を穿った筋鉢車である。これらの土器は弥生時代終末期前半のものである。

S H 3 (41)

41は甕の底部である。内外面ともに調整不明である。

S H 3・4 (42~45)

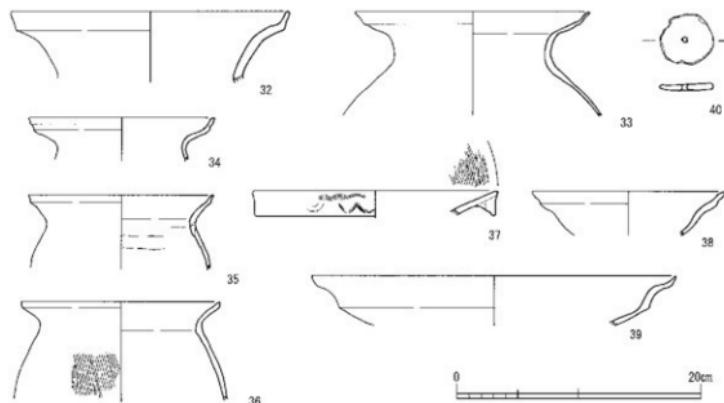
鉢と甕が出土している。42は尖り気味の底部をもつ鉢である。43は低い脚台をもつ。44は山陰型の大甕の底部である。45は平底の鉢である。これらの土器は弥生時代終末期のものである。

S H 5 (46~51)

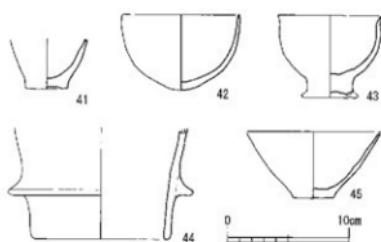
甕・高杯・鉢・器台が出土している。46はくの字形の口縁をもつタキ成形の甕である。外面はハケで仕上げる。47は外反する口縁をもつ高杯である。48は丸みを帯びた体部に内湾する口縁がつく鉢である。おそらく脚付のものであろう。49は口縁部が明確な棱をもって上方に立ち上がる器台の受け部である。50は直線的に開く鉢である。内面はハケで仕上げる。51は低い脚台をつまみ出した鉢である。内面はハケで仕上げる。これらの土器は弥生時代終末期のものである。

S H 6 (52・53)

52は小型の高杯の杯部である。53は中空の脚部である。これらの土器は弥生時代後期後半~終末期のものである。



第36図 S H 1 出土の土器



S H 3 : 41, S H 4 : 42~45

第37図 S H 3・4出土の上器

は弥生時代中期後半（畿内第IV様式新段階並行）のものである。

S K 7出土土器 (56・57)

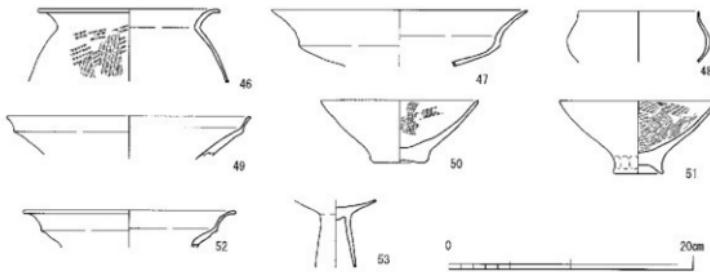
壺が出上している。56は口縁部を大きく上方に拡張した山陰系の壺である。57は口縁端部を肥厚させた布留系の壺である。これらは古墳時代前期のものである。

S K 11出土土器 (58~66)

壺・鉢・壺・高杯が出土している。58はくの字形の口縁をもつ外面ハケ仕上げの壺である。口縁部および体部の内面を横方向のハケで仕上げる。59も外面ハケ仕上げの壺である。内面は横方向のヘラケズリで仕上げる。60はタタキ成形の壺である。内面は横方向のハケで仕上げる。61もタタキ成形の壺である。内面はナデで仕上げる。62は外反する口縁をもった小型の鉢である。63は短く上方に立ち上がる口縁をもつ小型の壺である。外面は縱方向のヘラミガキで、内面上半は横方向のヘラミガキで仕上げる。64は椀形の杯部をもつ高杯である。65は尖り気味の底部に1孔を穿つ有孔鉢である。内面を横方向のハケで仕上げる。66は口縁部を上方に拡張する壺である。外面上には擬凹線を施す。これらの土器は弥生時代終末期後半のものである。

S K 12出土土器 (67~70)

壺・壺・高杯が出上している。67は口縁端部をわずかにつまみ上げた広口壺である。68はくの字形の口縁をもつタタキ成形の壺である。内面は横方向のヘラケズリで仕上げる。69はわずかに外方向に聞く



S H 5 : 46~51, S H 6 : 52・53

第38図 S H 5・6出土の土器

口縁をもつ小型の甕である。内面は横方向のハケで仕上げる。70は浅い楕形の杯部に中実の脚部が付く高杯である。これらの土器は弥生時代終末期のものである。

S K15出土土器 (71)

甕が出上している。わずかに外反する口縁をもち、外面には櫛摺の波状文を施す。中期前半（畿内第Ⅱ様式並行）のものである。

第1土器集中群出土土器 (72~74)

甕が出上している。72~74は単純なくの字形の口縁をもつ甕である。72・73は内外面ともにハケで仕上げる。74は外面にタタキ目が認められる。これらの土器は弥生時代終末期後半のものである。

第2土器集中群出土土器 (75~83)

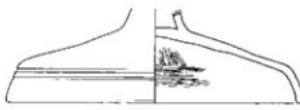
甕・壺・鉢が出土している。75はくの字形の口縁をもったタタキ成形の甕である。外面はタタキ成形の後にハケで仕上げ、内面はハケで仕上げる。76は鋭角に強く肩曲する口縁を持つ庄内系の甕である。内面は横方向のヘラケズリで仕上げる。77~79は口縁部を上方に拡張した二重口縁広口壺である。78は外面に竹管文を施した円形浮文を貼付する。80~82は小型の鉢である。81・82はタタキ成形である。83は脚部である。これらの土器は弥生時代終末期後半のものである。

第3土器集中群出土土器 (84~87)

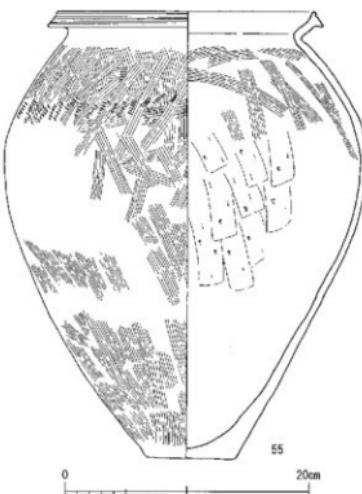
壺・器台・甕が出土している。84は外反する口縁部に粘土を付加した二重口縁広口壺である。タタキ成形であり、外面はヘラミガキで、内面は口縁部をヘラミガキで、体部をハケで仕上げる。85は口縁部を上方に大きく拡張する二重口縁広口壺である。タタキ成形であり、内面をハケで仕上げる。86は複合口縁をもった器台である。87は単純なくの字形の口縁をもったタタキ成形の甕である。内外面ともにハケで仕上げる。

第4土器集中群出土土器 (88~90)

88はタタキ成形の二重口縁広口壺である。89も二重口縁広口壺である。90は平底の小型の鉢である。これらの土器は弥生時代終末期後半のものである。

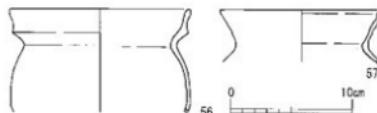


54

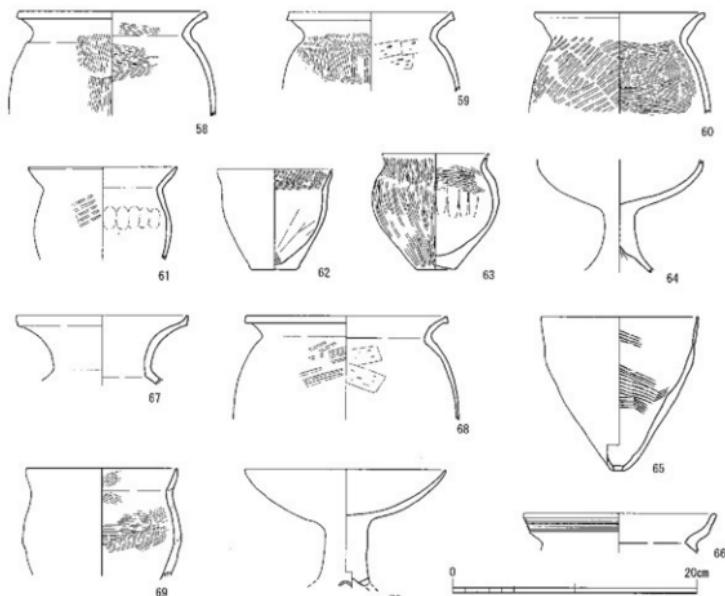


55

第39図 SK 16出土の土器



第40図 SK 7 出土の土器



S K 11 : 58~66, S K 12 : 67~70 第41図 S K 11・12出土の土器

第5土器集中群出土土器 (91~95)

壺・壺・器台が出土している。91・93は複合口縁をもつ山陰系の甕である。92は直立気味の口縁部をもつ壺である。外面をハケで仕上げる。94は小型の二重口縁甕の口縁部であろう。95は梗をもち大きく裾が広がる器台の脚部である。円形の透かしを多くあける。これらの土器は弥生時代終末期後半～古墳時代前期初頭のものである。

第6土器集中群出土土器 (96)

壺が出土している。96は球形の体部に複合口縁がつく壺である。タタキ成形であり、外面をハケで仕上げる。古墳時代前期のものである。

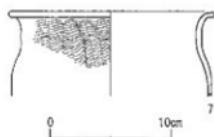
第7土器集中群出土土器 (97)

高杯が出土している。97は低い脚部をもつ高杯である。

その他の出土土器 (98~109)

98は二重口縁広口壺である。口縁部外面には櫛描の波状文を施し、肩部に突起を付加する。外面及び口縁部内面はヘラミガキで仕上げ、体部内面はハケで仕上げる。99は球形の体部に突出する小さな平底のついたタタキ成形の壺である。内面は横方向のハケで仕上げる。100はやや内傾する二重口縁をもつ二重口縁広口壺である。タタキで成形する。101は斜め方向に大きく開く二重口縁をもつ二重口縁広口壺である。タタキ成形であり、内外面ともにハケで仕上げる。

102・103は口縁部を上方に拡張する複合口縁の壺である。102はタタキ成形である。104・105は口縁



第42図 S K 15出土の土器

部を上方に大きく拡張する器台である。104は外面を横向き、内面を斜めから縦方向のヘラミガキで仕上げる。105は外面をハケで、内面を縦方向のヘラミガキで仕上げる。106～109は鉢である。106・107は外反する口縁部をもつ。108は楕円形の鉢であり、109はミニチュアの鉢である。これらは弥生時代終末期前半のものである。

第8土器集中群出土土器（110～120）

110は縦長の体部に短い頸がつくタタキ成形の短頸壺である。111～115は壺である。111はタタキ成形で内外面をハケで仕上げる。112もタタキ成形であり、外面をハケで仕上げる。113は内面を横方向のヘラケズリで仕上げる。114は口縁端部をつまみ上げたタタキ成形の壺である。115はくの字形の口縁部をもつ大型の壺である。116は外面をハケで仕上げた壺の体部である。117は底部を穿孔した壺もしくは鉢である。118は屈曲部に沈線を二条施した高杯の杯部である。内外面ともに横方向のヘラミガキで仕上げる。119は低い脚台をもつ鉢である。120は外面に櫛描の波状文・直線文を施した二重口縁広口壺の口縁部である。これらは弥生時代後期後半のものである。

第9土器集中群出土土器（121～131）

121は二重口縁広口壺の体部である。頸部下に突帯をまわし、直線文・波状文で飾る。外面は体部中位を横方向のヘラミガキで、下反部を縦方向のヘラミガキで仕上げる。122はタマネギ形の体部に長く伸びた頸部をもつ壺である。123はタタキ成形の壺である。内面は横方向のハケで仕上げる。124～129もタタキ成形の壺である。126・127は口縁部の端をわずかにつまみ上げる。128は内面を縦方向のヘラケズリで仕上げる。130は脚台をもった鉢である。131は壺蓋である。これらの土器は弥生時代終末期後半のものである。

第10土器集中群出土土器（132～138）

132は偏球形の体部に長く伸びた頸がつく壺である。外面にはハケ目が認められる。133は口縁部が内側にすぼまる鉢である。内面はハケで仕上げる。134はタタキ成形の有孔鉢である。内面をハケで仕上げる。135はタタキ成形の壺の底部である。外面をハケで仕上げる。136は低い脚台をもつ鉢の底部である。137は漏斗形にひらく脚部をもつ高杯の脚部である。外面をヘラミガキ、内面をハケで仕上げる。杯部は複合口縁をもつタイプのものであろう。138は器台の脚部である。

包含層出土土器（139～313）

139～149・151・153・157は口縁部を上方に拡張する二重口縁広口壺である。139は口縁部外面に2個一対の竹管文を施す円形浮文を貼付する。154・155は口縁部端を上方につまみ上げた広口壺である。156は外面をハケ、内面をヘラケズリで仕上げた壺である。150・152・158は口縁部を上方に拡張する器台の受け部である。159・160は小型の広口壺の口縁部である。161は縦長の体部に短く外反する口縁部がつく短頸広口壺である。タタキで成形されており、内外面をハケで仕上げる。162～169は斜め上方に直線的に立ち上がる口縁をもつ直口壺である。166～168はタタキで成形される。170は外面を竹管文・竹管文を施す円形浮文、内面を櫛描波状文で飾る二重口縁広口壺である。

172・173はタタキ成形の壺である。173は内面をヘラケズリで仕上げる。174・175は口縁部の屈曲が弱い壺である。175は内外面をハケで仕上げる。176～179は単純なくの字形の口縁をもつた壺である。

180・181は丸底の小型の壺である。182は底部がやや尖り気味の壺である。底部内面付近をハケで仕上げる。183～192は薄い器壁の体部に強く屈曲し長く伸びる口縁がついた庄内・布留系の壺である。183は外面はハケ、内面はヘラケズリで仕上げる。

193～200は複合口縁の壺である。195は典型的な山陰系の壺である。199はタタキで成形する。200は外面に擬凹線を施す。201は口縁端部を肥厚させた壺である。202は口縁部を上方に拡張して、外面に擬凹線を施す小型の壺である。体部を打ちにくく。203はくの字形に屈曲する口縁をもった鉢である。

204～207は外反する口縁をさらに上方に拡張した複合口縁の高杯の杯部である。204は口縁部外面に擬凹線を施す。208・211は器台であろう。209・212は庄内・布留系の高杯である。

213～232・235は鉢である。213・217・218は直線的に立ち上がる体部に平底が付く鉢である。214は片口がつく。215・216は丸みを帯びた椀形の鉢である。219は口径よりも器高の方が高く、口縁がやや内湾する鉢である。内面を板ナデで仕上げる。220・221は小型の鉢である。222・223は丸底の鉢である。224・225は底部に1孔を穿つタタキ成形の有孔鉢である。224は内面をハケで仕上げる。226～231は丸底の体部に強く屈曲した口縁部がついた庄内・布留系上器の影響を受けた小型の丸底鉢である。232は口縁部のひびが大きいものである。235は口縁部の端をわずかにつまみあげた鉢である。

233は短い口縁部がつく小型の丸底壺である。234は尖り気味の底を持つ庄内系の壺である。236は複合口縁をもった小型の壺である。237～239・242は脚台付鉢である。239は内面をハケで、242は外面をハケで仕上げる。240・241・243～249は小さな椀型の杯部に大きく抱が開く脚部が付いた小型低脚高杯である。250は3方に円形の透孔を入れた器台の脚部である。251・252は内湾した口縁をもつ高杯の杯部である。253～256は大きく上方に拡張する複合口縁をもった山陰系の壺である。256は内面を横方向へのヘラケズリが仕上げる。257はわずかに外反する口縁がつく壺である。258は複合口縁の一次口縁が通常よりも伸びた壺である。

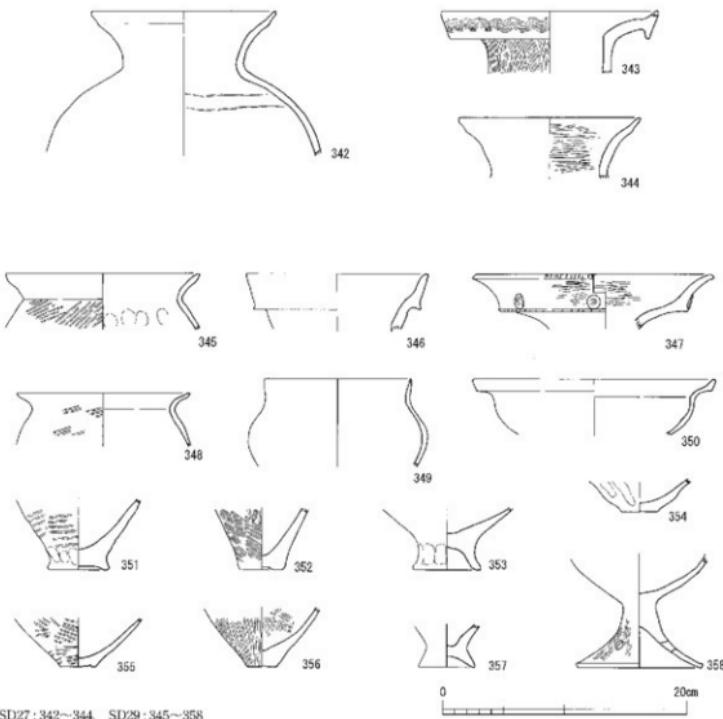
259～269は器台である。259は受け部外面に擬凹線を施す。260～262は受け部に内側に屈曲する短い口縁がついた器台である。263～267は受け部に外反する口縁がついた器台である。263は内面を細かいヘラミガキで仕上げる。268はよく発達した複合口縁をもつ器台である。受け部は内外面ともに横方向のヘラミガキで仕上げ、脚部は外面を縱方向のヘラミガキで、内面を横方向のヘラケズリで仕上げる。269は受け部に円形の透孔を配したものである。

270～286は小型器台である。270～273は脚部と受け部の高さがほぼ等しく、貫通するものである。274～282は浅い受け部に高い脚部が付き、貫通するものである。276は内外面ともにハケで仕上げ、277・280は外面をハケで、279は外面をヘラミガキで仕上げる。283～286は受け部と脚部が貫通しないものである。283は脚部と受け部の高さがほぼ等しく、受け部内外面を横方向の細かいヘラミガキで仕上げ、脚部は外面を縱方向、内面を横方向のハケで仕上げる。

287～307は手捏ねの小型土器である。鉢型・壺型のものがある。308は手焼り形土器である。腹部の破片である。ヘラ描の直線で区画し、斜線で埋めて鋸歯文などの文様を表現する。309は壺の体部の破片である。櫛描の直線文を施す。310も壺の体部の破片である。外面に櫛描の波状文を施す。311は壺の口縁部の破片である。内面と端面に櫛描の波状文を施す。312は壺体部の破片である。竹管文を施す。313は皮袋形の土器である。外面には竹管文を施し、内面はハケで仕上げる。

出土層位不明土器（314～337）

314は球形の体部に細い頸がつく壺である。315は内面をハケで仕上げる壺である。316は口縁部を上方に拡張する複合口縁をもった山陰系の壺である。外面をハケで内面をヘラケズリで仕上げる。317・318は口縁部を短く拡張する壺である。317はタタキ成形である。319は口縁端部をつまみ上げたタタキ成形の壺である。320は体部からゆるやかに続く口縁をもつ壺である。



SD27: 342~344. SD29: 345~358

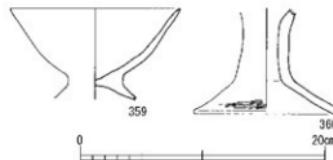
第43図 S D27・29出土の上器

321は外反する口縁をもつ受け部がつく器台である。322~325は小型器台である。324は外面をヘラミガキで仕上げる。326・327は内湾する鉢に低い脚台がつく脚台付鉢である。328・329は口縁を上方に拡張した複合口縁をもつ鉢に低い脚台がつく脚台付鉢である。330は高杯の杯部である。

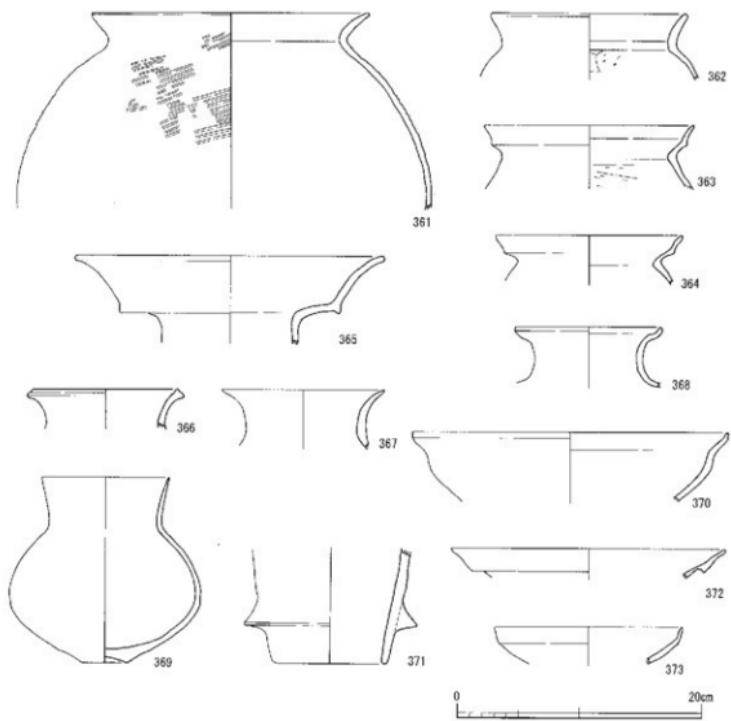
331は浅い鉢形の受け部をもつ器台である。332は

直線的に開く鉢である。333は撫蓋である。334は扁平な体部に短い口縁がつく小型の壺である。外面をハケで仕上げる。335は平底の小型の鉢である。内外面をハケで仕上げる。336・337は櫛描文を施す壺の体部である。

338~341は弥生時代中期の土器である。338は頸部に圧痕突巻を施させた広口壺である。339は内外面ともにハケで仕上げる広口壺の口縁である。340は口縁端部を肥厚させた壺である。外面をハケで仕上げる。341は水平口縁をもつ高杯である。外面をヘラミガキで仕上げる。



第44図 S D34B出土の土器



第45図 出土位置不明の土器

S D27出土土器 (342~344)

342・344は球形の体部に大きく広がる口縁がつく広口壺である。343は口縁部端を上下に拡張し、端面に波状文を施す広口壺である。頸部外面をハケで仕上げる。これらの土器は弥生時代後半～終末期のものである。

S D29出土土器 (345~358)

345はタタキ成形の壺である。346は口縁部外面に粘土を貼付して、複合口縁状の外形をつくる広口壺である。347は口縁部の上下に刻目を施し円形浮文を貼付する二重口縁広口壺である。内外面ともに横方向のヘラミガキで仕上げる。348はタタキ成形の壺である。349は短く上方に立ち上がる頸部をもつ短頸壺である。350は口縁端部を拡張した高杯の杯部もしくは鉢である。351・352・355・356は壺の底部である。356はハケ仕上げであるが、他はタタキ成形である。353・357は脚台付鉢である。354は鉢の底部である。358は高杯である。外面をハケで仕上げる。これらの土器は弥生時代終末期後半のものである。

S D34 B出土土器 (359・360)

359は低い脚台がつく脚台付鉢である。360は筒形の脚部をもつ器台である。これらの土器は弥生時代終末期のものである。

出土位置・層位不明の土器 (361~373)

361は大型のタタキ成形の壺である。362は内面を横方向のヘラケズリで仕上げる壺である。363・364は口縁部を上方に拡張した壺である。363は内面を横方向のヘラケズリで仕上げる。365は二重口縁広口壺である。366は口縁端面に凹線を施す壺である。367はわずかに外反する口縁をもつ壺である。368は口縁端部を上方につまみあげた壺である。369は胴の張った体部をもつ直口壺である。370は外反する口縁をもつ鉢である。371は山陰系の大型壺である。372・373は器台の受け部であろう。

第2節 奈良時代の遺構・遺物

1. 遺構

調査区は、山裾部に相当する上段と谷地形部にあたる下段とに大きく分かれ。調査前の下段は条里地割りに近い長地型の水田3筆となっていた。下段には中世の遺構が多数見聞しているが、奈良時代の遺構は上下段とも非常に少なく、上段で掘立柱建物址2棟、下段で井戸および土坑を1基確認したのみである。

S B 1

上段調査区の中央やや西寄りに位置する。桁行の東を20度ほど北に振る梁間2間、桁行2間の純柱建物址である。梁間・桁行とも約6mの等間であるが、東桁行が1mほど短いために、若干歪んだ平面形態となる。また、この東桁行の中間の柱が南に大きくずれる配置となる。



S B 2

上段調査区の中央部よりやや東に位置し、桁行の東を10度前後南に振る。2×2間の純柱建物址であり、ほぼ2m前後の等間取りである。南の梁間が長いために、S B 1同様若干歪んだ平面形態を呈する。建物址の北から南東にかけて湾曲して流れる溝(S D 1)を伴っている可能性が高い。

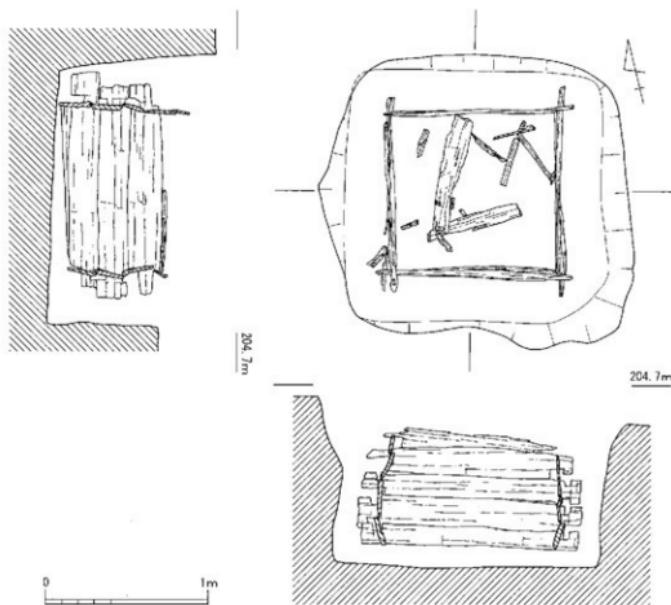


S E02

上段の段落ちのちょうど下場部分に構築されている。長さ140cm強、幅20cm前後(ただし、基盤材は幅約10cmと細いものを用いる)の板材を蒸籠組し、井枢单位で120cm程度の大きさとなる。基盤材のみ上辺のみに組溝を切るが、2段目以降は上下に切り込んでいる。北壁で5段、東壁で4段の井枡が残存するが、上面が削平されているため、何段まで積まれていたかを推察することもできない。曲物等による井筒ではなく、平底の井底となる。掘方の底は東西方向で150cm強、南北方向で150cm弱の隅円方形となる。



第46図 奈良時代の遺構



第47図 S E 2

掘方も北・西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南と東はわずかな傾斜をもって掘る。内部からの遺物の出土は非常に少ない。土器が少数出土しているが、木器の出土はまったくみられない。

S D 1

比較的浅いため、後世の削平を受けているものと思われる。現状でみると、S B 2 の北側約 5 m から残存し、S B 2 の北東隅柱の南を彎曲しながら通り抜けて、南東隅柱の延長線上にあたる下段との段落ち部分で消滅している。S B 2 に伴う雨落ち溝ではないが、S B 2 をあえて避けていることから考えて、同建物址と時間的には共存していたものと思われる。

2. 遺 物 (図版27~29)

B 地区で確認されている奈良時代の遺構は非常に少なく、S B 1・2、S K 2、S D 8・20・24・34、S X 4 (落ち込み状遺構) のみである。よって、他の 2 地区に比べると出土する土器も著しく少ない状

況となっている。

a. S B 1 出土の土器

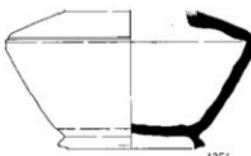
建物址の柱穴内より、須恵器の杯A・杯B各1点が出土している。

第2型式：杯E（1360）口縁部が

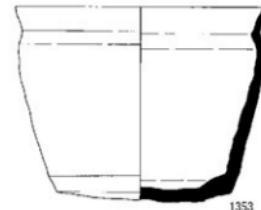
a形態以上に大きく外
湾する。II類の占相に
属する。

杯B（1361）口縁部は

b形態となり、III類に
相当する。



1351



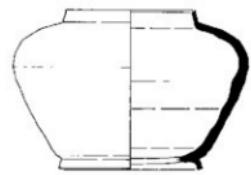
1353

b. SK 2 出土の土器

SK 2 内からは、須恵器杯蓋・
皿A・盤Bの3点が出土している。

第2型式：杯蓋（1362）より第1
型式に近い形態。口径
的にはII類となる。

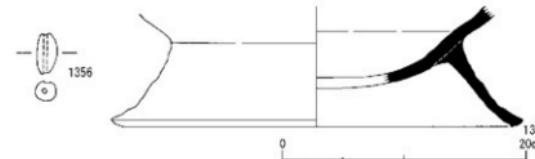
皿A（1363）底部部墳
から底部にかけて丸味
を多く残す。



1352



1354



1356

第48図 S D20・24出土の土器

第3型式：皿B（1364）脚部は短く外面接地する。口縁端部内面には、一条の浅い沈線が巡る。

c. SD 8 出土の土器

須恵器綾椀蓋・円面鏡・高杯が出土している。

第3型式：綾椀蓋（1371）口縁端部は短く垂下する。大井部は平坦で、環状つまみが付く。

高杯（1373）脚部は大きく外湾し、2段の方形透かしを2方向に穿つ。

d. 潟（SD20）

第1型式：鉢D（1354）口縁部は緩やかに外反する。底部は平底となり、脚部は付かない形態となる。

c. 4号塗穴住居址出土の土器

第1型式：杯B（1357）口縁部はa形態となる。口径の大きさからすればI類となる。

範書き文字土器片（1359）細片のため器種は限定できない。破片の左下に判読不明の一文字が
あり、がその右に『一』の文字がみられる。

e. 潟（SD24）

第1型式：壺L（1351）体部は算盤玉形となり、脚部は内面接地する。肩部に二条の沈線が巡る。

壺A（1352）肩部は丸味をもって張り、短い口縁部はやや内傾する。

壺B（1353）口縁は小さく「く」の字に外反し、底部径の割に体部長が短い形態となる。

壺（1355）壺の脚部と思われる。比較的長く、大きく踏ん張った端部は内面接地する。

f. SD34出土の土器

須恵器杯A・杯B・杯E・提瓶が出土。

第1型式：杯E（1365・1366）いずれもc形態の体部をもつ。1365はⅢ類に、1366はⅡ類に分類できる。

第2型式：杯B（1369）：口縁端部はb形態。Ⅲ類に属する。

第3型式：杯A（1367）：口縁部は直線的に開き、Ⅱ類となる。

古墳時代後期：提瓶（1370）体部は丸味を残す。体部の表面には同心円状の、さらに頸部直下には二帯の備書き文が巡る。

g. S X 4出土の土器

須恵器の壺C・杯B・碗C・平蓋が出土している。

第1型式：壺C（1374）口縁部は内傾気味に極度に立ち上がる。肩部は頸部直下の高い位置にある。

碗C（1375）口縁部は極わずかに内湾し、脚部は大きく開き、内面接地する。

平瓶（1377）天井部は卵形に脚らみ、肩部外面に二条の、口縁部には一条の沈線が巡る。

第2型式：杯B（1376）口縁部はb形態となり、Ⅳ類に属する。

i. 包含層出土の土器

奈良時代のプライマリーナな包含層ではなく、古墳時代前半以降の遺物を共伴している。遺構が少ないためか、そこから出土する奈良時代の上器も少数となった。いずれも須恵器であり、杯A・杯蓋・杯B・皿A・皿B・鉢・高杯・壺A・壺K蓋・壺L・鉢A・平瓶・甕A・甕B・円面鏡等が出土している。数量的には少ないが、器種としては基本的なものが揃っている。

第1型式：杯E（1378～1386）1378は古墳時代の杯H蓋の可能性もある。形態的には1382がa形態、1381・1383・1385・1386が^ac形態、1379・1380はその中間的な形態となる。口径的には1385・1386がⅠ類、1379・1384がⅡ類、それ以外がⅢ類となる。

杯蓋（1390～1392）1390・1391は内面にかえりを持つ。1392は笠形の形態となり、口縁端部が断面三角形となって垂下する。3者ともⅢ類の杯とセットになる。

杯B（1397～1406）1400・1405以外はb形態となる。口径的には1399・1401・1403がⅠ類となり、1398がⅡ類、1400・1402がⅢ類、1405・1406がⅣ類となる。

鉢A（1419・1420）1419は平底で、口縁部は長く直立する。1420の口縁部は内湾しながら立ち上がる。1419は一型式古くなる可能性がある。

高杯（1421）杯Aの第1型式と同様内湾する杯部を持つ。

壺K（1428）大きく外湾しながら開く脚部のみである。端部は断面三角形となり、内面接地する。底部との接合部付近には円形の透かしが四方に穿たれる。

甕蓋（1429）天井部はほぼ平坦。口縁部は長く、わずかに内傾しながら伸びる。

壺A（1431）肩部は高い位置で大きく張り、外面には沈線が一条巡る。

甕A（1437）口縁部は水平に近く大きく開き、口縁端部直下の外面には突帯が巡る。

甕（1443）口縁端部は内傾して内側に肥厚する。口縁部外面中央には二条の沈線が巡る。

第2型式：杯A（1387・1389）口縁部はa形態。1387はⅠ類の古相となり、1389はⅡ類の新相となる。

杯蓋（1393・1394）1394は口縁端部が長く垂下する。1393は半うじて口縁端部が断面三角形の形態を残す。両者ともⅢ類に伴う。

杯B（1407～1410）1407のみ口縁部がb形態となる。口径別では、1407がⅠ類、1408・1409がⅢ類、1410がⅣ類となる。1408・1410は第1型式の可能性もある。

高杯（1422・1423）裾に向かって外湾しながら開く。外面中央に沈線が一条巡る。

- 壺K (1426・1427) いずれも、大きく開く脚部である。外面中央部に高い稜を持つ。
- 壺蓋 (1430) 大型の高い宝珠状つまみが付く。口縁部は長く垂下し、端部は小さく外反する。
- 壺A (1438) 口縁部は大きく外済し、端部下方の外面には先い退化した波状文を描く。
- 壺A (1440) 口縁端部は外側に幅広く肥厚する。その口縁端部と口縁部の外面に三条の沈線が巡り、その間に櫛描き列点文が配される。
- 壺B (1444) 口縁部は外済しながら開き、端部は内傾して平坦面となる。

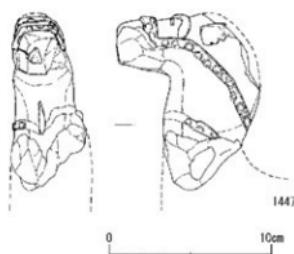
第3型式：杯A (1388) 口縁部はb形態で、II類に属する。

- 杯蓋 (1396) 口縁端部は肥厚する程度となる。(II・III)類の蓋である。
- 椀A (1411) 底体部邊に丸みを持つ。太く短い脚部は、内面接地する。
- 杯B (1413・1414) いずれも (II・III)類に分類されるものである。
- 皿B (1415) 脚部は著しく高い。口縁部は直線的に開き、端部内面には一条の沈線が巡る。
- 皿A (1416・1417) 1416は底体部邊を斜めにヘラケズリし、1417は底部のみをヘラキリする。
- 壺A (1432) 口縁部は内傾しながら長く伸びる。肩部はかなり撫肩となる。
- 鉢 (1433) 肩部は中央部上方にあり、口径より若干大きい。底部は平底となる。
- 壺A (1442) 口縁部は外済しながら大きく開き、端部は上下に肥厚して垂直な平坦面となる。
- 壺B (1445) 口縁部は大きく外済し、端部は丸く納まる。

第4型式：壺L (1424) 口縁部は水平に近く外済し、端部は外反しながら長く立ち上がる。

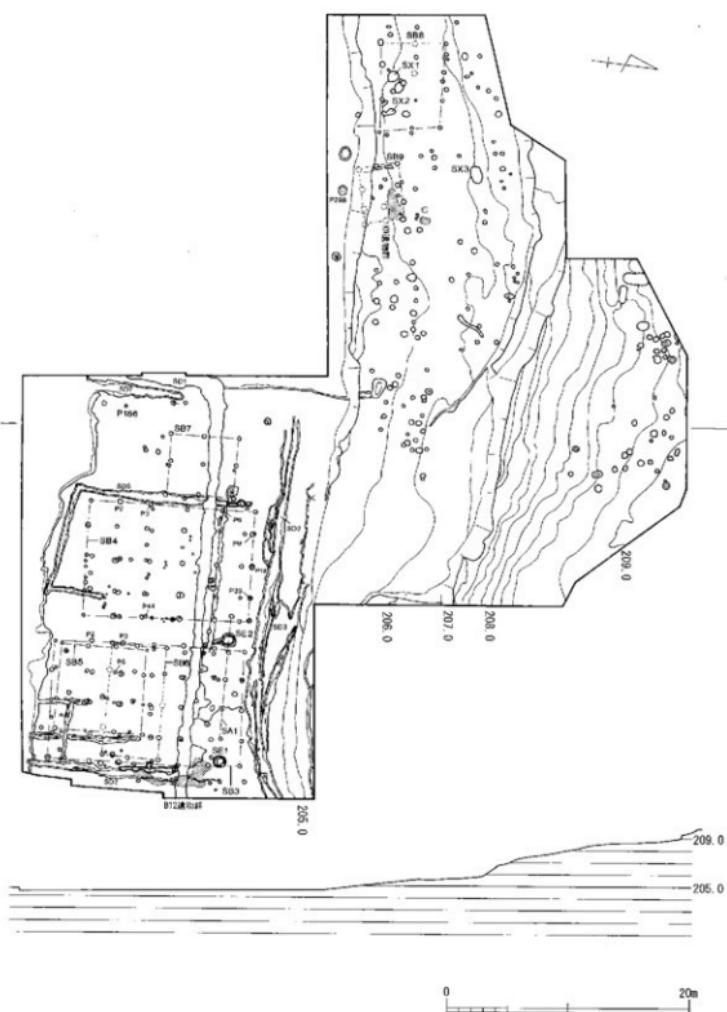
- 鉢 (1434) 脚部最大径はその中央にあり、口縁部は脚部径より大きく外反する。
- 平瓶 (1435) 脚部は腰高の算盤玉型である。底部は平底となるが、口縁部は欠損する。

土馬 (1447) 粘土塊から作り出す充填形態のものであるが、頭部・頸部のみが残存する。現長は約10.8cmを測る。馬具を粘土紐で作りつける飾り馬であり、手綱には竹管による装飾が施されている。



第49図 土馬

第3節 平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物



1. 遺構

調査区の地形は、北側の斜面部分と南側の2段に削平された平坦地部分からなる。この時期の遺構は、南側に展開する平坦地部分より、掘立柱建物7棟、井戸2基、鐵治関連遺構の焼土坑3基をはじめ建物に伴う雨落ち溝などの遺構が確認されている。

掘立柱建物は、調査区上段の平坦地西側と下段の平坦地に占地しており、下段平坦地部分に集中している。この地域の建物は、大型の建物が2棟並列して建てられている。とくに東側の建物は3棟の規模の異なる掘立柱建物の身舎が重なって確認されており、同一場所での建て替えが行われたことを示している。この一群の建物の中には掘列を伴う建物も含まれている。

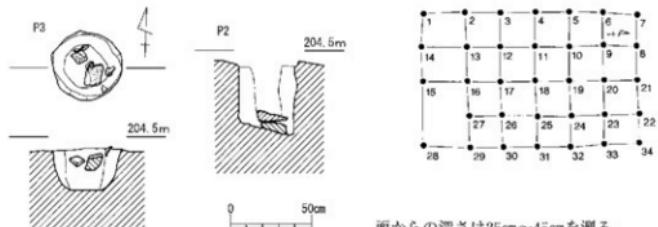
井戸は2基確認されており、いずれも下段の平坦地に掘られている。井戸は、東西に並列する建物の北東隅に近接しているなど、井戸の占地には規則性が認められる。井戸の構造について言及すると、縦板の井側をもつものと、素掘と考えられる井戸の両者がある。

鐵治関連の土坑が3基確認されている。いずれの土坑も、上段の平坦地西側に集中して存在する。これらの土坑は、多量の炭片と焼土、炉壁粘土に混じって鐵造剝片などの鐵治関連遺物が出土しているものもあり、鐵冶炉（SX 1・3）と鐵治関連遺構（SX25）と考えている。鐵冶炉のなかには、掘立柱建物の身舎と重なって存在するものもあり、その状況から上屋構造をもつ鐵冶炉の存在が想起される。

S B 3

調査区下段平坦地東半部に位置する。S B 5・6と重複している。西側は、約2mの間隔をあけS B 4が並列している。建物は34個の柱穴で構成される4間×6間の建物である。

梁行方向9.5m、桁行方向15.6mを測り、調査区内の掘立柱建物群の中では最大規模の建物である。柱間は桁行が2.5m～3.0m、梁行が2.0m～2.5mである。柱穴掘方は35cm～絶45cmの円形を呈し、確認



第51図 S B 3柱穴

面からの深さは25cm～45cmを測る。

確認できた柱痕の大きさは、径20cm前後である。P 2底面には楕石が置かれている。

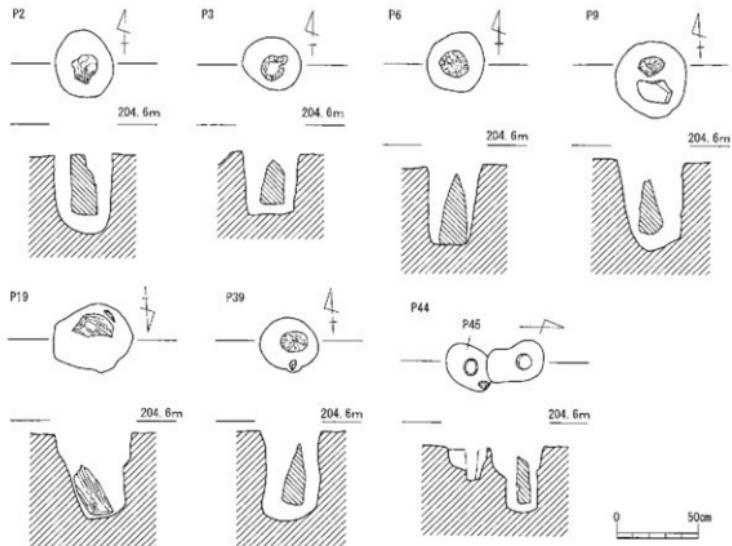
棟軸方位は、N 5° Wを示す。

S B 4

調査区下段平坦地西半部に位置する。東側にはS B 3・5・6が並列している。西側には60cmの間隔をあけS B 7が並列する。

建物は48個の柱穴で構成される4間×5間の北側に庇をもつ縦柱建





第52図 S B 4 柱穴

物である。梁行方向9m、庇部分を含めた桁行方向13.7mの規模の大型の建物である。

柱間は、桁行2.2m～3.0m、梁行が2m～2.5mを測る。柱穴掘方は径30cm～45cmの円形を呈し、確認面からの深さは35cm～45cmを測る。P 2・3・6・9・19・39・44には柱根が残存している。残存する柱根の大きさは径15cm前後である。様軸方位はN 3° Wを示す。

建物に伴う柱穴のうち、北から4列目のP 14・24・33・45と5列目のP 26・31・47の北側で、柱穴が並列もしくは重複している。また、6列目のP 27・29付近にも同様の柱穴が認められる。

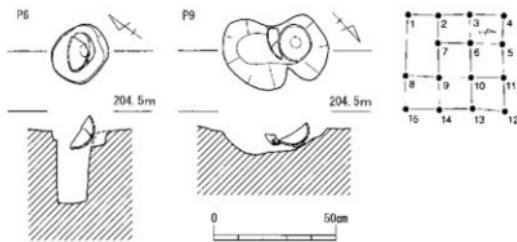
別建物の可能性もあるが、この部分の柱の建て替えが行われた可能性を考えている。

S B 5

調査区下段平坦地東半

部に位置する。S B 3・6と身舎が重なる。

建物は、15個の柱穴で構成される3間×3間の方形の建物である。仮に東西方向を梁行としたばかり、梁行方向6.9m、桁行方向7.0mの小型の建物である。



第53図 S B 5 柱穴

柱間は梁行2.0m~2.5m、桁行2.2m~2.5mである。柱穴掘方は径20cm前後の比較的小型の柱穴で、平面形は円形を呈する。確認面からの深さは15cm~30cmである。主軸方位はN 3° 30' Wを示す。

S B 6

調査区下段平坦地東部に位置する。S B 3・5と身舎が重なる。

建物は、消滅あるいは未確認の柱穴を含め、15個の柱穴で構成された2間×4間の総柱建物と推定している。

梁行方向4.5m、桁行方向9.3mの小型の建物である。

柱間は、桁行2.0m~2.5m、梁行2.0m前後である。柱穴掘方は径20cm~30cmの円形を呈し、確認面からの深さは30cm前後である。

棟軸方位はN 87° 30' Eを示す。



S B 7

調査区下段平坦地西端部に位置する。建物の東側にはS B 4が並列する。建物は9個の柱穴で構成された2間×2間の方形の建物である。仮に東西梁行としたばかり、梁行方向5.0m、桁行方向5.5mの小型の建物である。

柱間は桁行が2.8m前後、梁行が2.2m~2.7mである。柱穴掘方は径30cm前後の円形を呈し、確認面からの深さは25cm前後を測る。

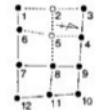
主軸方位は、N 4° Wを示す。



S B 8

調査区上段平坦地の西端に位置する。身舎内にS X 1・2の鍛冶関連の焼土土坑があり、この上屋施設と考えられる建物である。東側にはS D 9が近接する。消滅あるいは未確認の柱穴を含め12個の柱穴で構成される2間×3間の小型の建物を復元したが、この建物が鍛冶の上屋構造の可能性があることを考慮すると、復元したP 2・5の柱穴を除外し、そこに作業場としての空間を想定することも可能である。

梁行方向5.0m、桁行方向は7.0mの東西方向に長い建物である。柱間は、梁行2.1m~2.5m、桁行が2.3m前後を測る。柱穴の掘方は、30cm~40cmの円形を呈し、確認面からの深さは25cm前後と浅い。棟軸方位は、N 85° Eを示す。



S B 9

調査区上段平坦地の西端に位置する。西側には、S B 8が近接する。消滅あるいは未確認の柱穴を含め12個の柱穴で構成される2間×3間の建物と推定される。梁行方向3.2m、桁行方向4.9m前後の小型の建物である。

柱間は桁行1.5m前後、梁行1.5m前後と推定される。柱穴掘方は径30cm前後の円形を呈し、確認面からの深さは25cm前後である。棟軸方位はN 73° Eを示す。



S D 1

調査区の下段平坦地のはば中央を東西方向に流れる近現代の用水路である。江戸時代から近現代の土器に混じり平安時代から鎌倉時代の土器が出土している。

S D 2

調査区下段平坦地の北辺部を東西方向にはしる溝である。調査区東端で南北方向にはしる溝と連結して「T」字状に流れていると理解している。溝は、北辺の部分で幅60cm、確認面からの深さは15cm前後と浅い。東端部分は、幅40cm~1.2m、確認面からの深さは15cm~20cmを測る。

調査時の所見では、北辺の溝は、上段の平坦地と下段の平坦地の境界に沿ってはしっており、上段平坦地から流失する雨水を受け排水する機能を有していたと考えている。また東端の溝部分については掘立柱建物の東辺に沿って近接して流れていることから、屋敷を限る溝ではなく同建物群に対する排水の機能をもって掘り込まれたと理解している。

また、東端の溝の北半では、溝を覆うように焼土・炭片が検出された。この中にはおそらくB地区の掘立柱建物群の最終段階に廃棄されたと思われる土器が一括で出土している(B12遺物群)。

S D 3

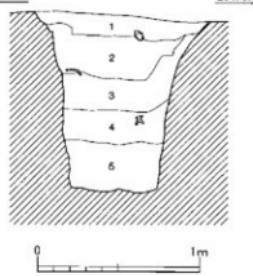
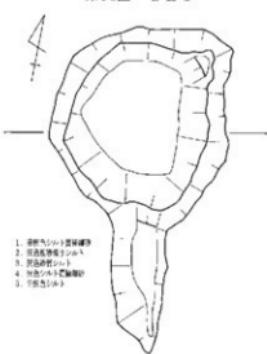
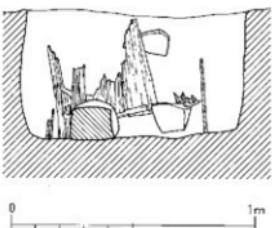
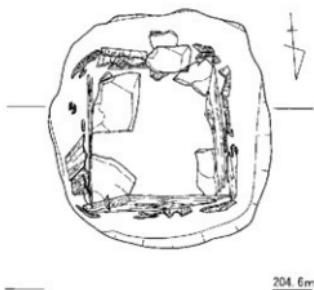
調査区下段平坦地の北側に位置する溝である。溝の東端はS D 2と重複するが、両溝の新旧関係は明らかにできなかった。溝幅は60cm~1m前後で、確認面からの深さは20cm前後である。

S D 6

調査区下段平坦地の西側に「コ」字状に屈曲している溝である。溝の西側は、S B 4の西辺に沿って南北方向に流れ、南西隅で南東方向に延び、調査区南辺の低位部分に至る。溝の東部分の先端は、S B 4の身舎内に至る。この溝の配置から、同溝はS B 4の排水機能をもっていたと理解している。

S A 1

調査区下段平坦地の東側、北辺に位置する東西方向の横列である。横列の東端はS E 1が近接する。

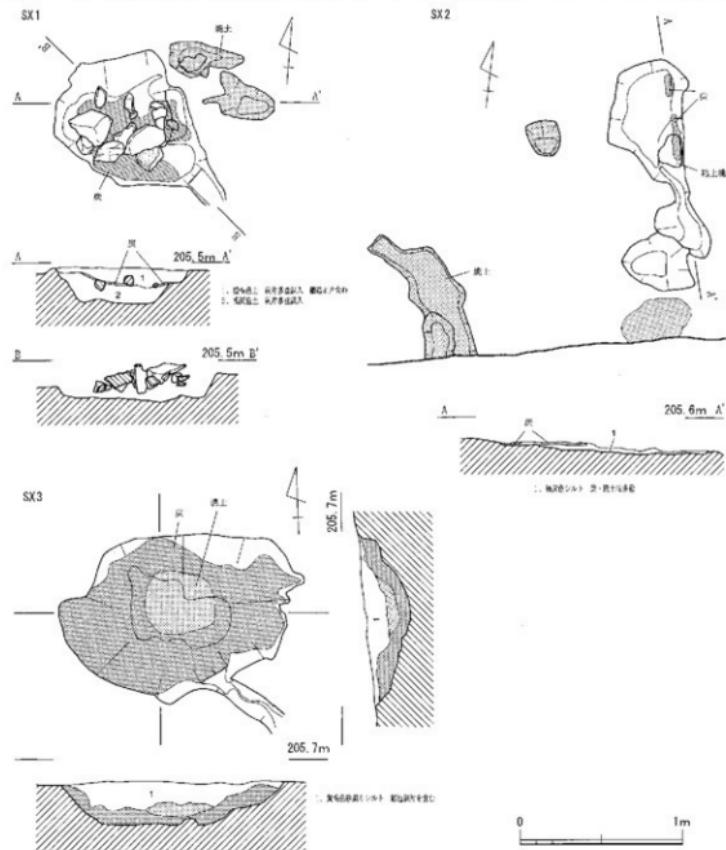


第54図 S E 1

5個の柱穴からなる。柱間は2.5m~3mで、掘方は径30cm~40cmの円形を呈する。確認面からの深さは、25cm~30cmである。柵列の方位は、N87°Eで、S B 5・6の築行と同方向を示す。柵列とS B 5北辺までの距離は6.5m、S B 6北辺までは5mである。

S E 1

調査区下段平坦地の北東隅に位置する縦板組の井戸である。井戸掘方は95cm×90cmの規模で、平面形は隅丸方形を呈する。確認面からの深さは50cm前後である。掘方底面には、幅3cm~5cm、長さ50cm前後の角材で1辺55cm前後の井戸枠を作っている。井側は、幅15cm前後、長さ40cm以上、厚さ1cm前後の板材を、縦方向に並べて作られている。井戸枠内の各隅には20cm×25cm前後の河原石を置き、井側を固定している。井側の構造は、遺存状況が悪く不明瞭であるが、縦板組横棟どめないしは縦板組無支持井



第56図 S X 1・2・3

戸と理解している。

S E 2

調査区下段平坦地の北辺、中央に位置する素掘の井戸である。井戸は、 $1.5m \times 1.1m$ の規模で、平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは $1.1m$ 前後を測る。井戸上端の南には幅 $30cm$ 、長さ $80cm$ の溝がつながり、南に延びる。

S X 1

調査区上段平坦地西端に位置する。鍛冶炉と理解している土坑である。S B 8 の身合と重なり、東側 $1m$ の所には S X 2 が近接する。土坑の東側には焼土が充満したピットが 2 個確認されている。土坑は $1m \times 75cm$ の不整楕円形を呈し、確認面からの深さは $20cm$ と浅い。土坑内には、円礫・亜角礫の河原石が投棄された状況で出土している。肉眼による観察では礫が二次的に被熱した痕跡は認められなかった。埋土は上下 2 層に分かれ、両層の間に炭層が認められ、この炭層上面で投棄された河原石が出土している。また上層中より鍛造剣片が多量に出土している。

また、土坑の東側には浅い凹みのなかに焼土が認められる。

S X 2

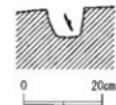
調査区上段平坦地西端に位置する。鍛冶間連遺構と理解している土坑である。S B 8 の身合と重なり西側 $1m$ の所には S X 1 が近接する。土坑の西側には焼土が充満した溝や焼土面が確認されている。土坑は $1.75m \times 47cm$ の規模で、南北に長い溝状を呈している。確認面からの深さは $3cm$ 前後で、浅く窪んだ状況である。土坑内には粘土塊や炭が認められる。鍛造剣片は含まれていない。

S X 3

調査区上段平坦地西側に位置する。鍛冶炉と理解している土坑である。土坑の南北方向 $8m$ の所には S X 1・2 がある。土坑は、 $1.4m \times 1m$ の規模で、東西方向に長い不整楕円形を呈している。底面には炭が数かれて、その上面で焼土が確認されている。埋土中からは鍛造剣片が出土している。

P 186

調査区下段平坦地南西隅に位置する。小型の素文鏡が埋置されたピットである。径 $10cm$ にも満たない極めて小さいピットで、確認面からの深さは $7cm$ と浅い。鏡はピットの西寄りに斜めにして埋置されている。ピットの規模から鏡を埋めるために掘られたと理解でき、地鎮に関連した遺構と考えられる。



第57図 P 186

2. 遺物 (図版38・39)

B地区から出土した遺物は、須恵器碗・皿、黒色土器碗・皿、瓦器碗・皿、上師器皿、中国製磁器など、他の調査区に比べ多様である。この出土の状況は、当地区で確認された遺構が西木之部遺跡の最終段階のものが多い事に起因している。以下、各遺構ごとに遺物の概要を述べる。

SB 1

土師器・瓦器・須恵器・中国製白磁が出土している。いずれも、同建物址を構成する柱穴内より出土している。

上師器は、小型の托b類 (2147) がある。2148は体部が指押さえの大皿II類である。小皿は出土していない。

瓦器は小皿のみ出土している。丸底で口縁が外反する I b類 (2149・2150) である。

須恵器は、皿と椀が出土している。皿は底部糸切りの平底、口縁が大きく立ち上がる II a類 (2151) に分類できる。椀は底部糸切り A 2類で、底部が平底の III類 (2152・2153) に分類される。

このほか東播系須恵器捏鉢 (2154) と玉縁の口縁をもつ白磁碗 (2156) と白磁皿が出土している。

SB 2

土師器皿、黒色土器碗、瓦器碗・皿、須恵器碗・皿が柱穴内より出土している。

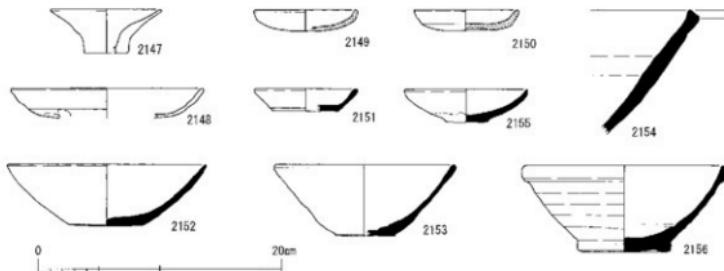
上師器小皿は、底部回転糸切りの I類と指押さえの II類がある。I類は、平底の b類 (2157・2161) と短く立ち上がる口縁をもつ c類 (2158) がある。大皿は、指押さえ技法の II類 (2164) と底部回転糸切りの I類 (2165) がある。

瓦器は小皿と椀が出土している。小皿は丸底で口縁が内湾する I a類 (2167) と外反する I b類 (2166) がある。椀は摩滅のため暗文の有無は不明であるが、器形の特徴から高台の断面が三角形の I b類に分類できる。黒色土器は、古相の I a類が出土している。

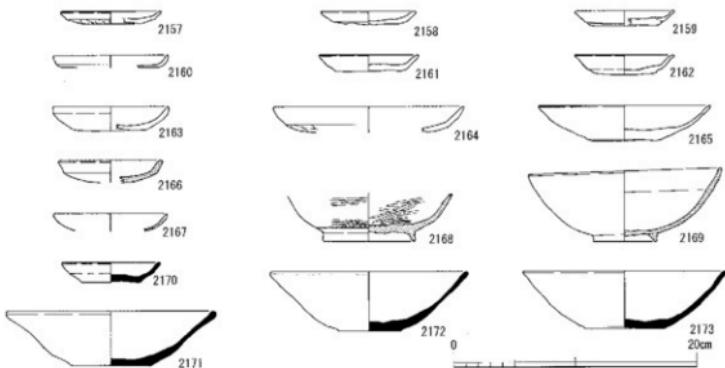
須恵器は皿と椀が出土している。2170の皿は、平底で口縁が大きく外に聞く皿A 1 II a類に分類される。椀 (2171・2172・2173) はすべて回転糸切り底の A 2類で、平底化した III類に該当する。

SB 3

土師器小皿が出土している。いずれも柱穴内からの出土である。回転糸切りの平底をもつ皿 I b類



第58図 SB 3 出土の土器



第59図 SB 4 出土の土器

(2174) と体部指押さえで口縁が内済する IIa類
(2175・2176) がある。

2177は主縁口縁の白磁である。

SB 4

2178は退化した平高台で底径／口徑率の大きな
A 2 IIa類に分類できるものである。

SB 5

2179は柱穴内より出土した土師器小皿である。

口縁が内済する深い皿で、小杯に該当する器形である

SA 1

180は欄列柱穴内より出土した土師器小皿である。IIb類に分類される。

柱穴群

建物として識別できなかった柱穴より出土したものに、

第61図SB 7

上師器小皿と須恵器碗がある。P155出土の土師器Ⅲ



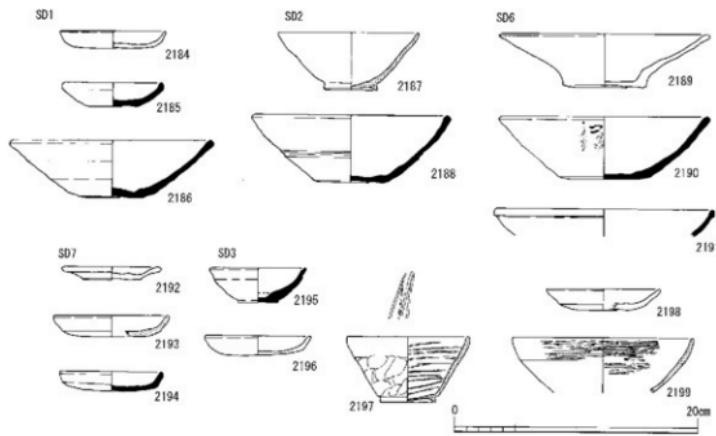
第62図 SA 1

(2181) は指押さえで短く立ち上がる口縁をもつ IIb類に分類される。P298
出土の須恵器碗 (2182) は同軸糸切りの平高台をもち、内底に強い段差をも
つA 2 I類の範疇におさまると考えられる。またP123出土の須恵器碗 (2183)
は退化した平高台をもち、A 2 I類よりは後出するA 2 IIa類に分類される。

SD 1

溝内から出土した土器は、土師器小皿、須恵器碗・皿がある。

土師器小皿 (2184) は、指押さえで短く立ち上がる口縁をもつ IIb類である。須恵器碗 (2186) は回
軸糸切り底で、内底に段差のない碗A 2 III類に比定される。皿 (2185) は平底の II類の範疇に収まると
考えている。



第63図 SD 1・2・6・7 出土の土器

SD 2

溝内より出土した土器は、瓦器碗と須恵器碗がある。このうち瓦器碗は完形であるが、摩滅が著しく調整は不明である。2187の瓦器碗は、退化した断面三角形の高台をもつII類に比定できる。須恵器碗（2188）は、平底化したA2 III類に分類される。外面体部に二条の沈線が巡る特徴がある。

SD 6

土師器托、須恵器碗、白磁碗が出土している。土師器は、大振りの托a類（2189）である。須恵器碗（2190）は、回転糸切りの平底化したIII類に比定される。外面体部には字と思われる墨書が認められるが、字の内容は不明である。2191は小さな玉縁口縁の白磁碗である。

SD 7

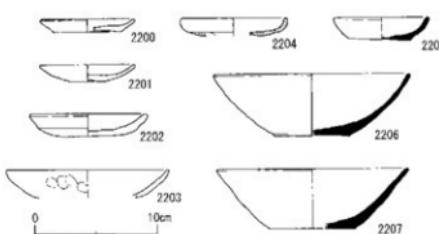
土師器小皿、瓦器小皿、須恵器小皿が出土している。土師器小皿（2192）は底部回転糸切りの退化した半高台をもつIa類に分類される。また瓦器小皿（2193）は、体部指押さえで、口縁が内済して立ち上がるIIa類に属すると考えられる。2194は、丸底のA2類に該当し、土師器皿を模倣した小皿である。

SD 3

須恵器皿、土師器小皿、瓦器碗が出土している。須恵器皿（2195）は、底部回転糸切りの半高台をもつ皿I類の範疇におさまると考えている。土師器小皿は体部指押さえのII類で、口縁が内済するa類（2198）と、口縁が短く立ち上がるb類（2196）がある。瓦器碗は、いずれも摩耗が著しく遺存状況は悪い。2197は内底にジグザグ文のある碗である。外面に暗文が施されず、退化した高台をもつII類の特徴をもち瓦器のなかでも新しい段階のものである。

SE 1

土師器皿、瓦器碗、須恵器皿、碗が出土している。2200の土師器小皿は、井戸掘方内より出土している。底部回転糸切りのI類で、短く立ち上がる口縁をもつc類に分類される。2201もI類の皿で、退化



第64図 SE 1 出土の土器

立ち上がるA 1 II a類である。碗は底部回転糸切りで底部平底のA 2 III類である。

SE 1出土土器のうち、2200・2202の土器皿は井戸内より、その他は井戸枠内より出土している。

SE 2

土師器皿、瓦器椀、須恵器皿、碗が出土している。

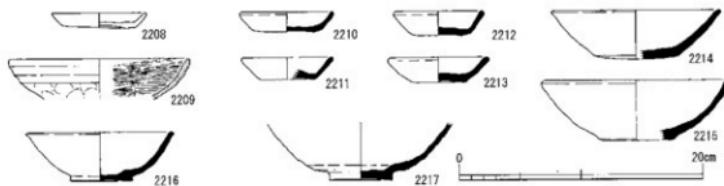
2208の土師器皿は底部回転糸切りで、口縁が短く立ち上がるI b類である。瓦器椀（2209）は内面にジグザグ文・螺旋状文の暗文が施されるが、外面には暗文は確認されない。

須恵器皿（2210）は完形で、回転糸切りのA 1類に属し、半底のII b類に細分される。2211～2213の須恵器皿は、同じA 1 II類で、口縁が大きく立ち上がるa類に細分される。2213の底部には板目状圧痕が残る。2210と2212は完形である。

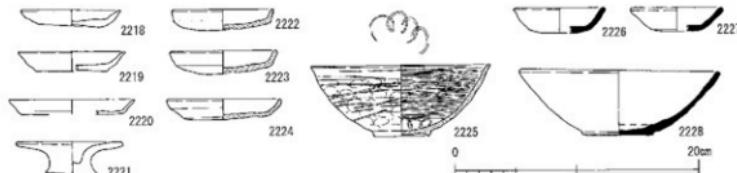
B12遺物群

SD 2およびその周辺に一括廃棄されたと理解している遺物群である。

土師器小皿・托、瓦器皿・碗、須恵器皿・椀が出土している。土師器小皿は、底部回転糸切りのI類に属し、平底のI b類（2219・2220）と口縁が短く立ち上がるI c類がある。2221の托は、小振りのb類



第65図 SE 2 出土の土器



第66図 B12遺物群出土の土器

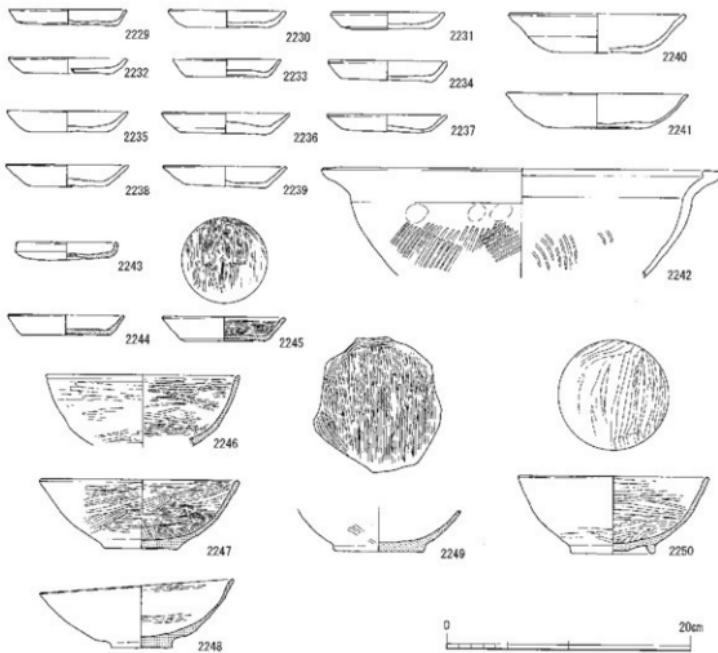
である。瓦器皿はいずれも完形で、丸底で外反する I b 類 (2222・2223) と平底気味で口縁が内湾する II a 類 (2224) がある。2225 の瓦器碗は、内面にループ・螺旋状の暗文、外面にも暗文が認められ、退化した高台をもつ I c 類に分類できる。須恵器小皿 (2226・2227) は平底で、大きく開く口縁をもつ I 1 II a 類に分類される。須恵器碗 (2228) は、底部回転糸切りの A 2 類の碗で、退化した平高台をもつ II a 類の碗である。

K 9 遺物群

土師器小皿・鉢、黒色土器碗・皿、瓦器皿・碗が出土している。調査時の見解では、一括発表された出土状況を示す。同様の出土状況を示す B12 遺物群と同様、土器の完形率が高いのが特徴である。

土師器小皿で底部回転糸切りの I 類は、平底の b 類 (2229~2231・2233~2237・2239) と口縁が短く立ち上がる I c 類がある。大皿は、形態的には大皿 I 類に似るが、底部の切り離し回転ヘラ切りの可能性をもつ一群 (2238・2240・2241) である。遺存状況が悪いため今回の分類から除外している。

黒色土器皿は、全面にミガキが施された平底の b 類である。碗は半高台の II 類と輪高台の I b 類 (2250) が出土している。I b 類は、底部の切り離しを回転糸切りで行った後、断面三角形の高台を貼り付けた特殊な成形の碗である。平高台をもつ I 類碗は、高台の大きい a 類 (2247・2249) と小さい b 類 (2248) に細分される。



第67図 K 9 遺物群出土の土器

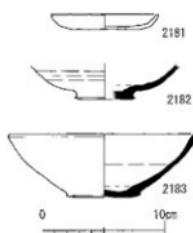
包含層出土土器



第68図 緑釉



第69図 合子



第70図 柱穴群出土の土器

包含層からは、土師器小皿・杯、黒色土器皿・椀、瓦器皿・杯・椀、恵器皿・耳皿・椀・瓶・鉢などはじめ、白磁・青磁碗などが出土している。とくに輸入陶磁器はA～C地区のなかで最も多い出土量を誇る。

また、緑釉皿が1点出土している。

土師器は底部ヘラ切りの杯（2261）をはじめ退化した平高台をもつIa類（2252～2256）、平底のIb類（2257～2260）、口縁が短く立ち上がるIc類がある。

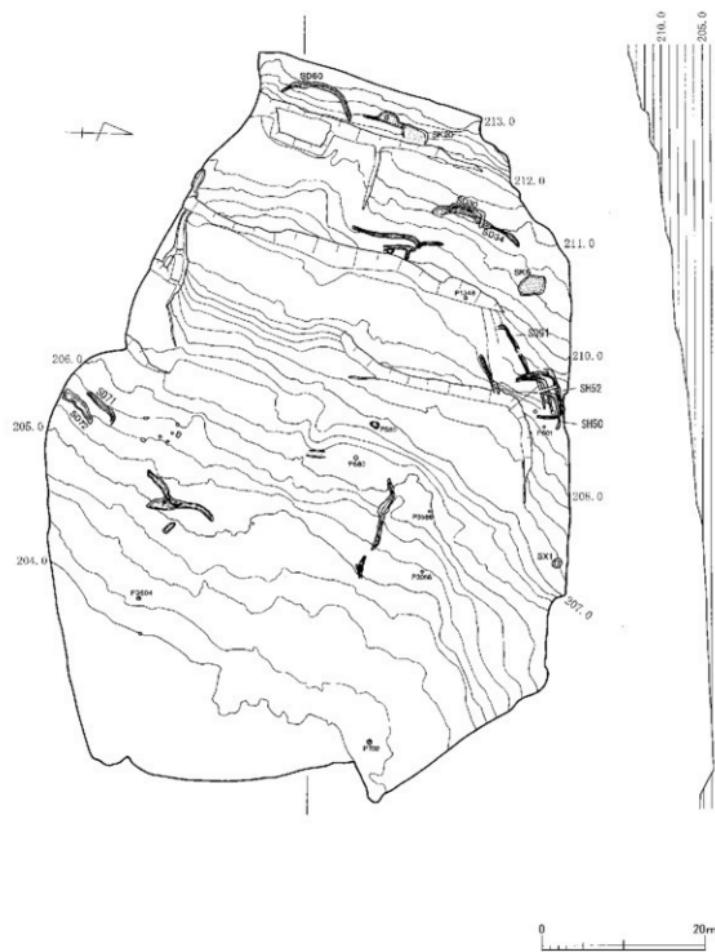
黒色土器は、全面にミガキを施した平底のIIb類（2262）をはじめ輪高台のIa類（2263）と平高台のIIb類（2264）がある。瓦器は丸底のIa類（2266・2268・2270・2272）とIb類（2265・2273・2274）と平底気味のIIa類（2267・2269・2271・2275・2276）、IIb類（2277）がある。これ以外に高台付きの杯（2278～2280）が出土している。椀は高台断面が四角形のIa類（2282）と断面三角形のIb類（2281）がある。須恵器皿は糸切り底の平高台をもつIA1I類（2286・2297～2299）と平底のIIa類（2283～2285・2287～2292・2296）とIIb類（2294・2295）がある。椀は、すべて回転糸切りによる切り離しのA2類で、平高台のIb類（2303・2304）とIIa類（2306・2311～2313）に、IIb類（2307・2309・2310）と平底のIII類（2314～2322）がある。これ以外に耳皿（2324）、底部ヘラ切りの瓶（2325）や鉢（2323）がある。注目すべきものとしては、高台内無釉の緑釉皿がある。

B地区の最大の特徴は、輸入陶磁器の出土が多いことである。

輸入陶磁器は、白磁皿・碗と青磁皿・碗、青白磁合子が出土している。白磁碗は口縁端部が肥厚し玉緑化する2330～2334の一群と、口縁端部が反る端反口縁をもつ2335～2342の一群がある。青磁は2345・2346の内外面に鶴描き文を施す同安窯系と2347・2348の外間に鶴蓮弁文を施す龍泉窯系の製品がある。とくに350の型作りの青白磁合子は、底部に「[] 家カ 合子 [] 記カ」の銘が陽刻されている。おそらく景德鎮窯の製品と思われる。

第5章 C地区の調査

第1節 弥生時代から古墳時代の遺構・遺物



第71図 弥生時代～古墳時代の遺構

1. 遺構(図版4)

当該時期の遺構は、調査区のはば全域で竪穴住居跡、溝、竪棺墓、土坑などの遺構が検出された。

竪穴住居

竪穴住居跡は、古墳時代前期の住居跡(SH50・52)を重複した状態で検出した。いずれも住居跡も残りが悪く、周壁の一部と周壁溝がわずかに遺存している状態である。

SH50に切られているSH52は、少なくとも3回の立て替えの痕跡が認められる。

SII50

調査区の北辺部に位置する。竪穴住居跡SH52を切っている。

遺存状況は悪く、周壁溝の一部が残っていた。周壁溝は北辺と西辺の一部が残存しており、建物の平面形は隅丸方形と考えられる。

北辺の周壁溝は、長さ4m、幅15~36cmで、深さは10cm程度である。西辺の周壁溝は38cm前後で、深さは15cmを測る。

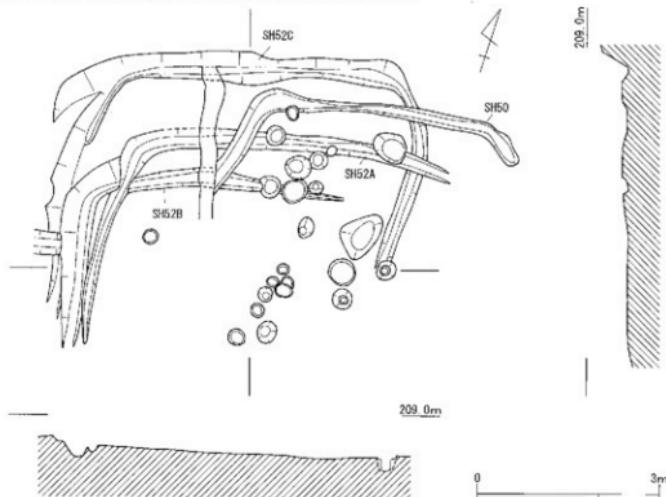
遺物は周壁溝内より古墳時代前期の土器が出土している。

SH52

SH50に切られている。周壁と周壁溝が複数に重なっている。SH52C→SII52B→SH52Aの順で立て替えが行なわれている。

残存する周壁溝の形から、住居跡の平面形は隅丸方形と考えられる。

SH52A北辺の周壁溝は長さ5.2m、幅35cm、深さ5cmである。



第72図 S H50・52

SH52B北辺の周壁溝は、長さ4.2m、幅25cm前後、深さ15cmである。

SH52Cは残存する周壁北辺の長さ5.8m、周壁溝は幅25cmである。

遺物は、土器の破片が出土したが図化できるものはなかった。

溝

溝は5条検出した。このうちSD30・SD91は「コ」字状あるいは「L」字状の溝で、竪穴住居跡の周壁溝の可能性をもつが、調査ではこの点を明らかにできなかった。

SD30

調査区西端部に位置する「コ」字状の溝である。

SD34と重なり合っており、この溝を切っている。

溝の西辺部分の長さ4.4m、北辺部分が1m、南辺部分が1.2mである。

溝幅は20~60cmと幅をもち北辺部分が広い。溝の断面形は丸底状を呈し、深さ10cm前後である。

遺物は、土器の細片が出土したが図化できるものはなかった。

SD34

調査区の西端部に位置する、南北方向にはする溝である。SD30と重なり合っており、SD30に切られている。

溝の全長は11.5mを計り、幅20~80cmと幅があり、南に下るにしたがい幅広くなる。深さは25~30cmである。竪穴住居の周壁溝の可能性をもつ。

遺物は、土器の細片が出土したが図化できるものはなかった。

SD60

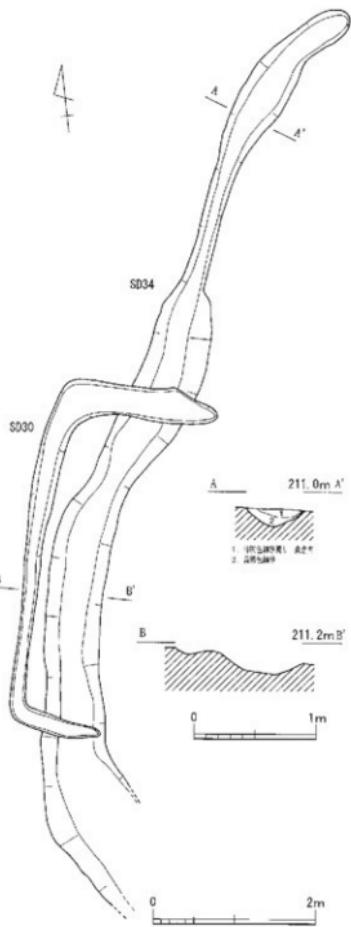
調査区の西端部に位置し、遠構の中では最高位にある、平面形が弧を描く溝である。

溝幅は40~80cmと幅があり、溝の中央付近が広く、端にいくにしたがい幅を減じている。

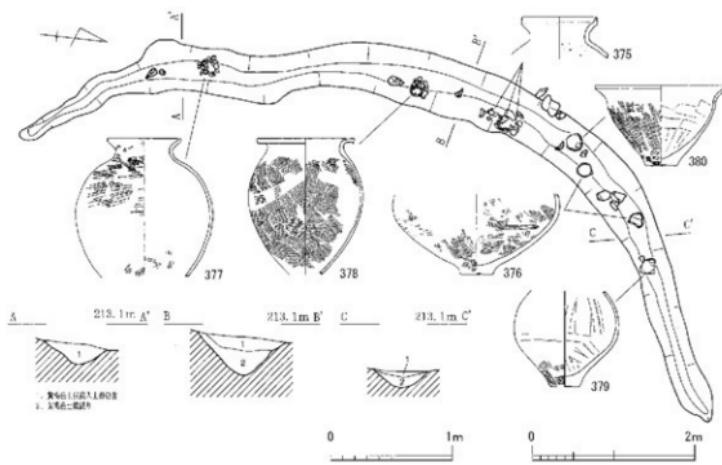
溝の断面形は中央付近では「V」字形を、南北の両端部分は丸底状を呈する。

深さは、中央付近で40cm、両端部分で20cm前後を測る。

遺物は弥生時代後期後半の壺・甕・鉢が溝内より出土している。



第73図 SD30・34



第74図 SD60

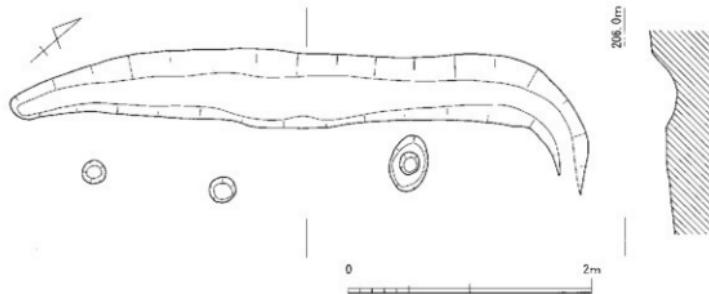
SD71

調査区の東側に南寄りに位置する。溝の北端が屈曲する溝である。東側にはSD72が近接する。溝の全長4.4mで、幅25~60cmと幅をもつ。溝中央部が最も広く、端部にいくに従い幅を減じる。深さは20cmである。堅穴住居の周壁溝の可能性をもつ。

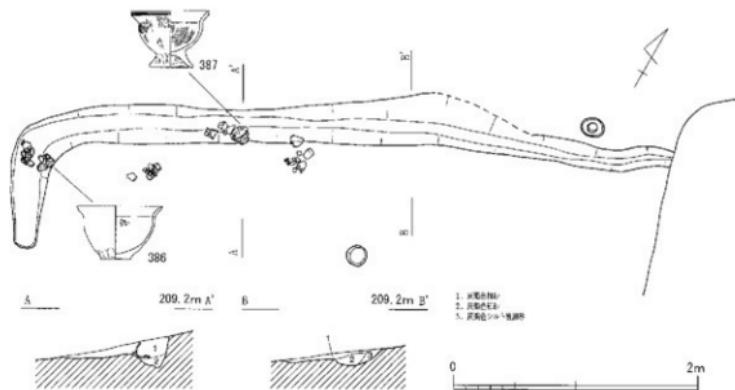
遺物は土器の細片が出土したが、固化できるものは無かった。

SD91

調査区の北辺、中央付近に位置する。溝の東端はSH52に切られている。西側にはSK5がある。溝の西端が屈曲し、平面形は「L」字状を呈している。



第75図 SD71



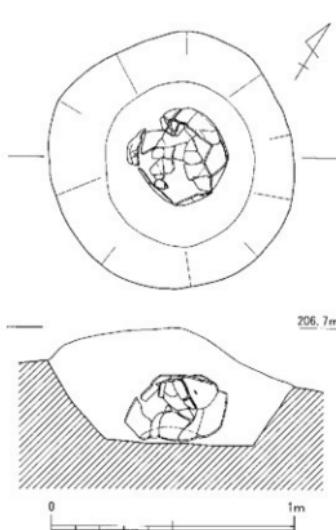
第76図 S D91

溝の北辺部分は、長さ5.4m、幅15~45cm、深さ12~28cmである。西辺は長さ1.0mである。竪穴住居の周壁溝の可能性をもつ。

遺物は、溝内より鉢が出土している。

壺棺墓

弥生時代中期の壺棺墓を1基検出した。



第77図 SX1

SX1

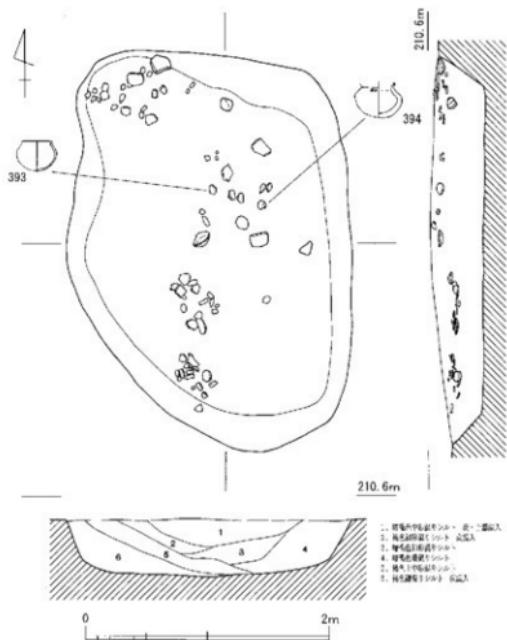
調査区の北辺部東寄りに位置する。調査区の北西から南西方向に張り出す小尾根上に立地する、壺棺墓である。壠方の平面形は、径1mの円形を呈し、断面形は逆台形である。深さは46cmである。壠方の底面は、多少東方向に傾くものの、ほぼ平坦である。

蓋は、口縁部を欠いた状態で横置きに埋置されていた。蓋は無い。

土抗

土抗は、SK5・SK20の2基検出した。いずれも調査区の北東端に位置し、地形的には高位にある緩斜面上に立地する。時期は弥生時代終末期から古墳時代初頭に比定される。

これ以外にも、土器の細片を含む土抗も幾つか確認しているが、今回の報告からは除外している。



第78図 SK5

SK5

調査区の北辺部西寄りに位置する。南西側にはSD30・34が、東側にはSD91、SH50・52がそれぞれ近接する。

土抗は東辺が後世の擾乱により、消失しており、全容は明らかではないが、長軸方向3.4m、短軸方向2.4mの南西隅が正な隅丸長方形を呈すると考えられる。断面形は浅い「U」字形で深さは50cm前後と深い。底面は平坦である。

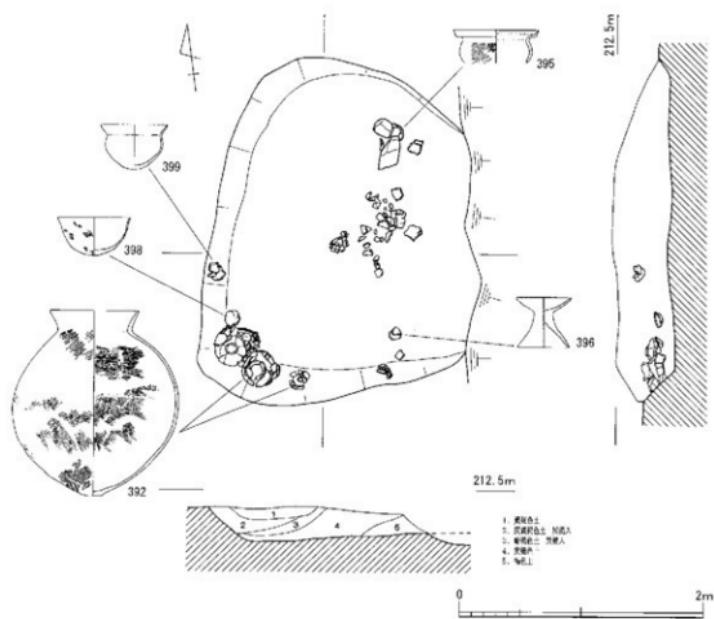
遺物は、埋土上層の第1層～3層中に集中して出土している。小型の甕が出土している。

SK20

調査区の西端部に位置する。地形的には、高位の緩斜面上に立地する。南東側にはSD60が近接する。土抗は東辺を後世の擾乱により消失し、遺存状況は悪い。

長軸方向2.9m、短軸方向2m以上の正な梢円形を呈すると考えられる。深さは25cmと浅い。

遺物は、土抗の北寄りと中央部、南壁部分で集中して出土した。北寄り部分では、25×15cm大と17×10cm前後の河原石が投げ込まれている。土器は、土抗南西隅の壁際より、ほぼ完形の広口甕が出土した他、小型の器台、丸底の鉢などが出土している。



第79図 SK 20

柱穴

当該時期に帰属する柱穴は9基確認した。

柱穴の分布は調査区の北辺部中央付近から西側かけて点在している。柱穴が集中して検出される箇所はなく。建物の復元はできなかった。柱穴は径30~40cm規模の円形の堀方で、確認できた柱痕跡は径15cm前後と比較的小型の柱穴である。

遺物は、主に堀方内より広口壺や鉢などの土器が出土している。とくに小型の鉢が多い。

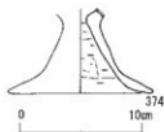
2. 遺物 (図版18)

S H50出土土器 (374)

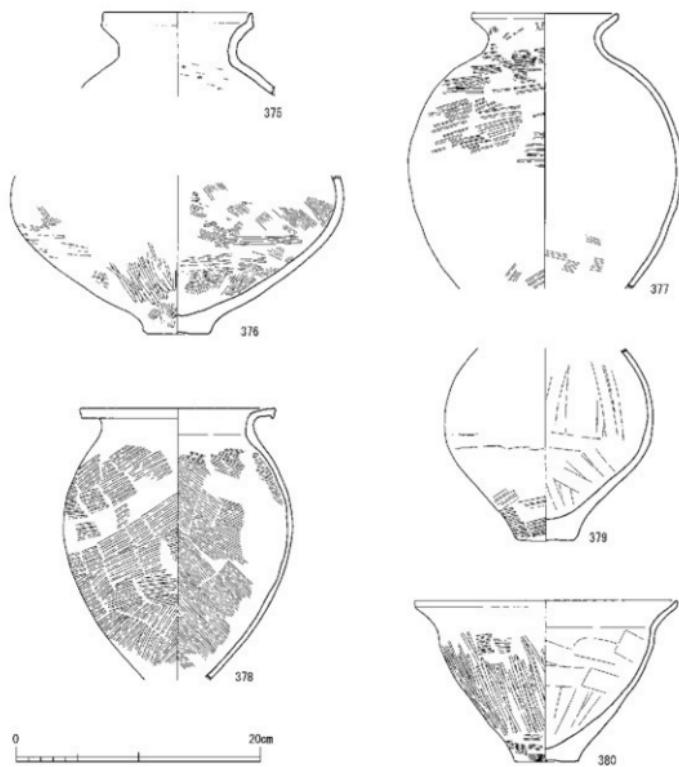
S H50の周壁溝から出土した土器である。肩曲して広がる裾部をもつ脚部である。内面を横方向のヘラケズリで仕上げる。古墳時代前期のものである。

S D 60出土土器 (375～380)

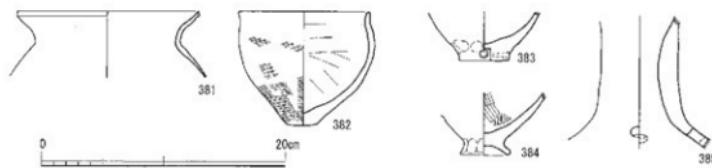
375は口縁部をわずかに上方につまみあげた広口壺である。376は球形の体部に突出した小さな底がつく壺である。外面をヘラミガキ、内面をハケで仕上げる。377は継長の体部に短い頸部がつく短頸広口壺である。タタキ成形であり、内面をハケで仕上げる。378はタタキ成形の壺である。体部の下1／3を分割成形でつくる。内面はハケで仕上げる。379はタタキ成形の壺の体部である。内面を板ナデで仕上げる。380は外反する口縁がつくタタキ成形の鉢である。外面をヘラミガキで、内面をハケで仕上げる。これらの土器は、弥生時代後期後半の播磨系のものである。



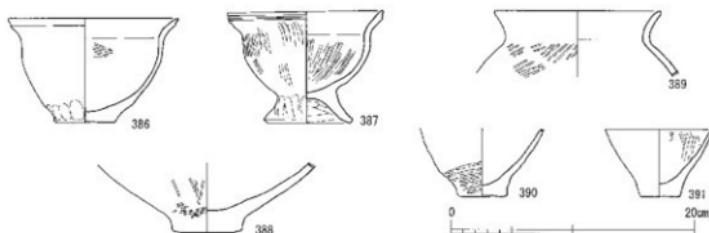
第80図 S H50出土の土器



第81図 S D 60出土の土器



第82図 S D72出土の土器



S D90 : 386・387, S D92 : 388～391

第83図 S D91・92出土の土器

S D72出土土器 (381・382)

381は壺である。382は短く直立する口縁がついたタタキ成形の壺である。内面を板ナデで仕上げる。383は底部に穿孔した鉢である。384は低い脚台がついた鉢である。内面をハケで仕上げる。385は筒形の脚部をもつ器台である。

S D91出土土器 (386・387)

386は外反する口縁のつく鉢である。内面をハケで仕上げる。387は外反する口縁がつく鉢に脚台がついた脚台付鉢である。口縁部外面に凹線を施す。

S D92出土土器 (388～391)

388は突出した小さな平底がつく壺の底部である。外面をヘラミガキで仕上げる。389はタタキ成形の壺である。390はタタキ成形の壺もしくは鉢の底部である。391は内面をハケで仕上げる鉢である。

S X 1 出土土器 (392)

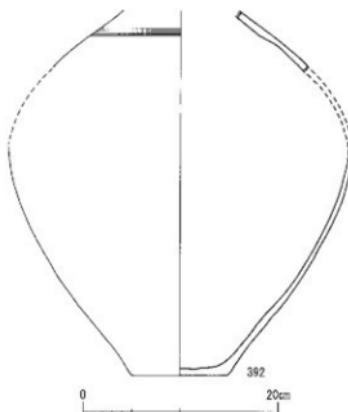
壺柄に使用されていた土器である。肩部に横溝の直線文を施す広口長頸壺である。

S K 5 出土土器 (394・395)

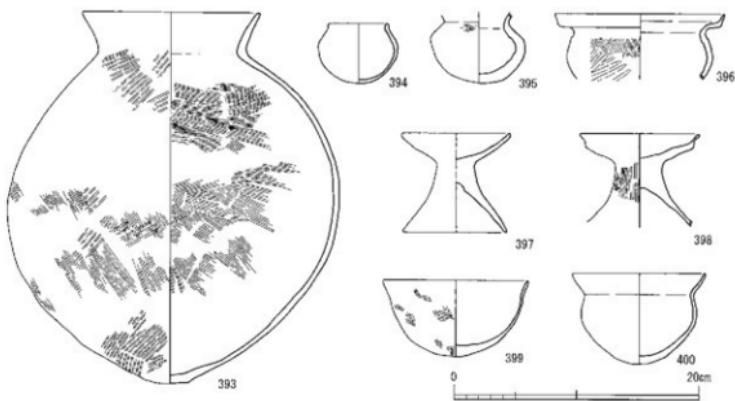
394は短い口縁のつく小型の鉢である。395も小型の壺である。

S K 20 出土土器 (393・390～400)

393は小さな平底をもつ球形の体部に短い口縁がつく短頸広口壺である。タタキで成形しており、仕



第84図 S X 1 出土の土器



SK 5 : 394・395, SK 20 : 393・397~400

第85図 SK 5・20他出土の土器

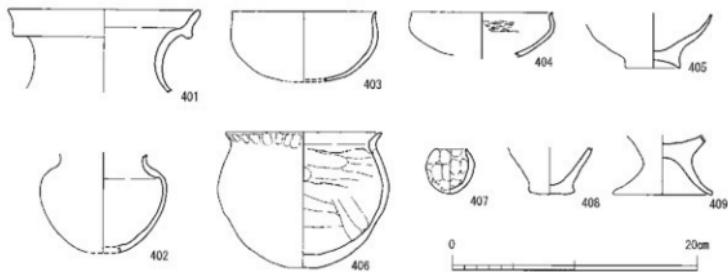
上げは内外面ともにハケでおこなう。397・398は小型器台である。399・400は小型の丸底鉢である。これらは弥生時代終末期の末～古墳時代前期初頭のものである。

P 1243出土土器 (396)

口縁部を上方に拡張する鉢である。タタキ成形であり、外面をハケで仕上げる。

柱穴出土土器 (401~409)

401・402はP580出土である。401は口縁を上方に拡張する広口壺である。402は球形の体部をもつ壺



P 580 : 401・402, P 601 : 403, P 688 : 404, P 702 : 405, P 1348 : 406, P 3058 :
407, P 3586 : 408, P 3604 : 409

第86図 柱穴出土の土器

である。403はP601出土土器である。瓶形の鉢である。404はP688出土土器である。口縁が内傾する鉢である。405はP702出土土器である。底部がくぼむ鉢である。406はP1348出土土器である。外反する短い口縁が付く丸底の鉢である。407はP3058出土土器である。手程ねの小型の鉢である。408はP3586出土の鉢である。409はP3604出土の脚台付鉢である。

包含層出土土器 (410~417)

410は山陰系の大型甌である。体部には把手と突起がつく。411は二重口縁広口壺である。頸部下に刻みを施した突帯を巡らせる。内面は板ナデで仕上げる。412は高杯の杯部である。内外面ともにハケで仕上げる。413・414は受け部と脚部が貫通する小型器台である。414は受け部の口縁端面に沈線を施す。415は円錐形の脚台がつく脚台付鉢である。416は口縁が外反する丸底の鉢である。417は瓶形の杯部をもつ高杯である。

第2節 奈良時代の遺構・遺物

1. 遺構 (図版4)

本質的には△地区と一連の遺跡である。部分的に、後世の水田造成によって削平を受けているが、遺構の配置およびその造有状況から推測して、奈良時代においても傾斜面に4・5段の雑段状の平坦面を作り出し、そこに建物などを配していたことが知れる。また、調査区の南東隅部は谷状地形となり、そこには遺構は及んでいない。本調査区で確認した遺構は、掘立柱建物址・溝状遺構・井戸がある。

S B 1

最上段の平坦面南端付近に建つ、梁間2間の東西棟純柱建物址である。桁行は3間までを検出しているが、その西側は調査区外となるため、間数は確定できない。梁間の柱芯々間の距離は140~160cmに対し、桁行間は110~130cmと狭くなる。掘方は比較的大型の不整形の円形もしくは方形である。



S B 2

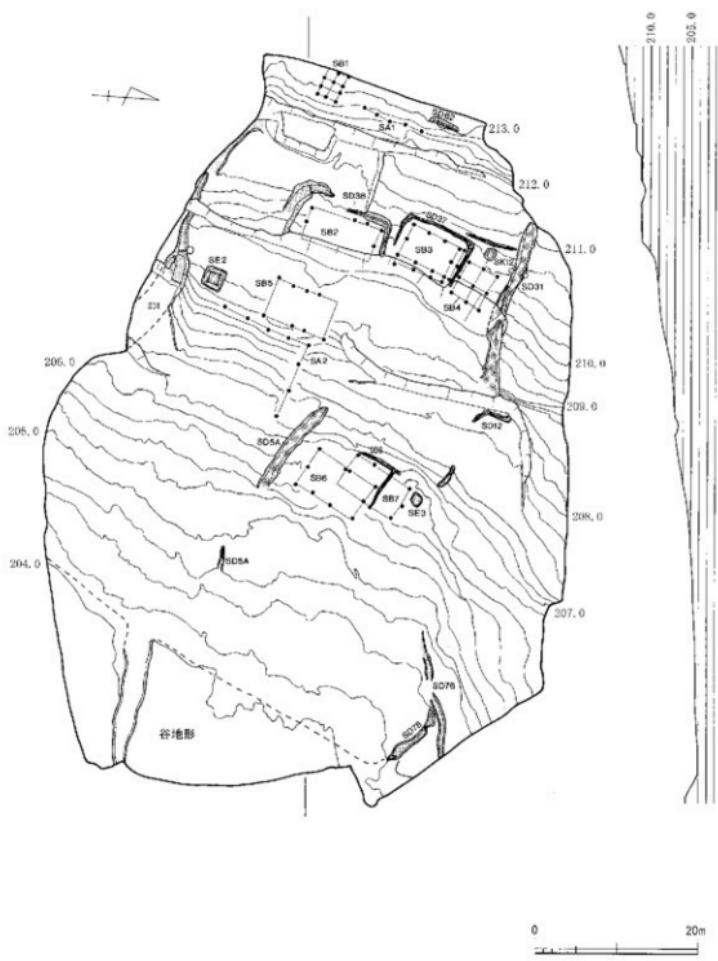
第2段目の平坦面は中央部に位置する。桁行を北北東に振る南北棟側柱建物址である。東桁行柱列はすべてを損失するが、梁間2間、桁行5間になると思われる。梁間の柱間は220~260cmとばらつきが大きいが、桁行はほぼ210cm前後で納まる。柱列の東以外の3方向には雨落ちと思われる溝 (S D38) が巡る。



S B 3

S B 2の北側約3.5mに位置する、2×3間の南北棟側柱建物址である。ただその方向は、S B 2より桁行柱列の方向をさらに東に振る。柱間の距離はいずれも250~280cmとなる。さらに、北梁間と東桁行には幅約1mの扉が付随するが、北東隅持ちの柱穴がないため、北から東へ回り込む扉ではなく、それぞれ単独の扉として設けられていたようである。こちらもS B 2同様、東以外の3方向に雨落ち溝 (S D37) が伴う。





第87図 奈良時代の遺構

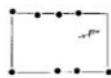
S B 4

S B 3 の北側約 1 m 強に近接して存在する、 2×2 間の純柱建物址である。柱間は約 240cm 前後の等間となる。S B 3 と同一の柱列の方向を示すため、S B 3 と同一時期に付随する建物として設けられたものと推定される。



S B 5

第 3 段目の平坦面、中央やや南に位置する。柱穴の消失が多いが、桁行 4 間の個柱南北棟であり、柱列の北を北北東に振る。梁間は中の柱をまったく確認していないため間数は不明であるが、その間で約 510cm 測るため、3 間となる可能性が高いと思われる。柱穴は不定形ながら、基本的には方形を意識しているようである。西側の柱間距離は約 210cm の等間となるが、東側は 180~240cm とかなりバラツキが大きい。



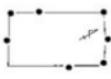
S B 6

第 4 段目の平坦面にあり、S B 7 と重複する位置関係にある。柱穴の直接の切り合がないため、その前後関係を明確にすることはできない。梁間 2 間、桁行 3 間の個柱南北棟建物であり、桁行の北を北北東に振る。梁間の柱間距離は 270cm 前後になるものと思われるが、桁行は 290~360cm とかなりの幅をもつ。北西と北東に鉤形に屈曲する S D 8 を伴う。



S B 7

S B 6 とほぼ方向を一致させて重なり合う。梁間 2 間、桁行 3 間の側柱東西棟建物址である。梁間総延長が約 450cm、桁行総延長が約 810cm を測り、ちょうど S B 6 を一回り小さくした大きさの建物となる。建物の北側に井戸の S E 3 が位置しており、その掘方の西辺が本建物址の西桁行の柱並びの延長上に当たるため、S E 3 を伴う機能の建物と推定される。



S E 3

後世の削平あるいは水田耕作等により上半部の大半は既に失われて、基底部から約 1 m の部分が残存する。掘方は基本的に方形に掘られ、上縁での大きさは一辺が約 120cm、基底部で約 70cm を測る。方位的には掘方の北端が東にかなり大きく振れる状態にあり、その方位は南に隣接する S B 7 と同一の方向を取るために、同建物に付随して設けられた井戸と考えられる。掘方の東辺上半部が斜めに幅広く掘られており、さらに井枡本体が掘方の西に片寄って設けられていることから、東辺部が構築の際の出入り口部であったことが知れる。井枡の構造は、隅柱に横木を渡してその背後に縱板を落とす形態であるが、隅柱は丸太の杭を打ち込んでおり、そこに基底部から約 60cm 高さに腰を切って横桟を渡す。南辺と東辺の縱板の残存状況は非常に悪く、良好な残りの 2 辺では構柱の間に 4 枚の縱板を落として井枡としている。縱板は全長を残すものはないが、その背面に次の縱板の下部と認められる板材が残存することから、延長 1 m 前後の板材を少なくとも 2 段継ぎ足して井枡とする形態であったものと想定される。基底部には井筒は設けられておらず、掘方を掘った後に砂質土を敷いて平坦面として水を溜めていたよう

ある。

井枠内は粘質の埋土で充填されており、自然埋没したことが分かる。内部からは若干の土器片と木製祭祀具（斎串）片が1点出土したのみで土器の出土はないが、SB7との位置関係から、本時期に属するものとした。

SE 2

第3段目となる平坦面の南端近くにあり、SD1とSB5に挟まれる位置に存在する。

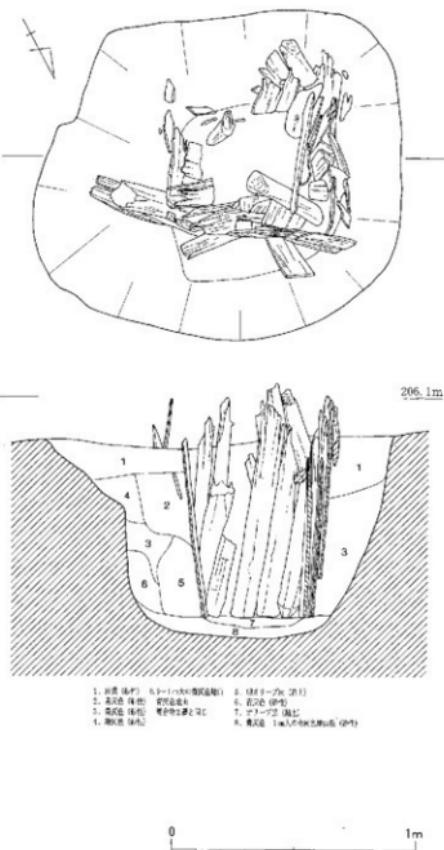
各辺がほぼ東西南北の方位を取る方形の掘方は一辺約2.5m、深さ約1.6mのほぼ垂直な形態となり、その中に長さ1.5m前後、幅約20cmの板材を蒸籠に組み、井枠辺約1.2mとなる。

ただ、掘方と井枠の方向に若干のずれがあり、井枠がやや西に振れる状態にある。蒸籠に組まれた板材は5段分、約1mの高さまで残存しているが、最上段部分は遺存状態が著しく悪いものの、以下については非常に良好に残っており、表面に調整の痕跡（手斧痕か）を鮮明に留めている。

良好な状態の板材は各辺5枚であり、その両端部には組み合わせ用の溝が上下に設けられている。

基盤材については、西側材のみが組合せを上から上辺のみに溝が切られているが、他の3面は2段目以降と同様に上下に設ける。井底には井筒は据えられておらず、砂質土を20cmほど敷いた上に井枠を組み上げたことが分る。

また、北辺の掘方上半が傾斜を変えて少し広くなることから、構築に際してこの方向からの出入りを行ったものと想定される。



第88図 SE 3

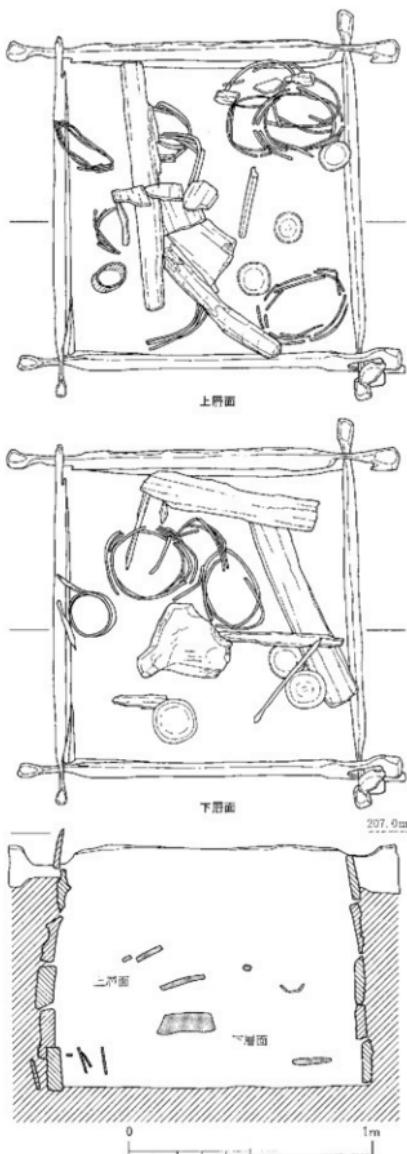
井枠の内部からは土器・木器をはじめ、多くの遺物が出土した。その出土状況から、上層と下層の2面に遺物の集中することが分かる。

上層面は遺構面から約50cmの深さにあり、廃食して落ちたと思われる井枠の残骸・自然面を残す丸太材・小型の円形曲物・横棒・植物の蔓を円形にしたタガ状製品がみられる。

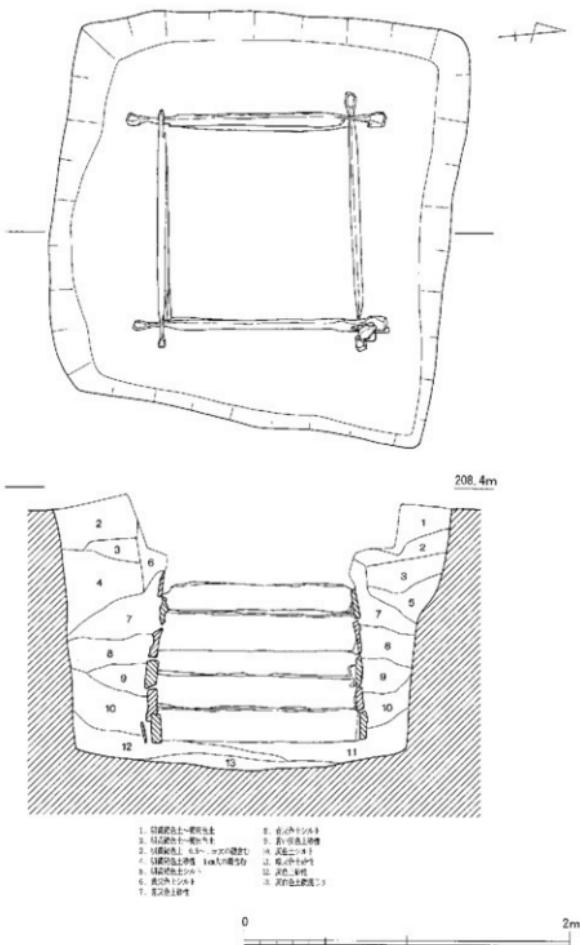
下層はほぼ井底に近いレベルにあり、上層同様板状木器・タガ状製品・円形曲物等とともに、焼け跡の残る台状木製品・壺串などが出土している。

土器は上下両層面より、奈良時代後半のものが多数出土している。その中には中外面に「+」の記号を墨書きした須恵器杯Aをはじめ、小さくて文字の判読はできないが、明らかに墨書きを留める破片も数点出土している。

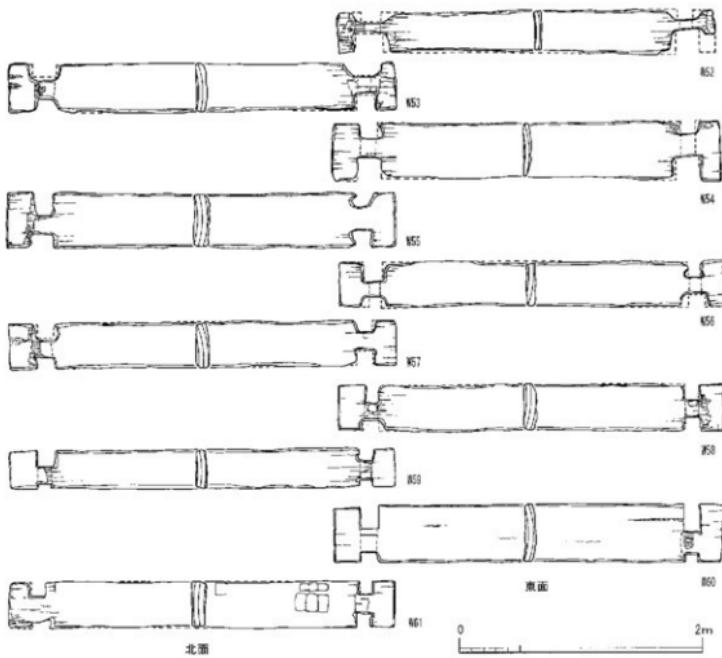
廃棄に際して上記の遺物が投棄され、上層遺物面形成後は、井枠が開口した状態で長い間放置されていたものと推定される。



第89図 S E 2 内遺物出土状況



第90図 S E 2



第91図 SE 2井戸枠実測図

S D 1

第2段目の平坦面南西側から第3段目平坦面にかけて、調査区に沿うように南東方向に流れる。先端は第4段目の削平によって消失する。南西方向に伸びる尾根の裾に沿って流れている可能性が高いため、本来は尾根から流れ下りる雨水等を受け、排水するための溝であったものと思われる。南東先端部が規模としては最も大きく、幅約330cm、深さ約60cm、現長約22mを測る。構内からは少數の土器片が出土している。

S D 38

S B 2に伴う雨落溝である。東側は大きな段落ち地形のために消失するが、S B 2の状況から推測して後世の削平によって失われたのではなく、本来的に東側には廻っていなかったものと判断される。西と北の幅が約1m程であるのに対し、南側は約3mと広くなる。これは、S B 1の東側が突出した地形になっているため、雨水等の浸水が激しかったためと思われる。南東の先端はS E 2の西側を通ってS D 1に合流していたようであるが、現存しない。北へ回った溝はS D 3とともにS B 5の北側から東流して、S D 5 Aに流れ込んでいた可能性が最も高い。

S D 37

S B 3の北・西・南を巡る雨落溝である。東側については、大きな段差のために現状では把握しがたいが、おそらくS B 2・S D 38の関係と同様、東側には本来的に存在していなかったものと考えられる。現状では、最大幅約30cm、深さ約20cmで、内部より少量の土器が出土する。南側の溝の東端については、

上記したとおり S D 38と同じように S D 5 A につながっていたものと想像できる。

S D 31

S D 1 と対になる性格の溝であり、調査区北側の尾根の割部に沿って西から東に流れている。幅約160cm、深さ約30cm、現長約21mを残すが、その東側は後世の消平により遺存状況は良好ではないが、点々とその痕跡を止めている。最終的には S D 76あるいは S D 78と一体になるものと思われる。この S D 31 と S D 76・78を結ぶライン以北に遺構が存在しないため、遺跡の北を限る溝にもなっていたものと思われる。よって、S D 1 が南を限る溝となる。

S D 5 A

基本地形で最も谷の深くなる、調査区のはば中央部を東西に流れる。上記したとおり、段の上手にある S D 37・S D 38などから流される雨水等を集めて、調査区東端部の水田城へ流していた幹線排水路である。幅は最大で約1mを割り、断面は深みのある「U」字形となる。

S A 1

S B 1 の北東側約150cmから北北東に向かって始まる。総延長は約8mで、4間分を確認している。方位的には S B 1 とも一致し、その延長上にあたる。



S A 2

S B 5 の南東桁行柱列から約120cm離れて、ほぼその柱列と平行する方向で設置されている。南西端は S E 02 の北東約360cmにあり、そこから4間分約12m伸びた後ほぼ直角に屈曲し、南東方向に3間分約10m続く。

2. 遺物 (図版30~36)

C地区はA地区と並んで奈良時代の遺構が比較的多く、柱穴群、各溝、井戸跡、土坑等が確認されているが、特に溝(S D)5 A内からは非常に多くの土器が出土している。それとともに調査区中央部を埋める包含層は遺物を多く含み、良好な資料の供出源となった。

a. 柱穴出土の土器

數棟の掘立柱建物址が確認されたが、建物址に伴う柱穴内からは図化できる土器はまったく出土しなかった。ここに記述する資料は建物とならなかった柱穴内から出土したものであり、杯A、杯蓋、杯B、杯E、皿A、稜縁蓋、稜縁、高杯、鉢A、壺Q・壺A蓋・壺L・稜縫、壺B・円面鏡等の他に墨書きを伴う杯蓋等の須恵器が出土した。土師器では唯一製塙土器が1点出土している。

第1型式：杯E（1471・1472）口縁部はa形態であり、いずれもII類に属する。

杯A（1473・1474）2点ともII類であり、古朴の特徴を残す。

鉢A（1496）口縁部は内湾気味となり、端部は丸く納まる。

第2型式：杯A（1475・1476）1475はI類、1476はII類に分類できる。

杯蓋（1479）a形態の口縁部をもち、II類に属する。つまみを欠損する。

杯B（1482～1486）1485の口縁部はb形態、他はa形態である。1482はII類に、1483はIII類

に、1484はIV類に、1485・1486は（II・III）類に細分できる。

壺A蓋（1498）天井部はわずかに膨らみを持つ。つまみは細高い宝珠状となる。

壺Q（1499）口縁部は外湾し、端部は狭い垂直面となって上方に小さく立ち上がる。

壺B（1502）口縁部は「く」の字に開き、端部は外傾する狭い平坦面となる。

第3型式：杯A（1477・1478）1477はI類、1478はII類となる。

杯蓋（1480・1481）1480は口縁部はb形態となり、両者とも（II・III）類となる。

杯B（1487）口縁部はb形態となり、IV類となる。

皿A（1488・1489）1488は底体部境に丸味が残る。底部はいずれとも若干下がり気味となる。

1489には口縁端部内面に、一条の沈線が巡る。

倭椀蓋（1491）口縁端部は外湾しながら垂下する。把手は径の比較的小さい環状形となる。

倭椀（1492・1494）1494は後部以下をヘラケズリのまま。口縁端部内面に一条の沈線が巡る。

壺L（1500）口縁端部は水平となった後外傾する平坦面となって立ち上がる。

第4型式：皿A（1490）口縁部は内済する。底体部境は明確となり、底部は平底となる。

倭椀蓋（1493）口縁部はわずかな段となった後、端部が小さく垂下する。

円面硯（1503）裾部は高く明瞭な段をなした後、端部は大きく外湾する。脚部には長方形の透かしを8方向に穿つ。

墨書土器（1505）第4型式の杯蓋天井部内面に「□田」の墨書がある。

製塙上器（1504）唯一の土師質土器である。器壁も厚く、かなり粗製である。

b. SD 5出土の土器（図版31）

SD 5は調査区のほぼ中央部を流れる溝状造構であり、長さも約13mと長く、深さも約30~50cmと比較的深く遺存しているため、遺構内からは非常に多くの土器が出土している。その多くは須恵器である。

第1型式：杯E（1506~1509）1507・1508は口縁部がb形態で、1506・1509はc形態となる。1508はI類、1506・1509はII類に、1507はIII類となる。

杯A（1510・1511）いずれも口縁部はb形態であり、II類に属する。1510は古相に属する。

杯蓋（1518~1520）1520は第2型式の様相を示す。いずれもIII類に属する。

杯B（1527~1529）いずれもb形態の口縁部である。1527・1528は0類、1529はIII類となる。

杯E（1563）口縁部は内済しながら立ち上がり、丸く納まる。底部も丸底気味となる。

第2型式：杯A（1512・1513）若干底部の垂下が目に付くものの、いずれもII類に属する。

杯蓋（1521~1523）1521は口縁部がb形態となり、0類に属する。1522・1523はI類である。

杯B（1530~1532）口縁部はいずれもb形態である。1530が0類に、1531がI類に、1532がII類の3類に細分できる。

壺蓋（1568）天井部は平坦で、口縁部は長く垂下する。「押しボタン」状のつまみが付く。

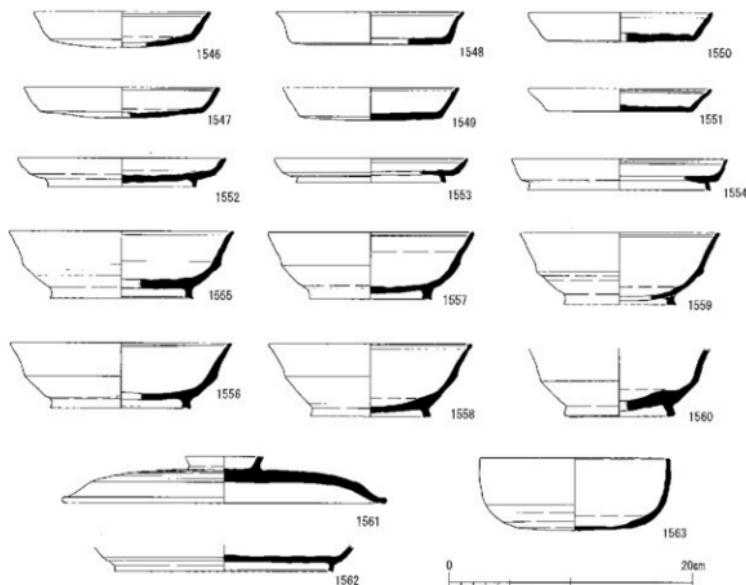
鉢D（1569）口縁部は小さく外反する。肩部は丸く、脚部は底部に向かって細くなる。

壺B（1570）口縁部は「く」の字に外反し、胴部最大径部分に扁平な把手が一対付く。

壺B（1571・1572・1574）1571は口縁端部が内側に肥厚し、1572は丸く納まる。1574の口縁端部は狭い水平面を形成する。

壺A（1573）口縁端部は丸く納まる。

第3型式：杯A（1514・1515）すべてII類に属する。1514は1515に比べ口縁部の開きが大きくなる。



第92図 S D 5 出土の土器 (2)

杯蓋 (1524~1526) 1524は0類に、1525はI類に、1526は(II・III)類となる。

杯B (1533~1535) 1535の口縁部がa形態の特徴をわずかに残している。1533が0類に、1534が(II・III)類に、1535がIV類となる。1535は第2型式とすることもできる。

皿A (1546~1549) 1546・1547は底体部境も丸く底部が大きく下がるため、同型式の中でも古式にあたる。1548・1549は底体部境が明確となり、新しい要素が強まる。1548を除く3点には口縁端部の内面に一条の沈線がみられる。

皿B (1552~1554) 1552は底体部境が丸く底部もかなり下がる。1553は底体部境がかなり明確となり、底部も平底となる。よって、皿A同様前者がより古い様相を示している。

杯蓋 (1536~1538) 1536・1537は0類、1538は(II・III)類に細分できる。

稜枕 (1555~1557) 稜部も強く張り、口縁部のかえりも大きい。1556・1557には口縁端部内面に一条の沈線が巡る。脚部下面はヨコナデにより窪む。

盤蓋 (1561) 口縁端部は丸く極小さく肥厚する。環状把手を作う。

盤B (1562) 口縁部を欠損する。底部は平底となり、細い足が垂下する。

水瓶 (1564) 口縁端部は上方に小さく立上がって納まる。

壺L (1565) 頸部は短く、口縁部は水平に開いた後小さくつまみ上げる。

第4型式：杯A (1516・1517) すべてII類に属する。1516はa形態の口縁部となる。

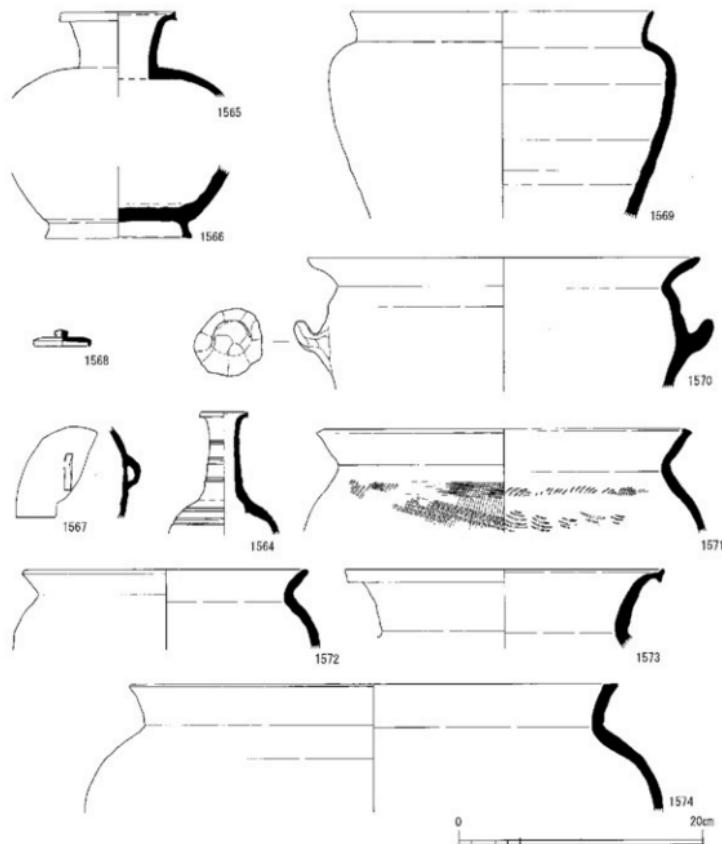
杯蓋 (1539) 口径的には(II・III)類に細分できる。

杯B（1540～1543）1541・1543は口縁部に丸味を残す。1540～1542は（Ⅱ・Ⅲ）類となり、1543はⅣ類となる。

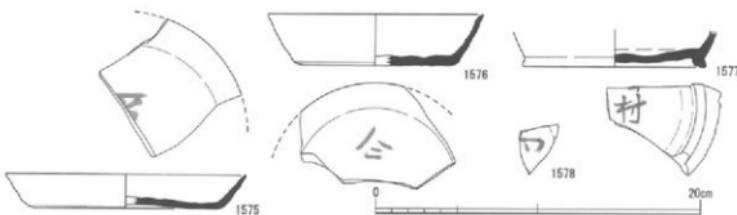
皿A（1550・1551）底部と体部の区分が明確となり、底部も平底となる。

稜匏（1558～1560）腹部の張りが弱く器高が前型式より高くなるため、全般的に口縁部は直線的に開き腰高の形態となる。1558・1559には口縁端部内面に沈線がまわる。

墨書き土器：第3型式の杯A（1576）底部外面に「今」の墨書きがある。ただし下部が欠損するため、文



第93図 SD 5 出土の土器（3）



第94図 SD 5 出土の土器（4）

字が継続していた可能性もある。II類に分類されるものである。。

第4型式の杯B（1577）底部外面に「村」の墨痕が存在する。文字の周囲を大きく欠損するため、單一文字でない可能性が高い。。

第3型式の皿A（1575）見込みに墨痕が確認できるが、欠損のため文字は判読できない。

破片（1578）極小さな破片のため器種の限定も文字の判読もできない。

c. SD 31

第2型式：杯E（1579）口縁部はc形態となり、II類に分類できる。

杯蓋（1580）つまみは欠損する。I類の壺である。

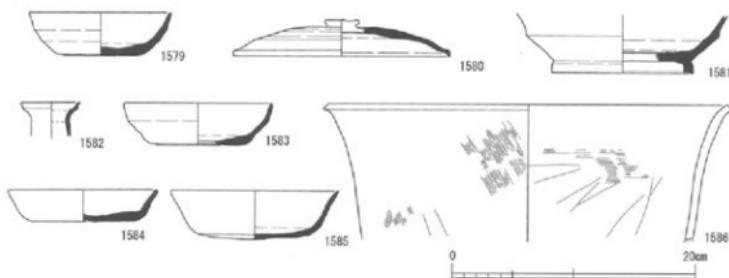
d. SD 78

第4型式：稜碗（1581）口縁端部を欠損する。脚部は底体部境につき比較的長く垂下する。

e. SD 38

第2形式：杯E（1583）口縁部はc形態となり、II類に分類できる。

第4型式：水瓶（1582）大きく開き、さらに端部が斜め上方に短く開く口縁部のみである。



第95図 その他溝出土の土器

f. S D62

第2型式：杯A（1584）口縁部はわずかに外湾しながら開く。

g. S D12

第2型式：杯A（1585）口縁部はa形態となり、I類に属する。

h. S D42

第1型式：鉢E（1586）口縁部は緩やかに開き、端部は外傾する狭い平坦面となる。

i. 井戸（S E）2出土の土器

S E 2内からは、木器とともに多くの土器が出土した。そのほとんどが須恵器であり、杯A・杯蓋・杯B・皿A・盤B・後椀・壺L・甕Aがある。

第1型式：杯蓋（1587）口縁部はa形態となり、端部は内傾するものの長く垂下する。II類の杯に伴う。

杯B（1593・1594）1593はa形態の口縁部となる。両者ともII類に属する。

壺L（1612）大きく張る肩部以上を欠損するが、脚部は長く内面接地する。

甕A（1613）外面は二条一帯の沈線帯によって三分割され、その上段と中段に粗い波状文。

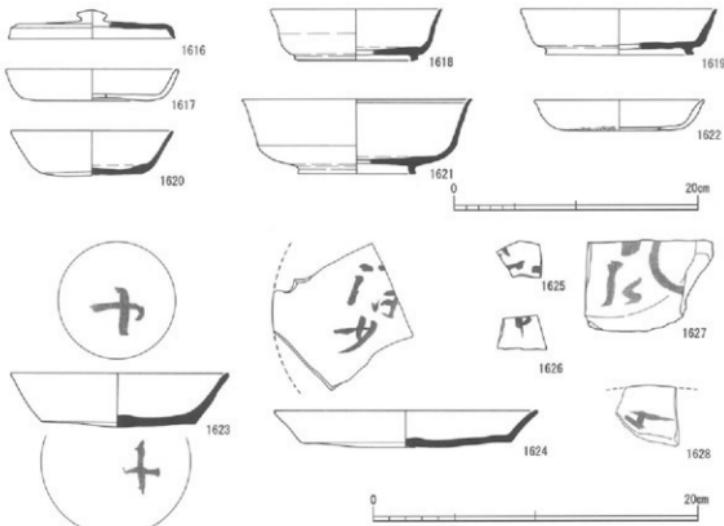
土師器鍋（1615）頭部の括れがほとんどなく、口縁部はわずかに外湾しながら開く。

第2型式：杯E（1601）口縁部はa形態となり、II類に属する。

杯A（1602）比較的器高が高く、a形態の口縁部を持つI類の杯である。

杯蓋（1588～1590）1589・1590の口縁部はb形態となる。1588はII類に、1589はIII類に、1590はIV類となる。

杯B（1595）口縁部は緩やかなa形態であり、II類となる。



第96図 S E 2出土の土器（2）

盤B (1607) 口縁部は外反気味に開き、脚部は外面接地する。

甕A (1614) 口縁端部は外湾する面となり、下方に小さく垂下する。

壺蓋 (1616) 天井部は平坦で、口縁部はわずかに外開きに垂下する。

第3型式：杯A (1603) 口縁部はb形態に近く、II類に属する。

杯蓋 (1591・1592) 口縁部はb形態となる。1591はI類に、1592は(II・III)類となる。

杯B (1596・1597) 1596はa形態、1597はb形態の口縁部であり、両者とも(II・III)類。

皿A (1604) 口縁部が内湾する小器品である。

盤B (1608) 口縁端部内面に一条の沈線が巡る。

稜碗 (1609・1610) 1609の口縁部はわずかに内湾しながら開く。口縁端部内面に一条の沈線が巡る。1610は1609に比べると器高が著しく高く、鉢状の形態となる。口縁部が弯曲しながら立ち上がり、端部がさらに大きく外湾しておさまる。

第4型式：杯蓋 (1598) つまみを持たない天井部は大きく陥没する。I類に属する。

杯B (1599・1600) 1599がa形態口縁部の特徴を残す。両者とも(II・III)類である。

皿A (1606) 器高が低く、底径も広くなる。

壺L (1611) 口縁部のみである。口縁端部は水平に開いた後外傾しながら立ち上がる。

j. S E 2 挖方内出土の上器

掘方内からは、須恵器6点、土師器1点が出土している。須恵器では杯A、杯B、稜碗、壺蓋等があり、土師器には杯Aがみられる。

第1型式：杯B (1618) 口縁部はわずかに外湾しながら開き、脚部は内面接地する。

稜碗 (1621) 稜の位置が著しく低い位置にあるため、形態的には碗Bに近いものとなる。脚部はかなり内側に取り付けられる。口縁端部内面には一条の沈線が巡る。

第2型式：杯A (1617・1620) 1617の口縁端部内面には沈線の痕跡がみられる土師器である。

土師器杯A (1622) 口縁部は直線的となり、底体部境は丸味を残す。

杯B (1619) 口縁部は直線的にのびる。脚部は外開きとなるが、太く短い。

墨書土器：杯A (1623) 見込みおよび底部外面に「+」の墨書が書かれている。口縁部はb形態であり、I類に属する。第4型式。

皿B (1624) 見込みに2文字分の墨書が残存するが、破片のため判読は困難である。第4型式。

破片 (1625～1628) 1627は則天文字であるが、判読できない。1625・1626・1628は細片のため文字は不明。

k. S E 1 出土の土器

S E 1はその掘方内より、杯A・杯蓋・皿A・壺L・墨書土器が出土している。

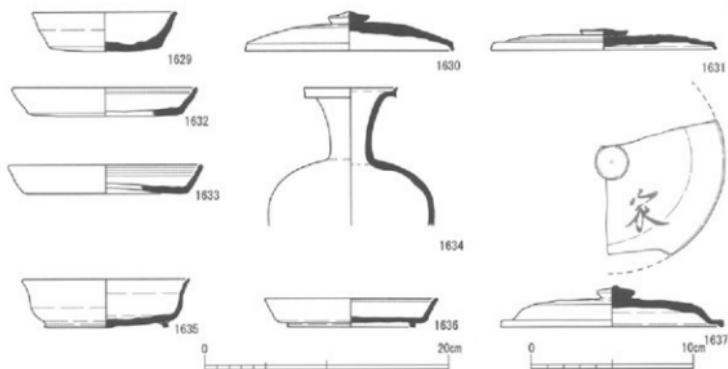
第2型式：杯蓋 (1630) 口縁部はa形態で、端部がわずかに開いて垂下する。I類の杯に伴う。

第3型式：杯A (1629) 口縁部はほぼb形態となる。II類に分類される。

杯蓋 (1631) 口縁部はb形態で、つまみも扁平となる。0類に伴う蓋である。

皿A (1632・1633) 1632の口縁部はわずかに「S」字形となる。1632の口縁端部内面には一条の、1633には二条の沈線が巡る。

第4型式：壺L (1634) 体部は球形を呈し、口縁部は水平に開いた後、上方に肥厚する。



第97図 SE 1・SE 3出土の土器

墨書き土器：1637の天井部は比較的高く、(II・III)類の杯に伴う蓋である。天井部外面に「家」の墨書きがみられる。第4型式。

1. SE 3 出土の土器

第1型式：杯B（1635）口縁部はa形態となる。III類に属する。

第2型式：皿B（1636）口縁部は直線的に伸び、底体部にわずかな丸味を残す。

m. SK20出土の土器

第1型式：杯E（1639）口縁部はc形態であるが、底部も丸味を持つ。II類となる。

第2型式：杯E（1640）口縁部がb形態であり、II類に属する。

第3型式：杯蓋（1638）口縁部はa形態となり、0類に属する。つまみを欠損する。

n. SK12出土の土器

第3型式：皿A（1642）口縁部はわずかに屈曲しながら開き、底部との境にわずかな丸味を残す。

第4型式：杯B（1641）口縁部はb形態。IV類に分類される。端部内面に一条の沈線が巡る。

o. SK22出土の土器

第1型式：杯B（1646）口縁部はb形態であり、器高は比較的高い。II類に属する。

第2型式：杯蓋（1643）口縁部はb形態で、端部は断面三角形に近く垂下する。0類に伴う。

杯B（1647・1648）いずれも口縁部はb形態であり、II類となる。

杯A（1649）口縁部はb形態であり、III類に分類される。

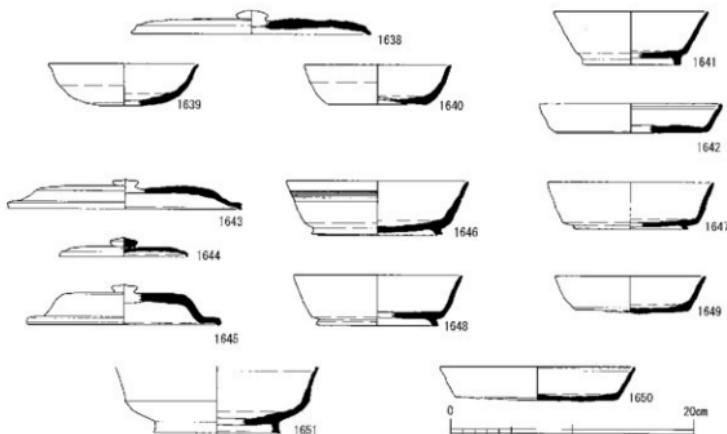
第3型式：杯蓋（1644・1645）1644の口縁部はb形態で、IV類に属する。1645の口縁端部は

異質な形態となる。(II・III)類の杯に伴う蓋である。

皿A（1650）口縁端部内面に一条の沈線が巡る。

稜挽（1651）口縁端部は欠損するが、稜部分は丸味を持ち、細く長い脚部が付く。

p. 包含層出土の土器



第98図 各上坑出土の土器

包含層内からは、A地区同様非常に多数の上器が出土しているものの、その多くは須恵器であり土師器の絶対数は著しく少ない。器種としては、杯A・杯蓋・杯B・皿A・皿B・盤蓋・盤・稜輪蓋・稜輪・高杯・壺蓋・壺E・壺K・壺N・鉢F・椀C・甕A・黄瓶・円面鏡そして墨書き土器と土師器の製塩土器、鍋が出土している。

第1型式：杯E（1652～1659）1652がa形態となり、1653～1659はc形態となる。口径による細分では、1652はⅢ類となる。1653はI類、1654～1659はII類となる。

杯蓋（1702～1707）1702は口縁部内面のかえりが口縁端部より下方に伸びる形態の杯Gの蓋である。1709はI類に、1703・1704はII類となる。1706・1707はIV類の蓋であるが、第2型式となる可能性も強い。

杯B（1722～1729）1722・1726・1727はa形態の口縁部となる。口径的には1722はI類となる。1723～1727はII類に、1728・1729はIV類となる。

巣蓋（1784～1786）1784の口縁部は内傾しながら垂下し、口縁端部はさらに細くなる。1785・1786とも口縁部の内傾はないが、基本形は1784と同様である。

壺K（1787～1789・1791）1788には高台は付かず平底となり、肩部の外側に三条の沈線が巡る。1789はかなり長い高台部であり、内面接地する。底部との接合部付近に円形の透かしを4方に穿つ。1791は内面接地する短い脚部に、大きく肩の張る肩部を持つ。

椀C（1798）体部は丸味をもち、脚部は内面接地する。

鉢F（1799）円盤状底部はヒ下から幅を緩めながら張り出す。

鉢（1800）平城宮の設定にはない器種である。底部は丸味を持ちながら開き、頭部はわずかに小さくなる。口縁部は外湾汽味に大きく開き、端部はわずかに上方を向く。

横櫛（1801）肩部長に対して口径が大きい。口縁部は内側に断面三角形状に肥厚する。

第2型式：杯E（1660～1667）：口縁形態はb形態となる。口径による細分では、I類は1660～1663、

II類は1664～1667であり、III類はない。

杯A (1668～1675) 1668～1671は古相を、1672～1675は新相の形態となる。口縁部は1669・1670・1673がa形態となる。口径的には1668・1669がI類の他はII類である。

杯蓋 (1708～1720) 1708～1713は古相に伴い、1714～1720は新相に伴う蓋と思われる。1711・1714・1720の口縁部はb形態である。1708・1714・1715は0類に、1704～1707・1709～1712・1716～1719はI類に、そして1713・1720はIII類に伴う蓋となる。

杯B (1730～1747) 基本的にはb形態の口縁部が中心となる。この内1730～1728は古相となり、1739～1747は新相になる。古相のうち、1731・1733・1734・1738は特に第1型式と分類することも可能である。

高杯 (1781) 杯部は第2型式の杯Aと同様の形態を示す。脚柱部は短い。

土師器鍋 (1804) 頭部は胸部以上には縮まらない。口縁部はわずかに外湾しながら開く。

第3型式：杯A (1676～1682) 1678・1679・1681の口縁部がa形態となる。1681は古相の特徴を残す。1676・1677がI類となり、他はII類に属する。

皿A (1685～1688) 1685・1686・1687の口縁部はa形態となる。1685は第1型式にも匹敵する特徴を備えており、1687・1688は第2型式に属するとみなすこともできようかと思われる。1685以外には口縁端部の内側に一条の沈線が巡る。

皿B (1693・1694) 1693の杯部は杯Aの第2型式の特徴に類似し、脚部が著しく長い。

盤蓋 (1696～1699) 1698・1699の口縁端部形状は杯蓋の第2型式に近い形態となる。1696・1699の口縁部はb形態となる。

杯蓋 (1748～1750・1755～1757) 1748は0類に伴い、1749はI類に、1750・1755～1757は(II・III)類となる。1755・1756は天井が高く、古い様相を残す。

杯B (1751～1754・1758～1761) 口縁部はb形態となり、1758で初めて0類の存在を確認できる。I類は1751のみであり、1752・1753・1759～1761は(II・III)類となる。1754はIV類になる。

稜椀蓋 (1769・1777) 1777は口縁部がb形態となる。

稜椀 (1770～1776) 1770・1776は古い様相を強く残す。口縁端部の内側に一条の沈線が巡る。1774は第4型式への中間的な大型の形態である。1776は小型となり、その他は中型になる。

壺N (1790) 肩部の耳状把手は欠損するが、その上方接合部に1条の突帯が巡る。

壺E (1792～1795) 口縁部のみのため、型式の細分ができない。

椀A (1797) 口縁端部を欠損するため、椀となるかどうか疑わしい点もある。

壺A (1802) 口縁部は外湾しながら水平近くまで開き、端部は斜め上方に短く立ち上がる。

土師器製塩上器 (1803) 体部は大きく内湾し、口縁端部は丸くおさまる。

第4型式：皿A (1689～1692) 1691が第3型式に近い。1690以外は口縁端部内面に一条の沈線が巡る。

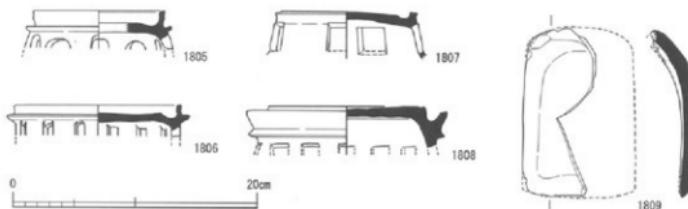
皿B (1695) 口縁端部内面に一条の沈線が巡る。

盤蓋 (1700) 天井は扁平で、口縁部はb形態となる。口縁端部は水平に開いたままおさまる。

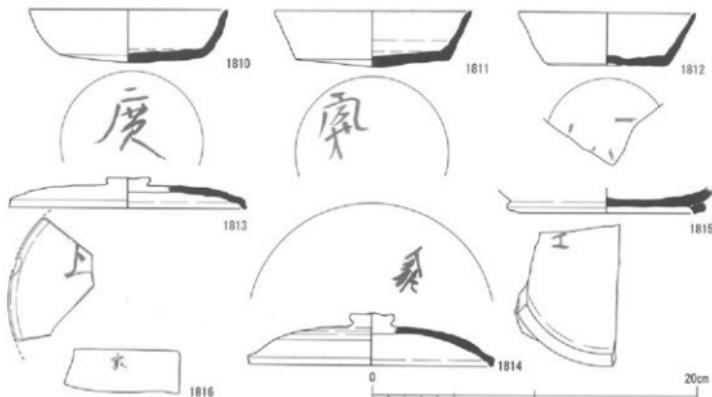
盤 (1701) 口縁端部内面に一条の沈線が巡る。

杯蓋 (1762～1764) 1762は0類に、1763・1764(II・III)類に伴う蓋である。

杯B (1765～1768) 1766・1767は(II・III)類に1768はV類になる。1765はI類に属する。



第99図 円面観



第100図 墨書き土器

棗椀蓋（1773）口縁部には一条の突帯が巡るため把手とあわせて二重の環状になる。

棗椀（1778～1780）1778と1779は大型に属し、口縁端部内面に一条の沈線が巡る。1780は小型であり、棱が明確に張り出さない。

円面観（1805～1809）：1807以外は海周堤部と体部との境に突起が巡る形態である。1805の堤が最も高く、1808は陸部が堤以上に高くなる。1805は逆「U」字形の透かしとなるが、1806・1808は長方形となる。1807は陸と堤がほぼ同じ高さとなっており、方形の透かしを穿つ。

墨書き土器（1810～1816）：1810は2型式の杯A底部に「廣」の文字があり、1811は第2型式の杯A底部に則天文字が書かれ。1812も2型式の杯A底部に、1813は2形式の杯蓋の天井部に、さらに1815は杯Bの底部に墨痕があるが、文字の判読はできない。1814は第1型式の杯蓋天井部に一文字の則天文字がみられるが、1811同様判読できない。

第3節 平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物



第101図 平安時代～鎌倉時代の遺構

1. 遺構(図版4)

調査区はの地形は、西木之部遺跡の中央部で、西側に大きく展開する谷である。調査区西端は谷部の奥まった部分にあたり、標高213mを示す。この付近を起点として西側に大きく開口し、東端の低位部分では標高204mである。調査区西端と東端では9m比高差をもち、西から東へ緩やかに傾斜している。

調査区は、現況が階段状に開削された水田であった。そのため、この時期の遺構は検出面の浅いこともあり、多くの遺構が消滅したと思われる。遺構の分布密度に偏りが見られるのは、こうした後世の削平によると理解している。当地区で確認された掘立柱建物の分布は、調査区東半部に偏在する。しかし高位になる西半部においても、当該期の柱穴を確認しており掘立柱建物の分布は調査区全域に広がっていたと推察される。

当地区で確認された遺構は、掘立柱建物・溝・井戸・土坑である。掘立柱建物は12棟識別し得た。建物は棟軸方位が西に向くものと北に向くものに大別できる。溝は8条確認している。溝は掘立柱建物に近接して掘られているばあいが多く、他の地区と同様、建物の排水機能をもつ溝と思われる。しかし調査区中央を流れるSD4・7は高位で、井戸とつながっており、井戸に伴う排水の機能を果たしていたと思われる。井戸は、井枠に曲物を使用した井戸と鐵板組の井戸を2基確認した。

S B 8

調査区の中央付近に位置し、S B 9と身舎が重なる。9個の柱穴で構成される2間×3間の東西南方向に長い建物である。梁行方向3m、桁行方向6mの小型の建物である。

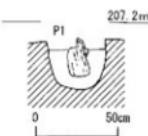


柱間は梁行が1.2m前後、桁行が1.8m～2.5mである。柱穴掘方は径25cm～30cmの円形を呈し、確認面からの深さは20cmを測る。棟軸方位はN71°Wを示す。

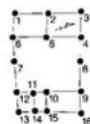
S B 9

調査区の中央付近に位置し、S B 8と身舎が重なる。16個の柱穴で構成される2間×4間の東西南方向に長い建物である。梁行方向5.5m、桁行方向8.2mを測る。

柱間は桁行が2m～3m、梁行が2.5m前後である。柱穴掘方は径35cm前後の円形を呈し、確認面からの深さは25cm前後である。P1内には柱根が残っていた。柱根の大きさは径12cmである。棟軸方位はN80°Wを示す。



第102図 P1



S B 10

調査区中央に位置する。南側でS B 11と身舎が一部重なる。

10個の柱穴で構成される1間×4間の東西方向に細長い建物である。梁行方向2m、桁行方向10.3mを測る。柱間は桁行が2.5m前後である。

柱穴掘方は、径25cmから50cmの円形を呈する。確認面からの深さは30cm前後である。主軸方位はN90°Wを示す。



S B11

調査区中央に位置する。北側でS B10と、南側でS B12・19とそれぞれ身舎が重なる。消滅あるいは未確認の柱穴を含め、12個の柱穴で構成される2間×3間の東西方向に長い建物と推定している。梁行方向6.5m、桁行方向11.7mの規模である。柱間は桁行が3m～4m、梁行が3mである。柱穴の掘方は、径40cm前後で、確認面からの深さは35cm前後である。P 1では柱根が残っている。柱根の大きさは径14cmである。棟軸方位は、N88° Wを示す。

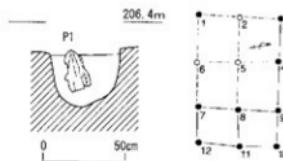
S B12

調査区中央、南寄りに位置する。S B11・19と身舎が重なり、東辺部はS D23と接する。消滅あるいは未確認の柱穴の柱穴を含め16個の柱穴で構成される3間×3間の方形の建物と推定している。仮に東西方向を桁行としたばあい、桁行方向4.0m、梁行方向3.8mを測る。

柱間は、梁行・桁行ともに1m前後である。
柱穴の掘方は径30cm～40cmの円形を呈し、確認面からの深さは25～30cmである。

P 11・15には柱根が残っていた。柱根の大きさは、径15cmである。

主軸方位はN80° Wを示す。



第103図 P 1



第104図 P 11・15

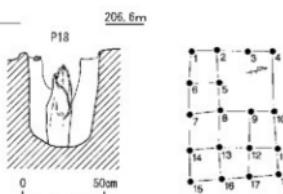
S B13

調査区中央、南寄りに位置する。S B14・19と身舎が重なり、建物の東辺はS D23と約1mの間隔をおいて平行している。消滅あるいは未確認の柱穴を含め13個の柱穴で構成される3間×3間の建物と推定している。仮に東西方向を梁行としたばあい、梁行方向8m、桁行方向9mの多少南北に長い方形の建物である。柱間は梁行2.5m前後、桁行2.7m～3.0mである。柱穴の掘方は径25cm～35cmの円形を呈し、確認面からの深さは30cm～40cmである。主軸方位はN11° 30' Eを示す。

S B14

調査区中央、南寄りに位置する。S B13・19と身舎が重なる。建物は18個の柱穴で構成される3間×4間の東西方向長い建物である。梁行方向6.9m、桁行方向11.8mを測る。柱間は、桁行が2m～3m、梁行が2m～2.7mである。

柱穴の掘方は径40cm前後の円形を呈し、確認面



第105図 P 18

からの深さは30cm～60cmを測る。P 18には柱根が残っていた。柱根の大きさは径11cmである。主軸方位はN76° Wを示す。

S B15

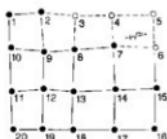
調査区の南東隅に位置する。北東側には、S B17と身舎が部分的に重なる。北側にはS B16が並列している。建物は、11個の柱穴で構成される2間×3間の東西方に向長い建物である。梁行方向4m、桁行6.2mの小型の建物である。

柱間は桁行方向が1.5m～2m、梁行方向が2m前後である。柱穴の掘方は、径40cm前後で確認面からの深さは30cm前後である。棟軸方位は、N80° Wである。



S B16

調査区の南東隅に位置する。東側には、S B17と身舎が部分的に重なり、南側にはS B15が並列する。建物の西辺はS D23と接している。消滅あるいは未確認の柱穴を含め16個の柱穴で構成される3間×4間の南北方向に長い建物である。梁行方向9.5m、桁行方向12mの大型の建物である。柱間は桁行2.5m～3.5m、梁行2.6m～3.8mである。柱穴の掘方は、径30cm～60cmの円形を呈する。主軸方位はN10° Eを示す。



S B17

調査区の南東隅に位置する。建物の周囲をS D25が囲み、済を伴った建物である。西辺はS B15・16と身舎が重なる。

消滅あるいは未確認の柱穴を含め、12個の柱穴で構成される2間×3間の南北方向に長い建物と推定している。

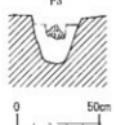
梁行方向3.5m、桁行が5.5mの小型の建物である。

柱間は桁行、梁行共に1.7m前後である。柱穴掘方は、径35cm～40cmの円形を呈し、確認面からの深さは40cm前後である。

P 3には柱根が残っていた。棟軸方位はN7° Eを示す。



204.6m



第106図 P 3

S B18

調査区の中央、南端に位置する。建物の南半は調査区外に延びる。北側6mの所にはS B13・14が隣接する。6個以上の柱穴からなる梁行2間、桁行1間以上の南北方向に長い建物と推定している。梁行方向7.5m、桁行方向6.2m以上の建物を推定している。柱間は梁行が3.5m前後、桁行は3.2mないしはそれ以上である。柱穴掘方は、50cm×1m前後の楕円形を呈し、柱が抜き取られた状況を示す。棟軸方位は、推定でN21° Eを示す。



S B 19

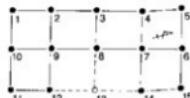
調査区中央に位置する。S B 11~14と身合が重なる。

消滅あるいは未確認の柱穴を含め15個の柱穴からなる、2間×4間の南北方向に細長い建物と推定している。

梁行方向8.3m、桁行方向13.5mである。柱間は桁行が3m～4m、梁行が3.2m前後である。

柱穴の掘方は径30cm前後の円形を呈し、確認面からの深さは、30cm前後である。

棟軸方向はN16° Eを示す。



S B 20

調査区の北東隅に位置する。

東側2.5mのところには、S B 21が隣接する。消滅あるいは未確認の柱穴を含め9個の柱穴からなる2間×2間の方形の建物である。

東西方向6.5m、南北方向6.5mの小型の建物である。

柱穴掘方は径30cm～40cmの円形を呈し、確認面からの深さは、30cm前後である。

東西方向を主軸としたばあい、N85° Wを示す。



S B 21

調査区の東端に位置する。西側にはS B 20が隣接している。柱穴の1部を欠くが、14個の柱穴からなる3間×3間の南北方向に長い建物と推定している。

梁行7.2m、桁行方向10.7mの大型の建物である。

柱間は桁行2m～3.5m、梁行2m～3mである。

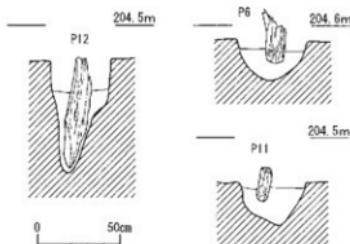
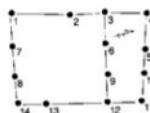
柱穴掘方は、径30cm～40cmの円形を呈し、確認面から深さは25cm～65cmである。

P 6・11・12は柱根が残っていた。

P 12の柱根は先端が尖った加工が施され、柱穴掘方の断面形状は、柱穴を掘り込んだ後、さらに柱を打ち込んで固定した状況が見て取れる。

遺存する柱根の大きさは15cm前後である。

主軸方位はN76° Wを示す。



第107図 P 6・11・12

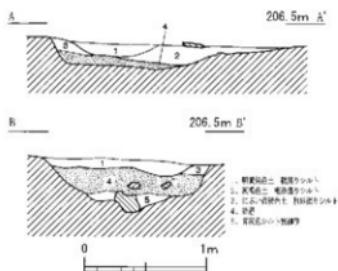
S D 5

調査区の中央部に位置する。S D 4・7とS E 1を切っている。S B 11の西辺付近まで延びる。溝幅

2m～1.5m、確認面からの深さは、20cm～45cmである。

S D 4・7

調査区の中央を東西方向に流れる溝である。S D 5に切られている。S D 4とS D 7は調査の都合上名称を分けたが、同じ造構である。溝の高位にあたる西端部は井戸S E 1とつながり、低位の東端は、S D 23近くまで延びる。溝幅50cm～1mで、低位に向かうに従い幅が広くなっている。確認面からの深さは20cm前後と浅い。



第108図 S D 5

S D 8

調査区の中央、南端部を東西方向に流れる溝である。溝の東端はS B 14の西辺付近まで及ぶ。溝幅は50cm～80cmで、確認面からの深さは、20cm前後と浅い。

S D 23

調査区の中央部東寄りを南北方向に流れる溝である。溝の西側はS B 13が1mの間隔をおいて、S B 12と50cmの間隔で、ほぼ平行に講接している。東側はS B 16が50cmの間隔をおいて近接する。S B 14柱穴と重複しており、S B 14が溝を切っている。溝幅は30cm～60cmで、確認面からの深さは、25cm前後である。

S D 25

調査区の南東隅に位置する。S B 17の周囲を囲む溝である。S B 16の身舎と重なるが、柱穴と同溝の直接の重複はない。溝幅は30cm～60cm、確認面からの深さ20cm前後である。

S D 26

調査区南東端を南北に流れる溝である。溝の南端でS D 100と重複し、北端ではS D 27・29と重なる。溝幅は40cm前後で、確認面からの深さは25cm前後である。

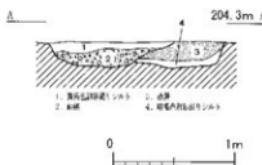
S D 27・29

調査区の南東部を「L」字形に屈曲して流れる溝である。S D 26を切って掘られている。溝幅は、40cm～2mで、コーナー部分が最も広い。確認面からの深さは20cm前後と浅い。

SD100A・B

調査区の南東隅に位置する、東西方向に流れる溝である。二条の溝が重複しており、SD100Aが新しい。

溝の東端では、SD26に切られている。溝幅はSD100Aが1m前後、確認面からの深さは20cmを測る。SD100Bの深さは20cmである。

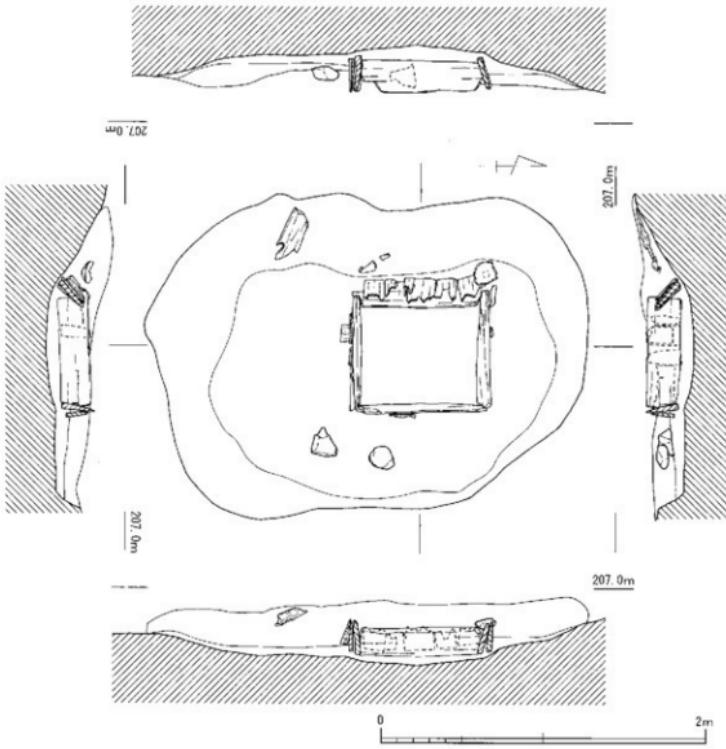


第109図 SD100A・B

SE 1

調査区のほぼ中央部に位置する緩板組の井戸である。井戸の東にはSD4・7がつながっている。井戸は後世の削平によって大部分が破壊されており、井戸底の井戸枠のみ遺存していた。井戸の掘方は2.6m×1.9mの楕円形を呈し、確認面からの深さは25cmである。掘方の中央、北寄りに最下位の戸枠と緩組みの井側が残っていた。井戸枠は1辺75cmの規模で、幅20cm・厚さ2cmの板材を組んでいた。

井戸の西辺と南辺には幅10cm～20cm・厚さ1cmの緩板材が並び、井側の構造は、緩板組横棟どめないしは緩板組無支持井戸と考えられる。



第110図 SE 1

SE 4

調査区中央、東よりに位置する曲物を井戸に使用した小型の井戸である。南側にはS B11が近接し、北側にはS B10が隣接する。

井戸掘方の南側は擾乱で破壊されている。

井戸の掘方は、70×60cmの椭円形に掘られ、そのほぼ中央に径40cmの曲物が置かれている。

残存する曲物の高さは、7cmである。

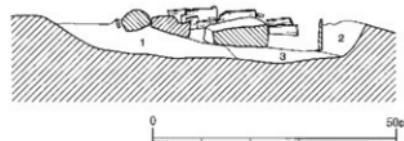
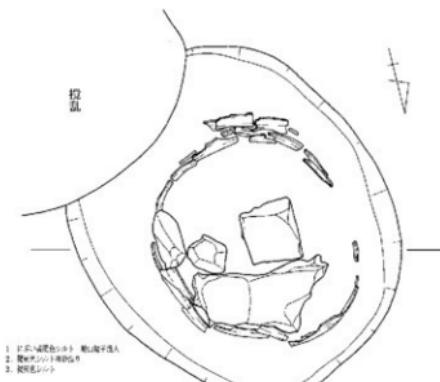
曲物内には、5~10cm×15~20cmの河原石が置かれている。

SK 26

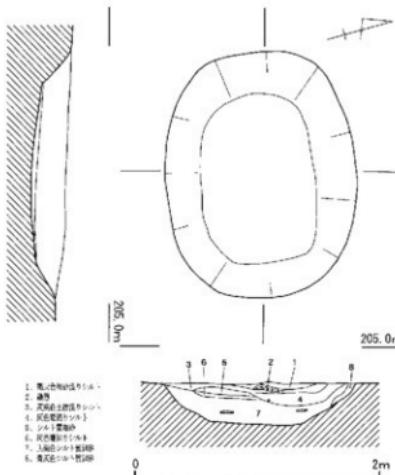
調査区の南北隅に位置する土坑である。

S B16と身舎が重なり、西側にはS D23が近接する。

土坑は2m×1.6mの椭円形に掘られ、確認面からの深さは30cmである。土坑の性格は不明である。



第111図 SE 4



第112図 SK 26

2. 遺物 (図版40)

土器は、掘立柱建物に伴うものは少なく、その多くは溝・井戸などの遺構より出土している。

SB21

柱穴内より瓦器碗 (2351) と須恵器碗 (2352) が出土している。瓦器碗は内外面に暗文をもち、断面三角形の高台をもつI b類である。

須恵器碗は、回転糸切りの平高台をもち、内底にわずかに段差をもつタイプで碗A 2 I類の範囲に収まると考えたい。しかし、器形的に口縁部が玉縁化する顕著な特徴をもつため、あらたに細分する必要があるのかもしれない。底部には墨書きで字が書かれているが、その内容は不明である。

柱穴内出土

掘立柱建物以外に、建物として識別できなかった柱穴群より土器が出土している。

2353はP275B柱穴内より出土した須恵器碗である。退化した平高台で、内底にわずかに段をもつA 2 IIa類である。

2354・2355はP275Bを切ったP275Aから出土した碗で、やはりA 2 IIa類である。

P556からは、土師器小皿と土師器碗がまとめて出土しており、同時性の高い一群である。

土師器碗 (2360) は、器面の摩耗が著しく遺存状況は不良である。器形や調整から判断して瓦器碗の可能性がある。

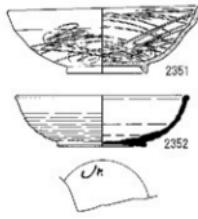
土師器小皿 (2356～2358) は、退化した平高台をもつI a類で、大皿2359は、底部切り離し手法が明らかではないが、器形は大皿I類に近似している。

2361・2362はP583から出土した土師器小皿と須恵器碗である。

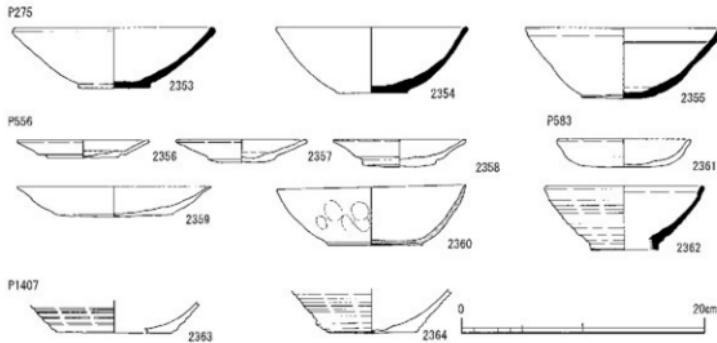
2363・2364はP1407より出土した土師器杯II a類である。

2363は、柱穴掘方内からの出土である。

2365はP1261出土の土師器小皿II b類で、2366はP1071出土の



第113図 S B21



第114図 柱穴出土の土器 (1)

上師器小皿 II b類である。2367は、P1184出土の土師器小皿である。

2368の土師器杯で、2369はP1403出土の土師器小皿である。

2370はP631出土の須恵器碗である。2371はP564撗方出土の土師器杯で完形である。2372はP1024出土の底部回転糸切りの土師器杯で II b類である。2373はP534出土の托b類である。P1304出土2374も2373と同様はの托b類である。

2375は、P1108出土の瓦器皿である。2376はP1223出土の瓦器皿 II a類である。

2377の瓦器皿はP368より出土した皿 I b類である。完形である。2378は斜格子状の暗文が施された瓦器碗で、P704から出土している。2379はP1403出土の瓦器碗である。

2380・2386はP561出土の瓦器碗と須恵器碗である。2381はP759出土の完形の瓦質小瓶である。底部は回転糸切りである。

2382はP1409出土の須恵器杯A 1 I類である。

2383は2370と同じP631出土の須恵器杯A 1 II b類である。2384はP781出土の須恵器碗である。

2385はP578出土の底部回転ヘラ切りの須恵器碗である。

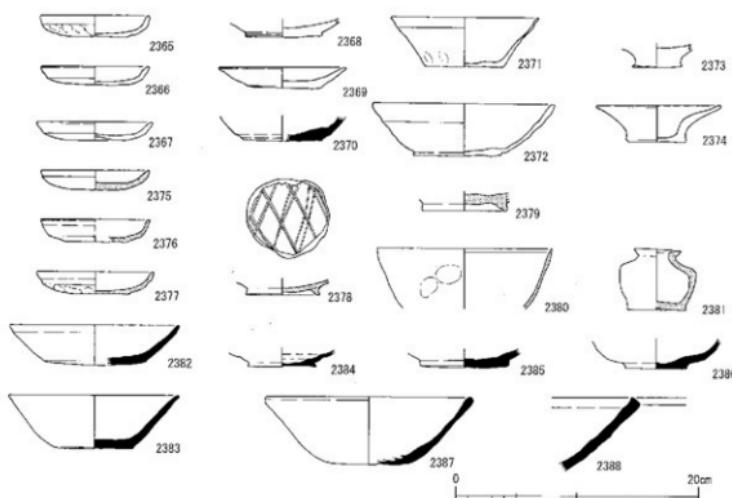
2387はP1080撗方出土の須恵器碗A 2 III類である。

2388は東播系須恵器捏鉢で、P1124より出土している。

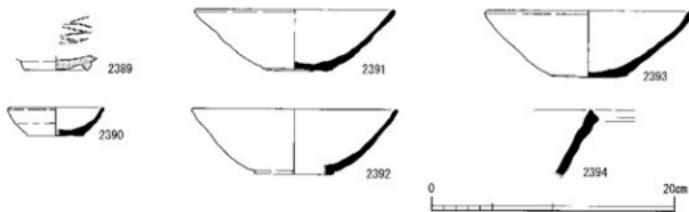
SE 1

溝内より黒色土器碗、須恵器皿・碗・捏鉢が出土している。

389の黒色土器碗は、底部に回転糸切り裏が明瞭に残り、内底にはジグザグ文の一部と思われる暗文が認められる。底部の回転糸切り裏、断面三角形の高台の特徴は黒色土器碗 I b類に分類されるが、ミガキが暗文化した状況と捉えればあるいは瓦器碗の出現期に相当する可能性がある。



第115図 柱穴出土の土器（2）



第116図 S E 1出土の土器

2390の須恵器皿は回転糸切り底のA 1 II a類に比定できる。

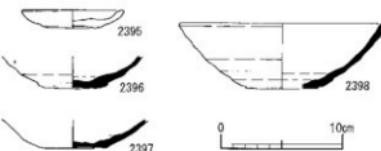
碗は2391と2393が底部平底化したA 2 III類、2392が退化した平高台をもち、底径／口径率の大きいA 2 II a類に比定される。2394は束縛系須恵器押鉢の破片である。

SD 5

土師器小皿、須恵器碗が出土している。

土師器皿2395は完形で、退化した平高台をもつ1a類である。

須恵器碗は、すべて底部回転糸切りのA 2 類の碗である。2398は底部が平底のIII類に相当する。



第117図 S E 5出土の土器

2397は底部破片であるが、2398とおなじ平底化したIII類に収まると考えられる。

SD 5

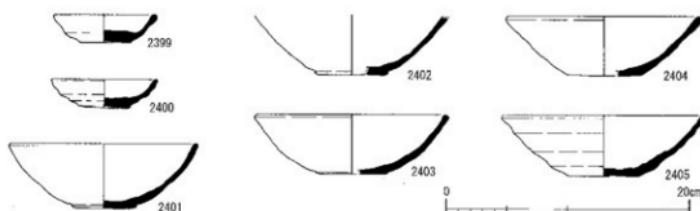
溝内より出土した土器はすべて須恵器で、皿、碗がある。皿は退化した平高台をもつA 1 I類（2399・2400）がある。碗はすべて底部回転糸切りのA 2 類で、退化した平高台をもつII類（2401・2403）と平底のIII類がある。このうちII類は底径／口径率の大きなa類（2403）と小さいb類に細分できる。

SD 4

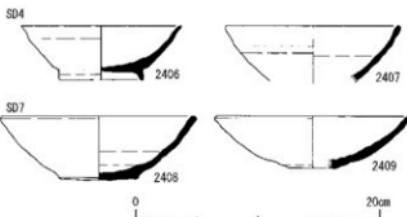
須恵器杯と碗（2407）が出土している。2406の高台をもつ杯は、高台から体部の境に括れをもつBb類である。

SD 7

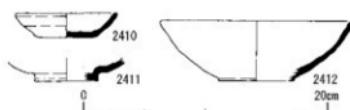
退化した平高台の須恵器碗A 2 II類が出土している。2408は底径／口径率の大きなa類、2409は小さ



第118図 S D 5出土の土器



第119図 S D 4・7出土の土器



第120図 S D 8出土の土器

(2415)は、体部指揮さえのⅡ類である。

杯(2416)は底部回転糸切りのⅡb類である。

須恵器皿(2417)は平底で口縁が広がるA1 IIa類である。

椀は底部破片が出土している。底部回転糸切りのA2類に収まるものである。2418は退化した平高台をもつⅡ類の範疇に収まると考えられる。また2419はⅡ類ないしはⅢ類に収まるものである。

SD29

須恵器椀の底部破片(2420)が出土している。退化した平高台をもつ回転糸切り底のA2 II類の範疇に収まると考えられる。

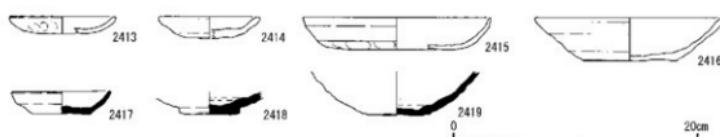
SD100B

黒色土器椀の底部破片(2421)が出土している。断面三角形の高台をもつIb類の椀である。

包含層

包含層から出土した土器は、上師器小皿・托、黒色土器皿・椀、瓦器皿、須恵器皿・杯・椀・鉢、綠釉、中国製磁器が出土している。特筆すべき土器には、綠釉耳皿がある。綠釉耳皿は、この1点のみである。

また、中国製磁器は白磁製品に限られ、青磁が出土していないのも当地区の特徴である。



第121図 S D 23出土の土器

Ib類である。

SD 8

須恵器皿(2410)・椀が出土している。椀は底部回転糸切りのA1類 I類(2411)と退化した平高台のA2 IIa類(2412)である。

SD23

土師器皿・杯、須恵器皿・椀が出土している。土師器皿は小皿(2413・2414)と大皿(2415)がある。

小皿は、指押さえで口縁が内湾するIIa類(2413)と底部回転糸切りで退化した平高台様の底部をもつIa類(2414)がある。大皿

上部器皿は、回転糸切り底で平底の I b 類が圧倒的に多い。2426～2432
がこれに該当する。

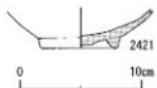


第122図 SD29出土の上器

部指揮されで口縁が短く立ち上がる小皿は、II b 類に分類される一群
で、2422～2424がこれに該当する。これ以外に、2425の回転糸切り底をも
ち口縁が短く立ち上がる I c 類がある。

2433は大皿 I 類である。

托は大振りの a 類 (2436) と小振りの b 類 (2435) がある。



第123図 SD100B出土の土器

瓦器は皿のみ出土している。丸底で口縁が内湾する I a 類 (2441～2443)、
丸底で口縁が外反する I b 類 (2439)、平底気味で口縁が内湾する II a 類
(2437・2438・2444・2445)、垂直に立ち上がる口縁をもつ II b 類 (2440)

黒色土器は、皿 (2446) と椀 (2447) がある。皿は退化した平高台を
もつ a 類がある。椀は底部の切り離しに回転糸切り手法を用い、高台を貼り付けた I b 類がある。

須恵器皿は、退化した平高台をもつ I 類 (2448・2449) がある。

2450・2451の杯は底部の切り離しに糸切り手法を用いた A 2 類に該当する。

椀は底部回転ヘラ切りの A 1 類と回転糸切りの A 2 類がある。

A 1 類は突出した平高台をもち、内底の段差が強く、口縁が直線的に立ち上がる I a 類 (2455) と内
底の段差が弱い II a 類 (2456)、退化した平高台をもつ III 類 (2454) がある。

A 2 類は突出した平高台で、内底の段差が強く、底径／口径率の大きな I a 類 (2453・2462)、底径／
口径率の小さい I b 類 (2464)、退化した平高台をもち底径／口径率の大きい II a 類 (2459・2461)、底径
／口径率の小さい II b 類 (2458・2460・2463) がある。

これ以外に、底部が平底化した III 類 (2465～2471) がある。椀のなかでは、新しい段階の椀 A 2 III 類
が多く出土している。

2473は口縁が玉縁化した鉢と考えられる。

2474は縁鉢の耳皿である。縁鉢の耳皿はこの 1 点のみである。

中国製磁器

中国製磁器は碗と皿が出土している。白磁のみ出土しており他の調査区とは様相が異なる。

白磁皿は 3 点出土している。2475・2476は口縁は外反し、底部は浅く削りだした高台である。外面体
部下半は露胎である。横田・森田分類 (横田・森田1978) の白磁皿 II 類の範疇に収
まとと考えている。

2488は内面見込み部分を輪状に釉を搔き取っている。底部は露胎である。III 類と
理解している。

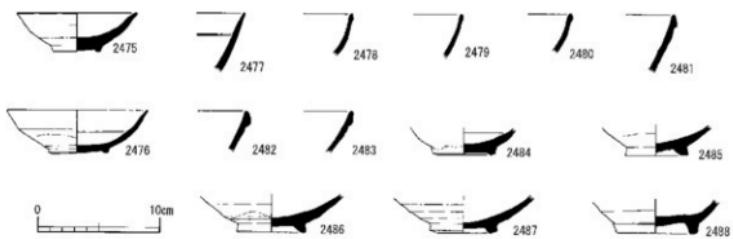
2477は碗の口縁部である。口縁は外反し端部を丸くおさめている。内面口縁付近
に沈線を施している。白磁碗 V - 1 類と考えている。

2478～2480は、白磁碗の口縁破片である。口縁端部は小さい玉縁をもっているも
のである。白磁碗 II - III 類の範疇におさまると考えている。

2481～2483は大きな玉縁をもつ碗で、口縁部のみの破片のため細分はできないが、
白磁碗 IV 類におさまると理解している。



第124図 緑釉



第125図 中国製磁器

2481～2487は白磁碗の底部破片である。破片であるため分類は困難である。2484は浅い高台をもち、見込み周縁に沈線が施されている。高台脇まで釉が及ぶ。

2485・2486は高台断面が台形を呈している白磁碗である。外面大部下半は露胎である。

2487は高台断面が四角形を呈する白磁碗である。外面底部下半は露胎である。

(参考文献)

- 横田・森田1978 横田賢次郎・森田一勉 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について 一形式分類と縦年を中心として一」
『九州歴史資料館 研究論集4』九州歴史資料館

第6章 その他の遺物

第1節 古墳時代の土器

a. A地区出土の土器

古墳時代後半から終末に相当する須恵器杯豆・杯G・同蓋・高杯・甌がわずかに出土している。

杯H（1817）：体部は逆三角形となる。小さな受部が水平に開いた後、短い立上がりが内傾する。

杯G蓋（1818～1820）：1820は天井

部が三角形

の笠形となり、その頂部に宝珠状のつまみが付く。端部内面には、端部より内側で納まるかえりが折り返される。1818・1819は器高が著しく低く、つまみも持たない。

杯G（1821）：底部は丸く、体部へと段やかに移行する。口縁部はわずかに開き、高く伸びる。

高杯（1822・1823）：いずれも短脚・段透かしの脚部である。1822は「ハ」の字形に開き、円形の透かしを3方に拿つ。1823は外湾しながら開き、端部を内側に巻き込む。方形の透かしが4方に穿たれる。

甌（1824）：径部は小さく窄まり、口縁部に向かって外湾しながら開く。肩部は丸く張り、底部も丸底となる。径部と肩部上方の外面にはカキ目が巡り、頸部の上方には一条の低い稜線が囲る。

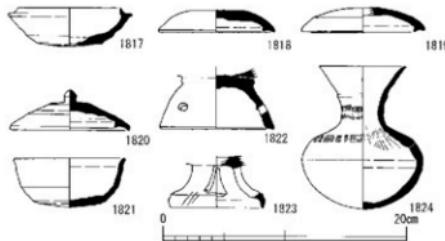
b. B地区出土の土器

古墳時代の須恵器で構成するものではなく、そのすべては包含層内からの出土である。時期的には、5世紀末から6世紀末にまたがるものである。

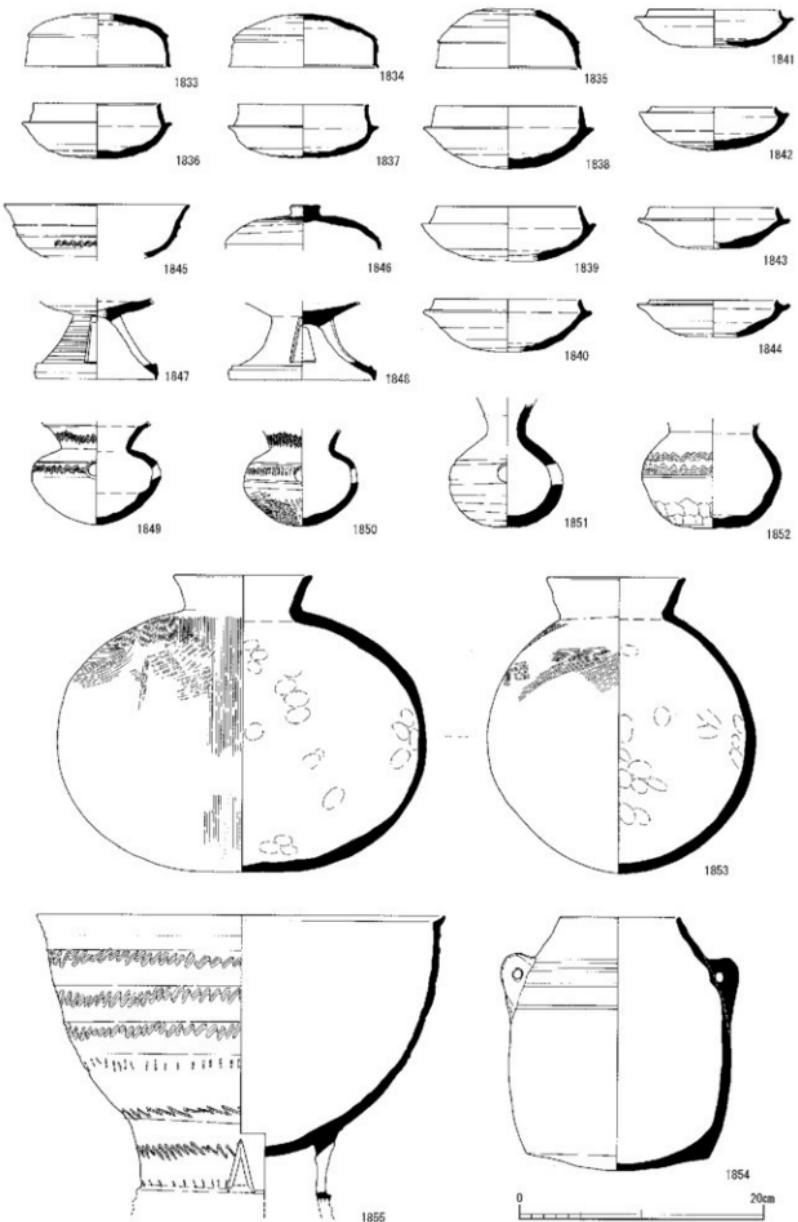
器種としては、杯H蓋・杯H・高杯・高杯蓋・甌・横瓶・提瓶・器台などである。

杯H蓋（1833～1835）：いずれも底体部境の稜は高く、シャープなエッジを持つ。1835は天井部が球形をして著しく高い。1833の端部は内外に小さく肥厚しその先端は外傾する四面となり、口縁部はほぼ直角に長く垂下する。1835の端部は外側に小さく開き、1834は1833と1835の中間的な口縁端部の形態をする。両者とも、口縁部は極わずかに開きながら長くのびる。

杯H（1836～1844）：1836・1837の底部は丸く、受部はほぼ水平に開く。立上がりは外湾気味に、わずかに内傾しながら長くのびる。口縁端部は内傾する狭い平坦面となる。1838と1839の両者とも底部は丸いが、特に1838は深い底部となる。1838の受部は下がり気味に、1839はわずかに上がる。立上がりは1838が直線的にわずかに内傾



第126図 A地区出土の土器



第127図 B地区出土の土器

し、1839はそれ以上に傾く。1840の受部は水平にのび、立上がりは短く内傾する。1841～1844は器高が低くなり、底部はわずかに平底状となる。受部は体部の延長上であり、立上がりは受部を折り返して短く作られる。立上がりに长短の2形態がみられるが、受部以下の短い形態となるものはない。

高杯（1845～1848）：1845は無蓋高杯の杯部である。口縁部は外湾しながら開き、中央に二本の稜が巡る。下段の稜の直下には一帯の波状文が巡る。1847は直線的に、1848は外湾しながら開く。端部はいずれも小さく垂下する。1847は外面に櫛目文が施される。1846は低く太いつまみを持つ有蓋高杯の蓋である。口縁部は欠損する。天井口縁部境の稜はかなり退化し、極小さな段となる。

甌（1849～1852）：1852は破片のため注口部分が確認されていない。底部は平底状で、肩部外面に一条の沈線と二帯の波状文が施される。頸部は大きいが、口縁部を欠く。1849の肩部は胴部中央で大きく張り、底部は尖底状となる。肩部外面には二条の沈線に挟まれて、一帯の波状文が巡る。頸部は径が比較的大きい。口縁部は大きく開き段を持って端部に移行するが、端部を欠損する。頸部と口縁部の段との間に一帯の波状文が巡る。1850の体部は球形となり、肩部外面には二条の沈線の間にカキ目が施される。口縁部の大半を欠損するが、頸部直上に波状文がみられる。1851の体部は下膨れとなり、肩部外面に二条の沈線が巡る。頸部は細くなり、口縁部を欠損する。

横瓶（1853）：体部は俵形となる。口縁部は短く「く」の字に外反し、端部は狭い半坦面となる。

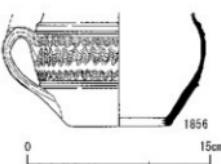
提瓶（1854）：体部は無頸の提袋形となる。平底の底部はわずかに下がる。肩部の両側に一对の耳が付く。耳の高さにあたる頸部外面には、四帯の櫛搔き文帯が巡る。

器台（1855）：体部は大きく内湾しながら開き、口縁端部は斜め上方に屈曲する。台部を欠損するが、最上部には三角形の透かしが四方に挿入されている。体部外面には五本の沈線が巡り、2～5段の沈線間にはそれぞれ一帯の波状文が、そして最下段の沈線の直下には刺突文が加飾される。さらに、台接合部を挟んで上下に2段の波状文が施される。透かしの直下には突帯があり、その直上にも刺突文がみられる。

c. C地区出土の土器

C地区からは、下に示すコップ型須恵器が包含層内より1点出土しているのみである。

コップ型土器（1856）：口縁部を欠損する。コーヒーカップ様に分から底部に向けて把手がひとつ貼り付けられる。胴部最大径部分の外面には、二帯の波状文が巡り、その最下部を一条の沈線によって閉じる。焼成状況は著しく良好で、断面はセピア色を呈する。



第128図 C地区出土の土器

第2節 木 器

1. A地区出土の木器（図版41・42）

本遺跡から出土した木器は数量的には少ない。これは遺跡の性格というよりむしろ、その立地条件による制約が強かったものと思われる。遺跡の本体は前記したように小さな谷内の扇状地上に位置しているため、井戸を除いて遺構内からの木器の出土はない。出土した木器の多くは、谷状地形の内部（水田跡か）より出土したものである。またこの谷状地形内は湧水が多いうえに、シルト層で土層の分層が困難をきわめたため、十分な土層別の取り上げは行っていない。したがって古墳時代から中世までの木器が混在している状況にあるが、ここではほぼ奈良時代のものと推定できるものについて記述を行うこととする。

なお、木器の器種分類は『木器集成図録－近畿古代編』に従うところとし、特殊なものについてのみ個別の名称を用いることとする。

上記のとおり、木器の多くは、谷部内らかの出土であり、遺構内としては木材列とS D69から極わずかの出土を見るのみである。

a. 木材列出土の木器

竿（W 1）

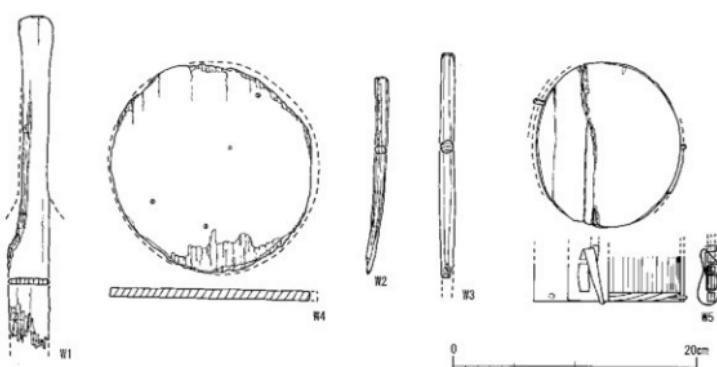
遺存状態が悪いため、把手部以下はほとんど欠損する。厚さ5mm程の板材を用い、柄頭のみをやや幅広に丸く作り出す。

串（W 2・W 3）

全体的にわずかな反りを持ち、断面は梢円形となる。先端部は断面の両長径側から削って尖らす。W 3は断面円形で、頭部も面取りを施す。

円盤状木器（W 4）

曲物の底板もしくは天井板かとも思われるが、桿皮通し用の穿孔あるいは木釘の痕跡がまったくみられない。よって別の用途を考えなくてはならないが、その性格は不明である。



第129図 出土木器（1）

b. SD69出土の木器

円形曲物 (W5)

側板が部分的に残存するため、図上復元を行った。底板は正円ではなく、やや歪んだ状態にある。

側板は4本の木釘で固定されていたと思われるが上部を欠損し、一条の櫛皮閉じによって結束される。

c. 谷地形内出土の木器

水田跡と思われる谷地形埋土内から、比較的まとまった点数の木器が出土している。容器・祭祀具・生活雑器・工具・農具等多岐にわたるが、個々の点数としては非常に少ない。これ以外に、用途不明木器が少數みられる。

容器

例物としては、壺・盤がみられ、曲物には円形曲物がある。

例物壺 (W6)

全体のはば4分の1が残存する。天井部は極わずかに膨らみを持つが、中央が欠損しているためつまみの有無については判断できない。器壁は中央部から口縁部へむかってしだいに薄くなる。ほぼ直角に垂下していたと思われる口縁部は欠損しているためその長さは不明である。外面には黒漆が厚く塗布される。

例物盤 (W7～W11)

曲物について一器種としては点数が多い。口径的には17cm前後の大型 (W8・W9・W11) と、16cm前後の小型 (W7・W10) に大別できる。W10は狭く外傾する平坦面を持つ口縁端部が極わずかに残存するが、他のものは口縁部を全て欠損する。いずれも内面には同心円を描いたロクロの痕跡がみられ、W7・W8・W10には不定方向の削痕が確認できる。W11は未製品であり、手斧による荒い加工痕が内外面に残る。ロクロ掛け前の状態である。

円形曲物 (W12～W18)

側板の立つものは1点のみであり、その他は天井あるいは底の板材のみである。口径的には、径24.6～19.8cmの大型、17cm前後の中型、14cm前後の小型と3形態に細分することができる。蓋となるのは約半分が残存するW15のみであり、中型に属する。身部のうち、小型となるのはW14とW16である。W14の側板は一条の櫛皮により結束を行い、5あるいは6箇所の木釘によって天井板に固定する。中型となるW15は約半分が残存するのみであるが遺存状況は良好であり、2箇所の木釘痕がみられる。大型のW18も遺存は良く、3箇所の木釘痕が残存する。片面に不定方向の削痕がみられる。

祭祀具

劍形 (W19)

両端を欠損しており、短い身部中央が残存する。

人形 (W20・W21)

W20は大型品の頭部の破片であり、頭頂部は山型に作られる。頭部はわずかに内湾しながら長く作りだされる。W21もW20と同様の形態をしているものと思われる。肩部は遺存状態が不良のため、その形態は判断できない。

日用雑器

火錐臼 (W22)

長方体の材であるが、下方を欠損する。上端の片辺に「V」字の切り込みを2箇所加え、白部とする。使用されているのは、下方の1箇所のみである。

農具

木鍤 (W26～W30)

基本的な形態は、周囲両側より削り込み、中央部を細くしている。W26が長く径も大きいものの、他のものは本来ほぼ同一規模にあったものと思われる。

把手状木器 (W23)

握り部分はわずかに細くなり、先端部が小さく下方に屈曲する。先端部分が欠損し全体を知り得ないため、いかなる器種の把手か判断できない。

柄状木器 (W31)

先端は幅が広く、山型に尖る。基部に向かっては次第に細く長くなっていたものと思われる。

棒状木器 (W32～W34)

頭部は丸く、先端は串状に尖っていた可能性が高い。3本とも太さ・長さが異なるため、用途も異なると思われる。

田下駄 (W35)

平面形が台形を呈する基台部の部材である。その両小口部には棒を装着する溝穴を穿ち、上辺に天板を固定する木釘穴が2箇所の穴が穿たれている。

用途不明木器

W24は板材を用いる。半裁状態で残存し、下端も欠損する。上端側は肩が斜めに落とされ、先端部は突起上に作り出す。

W36の基本形は鉤形を呈するが、下端は欠損する。外辺は円形に近いカーブを描く。

W38は下端を欠損する板材である。上端には穿孔があり、そこに木釘状の棒材が貫通している。

W37はかなり厚手の短い板材であり、一方の小口を斜めに切る。中央には方形の穿孔がある。

W39は上辺の小口に向かって急激に幅が広くなる。その広まった小口側には長方形の穿孔があり、下方の小口近くには下面以外の3方に溝状の掘り込みがなされる。

2. C 地区出土の木器 (図版42)

同地区からの出土木器の点数は極わずかであるが、そのうち形態が判定でき、図化できる木器は数点のみである。遺構に伴うものは、SE02とSE03内出土のもののみであり、他は谷部埋土内から出土している。

a. SE02出土の木器

祭祀具

斎串 (W44～W46)

W44は上端を山型とする。全長が長く、両側辺には3段にわたって上方から削り掛けを施す。

W45も同様に頭部を山型とするが、削り掛けは上方に1段となる。W46は1段の削り掛けを行うが、頭部は山型にはならないようである。

容器

円形曲物 (W48～W50)

W48は径約20.6cmの中型に属する曲物の底板である。木釘が垂直に打たれたものと、斜めに打たれたものがみられる。W50は径約12.4cmの小型の曲物の底板であり、こちらは木釘が垂直に打たれる。内面と思われる側に黒漆が塗布される。W49は径約20.8cmの曲物の側板であり、井筒に使用されていたものである。木釘を打ち込んだ穴が4個みられるため、容器から転用したことがわかる。下辺部には幅約7cmの帯板を廻し、側板との間に4本の縦板を対角の位置に入れ込む。

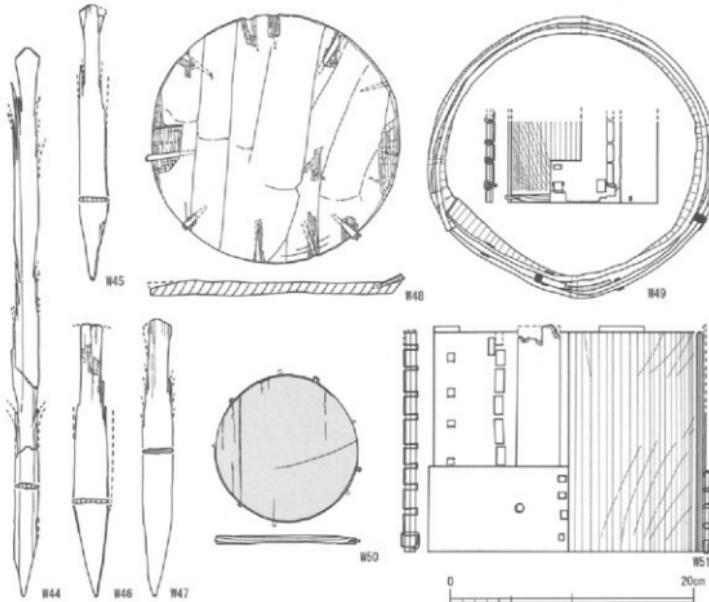
側板は2帯の樺皮紐で結束し、帯板は1帯で結束する。

b. S E 03出土の木器

祭祀具

斎串 (W47)

S E 02出土のW45・W46とはほぼ同規模である。頭部を山型とし、両側辺には上方から削り掛けが施さる。先端部は両側辺側から削り込む。



第130図 出土木器 (4)

c. 谷地形内出土の木器

A地区同様、水田址と思われる谷地形内より農具・工具が数点出土している。

農具

木鍤 (W40～W42)

3形態のものが各1点出土している。W40は「人形」型となるものであり、縫れ部がかなり上方に偏る。W41は「鼓」型となり、縫れがVの字となる。W42は「骨」型であり、中央の細い部分が長くなり、最大径部が両端に偏る。

工具

木針 (W43)

全体は緩やかにV字形となり、断面は四角形である。頭部を持ち、先端は尖らす。

第3節 土製品

A地区S D65より羽口 (C1) と土鍤 (C2・C3) が出土している。またB地区包含層中より土製勾玉 (C4) が1点出土している。

羽口 (C1) は、筒部下半と拘部を欠損する。

先端部 (上端) が焼けたガラス化している。筒部外面は窓のヘラケツで調整している。

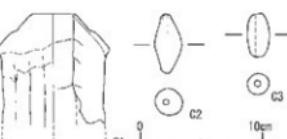
内面には3段の粘土紐接合痕跡が認められる。

筒部径8.4cm、孔径3cm、残存する長さ9.0cmである。

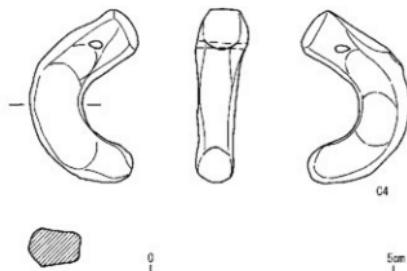
土鍤は2点出土している。

C2は胴部が膨らみ、縦断の形状が菱形を呈する土鍤である。外面は指撫で調整を施す。全長4.8cm、最大径2.2cm、孔径4mmを計る。

C3は、円筒形の土鍤である。外面はC2と同様、指押さえ調整を施す。全長3.4cm、最大径1.8cm、孔径4mmを計る。



第131図 A地区 S D65出土土製品



第132図 B地区 出土土製勾玉

C4は、全体に扁平なつくりの土製勾玉である。

頭部は四角に作り出している。腹部は「C」形に彎曲し、指押えにより扁平に仕上げている。尾部の先端は丸く收めている。孔部の片側穿孔である。

全長3.6cm、幅1.1cm、厚さ0.7cmを計る。

第4節 金属器

A・B・C地区の各地区より、帶金具の一種である丸鞘（M1）をはじめ延喜通宝（M2）・隆平永寶（M19）などの皇朝十二錢、素文鏡（M3・M17）、耳環（M18）などの青銅製品が出土している。

また鉄製品は鎌（M4・M14）などの武具類、鎌（M15）、ヤリガシナ（M16）、釘（M17）などの工具類をはじめ、馬鍔の歯（M6～13）などの農具類が出土している。その他、不明鉄製品の柄部（M5）がある。

これらの金属器の多くは包含層より出土している。遺構内より出土した金属器は、丸鞘（M1）・延喜通宝（M2）がA地区の平安時代に比定される溝（S D72・44）より、隆平永寶（M19）がC地区奈良時代の井戸であるS E2内より出土している。M3の素文鏡は、中世段階と理解しているB地区柱穴（P 186）内より出土。祭祀に使用されたものかは不明である。馬鍔の歯（M6～13）は中世段階の建物跡（S B 4）に属する柱穴P 19より鉄の歯のみが固まって出土。当時、絵巻物に「馬鍔の歯をセットごとに縛り売って歩いている商人の姿」が見られる、中世の馬鍔の歯の流通形態が実証された。

銅製品

丸鞘（M1）

S D72より出土した帶金具である。表面には漆などの鍍金は見られない。半円形のK A板の下側長方形の孔を穿つ。裏面には下方2カ所、上方に1カ所の鋲足が残存している。高さ2.3cm、幅3.4cm、重さ8.6gを計る。

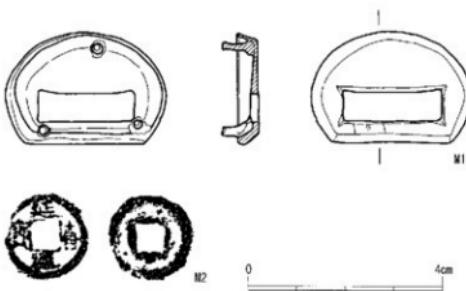
銅鏡（M2・M19）

M2は、平安時代の溝S D44より出土した「延喜通宝」（延喜7年11月、907年鑄造）である。径1.8cm、厚さ2mm、重さ1.3gを計る。M19はC地区奈良時代に比定されるS E 2内より出土した「隆平永寶」（延喜15年11月、796年鑄造）である。径2.5cmで、厚さ2mm、重さ2.6gである。

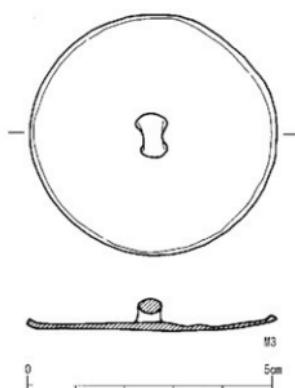
素文鏡（M3・M17）

M3は、B地区内で検出された柱穴内（P 186）より出土した素文鏡である。面径4.9×5.2cm、紐孔2mm前後で、重さは22.1gを計る。

M17は、B・C地区包含層より出土した鏡である。縁部と縁部の一部が破損し、遺存状況は悪い。



第133図 A地区 出土金属器



第134図 B地区 出土金属器（1）

面径3.8×3.9cm、重さ10.5gである。

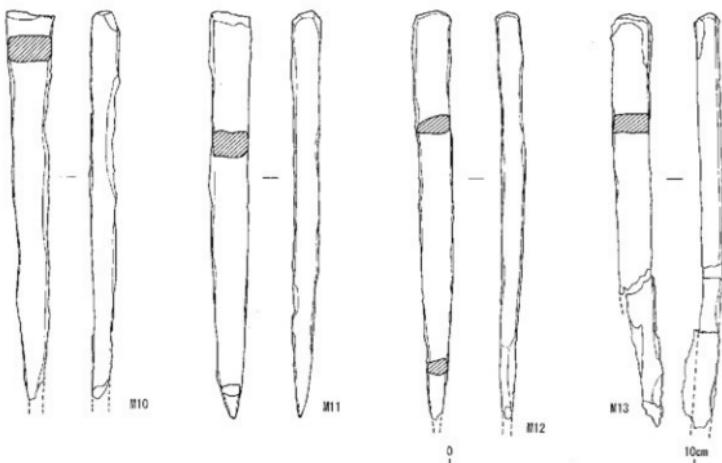
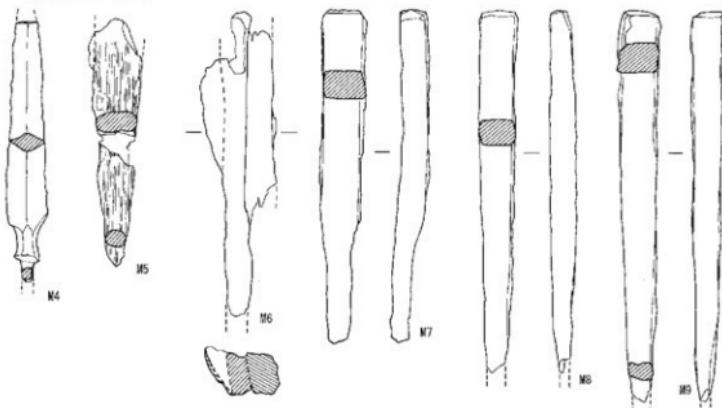
耳環 (M18)

B・C地区包含層より出土した。銅芯で指円形を呈するが、造存度は悪い。内側面に金箔が若干残る。内側面径1.4×1.7cm、外側面径2.2×2.5cm、径0.4cm、端面間0.3cmを計る。

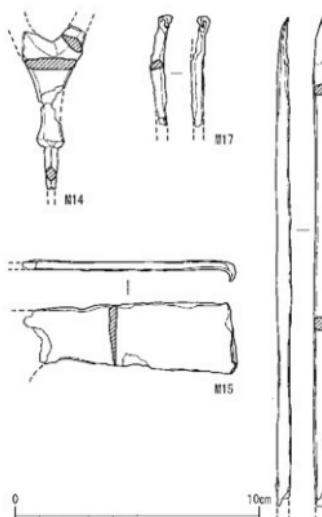
重量は5.1gである。

鉄製品

鉄錐 (M4・M14)



第135図 B地区 出上金属器 (2)



第136図 B・C地区 出土金属器（1）

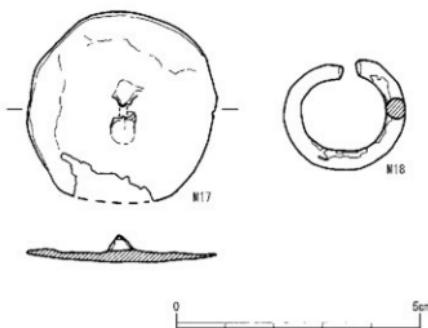
不明鉄器（M5）

柄部のみの破片である。一端を欠くため鉄器の種類は明らかではない。表面には木質が残る。柄部長10.3cm、最大幅1.8cmを計る。

馬銃の當（M6～13）

S B1のP110内より束ねた状態で10本（M6は3本）出土した。形状は上端部から下位付近まで長方形につくりだし、下端は厚みと幅を減じ、先端を尖らしている。M11を除き、先端部分は欠損している。完全な形で遺存しているM11は、全長12.0cm、上端部幅1.1cm、上端部の厚さ0.7cm、重さ118.1gである。

その他は、下端部を欠くため全長は不明であるが、平均上端部幅0.7cm、上端部の厚み0.4～0.6の法量を示す。このなかでもM10は上端幅1.0cmと大振りのつくりである。



第137図 B・C地区 出土金属器（2）

M4はB地区包含層出土の長形鐵である。先端の刃先を欠くが、鐵身の平面形が菱形に近い形状と判断される。身の内側に刃をもつ。断面形は菱形を呈し、両面に鎌を有する。範被部は短く、断面形は六角形を呈する。茎部は欠損し、遺存状況は悪い。断面形は四角形である。鐵身長8.5cm以上、最大身幅1.7cm、範被長1.5cm、幅1.1cm、茎長0.7cm以上、幅0.4cmである。重さは18.2gを計る。

M14は雁足式の鐵である。身と茎部の先端部を欠き、遺存状況は悪い。鐵身は二又に分かれ、先端を欠くものの、両側に刃を有する鐵身と思われる。断面形は菱形を呈し、両側に鎌をもつ。範被部は扁平な造りである。茎部は多くを欠損し、全容は明らかではない。断面形は四角形である。

身幅1.1cm、範被長3.5cm、最大幅2.2cm、厚さ0.4cm、茎幅0.6cmを計る。重さは7.7gである。

鎌 (M15)

身の先端部分を欠損している。左端を折り曲げ、下端部には刃を有する。左端幅3cm、厚さ0.3cm前後で、重さ17.9gである。

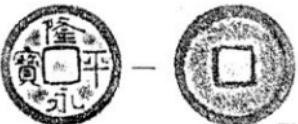
ヤリガンナ (M16)

茎部の一端を欠くのみで遺存状況は良好である。表に反った穂先をもつ両刃のヤリガンナである穂先の断面形は半月状を呈する。葉部は、断面が長方形を呈している。

穂先長2.0cm、厚さ0.1~0.3cm。茎部長18.1cm、幅1.0cm前後、厚さ0.5cm前後である。重さは27.4gである。

剣 (M17)

頭巻きの剣である。先端部を欠き依存度は悪い。残存する長さは4.4cmで、断面形は 0.3×0.4 の角形を呈する。



第138図 C地区 出土金属器
(S = 1/1)

第5節 石器・石製品

1. 概要

西木之部遺跡で出土した石器や石製品には旧石器時代、縄文時代、弥生時代～古墳時代、平安時代～鎌倉時代と各時代のものがある。その多くは弥生時代末～古墳時代前期および平安時代～鎌倉時代の遺物包含層から出土したものであり、遺構に伴うものは少ない。したがって、確実に時代の判断ができるのは特徴的なものに限られ、各時代に共通する器種では判断に迷うものが多い。しかし、表9に示すように、磨製石庖丁関連資料や大型蛤刃石斧など弥生時代特有の石器がかなり多数出土している（註1）。そこで、チャート製石器を除いて時期があいまいなものは原則として弥生時代の石器として、チャート製石器については原則として旧石器として扱うこととした（註2）。

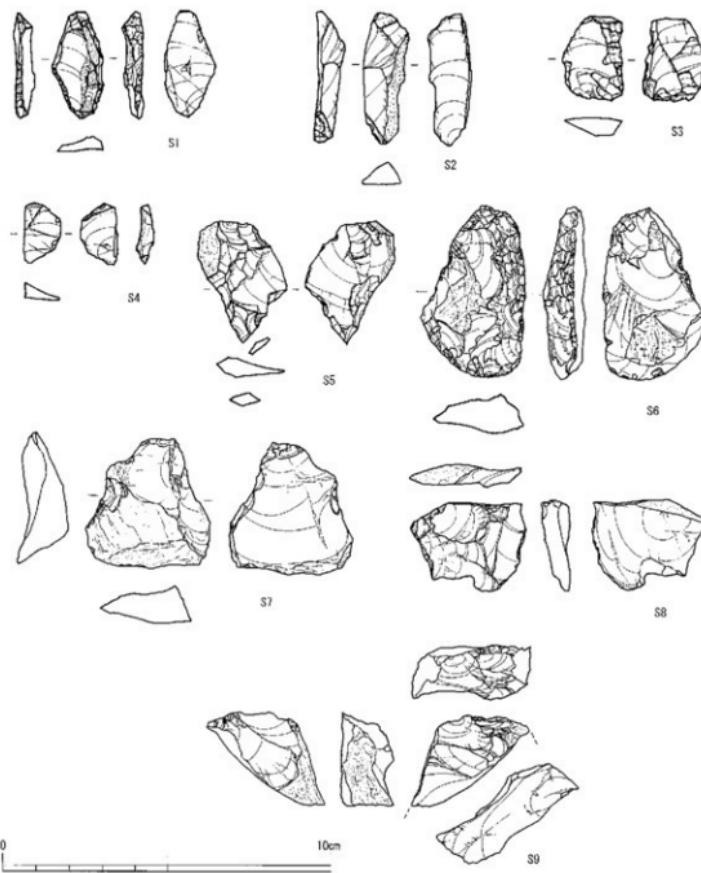
表9では、地区別の出土数を示した。第2章～第4章に示されたように、各地区とも主な遺構の時期には大差ないが、石器の出土数はB地区が圧倒的に多く、總数では約2／3を占め、あらゆる時代の石器が各種存在する。C地区ではチャート製石器が約半分、それに大型蛤刃石斧と砥石が少し目につく。これ以外は種類、点数ともかなり減り、石錐や磨製石庖丁ですら1～2点である。チャート製石器が多いのは旧石器の確認調査が行われていることによる。A地区では点数が43点と大きく減少する中にあって、その中で砥石は多く半数近くを占める。この砥石の大半は古代以降のものであろう。

旧石器時代の石器には、ナイフ形石器、台形様石器、錐状石器、削器、二次加工ある剥片、使用痕ある剥片、石核、剥片がある。石材はチャート以外にメノウもわずかに混じる。石錐や尖頭器などを除くチャートやメノウ製の石器総数は128点となる。しかし、旧石器を対象としたいわゆる地山層の調査は、期間の制約上、確認調査に限定されており、大半の石器は弥生時代～中世の遺構調査時に出土したものである。

縄文時代の石器には有舌尖頭器、両面加工尖頭器、石錐、石匙、石錐、石錐がある。石器の形態からすると早創期と後晩期に分かれようであるが、数は少ない。縄文時代の遺構や土器は発見されておらず、石器は周辺から流入したものと想定されるが、早創期については、旧石器時代と同じくいわゆる地山層中に文化層が存在していた可能性もある。

弥生時代～古墳時代の石器・石製品には狩猟具、武器、漁労具（石錐、打製尖頭器、磨製尖頭器、磨製石錐、浮子）、収穫具（磨製石庖丁）、工具（大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石錐）、加工具・溝理具（削器、楔形石器、砥石、敲石、磨石）、紡織具・装飾品（紡錘車、勾玉、管玉）などがある。また、サヌカイト製剥片は143点出土している（註3）。器種は豊富で、点数も多い。磨製石庖丁では未成品や製作時に生じた剥片などを含めるとその数は101点にも及ぶ。石器の器種構成や量は、弥生時代中期より新しい要素は少ないが、中期の遺構は窓穴住居跡がB地区で5棟発見されているにすぎない。遺構や遺物包含層の土器は弥生時代後期末～古墳時代初頭に位置づけられるものがほとんどであり、石器もこれらに伴って出土している。しかし、土器から判断される時期とは顕著が生じるもの、石器の大半は弥生時代中期のものと考えておきたい（註4）。

平安時代以降の石器・石製品には砥石と石錐がある。砥石は多数出土しているが、一部を除いて形態から弥生、古墳時代のものと区別することは難しい。ここでは、確実に古墳時代以前の遺構や遺物包含層から出土したもの以外はすべて平安時代以降としておく。また、滑石製の石錐は小片が1点のみ出土している。



第139図 石 器 (1)

なお、実測図を提示した石器は全603点中149点で、その器種、出土地区、出土遺構と層、石材(註5)は表10に示す。

2. 旧石器時代

ナイフ形石器（S 1・S 2）

S 1は二側縁加工のナイフ形石器である。縱長剥片の打面側を基部とし、二側縁に急角度の二次加工を施して打面を除去する。切り出し状に残された刃部には微細な剥離痕が観察できる。A地区のトレンチ №3でA T直下の泥炭層から出土した。S 2は縱長剥片の打面側を基部とし、一側縁の基部にごく部分的な急角度の二次加工を施す。右側縁は自然面と交差するため刃部としては適さず、左側縁には石核の側面が幅狭く残るため、刃角は90°に近い。しかし、基部付近を中心に微細な剥離痕が認められるため、左側縁を刃部としたのであろう。

台形様石器（S 3・S 4）

S 3は先端の折れた寸詰まり縱長剥片を素材とする。一側縁に平坦なインバースリッタッチを連続して施す。左側縁は鋭い刃部を残し、両面に微細な剥離痕が認められる。S 4は二つに割れたごく小さな剥片の一端にのみ急角度の二次加工を施したもので、七日市遺跡で小型部分加工石器と呼んだものに近い（注5）。二次加工部位は極めて限定されており、台形様石器として積極的に評価できるものではない。

錐状石器（S 5）

寸詰まり縱長剥片の先端部を表裏両面からの二次加工で鋭く尖らせている。

削器（S 6）

やや厚みのある縱長剥片を素材として、背面のはば全周に調整剥離を施したもので、右側縁は直線的な厚みのある刃部を形成している。先端部は、剥片の腹面が背面側に回り込み気味のため断面形は楔形となる。

二次加工ある剥片（S 7）

幅広剥片の一部に小さな調整剥離を行う。素材剥片は自然面の底面を有するもので、打面も自然面である。石核は直方体状でその小口面から剥離されたものであることがわかる。S 9の石核を含め、こうした剥片剥離技術は七日市遺跡の第2文化層や板井・寺ヶ谷遺跡の下層文化層の石器群と共に通る（兵庫県教育委員会1991年）。

使用痕ある剥片（S 8）

幅広剥片の背面側同側縁に微細な剥離痕跡が連続する。

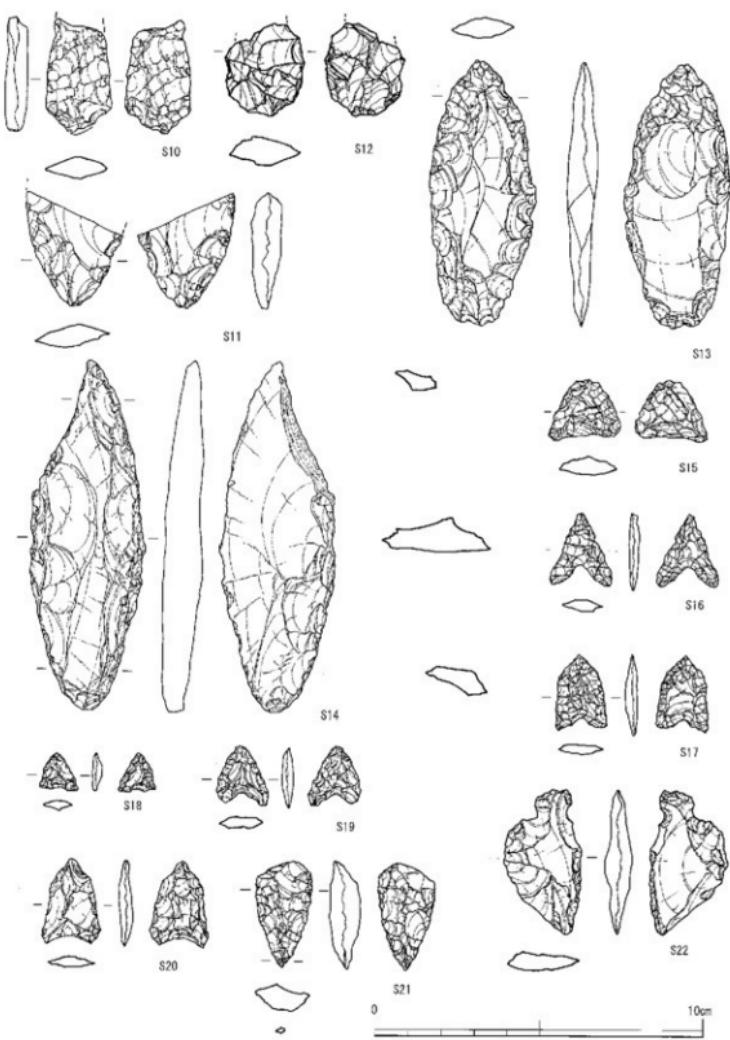
石核（S 9）

打面転移を頻繁に繰り返した直方体状の石核である。斜めに大きく折れている。最終作業面は小口側にあり、小型の幅広剥片が剥取されている。それ以前の作業面はこれよりも大きいが、得られた剥片は幅広のものが主体を占めたであろう。チャート製の石核と考えられる資料は、これ以外に5点出土しているが、あまり典型的なものではない。

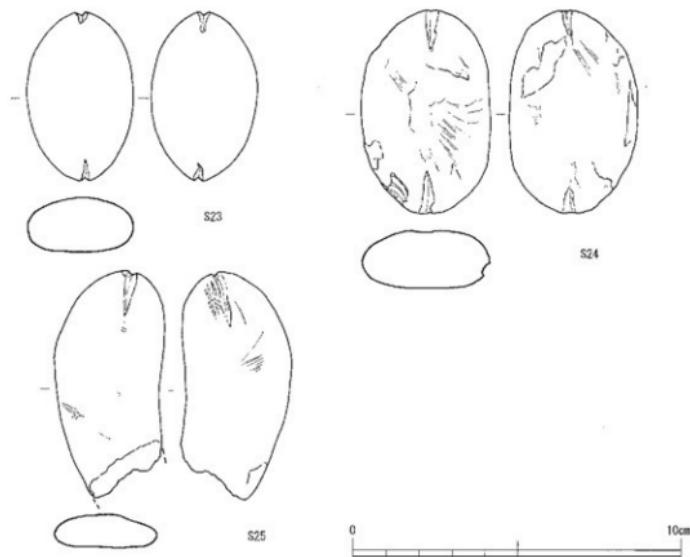
3. 繩文時代

有舌尖頭器（S 10）

上部を欠損し、基部もわずかに欠損している。基部の形態はごく緩く内湾するもので、長さがやや短いことを除けば、七日市遺跡出土の有舌尖頭器に類似する（兵庫県教育委員会1985年）。体部両面には丁寧な平行剥離が認められ、左図の左側縁では上から下へ、右側縁では下から上へ、右図の右側縁では下から上へというように、剥離の順序に規則性が認められる。これは、右利きの人が押圧剥離を行った場合、常に同じ傾きで右から左へ剥離を進行させて製作したことを示す。押圧剥離技術の正確さが頃間



第140図 石器(2)



第141図 石器（3）

見るれる資料である。流紋岩製で表面は白色に風化している。

両面加工尖頭器（S11～S14）

チャート製が2点（S11・S12）、サスカイト製が2点（S13・S14）ある。S14は弥生時代の打製尖頭器であっても良いが、C地区で出土していることと、S14の風化が進んでいることから縄文時代に含めた。S11は木葉形尖頭器の基部あるいは先端部である。節理面で斜め半分に割れている。比較的大きな剥離面で構成され、整った形態に仕上げられていたと思われる。S12は尖頭器の基部と考えられる。折れ面には節理面が介在しており、完成間近で破損したものと思われる。破損後も折れ面付近に剥離を行っているが、うまくいかず放棄したのであろう。S13・S14は両面に素材調片の剥離面を比較的大きく残す。S13は先端部の作りは比較的丁寧で、断面形が凸レンズ状に仕上げられている。しかし、体部下半から基部にかけては剥離が中央まで達せず、特に、腹面側（右図）では周辺部のわずかな範囲にとどまる。S14は尖頭部の左側縁に自然面を残し、右側縁は片面調整である。調整剥離は階段状となっているものが多く、右側縁は急角度である。S13に比べ風化が著しいが、縞状の模様がみられることから金山産のサスカイトであろう。

石鏨（S15～S20）

チャート製（S15～S17）とサスカイト製（S18～S20）がある。基部形態は凹基式と平基式がある。S16とS19は基部の抉りが深く、S17とS20は平面形が五角形である。S18も特に小型であることから

縄文時代に含めておく。S15は厚みがあるため重量が2gを越えるが、他の4点は1.5gに満たない。

石錐（S21）

摘み部から連続して錐部に至るもので、平面形は石錐に近いが、厚みがあって基部の整形があいまいであることから石錐とした。チャート製。

石匙（S22）

横長剥片を縱に使う。一端に両側から抉りを入れて摘み部をつくり、剥片末端側に連続した二次加工を施して刃部としたものである。打面側への二次加工はわずかで、打面が一部残っている。縄のあるサスカイトが用いられており、金山産と思われる。

石鍤（S23～S25）

扁平な指円形様の両端に小さくV字の溝を擦り切った切り目石鍤である。表面の研磨は不明瞭で、自然輝をそのまま用いているようである。重量は順に36.9g、58.7g、36.9g（推定約45g）石材は砂岩、頁岩、凝灰岩と多様である。

4. 弥生～古墳時代

狩猟具・武器・漁効具

石錐（S26～S40）

未成品を含め19点出土している。すべてサスカイト製である。基部形状には凹基式、半基式、円基式、有茎式の4者が見られる。その割合は凹基式8点、半基式3点、円基式3点、有茎式1点、不明2点となり、凹基式が主体を占める。長さと重さの平均値は2.6cmと1.6gであり、長さが3cmを越えるか、重量が2gを越えるものは破損品での推定も含めて6点（S30・S31・S34・S36・S39・S40）である。調整剥離では、表裏面に素材剥片の剥離面を大きく残すものが比較的目につく。

個々の遺物では、S31は側縁を鋸歯状に仕上げている。S28は部分的に研磨を施している。なお、S37は基部の成形をあまり行っておらず、調整剥離も急角度であることから石錐とも考えられる。

打製尖頭器（S41）

石錐の未成品と考えられなくはないが、厚みがありすぎることから尖頭器としておく。多孔質のサスカイト製。

磨製尖頭器（S43・S44）

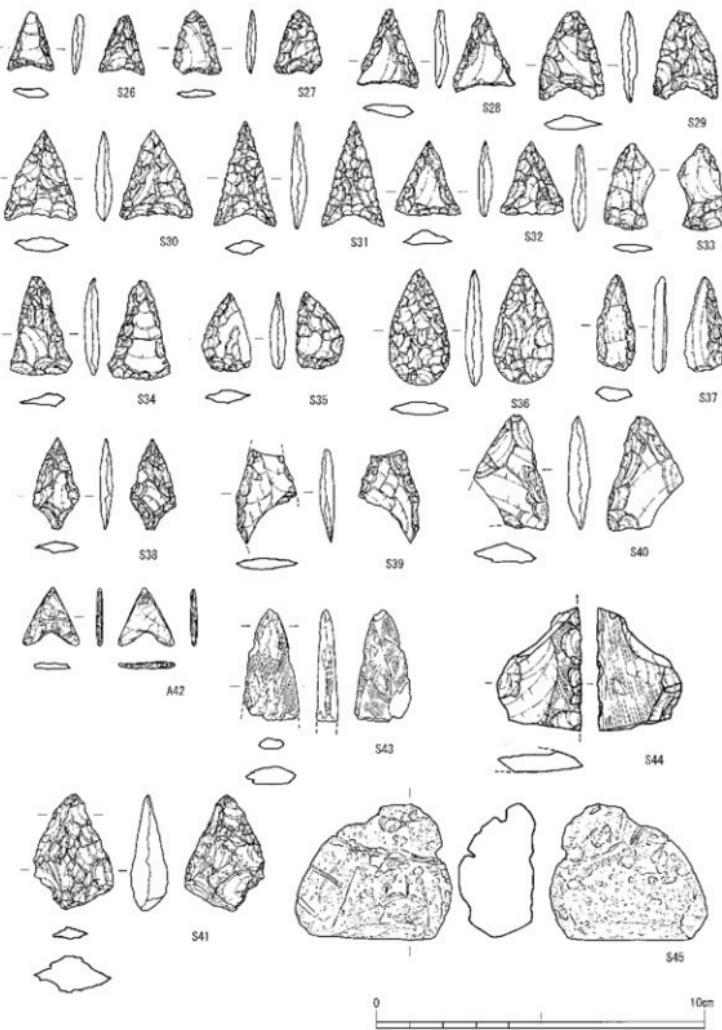
S43は先端部の破片である。剥離面の研ぎ残しが多く、鏡も研ぎ出されない。灰色の粘板岩製。S44はサスカイト製の体部破片で、S43に比べて丁寧に研磨されている。断面形は表裏対象の菱形ではなく、山形に近い。側縁には研磨後的小剥離が連続する。

磨製石錐（S42）

抉りの深い円基式の磨製石錐である。側縁はすべて研磨されて平坦な面を成しているため、錐としての機能は失われている。武器ではなく儀器とすべきものである。左面は不定方向に磨いているが、右面はほとんど研磨を行っておらず、削ったそのままの面を残している。黒色粘板岩製。

浮子（S45）

軽石の小塊に數状の溝を切ったものである。上端近くには1周巡る溝があり、左面では幅1mmの狭く鋭いV字溝であるが、右面ではやや幅の広いU字形の溝となる。輻の狭いV字の溝はこれ以外に縱方向に2条、輻方向に4条あり、金属製の刃物を使用したと考えられる。底面は研磨あるいは削りによって、幅1cmほどの面取りを行っている。



第142図 石 器 (4)

収穫具

磨製石庖丁と未成品、素材 (S 46~S 69)

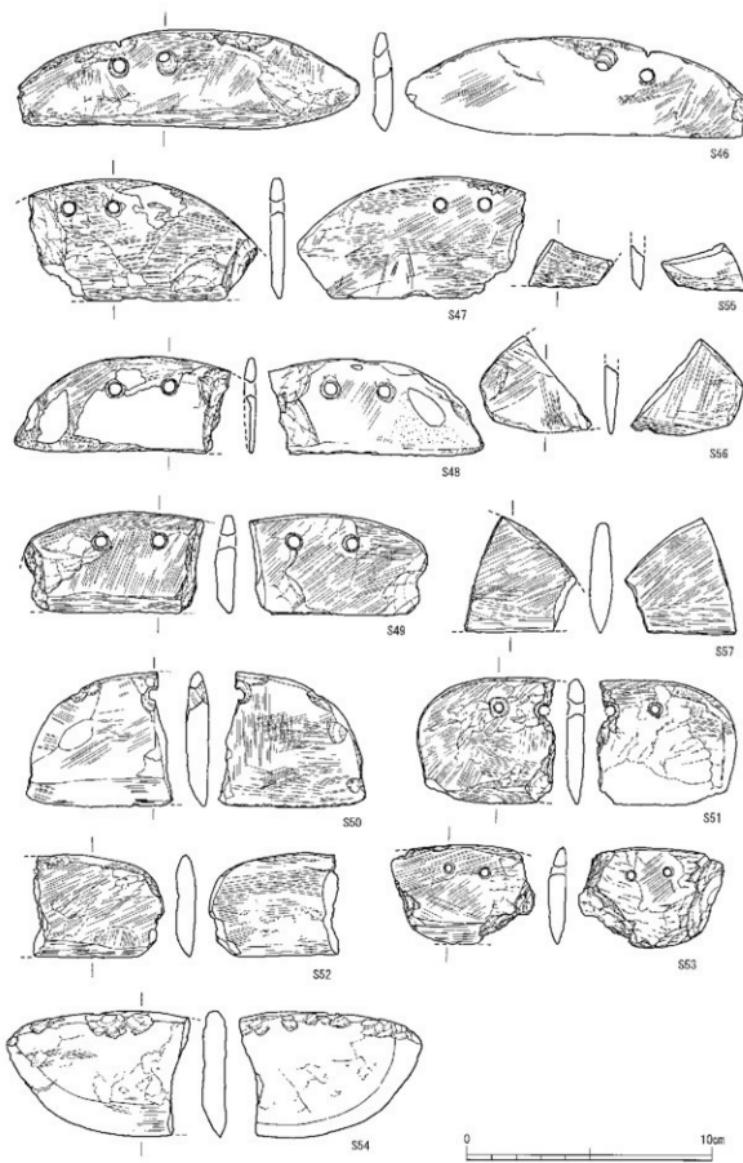
完成品21点、未完成品15点、素材剥片4点が出土しており、他に成形剥離工程で生じた剥片が61点ある。一般的な大きさのものと大型石庖丁の範疇に入るであろう大型品 (S 58~S 62) がある。使用石材は黒色、灰色、オリーブ灰色の粘板岩製のものが大部分を占めるが、S 50はいわゆる塩田石、S 54は流紋岩、S 55とS 57は細粒の砂岩と思われる石材を使用している。完成品はS 46の1点のみで、他はすべて破損している。形態は直線刃半月形と直線刃長方形があり、刃部は片刃であるが、S 54だけは外刃刃半月形で刃内となる。また、耕孔はすべて両側穿孔である。

法量はS 46では長さ14.0cm、幅3.9cm、厚さ0.9cm、重量66.1gとなる。これ以外は、幅のわかるものは4~5cm強に、厚さは0.5~1.0cmに収まる。残存状態から判断して長さと重量はS 46とほぼ同じか幾分小さなものであろう。片手によって長時間作業することを考えると、60g程度の重量は作業効率の面から適したものであると考えられる。ただし、S 54は残存部の重量が61.2gあり、100gほどの重量が想定されることから、やや重いといえる。

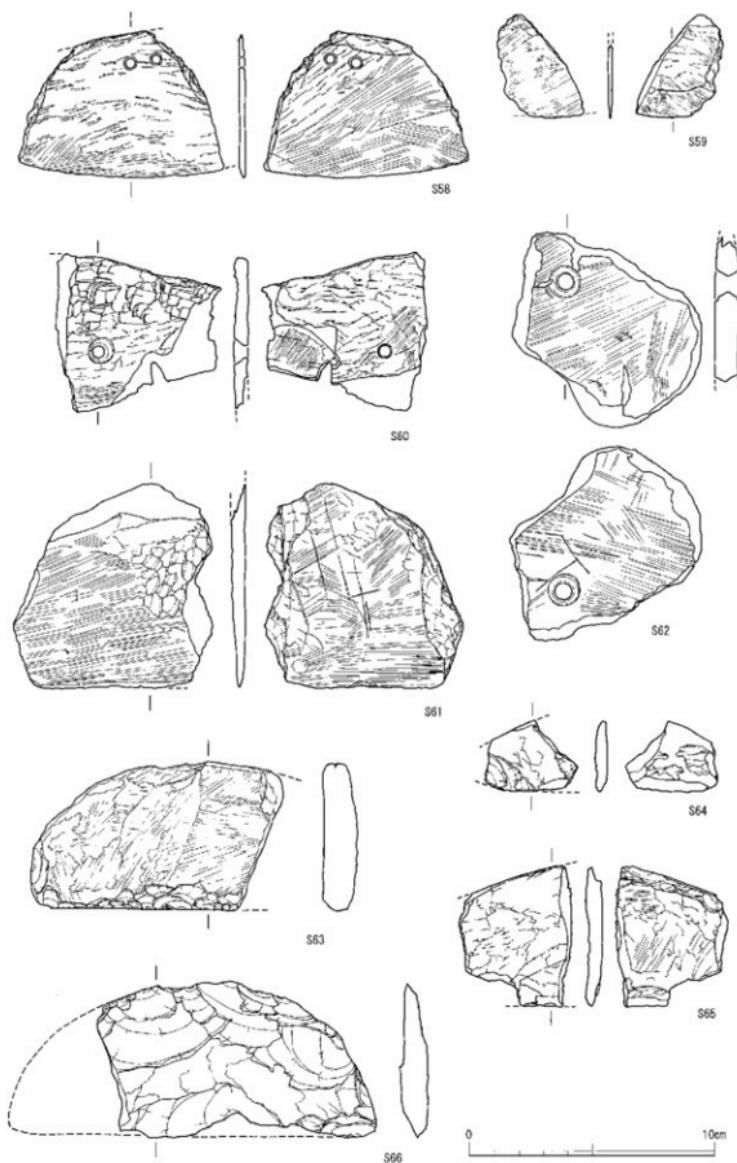
次に、使用痕についてS 46を中心に観察しておく。腹内の磨製石庖丁は、刃面を形成しない面(圓面右)を表にして保持することが通例である。佐原の石斧の呼称(佐原1977年)にならって、これを前面、刃面を形成する側を後正面と呼ぶこととする。まず、耕孔には縦擦れが認められるが、その向きは後正面では左の孔に、前面では背縁部に向かっている。同じ縦擦れが生じるように縫を通して右手に持った時に、掌に納まる側が短く、外に出る方が長くなるように、耕孔の位置には片寄りがある。研磨痕は、後正面ではほぼ全面に残るが、前面では耕孔よりも左、即ち、掌から外に出る側はほとんど消失してしまっている。かなり使い込まれていることの証左であろう。しかし刃縁はごくわずかしか内湾せず、刃部は比較的锐利さを保っている。刃面の研磨痕が後正面よりも明瞭に残ることを考え合わせると、刃部の研ぎ直しが行われ、その後はあまり使用されていないと考えられる。同様な使用痕は、程度の差はあるS 48、S 49、S 53でも認めることができる。特に、S 48では前面側の縦擦れ痕が極めて顕著である。これに対して、S 47では縦擦れがまったくと言って良いほど観察できない。正面の研磨痕も消失せずに良く残る。また、刃部の磨耗度が弱い点は本遺跡の大半の磨製石庖丁に共通するが、それは研ぎ直しによるものであろう。

次に、素材剥片と未完成品について述べておく。S 69は素材剥片で、成形剥離が行われていないものである。集落外で原石の荒割りを行って得られた剥片のうち、このように石庖丁の形に似たものを選んで撮影したのである。未完成品には成形剥離工程だけのもの (S 67) と、研磨工程がわずかに認められるもの (S 66・S 67) 、研磨工程がかなり進行したもの (S 63~65) がある。穿孔途中のものは出土していない。S 67は素材剥片の全周に成形剥離を行って、概ね杏仁形に成形している。厚さはまだ約1.5cmと完成品の倍ほどある。S 68は未完成品の中でも最も大きなものである。長さ17.8cm、幅9.5cm、厚さ1cm、重量237.1gあり、完成品に比べ厚さ以外かなり大きい。製作工程としては、成形剥離をほぼ終えて研磨工程に入る直前の資料と考えられ、ごく一部に研磨痕が残る。S 66もほぼ同様で、刃部とするであろう部分をわずかに研磨している。S 63は片側の正面と一側縁を直線的に研磨している。側縁は強く研磨され、ほぼ直線的な平坦な面を成す。この面を打面として正面に小さな剥離を連続して行っている。

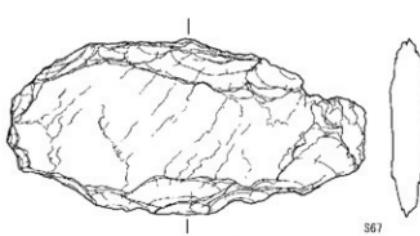
大型の磨製石庖丁では、S 60とS 61は同一個体と考えられ、長さ20cm、幅10cm程度の大きさとなろう。大きさに比べ厚さ5mmと薄手である。刃部は両側から薄く研ぎだされている。S 58は普通サイズの磨製



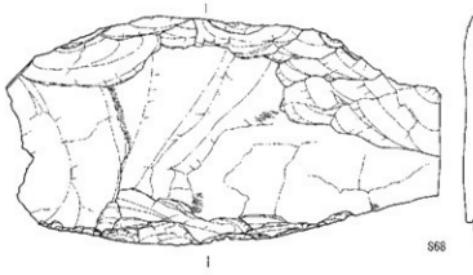
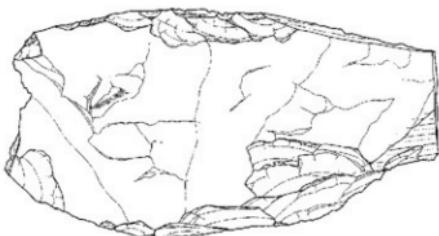
第143図 石 器 (5)



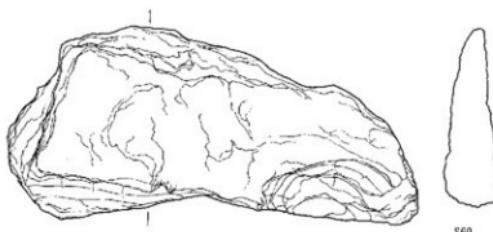
第144図 石器 (6)



S67



S69



S70



第145圖 石 器 (7)

石庖丁と同じく2孔を有するものの、間隔は狭い。厚さが3mmと極めて薄手であること、幅が6cmで片手で保持するにはやや広いことから一般的な石庖丁とは区別しておきたい。刃部は比較的銳利であるが、刃縁部全体がごくわずかに丸みを持っていながら、器体の研磨痕跡が消失していないことも、一般的な磨製石庖丁とは異なる使用法が想定される。S59も厚さが2mmと薄く、体部両面には研磨痕が明瞭に残る。刃縁には微細剥離痕が所々あり、その縫を含めて刃縁のみが消耗している。S58と類似した使用方法が想定される。石材も漆黒色の質の良い結板岩で共通している。

工具

大型蛤刃石斧（S70～S83）

完形品が4点、破損品が16点あり、破損品では基部側と刃部側がほぼ同数である。他に破片と考えられるものが3点ある。完形品の内2点は地元の岡部五郎氏による表探資料である（S72・S73）。平面形態に基づいて分類すると、最大幅が体部中央よりやや刃部側にあって、基部まで幅の変化が少ないもの（1類）と最大幅が刃部付近にあって基部に向かって幅が減るもの（2類）に分かれる。1類にはS70とS72が該当し、S74～S82もこれに含まれよう。2類にはS71とS73が該当し、基部破片ではS83があり、彌縫に小さな平坦面を持つ。

次に大きさをみると、最も小さいのが2類のS71で、長さ11.2cm、幅5.4cm、厚さ3.5cm、重量296gである。同じく2類のS73もほぼこれと同じ大きさである。これより一回り大きいのがS70やS72で、重量は600～700gとなり、ほぼ2倍の重さとなる。さらにS80やS82では、破損していなければ1kgを越えるものである。重量では3段階ぐらいた大別されるであろう。

研磨の状況は、基部付近を中心に敲打痕を磨き残したものが多いようであるが、残し方は緩慢で、七日市遺跡のように基部側面を明確に磨き残すのはS70やS71に見られる程度である。

S70は完形品の中で最も残りの良いものである。最大幅は体部中央付近にあり、体部の断面形はほぼ横円形である。基部は研ぎ残されて敲打痕を明瞭に残し、体部とは違って断面形を長方形にしている。この部分の敲打痕が横方向の筋状となっているのは、七日市遺跡の例と共通する。S82は全面に敲打痕が残り、研磨が一切行われていない。本遺跡の大型蛤刃石斧の中では最大であり、未完成であろう。

次に、刃部の状況をみると、完形品のS70では刃部が銳利さを保っている。刃部破片6点のうちS75を除いて敲打具として再利用しているよう状況は認められない。これに対して、完形品であってもS71とS72では刃部が潰れて平坦な面を成しており、敲打具としての転用が想定される。S73は新しい剥離があつて状況は不明である。また、基部破片のS80やS83も破損後の転用が考えられる。つまり、21点の石斧のうち使用可能なのはわずかに1点ということになる。

大型蛤刃石斧の石材には、輝緑岩を中心に安山岩、砂岩などが使用されている。

扁平片刃石斧（S84～S86）

すべて完形品で3点出土している。池上遺跡での大きさの分類（財團法人大阪文化財センター1979年）に従えば、S86は幅が広い大型品で、長さ7.1cm、幅5.8cm、厚さ1.3cm、重量100.8gである。体部や基部には研ぎ残された剥離面が所々にあるが、全体としては丁寧に研磨されている。刃部の小剥離は研ぎ残された剥離面と刀溝の両者があるようである。S81とS85は中型で、刃部をはじめ、全体が銳利さを保つ。特にS85の刃部は極めて鋭い。S84は長さ3.9cm、幅2.6cm、厚さ0.7cm、重量14.2g、S85は長さ4.3cm、幅3.1cm、厚さ1.6cm、重量43.8gであり、S84に比べ厚手である。石材はS84とS86は表面が風化して灰白色を呈する凝灰岩製で、S86の石材は水上郡春日町七日市遺跡で扁平片刃石斧に多用

されているものと同じである。その基部に見られる大きな剥離面は風化があまり進行しておらず、黒色に近い色調を呈する。その断面をみると、表面の数mm程度だけが白色化していることがわかる。

磨製石斧 (S 87~S 90)

S 87とS 88は基礎の尖る磨製石斧の基部である。断面形はほぼ円形で乳棒状石斧に近いものであろう。S 90は太型蛤刃石斧に比べて厚みがない。刃部を研ぎだしていないことと、刃部に研ぎ残された剥離面が大きく残る。未成品と考えておきたい。S 89は磨製石斧の未成品ならば、柱状片刃石斧が候補となるが、確かなものではない。

石錐 (S 91・S 92)

サスカイト製の棒状錐で、特にS 91は幅6mmの細長く整った形に仕上げられている。ともに錐部の磨耗は認められない。

加工具

削器 (S 93~S 99)

形態や素材剥片は様々である。S 94とS 95は素材剥片は異なるものの、連続する平坦な剥離によって弧状の刃部を形成する点では共通する。S 96~S 98は比較的粗い階段状の剥離によって刃部と背部を形成する。S 98ほどの大きさであれば小型の打製石庵丁と言えなくもないが、刃部に磨耗が認められない点と背縁部が潰されていない点で、打製石庵丁とは異なるものと考えておきたい。すべてサスカイト製。橢形石器 (S 100~S 104)

いずれも比較的小型のものである。S 100~S 102は断面が凸レンズ形で、S 101とS 102では上下1対、S 100では上下と左右に各1対の打撃痕がある。S 100とS 102は階段状剥離が顕著であるが、S 100はそれほどではなく片面は一撃でほぼ全面が剥離されている。S 103とS 104は削片である。すべてサスカイト製。

砥石 (S 105~S 118)

西木之部遺跡では多数の砥石が出土しているが、全体の形状が判明するものは必ずしも多くない。ここでは、古代以降の砥石も含め、想定される本来の形状や素材に基づいて以下のように4つに分類しておく。

1類：直方体状に成形されたもの。使用によって中央部がすり減り、錐形を呈するものが多い。

2類：概ね直方体状に成形されているが、1類に比べ不整形なもの。

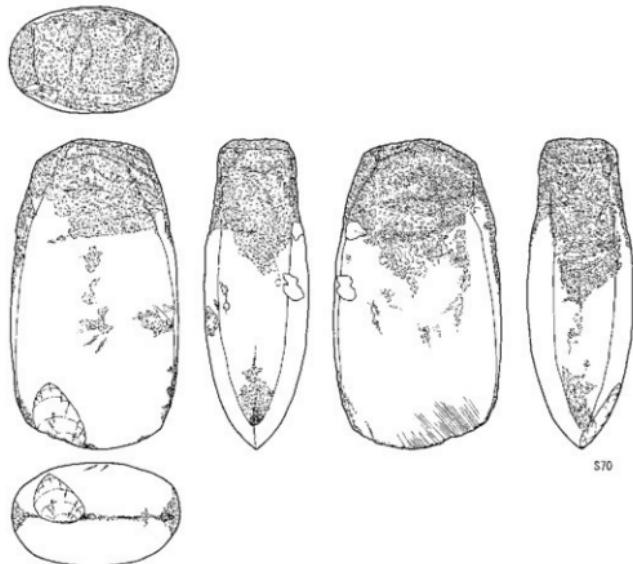
3類：自然砾あるいは分割砾をそのまま用いて、不整な立方体状を呈するもの。

4類：扁平な自然砾をそのまま用いたもの。

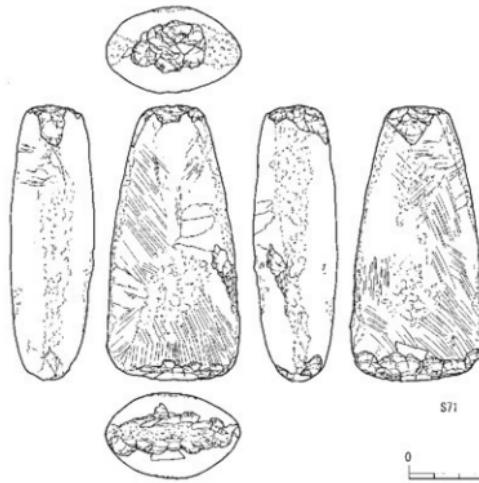
弥生時代~古墳時代の砥石として実測図を提示したものは、1類4点、2類5点、3類1点、4類4点である。しかし、3類は実測対象から漏れたものが多い。

1類 (S 105~S 108) のうち、S 105とS 107は完形である。底面は原則として両端面を除く四面であるが、S 105では端面も磨かれている。また、表裏の底面を横断面でみた場合、S 106は外湾、S 107は内湾、S 105は表が内湾で裏が外湾、S 108は不規則な凹凸がある。石材はS 105が砂岩でやや粗いが、他は灰色混灰岩 (S 107) と黒色粘板岩 (S 106・S 108) で繊維である。

2類 (S 109~S 113) は断面形が台形となったり、平面形が歪であったりする。すべて破損しており、大きさが判明するものはないが、1類よりはやや大きなものが見られるようである。横断面での底面の湾曲は外反するもの、平坦なもの、内湾するものと様々であり、一つの砥石でいくつかのものがみられ



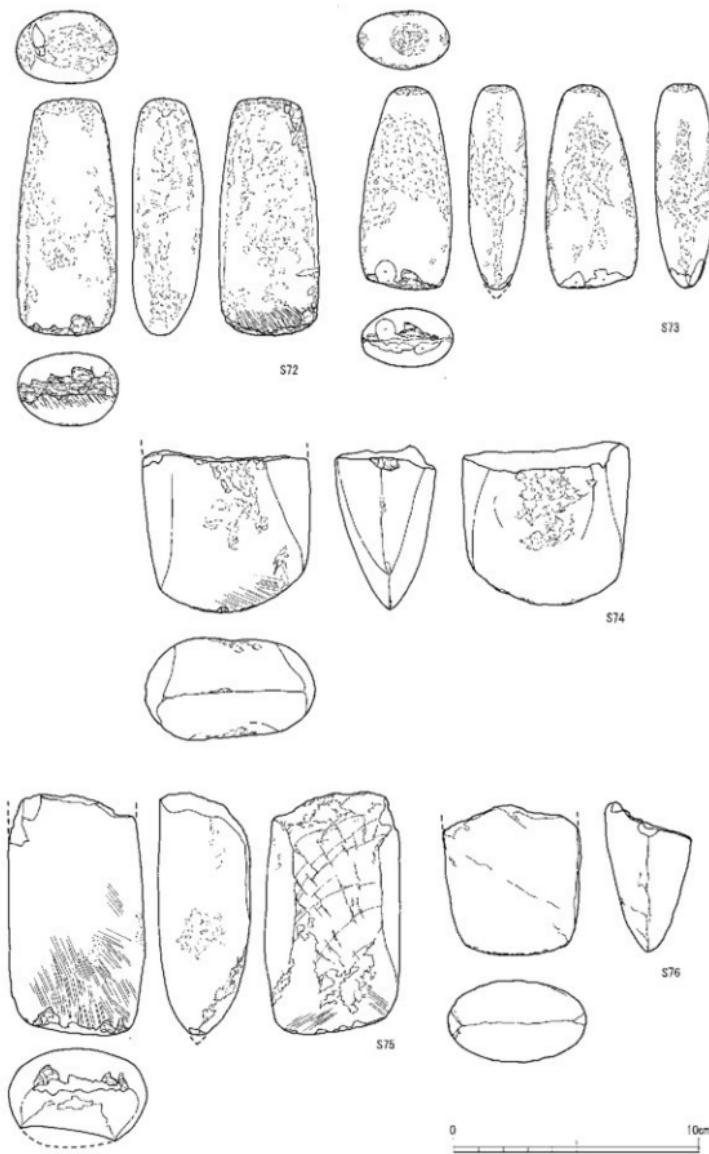
S70



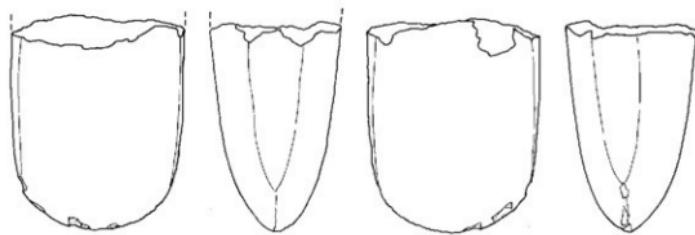
S71



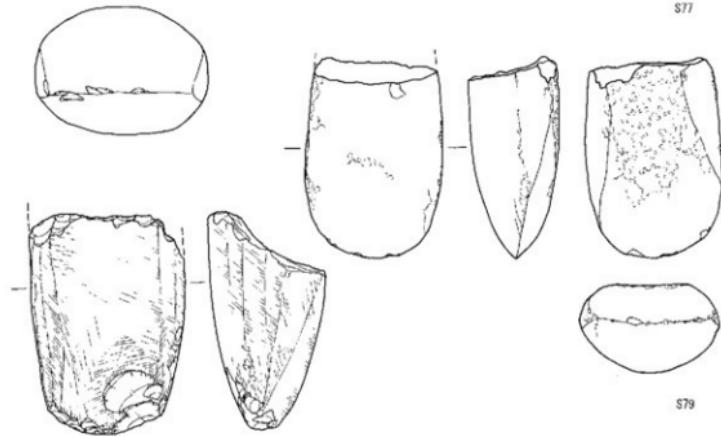
第146図 石器(8)



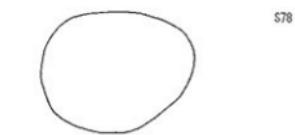
第147圖 石器 (9)



S77



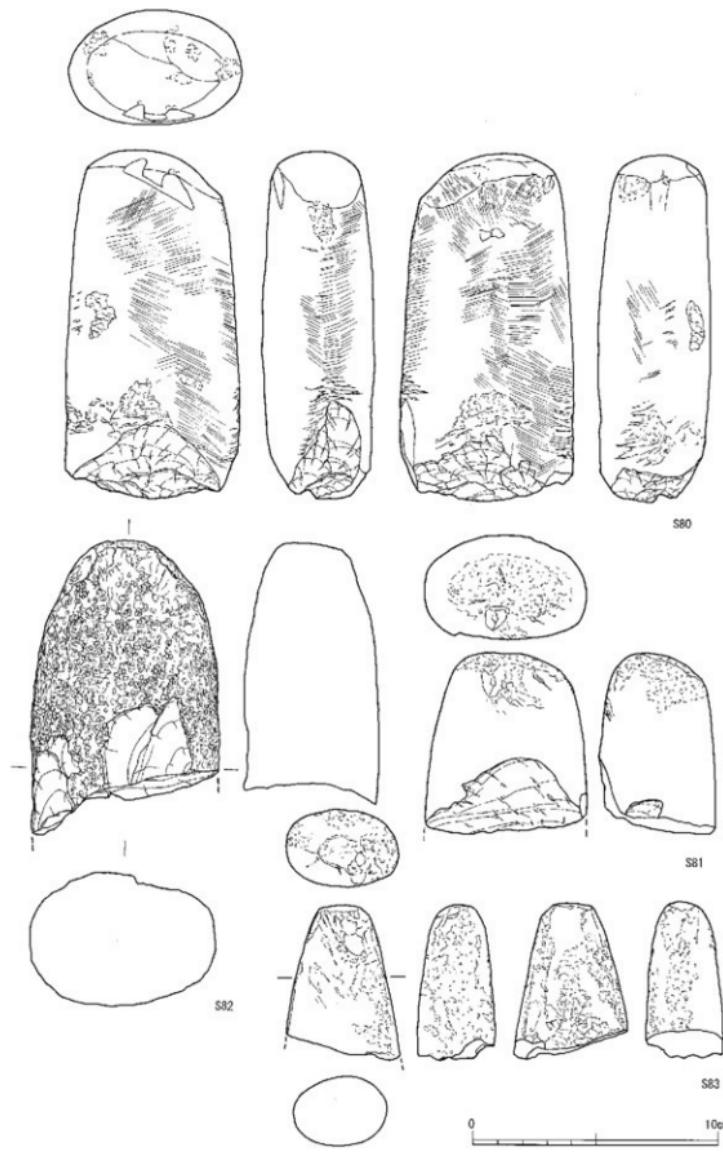
S79



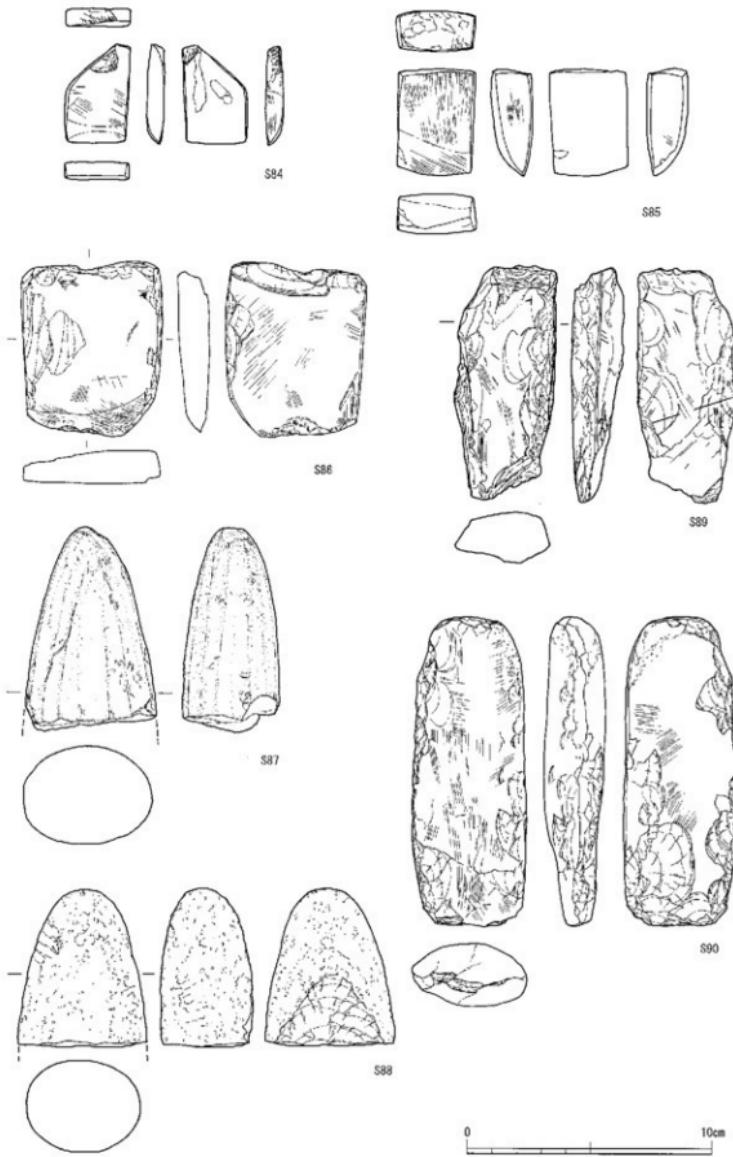
S78



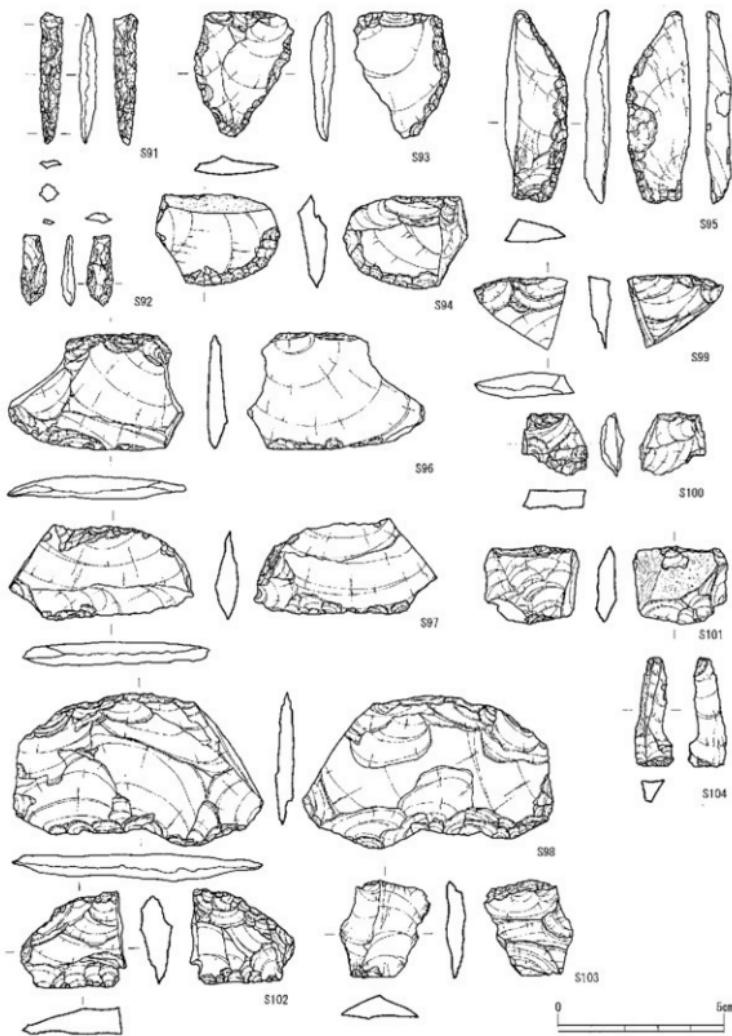
第148図 石器 (10)



第149図 石 器 (11)



第150図 石器 (12)



第151図 石器 (13)

ることが多い。細粒の凝灰岩と砂岩などやや目の粗い石材がある。S 113では表面に幅1cmほどのごく浅い溝状の筋が二条走る。

3類（S 118）は1類や2類よりもかなり大きくなる。弧面を横断面でみると表面は内湾し、側面は外湾している。石材は砂岩質で粗粒である。

4類（S 114～S 117）のうち、大きなものはS 116とS 117である。紙面を横断面でみると外湾、平坦、内湾など様々である。石材はS 114・S 115・S 117が細粒の黒色粘板岩であるが、S 116は砂岩でやや粗粒となる。

紡績具・装飾品

紡錘車（S 119・S 120）

古墳時代に一般的な截頭円錐形を呈するものが2点出土している。S 119は凝灰岩製で、径4.3cm、厚さ1.3cm、重量34.3g、S 120は緑色凝灰岩製で復元径4.4cm、厚さ1.5cm、重量は30～40gと推定できる。S 120では円錐斜面に製作時の刃物で削った痕跡が残る。

勾玉（S 121・S 122）

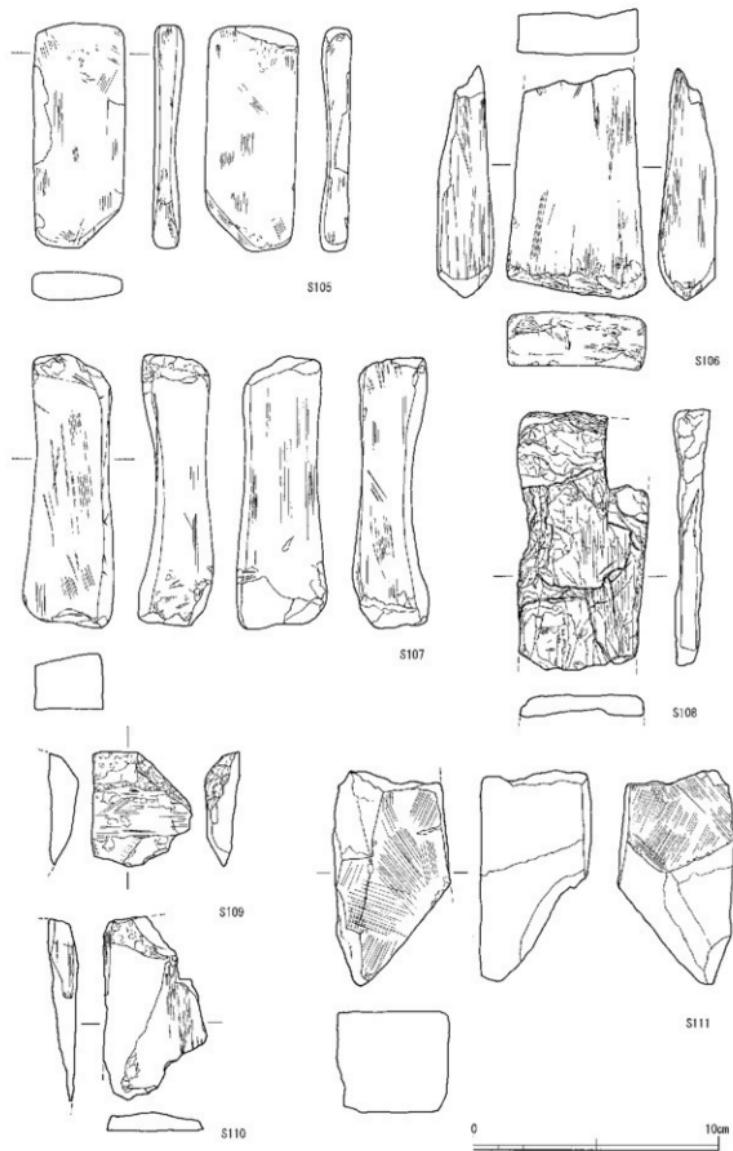
S 121は滑石製の小さな勾玉である。B地区のS K01から出土している。側面は面取りされ、研磨痕が残る。断面形は扁平で、穿孔は片側からである。S 122は質の良い碧玉製の勾玉である。これも片側穿孔である。

管玉（S 123）

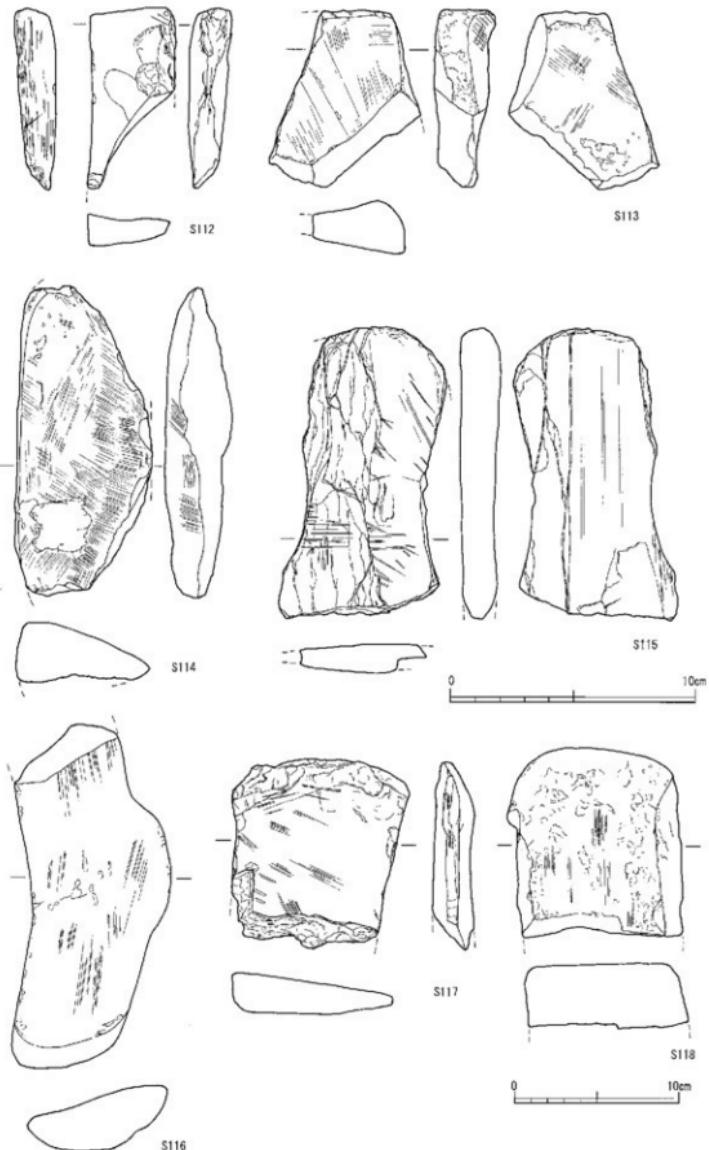
風化の進んだ緑色凝灰岩製の管玉である。径7mm、残存長3.7cmである。

碧玉分割蝶（S 124）

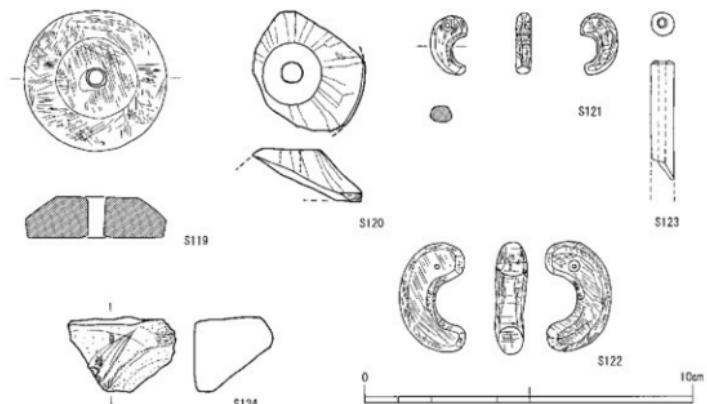
主に自然面と分割面で構成される三角錐状を呈する碧玉である。玉類の素材となるものであるが、遺跡内では玉の製作は行われておらず、素材以外の目的で搬入されたものと思われる。



第152图 石器 (14)



第153図 石器 (15)



第154図 石製品

5. 平安時代以降

砥 石 (S125～S149)

1類 (S125～S130) は現代まで通じる形態のものである。中央の細くなった所で割れているものが多いが、S128は完形である。1類には小型のものが多くあり、幅5cm以下のものが主体を占めるが、S127やS129は幅7～8cmとやや大型である。砥面は原則として両端面を除く四面であるが、S127やS128では端面も磨かれている。また、砥面は縦断面では内湾するが、横断面では、S130を除いて平坦かわずかに外反する。石材はすべて灰色凝灰岩など細粒のものである。

2類 (S131～S145) は断面形が台形となったり、平面形が垂であったりする。大きさは1類と大差ないが、幅5cmを越えるものが1類よりは多く見られる。横断面での砥面の湾曲は外反するもの、平坦なもの、内湾するもの、不規則なものがあり、一つの砥石でいくつかのものがみられることが多い。石材は小型品では凝灰岩や粘板岩などすべて細粒のものであるが、幅5cmを越えるものでは砂岩などやや目の粗いものが主体を占める。

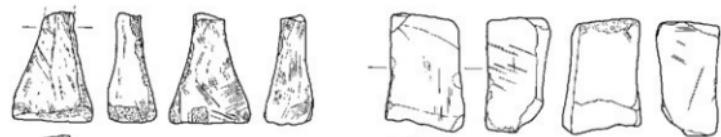
3類 (S146～S148) はS146が完形で、長さ15.0cm、幅9.2cm、厚さ8.8cmである。

他の2例も1類や2類よりもはるかに大きく、実測図を提示していない資料の中にはこれよりもさらに大きなものが多数存在する。砥面を横断面でみるとすべて内湾している。石材は3例とも粗粒のもので、1類や2類で見られた細粒の石材はない。

4類 (156) は小型で残存長8.0cm、幅5.5cm、厚さ1.2cmである。石材は砂岩でやや粗粒である。

以上のように、西本之部遺跡の石器、石製品には様々な時期のものがあり、当地域の旧石器時代～弥生時代の様相を断片的ながら知りうるものであった。本節の最後にあたって、旧石器時代と弥生時代の石器について、同じ丹波地域の七日市遺跡や板井・寺ヶ谷遺跡と簡単に比較しておきたい。

旧石器時代の石器のうち広域火山灰であるATとの層位的関係が明らかなものは、二側縁加工のナイフ



S125

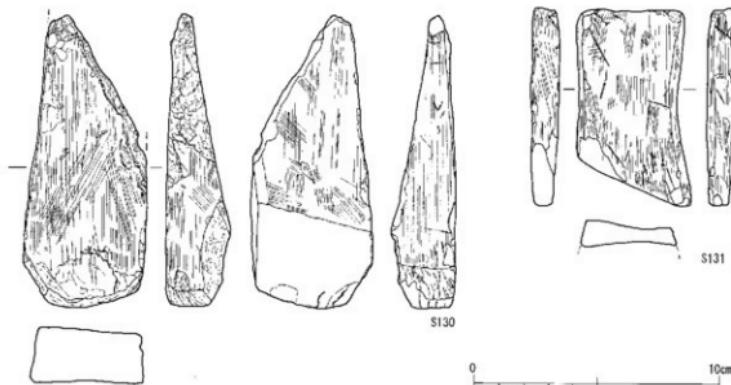
S128

S126

S127

S129

S130

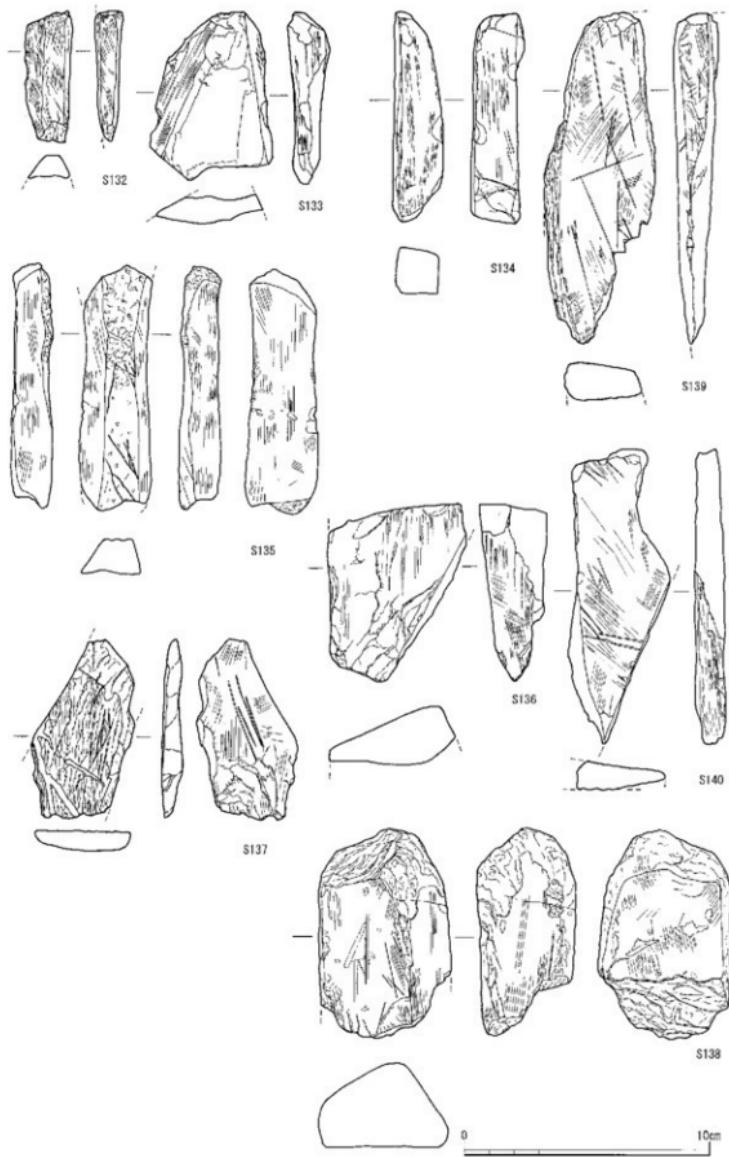


S130

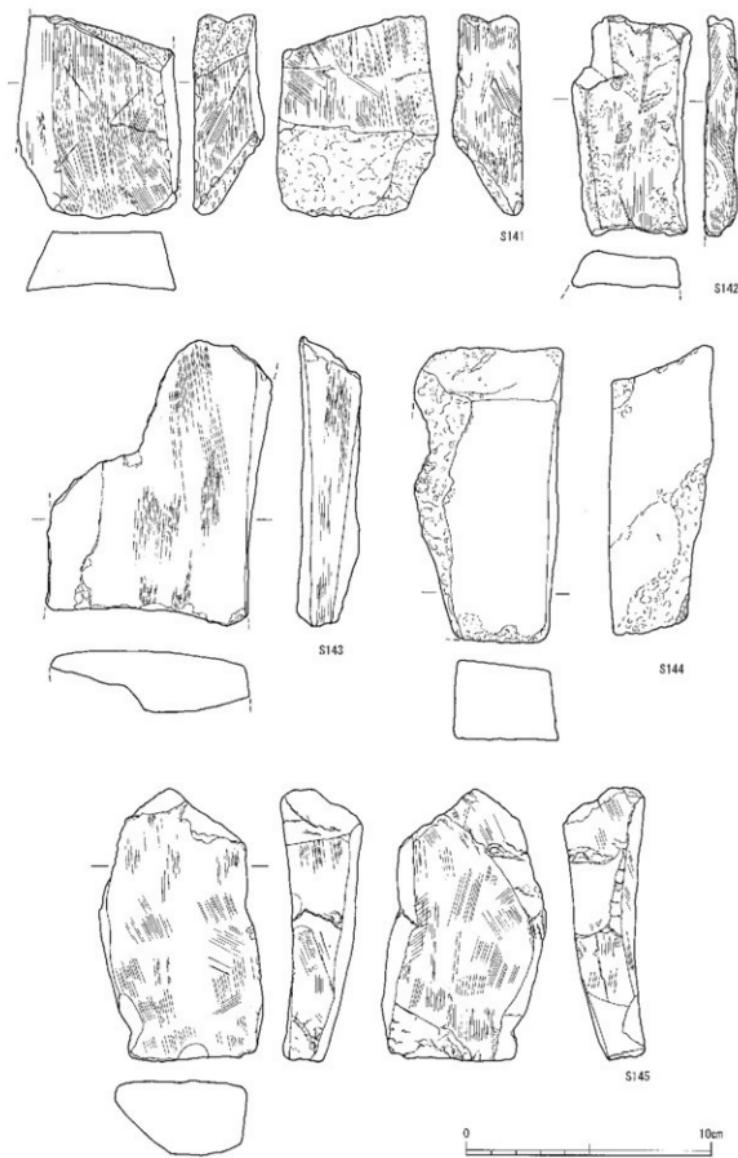
S131



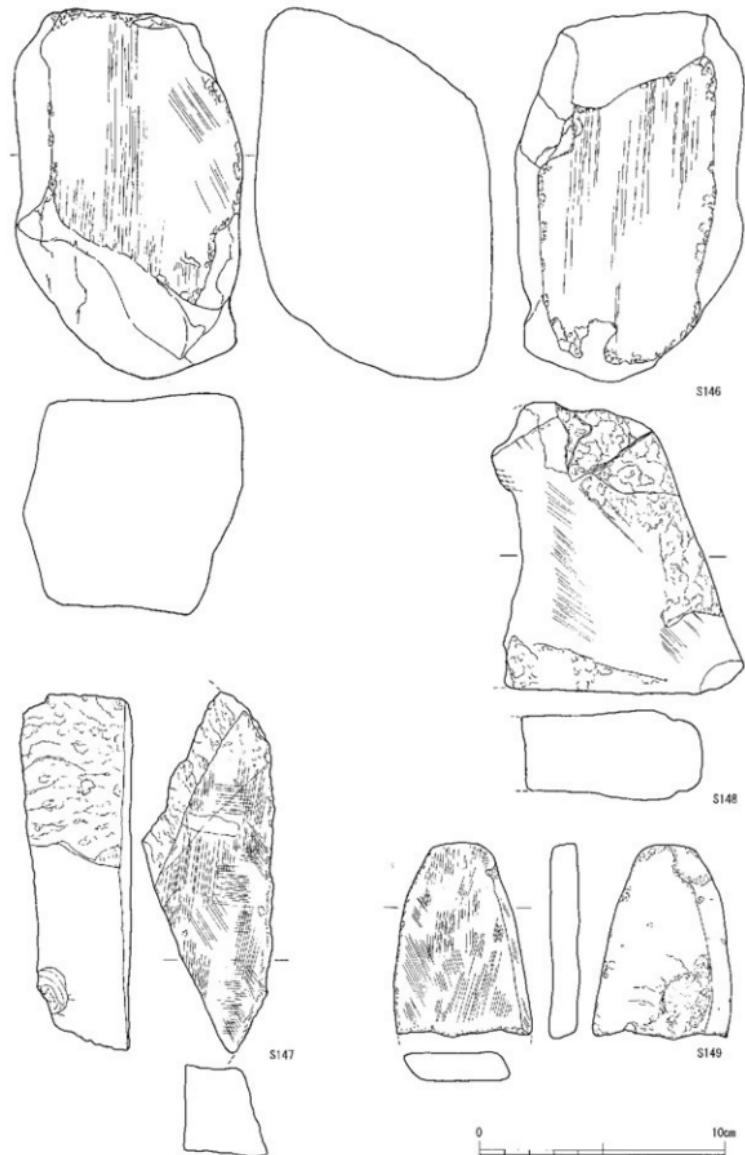
第155圖 石 器 (16)



第156図 石 器 (17)



第157図 石器 (18)



第158図 石器 (19)

フ形石器（S 1）のみで、A Tよりも下位から出土している。台形様石器も A T下位の石器群に特徴的なものであり、中期旧石器と後期旧石器を繋ぐ石器として評価されている（佐藤1988年）。西木之部遺跡のナイフ形石器と台形様石器は出土地区も異なっており、同一文化層のものかどうか出土状況から判断するには無理がある。ところで、七日市遺跡では、A T下位に3つの文化層が発見されており、その第2文化層には、西木之部遺跡とはほぼ同じ形態のナイフ形石器と小型部分加工石器（註7）が組成される（註8）。さらに、剥片剥離技術にも共通点が見られことから、西木之部遺跡の旧石器を一つのまとまりとして七日市遺跡第2文化層と対応させても良いかもしれない。限られた資料ではあるが、板井・寺ヶ谷下層文化層よりも七日市遺跡との関連性を感じさせる。

弥生時代の石器では磨製石庖丁と石斧類の数に注目してみよう。完成品の数を比較すると、磨製石庖丁21点、大型蛤刃石斧21点、扁平片刃石斧3点であり、その組成率は磨製石庖丁47%、大型蛤刃石斧47%、扁平片刃石斧6%となる。七日市遺跡では、磨製石庖丁65.6%、大型蛤刃石斧22.2%、柱状片刃石斧2.5%、扁平片刃石斧9.7%で、畿内型と北九州型のほぼ中間とされ、畿内周辺部における可耕地面積と関連付けて、活動内容が評価されている。ところが、西木之部遺跡の場合、柱状片刃石斧が欠如することを除けば、北九州型に近い数値である。両遺跡とも水田遺構が検出されていないことから、その面積や土質などは分からぬが、遺跡周辺の地形、地質の状況などから、西木之部遺跡の方がより低湿な条件にあったことは十分予想される。そうした場所で水田を営むには、畦も単に土を寄せた手畦ではなく、板や枝を芯にしたり杭を打つことが考えられるし、田下駄も必要であろう。そのためには木の伐採や加工の頻度が高くなるのは必然である。西木之部遺跡の石器構成が「複積・伐採向活動型」を示すと評価できるのであれば、このような事情が想定されるのではなかろうか。

（註1）磨製石庖丁、磨製石庖丁未完成品、磨製石庖丁素材、磨製石庖丁製作剥片、大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧が總点数（603点）に占める割合は約20%、總点数からサスカイトとチャートの剥片、破片を除いた353点に占める割合は約35%である。

（註2）勿論、チャートは縄文時代にも使用されており、チャート製石器のすべてが旧石器と判断できるわけではない。また、サスカイト製石器の中にも旧石器が含まれることは考えられるが、明確なものは認められなかった。

（註3）サスカイト製の剥片で打面を有するものがやや目につく。当地域の弥生時代のサスカイト製剥片に打面を有するものが極めて少ないことは、七日市遺跡でも確認されており（兵庫県教育委員会1990年）、このような剥片については縄文時代あるいは旧石器時代のものが含まれる可能性がある。

（註4）磨製石庖丁に対して石錐が少ないことはやや新しい要素と考えられなくもない。また、玉類と弥生石器が消滅した後も存続する砥石については古墳時代のものが含まれるだろう。

（註5）磨製石器類の石材については不確実なものがあることをお断りしておく。

（註6）七日市に関する兵庫県教育委員会1990年『七日市遺跡（I）－第1分冊－[旧石器時代の調査]』および兵庫県教育委員会1990年『七日市遺跡（I）－第2分冊－[弥生・古墳時代の調査]』を参考とした。以後も同様である。

（註7）小型部分加工石器は広義には台形様石器に含めて良いものと考えられる。

（註8）厳密に言うとこのナイフ形石器が含まれる S・T区ブロック群には小型部分加工石器は組成されない。S・T区ブロック群は、製品の組成率が高い小規模なブロックであること、他の石器ブロックとは接合関係を持たないこと、唯一櫛群を作うことなど、他の石器ブロック群とは様相を異にする。

引用文献

- 佐藤宏之1988年「台形縁石器研究序論」『考古学雑誌』73 3 p.1~37
- 佐原 真1977年「石斧論 横糸から報糸へー」『考古学論集』松崎寿和先生退官記念事業会 p.45~86
- 兵庫県教育委員会1991年「板井寺ヶ谷遺跡-旧石器時代の調査-」
- 兵庫県教育委員会1990年「七日市遺跡(1) - 第2分冊- (弥生・古墳時代の調査)」
- 財団法人大阪文化財センター1979年「池上遺跡 第3分冊の1 石器編」
- 兵庫県教育委員会1985年「ひょうごの遺跡 第8号」

第7章 まとめ

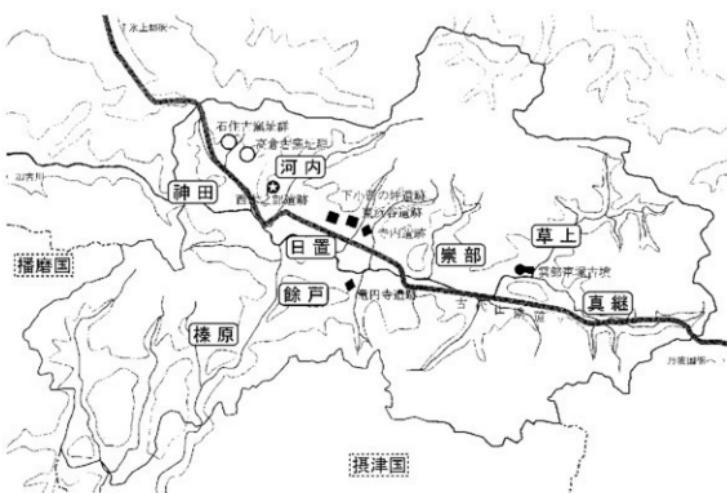
第1節 弥生時代から古墳時代の土器相

西木之部遺跡から出土している土器は弥生時代中期のものを若干含むが、大半は弥生時代後期末～古墳時代初頭のものである。その特徴は複合口縁をもつ壺・壺・高杯など山陰・丹後系の土器が目立つものの、畿内・播磨系のタタキ成形された土器が多く目立つことである。西木之部遺跡が加古川水系の最上流部に位置することが、このような土器相を見せる要因であろう。

また西木之部遺跡の特徴は、丹波西部地域（多紀郡・水上郡）の遺跡の中でも、発達した複合口縁をもつ山陰系の土器の比率が高いことである。山陰系の大型瓶が複数個体出土していることからも因幡・但馬方面との強いつながりを感じさせる。この山陰地方とのつながりは、弥生時代終末期の前半に顕著であり、後半になると畿内系のタタキ壺などの比率が高まり、山陰地方の影響は弱まるようである。

第2節 奈良時代の西木之部遺跡について

『和名類聚抄』に書かれる「丹波國多紀郡」の条には、同郡内には七郷が存在していたことが記されている。各写本の記載に従うと、「草上（久左乃加三）」・「宗部」・「真継」・「河内」・「神田」・「榛原」・「日置」の七郷である。ただ、高山寺本には記載されていないが、「榛原」と「日置」の間に「餘戸」が記されているため、最大で八郷が存在していたようである。同じ兵庫丹波の水上郡は十六郷から

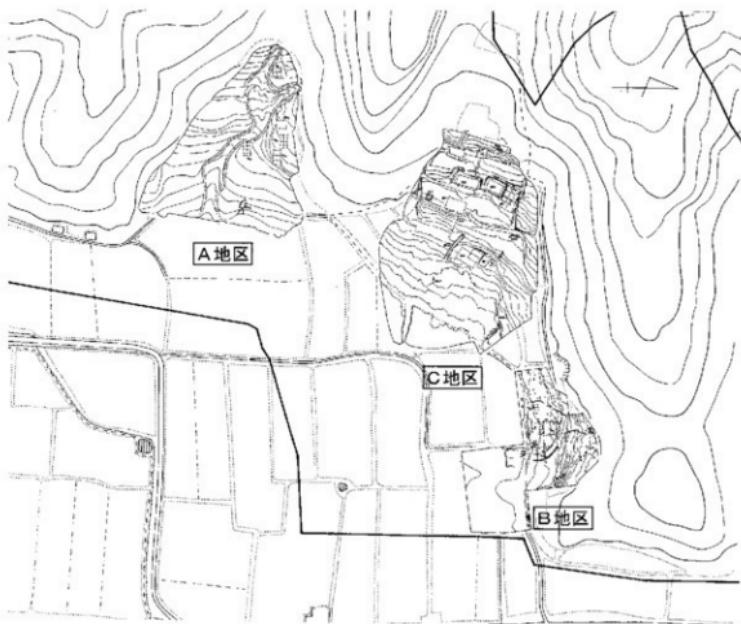


第159図 奈良時代の西木之部遺跡

なる大郡であるが、郷名を示す地名が今でも多く残っているため、各郷の所在地を比定することが比較的容易な状況にあるが、多紀郡の場合中世以降の莊園の設置や近世における北部方面に対する治安維持のための要衝として篠山城が設置されたことなど、多くの政治的な要因により地名が大規模に変更されてしまったようである。そのため、各郷の比定には現在に至っても確定的なものはないが、概略的には「草上郷」が篠山町東部の雲部車塚古墳から北東に延びる谷部を中心とする範囲とされている。「日置郷」は現在の位置の地ではなく、篠山城北方の郡家から佐倉およびその東方の平野部を中心とする地域と考えられている。「宗部郷」は「草上郷」の西側に隣接し、「日置郷」との間の地域に相当するとされている。「真綿郷」は「草上郷」の南辺に続き、福住・安口などを中心として広がる。「河内郷」はほぼ現西紀町域に相当する郷であり、宮田川流域に形成された谷部がその中心となる。「神田郷」は丹南町の北半部にあたり、中世の東寺大山庄の範囲に相当するのではないかと考えられる。「櫛原郷」は八郷の中でも最も比定地の定かでない郷であるが、丹南町南部の古市から今田町南東部を含む範を取りことにより、次の「餘戸郷」の理解が容易となることから、そこを比定地として考えたい。その「餘戸郷」であるが、「和名類聚抄」の記述の順序からすれば、「櫛原郷」と「日置郷」の間に記されていることから、現丹南町役場周辺からその東側の地域を考えることが妥当なのかもしれない。このように各郷を比定してみると、「和名類聚抄」の記述順どおり、東から西へさらに北から南へと各郷が並ぶことが分かる。

各郷の比定が確定してみると、西木之部遺跡は「河内郷」に属することが明らかとなる。周辺域での8世紀から9世紀の生産遺跡（須恵器窯跡）および集落遺跡の分布をドットすると、盆地の北辺にあたる山裾部に多紀郡衙と考えられる東浜谷遺跡・長柄駅家と想定される下小西の坪遺跡・寺院跡となる寺内遺跡など当時の主要遺跡・官衙遺跡が集中するが、これからは「日置郷」の郷域内となる。一方、盆地北西部から氷上郡に抜ける谷間の石住東谷窯址・五反田窯跡・庄谷窯跡などの須恵器生産遺跡は「神田郷」に属することとなる。これら以外には郡内に拠点的な遺跡はほとんどなく、当然「河内郷」内においても西木之部遺跡が唯一の集落遺跡となっている。こうしたことから、現段階で西木之部遺跡を「河内郷」の中心的施設（ヶ郷家か）と考えざるを得ないこととなる。その場所が郷内の南端に大きく偏るのは、第一にその場所が郷内で最も広い平野部を望む箇所であること。第二に、800mほど南側を古代山陰道が通過していたと考えられること。第三に、本遺跡の付近から北部域の氷上郡・船井郡に繋がる開道が通っていた可能性のあること。第四に、郷内を貫流する宮田川が山陰道付近で加吉川と合流するため、水陸の交通の要衝であったこと、などが掲げられる。

上記のように、本遺跡を「河内郷」の中心的施設（ヶ郷家）として位置づけると考えた場合、地方官衙として機能し始めるのは奈良時代後半（8世紀後半）からであり、その後10世紀代までは継続すると思われるが、本節ではその前半期に相当する9世紀中葉までに限って本遺跡の実像を探ってみたいと思う。ここで9世紀中葉としたのは、それ以前縄釉陶器の大量出土に示されるように、遺跡の性格が大きく変質をきたしているため、最も末端に位置する地方官衙の初現的な形態をそれ以前に求めることができると考えたためである。本遺跡における8世紀から9世紀の遺構はA・B・Cの3地区にみられるが、B地区は遺構・遺物とも極端に少ないとから、A地区とC地区が中心地域となる。A地区とC地区は東向きの山麓に位置し、西側の山塊から東に延びる小さな尾根によって分けられたふたつの浅い谷のなかに展開している（第160図）。両地区に確認された12棟の建物跡（A地区5棟・C地区7棟）の規模を比較すると、C地区は建物跡が相対的に大型であることからいわゆる政府城に相当することとなる。一方、A地区は純粋の建物跡が中心となっており、一見して倉庫城であることがわかる。このように、両



第160図 奈良時代の遺構

地区的建物跡に看取できる遺構上の相違は本来的な機能の違いを示しており、遺跡の全体としては両者でひとつの役割（官衙機能）を果たしている。

そのC地区の核となる建物跡が、SB2とSB3である。この2棟の建物跡は第2段目の平坦地に並んで並ち、「コ」の字状に巡る雨落ち溝を伴っている。さらに、SB3は北と東に庇が付けられることからも、中心的な建物（主屋）として位置づけることができる。SB2とSB3を比較するとその方位に若干のずれがあることから、時期差をもって建てられていたと捉えられる。C地区内の他の建物跡をこの2棟の建物跡の方位に従って分類すると、SB2と同方位を示すものがSB5のみであり、他の4棟はSB3と同じである。同一方位を同一時期とすれば、SB2・SB3を中心的建物とする二時期の遺構配置が想定できる。建物跡のうちSB5はその南側に井戸（SE2）を伴っており、その井戸枠内から出土する須恵器により9世紀初頭に放棄されたことが明らかである。開削の時期は、掘方内出土土器より8世紀中頃であるため、それに伴うSB5およびSB2は8世紀後半を中心とする期間が与えられる。調査区内から出土する土器を概観すると、8世紀前半に遡る資料はかなり少なく、むしろ9世紀前半から中葉にかけての遺物が多数認められるため、SB3を中心建物とする一群の建物跡はSB2群よりも後出と考えることによって、その前後関係を確定することができる。

一方、A地区の5棟の建物跡にも、方位的な違いによる2グループが認められる。ひとつはSB1とSB5であり、SB2・3・4が残る1グループである。その時期を決定する資料がないためC地区に展開する2群の建物群の組み合わせについては確定することができないが、2地区的各2群の建物跡が

どのように組み合わされるか明らかではない。ただ、遺構の配置状況から観察する限り、本遺跡の建物群は一般的な集落遺跡内の建物跡とかけ離れた状況を示すものではなく、むしろ極一般的な中規模程度の律令期集落の典型と見なされうるものである。

以上のように、遺構の状況だけでは本遺跡の特性を把握することはできないが、遺物の内容は大きな特色を示している。まず、土器組成の面からみると、土師器が非常に少なく須恵器が90%以上の大勢を占める。また、杯・皿の供膳形態の器種83%に対して、壺・甕の貯蔵形態の器種が12%の割合を示しているが、これは官衙的色彩の強い遺跡と同様の傾向である。器種別にみると、供膳形態の中でも棱輪の点数の多さは一般集落遺跡に類をみないものであり、多紀郡内の官衙遺跡である東浜谷遺跡や下小西の坪遺跡を凌ぐ数量となっている。棱輪以上に官衙性を端的に示す陶硯類も8点が確認されている。円面硯はA・B地区で各1点とC地区で5点、風字硯が1点の構成であるが、その数量は決して一般的な集落を肯定するものではなく、より官衙的な性格を想起させるに十分に足りる。この陶硯類をとっても、A地区の1点に対してC地区が6点を出土している状況は両地区的性格の違いを反映しているものであり、C地区がより実務的な役割を負っていたことを示している。

遺構と遺物の両面から本遺跡を分析してみたが、両者の間にはどうしても同一の遺跡の調査結果とは思えない違和感が感じられる。8点にのぼる陶硯の存在、則天文字を含んだ48点の墨書き器の存在、須恵器棱輪の数量の多さ、畜串・人形など木製祭祀具の存在などのように、遺物的には長柄駅家の関連遺跡と想定される下小西の坪遺跡や水上郡街と関連する春日町の七日市遺跡・山垣遺跡に引けを取らない内容となっている。「河内郷」の行政的中枢としては、「郷衙」あるいは「郷家」のような機関の存在を考えなくてはならないが、出土遺物の内容に見合うような遺構あるいは遺構配置をそこにみることはできない。遺構から判断すれば地方官衙とするより、集落遺跡あるいは規模の大きな建物跡の存在から豪族の居宅等を想定することが最も妥当な判断とされる。ところが、遺物の面で見る限り明らかに官衙的色彩が強く、一般的な集落を想定することが躊躇される。こうした二面性を持ち合わせるところにこそ、末端の地方官衙の姿を求めるべきであろう。また、C地区のS E 2・3の存在からも分かるとおり、このレベルの地方の機関は完全な行政施設ではなく、居住域と未分離な状況での行政の執行が基本的な形態のようである。C地区的S B 2あるいはS B 3はその建物構造からみて、官衙的機能の中心的な執行施設であり、井戸の付属するS B 5・6・7は「郷の長」の居宅空間と考えたい。A地区的建物は倉庫あるいは屋に相当する建物ばかりであるため、郷内の租税が集められた倉庫域としてC地区と機能を分担していたものであろう。但し、本遺跡を特徴づける大量の綠釉陶器類は、9世紀以降10世紀の時期を中心とするものであることを考慮すると、この時期に本遺跡にとっての第2の画期があったものと想定される。その内容については別章に記すとおりであり、律令制の実施によって開始された本遺跡の性格の変質と、さらなる展開と理解される現象である。

本遺跡内には8世紀初頭あるいは7世紀に遡る遺構が存在しないため、8世紀の中葉頃に「河内郷」を管理するための機関郷衙（郷家）として本遺跡が設置されたものと思われる。そのため、從来からの既存の集落を踏襲するのではなく、最も機能的で交通の要衝に近いこの場所が選択されたはずである。本節の最初にも記したとおり、『和名類聚抄』に記された郷名の比定と周辺遺跡の分布状況から、本遺跡が「河内郷」の行政的中枢の役割を負っている遺跡と想定し、遺構・遺物の分析によりその想定が裏付けられたと考える。

第3節 平安時代から鎌倉時代の西木之部遺跡

西木之部遺跡の調査の結果、A～B地区に平安時代から鎌倉時代かけての遺構が存在することが明らかになった。各地区的遺構の状況は、斜面地に築かれた平垣地上に、掘立柱建物址を中心に井戸や排水溝が配置されており、各地区に共通した遺構配置状況がみられる。これはA～Bの各地区が、谷の斜面地およびその裾の平坦地という共通した地理的条件も一つの要因と考えられる。

以下、各地区的遺構の変遷について考えてみる。

A地区

溝と建物：A地区では、9棟の掘立柱建物が確認された。建物は斜面下位の比較的緩斜面に平坦地を築き、建物が配置されている。斜面地という地理的状況からSD35・SD44・SD27・SD23・SD65・SD36・SD52といった大きな溝が斜面上位にあたる西から下位の東方向へ掘られ、A地区全体の排水機能をまかなっている。また、この溝に連絡するSD18・SD21・SD42・SD66の小規模な溝は、先端が掘立柱建物の身舎内に向かって延びており、溝が建物の排水（下水機能も含む）機能をもっていたことは容易に推測できる。また建物の周囲には、SD5・SD12・SD18西半・SD69・SD40といった小規模な溝が配置されている。これらの溝は、雨水が身舎内に及ぶのを防ぐ機能をもつ働きがあったと考えられる。A地区的溝は、全体の排水機能をもつ大型溝と、建物からの排水機能（下水機能を含む）をもつ溝、建物への雨水の侵入を防ぐ機能をもつ溝の3種類の機能をもつことが理解できる。

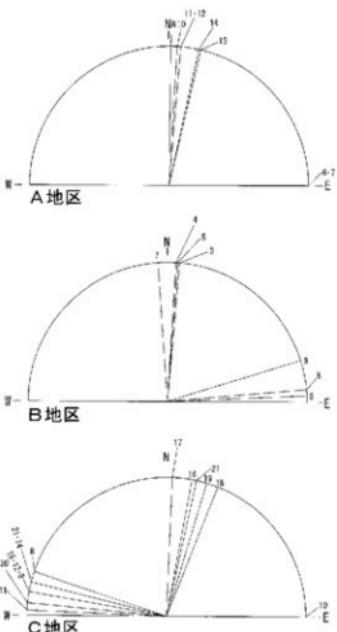
A地区的掘立柱建物址の復元は、立地が斜面地であるという特殊性からそれぞれの排水溝に限られた空間に占地しているという前提にたって行い、最終的に9棟の掘立柱建物を識別することができた。しかししながら、建物として識別し得なかつた柱穴も多数残っており、今回識別できた建物はあくまでも最低数の建物であったことをお断りしておく。

建物群は、溝の変遷から2時期に大別できる。

I期の遺構：SD65・SD36の溝を中心に展開する建物群である。棟軸方位をほぼ東西方向にもつSB6・SB7・SB9と南北方向(N5°E)にもつSB11・SB12の一群が該当する。この建物のなかで最大の規模をもつSB9を中心にして、北側にSB6・SB7、SD23をはさんだ南側にSB11・SB12が並ぶ。この時期の中核となる溝SD65は、板材を用いた護岸施設が施され堅固な作りである。また同溝内からは20点以上の縁軸、墨書き器をはじめ丸納など特筆すべき遺物が出土している。

I期の時期について少し考えを述べる。SD65内からは底部の切り離しにヘラ切り手法を用いた須恵器杯A1IIa・A1IIb類、と須恵器碗A1Ia・A1IIa・A1IIb類と高台をもつ杯Bb・Bc類が出土している。とくに底部回転ヘラ切りの特徴は、三田市相野所在の相野古窯跡群の出土資料と共通するものである。I期の時期についてはこの調査成果³³を参考にして、今のところ10世紀を中心とした時期と考えている。

II期の遺構：SD27・SD35の溝を中心に展開する建物群である。SB8・SB10・SB13・SB14が該当する。いずれの建物も棟軸方位を南北方向にもつ建物であるが、棟軸方位をN1°～3°Eに振る一群SB8・SB10とN10°～12°EにもつSB13・SB14の一群がある。両群の方位の違いが建物間の時期差と捉えることも可能であるが、今回の調査ではこの可能性の是非について知見が得られなかった。したがってこの時期のものとして括して扱う。ただ、SB13とSB14は、建物身舎が重なり合っており、両建物間に



第161図 建物址棟軸方位

は時期差を認めることがある。

SB 8・SB10の一派はSD35・SD45とSD27の溝を中心に展開した建物群と推定される。これに対して方位を少し北側にもつSB13・SB14の一派のうち、SB14は、確実にSD35・SD45を意識して立地するが、前述したようにSB13はSB14と重複しており、またこの建物に伴う溝はない。あるいは、SB13に後出する建物かもしれない。

各遺構の出土遺物が希薄で確証がないが、SB 8・SB10群→SB14→SB13で建物が変遷したと考えている。

Ⅱ期の時期については、SB14の柱穴内出土の回転糸切り底の須恵器椀A 2 II a類、同建物に伴うSD35から出土した須恵器椀A 2 II b類が検討資料となる。これらの須恵器椀は、退化した平高台と内底と体部の境に段差をもつのが特徴である。現時点で縦年案が提示されている東播系須恵器縦年²（森田編年）を参照すると、須恵器椀A 2 II a・b類は第Ⅰ期第1～2段階の範囲におさまると理解し、11世紀後半から12世紀前半に考えておきたい。

かりにⅡ期の遺構の変遷がSB 8・SB10群→SB 14→SB13で変化するという視点にたてば、Ⅱ期の時間幅はSB14の示す年代幅よりさらに広がることになる。

B地区

B地区では7棟の掘立柱建物、2基の井戸と溝が確認されている。遺構の分布は大きく分けて、上段の平坦部と下段の平坦部に集中する。とくに下段の平坦部には5棟の掘立柱建物が集中し、その建物の付帯施設である井戸と排水溝が配置されている。

掘立柱建物は棟軸方位を南北方向にもつSB 3・SB 4・SB 5・SB 7の一派と、東西方向にもつSB 6・SB 9・SB 8の一派がある。南北方向に棟軸をもつSB 3・SB 4・SB 5・SB 7の一派はSB 7の小型建物が西へ4°振る以外は、N 3°～5° Eの間に集中している。また、東西方向に棟軸方位をもつSB 6・SB 9・SB 8の一派はN 73° EのSB 9とN 85°～87° Eの範囲に集中するSB 6・SB 8に分かれる。

B地区的遺構は、時期的にはA地区で設定したⅡ期に該当するものである。

Ⅱ期の遺構：B地区的古い段階の建物は、棟軸方位を同方向にもつSB 6・SB 8の一派と考えている。上段の平坦地に位置するSB 8は、鍛冶炉の上屋と考えられる建物で、下段の平坦地に占地するSB 6と同方向にあることから同時期と判断した。建物の年代を示す資料は希薄で、SB 6柱穴内より出土した

須恵器椀A2 IIa類1点のみである。これは森田編年の第1期第1段階（11世紀末～12世紀前半）に相当すると理解している。

B地区の最終段階の遺構は、SB4・SB5と建物の排水溝SD6、井戸SE1が該当すると考えている。同建物とSD6からは須恵器椀A2 III類が出土している。A2 III類のなかでもSB4出土の2171・2173は、II類の中でも新しい要素をもつもので、森田編年の第2期第1段階（12世紀末～13世紀初頭）に相当する。

古い階段のSB6・SB8の一群とB地区最終段階のSB4・SB5と建物の排水溝SD6、井戸SE1の一群間に建物SB3を中心に溝SD2、井戸SE1の一群が存在したと考えている。

C地区

I期（10世紀代）



II期 第1段階（11世紀～12世紀前半）



C地区では12棟の掘立柱建物と溝、井戸を確認した。建物は調査区の下位にあたる東側緩斜面部分に集中する傾向があるが、調査区上位にも柱穴の痕跡が確認されている。西側部分は後世の開墾により大きく改変しており、建物が消滅したと考えられる。この理解にたてば、C地区全域に建物を中心とした遺構が点在していたことになる。

II期 第2段階（12世紀後半～13世紀初）



第162図 平安～鎌倉時代の遺構変遷

I期の遺構：明確なこの時期の遺構は、確認されていない。柱穴P583（2362）と溝SD4（2406）や新しい土器と混在したかたちで、SB21柱穴内・SD8内より当該期の遺物が確認されているにすぎない。しかし包含層には縁軸耳皿（2474）をはじめI期の遺物が散見できる。またI期の土器を含むP583の柱穴の存在を考えれば、この時期の遺構が存在した可能性は高い。

II期の遺構：掘立柱建物群と井戸、溝がある。建物群はその配置から2つに大別できる。

一つはSB16・SB21・SB19は棟軸方位がN10°～16°Eに集中する一群とSB21の西側に並列し、SB21と北辺の梁行が同一線上にあるSB20、1×4間の東西に長いSB10で構成される一群である。この一群はSD4・7の東西方向に流れる排水溝とSD23の南北方向に流れる溝を伴うと考えている。

もう一つは、N80°Wに棟軸方位をもつSB9・SB12・SB15の一群を中心とし、SB12の南側に並列するSB13を含めた一群である。

前者の一群から出土する土器は、須恵器碗A2 IIa類、A2 IIb類、土師器大皿II類が出土している。須恵器碗は森田編年の第1期第2段階に相当すると理解でき、またSD23より出土した土師器大皿II類（2415）は、伊野編年¹⁰のAタイプに近似している。この一群は12世紀前半を中心とした時期と理解している。

後者の一群については、出土遺物が希薄で時期については明らかではない。しかしSE1の排水溝と考えられるSD5や、包含層からは須恵器碗A2 IIa類、A2 IIb類より新しい要素をもつA2 III類が散見できる。SE1・SD5が後者の建物群に附属する施設であるとするならば、後者の建物群は前者に後出する一群と理解でき、筆者も明確な根拠はないがその可能性を支持している。

平安時代から鎌倉時代の西木之部遺跡は、A地区を中心としたI期（10世紀が中心）とA・B・C地区に建物群が拡散するII期（11世紀～13世紀初め）に分かれる。I期の遺構は、斜面地を大規模に削平し、各機能もった排水溝を計画的に配置し建物を構築するなど、建物の構築に計画性が認められる。また、遺物についても、多量の縁軸、墨書き器、丸鞘などの遺物に加え、行方不明で報告できなかったが巡方が出土しており、官衛的性格の強いものが多く見られる。これに対しII期以降の遺構は、西木之部遺跡全城に建物が拡散する傾向が認められ、一般集落化の様相を呈している。この状況から判断して平安時代から鎌倉時代の西木之部遺跡は、I期とII期の間に大きな画期があったことを認めざるを得ない。

西木之部遺跡の所在する場所は、中世の近衛家所領宮田庄域に該当する。しかし宮田庄の成立の経緯は不明で、西木之部遺跡で確認されたI期とII期の間に起こった大きな変化が宮田庄成立の経緯と関連する可能性が考えられる。

参考文献

- 1 岡崎正義他「兵庫県文化財調査報告書「相野古窯跡群・近畿自動車道垂井橋関係廃文化財調査報告書（XⅨ）」兵庫県教育委員会 1992
- 2 森田一穂「東播系中世須恵器生産の成立と展開―神出古窯址群を中心に―」[神戸市立博物館 1986]
- 3 伊野近富「かわらけ孝」「京都府埋蔵文化財発掘」第1集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987

表3. A地区出土土器觀察表 (弥生土器~土師器)

No.	出土地区・層位	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	厚度 (mm)	底径(周長) (mm)	色調	備考
1	第4-13層 大塚中 弥生包含層内	壺	11.1	24.6	17.4	3.0	に赤・黄褐 淡青白 7.5YR 8/3	
2	包含層	壺	(10.6)	残高 (3.6)			7.5YR 8/3 (内)2.5YR 8/2	
3	第4-7, 4-8, 4-9層 谷の中	壺	(16.6)	残高 (8.7)			に赤・黄褐 7.5YR 7/4 (内)2.5YR 8/2	
4	第4-7, 4-8層 青木谷 谷の牛	壺		残高 (7.65)	(15.05)	2.1	に赤・黄褐 7.5YR 7/4 (内)2.5YR 8/2	
5	不明	壺	(34.15)	6.11			天井部 3.5	に赤・黄褐 10YR 7/3 淡灰 10YR 4/1 灰 10YR 1.7/1
6	第4-13層 弥生包含層	壺	(13.5)	6.0			天井部 4.2	赤白 2.5Y 8/2 淡灰 10YR 8/2 (内)淡綠 5YR 8/4
7	第4-13層 弥生包含層	壺	(16.4)	残高 (7.6)				に赤 10YR 8/2
8	大塚 第4-13層	壺	(22.6)	残高 (13.9)				
9	認定Ⅱ四端壁 包含層	鉢	14.8	(14.5)	14.0	(5.9)	淡青 2.5Y 8/3 灰白 2.5Y 8/1 淡灰 10YR 8/2 灰 N 4	
10	第4-13層 弥生包含層	鉢?		残高 (4.5)		(11.95)	淡青 2.5Y 8/3 灰白 2.5Y 8/1 淡灰 10YR 8/2 灰 N 4	
11	第4-7, 4-8, 4-9層 谷の中	脚台		残高 (4.5)		7.8	淡青 2.5Y 8/3	
12	第4-13層 弥生包含層	底部		残高 (4.8)		7.4	淡青 2.5Y 8/3	
13	第4-13層 弥生包含層	鉢	(19.8)	残高 (6.15)			に赤・黄褐 10YR 6/3 淡灰 10YR 5/2	
14	第4-13層 大塚下 地の2層	壺		残高 (9.6)		1.2	淡青 2.5Y 8/4 (内)赤 10YR 8/3	
15	不明	器台	(9.1)	残高 (3.65)			淡青 2.5Y 8/3	
16	第4-13層 弥生包含層	脚部		残高 (3.65)		(10.0)	淡青 2.5Y 8/3	
17	第4-13層 弥生包含層	器台	(22.35)	(20.25)		17.5	淡青 2.5Y 8/3 (内)赤 10YR 8/3	
18	第4-13層 弥生包含層	器台		残高 (17.7)			淡青 2.5Y 8/3 (内)赤 10YR 8/3	
19	不明	器台	(18.8)	残高 (12.3)			灰白 10YR 8/2	
20	第4-13層 弥生包含層	器台	(23.5)	残高 (22.8)		(18.8)	(赤の一部分) 灰	
21	不明	器台	(24.0)	残高 (25.2)			淡青 2.5Y 8/3	
22	第4-13層 大塚下 地の2層	器台	(19.2)	残高 (3.1)			(内)灰白 2.5Y 8/1 (内)灰 2.5Y 8/3	
23	第4-13層 弥生包含層	器台		残高 (18.2)		15.6	灰白 10YR 8/2 に赤 5YR 7/4	
24	包含層被下層	壺	(21.6)	残高 (7.45)			内灰 7.5Y 8/1 (内)灰 8/0 厚減少傾向	
25	大塚 第4/2層 第3/2層(下)包含層	器台	(19.8)	残高 (5.3)			淡青 2.5Y 8/3	
26	器台	器	(14.05)	残高 (6.3)			淡青 2.5Y 8/3	
27	第3層被下 被含層 弥生(谷)	壺	(16.6)	残高 (7.1)			淡青 2.5Y 7/2	
28	空器(上)	壺	(34.5)	残高 (4.2)	(13.5)		淡青 10YR 8/3	
29	第4-5層	(底部)				(5.6)	内灰 2.5Y 8/1 (内)灰 2.5Y 7/1	
30	第4-5層 包含層 谷-1層直上	(底部)		残高 4.75		4.6	灰白 2.5Y 8/2	
31	(層位) 2	ミニチュア		残高 (3.7)		3.5	灰白 2.5Y 8/1	

表4. B地区出土土器觀察表(弥生土器~土師器)

%	出土場所・層位	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	体積 (cm)	底盤(調査)	色調	備考
32	1号住居跡 西側ベント	壺	(22.7)	(5.9)			淡黄褐色 10YR 8/4	
53	S H 1	壺	(18.2)	(5.6)			(内)灰白 20YR 8/2 (外)淡黄褐色 10YR 8/3	
34	S H 1 瓦礫ペント	壺	(15.9)	(5.6)			灰褐色 10YR 8/2	
35	S H 1 瓦礫ペント	壺	(15.2)	(6.15)			(内)淡黄褐色 16YR 8/3 (外)灰白 10YR 8/2	
36	S H 1 牛骨群	壺	(16.3)	(6.0)			(内)灰白 10YR 8/2 (外)土・灰褐色 7.5YR 7/1	
37	S H 1 牛骨群	壺合	(20.0)	(5.1)			(内)灰褐色 15YR 8/1 (外)淡黄褐色 10YR 8/3	
38	瓦礫ペント 草十上層	体	(15.6)	(5.6)			棕褐色 5YR 7/6	
39	三 II 1 地	高杯	(25.5)	(4.05)			(内)灰白 7.5YR 8/2 (外)淡黄褐色 7.5YR 8/4	
41	S H 1 樹根	ミニチュア 瓶	(8.5)	(5.2)		3.4	灰 5.1	板 5YR 6/6
42	S H 4	瓶	(8.4)	(5.6)	38.41		褐色 5.5	褐色 5YR 8/4
43	S H 4	台付鉢	(8.4)	(5.6)			(内)淡黄褐色 7.5YR 7/6 (外)淡黄褐色 6.5YR 8/4	
44	S H 4	山形輪 系	(10.9)	(5.2)			褐 5.2	褐 5.5YR 7/6
45	S H 4	?					褐 5.4	淡黄褐色 10YR 8/4
46	S II 5	壺	(14.8)	(5.0)			褐 5.0	淡黄褐色 7.5YR 8/3
47	S II 5	高杯(外部)	(21.1)	(4.0)			棕褐色 5.0	棕褐色 7.5YR 7/6
48	S II 5 燒土巾	?	(9.8)	(4.2)			褐 5.2	(内)淡黄褐色 10YR 8/4 (外)灰 5YR 7/5
49	S II 5	斜口小高杯	(20.0)	(3.5)			褐 5.5	淡黄褐色 7.5YR 8/4
50	S II 5	高杯	(12.9)	(5.2)			褐 5.0	淡黄褐色 7.5YR 8/3
51	S II 5	?					褐 5.0	10.5C+褐 5YR 7/4
52	S II 6	壺	(17.5)	(5.0)			灰白 5.0	灰白 5YR 7/1
53	S II 6	高杯(浮出)	(15.5)	(5.5)			褐 5.5	淡黄褐色 7.5YR 8/4
54	S K 16	要端高 脚杯	(24.0)	(7.7)			褐 7.7	(内)灰褐色 7.5YR 7/4 (外)灰褐色 7.5YR 7/3
55	S K 16	?	21.9	29.7	7.2		褐 7.5	褐 5YR 8/4
56	S K 7	壺	(16.6)	(5.5)			灰 5.5	灰 5.5YR 8/2
57	S K 7	?	(18.4)	(4.4)			褐 4.4	(内)灰褐色 7.5YR 8/2 (外)褐 7.5YR 6/1 (内)灰褐色 10YR 7/2 (外)灰褐色 5YR 7/4 火炎帶
58	S K 11	壺	(18.2)	(5.5)	(17.0)		褐 5.5	火炎帶 2.5YR 8/2
59	S K 11 下部土器群	壺	(13.3)	(6.45)			褐 6.45	(内)灰 7.5YR 7/6 (外)褐 7.5YR 7/5
60	S K 11 下部土器群	?	(14.6)	(6.15)			褐 6.15	(内)淡黄褐色 10YR 7/6 (外)灰褐色 10YR 7/3
61	S K 11 下部土器群	壺	(12.1)	(7.6)	(11.2)		褐 7.6	(内)灰褐色 10YR 6/4 (外)褐 10YR 6/2
62	S K 11 下部土器群	小型壺					褐 6.6	(内)褐 7.5YR 7/6 (外)灰 7.5YR 8/2
63	S K 11 燒土	小型壺					褐 6.6	(内)灰褐色 7.5YR 7/3 (外)灰褐色 5YR 7/2
64	S K 11 下部土器群	?					褐 6.6	(内)灰褐色 2.5YR 8/1 (外)淡黄褐色 7.5YR 8/4
65	S K 11 下部土器群	壺	(12.6)	(6.0)	(1.0)		褐 6.0	淡黄褐色 2.5YR 8/2
66	S K 11 區	壺	(15.6)	(5.3)			褐 5.3	10.5C+褐 5YR 7/4
67	S K 12	壺	(16.0)	(5.2)			褐 5.2	10.5C+褐 5YR 7/6
68	S K 12	壺	(16.3)	(5.5)			褐 5.5	淡黄褐色 7.5YR 8/3
69	S K 12	?	(18.3)	(5.2)	(13.1)		灰白 5.2	灰白 5YR 8/2
70	S K 12	?	16.55	9.6				(内)灰褐色 10YR 7/3 (外)淡黄褐色 10YR 8/4
71	S K 15	?	(16.65)	(7.0)			褐 7.0	(内)灰褐色 10YR 6/3 (外)灰 10YR 4/1
72	第1土器群中群	?	(15.3)	(6.5)			褐 6.5	(内)灰 10YR 7/7 (外)灰褐色 10YR 6/2 黑 10YR 1.7/1
73	第1土器群中群	壺	(12.0)	(5.8)			褐 5.8	褐 7.5YR 8/2
74	第1土器群中群	壺	(12.6)	(11.8)			褐 11.8	(内)灰白 2.5Y 8/2 (外)灰白 2.5Y 8/2 黑 10YR 1.7/1
75	第2土器群中群	壺	(15.5)	(5.7)			褐 5.7	(内)灰 10YR 8/2 (外)褐 7.5YR 5/1 (外)褐 5.7YR 8/4
76	第2土器群中群	壺	(16.6)	(5.75)			褐 5.75	(内)褐 2.5Y 3/2 (外)褐 2.5Y 3/2

No.	出土地図・層位	器種	口 径 (cm)	高 度 (cm)	器 体 (cm)	底 径 (cm)	高さ(厘米)	色 調	備考
77	第2土器集中群	高杯	(33.7)	高素 (4.7)				(内) 馬鹿頭 7.5YR 7/2 淡黄緑 10YR 8/3 (外) 面板 SYR 8/5	
78	第2土器集中群		(33.7)	高素 (4.7)				(内) 淡白 2.5Y 8/2 (外) 淡黄 2.5Y 8/4	
79	第2土器集中群		(32.0)	高素 (3.4)				(内) 黒 5.1 7/2 (外) 馬鹿頭 7.5YR 7/1	
80	第2土器集中群	?	(11.8)	(6.65)			3.3	(内) 黒 SYR 7/5 (外) にいわ 3YR 7/4 黒 SYR 7/6	
81	第2土器集中群	钵	(13.4)	高素 (7.2)				(内) 黒 SYR 4/1 淡黄 2.5Y 8/3 (外) にいわ 3YR 7/4 黒 SYR 7/6	
82	第2土器集中群	碗	(14.0)	高素 (5.0)				陶灰 SYR 6/2 灰灰 SYR 8/3	
83	第2土器集中群			高素 (5.9)			(3.4)	淡 SYR 7/6 (内) 馬鹿頭 7.5YR 8/4 (外) 面板 SYR 8/3	
84	第2土器集中群	壺	20.7	34.7	26.5	6.1		陶灰 SYR 6/2 灰灰 SYR 8/3	
85	第2土器集中群	壺	19.5	40.6	29.9	5.4		(内) 黒 SYR 8/3 淡黄 SYR 8/4	
86	第2土器集中群	壺	23.0	40.3	33.0			陶灰 SYR 6/2 淡黄 SYR 8/3	
87	第2土器集中群	壺	(14.2)	高素 (2.5)				淡黄 SYR 7.5Y 8/4	
88	第4土器集中群	壺	21.2	40.25	(29.6)	3.35		(内) 黒 SYR 8/3 (外) にいわ 3YR 7/4 にいわ 3YR 7/4	
89	第4土器集中群	壺	22.7	40.8	(28.45)			陶灰 SYR 6/2 淡黄 SYR 6/6	
90	第4土器集中群	杯	11.35	6.6				淡 SYR 6/6 灰 SYR 6/1	
91	第4土器集中群		(13.2)	高素 (4.0)				(内) 黒 7.5YR 8/4	
92	第5土器集中群		(13.7)	高素 (7.0)				(内) にいわ 3YR 7/4 (外) 淡黄 7.5YR 8/6 木炭付	
93	第5土器集中群		(15.8)	高素 (4.5)				淡黄 SYR 10YR 8/3	
94	第5土器集中群	壺	(14.0)	高素 (2.4)				淡黄 SYR 7.5Y 8/4	
95	第5土器集中群	器台		高素 (3.75)	(33.3)			灰白 2.5Y 8/2 灰 SYR 4/1	
96	第5土器集中群	壺	(21.1)	高素 (33.4)	(27.0)			にいわ 3YR 7/4 淡黄 SYR 10YR 4/2 黒 SYR 1.7/2	
97	第5土器集中群	壺	29.7	13.5		(3.0)		淡黄 SYR 7.5Y 8/4	
98	第5-A層	壺	21.0	17.0	(17.7)			(内) 黒 2.5Y 8/2 黒 2.5Y 3/1 (外) 黒 2.5Y 8/2	
99	第5-B層	壺		高素 (17.4)		(25.9)	35.0	(内) 黒 10YR 1.7/1 (外) 黒 2.5Y 8/1 にいわ 3YR 7.5Y 7/4	
100	土器集中群	壺	14.0	37.8	31.0	6.8		灰白 2.5Y 8/2 にいわ 3YR 7.5Y 7/4 (外) 黒 2.5Y 8/2	
101	第5-B層 土器べこト直岩集中群	壺	20.0	35.0	(13.4)			淡黄 SYR 10YR 8/3	
102	土器部周辺	壺	(22.7)	高素 (6.4)				根 SYR 6/6	
103	土器部周辺 (ED. 白場) 根立ち込み(土の下) 土器部周辺	壺		(9.0)	高素 (5.2)			根 SYR 6/6 灰 SYR 5/6 にいわ 3YR 10YR 7/4 (外) 黒 2.5Y 8/2	
104	土器部周辺 土器部周辺	器台	(16.7)	高素 (5.1)				灰白 2.5Y 8/3	
105	根立ち込み(土の下) 土器部周辺	器台	(16.5)	成丸 (6.5)					
106	根立ち込み(土の下) 土器部周辺	鉢	(18.3)	高素 (4.8)				灰白 10YR 8/2	
107	根立ち込み(土の下) 土器部周辺	鉢	(6.7)	高素 (5.2)				灰白 2.5Y 7/2	
108	根立ち込み(土の下) 土器部周辺	鉢	(6.7)	高素 (5.6)				根 2.5Y 8/6 (外) 灰白 2.5YR 8/2	
109	根立ち込み(土の下) 土器部周辺	鉢	(6.7)	高素 (5.6)				(内) 灰白 10YR 1.7/1 (外) にいわ 3YR 10YR 7/2 黒 SYR 10YR 4/1	
110	C層 下層	壺	(13.0)	高素 (6.65)	(22.5)	(4.4)		灰白 2.5YR 8/2 (外) 黒 10YR 8/2	
111	第5土器集中群 第5-C層 (上層)	壺	(13.6)	高素 (6.7)				淡黄 2.5Y 8/3 にいわ 3YR 7.5Y 8/4	
112	第5土器集中群 第5-C層 (中層)	壺	(17.0)	高素 (7.7)				2.5Y 8/6 (外) 黒 2.5Y 8/4	
113	第5土器集中群 第5-C層 (下層)	壺	(16.6)	高素 (6.65)				(内) 黒 2.5Y 7.5YR 7/3 (外) にいわ 3YR 7.5Y 7/3	
114	第5土器集中群 第5-C層 (下層)	壺	(16.6)	高素 (6.6)				(内) にいわ 3YR 7.5YR 7/3 (外) にいわ 3YR 7.5Y 7/4	
115	第5土器集中群 第5-C層 (下層)	壺	(29.9)	高素 (7.6)				(内) 黒 2.5Y 8/2 (外) 灰白 2.5Y 8/2 (外) 黒 10YR 8/2	

No.	出土地名・属性	種類	寸法 (cm)	断面 (cm)	体積 (cm)	重量(個数) (kg)	色調	備考
116	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵		楕円 (12.55)	17.6	2.65	(内)灰白 2.5Y 7/1 (外)に赤い斑紋 10YR 7/3 斑区 10YR 4/1	
117	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵		楕円 (13.35)	4.35		浅黄褐色 7.5YR 8/0	
118	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	高脚	(22.2)				暗灰 10YR 4/1	
119	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	鉢	(12.9)	楕円 (6.35)	7.0	4.3	(内)灰 7.5YR 7/6 (外)灰 5Y 7/6	
120	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	器台	(18.9)	楕円 (6.35)			暗褐色 2.5YR 5/8	
131	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵		楕円 (15.1)	19.1	2.4	(内)灰白 7.5YR 5/3 (外)灰褐色 7.5YR 5/2	
122	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(8.4)	楕円 (19.7)	14.85	2.4	深灰褐色 2.5YR 5/4 灰 2.5YR 6/1	北部冲積に0.8mの隙孔あり
123	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(18.1)	楕円 (6.35)	14.2	2.75	(内)灰白 2.5YR 6/1 (外)灰褐色 2.5YR 7/1	
124	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(15.6)	楕円 (8.7)			(内)浅褐色 7.5YR 8/4 (外)浅灰褐色 7.5YR 8/1 灰 2.5YR 7/6	
125	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(35.8)	楕円 (33.7)	(17.7)		に赤い斑紋 SYR 7/4	
126	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(35.9)	楕円 (11.35)	(16.3)		(内)浅褐色 10YR 8/4 (外)浅灰褐色 10YR 8/3	
127	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(17.4)	楕円 (7.35)			浅黄褐色 10YR 8/4	
128	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵		楕円 (5.4)		3.2	(内)黄褐色 2.5Y 5/1 (外)黄褐色 2.5Y 6/1	
129	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵		楕円 (4.4)		4.4	灰白 2.5Y 7/1	
130	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(11.6)	楕円 (7.6)		6.35	(内)灰褐色 7.5YR 8/1 4/1 (外)灰 10YR 8/3	
131	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵		楕円 (2.7)		2.05	浅褐色 7.5YR 8/4	
132	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(12.4)	(26.1)	(20.6)	5.1	(内)灰 N 8/6 灰 N 1.7/ (外)灰褐色 7.5YR 8/1	
133	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(7.9)	(4.5)	(9.7)	4.3	(内)灰 SYR 8/6 (外)灰褐色 7.5YR 8/6	
134	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	有孔柵		楕円 (5.8)		4.0	(内)灰褐色 5YR 7/4 (外)灰褐色 5YR 8/4	
135	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵		楕円 (9.4)		3.75	(内)浅褐色 7.5YR 8/3 (外)灰褐色 7.5YR 8/2	
136	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵		楕円 (3.9)		4.0	灰白 10YR 8/3	
137	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	高脚		楕円 (12.4)		13.05	(内)灰褐色 10YR 8/2	
138	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	器台		楕円 (9.5)		12.7	灰白 2.5Y 8/1	
139	猪子層(第4-4層)	柵	(20.3)	楕円 (6.6)			(内)に赤い斑紋 5YR 8/4 (外)に赤い斑紋 10YR 6/4	
140	猪子層(第5-C層)	柵	(16.5)	楕円 (13.6)			灰 10YR 6/8	
141	猪子層(第5-C層)	柵	(17.1)	楕円 (7.7)			に赤い斑紋 7.5YR 7/3	
142	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(26.0)	楕円 (6.9)			灰白 7.5YR 8/2	
143	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(13.6)	楕円 (6.3)			浅褐色 10YR 8/4 (内)灰褐色 10YR 8/1	
144	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(16.7)	楕円 (9.95)			浅褐色 7.5YR 8/3 (内)灰褐色 10YR 8/3	
145	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(16.0)	楕円 (7.9)			(内)灰白 10YR 8/2 (外)浅褐色 10YR 8/3	
146	猪子上西条中野 第5-C層(下層)	柵	(18.7)	楕円 (15.45)			に赤い斑紋 10YR 6/2 (内)灰褐色 7.5YR 6/4	
147	猪子層(第5-A層)	柵	(17.4)	楕円 (7.6)			灰 5YR 6/6 灰 7.5YR 7/6	
148	猪子層	柵	(17.9)	楕円 (7.7)			灰 5YR 6/6	
149	猪子層	柵	(18.6)	楕円 (6.4)			(内)浅褐色 10YR 8/3 (外)浅褐色 7.5YR 8/4	
150	猪子層(第5-C層)	柵	(17.9)	楕円 (6.6)			灰白 10YR 8/2	
151	猪子層(第5-A層 下層)	柵	(26.4)	楕円 (6.3)			灰 2.5YR 6/6	
152	猪子層	器台	(21.5)	楕円 (6.9)			浅褐色 SYR 8/4	
153	猪子層(第5-A層 下層)	柵	19.2	楕円 (6.9)			浅褐色 2.5Y 8/3	
154	西端ベルト 第5-C層	柵	(17.4)	楕円 (6.4)			(内)灰 5YR 6/6 浅褐色 2.5YR 7/3 (外)浅褐色 2.5YR 7/3 灰白 2.5Y 8/3	
155	猪子上、b、c、d層 西端ベルト	柵	(38.7)	楕円 (7.1)			浅褐色 SYR 8/3	
156	猪子上、C層 西端ベルト	柵	(33.6)	楕円 (6.2)			(内)灰 10YR 8/2 (外)灰 SYR 8/5 灰白 10YR 4/1	
157	猪子層(第5-A層 下層)	柵		楕円 (10.6)	14.8		(内)灰 2.5Y 6/1 (外)灰 SYR 6/6	

No.	出土地区・層位	器種	口徑 (cm)	體高 (cm)	体幅 (cm)	底径 (新径) (cm)	色 痕		備考
							底	側面	
158	18-1層中	盃	(35.6)	底高 (5.3)			紅褐色	7.5YR 7/4	
159	第5層 (205-A層)	盃	(34.6)	底高 (4.6)			淡黃	7.5YR 8/4	
160	18層中	盃	(33.6)	底高 (5.6)			灰黑		
161	青盤ペルト	盃	(34.6)	底高 (11.8)			灰黑		
162	第5層 (第5-1層)	盃	(31.4)	底高 (18.5)	(24.4)		灰黑	7.5YR 7/4	
163	第5層 (第5-1層 下部)	盃	(35.8)	底高 (12.0)			灰黑	7.5YR 6/6	
164	第5層 (第5-1層 下部)	盃	14.8	底高 (7.85)			灰黑	7.5YR 7/3	
165	第5層 (第5-1層)	盃	(16.6)	底高 (5.7)			灰黑	7.5YR 7/4	
166	第5層 (第5-1層)	盃?	(36.2)	底高 (15.8)	(30.6)		灰黑	7.5YR 7/4	
167	第11' 層中	盃?	(36.3)	底高 (7.0)			内底白	7.5YR 8/2	
168	第5層 (第5-1層)	盃	(33.0)	底高 (6.8)			灰黑	7.5YR 7/1	
169	第5層 (第5-1層)	豆漿盃	16.9	底高 (4.8)	11.4		灰黑	7.5YR 7/5	
170	第5層 (第5-1層)	盃	(33.1)	底高 (5.9)			灰黑	7.5YR 4/3	
171	第5-C層 (下部) 青盤ペルト	盃	(35.7)	底高 (12.0)	(23.6)		灰黑	7.5YR 7/4	
172	第5層 (第5-1層)	盃	15.6	底高 (7.8)			灰黑	7.5YR 7/4	
173	第19層 (a, b, c, d)	盃	(33.0)	底高 (5.5)			灰黑	7.5YR 8/4	
174	第5層 (第5-1層)	盃	(33.7)	底高 (5.5)			灰黑	7.5YR 6/6	
175	第5層 (第5-1層)	盃	(33.0)	底高 (11.7)	(44.0)		灰黑	7.5YR 6/4	
176	第5層 (第5-1層) 青盤ペルト	盃	(33.8)	底高 (6.7)			灰黑	7.5YR 4/3	
177	第5層 (第5-1層 下部)	盃	(35.2)	底高 (3.9)			灰黑	7.5YR 7/4	
178	第5層 (第5-1層)	盃	(35.4)	底高 (4.2)			灰黑	7.5YR 8/4	
179	第5層 (第5-1層)	盃?	(17.7)	底高 (5.9)			灰黑	7.5YR 8/4	
180	第5層 (第5-1層)	盃?	(8.0)	底高 (9.7)	8.0		灰黑	10YR 4/1	
181	第5層 (第5-1層)	盃	(9.6)	底高 (7.85)	(12.6)		灰黑	7.5YR 7/1	
182	第5層 (第5-1層)	盃	(34.1)	底高 (11.25)	(34.6)		灰白	10YR 8/2	
183	第5層 (第5-1層)	盃	(16.6)	底高 (4.5)	(21.2)		灰白	10YR 6/3	
184	第5層 (第5-1層 下部)	盃	(35.9)	底高 (10.0)			灰白	10YR 7/4	
185	第5層 (第5-1層)	盃	(37.0)	底高 (8.85)			灰白	10YR 8/2	
186	第5層 (第5-1層)	盃(有蓋式)	(14.7)	底高 (1.15)			灰黑	10YR 8/2	
187	第5層 (第5-1層)	盃	(34.0)	底高 (1.2)			灰白	10YR 7/6	
188	第5層 (第5-1層?) 青盤ペルト	盃	(35.5)	底高 (4.0)			灰白	10YR 8/3	
189	第11' 層	盃(有蓋式)	(35.5)	底高 (3.75)			灰白	10YR 8/4	
190	第5層 (第5-1層)	盃(有蓋式)	(36.5)	底高 (3.9)			灰白	10YR 8/5	
191	第5-C層	盃(有蓋式)	(35.6)	底高 (3.4)			灰白	10YR 8/5	
192	第19層	盃(有蓋式)	(36.6)	底高 (3.3)			灰白	10YR 8/4	
193	第5層 (第5-1層)	盃	(35.7)	底高 (4.4)			灰白	10YR 8/6	
194	第5層 (第5-1層)	盃	(30.0)	底高 (4.6)			灰白	10YR 8/6	
195	第18層	盃	(22.2)	底高 (9.65)			灰白	10YR 4/2	
196	第5-1層 下部の灰盤と 第5-C層	盃	(37.7)	底高 (3.2)			灰白	10YR 6/4	
197	5-H 上層	盃	(37.3)	底高 (6.5)			灰白	10YR 7/7	
198	第5層 (第5-1層)	盃	(34.6)	底高 (4.8)			灰白	10YR 7/4	
199	5層	盃	15.4	底高 (18.5)	18.6		灰白	10YR 4/6	
200	第5層 (第5-D層)	盃	(35.5)	底高 (4.0)			灰白	10YR 5/2	
201	第5-1層	盃	(38.5)	底高 (4.0)			灰白	10YR 3/2	
202	第5-1層	盃	(38.5)	底高 (4.0)			灰白	10YR 8/1	

No	出土地区・層位	器種	口 径 (cm)	縦 高 (cm)	体 壁 (cm)	底径(側面) (cm)	色 彩	備 考
262	第5-C層(第5-C(a)) 東壁ペルト	盃	9.9	16.0	9.2	1.75	褐色 10YR 6/1 4/1	
263	地上層一、清酒中	盃	(28.0)	既高	(24.4)		(内) に赤い縁 7.5YR 7/3 外) 黄白 7.5YR 7/3	
264	第5層(多孔含層)	杯	(28.6)	既高	(4.15)		(内) に赤い縁 7.5YR 7/3 (外) 黄白 5.5YR 8/3	
265	第5-C(c)層 東壁ペルト	杯	(31.6)	既高	(4.9)		(外) に赤い縁 7.5YR 7/3 褐色 10YR 5/1	
266	第5-A層	杯	(19.4)	既高	(3.4)		浅黄緑 10YR 8/3	
267	第5-A層	杯	(13.8)	既高	(3.1)		(内) 紅 5YR 6/8 (外) 黄 5YR 6/6	
268	第5層	杯	(21.4)	既高	(13.45)		淡赤 5.5YR 7/4	
269	第14-C層 上レンガ内	杯	(20.6)	既高	(6.6)		(内) 黄黄緑 10YR 8/4 (外) 淡青 2.5Y 8/2	
270	第12層	杯	(17.3)	既高	(5.05)		(内) 淡白 7.5YR 8/2 (外) 淡緑 5YR 8/4	
271	漆黒のイトレンザ (底座)	杯	(17.4)	既高	(3.6)		淡黄緑 10YR 6/4 (内) 黑 10YR 1.7/1	
272	第5-C(c)層 西壁ペルト	杯	(16.8)	既高	(7.13)		褐 7.5YR 7/0	
273	第5-1層	盃?	(11.4)	(6.4)		5.5	(内) 淡白 10YR 8/2 (外) 黑 10YR 1.7/1	
274	第5-A層、卓手	盃	(16.9)		(6.9)	3.6	(内) 淡白 5Y 6/1 (外) 淡黄 2.5Y 8/3	
275	第5層(第5-A層 下層)	鉢	(16.1)	(5.75)		4.8	(内) 淡白 10YR 7/3 (外) 淡青 5YR 8/3 黒 10YR 1.7/1	本漆赤
276	第5-A	鉢	(12.1)	(5.55)		4.0	灰白 10YR 8/2 黑 10YR 1.7/1	
277	第5層下室上部	鉢	8.9	4.9		4.0	褐 7.5YR 6/6	
278	第5層	鉢?	(14.25)	(5.1)		5.1	(内) 淡白 10YR 8/2 黒 10YR 1.7/1 (外) 淡青 2.5Y 8/3	
279	第5層(第5-A層) 一部熱水下層	鉢	(8.85)	(6.25)		3.1	(内) 黑 10YR 1.7/1 (外) に赤い縁 10YR 7/2 に黒い縁 5YR 7/4	
280	第5層(第5-T層)	鉢?	(7.0)	(5.95)		3.65	灰白 2.5Y 8/2 褐 7.5Y 7/6	
281	漆黒の底足下	(ニチュア)	6.1	(4.5)		(3.6)	灰白 3.5Y 8/2	
282	第5層(第5-A層)	鉢?	(11.0)	(6.6)			灰白 7.5YR 8/2 1.5-2.5Y 8/2 (内) 淡白 10YR 7/4	
283	第5層(第5-A層)? 裏赤引イトレンザ?	鉢?	6.25	4.6			(外) 淡青 10YR 8/3 碧 7.5YR 7/6	
284	2層	舟形鉢	(11.3)	(4.1)		3.95	(外) 淡白 7.5YR 8/2 黑 7.5YR 8/1	
285	第5-11-b層	舟形鉢	(11.6)	(6.0)			(内) 淡青 2.5Y 8/3 (外) 淡白 5YR 7/4	
286	第5層(第5-A層)	鉢	(10.1)		(4.0)		灰白 2.5Y 8/2	
287	第5層(第5-A層)	鉢	(9.9)		(4.9)		淡青 5YR 8/4	
288	5-11 下層	鉢	(10.7)		(4.4)		淡黄緑 10YR 8/3	
289	第5層(第5-A層) 一部熱水	舟?	(7.4)	(5.3)	(7.1)		灰白 2.5Y 8/2	
290	1-8-1層	盃?	(10.4)	(2.9)	(10.49)		灰白 10YR 8/2 5.5Y 8/2	
291	第5層 A層とその下の灰層	鉢	(16.15)	(6.5)	9.5	1.9	淡青 5.5Y 8/3	
292	第5層(第5-A層)	鉢	10.8	5.75		1.8	(内) 淡白 N 4/ (外) 淡白 10YR 8/2	
293	段塗赤	盤	(6.1)	(6.1)	9.4		(内) 淡白 N 4/ (外) に赤い縁 10YR 7/3 黑 10YR 1.7/1	
294	第5-A層	盃?	13.5	50.6	12.5		淡青 5YR 8/3 (外) 淡白 5Y 8/1	
295	第5-C層 5-C(上)-5-C (b) 東壁ペルト	鉢?	(20.8)	既高	(7.85)		(内) 淡白 2.5Y 8/2 (外) 黄黄 2.5Y 7/8 黒 7.5Y 7/6	
296	5-日-5-青	盃?	(17.4)	既高	(7.0)		(内) に赤い縁 5YR 7/4 (外) 淡白 2.5Y 7/1	
297	第5-日-5-青	鉢	(9.1)	(6.2)		(3.75)	(内) 淡青緑 10YR 8/3 (外) に赤い縁 5.5YR 7/4	
298	5-日-5-青	鉢	(9.25)	(6.7)		5.3		
299	第5-C層	鉢?	(16.5)	(6.15)			(内) 淡青緑 10YR 8/4 (外) 淡白 10YR 8/2	
300	第5層(第5-A層)	鉢	(8.6)	既高	(6.65)		板 2.5Y 8/6 淡赤 2.5Y 7/5 黄赤 2.5Y 4/1	
301	第5層(5-11-a)	鉢?	(10.45)	(6.75)	(7.25)	5.6	淡青 2.5Y 8/3 黒 10YR 1.7/1 (内) 淡青緑 10YR 7/4 地区 7.5YR 4/1	
302	第5層(5-11-a)	鉢?	(14.45)	(6.75)		5.6	(内) 淡青緑 10YR 7/4 (外) 淡白 10YR 8/2	
303	第5層(第5-A層)	鉢	(10.75)				板 2.5Y 8/6 淡赤 2.5Y 7/5 黄赤 2.5Y 4/1	
304	第5層(第5-T層)	盃?	(10.75)				淡青 2.5Y 8/3 (内) 淡青緑 10YR 7/4 (外) 淡青 5YR 8/3	
305	第5層(第5-A層 下層)	盃?	(12.6)		(6.2)		に赤い縁 5YR 7/4	

No.	出土地點・層位	形 種	口 直 (cm)	國 高 (cm)	體 厚 (cm)	底面(脚部) (cm)	色 彩	備 考
246	第5層 (第5- A層) 至19層の下	高杯	(9.6) (6.0)	残高 底面			橙 5YR 7/6	
247	第5- A層	高杯	(11.7) (9.6)			(11.2)	橙 5YR 6/6	
248	第5層 (第5- A層) (C'層)	高杯	16.8	残高 底面			(明淡黃盤) 10YR 8/3 (底) 橙 5YR 6/6	
249	第5層 (第5- A層)	高杯	10.4	4.7			に近い度 7.5YR 7/4	
250	第5- A層 至 C'層	高杯	(8.65)			(8.7)	浅黃盤 7.5YR 8/3	
251	第5- II- T層	鉢?	7.85	残高 底面			底白 2.5Y 8/2 (外周部) 橙 4/	
252	第5- B層 下層 海川東北	高杯	(12.3) (4.7)				淡黃 2.5Y 8/3	
253	第5- A層 (下) 西壁ベント	大型鉢	(30.0) (15.7)	残高 底面			橙 5.5YR 7/6 に近い青白 10YR 7/4 底重板 10YR 4/2	
254	第5層 (第5- A層)	大型鉢	(33.2) (14.85)				淡黃盤 10YR 8/3	
255	4-2層 D層	大型鉢	(39.6) (8.4)	残高 底面			(内) 橙 7.5YR 7/6 (外) に近い橙 7.5YR 7/4	出目2241と同一?
256	第5層	大型鉢	(22.3) (17.1)	残高 底面			(内) 橙 7.5YR 7/2 (外) 橙 7.5YR 6/6 底板 7.5YR 5/2	
257	第5層 (第5- A層 下層)	大型鉢	(35.3) (16.0)	残高 底面			(内) に近い黄盤 10YR 7/4 (外) 底白 2.5Y 8/2 黒端 2.5Y 3/1	
258	第5- C層 下層 万葉ベルト	大型鉢	(25.6) (12.05)	残高 底面			(内) に近い黄盤 10YR 7/4 (外) に近い黄盤 10YR 7/3 (内) 橙 7.5YR 7/2	
259	第5層	器合	(19.8) (4.2)				(内) に近い黄盤 10YR 7/4 (外) 底白 2.5Y 8/2	
260	第5層 (第5- II層)	器台	(21.4) (9.2)	残高 底面			(内) 淡黃盤 10YR 8/4 (外) 橙 7.5YR 7/6	
261	急- 備 (第5- II層) E層、第5- II層	器台	(17.5) (8.65)	残高 底面			改善盤 10YR 8/4 (外) 橙 10YR 1/1	
262	第5- H 上層	器台	(20.6) (6.6)	残高 底面			(内) に近い黄盤 10YR 7/4 (外) に近い黄盤 2.5YR 8/4 に近い黄盤 10YR 7/4	
263	第5層 (第5- A層) - (第5- C層) 底重板 (第5- II層)	器台	23.7	14.2		13.4	淡黃盤 10YR 8/4 橙 2.5Y 8/6	
264	底重板 (第5- A層)	器台	(20.4) (12.7)	残高 底面			に近い黄 5YR 7/4 に近い黄盤 10YR 7/2	
265	第5層 (第5- A層)	器台	17.3	12.3			に近い黄盤 5YR 7/4 (内) の一部 黄 10YR 1.7/	
266	18-2'' 勝	器台	19.6 (12.4)	残高 底面			に近い黄盤 10YR 7/3 改善盤 2.5YR 7/4	
267	第5層 (第5- A層)	器台	(67.16) (11.4)	残高 底面			に近い黄盤 10YR 7/3 に近い黄 3.5YR 7/4	
268	第5- C層	器台	21.85	18.2		14.1	底白 2.5Y 8/1 改善盤 2.5YR 8/4	
269	3 H 2 層 上層	小型器台	(13.5) (12.5)	残高 底面		(14.45)	橙 7.5YR 7/6	
270	第19層	小型器台	8.6	6.9		9.75	重板 50R 6/6 淡黃盤 2.5YR 7/4	
271	地盤	小型器台	(15.0) (7.5)			(6.8)	淡黃盤 10YR 8/3	
272		小型器台	8.8	7.35		10.7	淡黃盤 10YR 8/3	
273	25- A層 下層	小型器台	8.0	8.0		10.5	橙 2.5YR 7/6 改善盤 2.5YR 8/4	
274	底重板 (第5- II層) - 5M5- 2 下層	小型器台	(9.1) (5.2)	残高 底面			底白 2.5Y 8/1	
275	底重板 (第5- A層) 海山プロック (赤色)	小型器台	9.0	8.5		9.7	底白 10YR 8/2	
276	多く含む土	小型器台	(7.9) (5.7)	残高 底面			橙 5YR 8/6	
277	第5層 (第5- A層) 卓張り- リレンチ	小型器台	(8.85) (5.3)	残高 底面			底白 2.5Y 8/1 底白 2.5Y 7/1 に近い黄 3.5YR 7/4	
278	18-4層	小型器台	7.3	7.0		8.35	底白 10YR 8/2	
279	器合	小型器台	(8.6) (5.7)	残高 底面			橙 2.5YR 7/6	
280	第5層 (第5- A層)	小器合	(6.0) (7.15)	残高 底面			に近い黄 5YR 7/4 底重板 10YR 6/2	
281	第6- I層	小型器台	(6.9) (6.4)	残高 底面			改善盤 2.5YR 8/3	
282	底重板 (第5- II層)	小型器台	(10.6) (8.2)				に近い黄 7.5YR 7/4	
283	生金剛	小型器台	8.9	8.5		9.8	淡黃盤 2.5YR 8/3	
284	生金剛	小型器台	(8.3) (6.4)			11.4	橙 5YR 8/3	
285	底重板 (第5- A層) 卓張り- リレンチ	小型器台	8.65	8.65		10.1	底白 2.5YR 8/2	
286	第11層	小型器台	(5.9) (3.2)			(10.8)	(内) 淡黃盤 5YR 8/4 (外) 底白 7.5YR 8/2	
287	底重板	手握土器	(5.4) (4.15)			(5.5)	(内) 底白 10YR 8/2 (外) 橙 5YR 8/4	
288	底重板 (II層)	手握土器	(4.75) (4.1)			3.1	底白 2.5YR 8/2	
289	底重板 (第5- A層)	手握土器	(5.1) (4.1)			3.2	に近い黄盤 10YR 7/3 底 10YR 1.7/1	

No	出土地区・属性	器種	口 径 (cm)	高 度 (cm)	体 備 (cm)	底面(斜面) (cm)	色 調	備 考
290	第5層 (第5-A層)	手捏土器	4.9	4.2	2.8	(内) 黒 2.5YR 6/6 (外) にふい黄緑 10YR 7/4 黒 2.5YR 6/6 黒 10YR 6/7/1		
291	第5層 (第5-A層) (C層?)	手捏土器	(4.85)	(4.1)	3.4	黒白 2.5YR 6/6 黒白 10YR 6/7 黒 2.5YR 6/6 黒 10YR 6/7/1		
292	4-5層 D層	手捏土器	4.5	4.65	2.95	黒白 10YR 6/7 黒 10YR 6/7 黒 10YR 6/7/1		
293	第5-A	手捏土器	(3.7)	(4.1)	3.2	灰白 2.5Y 8/1 灰 N 4/		
294	第5-1層	手捏土器	3.4	3.95	2.65	灰白 2.5Y 8/2 灰白 10YR 6/7 灰白 10YR 6/7/1		
295	第5層 (第5-A層 下層)	手捏土器	4.05	3.2	2.95	にふい黒 2.5YR 7/4 黒 2.5YR 6/7/1		
296	5-6層	手捏土器	(3.8)	(2.8)	3.15	黒 2.5Y 6/2		
297	5-6層 第5-I層	手捏土器	(5.45)	(3.25)	1.9	(内) にふい黄緑 10YR 7/4 (外) 白 10YR 6/2		
298	5-6層 下層	手捏土器	(7.5)	(3.15)	(6.0)	黒 SYR 5/6		
299	第5-1層 磁とその上の実器 泥瓦部分	手捏土器	(6.4)	(4.8)		黒 2.5YR 7/6 (外) にふい黄緑 10YR 6/7/1		
300	第5-1層	手捏土器	(2.55)		3.8	灰 N 5/		
301	11-12層 下層	手捏土器	(2.6)	(5.8)	3.15	(内) 黒灰 5YR 6/1 (外) 淡黄緑 7.5YR 8/2		
302	第11-12層	手捏土器	3.7	3.1		黒 10YR 6/7/1		
303	第6層	手捏土器	(6.8)	(6.9)		(内) 黒灰 5YR 6/1 (外) 淡黄緑 7.5YR 8/2		
304	第15層 第15-1層 第16層	手捏土器	(2.1)			黒 10YR 6/7/1 黒 10YR 6/7/2		
305	第3層	手捏土器	(2.1)		2.5	にふい黄緑 10YR 6/4		
306	第5層	手捏土器	(5.35)	5.2	3.7	にふい黒 2.5YR 7/4 黒 2.5YR 6/7/1		
307	第5層	手捏土器	(6.5)	(6.1)	3.0	(内) 黑 2.5Y 8/3 (外) 淡黄緑 10YR 8/3 (内) 黒		
308	第5-6-7層	手捏形土器		残高 (4.8)		灰白 2.5Y 7/1		
309	第5-A層	壺				灰白 2.5Y 7/1 にふい黄緑 10YR 7/4		
310	無文 席面貼付トレンチ	壺				にふい黒 5YR 7/4		
311	5-6-7上層	壺				にふい黒 2.5YR 7/4 淡黄 10YR 6/3		
312	第5層							
313	第5-11-12層 (5等)	虎頭形土器	(3.8)			灰黃色 10X 5/2		
314	不明	壺	7.6	27.6	14.0	(内) 淡黄緑 10YR 8/3 (外) 黒 5YR 7/6		
315	不明	壺	(13.6)	残高 (7.4)	(14.0)	(内) 黒 5Y 5/1 (外) 淡黄 2.5Y 7/3		
316	不明	壺	(13.2)	残高 (7.6)		(内) 淡黄 2.5Y 7/1 (外) 淡黄 10YR 8/3		
317	不明	壺	(14.9)	残高 (7.45)		(内) 淡黄 2.5Y 7/1 (外) にふい黒 2.5YR 6/4		
318	不明	壺	(23.1)	残高 (4.9)		淡黄 5YR 8/4 灰白 10YR 8/2		
319	不明	壺	(13.6)	残高 (6.0)		(内) にふい黒 10YR 7/4 (外) にふい黒 7.5YR 7/4		
320	不明	壺	(17.6)	残高 (4.8)		(内) 淡黄 2.5YR 8/3 (外) 淡黄 10YR 8/4		
321	小便	蓄合	21.1	(20.0)	(14.15)	にふい黒 2.5Y 7/4 灰白 10YR 8/3		
322	不明	蓄合	(7.9)	(6.95)	9.85	にふい黒 5YR 7/4 (内) 淡黄 2.5Y 8/2 (外) 淡黄 10YR 8/4		
323	不明	蓄合	(6.0)	(6.6)	(10.2)	(内) 淡黄 2.5Y 8/2 (外) 淡黄 10YR 8/4		
324	不明	蓄合	(6.0)	(7.7)	(6.0)	(内) 淡黄 2.5Y 8/2 (外) 淡黄 10YR 7/3		
325	汲水・洗 漏斗	蓄合	(6.4)	残高 (6.4)		淡黄 10YR 8/4		
326	S・Mルート(内)	糞	(33.7)	(7.15)	(4.7)	淡黄 7.5YR 8/4 灰白 10YR 8/3		
327	不明	糞	(21.0)	(7.25)	(6.8)	灰白 10YR 8/3		
328	不明	糞	15.8	11.6	8.0	灰白 10YR 8/3		
329	不明	糞	12.2	9.5	6.4	淡黄 10YR 8/4		
330	不明	糞	(13.4)	残高 (6.6)		にふい黒 2.5YR 7/4		
331	不明	蓄合	(18.05)	6.0	(4.7)	(内) 淡黄 2.5Y 8/3 (外) 淡黄 10YR 8/4		
332	(第5-A層・第5-B層・第5-C層)	蓄合	13.6	5.7		天井型 3.8		
333	不明	壺	7.9	3.5	2.8	植 2.5YR 7/6		
334	不明	ミニチュア	残高 (4.35)	(7.0)		(内) 灰白 2.5Y 8/2 (外) 淡黄 2.5Y 8/3		
335	表揮	ミニチュア	(2.6)	残高 (3.65)	4.0	(内) 淡黄 2.5Y 7/4 (外) 淡黄 10YR 7/7/1		
336	不明	壺	(29.6)	残高 (11.8)		灰白 10YR 8/4	拓本	
337	不明	壺	(26.6)	残高 (4.3)		灰白 10YR 8/2	拓本	
338	第5-C層(較新) 植物沿いトレンチ	壺				植 2.5YR 7/6		
339	第5層蓄下層	壺	(16.6)	残高 (4.3)		にふい黒 2.5YR 6/4		

No	出土地名・層位	器種	口径 (cm)	高さ (cm) 残高 (cm)	体積 (cm)	底径(開口) (cm)	色調	備考
240	第15 屋根 下層	甌	(16.5)	(6.9)	-	-	棕青綠 7.5YR 8/4	
241	第15- 日常 下層	甌杯	(23.2)	(15.9)	-	-	棕青綠 7.5YR 7/4	

表5. C地区出土器觀察表(弥生土器~土師器)

No.	出土地区・属性	器種	口徑 (cm)	器高 (cm)	体積 (cm)	基盤(測定) (cm)	色調	備考
342	SD27	壺	(15.0)	(12.0)				
343	SD27	壺	(17.0)	(9.0)				
344	SD27	壺	(14.0)	(8.1)				
345	SD29	壺	(16.0)	(12.0)				
346	SD29	壺	(14.0)	(8.0)				
347	SD29	壺	(19.5)	(8.0)				
348	SD29	壺	(13.0)	(8.2)				
349	SD29	壺	(12.0)	(7.4)	(14.0)			
350	SD29	酒杯?	(20.0)	(4.0)				
351	SD29	壺			(4.8)			
352	SD29	壺			(5.8)			
353	SD29	壺			(5.4)			
354	SD29	壺			(5.0)			
355	SD29	壺			(2.6)			
356	SD29	壺			(2.4)			
357	SD29	壺			(4.0)			
358	SD29	酒杯			(16.0)			
359	SD41B	壺	(13.0)					
360	SD41B	壺			(11.0)			
361	不明	壺	(22.0)	(34.0)				
362	不明	壺	(16.0)	(6.0)				
363	不明	壺	(17.0)	(5.0)				
364	不明	壺	(15.0)	(5.0)				
365	不明	壺	(20.0)	(7.0)				
366	不明	壺	(11.0)	(3.0)				
367	不明	壺	(12.0)	(3.0)				
368	不明	壺	(11.0)	(3.0)				
369	不明	壺	15.0	(15.0)	15.4	3.2		
370	不明	壺	(20.0)	(5.0)				
371	不明	壺			(5.0)			
372	不明	壺	(22.0)					
373	不明	壺	(15.0)					
374	S K50 四葉彫	酒杯			11.4	模擬 5.5YR 8/4		
375	S X 1	壺			(9.0)	(外)に赤い斑紋 10YR 7/2 (内)に赤い斑紋 7.5YR 7/4		
376	S K20	壺	14.4	10.5	27.2	(外)模白 10YR 8/2 (内)に赤い斑紋 7.5YR 7/4		
377	S K5		(4.0)	(6.0)	6.6	模擬 10YR 8/2		
378	S K5	小壺			7.8	(内)に赤い斑紋 7.5YR 7/4 (外)に 7.5YR 7/6 (新)模擬 10YR 8/2		
379	T 1243 船形		(13.0)		(12.0)	(内)に赤い斑紋 5YR 7/4 (外)模白 10YR 8/2		
380	S K30		(5.0)	(6.0)		模擬 7.5YR 6/4 (新)模白 7.5YR 6/8		
381	S K20		9.7	(7.7)		模擬 10YR 8/3		
382	S K20 船上	壺	11.0	6.25		模擬 7.5YR 8/4		
383	S K20	壺	(16.0)	(7.4)		模 5YR 7/6		
384	S D60					に模白 7.5YR 7/4		
385	S D60	壺						
386	S D60	壺	(13.0)	(27.5)	5.3	(内)模擬 10YR 8/3 (外)模擬 7.5YR 8/4		
387	S D60 壺二	壺	(11.0)	(22.0)		模擬 7.5YR 8/4		
388	S D60 壺二	壺	(16.0)	(18.0)		4.5YR 模擬 10YR 7/3		
389	S D60 壺二	壺	(15.0)	(17.0)	4.9	4.5YR 模擬 10YR 7/3		

No.	出土地区・層位	器種	口 径 (cm)	身 高 (cm)	体 徑 (cm)	底径(脚径) (cm)	色 国	備 考
380	S D 60 植土	体	(21.5)	高筒 (16.5)		5.4	(9) に朱い縁 7.5Y R 7/3 (9) に朱い縁 5TR 7/3	
381	S D 72 下層	壺	14.8	高筒 (5.4)			浅黄縁 7.5Y R 8/4	
382	S D 72	体	(10.6) (9.35)	(11.3)		2.5	橙 7.5Y R 6/3 灰青 7.5Y R 6/3 高筒 7.5Y R 3/3	
383	S D 72	体		残高 (5.0)		(4.2)	(9) 灰青 2.5Y 7/2 (9) 残高 1.5Y 5/2	底部断面に穿孔有り
284	S D 72	体		残高 (5.1)		3.9	(9) に朱い縁 5TR 7/4 (9) 残高 5Y R 7/4	
385	S D 72	器台		残高 (10.8)			浅黄縁 5Y R 8/3	
386	S D 91	体	(13.85) (8.55)			5.0	(9) 淡黄 3.5Y 8/3 (9) 灰青 2.5Y 5/1 高筒 3.5Y 3/1	
387	S D 91	瓶	12.75	9.5		6.8	1.5TR 1.5R 3.5Y 4/4	
388	S D 92	壺		残高 (5.5)		(5.8)	(9) に朱い縁 10Y R 7/3 (9) 残高 5TR 6/4	
389	S D 92	壺	(13.6)	残高 (5.45)			(9) に朱い縁 5TR 7/4 (9) に朱い縁 5TR 6/4	
390	S D 92	壺		残高 (5.6)		4.0	(9) に朱い縁 7.5Y R 7/4 (9) 瓶 2.5Y R 8/6	
391	S D 92	杯	8.7			3.3	橙 7.5Y R 7/6	
402	P D 80 地上	壺	(15.5)	残高 (5.6)			浅黄縁 10Y R 8/3	
403	P D 80	壺		残高 (5.6)	(10.45)		淡白 10Y R 8/2	
404	P E 10 植土		(11.6)	残高 (5.7)	(12.2)		浅黄縁 10Y R 8/5	
405	P E 68 柱方		11.5	残高 (5.7)	12.0		(9) に朱い縁 7.5Y R 7/3 (9) 残高 5TR 6/4	
406	P F 72 柱方	体		残高 (5.5)		4.4	淡白 5Y R 8/2	
407	P F 148 柱方	壺	(12.6)	(11.1)	(14.1)		(2) (9) に朱い縁 10Y R 7/3 (9) 残高 2.5Y 4/4 (9) 残高 10Y R 8/	
408	P F 356 柱穴	手把付壺	(2.4)	残高 (2.5)	(4.0)		淡白 7.5Y 6/1	
409	P F 604	体		残高 (2.5)		3.75	(9) 淡白 2.5Y 8/2 (9) 瓶 2.5Y 2/1	
410	包含層	壺		残高 (2.5)		8.0	淡白 10Y R 8/2	
411	包含層	壺	23.6	残高 (28.5)	(34.0)		(9) 淡白 2.5Y 4/1 (9) 淡白 7.5Y R 7/4 (9) 残高 7.5Y R 7/4 (9) 淡白 10Y R 8/2	
412	包含層	器台	26.0	残高 (27.5)			和 5Y R 6/1	
413	包含層	器台	8.1	(6.5)	(9.7)		浅黄縁 7.5Y R 8/3	
414	包含層	器台	(6.75)	残高 (5.5)			淡白 10Y R 8/2	
415	包含層		(6.4)	(4.5)			浅黄縁 10Y R 8/4	
416	包含層		16.2	(8.35)	(7.4)		浅黄縁 10Y R 8/3	
417	包含層	器台	11.7	残高 (5.1)			淡黄 2.5Y 8/2	

表6. A地区出土土器観察表(奈良時代)

No.	種類	出土場所	形式	断面	口径	高さ	断面形状	特徴
1002	縫合土器	S 3号3号方四	1	6.0	9.5	4.0	ヨコサ底形制、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全	
1003	縫合土器	1	1.0	1.0	25.7	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全	
1004	杯形	3	1.3	—	—	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全	
1005	杯形	4	2.2	—	—	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ	
1006	杯形	1	3.8	13.4	25.1	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1007	杯形	1	3.2	15.5	—	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ	
1008	杯形	2	5	11.4	4.6	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ、見込み不完全のナダ		
1009	杯形	2	3.5	12.6	2.0	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全		
1010	杯形	3	4.0	15.5	25.0	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1011	杯形	4	3.7	13.8	25.8	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1012	杯形	5	3.0	15	28	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1013	杯形	2	3.7	13.2	28	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1014	杯形	2	4.1	15.5	25.5	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1015	杯形	3	4.1	12.6	35.5	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ、見込みナダ		
1016	杯形	3	3.1	13.7	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1017	杯形	3	2.8	13.6	33.0	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ、見込みナダ		
1018	杯形	2	2.5	13.8	34.0	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ、見込みナダ		
1019	皿形	3	2.5	14.1	17.7	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込みナダ		
1020	皿形	4	2.2	16.1	15.7	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ		
1021	地盤	3	4.6	14	30.2	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1022	皿形	3	3.1	—	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1023	杯形	1	3.8	9.7	41	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ、見込みナダ		
1024	杯形	2	2.1	—	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ、見込みナダ		
1025	器形	2	9.2	24.6	25.0	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1026	器形	3	3.6	—	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1027	器形	4	1.2	1.5	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1028	器形	1	3.6	10.6	25.7	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1029	器形	3	3.2	10.1	30.1	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1030	器形	2	5.2	13.8	25.2	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込みナダ		
1031	器形	2	3.6	11.8	30.3	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込みナダ		
1032	杯形	3	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1033	杯形	3	3.2	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1034	器形	2	3.6	11.8	30.3	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1035	器形	2	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1036	器形	2	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1037	器形	2	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1038	器形	3	3.2	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1039	器形	2	3.6	11.8	30.3	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1040	器形	2	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1041	器形	2	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1042	器形	1	4.5	15.9	28.3	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1043	器形	2	4.2	16	25.6	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込みナダ		
1044	器形	4	1.8	25.6	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ		
1045	器形	3	2.7	16.7	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1046	器形	2	9.7	—	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1047	器形	2	1.4	21.4	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1048	器形	2	4.2	1.5	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1049	器形	1	3.6	10.6	25.7	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1050	器形	3	2.2	10.1	30.1	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1051	器形	2	5.2	13.8	25.2	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込みナダ		
1052	器形	2	3.6	11.8	30.3	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込みナダ		
1053	器形	2	4.2	16.1	25.6	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ		
1054	器形	2	3.6	11.8	30.3	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1055	器形	2	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1056	器形	2	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1057	器形	2	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1058	器形	2	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1059	器形	2	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1060	器形	2	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1061	器形	2	3.4	14.5	25.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1062	不明	1	11.5	21.5	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1063	器形	1	9.0	17.8	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ		
1064	器形	2	5	11.4	43.0	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1065	器形	2	4.6	9.8	46.9	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリ、見込み不完全のナダ		
1066	器形	1	10.0	24	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1067	器形	1	5.5	13.6	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1068	器形	1	4.1	4.4	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1069	器形	1	5	14.5	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1070	器形	1	5.7	15.7	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1071	器形	2	5.6	12.2	25.3	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1072	器形	1	5.6	10.8	28.0	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1073	器形	1	5.7	15.7	26.7	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1074	器形	1	4.3	15.4	28.1	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1075	器形	1	3.9	15.7	26.9	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1076	器形	2	3.4	15.4	—	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1077	器形	1	3.5	15	26.9	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1078	器形	2	2.5	15.7	27.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1079	器形	1	3.2	11.7	26.7	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1080	器形	1	3.2	11.7	26.7	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1081	器形	1	3.4	9.8	26.8	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1082	器形	1	3.5	10.8	26.8	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1083	器形	3	3.6	10.7	28.6	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1084	器形	1	4.1	10.5	30	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1085	器形	1	3.6	13.8	29.3	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1086	器形	1	3.8	12.8	27.2	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1087	器形	1	3.2	12	25.9	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1088	器形	1	3.2	12	25.9	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1089	器形	1	3.8	12.8	27.2	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1090	器形	1	3.6	12.5	27.2	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1091	器形	1	3.6	12.2	27.2	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1092	杯形	1	4	11.4	25.1	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1093	杯形	1	4.2	13.6	26.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1094	杯形	2	3.5	13.5	25.6	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1095	杯形	1	4.2	13.6	26.4	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1096	杯形	1	3.6	12.5	26.8	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1097	杯形	1	3.6	12.2	26.8	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		
1098	杯形	1	3.7	12.2	26.8	ヨコロ右斜傾、底部外側面ヘタリナリのナダ		

No.	種類	出土遺物	形式	裏面	口面	背面	備考	説明および標
1194	杯B		2	3.5	13.8	25.	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ	
1195	杯B		2	4.1	12.6	35.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1196	杯B		2	3.6	13.4	36.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1197	杯B		2	3.2	13.6	23.5	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ	
1198	杯B		2	3.6	13.4	23.5	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1199	杯B		2	3.6	13.4	24.4	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1200	杯B		2	3.4	12.9	28.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ	
1201	杯B		2	4.6	13.6	25.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ	
1202	杯B		2	1.5	11	11.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1203	杯B		2	4.1	10.6	35	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み 完方向のナダ	
1204	杯B		3	1.9	16.1	11.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ後不完全方向のナダ	
1205	杯B		3	3.1	15.4	11.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ後不完全方向のナダ	
1206	杯B		3	1.8	14.8	11.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1207	杯B		3	2.4	12	11.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1208	杯B		3	2.4	15.5	11.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1209	杯B		3	1.6	13.3	11.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1210	杯B		3	2.2	14.2	11.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み 不完全方向のナダ	
1211	杯B		3	3.6	16.2	22.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1212	杯B		3	4.1	16.2	23.5	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ後不完全方向のナダ	
1213	杯B		3	3.6	16.6	22.9	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ後不完全方向のナダ	
1214	杯B		3	5.3	13.6	31.6	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1215	杯B		3	4.5	12	35.6	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1216	杯B		3	3.8	12	35.6	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1217	杯B		3	4.9	12.9	35.6	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1218	杯B		3	4.5	12.6	38.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1219	杯B		3	5.5	15.4	20.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1220	杯B		3	4	12.7	51.5	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1221	杯B		3	4	13.4	32.3	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1222	杯B		3	4.8	18.6	31.6	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1223	杯B		3	3.5	15.4	35.6	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1224	杯B		3	3.8	15	35.6	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1225	杯B		3	5.7	12.9	35.6	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1226	杯B		3	5.3	12.5	35.6	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1227	杯B		3	5.1	10.6	35.6	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1228	杯B		3	5.5	9	31.6	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1229	杯B		4	1.9	17	11.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1230	杯B		4	3.3	19	11.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1231	杯B		4	1.9	14.8	11.8	ロクロ石器類、天井部分へラクリ便ナ、見込み 完方向のナダ	
1232	杯B		4	10.8	4.5	11.8	ロクロ石器類、天井部分へラクリ便ナ、見込み 完方向のナダ	
1233	杯B		4	9.7	14.6	11.8	ロクロ石器類、天井部分へラクリ便ナ、見込み 完方向のナダ	
1234	杯B		4	2.3	15.5	11.8	ロクロ石器類、天井部分へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1235	杯B		4	1.9	15.4	11.8	ロクロ石器類、天井部分へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1236	杯B		4	3.9	17.5	22	ロクロ石器類、底部外側面不動、見込み不完全方向のナダ	
1237	杯B		4	3.6	17.2	21.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1238	杯B		4	3.6	15.6	20.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1239	杯B		4	3.9	15.6	20.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1240	杯B		4	3.9	15.6	20.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1241	杯B		4	4.2	15.5	20.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1242	杯B		4	4	12.8	11.3	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1243	杯B		4	4.2	12.8	32.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1244	杯B		4	5.6	17.2	25.9	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1245	杯B		4	4.4	11.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1246	杯B		4	2.1	11.4	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み 方向のナダ	
1247	杯B		4	2.5	10.5	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1248	杯B		5	5.4	12.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1249	杯B		5	5.7	12.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1250	杯B		4	4.2	12.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1251	杯B		4	4	12.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1252	杯B		4	5.6	12.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1253	杯B		4	5.7	12.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1254	杯B		4	5.7	12.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1255	杯B		4	5.7	12.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1256	杯B		4	5.7	12.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1257	杯B		4	5.7	12.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1258	杯B		4	5.7	12.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1259	杯B		4	8.5	22	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1260	杯B		4	5.5	10.2	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1261	杯B		4	5.9	15.8	37.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1262	杯B		4	4.5	18.2	36.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1263	杯A		3	6.5	14.5	40.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み 完方向のナダ	
1264	杯C		3	5.8	15.5	38.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み 完方向のナダ	
1265	杯C		3	6.6	15.5	42.9	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み不完全方向のナダ	
1266	杯C		3	5	13.8	36.2	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1267	杯C		3	6.3	17.8	36.2	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1268	杯C		3	6.2	17.8	35.9	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1269	杯C		3	6.2	17.8	35.9	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1270	杯C		3	6.2	17.8	35.9	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1271	杯C		3	6.2	17.8	35.9	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1272	杯C		3	6.2	17.8	35.9	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1273	杯C		3	6.2	17.8	35.9	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1274	杯C		3	6.2	17.8	35.9	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1275	杯C		2	13.6	16.5	35.8	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み 方向のナダ	
1276	杯C		2	3.3	9.8	40.1	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み 完方向のナダ	
1277	杯C		1	5	4.4	37	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込み 完方向のナダ	
1278	瓶A		1	18.8	10.3	37	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1279	瓶B		3	6.0	12.4	37	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みナダ	
1280	瓶B		3	15.4	8.8	37	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1281	瓶C		3	14.7	10.3	37	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1282	瓶C		2	17.6	8.6	37	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1283	宝K		1	14.5	11.6	37	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1284	宝L		2	14.4	9.8	37	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1285	宝M		2	11.2	17.4	37	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1286	宝N		3	7.1	11.2	37	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	
1287	宝K		1	16.0	1	37	ロクロ石器類、底部外側面へラクリ便ナ、見込みヨコナ	

No.	種類	出生地	誕生日	性別	特徴	備考
1288	表1	3 8.0+	-----	**	セロ右目地、ヘラクリ染ナダ、内背腹ヨコナダ	
1289	W.M.	3 16.9+	-----	**	セロ右目地、上背外側ヨコナダ	
1290	表1	- 6.2+	-----	**	セロ右目地、尻部外側ヨコナダ	
1291	表C	2 9.5+	16.4	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1292	体D	3 5.2+	19.4	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1293	表	3 -----	-----	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1294	表	3 22.5	-----	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1295	表C	3 5.6+	16.6	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1296	表C	3 4.9	16.6	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1297	表D	1 6.6	7.3	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1298	表E	2 8	16	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1299	表D	3 4.1+	13.7	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1300	平瓶	2 4.1+	-----	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1301	平瓶	2 16.4+	-----	**	体地・内腹内背側ともヨコナダ	
1302	表E	1 4.8+	18.2	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1303	表E	2 5.8+	18.7	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1304	表E	2 5.5+	1.2	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1305	表E	2 6.9	-----	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1306	表E	2 16.5+	24.1	**	体地内面は黒色のもの、内背腹ヨコナダ	
1307	表E	3 7.4-	22.4	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1308	表E	3 9.2-	22.5	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1309	表E	4 8.7-	22.5	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1310	表F	1 20.5+	16.2	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1311	表F	2 16.2+	16.2	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1312	表F	3 25.4+	20.8	**	体地内面は黒色のもの、内背腹ヨコナダ	
1313	土形荷葉	2 5.8+	21.1	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1314	土形荷葉	3 30.9	30.9	**	セロ右目地、内背腹ヨコナダ	
1315	表E	2 2.2	13.8	**	天井前頭部ヘラクリヨコナダ、見込み不完全、天井外側に「口」の墨書きあり	
1316	杯垂	1 -----	3.4	**	セロ右目地、人井頭部ヘラクリヨコナダ、見込み不完全、天井外側に「口」の墨書きあり	
1317	絞物袋	2 1.9+	22	**	セロ右目地、天井西ヨコナダ、天井外側に墨書きあり	
1318	杯A	1 7.8	13.9	**	セロ右目地、内背腹内ハラクリヨコナダ、見込み不完全、天井外側に「口」の墨書きあり	
1319	杯A	1 9.2	14.6	**	セロ右目地、内背腹内ハラクリヨコナダ、見込み不完全、天井外側に「口」の墨書きあり	
1320	杯B	2 4.7	14.6	**	セロ右目地、内背腹内ハラクリヨコナダ、見込み不完全、天井外側に「口」の墨書きあり	
1321	杯B	3 2.8+	-----	**	セロ右目地、内背腹内ハラクリヨコナダ、見込み不完全、天井外側に「口」の墨書きあり	
1322	皿A	2 2.3	16.2	18.3	セロ右目地、内背外側ヘラクリヨコナダ、足込み、一方ヨコナダ	
1323	皿A	4 7.2	14.5	18	セロ右目地、内背外側ヘラクリヨコナダ、足込みナダ、天井外側に「口」の墨書きあり	
1324	皿A	3 2.8+	15.2	18	セロ右目地、内背外側ヘラクリヨコナダ、足込み不完全、天井外側に墨書きあり	
1325	皿A	4 2.4	34	17.1	セロ右目地、内背外側ヘラクリヨコナダ、足込み不完全、天井外側に墨書きあり	
1326	絞物袋	3 1.9+	-----	**	セロ右目地、内背外側ヘラクリヨコナダ、足込み不完全、天井外側に墨書きあり	
1327	杯B	3 6.4+	16.5	**	セロ右目地、内背外側ヨコナダナダ、見込み不完全、天井外側に「口」の墨書きあり	
1328	杯B	-----	-----	-----	セロ右目地、内背外側ヨコナダナダ、見込み不完全、天井外側に「口」の墨書きあり	
1329	不角	-----	-----	-----	セロ右目地、内背外側ヨコナダナダ、見込み不完全、天井外側に「口」の墨書きあり	
1330	不角	-----	-----	-----	セロ右目地、内背外側ヨコナダナダ、見込み不完全、天井外側に「口」の墨書きあり	
1331	杯足	-----	-----	-----	天井外側ヨコナダ、内背腹ヨコナダ	
1332	杯足	-----	-----	-----	天井外側ヨコナダ、内背腹ヨコナダ	
1333	杯足	-----	-----	-----	内背腹ヨコナダ	
1334	杯足	-----	-----	-----	内背腹ヨコナダ	
1335	杯足	-----	-----	-----	内背腹ヨコナダ	
1336	杯足	-----	-----	-----	内背腹ヨコナダ	
1337	杯足	-----	-----	-----	「口」の墨書きあり	
1338	杯足	-----	-----	-----	外沿に「口」の墨書きあり	
1339	杯足	-----	-----	-----	底面に墨書きあるが少部分	

表7. B地区出土器觀察表(奈良時代)

No.	器種	出土場所	型式	調査	口径	高さ	備考	
1351	壺	S.母屋北側	I	11.4	----	---	内外面ともヨコナガ、底面はハカリ、肩部に一筋の波線がある、ロクロは右回転	
1352	壺	-----	I	13.7	16.6	---	ロクロ右回転、内外面ともヨコナガ	
1353	鉢	-----	I	16.	30.6	---	内外面ともヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、ロクロは右回転	
1354	鉢	6号埋蔵庫	I	11.2	21.5	---	内外面ともヨコナガ、ロクロは右回転	
1355	鉢	5号埋蔵庫	I	9.5	16.5	---	内外面ともヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、内側は左回転	
1356	鉢	4号埋蔵庫	I	9.5	16.7	22.0	内外面ともヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み不定方向のチヂ	
1357	鉢	-----	I	9.5	16.7	22.0	内外面ともヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み不定方向のチヂ	
1358	盆	-----	I	9.5	16.7	22.0	内外面ともヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み不定方向のチヂ	
1359	不明	-----	----	----	----	----	「一」印のみ	
1360	碗	E.母屋	I	3.4	12.4	22.0	内腹面外側へフタリ、裏ヨコナガ、見込みナダ	
1361	皿	S.母屋	I	3.9	12.6	22.0	内腹面外側へフタリ、裏ヨコナガ、見込みナダ	
1362	杯	S.K.2	I	2.9	14.9	---	内腹面ヨコナガのちヨコナガ、見込み上げチヂ	
1363	皿	-----	I	2.8	16.9	18.8	内腹面ヨコナガのちヨコナガ、見込み上げチヂ	
1364	皿	-----	I	3	14.5	18.0	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、内側は左回転	
1365	杯	S.D.8	I	3.6	11.8	10.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、内側は左回転	
1366	杯	-----	I	3.8	11.8	10.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、内側は左回転	
1367	杯	H.6A	I	3.6	11.3	10.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、内側は左回転	
1368	杯	-----	I	4	12.7	30.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、内側は左回転	
1369	杯	H.8B	I	4.6	12	30.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、内側は左回転	
1370	瓶	-----	----	25.8	44	----	「一」印のみ	
1371	瓶	S.D.8	I	3	2.7	20.6	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、内側は左回転	
1372	瓶	-----	----	2.9	2.9	20.6	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、内側は左回転	
1373	瓶	-----	----	11.4	11.4	20.6	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、内側は左回転	
1374	瓶	S.X.1	I	1	2.7	4.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み足跡不規則	
1375	杯	-----	I	1	2.7	35.1	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み足跡不規則	
1376	杯	-----	I	2	4.2	11.1	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み上げチヂ	
1377	半瓶	-----	I	9.1	16.9	---	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み上げチヂ	
1378	瓶	岱谷層内	I	6.8	14.4	22.0	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1379	瓶	-----	I	4.5	12.9	33.3	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1380	瓶	-----	I	5.9	13	35.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1381	瓶	-----	I	5.9	13	35.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1382	杯	-----	I	5.7	10.6	10.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1383	杯	-----	I	5.4	10.3	10.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1384	杯	-----	I	5.7	12	30.8	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1385	皿	-----	I	8.7	13.3	25.2	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1386	杯	-----	I	3.4	12.5	30.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1387	杯	H.6A	I	3	3.3	12.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1388	杯	-----	I	3.7	11.1	33.3	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1389	杯	-----	I	5.1	11.1	33.4	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1390	杯	-----	I	5.7	10.6	30.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1391	杯	-----	I	5.4	10.3	30.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1392	杯	-----	I	5.6	10.3	30.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1393	杯	-----	I	5.7	12	30.8	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1394	杯	-----	I	2.9	12.4	27.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1395	杯	-----	I	2	2.4	15.7	17.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ
1396	杯	-----	I	2.8	13.4	20.9	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1397	杯	-----	I	9.6	10.7	24.1	内腹面ヨコナガのちヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み不定方向のチヂ	
1398	杯	-----	I	9.5	16.5	25.1	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み不定方向のチヂ	
1399	杯	-----	I	9.5	16.5	25.1	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み不定方向のチヂ	
1400	杯	-----	I	5.3	12.5	22.2	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1401	杯	H.8B	I	4.5	14.5	36.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1402	杯	-----	I	5.8	13.6	27.1	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1403	杯	-----	I	4.5	13.6	33.6	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1404	杯	-----	I	3.9	18	22.2	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1405	杯	-----	I	3.6	11.8	32.3	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1406	杯	-----	I	3	12.5	32.3	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1407	杯	-----	I	8.0	15.2	24.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1408	杯	-----	I	4.4	12.4	35.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1409	杯	-----	I	4.1	12.1	33.1	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1410	杯	-----	I	4.2	11.1	37.3	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1411	皿	-----	I	5.3	14.4	35.4	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1412	杯	-----	I	3.6	10	32.3	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1413	杯	-----	I	4.5	16.4	33.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1414	杯	-----	I	4.7	16.4	33.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1415	皿	-----	I	4.9	16.2	33.4	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一方角のチヂ	
1416	皿	-----	I	2.6	14.7	16.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一定方向のチヂ	
1417	皿	-----	I	3	9.5	17	14.5	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一定方向のチヂ
1418	皿	-----	I	2.2	14.8	19.2	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込み一定方向のチヂ	
1419	碗	-----	I	1	9	31.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1420	碗	-----	I	4.5	9.4	43.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1421	碗	-----	I	4.8	10.2	43.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1422	碗	-----	I	4.8	10.2	43.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1423	碗	-----	I	10.6	14.4	43.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1424	碗	-----	I	4.5	10.2	43.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1425	碗	-----	I	4.5	10.2	43.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1426	碗	-----	I	4.5	10.2	43.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1427	碗	-----	I	4.5	10.2	43.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1428	碗	-----	I	4.5	10.2	43.7	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1429	豆皿	-----	I	1.8	12.6	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1430	豆皿	-----	I	4	6.5	12.6	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1431	豆皿	-----	I	5.0	6.5	12.6	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1432	豆皿	C	I	5.0	6.5	12.6	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1433	豆皿	-----	I	4.9	16.2	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1434	豆皿	-----	I	5	16.2	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1435	豆皿	-----	I	5.5	16.2	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1436	豆皿	-----	I	5.5	16.2	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1437	豆皿	A	I	5.5	21.4	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1438	豆皿	-----	I	7.6	21.4	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1439	豆皿	-----	I	7.6	21.4	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1440	豆皿	-----	I	7.6	21.4	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1441	豆皿	-----	I	7.6	21.4	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1442	豆皿	-----	I	7.6	21.4	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1443	豆皿	-----	I	7.6	21.4	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1444	豆皿	-----	I	7.6	21.4	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1445	豆皿	-----	I	6.8	22.8	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1446	豆皿	-----	I	6.4	20.8	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	
1447	豆皿	-----	I	6.4	20.8	----	内腹面ヨコナガ、底面はハカリ裏縁なし、見込みナダ	

表8. C地区出土土器観察表 (奈良時代)

番号	場所	出土状況	形式	口径	底径	高さ	測定部位	測定値	備考
1471	根木	PE付	一	3.0	1.0	14.2	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1472	根木		二	2.2	11.9	26.9	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1473	根木		一	2.2	11.9	30.8	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1474	根木		一	3.9	11.9	32.8	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1475	根木		二	3.1	34	22.1	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1476	根木		三	3.2	11.6	27	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1477	根木		三	3.5	11.8	28.6	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1478	根木		一	3.0	12.0	29.5	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1479	根木		一	2.6	15.0	15.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1480	根木		二	2.1	15.1	16.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1481	根木		三	1.6	14.8	16.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1482	根木		二	3.8	12.8	22.7	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1483	根木		二	4.2	10.7	29.7	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1485	根木		二	4	13.6	34	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1486	根木		一	5.6	12.8	35.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1487	根木		一	5.5	12.8	36.7	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1488	根木		一	5.6	16.6	36.7	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1489	根木		三	5.1	15.6	37	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1490	根木		四	2.5	14.8	17.6	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1491	根木		三	2.9	17.8	17.6	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1492	根木		三	5.5	17.2	32.6	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1493	根木		四	2.1	18.2	17.6	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1494	根木		三	2.6	16.1	23.1	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1495	根木		一	2.9	16.1	24.2	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1496	根木		一	7.4	16	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1497	根木		五	6.8	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1498	根木		二	3.7	14.4	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1499	根木		三	9.6	15.9	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1500	根木		三	6.9	9.5	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1501	根木		四	8.6	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1502	根木		一	4.5	16.4	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1503	根木		一	8.9	11	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1504	根木		一	3	16.5	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1505	根木		一	3.9	15.2	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1506	根木		一	5.5	17	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1507	根木	S D 5	一	5.5	15.2	38.7	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1508	根木		一	3.4	10.9	39.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1509	根木		一	3.6	19	39.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1510	根木		一	3.6	19	39.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1511	根木		一	3.2	19	39.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1512	根木		一	2.9	19	39.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1513	根木		二	3.5	26	26.2	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1514	根木		三	9.6	32	34.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1515	根木		三	8.4	11.9	38.5	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1516	根木		四	9.2	12	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1517	根木		四	4.3	15.2	30.6	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1518	根木		一	2.7	15.1	30.6	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1519	根木		一	5.6	18	30.6	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1520	根木		一	16.1	16.1	46.0	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1521	根木		二	2.7	18.8	46.0	ロクロ石筒瓶、人井和田軸ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1522	根木		二	2.6	16.4	46.0	ロクロ石筒瓶、人井和田軸ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1523	根木		二	5.0	16.4	46.0	ロクロ石筒瓶、人井和田軸ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1524	根木		三	1.5	18.6	46.0	ロクロ石筒瓶、人井和田軸ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1525	根木		三	5.1	18	46.0	ロクロ石筒瓶、人井和田軸ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1526	根木		一	4.4	14.4	46.0	ロクロ石筒瓶、人井和田軸ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1527	根木		一	1.5	15	21.3	ロクロ石筒瓶、底部外側ナダ		
1528	根木		一	4.4	14.4	24.4	ロクロ石筒瓶、底部外側ナダ		
1529	根木		一	1	18	24.4	ロクロ石筒瓶、底部外側ナダ		
1530	根木		二	4.2	18.2	33.1	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1531	根木		二	4.5	16.5	25.8	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1532	根木		二	4.1	19	25.8	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1533	根木		三	4	19	25.8	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1534	根木		三	4.9	16.2	25.8	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1535	根木		三	4.3	15.5	25.8	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1536	根木		三	1.8	18.6	25.8	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1537	根木		三	1.8	18.6	25.8	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1538	根木		三	2.3	14.1	37.1	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1539	根木		四	1.6	14.6	37.1	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1540	根木		四	4	12	30.8	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1541	根木		四	4.6	12.8	35.9	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1542	根木		四	4	12	33.6	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1543	根木		四	1.6	12	33.6	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1544	根木		四	4.6	17	34.1	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1545	根木		四	9.5	15.8	34.1	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1546	根木		四	9.5	17.6	34.8	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1547	根木		五	5	16	34.8	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1548	根木		五	8.2	16.6	17.1	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ		
1549	根木		五	8.2	14.4	18.8	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込みナダ		
1550	根木		四	8.6	15	37.5	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1551	根木		四	10	15	36	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1552	根木		四	10	15	36	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1553	根木		四	10	15	36	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1554	根木		四	10	15	36	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1555	根木		四	10	15	36	ロクロ石筒瓶、底部外側ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1556	根木		四	5.5	18.4	39.9	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1557	根木		四	5.5	18.8	39.4	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1558	根木		四	5.5	18.8	39.4	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1559	根木		四	5.5	18.8	39.4	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1560	根木		四	5.5	18.8	39.4	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1561	根木		四	5.5	18.8	39.4	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1562	根木		四	5.5	18.8	39.4	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1563	根木		四	5.5	18.8	39.4	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		
1564	根木		四	5.5	18.8	39.4	ロクロ石筒瓶、底部外側四輪ヘタリ後ナダ、見込み不方向ナダ		

名	性別	出生年月	西暦	西暦	西暦	西暦
1565 男		3 7.0	6.6	6.6	6.6	6.6
1566 女		3 6	-----	-----	-----	-----
1567 男		-----	7.6	4.5	4.5	4.5
1568 女		2 1.4	4.5	4.5	4.5	4.5
1569 男		2 7	25.6	25.6	25.6	25.6
1570 男		2 6.4	39.6	39.6	39.6	39.6
1571 女		2 6.4	39.6	39.6	39.6	39.6
1572 男		3 6.4	35	35	35	35
1573 女		2 6.5	32	32	32	32
1574 女		2 10.6	30.4	30.4	30.4	30.4
1575 男		3 21	14.6	14.6	14.6	14.6
1576 男		3 15.2	15.2	15.2	15.2	15.2
1577 男		-----	2.3	1.1	1.1	1.1
1578 男		2 5.5	31.6	30.2	30.2	30.2
1580 男		2 5.5	31.6	30.2	30.2	30.2
1581 男		2 5.5	31.6	30.2	30.2	30.2
1582 水		4 4.8	14.6	14.6	14.6	14.6
1583 水		4 3.0	4.8	4.8	4.8	4.8
1584 男		2 4	15	25.6	25.6	25.6
1585 男		2 9.0	12.1	12.1	12.1	12.1
1586 男		2 11.2	32.6	32.6	32.6	32.6
1587 男		2 1.1	14.6	14.6	14.6	14.6
1588 男		2 6.1	14.9	14.9	14.9	14.9
1589 男		2 6.4	12	12	12	12
1590 男		2 9.2	10.8	10.8	10.8	10.8
1591 男		3 3.2	17.5	17.5	17.5	17.5
1592 男		3 1.5	32.9	32.9	32.9	32.9
1593 男		3 3.9	14.2	27.6	27.6	27.6
1594 男		3 4.8	14.8	28.7	28.7	28.7
1595 男		3 5.5	15.6	29.6	29.6	29.6
1596 男		3 5.4	15.6	29.6	29.6	29.6
1597 男		3 3.9	15.8	28.8	28.8	28.8
1598 犬		4 1	17	17	17	17
1599 男		4 4.3	12.9	33.8	33.8	33.8
1600 男		4 6.5	11.6	38.6	38.6	38.6
1601 男		2 6.8	11.2	42	42	42
1602 男		2 4.4	14.2	25.2	25.2	25.2
1603 男		2 4.4	14.2	25.2	25.2	25.2
1604 男		2 2.2	15.4	16.4	16.4	16.4
1605 男		2 6.5	15.4	16.5	16.5	16.5
1606 男		4 8	15.4	16.5	16.5	16.5
1607 男		2 5.7	22.6	21.6	21.6	21.6
1608 男		3 4.4	17.8	16.2	16.2	16.2
1609 男		3 5	16.9	29	29	29
1610 男		3 4.4	16.6	28.6	28.6	28.6
1611 男		4 6.1	11	11	11	11
1612 犬		3 9.5	4.4	4.4	4.4	4.4
1613 女		3 5.0	31.4	31.4	31.4	31.4
1614 女		2 9.8	35.1	35.1	35.1	35.1
1615 上野		1 5.8	26.2	26.2	26.2	26.2
1616 鹿		2 1.9	3.6	3.6	3.6	3.6
1617 鹿		2 2.7	14	14	14	14
1618 鹿		1 4.2	15.9	26.6	26.6	26.6
1619 鹿		2 4.2	15.9	26.6	26.6	26.6
1620 鹿		2 4.2	15.9	26.6	26.6	26.6
1621 金		2 2.6	17.7	27.2	27.2	27.2
1622 鹿		2 6.2	18.6	33	33	33
1623 鹿		2 6.2	18.6	33	33	33
1624 金		2 6.2	18.6	33	33	33
1625 金		2 3.3	18.2	25	25	25
1626 里		4 2.3	16.1	14.2	14.2	14.2
1627 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1628 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1629 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1630 里		3 3.5	11.6	28	28	28
1631 里		2 5.3	17	17	17	17
1632 里		3 1.6	33.6	33.6	33.6	33.6
1633 里		3 1.6	33.6	33.6	33.6	33.6
1634 里		3 2.4	15.7	15.7	15.7	15.7
1635 里		4 2.3	16.1	14.2	14.2	14.2
1636 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1637 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1638 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1639 里		3 1.6	21.1	24.8	24.8	24.8
1640 里		2 3.3	11.8	28	28	28
1641 里		4 4.2	12.6	31.1	31.1	31.1
1642 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1643 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1644 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1645 里		3 2.7	15.6	15.6	15.6	15.6
1646 里		1 4	46	35	36.7	36.7
1647 里		3 4.2	18.6	30	30	30
1648 里		2 6.4	13.6	47.1	47.1	47.1
1649 里		2 3.2	22.6	26	26	26
1650 里		2 3.4	16.1	36.1	36.1	36.1
1651 里		3 1.6	16.1	36.1	36.1	36.1
1652 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1653 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1654 里		3 2.7	15.6	15.6	15.6	15.6
1655 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1656 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1657 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1658 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1659 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1660 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1661 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1662 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1663 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1664 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1665 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1666 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1667 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1668 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1669 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1670 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1671 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1672 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1673 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1674 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1675 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1676 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1677 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1678 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1679 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1680 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1681 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1682 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1683 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1684 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1685 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1686 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1687 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1688 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1689 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1690 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1691 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1692 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1693 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1694 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1695 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1696 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1697 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1698 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1699 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1700 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1701 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1702 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1703 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1704 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1705 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1706 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1707 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1708 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1709 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1710 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1711 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1712 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1713 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1714 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1715 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1716 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1717 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1718 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1719 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1720 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1721 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1722 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1723 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1724 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1725 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1726 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1727 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1728 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1729 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1730 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1731 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1732 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1733 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1734 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1735 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1736 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1737 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1738 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1739 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1740 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1741 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1742 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1743 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1744 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1745 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1746 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1747 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1748 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1749 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1750 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1751 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1752 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.6
1753 里		2 5.5	19.6	26.6	26.6	26.

No	種類	出生地	形式	高さ	口径	落水用具	駆除上位候補
1659	林蛙		1	3.5	11.6	29.7	セロ右回転、底部外側へタクツギ、見込み方角ナダ
1660	林蛙		2	8.7	12.6	26.5	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1661	林蛙		2	3.1	13.4	23.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1662	林蛙		2	3.5	13.2	26.5	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みナダ
1663	林蛙		2	2.7	12.7	24.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み方角ナダ
1664	林蛙		2	1.9	19.6	24.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み方角ナダ
1665	林蛙		3	3.6	11.8	30.5	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1666	林蛙		2	2.8	11.8	27.7	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1667	林蛙		2	5.1	11.6	26.7	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1668	林蛙		2	3.5+	15.4	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ候ナダ
1669	林蛙		2	8.7	34	26.4	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ候ナダ
1670	林蛙		2	4.1	12.2	32.3	セロ右回転、底部外側へタクツギのちナダ、見込み 方角のナダ
1671	林蛙		2	3.4	12.5	27.7	セロ右回転、底部外側へタクツギのちナダ、見込み 方角のナダ
1672	林蛙		2	3.6	12.6	27.7	セロ右回転、底部外側へタクツギのちナダ、見込み 方角のナダ
1673	林蛙		2	3.3	12.6	26.7	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み ピーク方向のナダ
1674	林蛙		2	8.1	12.6	26.7	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1675	林蛙		2	5.7	11.6	31.4	セロ右回転、底部外側へタクツギのちナダ、見込みヨコナダ
1676	林蛙		5	9.5	14.2	24.4	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1677	林蛙		5	5.3	13.5	24.4	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1678	林蛙		5	3.1	23	28.3	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方向のナダ
1679	林蛙		5	8.2	24	28.3	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方向のナダ
1680	林蛙		5	3.1	19.4	28	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方向のナダ
1681	林蛙		3	3.7	11.4	32.5	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ
1682	林蛙		3	3.2	11.6	22.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1683	牛筋哥頓杯		2	4	4.2	28.2	体外内対応：段の骨付脚腰アリ、直立小豆不定方向のヘラケメリ、 セロ右回転、底部外側へタクツギ
1684	II型		2	5.6	15.5	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ
1685	II型		3	2.6	16.8	15.5	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1686	III型		3	2.7	16.5	15.3	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1687	III型		3	2.3	16.5	15.3	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1688	III型		3	2.6	16.5	15.3	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1689	黑鳥		4	7.7	16.9	15.6	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1690	黑鳥		4	2.5	16.8	14.3	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1691	黑鳥		4	2.1	36	15.7	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1692	黑鳥		4	3	11.6	79.5	セロ右回転、底部外側へタクツギのちナダ、見込み 不定方向のナダ
1693	黑鳥		3	2.5	17.9	15.6	セロ右回転、底部外側へタクツギのちナダ、見込み 不定方向のナダ
1694	黑鳥		3	2.1	16	15.7	セロ右回転、底部外側へタクツギのちナダ、見込み 方向のナダ
1695	黑鳥		4	2.1	14	15.7	セロ右回転、底部外側へタクツギのちナダ、見込み 方向のナダ
1696	黑鳥		3	2.7	16.9	15.6	セロ右回転、底部外側へタクツギのちナダ、見込み 方向のナダ
1697	黑鳥		3	2.0+	16.6	15.6	セロ右回転、底部外側へタクツギのちナダ、見込み 方向のナダ
1698	黑鳥		3	2.4+	23	15.6	セロ右回転、底部外側へタクツギのちナダ、見込み 方向のナダ
1699	黙舌		3	4.6	22.8	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ候ナダ
1700	黙舌		4	1.7	27.5	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1701	黙舌		4	3.9	33.8	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1702	黙舌		1	2.9	8.2	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ、見込みナダ
1703	黙舌		1	2.1	17.4	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ、見込みナダ
1704	黙舌		2	2.4	16.9	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ、見込み方角のナダ
1705	黙舌		3	3.5	15.5	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ、見込み方角のナダ
1706	黙舌		4	2.7	26.2	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ、見込みヨコナダ
1707	黙舌		4	2.0+	26.4	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ、見込みヨコナダ
1708	黙舌		3	5.6	20.8	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1709	黙舌		3	1.6+	38.6	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1710	黙舌		2	3.5	17.6	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ、見込みヨコナダ
1711	黙舌		2	2.4	17.4	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ、見込みヨコナダ
1712	黙舌		2	5.7	19.4	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ、見込み 方向のナダ
1713	黙舌		2	2.6	12.2	—	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1714	黙舌		2	4.3	18.2	27.6	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 不定方向のナダ
1715	黙舌		2	4.5	17.2	26.2	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方向のナダ
1716	黙舌		2	3.5	16.8	26.8	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方向のナダ
1717	黙舌		2	4	16.4	24.4	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方向のナダ
1718	黙舌		2	5.5	25	23.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方向のナダ
1719	黙舌		2	6.1	25.1	23.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方向のナダ
1720	黙舌		2	3.9	13.2	25.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方向のナダ
1721	黙舌		2	5.7	19.4	25.6	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1722	黙舌		2	4.5	18.2	27.5	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1723	黙舌		2	4.1	14.8	27.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方向のナダ
1724	黙舌		2	3.7	14.8	25.9	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方向のナダ
1725	黙舌		1	4.5	12.6	26.9	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方向のナダ
1726	黙舌		1	4.1	11.4	37.7	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込みヨコナダ
1727	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1728	林蛙		1	4.1	15.6	28.3	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込みヨコナダ
1729	林蛙		1	4.1	15.6	28.3	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込みヨコナダ
1730	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1731	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1732	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1733	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1734	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1735	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1736	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1737	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1738	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1739	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1740	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1741	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1742	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1743	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1744	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1745	林蛙		1	4.1	16.6	28.1	セロ右回転、底部外側へタクツギ候日ナダ、見込み 不定方向のナダ
1746	林蛙		2	6	10.4	28.5	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 方角のナダ
1747	林蛙		2	4.5	9.1	40.5	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 多角的のナダ
1748	林蛙		3	3	16.2	**	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 多角的のナダ
1749	林蛙		3	1.8	15.6	**	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 多角的のナダ
1750	林蛙		3	2.3	15.1	**	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込み 多角的のナダ
1751	林蛙		3	5	15.4	35.7	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ
1752	林蛙		3	3.8	12.4	35.6	セロ右回転、底部外側へタクツギ候ナダ、見込みヨコナダ

No.	器種	出土遺構	式形	標高	口径	底面形状	測量および観察
1733	杯B		3. 4.6	10. 3	ロクロ石臼型、底部外縁へラクリ後ナジ		
1734	杯B		3. 3.5	—	—	ロクロ石臼型、底部外縁へラクリ後ナジ、見込み不定方向のナヂ	
1735	杯B		3. 2.4	14. 6	ロクロ石臼型、底部外縁へラクリ後ナジ、見込み不定方向のナヂ		
1736	杯B		3. 2.4	13. 9	ロクロ石臼型、底部外縁へラクリ後ナジ、見込み不定方向のナヂ		
1737	杯B		3. 2.2	13. 2	ロクロ石臼型、底部外縁へラクリ後ナジ、見込み不定方向のナヂ		
1738	杯B		3. 5.6	—	ロクロ石臼型、底部外縁へラクリ後ナジ		
1739	杯B		3. 4.5	11. 2	ロクロ石臼型、底部外縁へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ		
1740	杯B		3. 4.4	11	ロクロ石臼型、底部外縁へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ		
1741	杯B		3. 4	10. 6	ロクロ石臼型、底部外縁へラクリ後ナジ、見込み一定方向のナヂ		
1755	杯B		4. 1.1	18. 7	ロクロ石臼型、底部外縁へラクリ後ナジ、見込み一定方向のナヂ		
1760	杯B		4. 1.1	14. 6	ロクロ石臼型、人脊部外縁へラクリ後ナヂ、見込み不定方向のナヂ		
1764	杯B		2. 2	12. 6	ロクロ石臼型、人脊部外縁へラクリ後ナヂ、見込みヨコナヂ		
1765	杯B		4. 4.4	9. 9	ロクロ石臼型、人脊部外縁へラクリ後ナヂ、見込み不定方向のナヂ		
1766	杯B		4. 4.9	11. 8	ロクロ石臼型、人脊部外縁へラクリ後ナヂ、見込みヨコナヂ		
1767	杯B		2. 6.4	—	ロクロ石臼型、底部外縁へラクリ後ナヂ		
1768	杯B		4. 5.8	16. 4	ロクロ石臼型、底部外縁へラクリ後ナヂ、見込み一定方向のナヂ		
1769	被物置		3. 3.4	18. 6	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みナヂ		
1770	被物置		3. 6.2	18. 1	ロクロ石臼型、人脊部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ		
1771	被物置		3. 6.3	17. 2	ロクロ石臼型、人脊部外縲へラクリ後ナジ、見込み不定方向のナヂ		
1772	被物置		7. 2	17. 2	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込み一定方向のナヂ		
1773	被物置		4. 4	19. 1	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ		
1774	被物置		3. 5.4	10. 0	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ		
1775	被物置		3. 5.5	8. 6	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナヂ、見込み一定方向のナヂ		
1776	被物置		3. 5	15. 4	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込み不定方向のナヂ		
1777	被物置		3. 2.5	16. 6	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込み不定方向のナヂ		
1778	被物置		4. 0	19. 2	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みナヂ		
1779	被物置		4. 4.8	—	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1780	被物置		4. 4.8	19	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1781	盒		3. 6.7	15. 6	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1782	盒		7. 8	—	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込み一定方向のナヂ		
1783	盒		5. 2	—	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込み一定方向のナヂ		
1784	盒		1. 3.2	16	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ		
1785	盒		1. 2.5	19. 5	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みナヂ		
1786	盒		2. 4	17. 9	ロクロ石臼型、天井部外縲へラクリ後ヨコナヂ		
1787	盒		1. 9.3	10. 6	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1788	盒		1. 6.7	—	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1789	盒		1. 4.4	—	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1790	盒		3. 12.6	—	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1791	盒		3. 6.7	15. 6	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1792	盒		7. 8	—	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込み一定方向のナヂ		
1793	盒		5. 2	—	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込み一定方向のナヂ		
1794	盒		3. 1.6	11. 2	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1795	盒		3. 2.4	8. 6	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1796	盒		3. 2.1	—	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1797	盒		3. 4.1	—	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1798	碗B		3. 5.4	13. 7	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ		
1799	盒F		1. 9.7	—	内側底最もヨコナヂ、底部外縲へラクリ後ナジ、ロクロ石臼型		
1800	沫D		2. 9.0	29. 4	内側底最もヨコナヂ、ロクロ石臼型		
1801	盒		3. 7.9	11. 1	内側底最もヨコナヂ、ロクロ石臼型		
1802	盒A		3. 6.8	25. 0	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1803	内側底		3. 4.3	12	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1804	内側底		3. 4.1	—	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1805	内側底		3. 5.4	—	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ		
1806	内側底		3. 5.4	—	内側底最もヨコナヂ、底部外縲へラクリ後ナジ、ロクロ石臼型		
1807	内側底		3. 2	13	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ		
1808	内側底		3. 5	16	ロクロ石臼型、内側底最もヨコナヂ、ロクロ石臼型		
1809	内側底		3. 2	15	ロクロ石臼型、内側底最もヨコナヂ、ロクロ石臼型		
1810	内側底		3. 4.3	12	ロクロ石臼型、内外底最もヨコナヂ		
1811	外A		2. 7.9	23. 1	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ、底部外縲に「」の墨書きあり		
1812	外A		2	25. 2	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ、底部外縲に「」の墨書きあり		
1813	外A		2. 5.5	12	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ、底部外縲に「」の墨書きあり		
1814	外A		2. 5.5	10. 6	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ、底部外縲に「」の墨書きあり		
1815	外A		2. 5	10. 6	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ、底部外縲に「」の墨書きあり		
1816	外A		3. 1.4	14	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ		
1817	灰塗		3. 2.6	14. 7	天井部ヨコナヂ、底部外縲もヨコナヂあるが不明		
1818	灰塗		3. 1.6	—	ロクロ石臼型、底部外縲もヨコナヂあるが不明		
1819	灰塗		3. 2.7	—	ロクロ石臼型、底部外縲もヨコナヂあるが不明		
1820	外A		3. 9.2	13. 1	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ、底部外縲に「」の墨書きあり		
1821	外A		2	25. 2	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ、底部外縲に「」の墨書きあり		
1822	外A		2. 5.5	12	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ、底部外縲に「」の墨書きあり		
1823	外A		2. 5.5	10. 6	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ、底部外縲に「」の墨書きあり		
1824	外A		2. 5	10. 6	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ、底部外縲に「」の墨書きあり		
1825	外A		3. 1.4	14	ロクロ石臼型、底部外縲へラクリ後ナジ、見込みヨコナヂ		
1826	灰塗		3. 2.6	14. 7	天井部ヨコナヂ、底部外縲もヨコナヂあるが不明		
1827	灰塗		3. 1.6	—	ロクロ石臼型、底部外縲もヨコナヂあるが不明		
1828	外B		—	—	底部外縲に「」の墨書きあり		

表9. A地区出土器觀察表（平安～鎌倉時代）

No.	属別	種類	口径	底径	高さ	特徴	特徴	現存率	分類	地区	出土位置
2001	灰陶	杯	(11.6)	4.5	(4.7)			2/3	I	A	SD4
2002	灰陶	杯	15.8	5.5	6.7	底部斜面切り		2/3	AII	A	SD9
2003	灰陶	杯	8.2	1.9		筒状ハラ切		0	II	A	SD26
2004	灰陶	杯			6.7	底部斜面ハラ切			II	A	SD94
2005	灰陶	杯	15.8	5.5	6.7	底部斜面ハラ切		3/4	AII	a	SD22
2006	灰陶	杯	13.0	5.5	6.5	底部斜面ハラ切		2/3	AII	T	SD28
2007	灰陶	杯	(12.5)	5.7	6.5	底部斜面ハラ切		2/2	AII	b	SD15
2008	灰陶	杯	(12.6)	4.2	(7.3)	底部斜面ハラ切		2/4	AII	b	SD21
2009	灰陶	杯	(14.9)	5.4	(8.8)	底部斜面ハラ切		3/5	AII	b	SD26
2010	灰陶	杯	16.5	5.5	6.4	底部斜面切り	片口	3/4	AII	b	SD52
2011	灰陶	杯	(14.8)	5.6	7.1	底部斜面ハラ切		3/4	AII	b	SD65
2012	灰陶	杯	(14.7)	4.8	6.8	底部斜面切り		c/5	AII	b	SD55
2013	灰陶	瓶			8.5					A	SD6
2014	灰陶	瓶	(7.2)	1.5						A	SD6
2015	灰陶	瓶	(6.0)	1.0						A	SD6
2016	灰陶	杯	15.3	5.2	5.3	底部斜面切り		1/4	AII	b	SD26
2017	灰陶	杯	15.8	5.5	5.1	底部斜面切り		1/3	AII	b	SD95
2018	灰陶	杯			5.6	底部斜面切り			II	A	SD35
2019	灰陶	杯	13.3	3.4	7.4	底部斜面ハラ切		1/4	AII	T	SD95
2020	灰陶	杯	(13.9)	3.4	7.6	底部斜面ハラ切		1/4	AII	T	SD95
2021	灰陶	杯	(13.6)	3.5	8.2	底部斜面ハラ切		1/4	AII	T	SD95
2022	灰陶	杯	(13.8)	3.5	8.2	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD95
2023	灰陶	杯	(13.6)	3.5	8.2	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD95
2024	灰陶	杯	16.3	3.2	6.8	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2025	灰陶	杯	14.8	3.0	9.2	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2026	灰陶	杯	14.4	3.0	8.4	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2027	灰陶	杯	(14.2)	3.1	8.2	底部斜面ハラ切	近縁二号	1/4	AII	b	SD65
2028	灰陶	杯	(13.7)	2.8	(5.8)	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2029	灰陶	杯	(13.6)	3.0	(7.2)	底部斜面ハラ切	ハラ切	1/3	AII	b	SD65
2030	灰陶	杯	(15.2)	3.5	16.0	底部斜面ハラ切	斜縁	1/2	AII	b	SD65
2031	灰陶	杯	(13.6)	3.6	6.6	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2032	灰陶	杯	(13.5)	3.3	(6.8)	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2033	灰陶	杯	(14.2)	3.6	(5.9)	底部斜面ハラ切	要書(□)	1/4	AII	b	SD65
2034	灰陶	杯	(13.6)	3.7	6.5	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2035	灰陶	杯	(13.4)	3.4	6.2	底部斜面ハラ切		1/5	AII	T	SD45
2036	灰陶	杯	(14.4)	2.8	(8.2)	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD45
2037	灰陶	杯	(15.7)	3.2	6.6	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD45
2038	灰陶	杯	15.6	3.5	6.3	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD45
2039	灰陶	杯	15.6	3.5	6.3	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD45
2040	灰陶	杯	(12.9)	2.9	(8.0)	底部斜面ハラ切		1/3	AII	b	SD65
2041	灰陶	杯	(12.8)	3.2	6.5	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2042	灰陶	杯	(12.8)	4.1	6.5	底部斜面ハラ切		3/4	AII	T	SD65
2043	灰陶	杯	(12.8)	3.6	(7.1)	底部斜面ハラ切		1/3	AII	b	SD65
2044	灰陶	杯	(13.4)	3.4	6.2	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2045	灰陶	杯	(14.2)	3.4	7.5	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2046	灰陶	杯	(13.8)	3.8	6.8	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2047	灰陶	杯	(13.8)	3.8	6.8	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2048	灰陶	杯	(13.5)	3.8	6.6	底部斜面ハラ切		1/3	AII	b	SD65
2049	灰陶	杯	(12.8)	3.6	6.6	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2050	灰陶	杯	15.2	3.5	6.7	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2051	灰陶	杯	(12.4)	4.1	6.5	底部斜面ハラ切		3/4	AII	T	SD65
2052	灰陶	杯	(12.8)	3.7	6.1	底部斜面ハラ切		1/3	AII	b	SD65
2053	灰陶	杯	(12.9)	4.2	(7.0)	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2054	灰陶	杯	(14.1)	4.1	7.0	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2055	灰陶	杯	(16.0)	4.2	(6.5)	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2056	灰陶	杯	(17.0)	4.2	(7.0)	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2057	灰陶	杯	(14.0)	4.8	(6.4)	底部斜面ハラ切	要書(△)	1/6	AII	b	SD65
2058	灰陶	杯	(14.0)	5.6	7.2	底部斜面ハラ切		1/5	AII	b	SD65
2059	灰陶	杯	(12.8)	4.9	5.8	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2060	灰陶	杯	(12.4)	4.9	5.8	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2061	灰陶	杯	(13.4)	4.6	(6.7)	底部斜面ハラ切	ハラ配	1/2	AII	T	SD65
2062	灰陶	杯	(14.4)	3.7	(7.1)	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2063	灰陶	杯	(15.0)	4.2	(7.0)	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2064	灰陶	杯	(14.1)	4.1	7.0	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2065	灰陶	杯	(16.0)	4.2	(6.5)	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2066	灰陶	杯	(15.8)	5.6	7.2	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2067	灰陶	杯	(16.3)	5.6	7.2	底部斜面ハラ切		1/2	AII	b	SD65
2068	灰陶	杯	(15.8)	5.6	7.2	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2069	灰陶	杯	(15.8)	5.6	7.2	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2070	灰陶	杯	(15.8)	5.6	7.2	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2071	灰陶	杯	(12.7)					1/2	AII	b	SD65
2072	灰陶	杯						1/4	AII	b	SD65
2073	灰陶	杯						1/4	AII	b	SD65
2074	灰陶	杯						1/4	AII	b	SD65
2075	灰陶	杯	14.9	5.6	(7.9)			1/5	AII	b	SD65
2076	灰陶	杯	(14.9)	6.9	(6.0)			1/4	AII	b	SD65
2077	灰陶	杯	16.2	6.9	6.5			1/4	AII	b	SD65
2078	灰陶	杯	(16.0)	6.1	7.8			1/4	AII	b	SD65
2079	灰陶	杯	(17.4)	6.2	7.3			1/4	AII	b	SD65
2080	灰陶	杯	(16.0)	5.8	(7.8)			1/4	AII	b	SD65
2081	灰陶	杯	(17.4)	6.0	8.6			1/4	AII	b	SD65
2082	灰陶	杯	(16.3)	5.6	7.6			1/2	AII	b	SD65
2083	灰陶	杯						1/2	B	a	SD65
2084	灰陶	杯						1/2	B	a	SD65
2085	灰陶	杯						1/2	B	a	SD65
2086	灰陶	杯						1/2	B	a	SD65
2087	灰陶	杯						1/2	A	a	SD65
2088	灰陶	杯						1/2	A	a	SD65
2089	灰陶	杯						1/2	A	a	SD65
2090	灰陶	杯						1/2	A	a	SD65
2091	灰陶	杯	(13.7)	3.7	(7.2)	底部斜面ハラ切		1/4	AII	b	SD65
2092	灰陶	杯	(15.0)	5.7	(6.9)	底部斜面ハラ切	ハラ配	1/4	AII	b	SD65
2093	灰陶	杯	(15.0)	4.7	(6.9)	底部斜面ハラ切	ハラ配	1/3	AII	T	SD65
2094	灰陶	杯	(14.3)	5.0	(7.7)	底部斜面ハラ切	底部斜面	1/2	AII	b	SD65
2095	灰陶	杯	(16.4)	6.4	6.4	底部斜面		1/2	AII	b	SD65
2096	灰陶	杯						1/2	AII	b	SD65
2097	灰陶	杯						1/2	AII	b	SD65
2098	灰陶	杯						1/2	AII	b	SD65
2099	灰陶	杯						1/2	AII	b	SD65
2100	灰陶	杯						1/2	AII	b	SD65
2101	灰陶	杯						1/2	AII	b	SD65
2102	灰陶	杯						1/2	AII	b	SD65
2103	灰陶	杯						1/2	AII	b	SD65
2104	灰陶	杯						1/2	AII	b	SD65

表10. B地区土器觀察表（平安～鎌倉時代）

名	科	属	口器	形态	触角	翅	带	寄生	性	分布	种	分布地	出产地	
2147	直脉蒂	拟	(9.0)	4.5	(3.6)	或黄或白粉红色	浅黄色	不明	♂	1/4	B	B	S3	
2148	上脉蒂	拟	(5.6)	—	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/4	B	B	S3	
2149	金脉蒂	拟	5.4	—	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/2	B	B	S3	
2150	金脉蒂	拟	5.4	—	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/2	B	B	S3	
2151	单脉蒂	拟	(5.2)	2.8	(5.4)	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/2	A1	a	S3	
2152	单脉蒂	拟	(5.2)	5.1	(6.9)	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/2	A1	a	S3	
2153	单脉蒂	拟	(5.0)	5.9	(5.9)	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/2	A2	a	S3	
2154	单脉蒂	拟	—	—	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/2	A2	a	S3	
2155	单脉蒂	拟	(6.0)	2.7	(5.3)	—	—	—	♂	♂	♂	B	S3	
2156	白斑	拟	(6.0)	2.7	(5.3)	—	—	—	♂	♂	♂	B	S3	
2157	白斑	拟	6.3	7.1	7.5	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/3	B	B	S3	
2158	白脉蒂	拟	(5.6)	3.3	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/3	c	c	S3	
2159	上脉蒂	拟	(5.2)	2.7	(5.2)	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/3	c	c	S3	
2160	上脉蒂	拟	(5.4)	1.0	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/3	B	B	S4	
2161	上脉蒂	拟	(6.0)	1.3	>2	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/3	B	B	S4	
2162	上脉蒂	拟	(6.2)	1.7	(5.2)	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/3	B	B	S4	
2163	上脉蒂	拟	(6.4)	2.0	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/3	B	B	S4	
2164	下脉蒂	拟	(3.2)	—	—	浅褐色	浅黄色	♂	♂	1/5	B	B	S4	
2165	下脉蒂	拟	(1.9)	5.7	2.4	深褐色	浅黄色	♂	♂	1/2	T	T	S4	
2166	单脉蒂	拟	6.3	8.5	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/2	T	T	S4	
2167	双脉	拟	6.2	—	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/2	D	D	S4	
2168	黑脉	拟	—	—	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/2	D	D	S4	
2169	黑脉	拟	—	—	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/2	D	D	S4	
2170	黑脉	拟	15.6	5.8	5.4	—	—	—	♂	♂	♂	B	S4	
2171	须脚蒂	拟	(9.0)	1.7	(4.6)	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/4	A1	a	S5	
2172	须脚蒂	拟	(16.6)	4.5	6.6	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/4	A2	a	S5	
2173	须脚蒂	拟	(16.2)	4.9	5.2	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/4	A2	a	S5	
2174	须脚蒂	拟	(16.2)	6.0	(6.5)	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/4	A2	a	S5	
2175	须脚蒂	拟	(7.0)	1.6	(4.2)	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/5	A2	a	S4	
2176	须脚蒂	拟	(6.5)	1.9	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/5	A2	a	S4	
2177	须脚蒂	拟	(6.4)	1.3	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/5	A2	a	S4	
2178	白脉	拟	(18.2)	—	—	浅褐色	浅黄色	♂	♂	1/5	T	T	S5	
2179	须脚蒂	拟	15.6	4.5	4.6	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/5	A2	a	S5	
2180	须脚蒂	拟	15.6	3.2	(4.4)	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/5	A2	a	S5	
2181	须脚蒂	拟	15.6	3.4	1.2	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/5	A2	a	S5	
2182	十脉蒂	拟	—	—	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/5	A2	a	S5	
2183	须脚蒂	拟	—	—	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/5	A2	a	F155	
2184	须脚蒂	拟	(15.4)	5.3	(6.0)	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/4	A2	a	P232	
2185	十脉蒂	拟	(6.6)	1.5	—	暗褐色	浅黄色	♂	♂	1/2	T	T	S2.1	

No.	学名	種性	口数	説明	調査	成木		特徴	種類	種子率	分類	実生	出芽率
						高さ	葉						
2185	南無翁	風	7.9	2.0	4.4			被毛細胞葉切り		1/2	A5	B	SD 1
2186	南無翁	風	(6.2)	4.7	(5.6)			被毛細胞葉切り		1/3	A5	B	SD 1
2187	鳳尾	風	-1.6	4.8	4.4			被毛葉		定形	B	B	SD 2
2188	南無翁	風	(5.6)	6.6	(5.2)			被毛細胞葉切り	2余の比紙	1/3	A5	B	SD 2
2189	南無翁	風	6.6	5.3	6.7			被毛葉		1/5	A5	B	SD 6
2190	南無翁	風	6.6	5.2	6.1			被毛細胞葉切り	被毛上部	1/2	A5	B	SD 6
2191	白眉	風	17.8					二葉上部		1/2	■	B	SD 5
2192	土御番	風	7.8	1.1	4.6			被毛細胞葉切り	被毛不規	1/2	B	B	SD 1
2193	瓦屋	風	9.3	1.8				被毛葉		1/2	B	B	SD 7
2194	南無翁	風	(6.4)	1.7				被毛葉	上部被毛葉	1/5	A5	B	SD 7
2195	南無翁	風	(6.8)	2.9	(3.2)			被毛細胞葉切り		1/3	B	B	SD 5
2196	土御番	風	8.8	1.5				被毛葉		1/2	B	b	SD 5
2197	瓦屋	風	(10.0)	5.3	(5.2)			被毛葉	(被葉・ジダヤダ父)	1/2	B	B	SD 5
2198	瓦屋	風	8.8	1.8				被毛葉		1/2	B	B	SD 5
2199	瓦屋	風	(12.0)	1.1	1.6			被毛葉		1/2	B	B	SD 5
2200	土御番	風	(7.6)	1.1	1.6			被毛細胞葉切り	被毛不規	1/4	C	B	SD 1
2201	土御番	風	7.8	1.4	3.0			被毛細胞葉切り	被毛不規	1/2	B	b	SD 1
2202	土御番	風	9.4	1.9				被毛葉		1/2	B	B	SD 1
2203	土御番	風	12.2					被毛葉		1/4	B	B	SD 1
2204	瓦屋	日	(8.3)					被毛葉		1/4	B	b	SE 2
2205	南無翁	日	7.8	1.8	5.2			被毛細胞葉切り		1/4	A1	B	SE 2
2206	南無翁	日	10.0	4.9	5.0			被毛細胞葉切り		1/4	A1	B	SE 2
2207	南無翁	日	(15.0)	5.9	3.0			被毛葉		1/2	A2	B	SE 2
2208	南無翁	日	7.8	3.2	5.9			被毛葉		1/2	B	b	SE 2
2209	瓦屋	日	(4.6)					被毛葉	(被葉・ジダヤダ父)	1/4	B	b	SE 2
2210	南無翁	日	7.6	1.7	5.5			被毛細胞葉切り	被毛不規	1/2	A1	B	SE 2
2211	南無翁	日	(7.6)	1.8	(4.4)			被毛細胞葉切り		1/2	A1	B	SE 2
2212	南無翁	日	7.6	2.2	4.0			被毛細胞葉切り		1/2	A1	B	SE 2
2213	南無翁	日	7.6	2.6	4.5			被毛細胞葉切り	被葉上部	1/2	A1	B	SE 2
2214	南無翁	日	(11.6)	5.3	(2.0)			被毛葉		1/4	A1	B	SE 2
2215	南無翁	日	(10.0)	4.9	4.0			被毛葉		1/5	A2	B	SE 2
2216	南無翁	日	11.6	6.0	4.0			被毛葉		1/2	A1	B	SE 2
2217	南無翁	日	11.6	6.0	4.3			被毛葉		1/2	A1	B	SE 2
2218	南無翁	日	15.0					被毛葉		1/4	B	b	SE 2
2219	土御番	日	8.7	1.5	3.2			被毛細胞葉切り		1/3	T	B	SD 2
2220	土御番	日	(8.8)	1.6	(6.0)			被毛細胞葉切り	被葉不規	1/3	T	B	SD 2
2221	瓦屋	日	(10.2)	1.2	(5.4)			被毛細胞葉切り		1/4	T	B	SD 2
2222	土御番	日	8.6	1.5	3.0			被毛葉		1/5	T	B	SD 2
2223	土御番	日	8.6	2.0				被毛葉		1/5	T	B	SD 2
2224	瓦屋	日	9.2	1.7				被毛葉		1/5	T	B	SD 2
2225	南無翁	日	(7.2)	2.1	(4.5)			被毛細胞葉切り		1/3	A1	B	SD 2
2226	瓦屋	日	14.6	2.9	4.5			被葉(種子・ルーパ)	1条の花簇	1/3	T	B	SD 2
2227	南無翁	日	(7.3)	2.0	(4.3)			被毛細胞葉切り		1/3	A1	B	SD 2
2228	瓦屋	日	16.2	3.4	5.9			被毛細胞葉切り		2/3	A2	B	SD 2
2229	土御番	日	9.5	2.5	7.2			被毛細胞葉切り	被葉不規	1/3	T	B	SD 2
2230	土御番	日	9.5	2.5	6.8			被毛葉		1/2	T	B	SD 2
2231	土御番	日	9.0	1.5	6.2			被毛葉		1/2	T	B	SD 2
2232	土御番	日	9.0	1.5	6.3			被毛葉		1/2	T	B	SD 2
2233	土御番	日	(8.8)	1.5	(6.7)			被毛葉		1/3	T	B	SD 2
2234	土御番	日	9.0	1.7	7.0			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	SD 2
2235	土御番	日	9.0	1.7	6.5			被葉(種子)	被葉不規	1/4	T	B	SD 2
2236	土御番	日	9.0	1.7	6.5			被葉(種子)	被葉不規	1/4	T	B	SD 2
2237	土御番	日	10.4	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	SD 2
2238	土御番	日	9.8	1.5	7.2			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	SD 2
2239	土御番	日	9.8	1.5	7.2			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	SD 2
2240	土御番	日	9.8	1.5	7.2			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	SD 2
2241	土御番	日	9.8	1.5	7.2			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	SD 2
2242	土御番	日	9.8	1.5	7.2			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	SD 2
2243	瓦屋	日	8.1	1.5				被葉(種子)		3/4	B	B	KD 2
2244	瓦屋	日	9.4	1.6	7.2			被葉(種子)	被葉不規	1/2	B	b	KD 2
2245	瓦屋	日	(9.4)	2.1	(6.5)			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2246	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2247	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2248	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2249	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2250	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2251	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2252	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2253	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2254	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2255	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2256	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2257	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2258	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2259	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2260	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/3	T	B	KD 2
2261	南無翁	日	(14.0)	2.6	(7.2)			被葉(種子)	被葉不規	1/2	I	B	SD 2
2262	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/2	I	B	SD 2
2263	南無翁	日	10.0	2.0	7.1			被葉(種子)	被葉不規	1/2	I	B	SD 2
2264	黑色土御番	日	(16.0)	6.5	7.0			被葉(種子)	被葉不規	1/2	I	B	SD 2
2265	黑色土御番	日	16.0	6.5	7.0			被葉(種子)	被葉不規	1/2	I	B	SD 2
2266	瓦屋	日	7.7	1.8				被葉(種子)		1/2	I	B	SD 2
2267	瓦屋	日	(8.2)	1.5				被葉(種子)		1/2	I	B	SD 2
2268	瓦屋	日	8.2	1.4				被葉(種子)		1/2	I	B	SD 2
2269	瓦屋	日	8.5	1.8				被葉(種子)		1/2	I	B	SD 2
2270	瓦屋	日	8.5	1.8				被葉(種子)		1/2	I	B	SD 2
2271	瓦屋	日	8.5	1.8				被葉(種子)		1/2	I	B	SD 2
2272	瓦屋	日	9.2	2.1				被葉(種子)		1/2	I	B	SD 2
2273	瓦屋	日	9.1	1.7				被葉(種子)		1/2	I	B	SD 2
2274	瓦屋	日	(8.5)	2.0				被葉(種子)		1/2	I	B	SD 2
2275	瓦屋	日	9.4	1.6				被葉(種子)		1/2	I	B	SD 2
2276	瓦屋	日	9.4	1.6				被葉(種子)		1/2	I	B	SD 2
2277	瓦屋	日	(7.7)	2.4				被葉(種子)		1/2	I	B	SD 2
2278	瓦屋	日	(5.4)	2.5	(3.2)			被葉(種子)		1/4	I	B	SD 2

No.	種別	種類	中国	新石器	周代	秦漢	隋唐	宋	成 形	特 性	残存率	分類	南向	北向位置
2279	瓦器	瓶	6.4	2.5	4.3	—	—	—	直口筒形，肩部不规则	直口	1/2	B	北向	
2280	瓦器	瓶	(6.7)	2.1	(5.5)	—	—	—	直口筒形，腹壁小斜	直口	1/4	B	北向	
2281	瓦器	瓶	(4.8)	5.0	(6.0)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/4	B	北向	朝向右
2282	瓦器	瓶	(5.4)	5.1	(6.0)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/3	B	北向	朝向左
2283	瓦器	瓶	5.0	2.0	4.7	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/2	B	北向	朝向右
2284	瓦器	瓶	7.2	2.1	5.1	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	2/4	A1	B	北向
2285	瓦器	瓶	6.5	2.1	4.3	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	2/5	A1	B	北向
2286	瓦器	瓶	8.0	2.2	6.1	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/3	A1	B	北向
2287	瓦器	瓶	(7.6)	1.9	(4.3)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/5	A1	B	北向
2288	瓦器	瓶	(7.4)	2.0	(4.3)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/5	A1	B	北向
2289	瓦器	瓶	(7.6)	2.7	(5.4)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/5	A1	B	北向
2290	瓦器	瓶	(7.6)	1.8	(6.7)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突，腹壁压垂	直口	1/3	A1	B	北向
2291	瓦器	瓶	7.5	1.8	4.3	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/1	A1	B	北向
2292	瓦器	瓶	5.5	1.5	4.0	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/1	A1	B	北向
2293	瓦器	瓶	16.0	2.2	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2294	瓦器	瓶	(6.7)	1.8	(6.0)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/1	A1	B	北向
2295	瓦器	瓶	(6.8)	1.9	(5.8)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/4	A1	B	北向
2296	瓦器	瓶	9.8	1.9	5.8	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/4	A1	B	北向
2297	瓦器	瓶	9.8	2.8	4.3	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/2	A1	B	北向
2298	瓦器	瓶	(9.0)	2.3	(5.4)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/2	A1	B	北向
2299	瓦器	瓶	8.8	1.9	4.4	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/1	A1	B	北向
2300	瓦器	瓶	6.0	1.5	4.0	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/1	A1	B	北向
2301	瓦器	瓶	5.5	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2302	瓦器	瓶	6.0	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2303	瓦器	瓶	(12.7)	5.2	4.2	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/3	A2	T	3
2304	瓦器	瓶	(6.1)	6.1	6.2	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	重久	A2	T	3
2305	瓦器	瓶	15.6	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2306	瓦器	瓶	11.5	3.2	5.6	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/2	A2	B	北向
2307	瓦器	瓶	(5.6)	5.7	(4.7)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/2	A2	B	北向
2308	瓦器	瓶	12.0	4.0	6.2	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	2/5	A2	B	北向
2309	瓦器	瓶	9.5	5.6	4.8	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/2	A2	B	北向
2310	瓦器	瓶	(14.9)	3.3	(4.6)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/4	A2	B	北向
2311	瓦器	瓶	(15.9)	5.9	5.8	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/5	A2	B	北向
2312	瓦器	瓶	(5.1)	5.1	(6.5)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/4	A2	B	北向
2313	瓦器	瓶	(5.6)	6.6	(6.4)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/4	A2	B	北向
2314	瓦器	瓶	(5.1)	6.7	(6.1)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/3	A2	B	北向
2315	瓦器	瓶	(5.6)	6.5	(6.0)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/6	A2	B	北向
2316	瓦器	瓶	6.0	5.6	6.5	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/4	A2	B	北向
2317	瓦器	瓶	5.0	5.0	5.0	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/5	A2	B	北向
2318	瓦器	瓶	15.2	4.7	5.5	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/3	A2	B	北向
2319	瓦器	瓶	(17.0)	4.7	(6.0)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/3	A2	B	北向
2320	瓦器	瓶	(15.6)	4.9	(6.4)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/3	A2	B	北向
2321	瓦器	瓶	6.4	4.8	6.3	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	3/4	A2	B	北向
2322	瓦器	瓶	(5.8)	4.9	(6.0)	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/4	A2	B	北向
2323	瓦器	瓶	6.0	10.5	8.4	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	1/4	A2	B	北向
2324	瓦器	瓶	8.5	5.2	6.6	—	—	—	直口筒形，肩部稍突	直口	3/4	A2	B	北向
2325	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2326	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2327	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2328	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2329	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2330	白器	瓶	(39.4)	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2331	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2332	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2333	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2334	白器	瓶	(39.9)	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2335	白器	瓶	(39.9)	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2336	白器	瓶	(39.8)	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2337	白器	瓶	(39.8)	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2338	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	—	口	1/1	B	北向	
2339	白器	瓶	(15.1)	5.9	5.5	—	—	—	中空筒、底扩口形	中空	1/1	B	北向	
2340	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	中空筒、底扩口形	中空	1/1	B	北向	
2341	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	中空筒、底扩口形	中空	1/1	B	北向	
2342	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	中空筒、底扩口形	中空	1/1	B	北向	
2343	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	中空筒、底扩口形	中空	1/1	B	北向	
2344	白器	瓶	(31.1)	1.8	(5.1)	—	—	—	中空筒、底扩口形	中空	1/4	B	北向	
2345	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	中空筒、底扩口形	中空	1/1	B	北向	
2346	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	中空筒、底扩口形	中空	1/1	B	北向	
2347	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	中空筒、底扩口形	中空	1/1	B	北向	
2348	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	中空筒、底扩口形	中空	1/1	B	北向	
2349	白器	瓶	—	—	—	—	—	—	中空筒、底扩口形	中空	1/1	B	北向	
2350	青白器	盒	5.8	2.2	2.8	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/7	B	北向	
2351	青白器	盒	—	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/7	B	北向	
2352	青白器	盒	—	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/5	B	北向	
2353	青白器	盒	—	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/5	B	北向	
2354	青白器	盒	—	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/5	B	北向	
2355	青白器	盒	—	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/5	B	北向	
2356	青白器	盒	—	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/5	B	北向	
2357	青白器	盒	(13.8)	1.5	(6.6)	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/3	T	C	P5.5
2358	青白器	盒	(13.5)	1.6	(6.5)	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/3	T	C	P5.5
2359	青白器	盒	13.8	2.3	6.0	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	T	C	P5.5
2360	青白器	盒	13.9	2.6	(6.7)	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/3	T	C	P5.5
2361	青白器	盒	13.8	2.9	7.9	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	T	C	P5.5
2362	青白器	盒	13.8	2.9	2.3	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	T	C	P5.5
2363	青白器	盒	(13.0)	3.0	(5.5)	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	T	C	P5.5
2364	青白器	盒	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	T	C	P5.5	
2365	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/3	B	C	P107.5	
2366	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2367	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2368	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2369	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2370	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2371	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2372	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2373	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2374	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2375	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2376	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2377	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2378	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2379	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2380	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2381	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2382	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2383	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2384	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2385	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2386	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2387	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2388	青白器	杯	—	—	—	—	—	弧形内斜口	弧形	1/2	B	C	P107.5	
2389	青白器	杯	—	—	—	—								

No	種別	鉢径	口径	底面	高さ	網目	成形	特徴	埋蔵年	分類	地区	出土位置
2463	陶器	瓶	15.6	5.3	(6.3)		施錐刃鉢面切り		3~4	A2	Ⅱ	C 陶器第
2464	陶器	瓶	14.0	5.6	5.8		施錐刃鉢面切り		1~2	A2	Ⅰ	C 陶器第
2465	陶器	瓶	15.6	4.8	5.5		施錐刃鉢面切り		1~2	A2	Ⅰ	C 陶器第
2466	陶器	瓶	15.6	5.1	(6.4)		施錐刃鉢面切り		1~4	A2	Ⅰ	C 陶器第
2467	陶器	瓶	15.6	5.1	5.5		施錐刃鉢面切り		1~2	A2	Ⅰ	C 陶器第
2468	陶器	瓶	15.6	4.8	5.8		施錐刃鉢面切り		1~2	A2	Ⅰ	C 陶器第
2469	陶器	瓶	15.6	5.2	5.2		施錐刃鉢面切り		1~2	A2	Ⅰ	C 陶器第
2470	陶器	瓶	15.0	5.1	(6.0)		施錐刃鉢面切り		1~3	A2	Ⅰ	C 陶器第
2471	陶器	瓶	15.4	4.8	6.3		施錐刃鉢面切り		1~2	A2	Ⅰ	C 陶器第
2472	陶器	瓶	15.4	5.2	(8.2)		施錐刃鉢面切り	高台付	1~4	A2	Ⅰ	C 陶器第
2473	陶器	瓶	19.4						1~5			C 陶器第
2474	陶器	瓶							1~6			C 陶器第
2475	陶器	瓶	(9.9)	5.2	(4.0)				1~7			C 陶器第
2476	陶器	瓶	(11.6)	5.7	(6.0)				1~8			C 陶器第
2477	白磁	瓶										C 陶器第
2478	白磁	瓶										C 陶器第
2479	白磁	瓶										C 陶器第
2480	白磁	瓶										C 陶器第
2481	白磁	瓶										C 陶器第
2482	白磁	瓶										C 陶器第
2483	白磁	瓶										C 陶器第
2484	白磁	瓶										C 陶器第
2485	白磁	瓶							1~3			C 陶器第
2486	白磁	瓶							1~2			C 陶器第
2487	白磁	瓶							1~2			C 陶器第
2488	白磁	瓶							1~3			C 陶器第
2489	白磁	瓶							1~4			C 陶器第
2490	白磁	瓶							1~5			C 陶器第
2491	白磁	瓶							1~6			C 陶器第
2492	白磁	瓶							1~7			C 陶器第
2493	白磁	瓶							1~8			C 陶器第
2494	白磁	瓶							1~9			C 陶器第
2495	白磁	瓶							1~10			C 陶器第
2496	白磁	瓶							1~11			C 陶器第
2497	白磁	瓶							1~12			C 陶器第
2498	白磁	瓶							1~13			C 陶器第
2499	白磁	瓶							1~14			C 陶器第
2500	白磁	瓶							1~15			C 陶器第
2501	白磁	瓶							1~16			C 陶器第
2502	白磁	瓶							1~17			C 陶器第
2503	白磁	瓶							1~18			C 陶器第
2504	白磁	瓶							1~19			C 陶器第
2505	白磁	瓶							1~20			C 陶器第
2506	白磁	瓶							1~21			C 陶器第
2507	白磁	瓶							1~22			C 陶器第
2508	白磁	瓶							1~23			C 陶器第
2509	白磁	瓶							1~24			C 陶器第
2510	白磁	瓶							1~25			C 陶器第
2511	白磁	瓶							1~26			C 陶器第
2512	白磁	瓶							1~27			C 陶器第
2513	白磁	瓶							1~28			C 陶器第
2514	白磁	瓶							1~29			C 陶器第
2515	白磁	瓶							1~30			C 陶器第
2516	白磁	瓶							1~31			C 陶器第
2517	白磁	瓶							1~32			C 陶器第
2518	白磁	瓶							1~33			C 陶器第
2519	白磁	瓶							1~34			C 陶器第
2520	白磁	瓶							1~35			C 陶器第
2521	白磁	瓶							1~36			C 陶器第
2522	白磁	瓶							1~37			C 陶器第
2523	白磁	瓶							1~38			C 陶器第
2524	白磁	瓶							1~39			C 陶器第
2525	白磁	瓶							1~40			C 陶器第
2526	白磁	瓶							1~41			C 陶器第
2527	白磁	瓶							1~42			C 陶器第
2528	白磁	瓶							1~43			C 陶器第
2529	白磁	瓶							1~44			C 陶器第
2530	白磁	瓶							1~45			C 陶器第
2531	白磁	瓶							1~46			C 陶器第
2532	白磁	瓶							1~47			C 陶器第
2533	白磁	瓶							1~48			C 陶器第
2534	白磁	瓶							1~49			C 陶器第
2535	白磁	瓶							1~50			C 陶器第
2536	白磁	瓶							1~51			C 陶器第
2537	白磁	瓶							1~52			C 陶器第
2538	白磁	瓶							1~53			C 陶器第
2539	白磁	瓶							1~54			C 陶器第
2540	白磁	瓶							1~55			C 陶器第
2541	白磁	瓶							1~56			C 陶器第
2542	白磁	瓶							1~57			C 陶器第
2543	白磁	瓶							1~58			C 陶器第
2544	白磁	瓶							1~59			C 陶器第
2545	白磁	瓶							1~60			C 陶器第
2546	白磁	瓶							1~61			C 陶器第
2547	白磁	瓶							1~62			C 陶器第
2548	白磁	瓶							1~63			C 陶器第
2549	白磁	瓶							1~64			C 陶器第
2550	白磁	瓶							1~65			C 陶器第
2551	白磁	瓶							1~66			C 陶器第
2552	白磁	瓶							1~67			C 陶器第
2553	白磁	瓶							1~68			C 陶器第
2554	白磁	瓶							1~69			C 陶器第
2555	白磁	瓶							1~70			C 陶器第
2556	白磁	瓶							1~71			C 陶器第
2557	白磁	瓶							1~72			C 陶器第
2558	白磁	瓶							1~73			C 陶器第
2559	白磁	瓶							1~74			C 陶器第
2560	白磁	瓶							1~75			C 陶器第
2561	白磁	瓶							1~76			C 陶器第
2562	白磁	瓶							1~77			C 陶器第
2563	白磁	瓶							1~78			C 陶器第
2564	白磁	瓶							1~79			C 陶器第
2565	白磁	瓶							1~80			C 陶器第
2566	白磁	瓶							1~81			C 陶器第
2567	白磁	瓶							1~82			C 陶器第
2568	白磁	瓶							1~83			C 陶器第
2569	白磁	瓶							1~84			C 陶器第
2570	白磁	瓶							1~85			C 陶器第
2571	白磁	瓶							1~86			C 陶器第
2572	白磁	瓶							1~87			C 陶器第
2573	白磁	瓶							1~88			C 陶器第
2574	白磁	瓶							1~89			C 陶器第
2575	白磁	瓶							1~90			C 陶器第
2576	白磁	瓶							1~91			C 陶器第
2577	白磁	瓶							1~92			C 陶器第
2578	白磁	瓶							1~93			C 陶器第
2579	白磁	瓶							1~94			C 陶器第
2580	白磁	瓶							1~95			C 陶器第
2581	白磁	瓶							1~96			C 陶器第
2582	白磁	瓶							1~97			C 陶器第
2583	白磁	瓶							1~98			C 陶器第
2584	白磁	瓶							1~99			C 陶器第
2585	白磁	瓶							1~100			C 陶器第
2586	白磁	瓶							1~101			C 陶器第
2587	白磁	瓶							1~102			C 陶器第
2588	白磁	瓶							1~103			C 陶器第
2589	白磁	瓶							1~104			C 陶器第
2590	白磁	瓶							1~105			C 陶器第
2591	白磁	瓶							1~106			C 陶器第
2592	白磁	瓶							1~107			C 陶器第
2593	白磁	瓶							1~108			C 陶器第
2594	白磁	瓶							1~109			C 陶器第
2595	白磁	瓶							1~110			C 陶器第
2596	白磁	瓶							1~111			C 陶器第
2597	白磁	瓶							1~112			C 陶器第
2598	白磁	瓶							1~113			C 陶器第
2599	白磁	瓶							1~114			C 陶器第
2600	白磁	瓶							1~115			C 陶器第
2601	白磁	瓶							1~116			C 陶器第
2602	白磁	瓶							1~117			C 陶器第
2603	白磁	瓶							1~118			C 陶器第
2604	白磁	瓶							1~119			C 陶器第
2605	白磁	瓶							1~120			C 陶器第
2606	白磁	瓶							1~121			C 陶器第
2607	白磁	瓶							1~122			C 陶器第
2608	白磁	瓶							1~123			C 陶器第
2609	白磁	瓶							1~124			C 陶器第
2610	白磁	瓶							1~125			C 陶器第
2611	白磁	瓶							1~126			C 陶器第
2612	白磁	瓶							1~127			C 陶器第
2613	白磁	瓶							1~128			C 陶器第
2614	白磁	瓶							1~129			C 陶器第
2615	白磁	瓶							1~130			C 陶器第
2616	白磁	瓶							1~131		</	

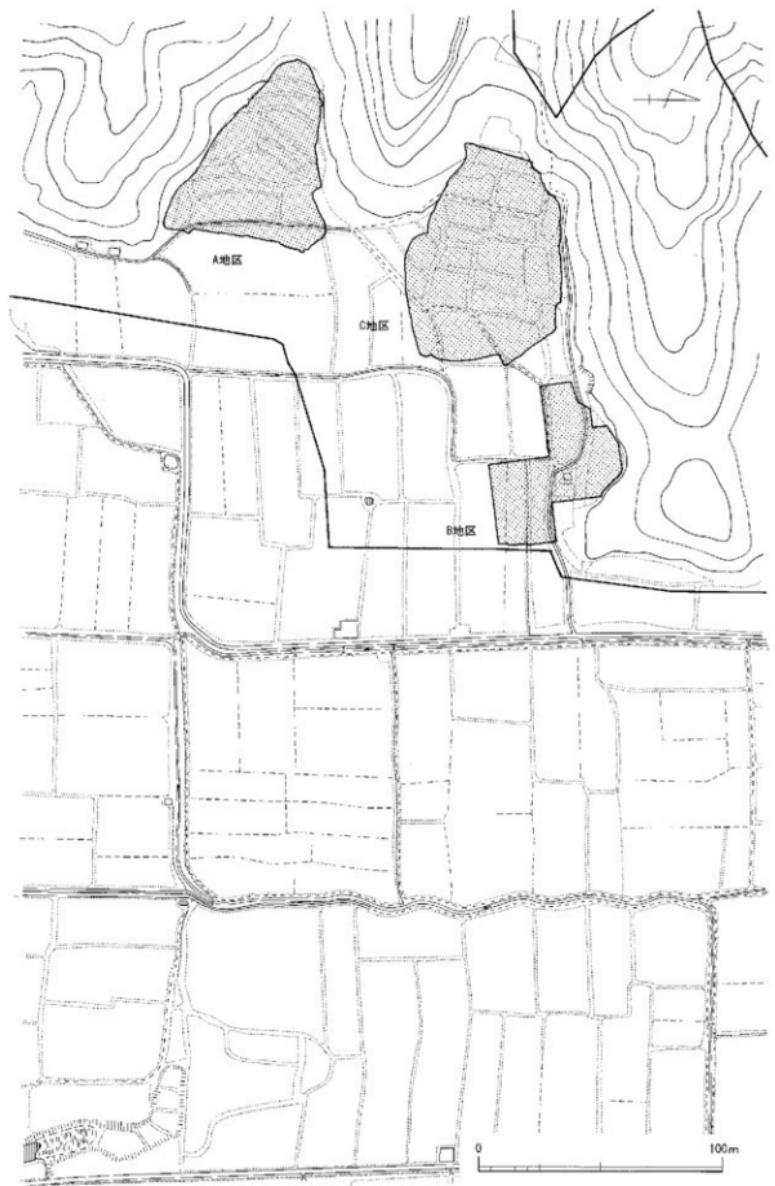
表13. 石器集計表

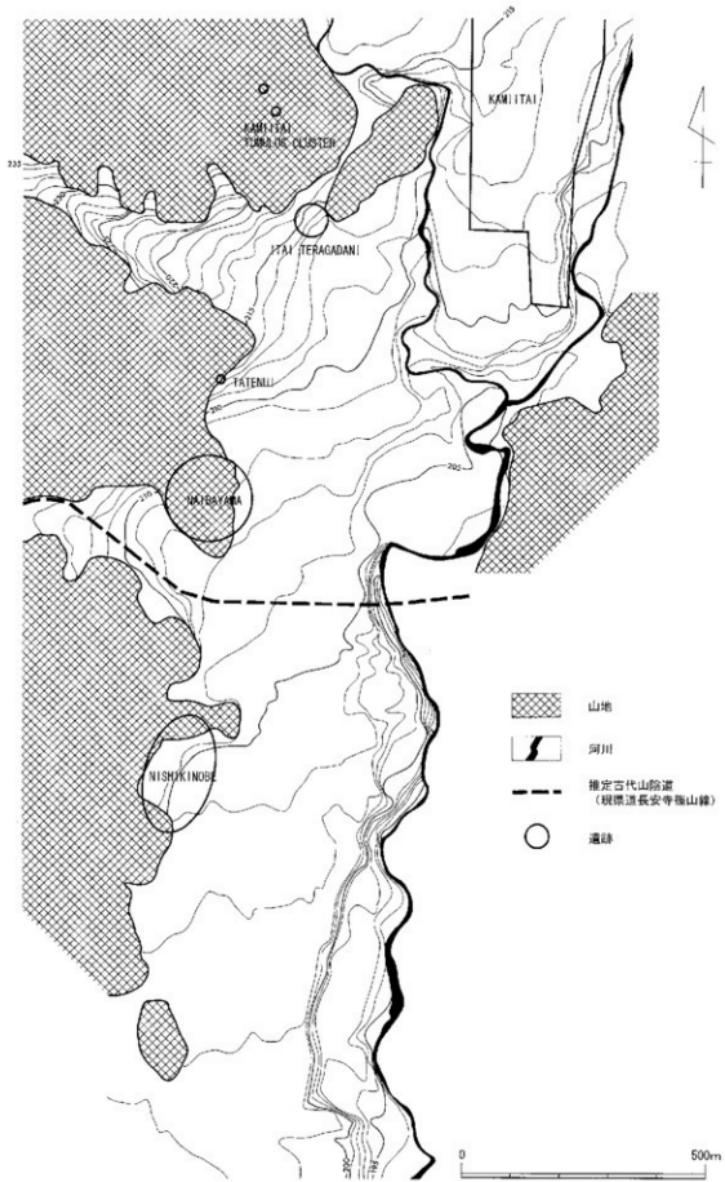
表14. 石器一覽

No.	遺物名	地区	出土位置	石材
S131	石器	A	瓦舍場	灰白色灰岩
S132	砾石	C	瓦舍場	灰黑色灰岩
S133	砾石	B	瓦舍場	灰黑色灰岩
S134	砾石	B	瓦舍場	灰白色灰岩
S135	砾石	D	瓦舍場	灰白色灰岩
S136	砾石	B	瓦舍場	灰白色灰岩
S137	砾石	C	F256壁上	砾石
S138	砾石	B	不明	灰白色灰岩
S139	砾石	C	瓦舍場	灰白色灰岩
S140	砾石	C	瓦舍場	灰白色灰岩

No.	遺物名	地区	出土位置	石材
S141	石器	A	瓦舍場	砂岩
S142	砾石	C	S252壁上	砾石
S143	砾石	B	S202	砾石
S144	砾石	A	P0792	砾石?
S145	砾石	C	不明	砾石?
S146	砾石	B	瓦舍場	砾石
S147	砾石	A	瓦舍場	砾石?
S148	砾石	C	瓦舍場	砾石
S149	砾石	C	S155壁上	砾石

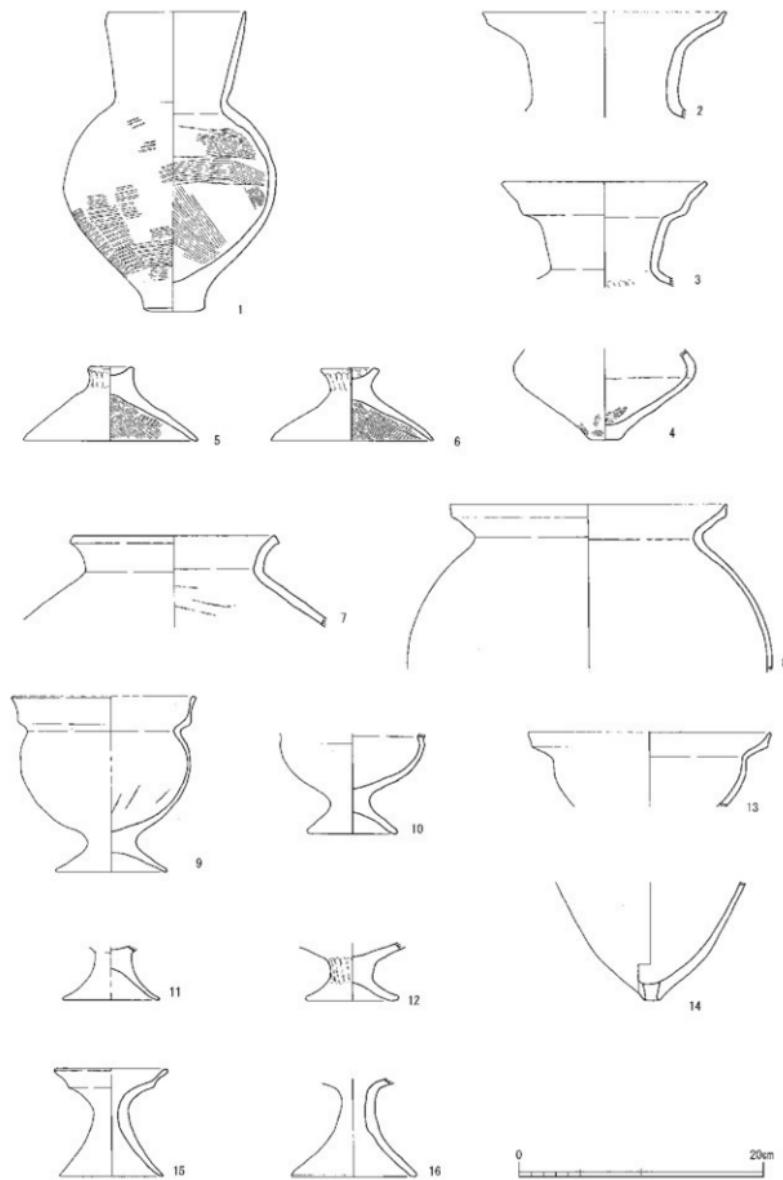
図 版

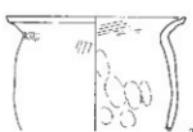
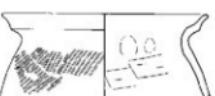
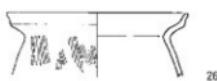
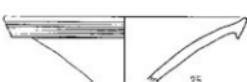
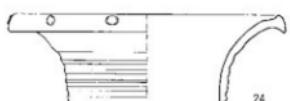
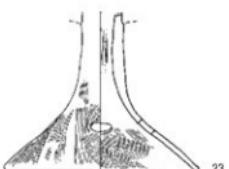
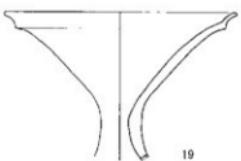
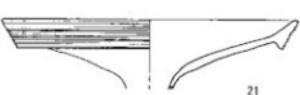
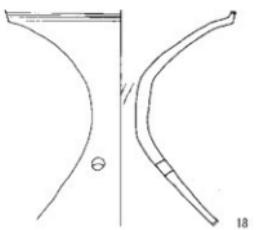
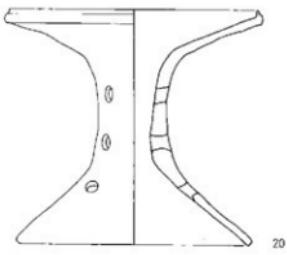
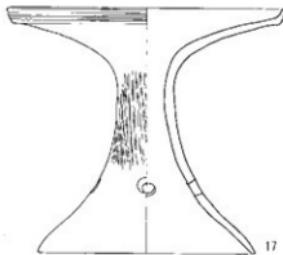


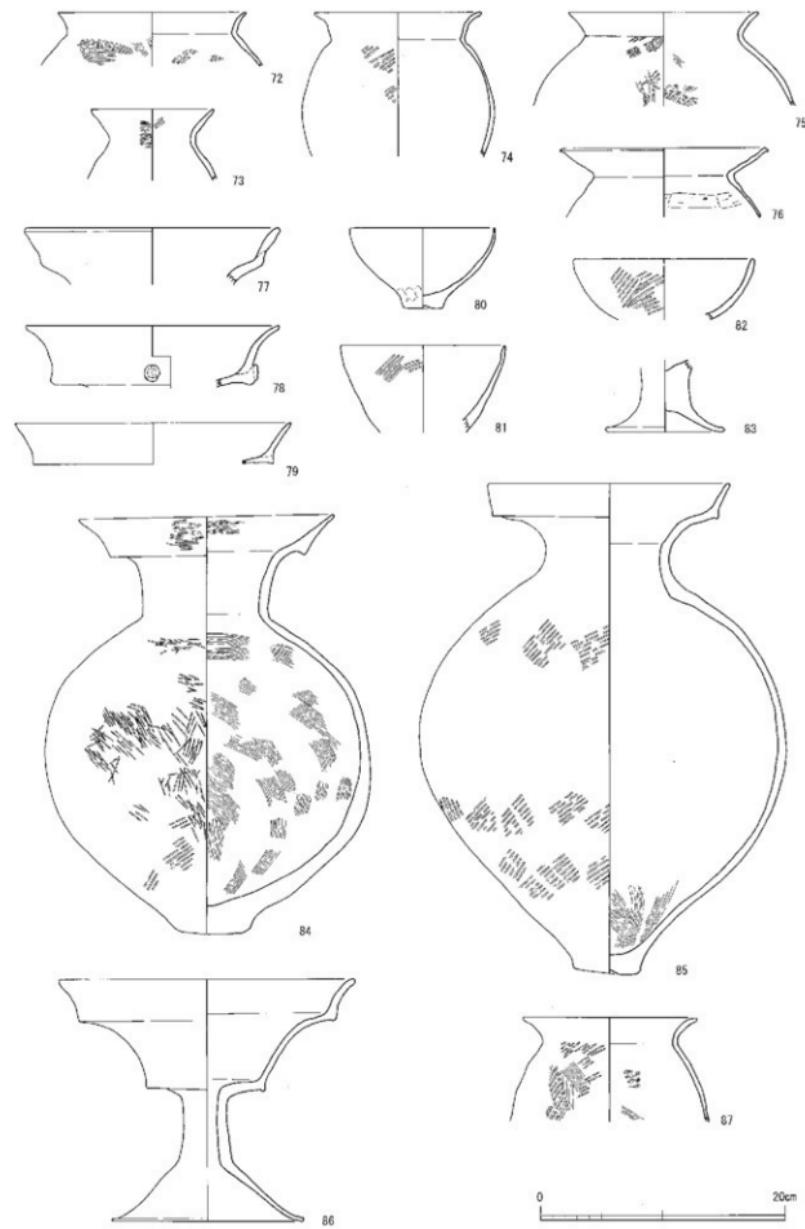


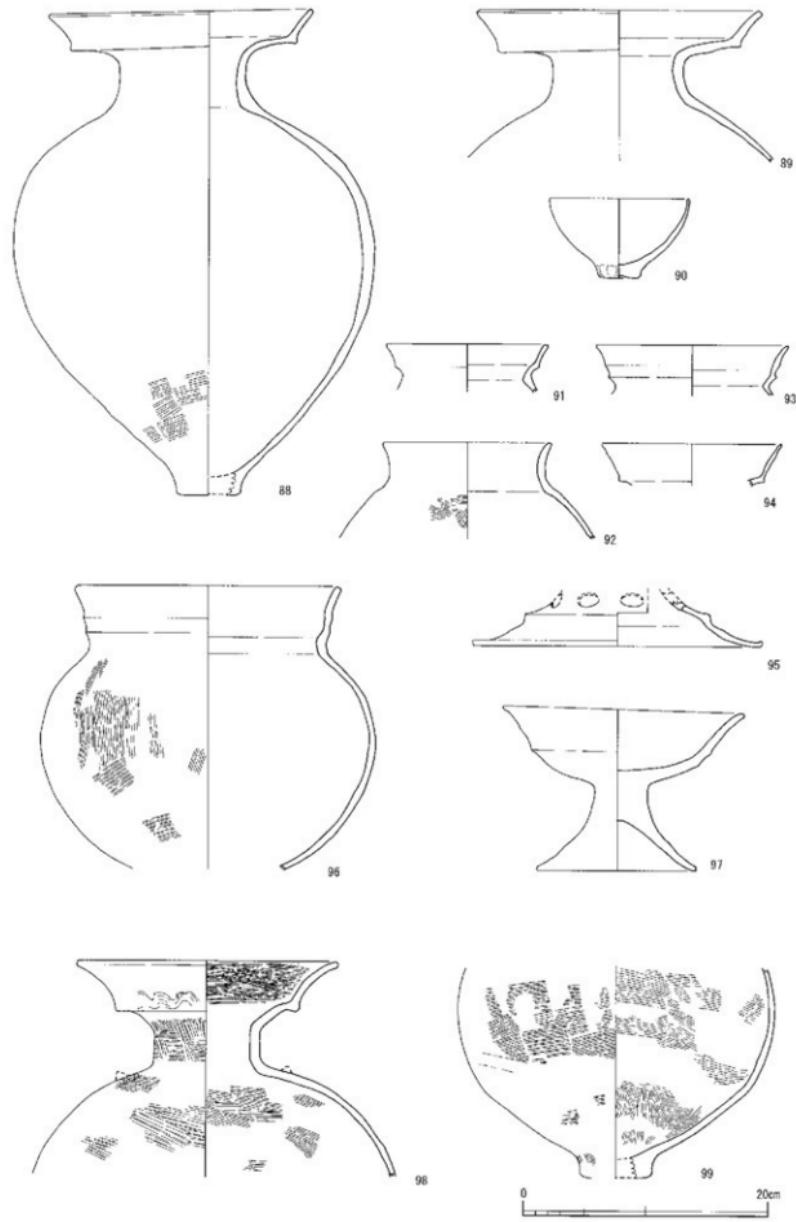


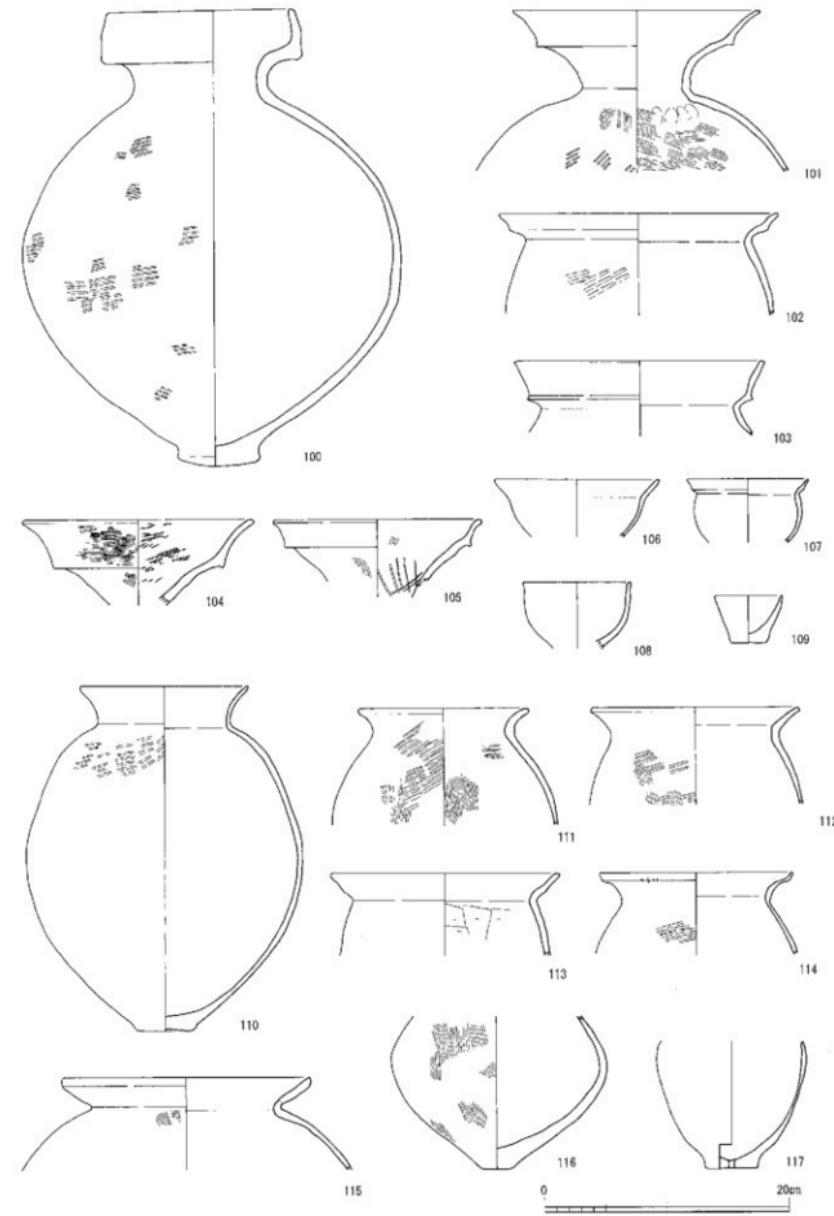


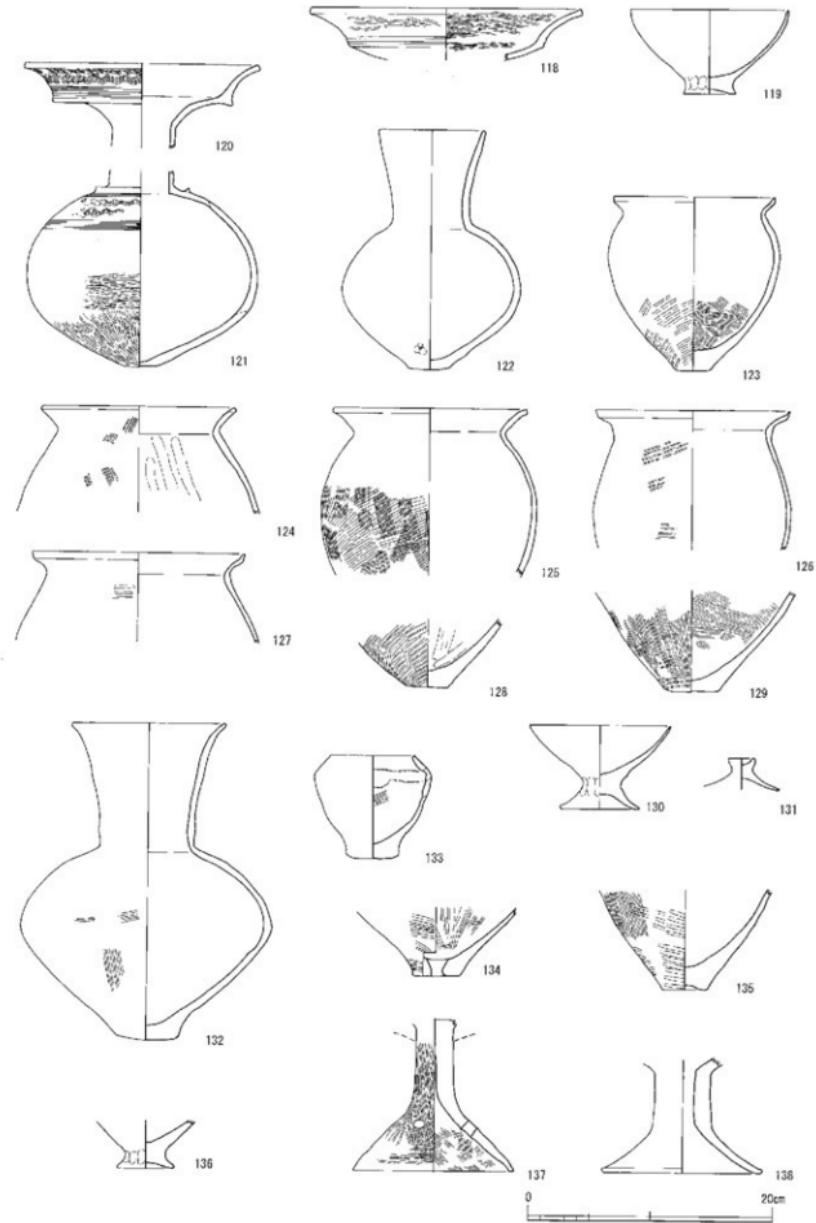


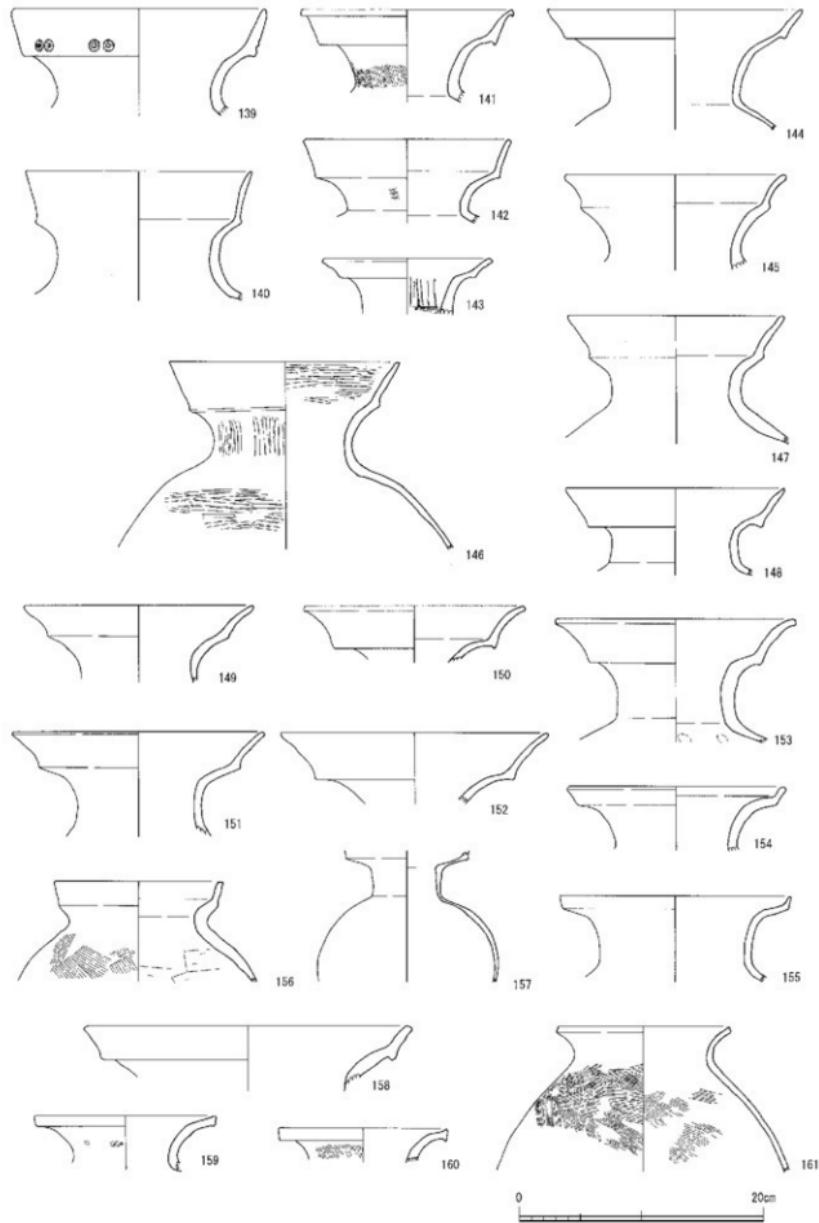


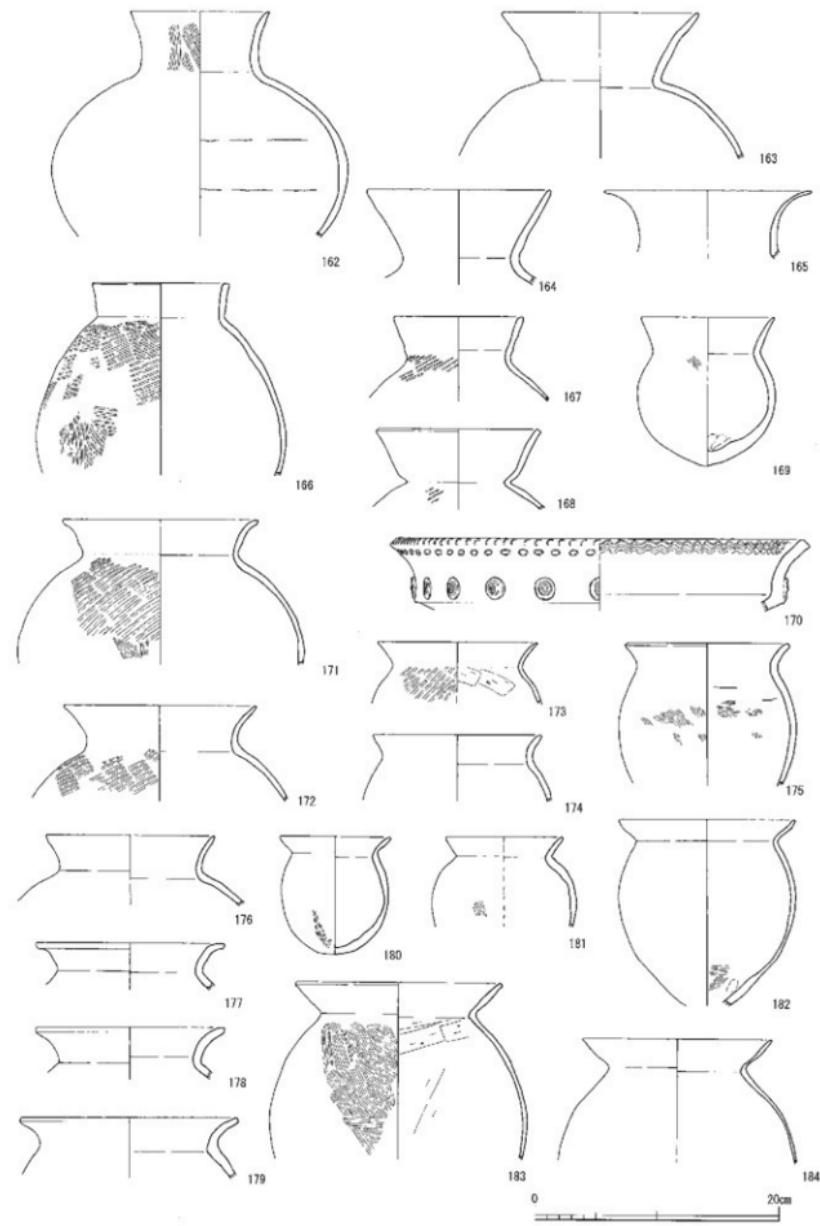






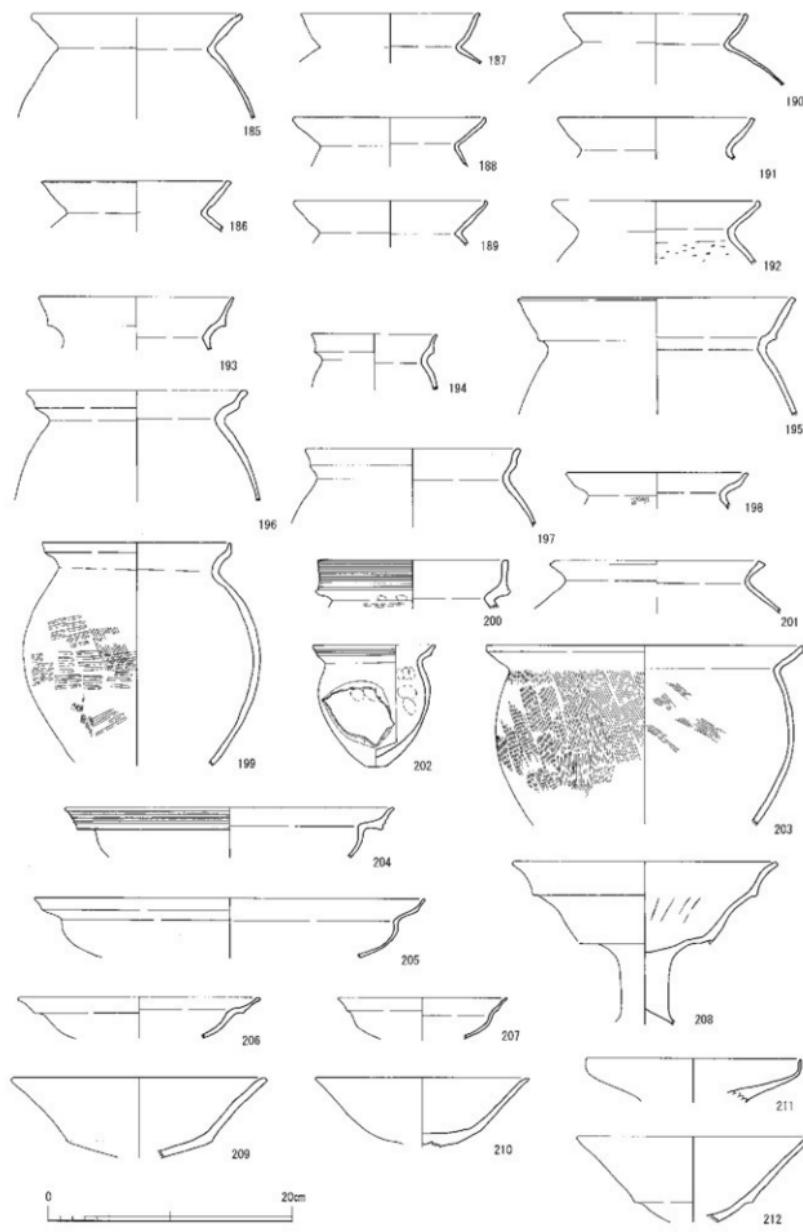


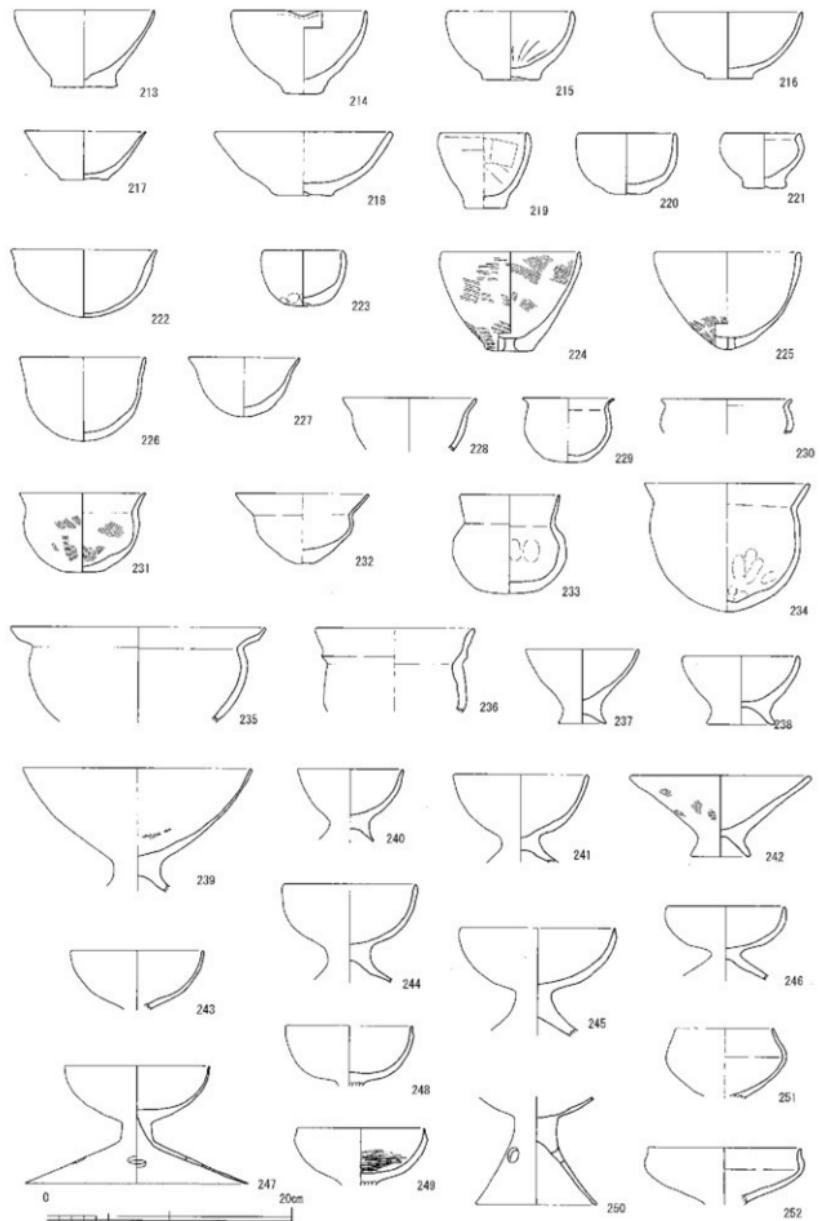


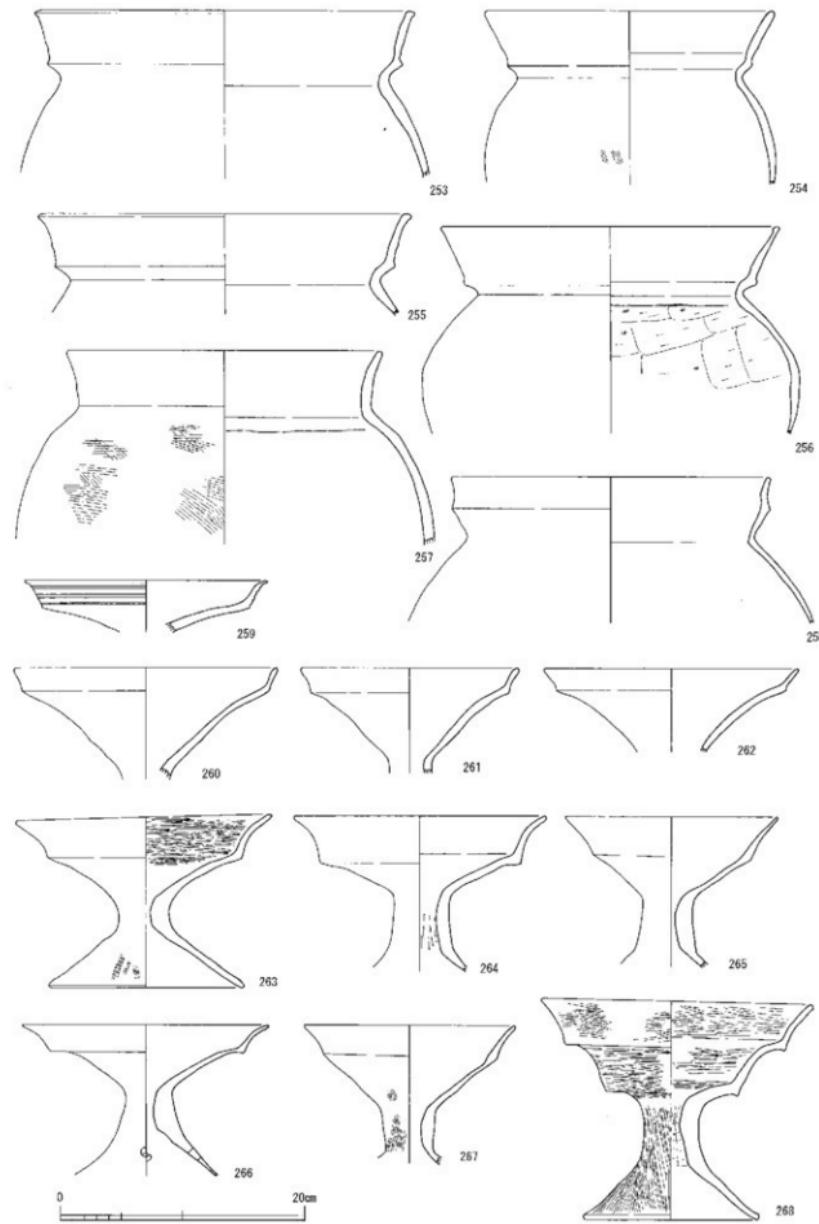


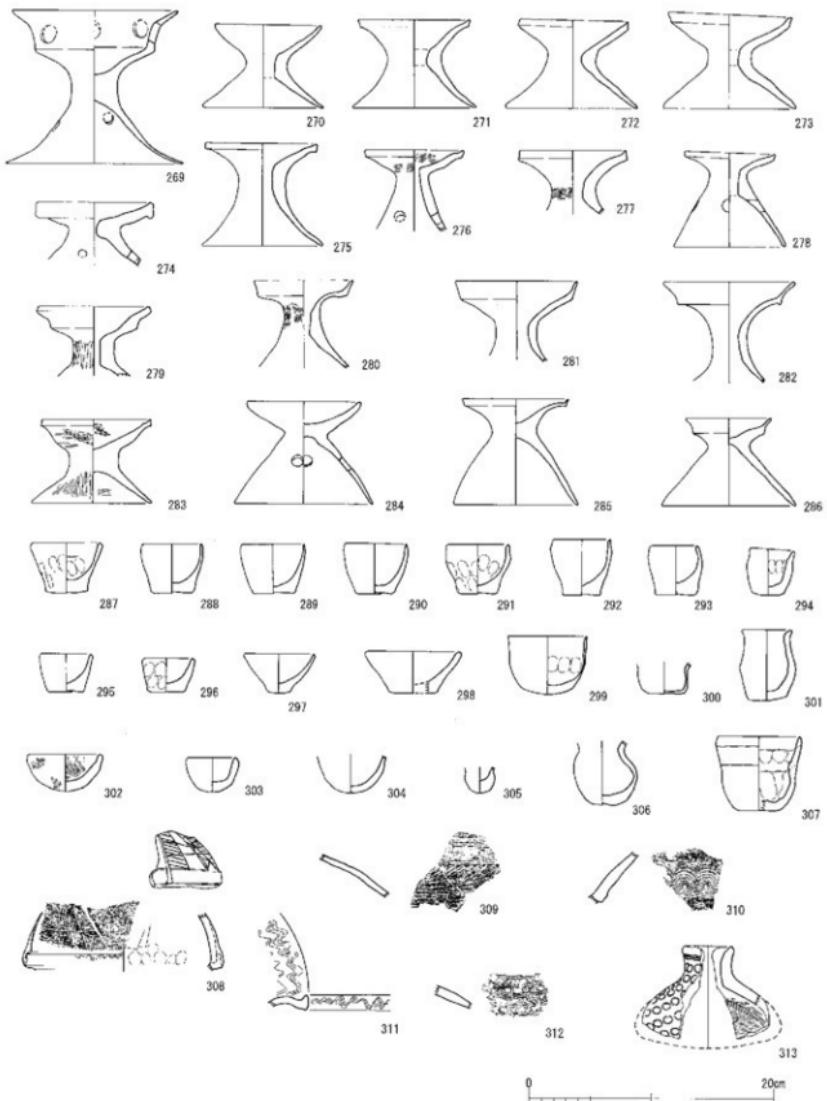
0

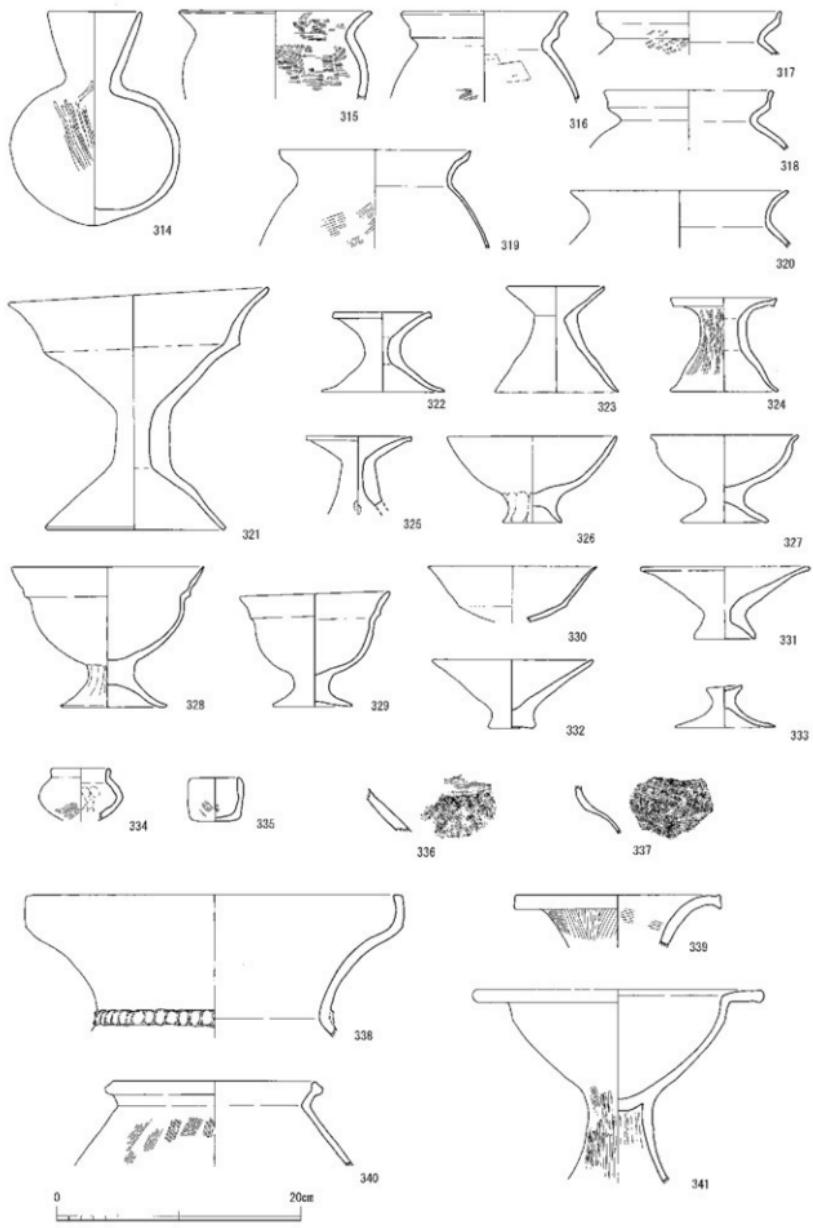
20mm

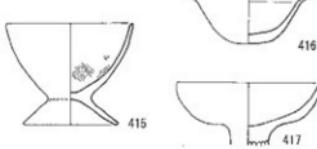
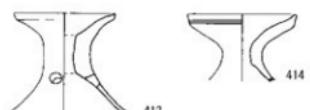
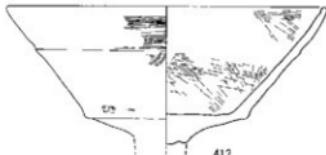
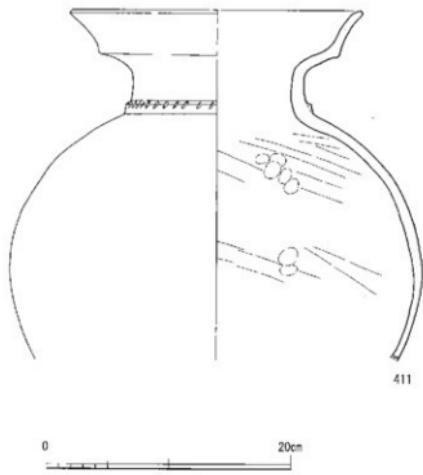
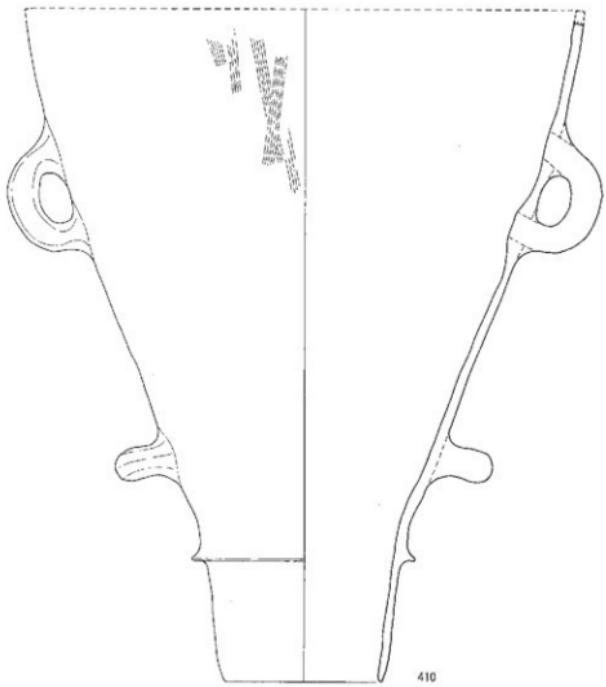


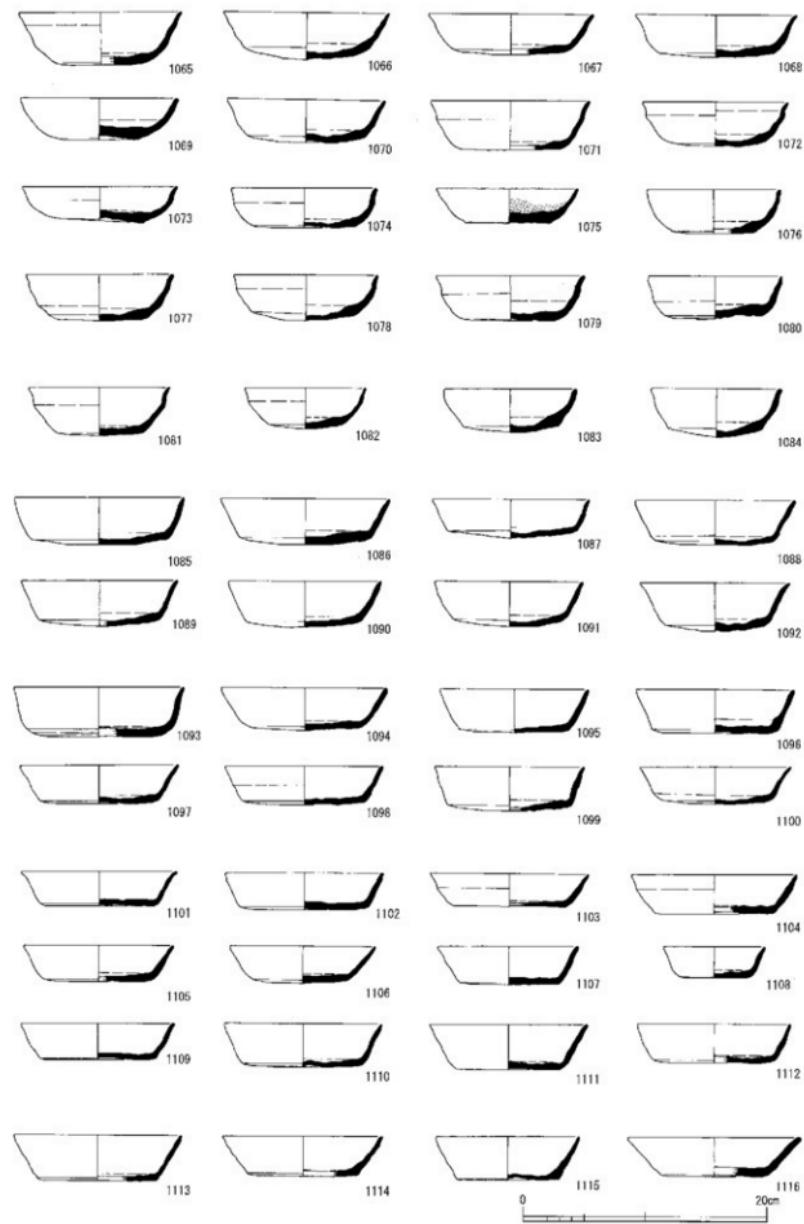


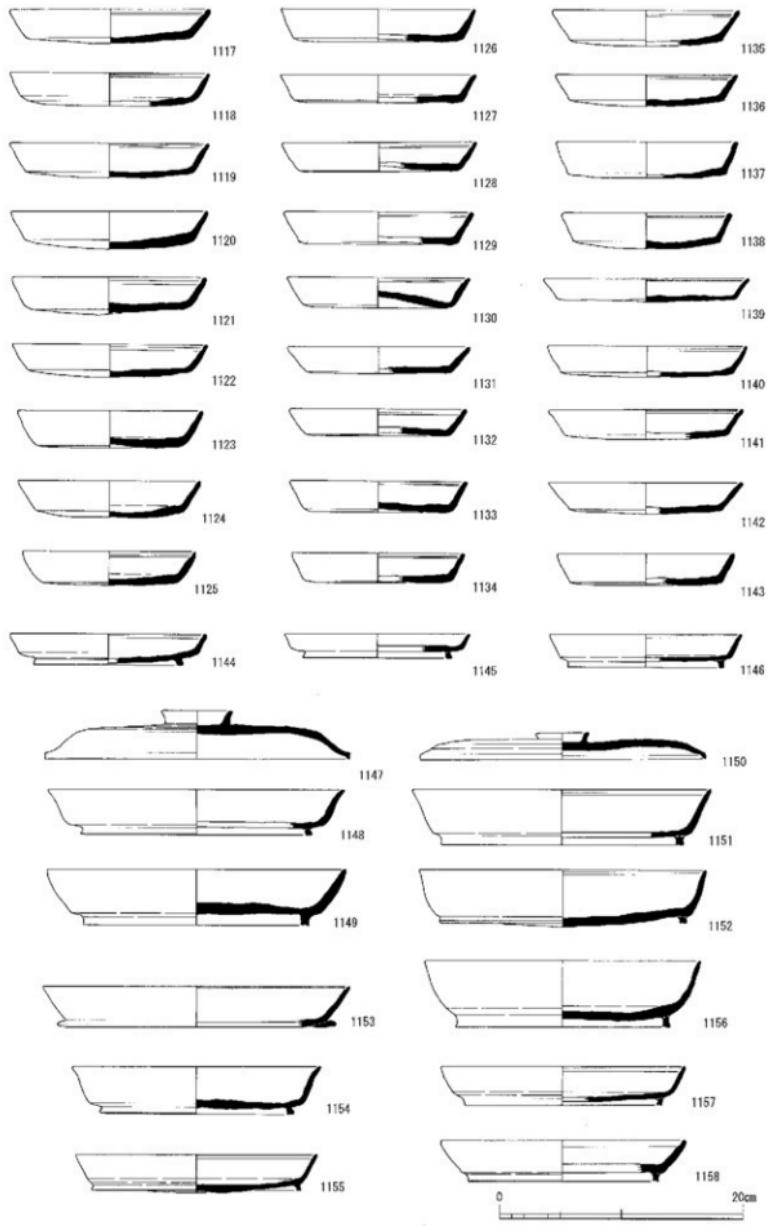


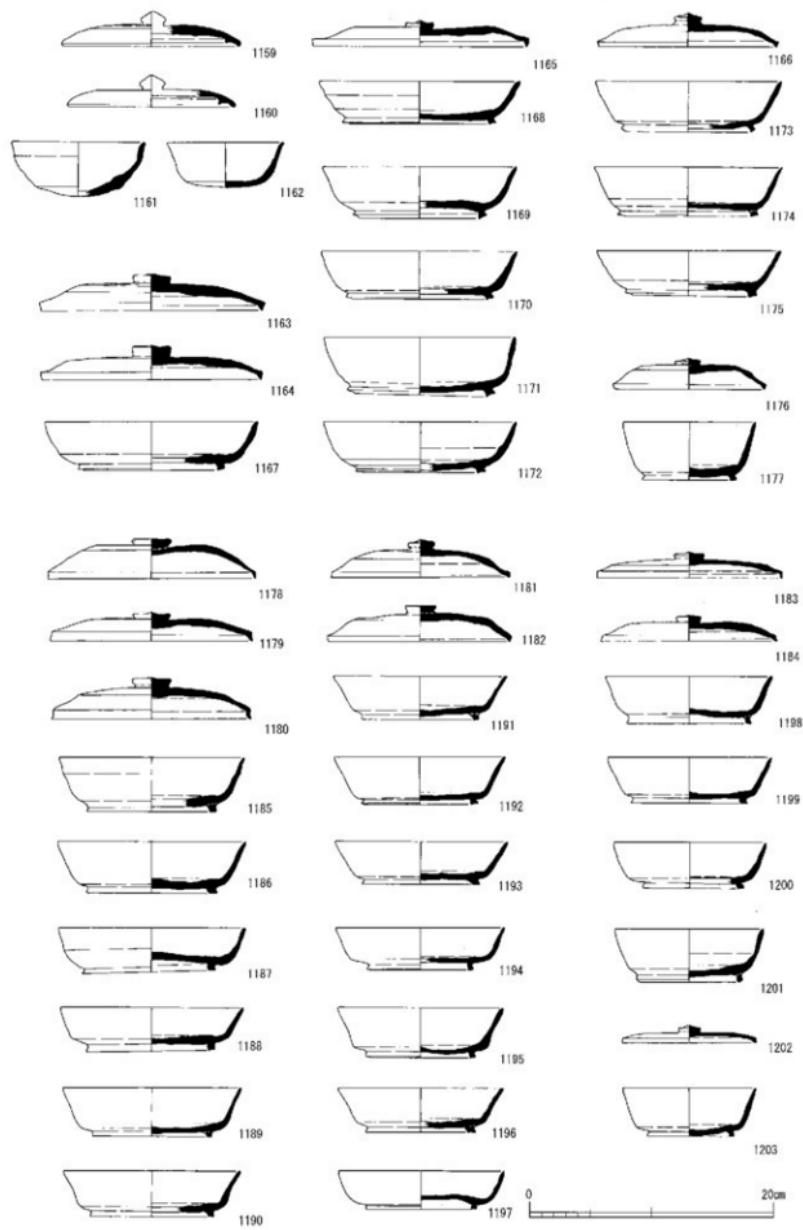


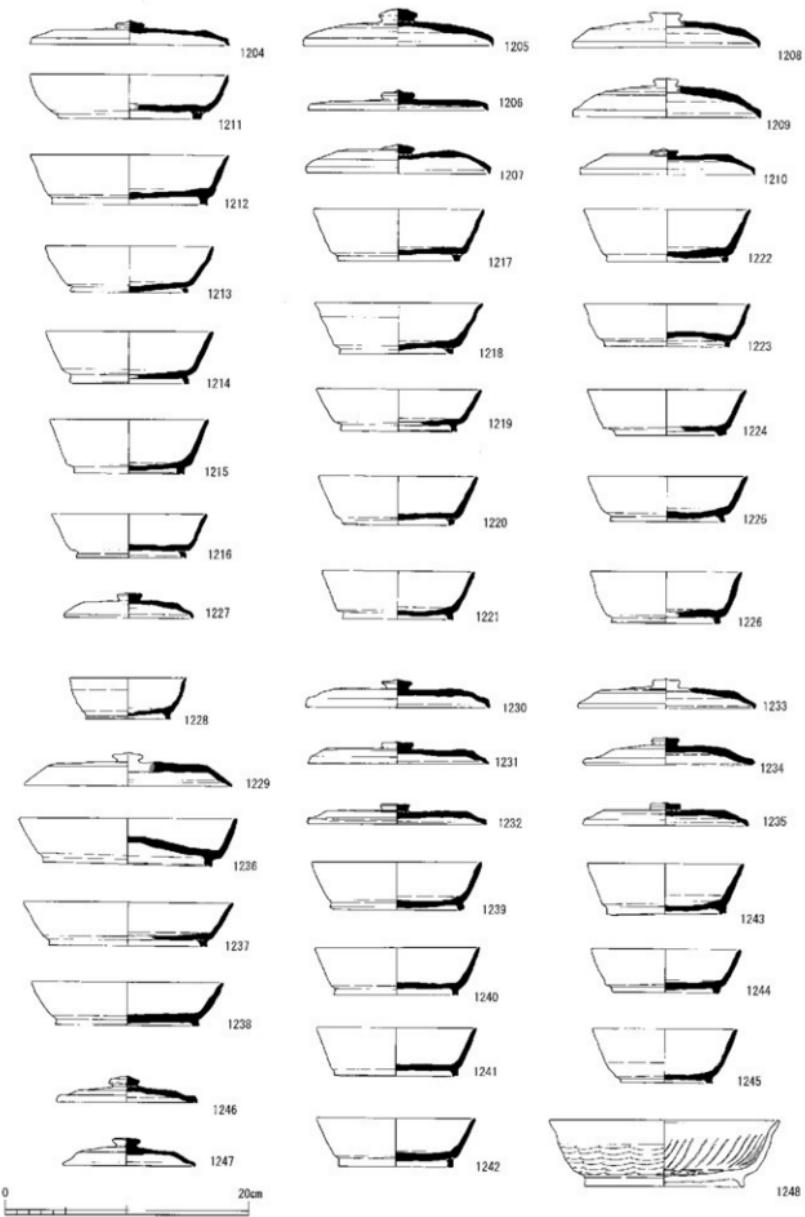


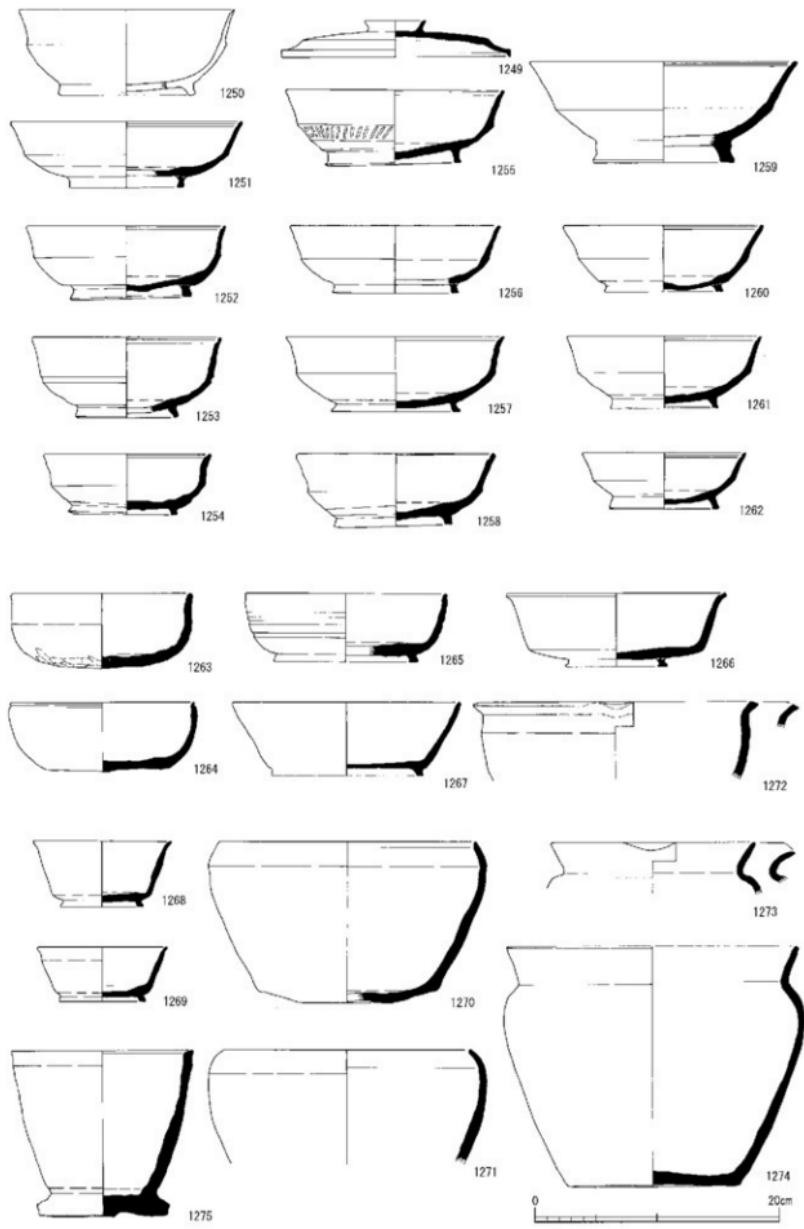


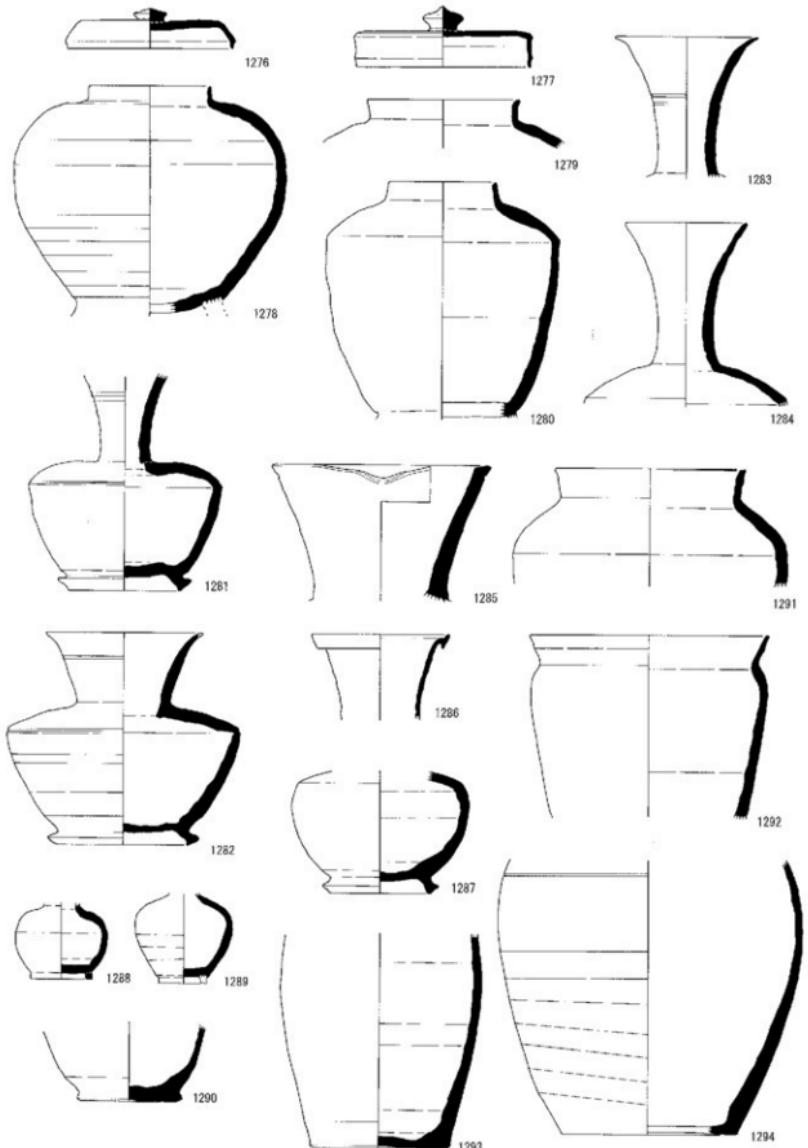




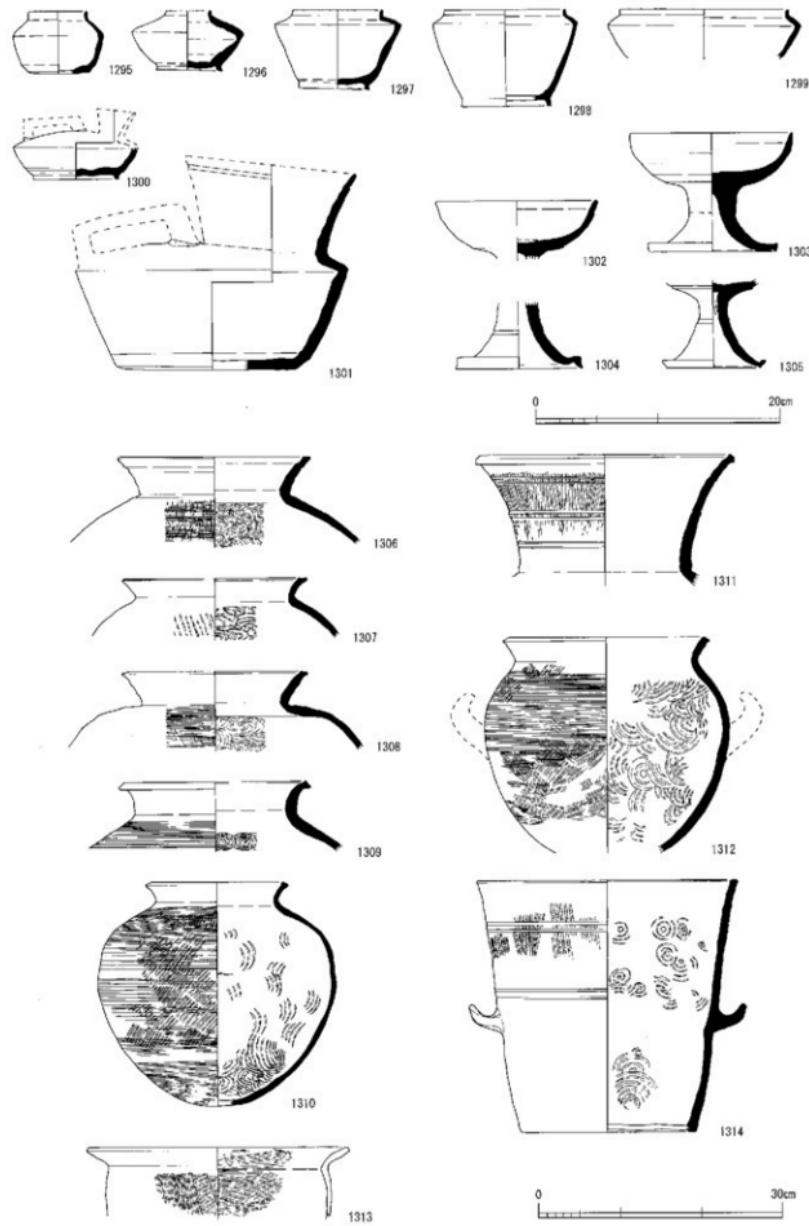


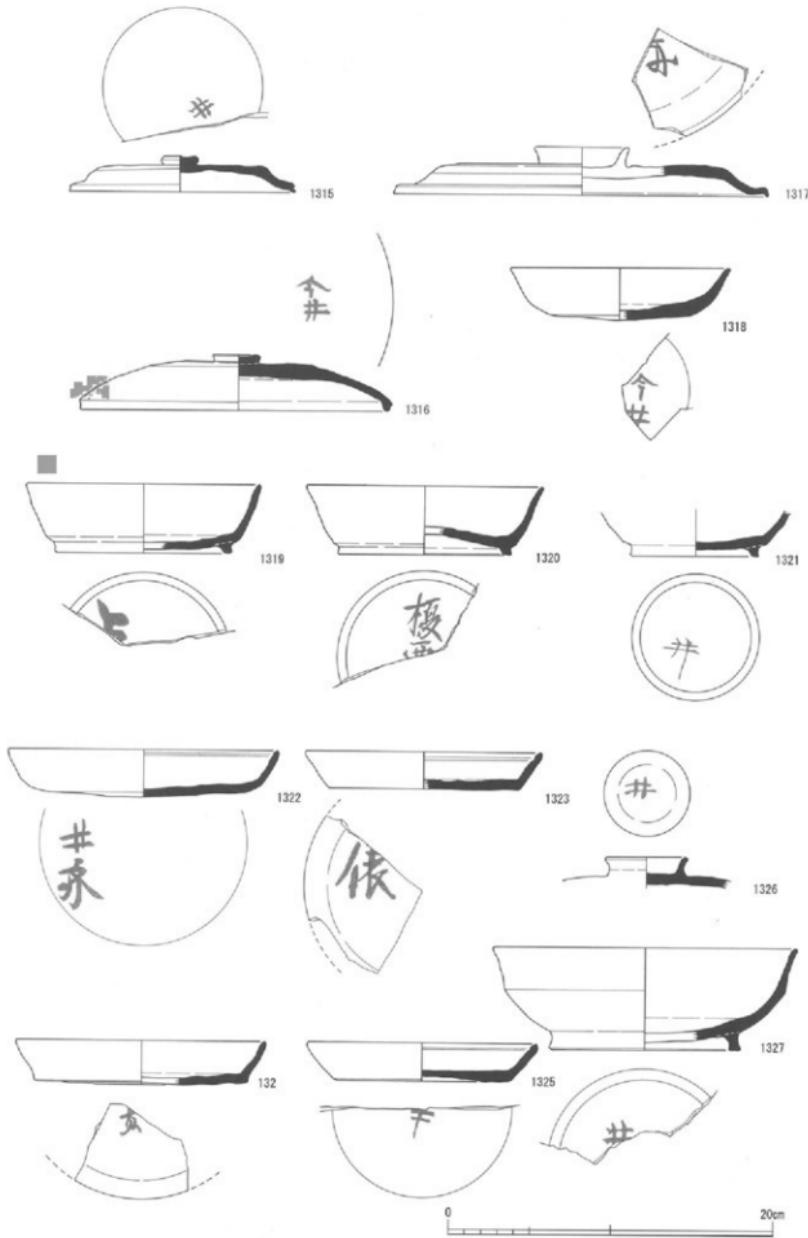


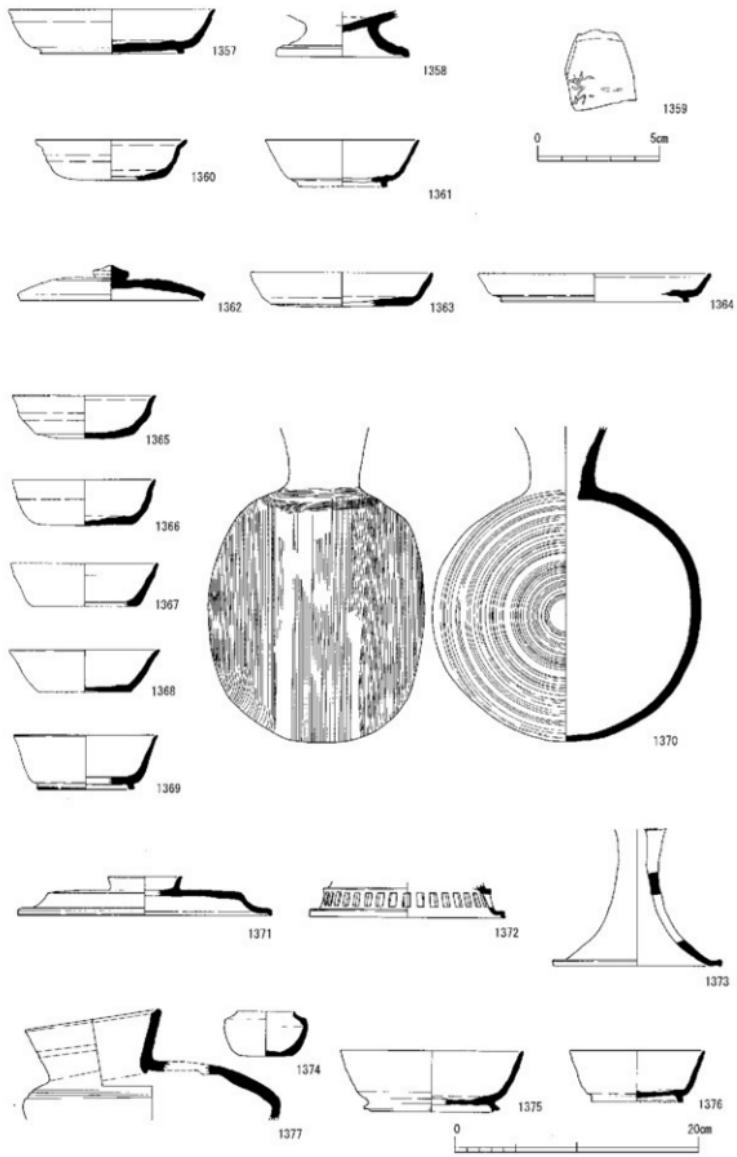


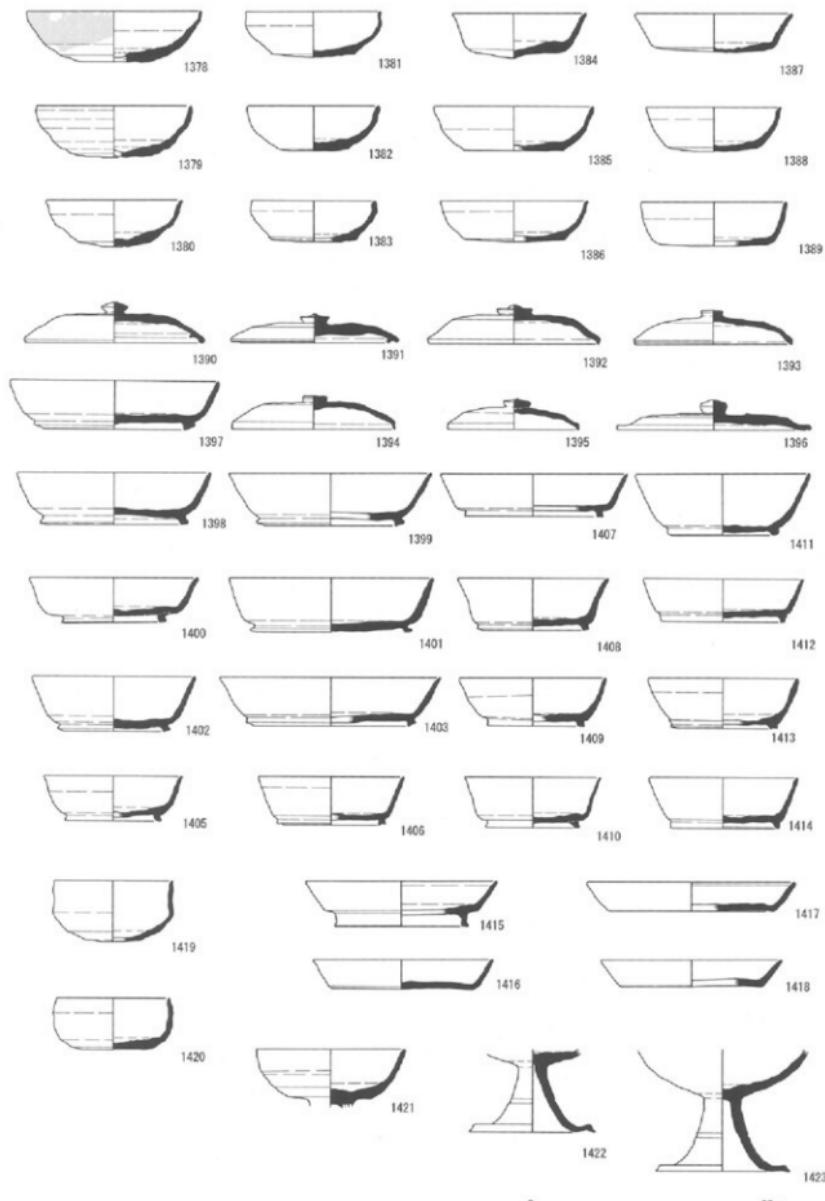


0 20cm

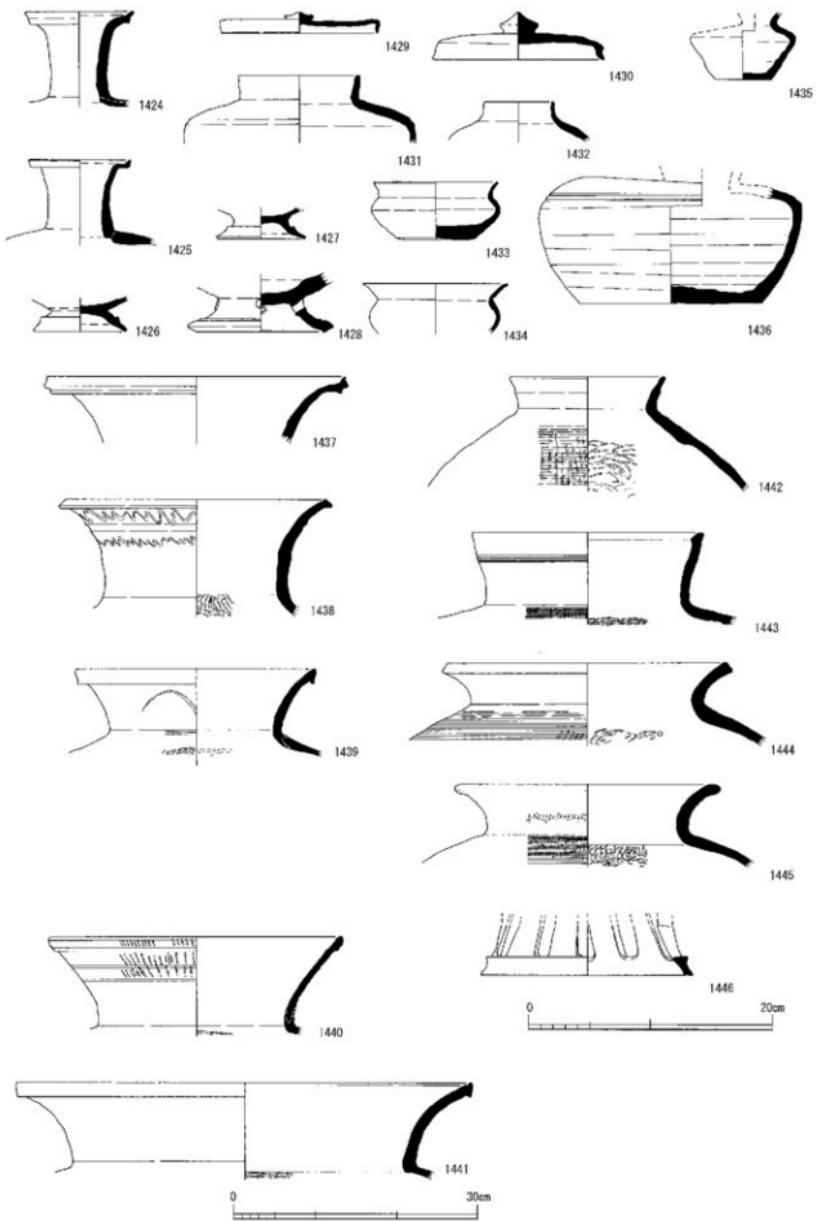


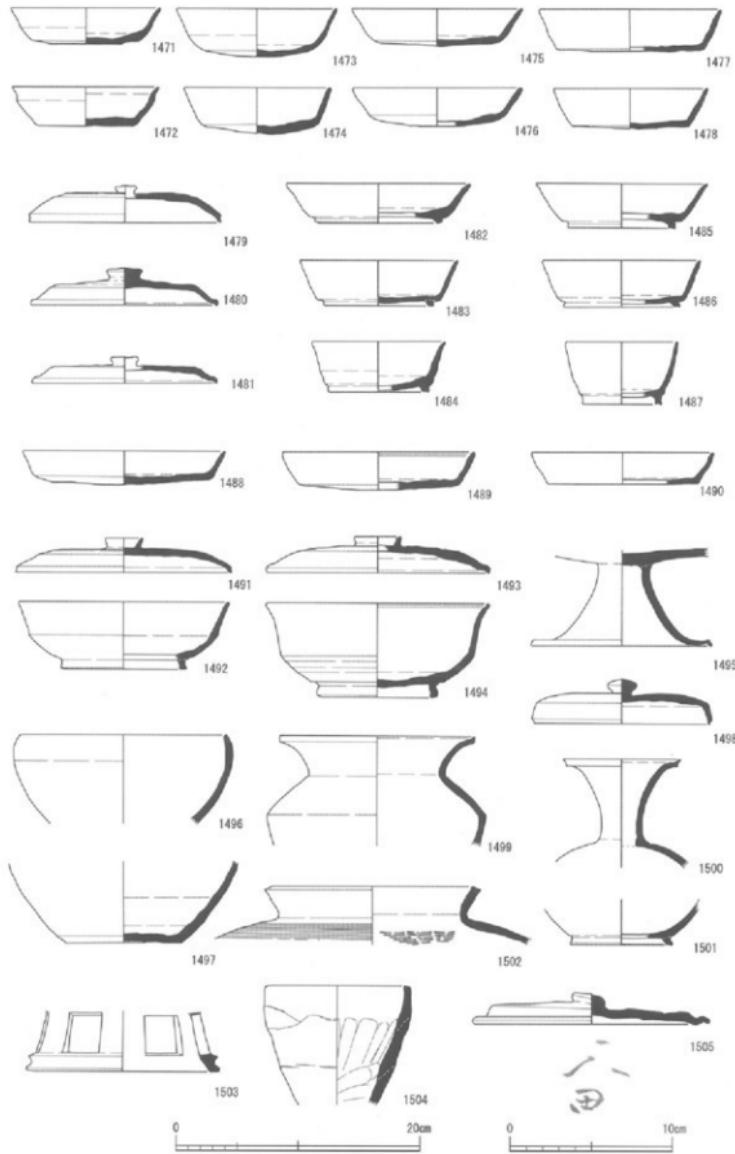


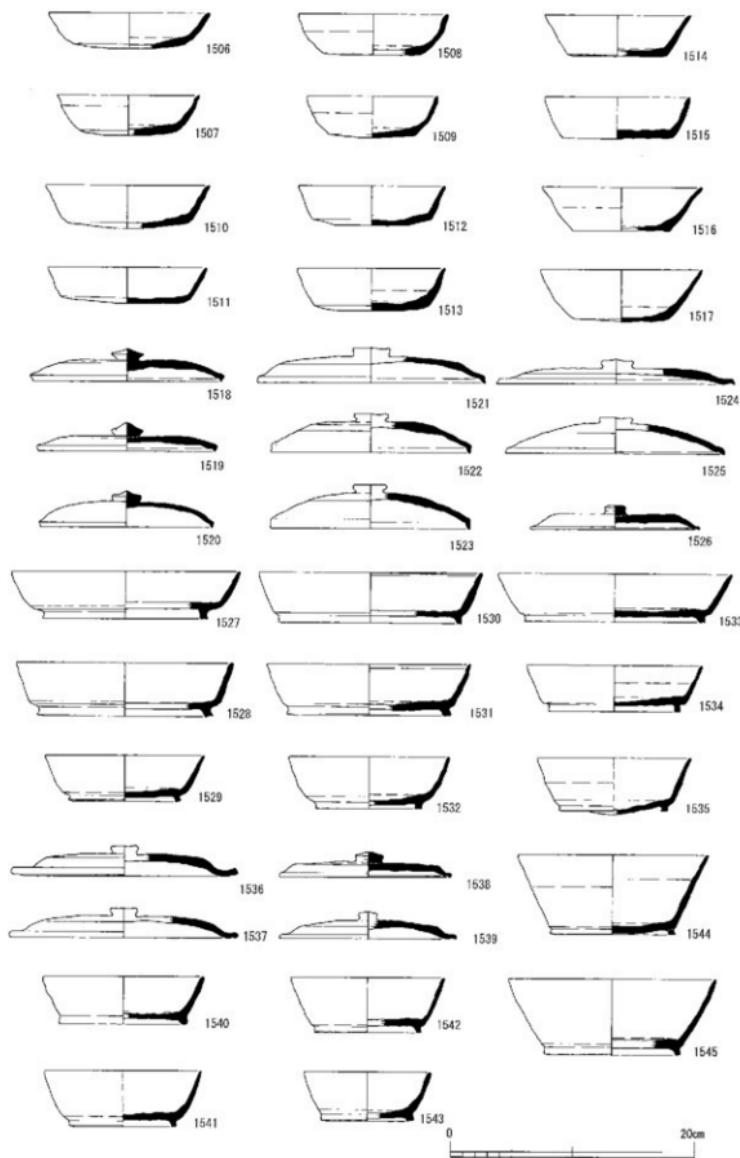


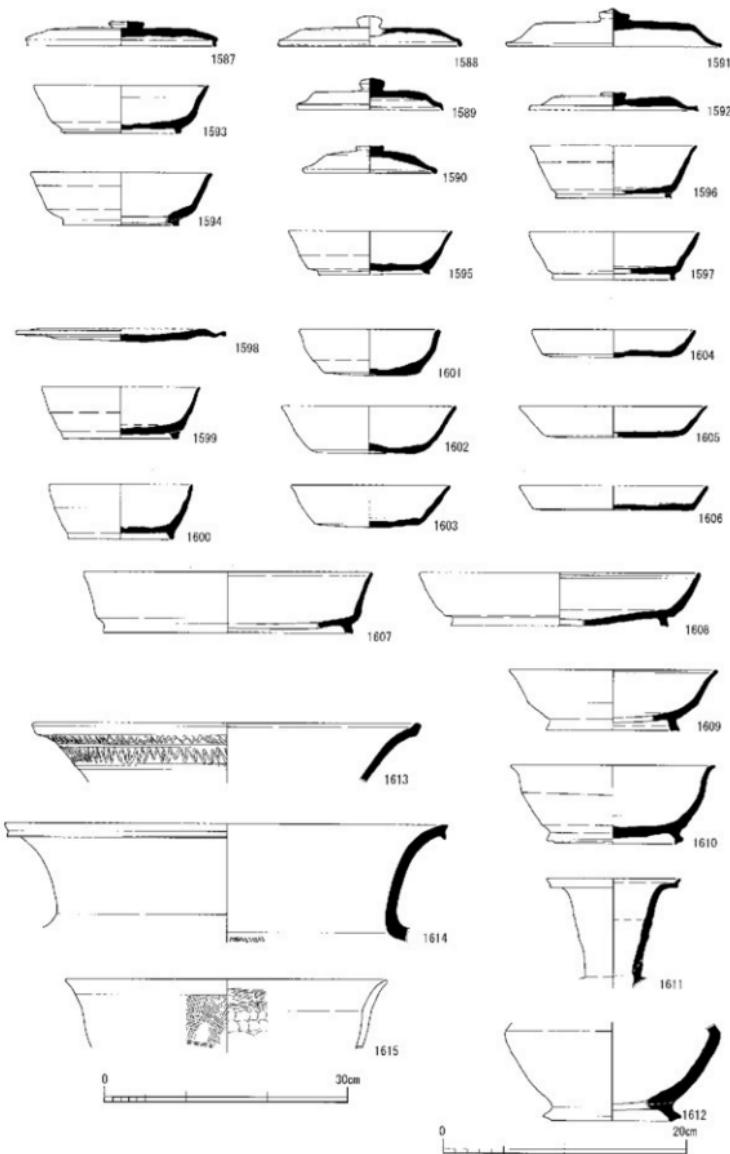


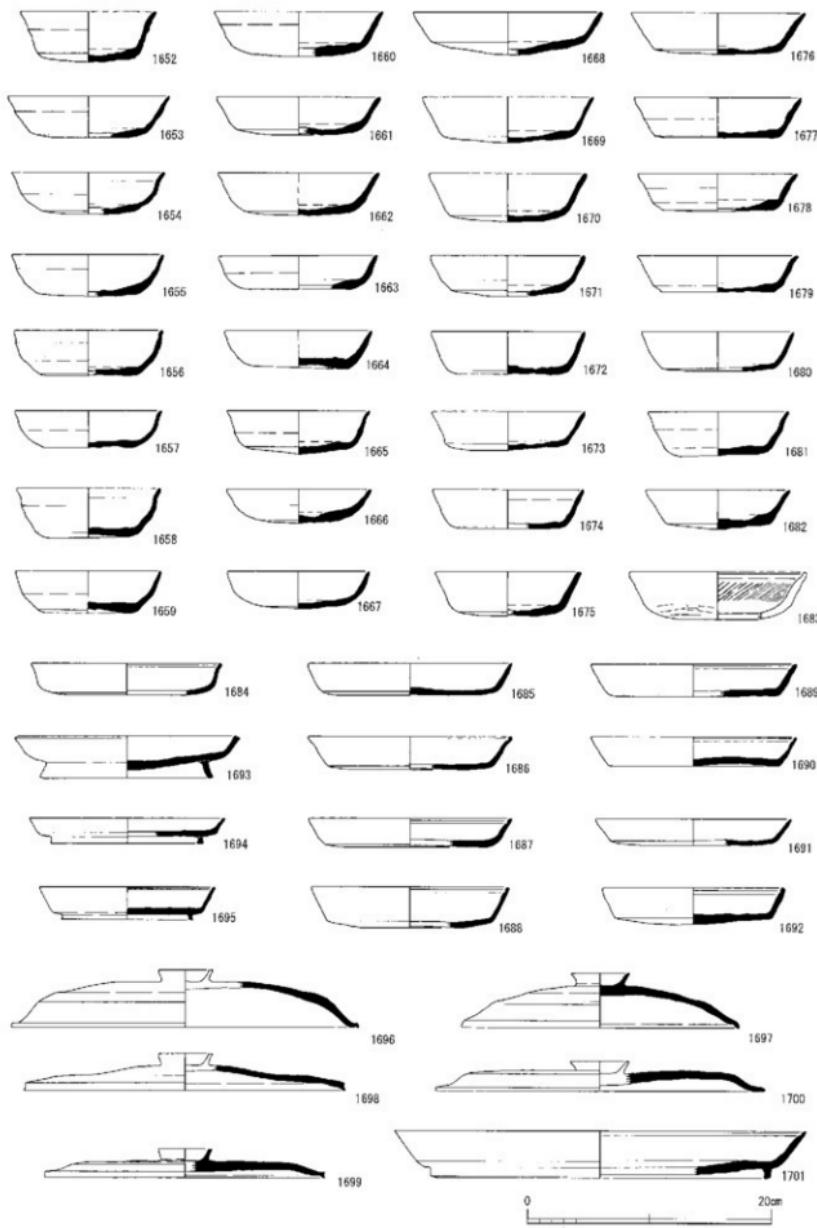
0 20cm

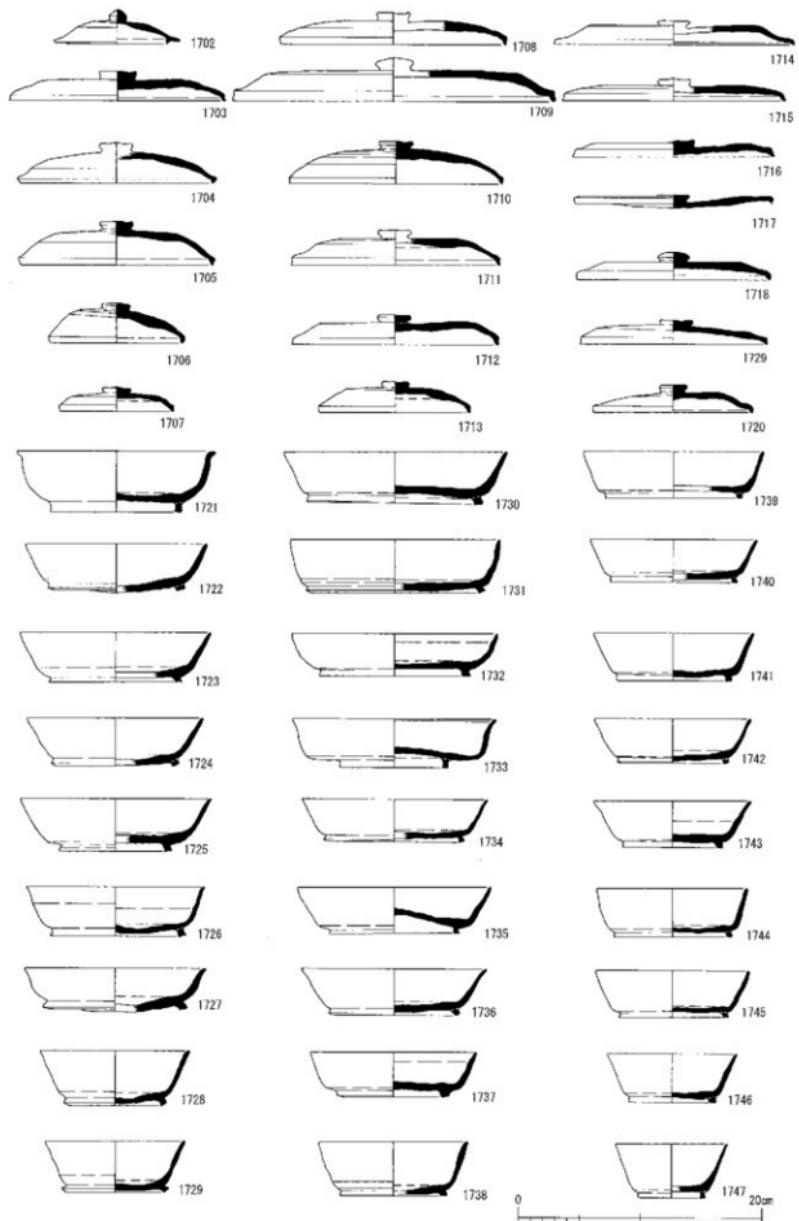


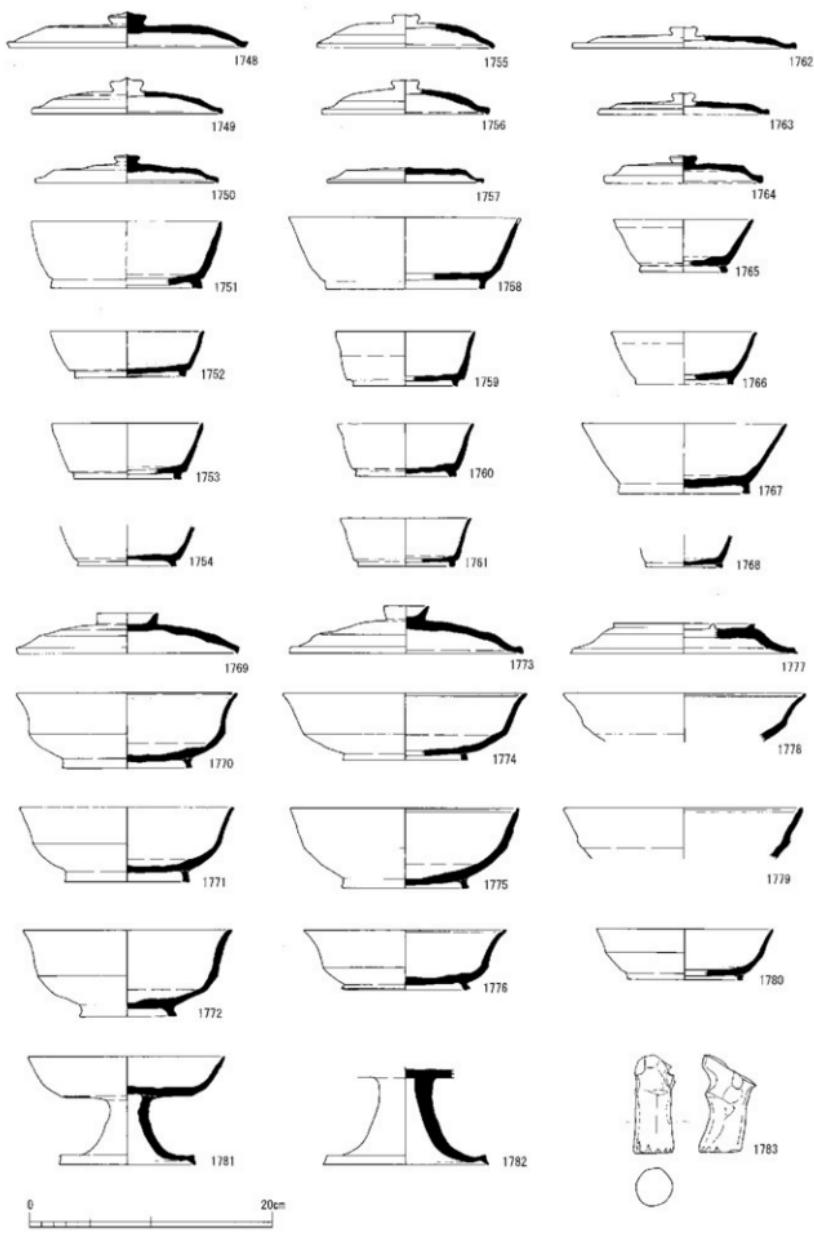


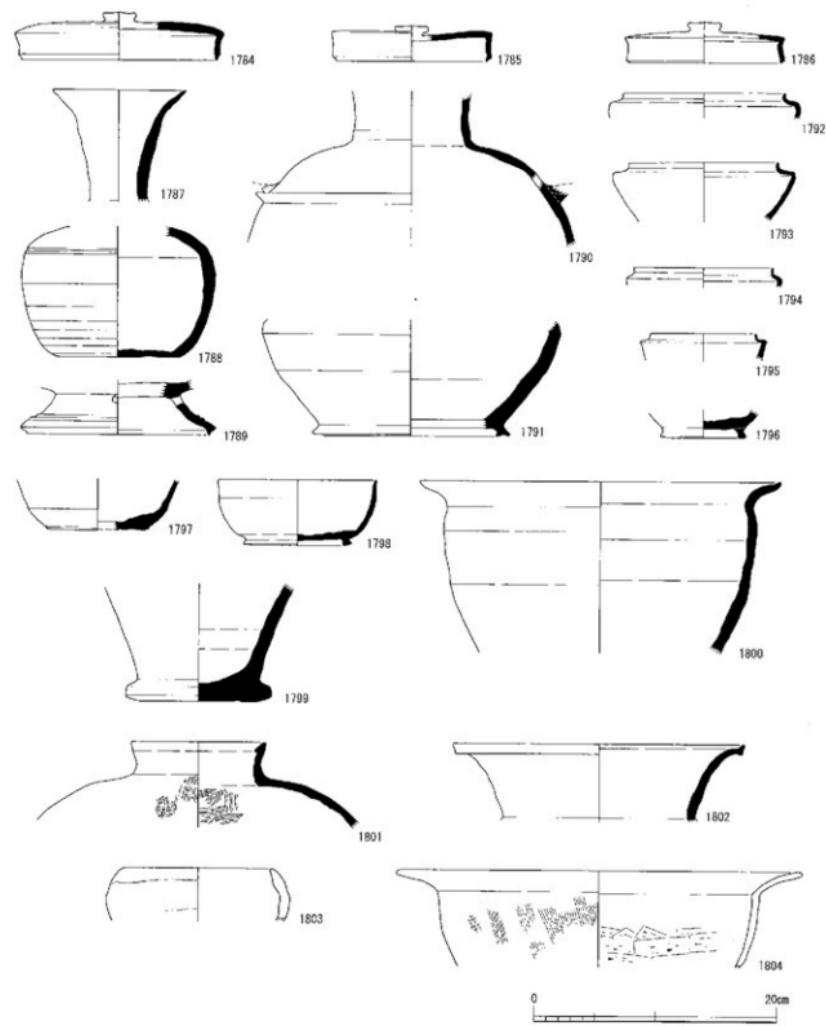


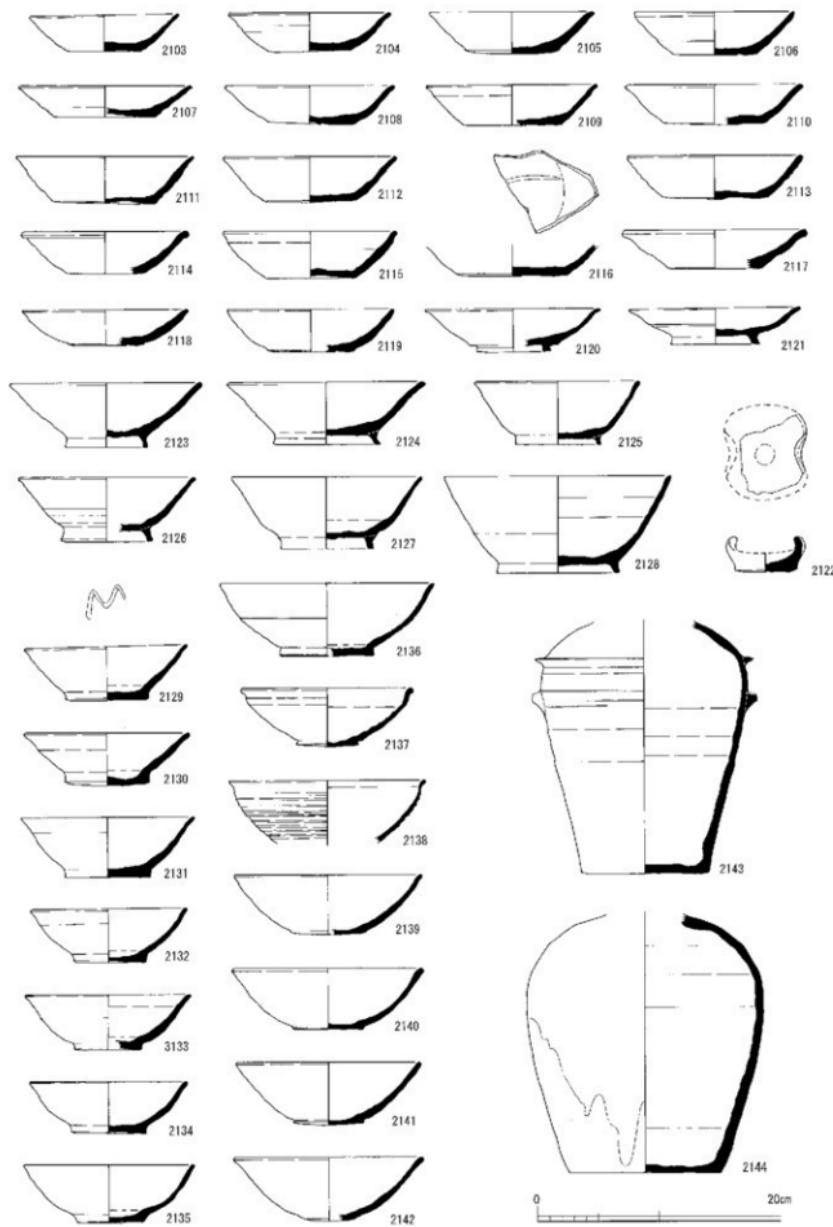


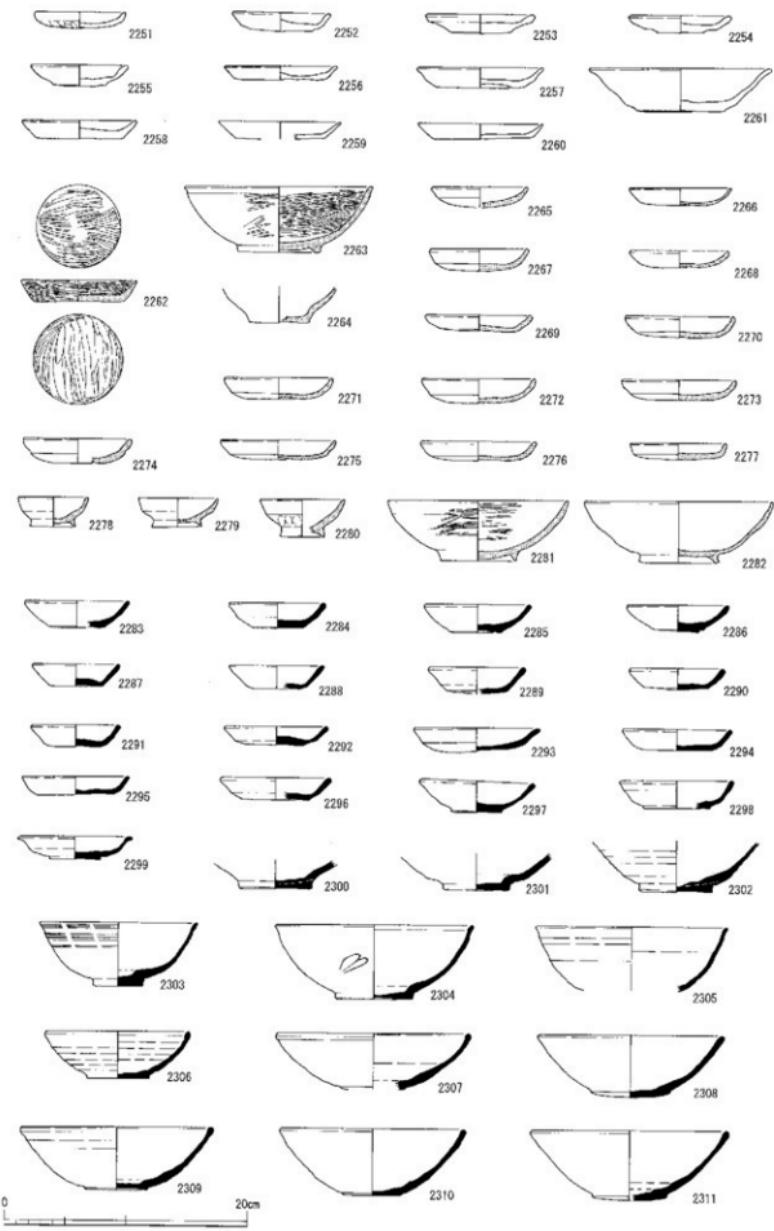


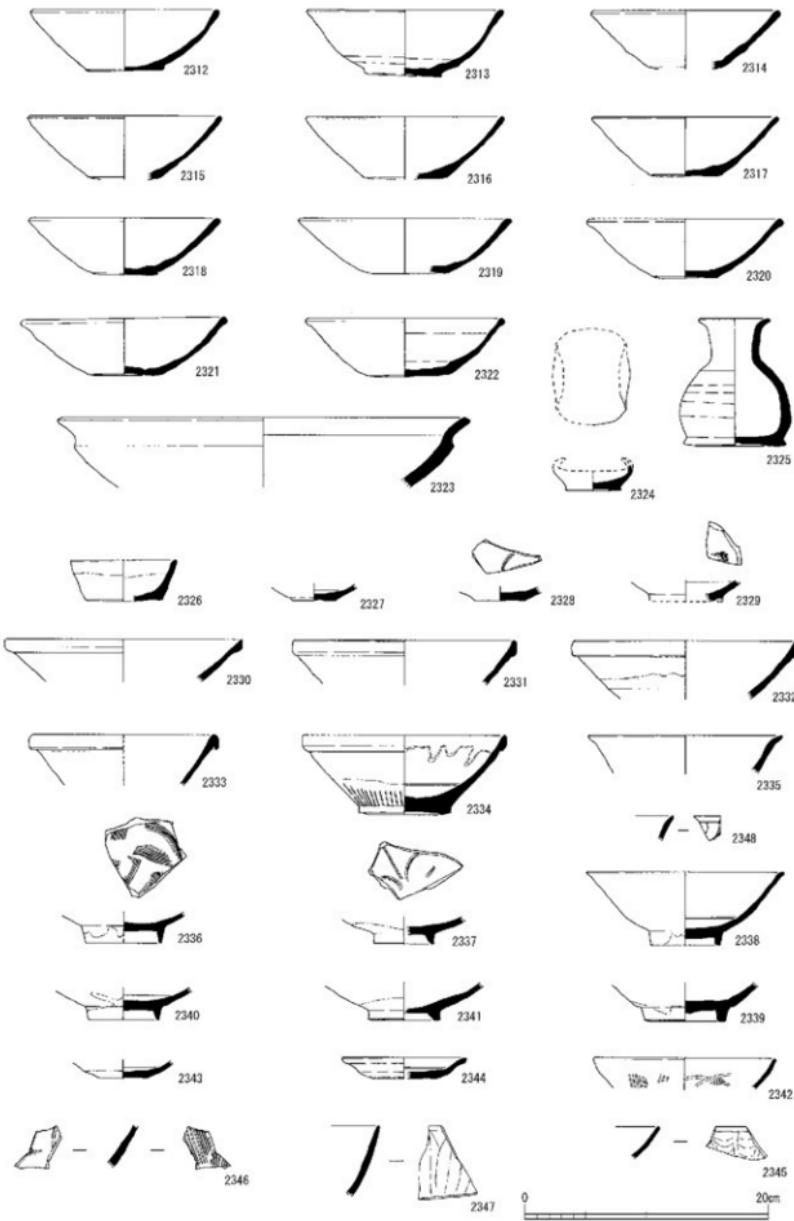


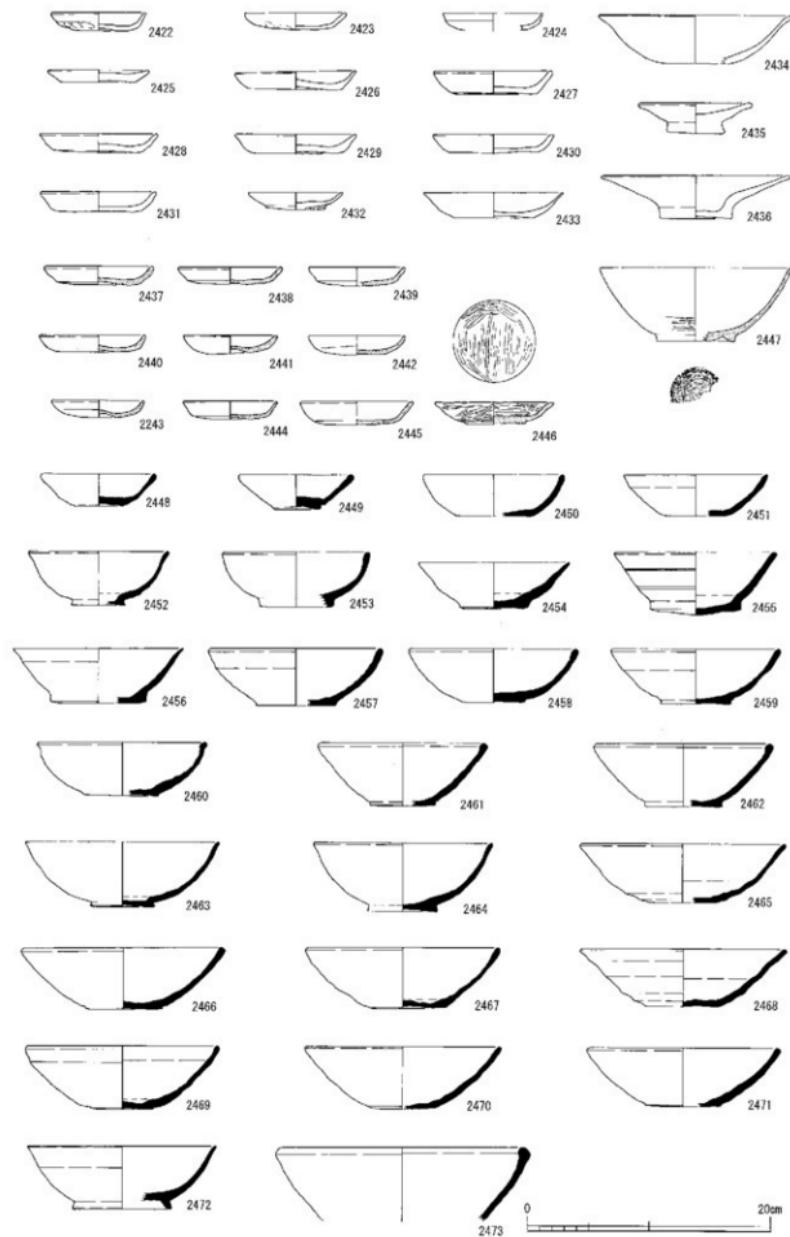


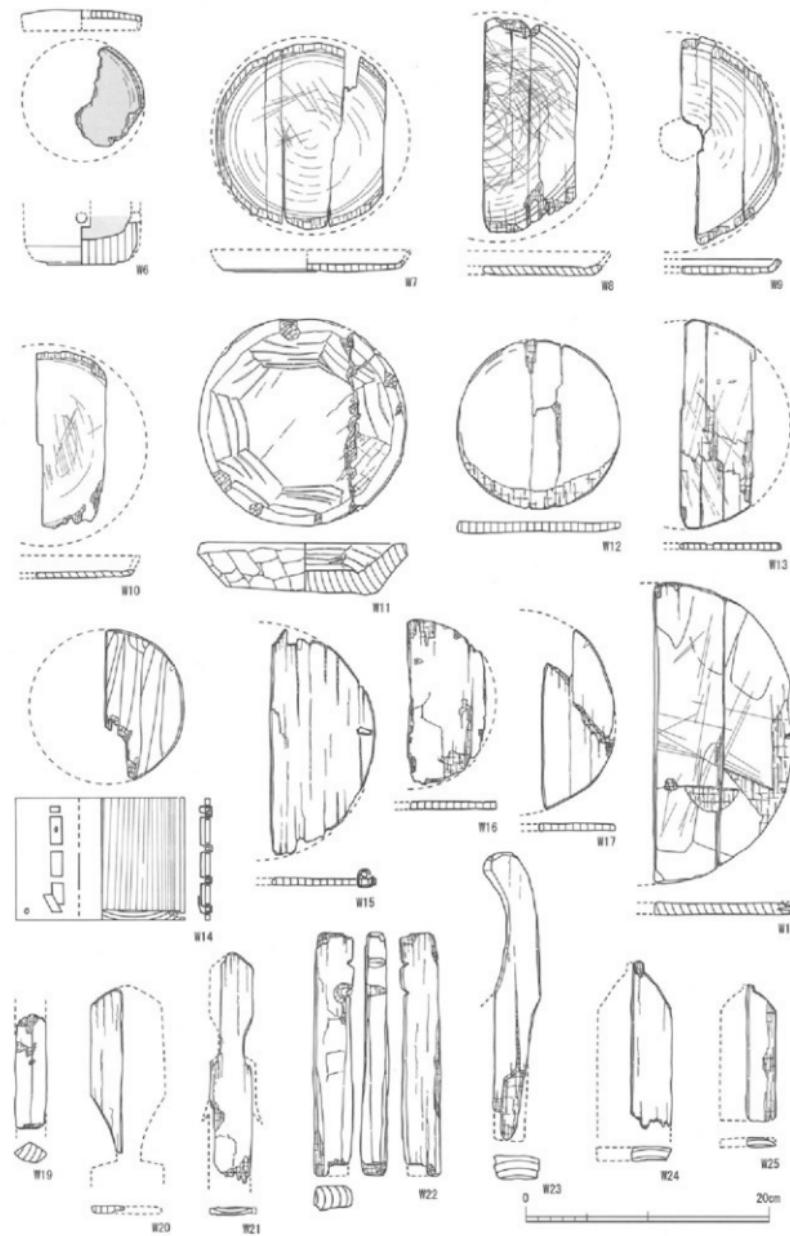


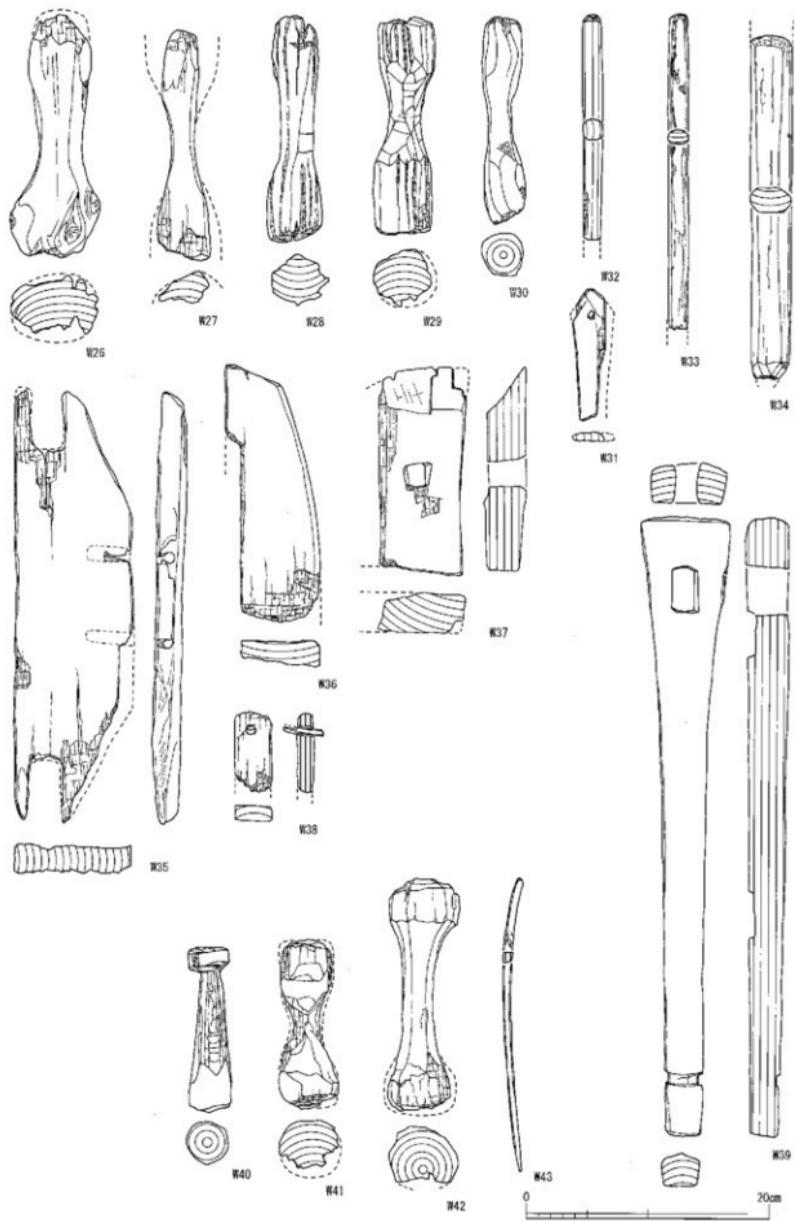












写 真 図 版



遺跡周辺の航空写真



遺跡遠景（南から）



A地区全景



奈良時代
建物址群（北から）



平安時代
S D 35・65



建物址群
(北東から)



谷地形出土木製品（1）
(北から)



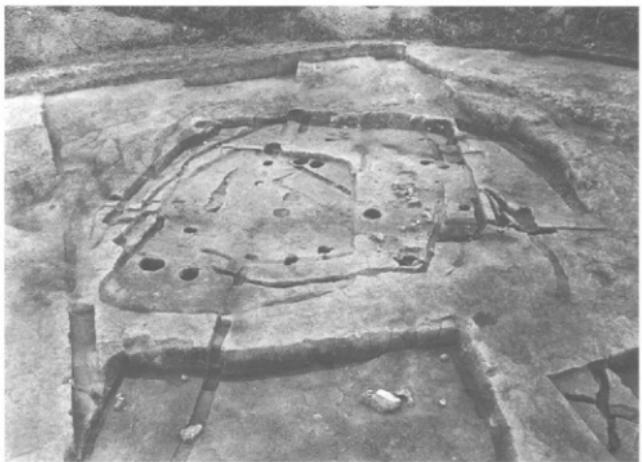
左) 谷地形出土木製品（2）
右) 丸柄
(東から)



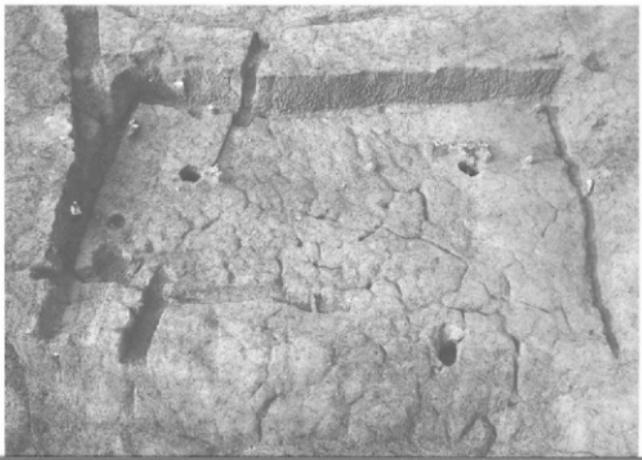




SH 1 (南から)



SH 2～4 (南から)



SH 4 (南から)



SH 5 (南から)



SK 16 (南から)



SK 16 (東から)



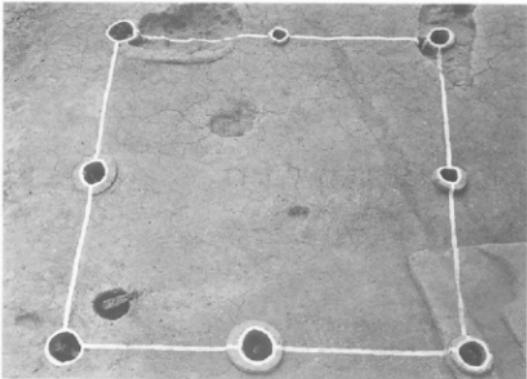
第10土器集中群（南から）



第8・9土器集中群（南から）



第1～4土器集中群（北から）

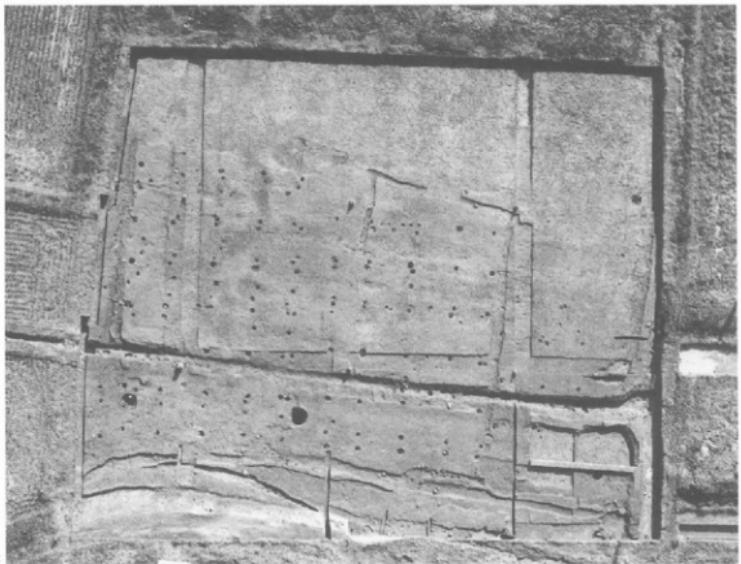


S B 1 (東から)

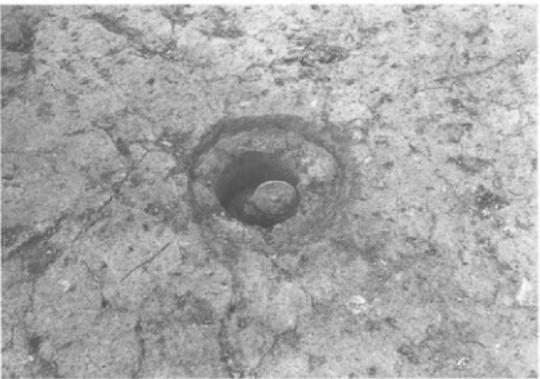


上・右) S E 2 (南から)





南地区的遺構



P-189素文鏡出土状況（東から）



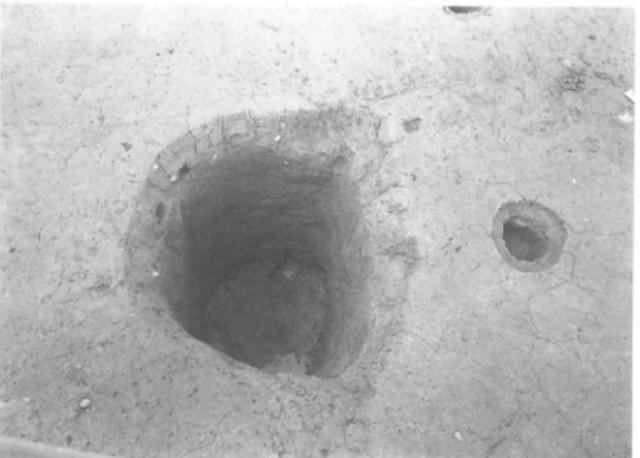
B-12遺物群（東から）



S E 1 (北から)



S E 1 断面 (東から)



S E 2 (南から)



S H50・51 (南から)



S D30・34 (東から)



S D60 (東から)



S D91 (南東から)



S X 1 (南東から)



S K 20 (東から)



SB1・SA1・SD62



SB2~5・SE2・
SD36-37・SK12





S B 1 (東から)



S B 2 (東から)



S B 3 (東から)



S E 3 (北東から)



S E 3 断面 (北東から)



S E 2 (北から)



S E 2 (東から)



S E 2 最下位の井枡
(北から)



SE 2 北半部断面
(北から)



SE 2 北半部断面
(東から)

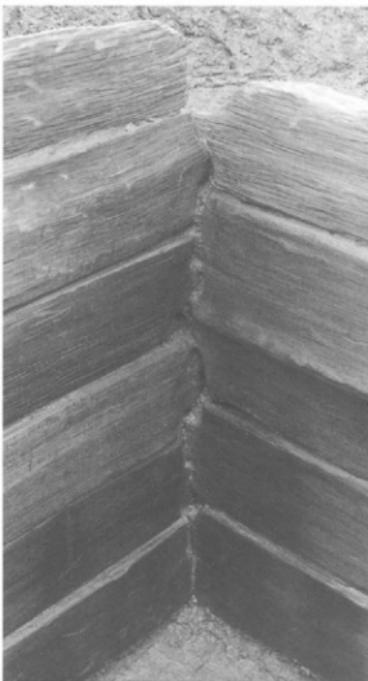
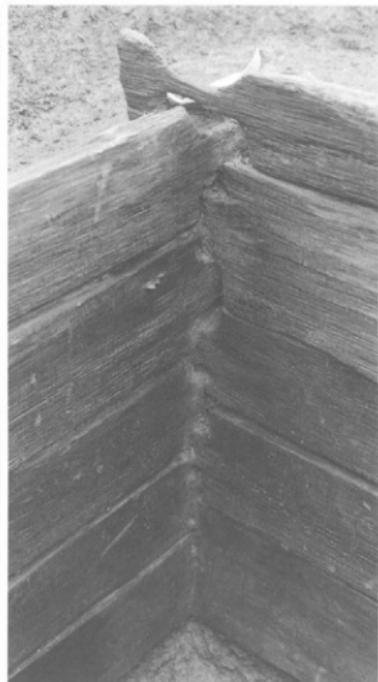


左) 北西隅木組状況
(北西から)
右) 北東隅木組状況
(北東から)

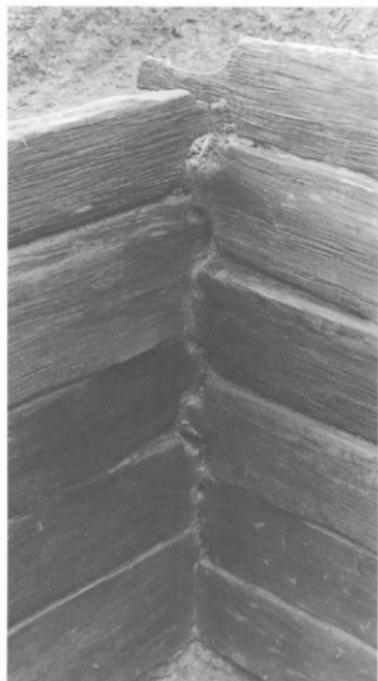




左) SE 2北西隅木組状況
(南東から)
右) 北東隅木組状況
(南西から)



左) 南西隅木組状況
(北東から)
右) 南東隅木組状況
(北西から)





SE 2 井枡内上層面
遺物出土状況（北から）



上層面出土の土器
(東から)



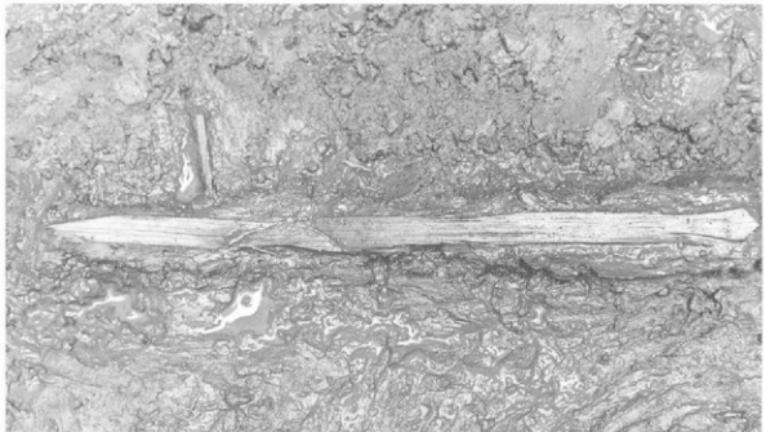
上層面出土の土器
(南から)



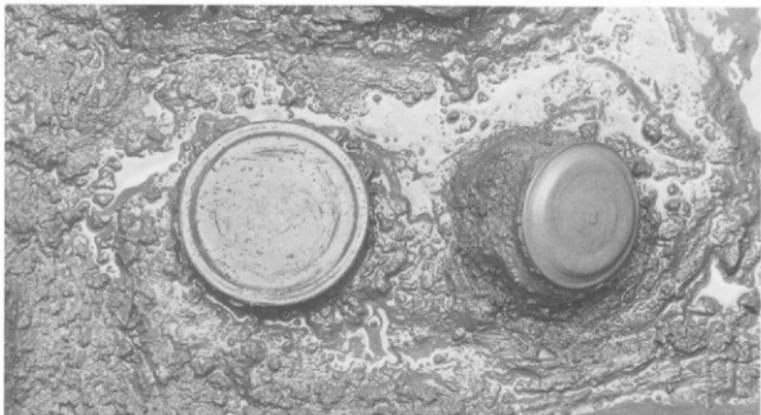
SE 2 井枡内下層面
遺物出土状況
(東から)



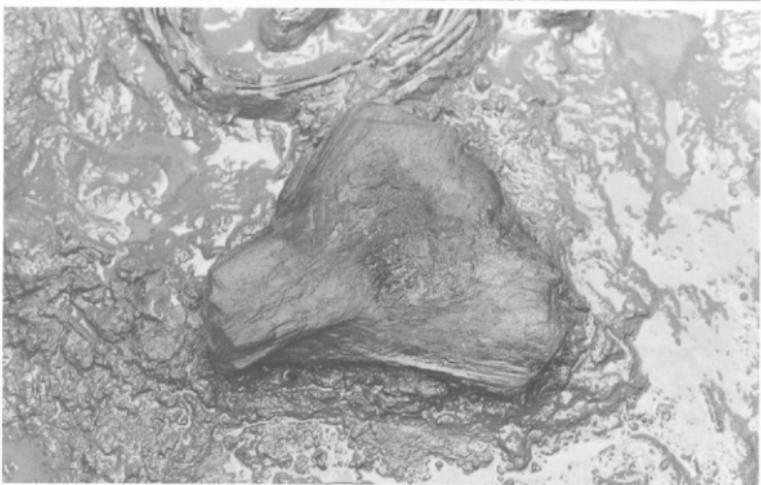
下層面出土の横概



上層面出土の斎串



SE 2 下層面出土の土器
(東から)



下層面出土の台状木製品
(東から)



下層面出土の蔓
(東から)



S B 8~9, S D 5・7
(東から)



S B 11~14・19, S D 23
(東から)



S B 15・17 (南から)



SE 1 (南から)



SE 4 (東から)



SD 5・7断面 (南東から)



1



5



6



9



15



17



20



54



55



84



65



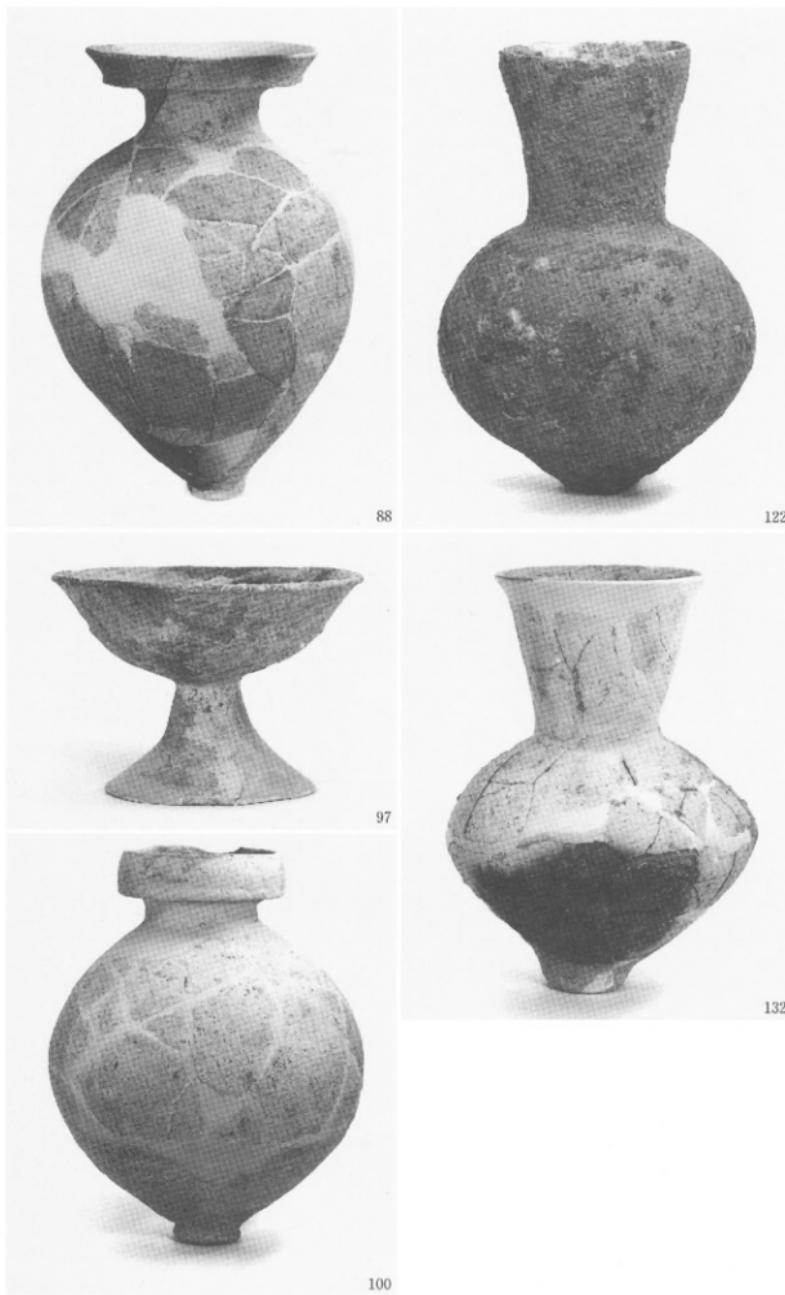
85

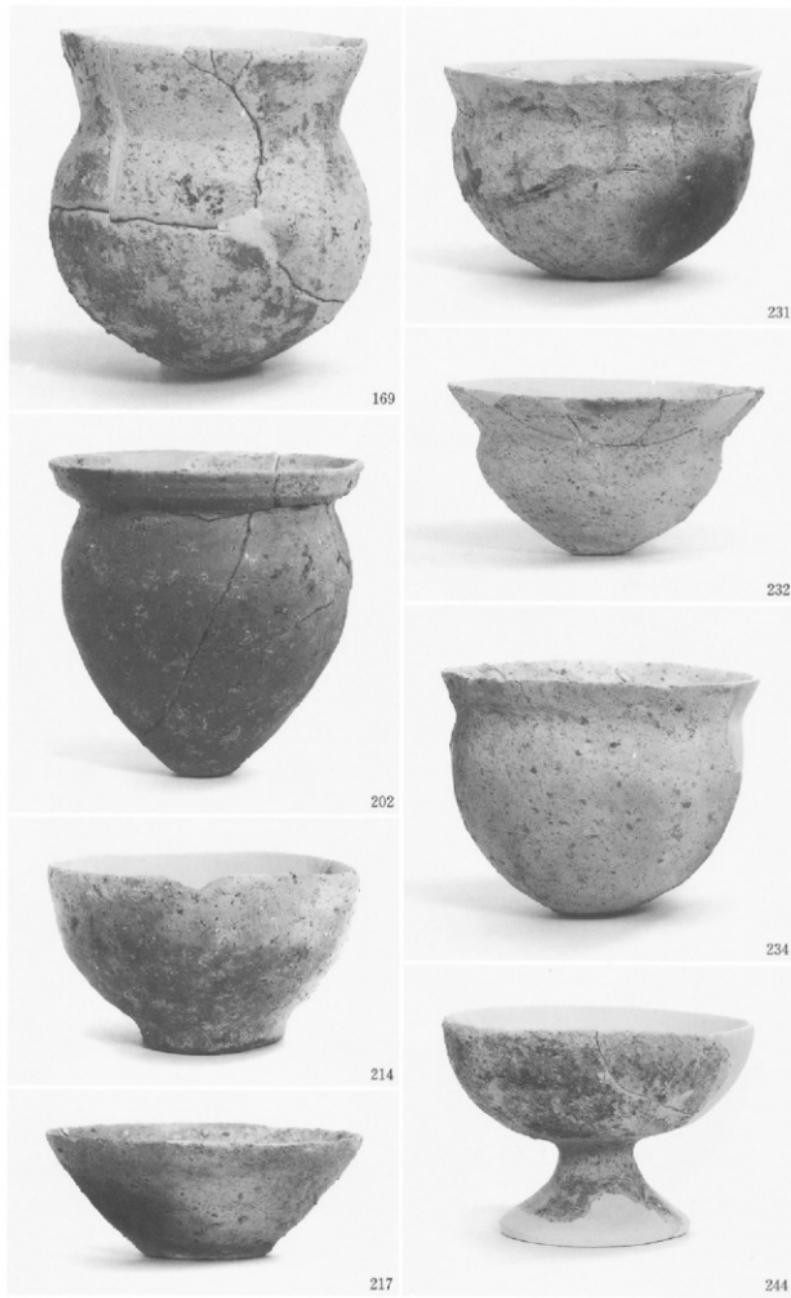


342



86







263



268



269



275



270



328



290



292



293



393



386



395



387



394



391



380



406



410



412



413

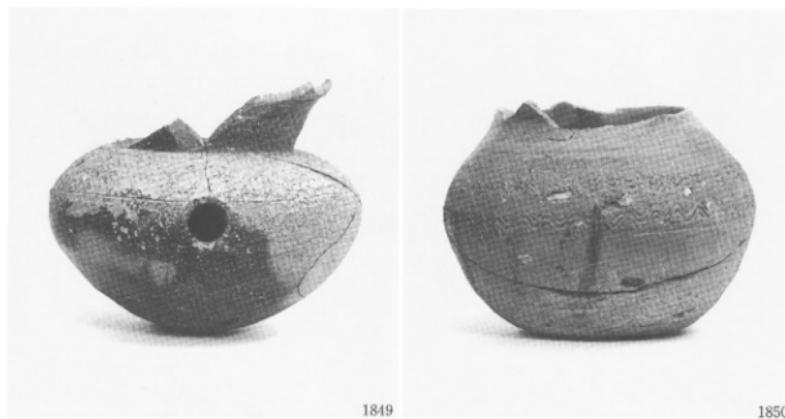


411



415

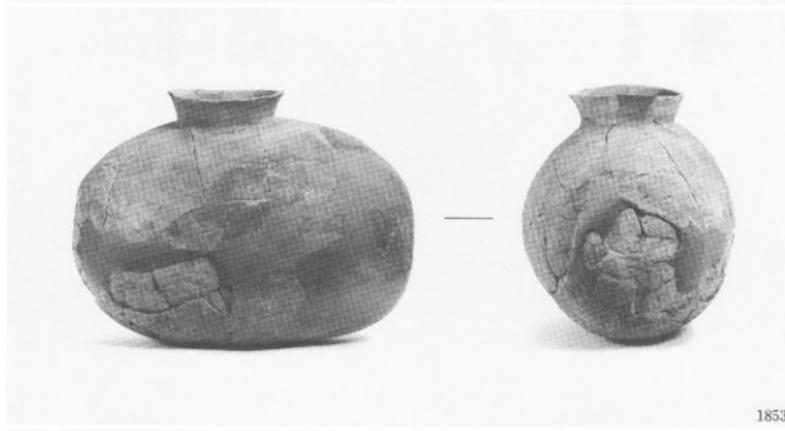




1849



1850



1853



1855

1854



1006



1008



1016



1019



1023



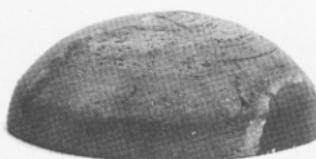
1352



1353



1354



1032



1033



1034



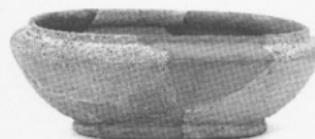
1198



1049



1047



1053



1059



1054



1073



1077



1078



1080



1087



1088



1090



1091



1096



1109



1106



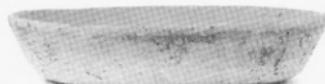
1107



1117



1120



1123



1125



1134



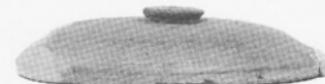
1139



1163



1165



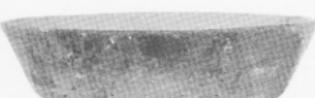
1180



1168

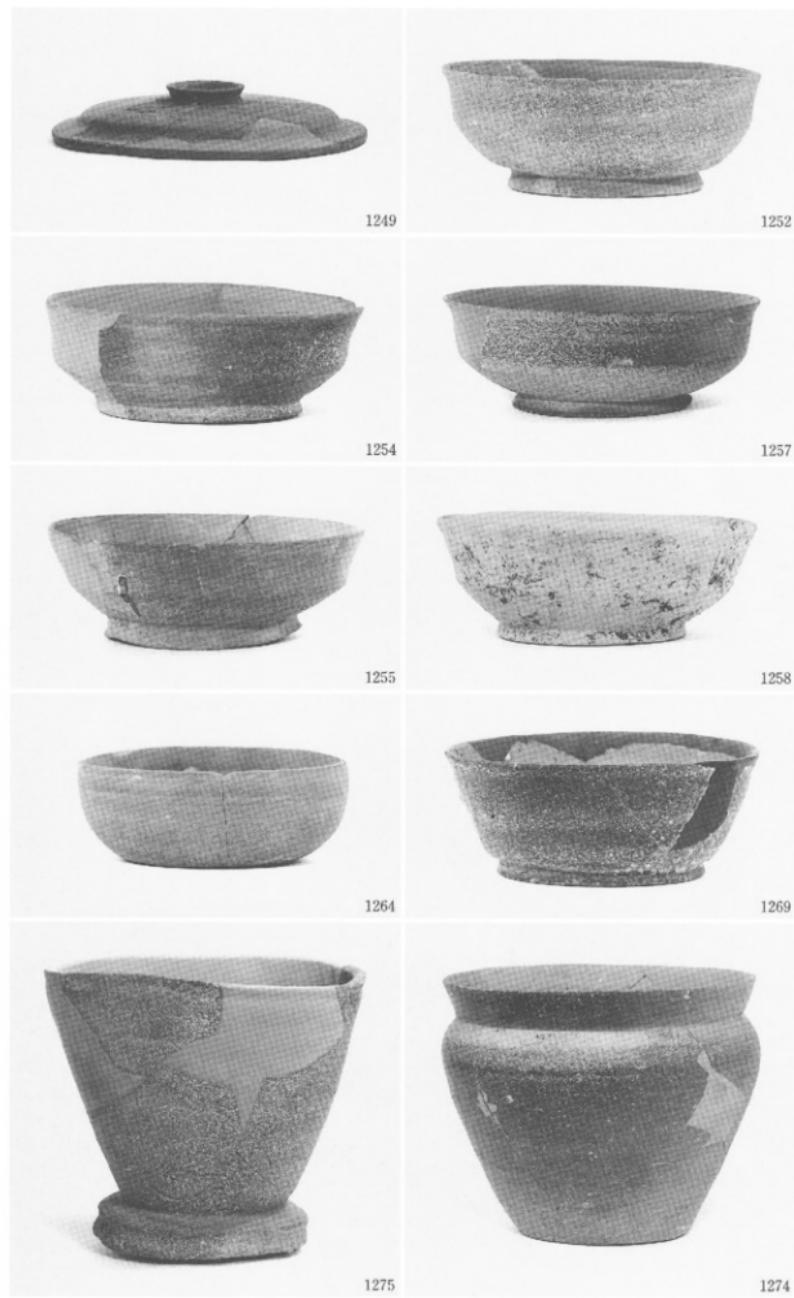


1171



1192







1278



1281



1282



1303



1296



1297



1314



1315



1318



1316



1319



1320



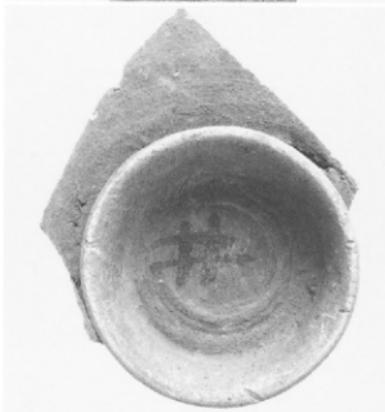
1321



1323



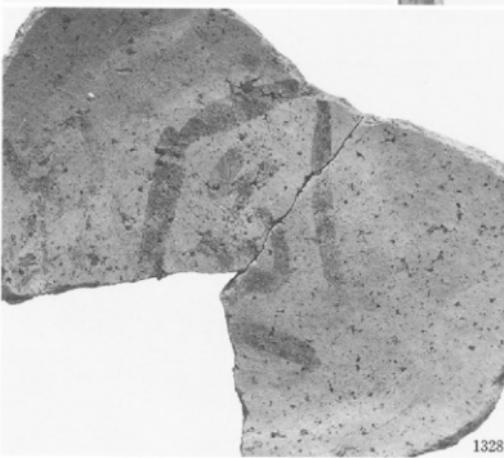
1324



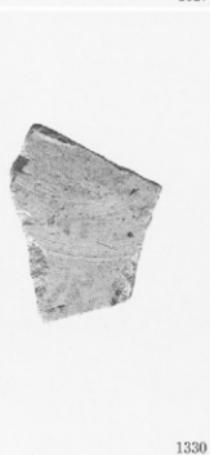
1326



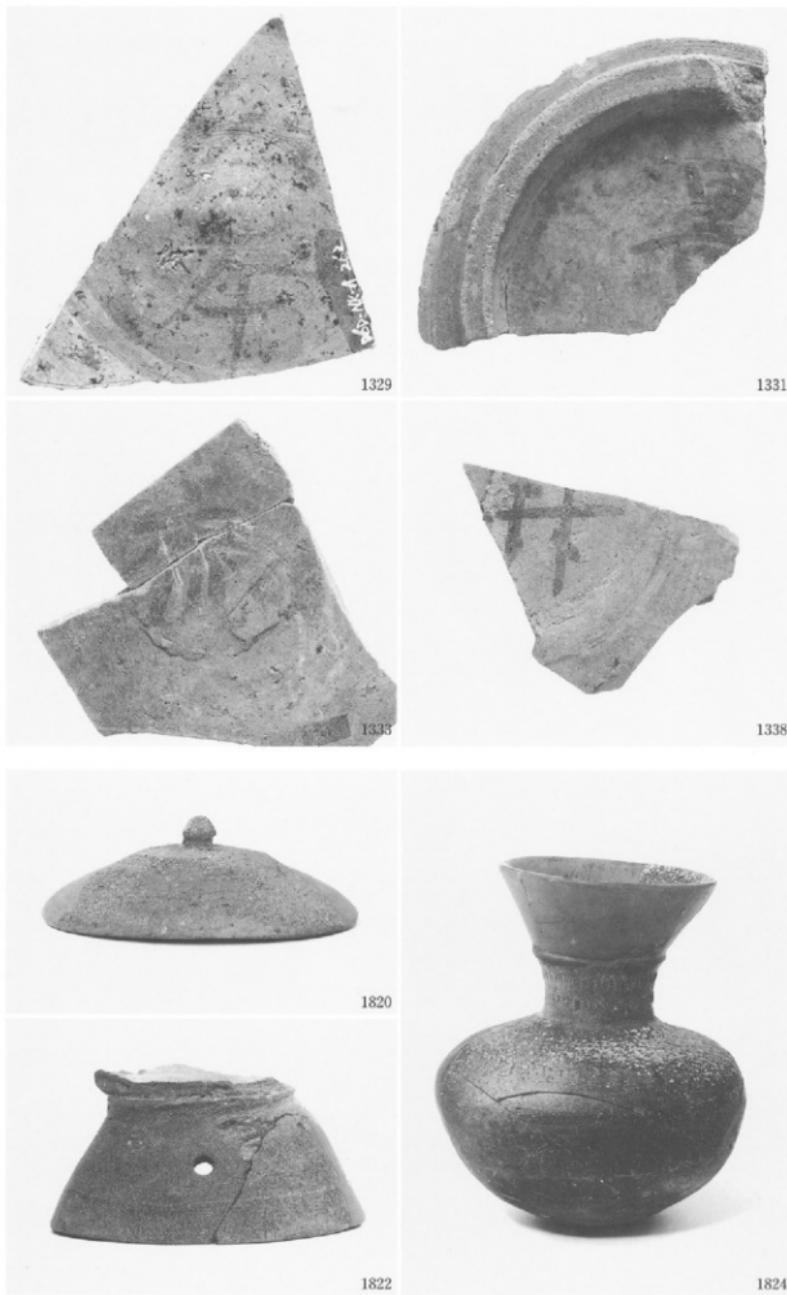
1327



1328



1330





1357



1358



1370



1377



1374



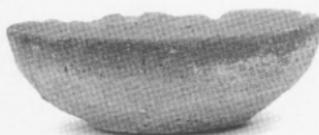
1375



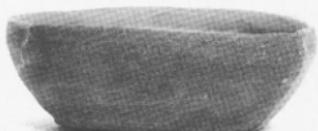
1376



1379



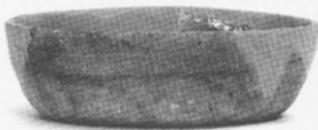
1382



1383



1385



1389



1387



1417



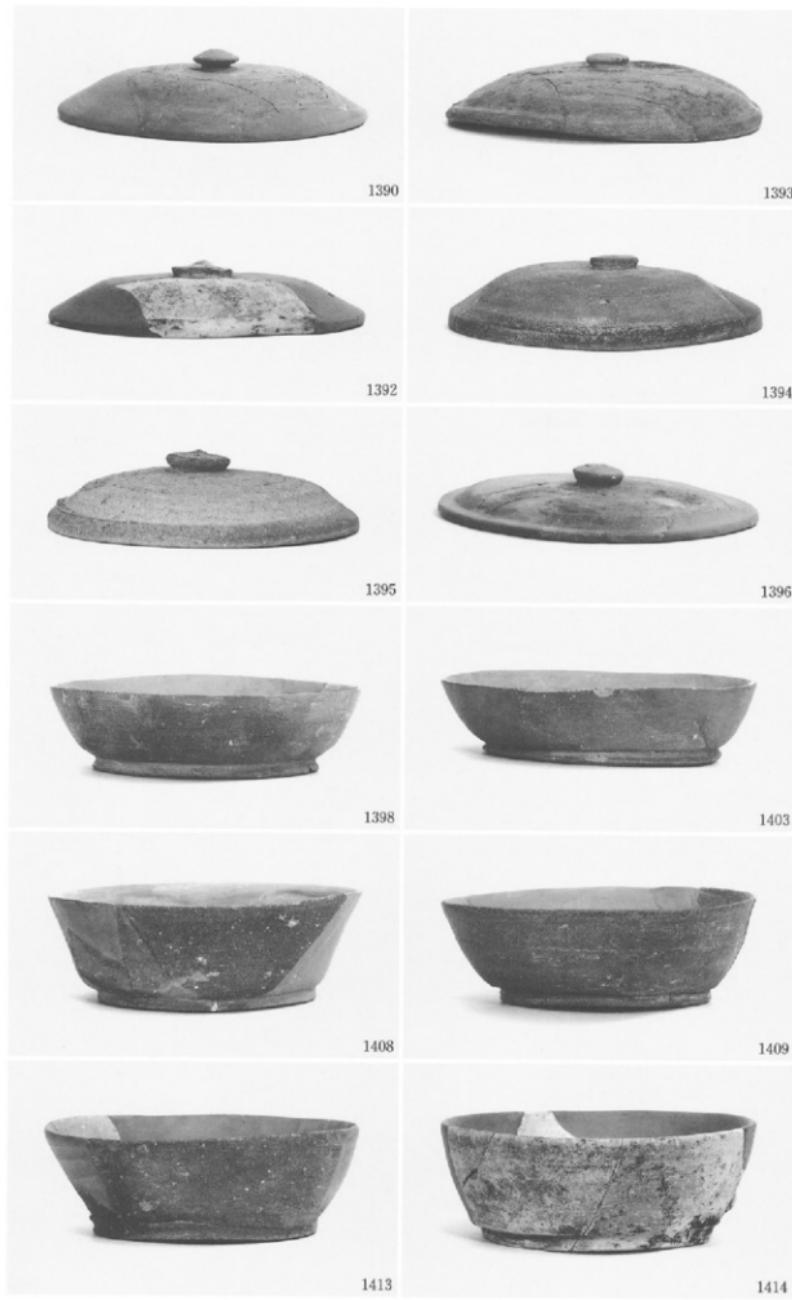
1418



1422

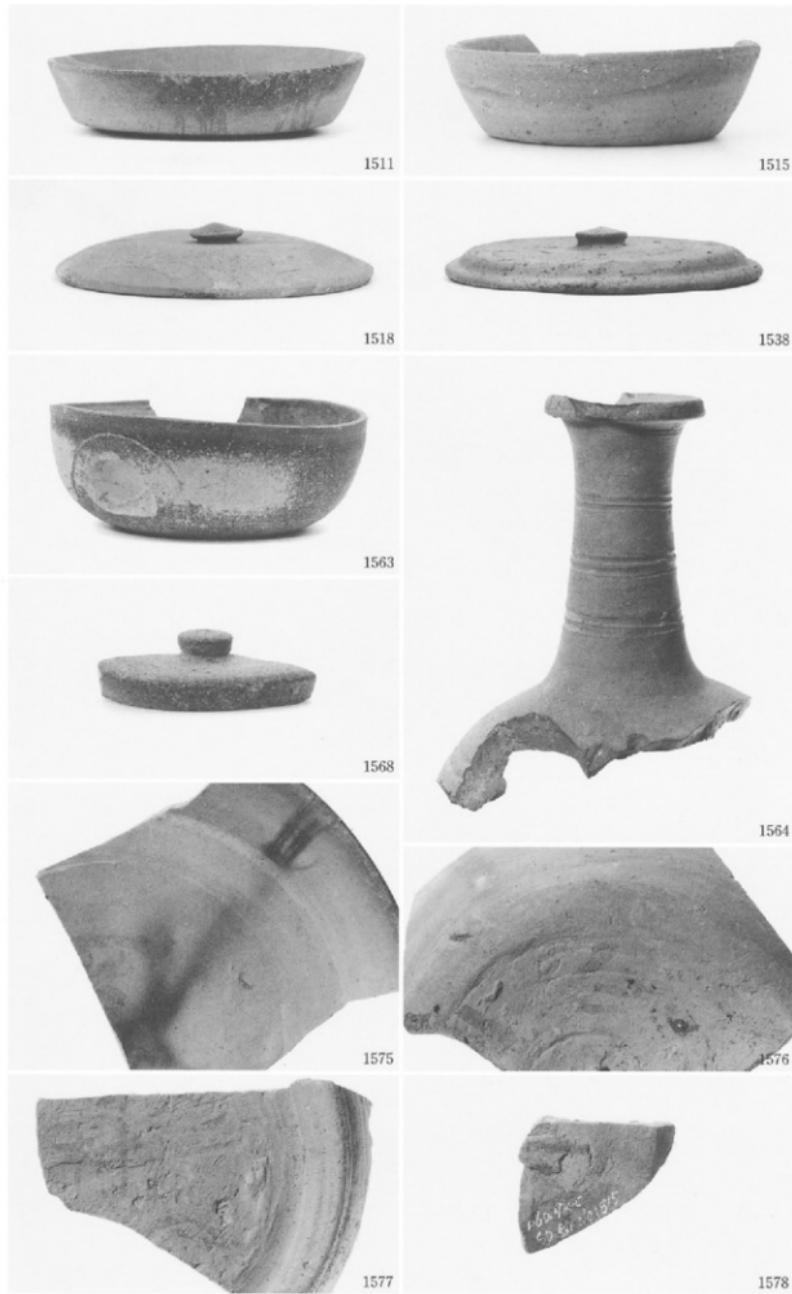


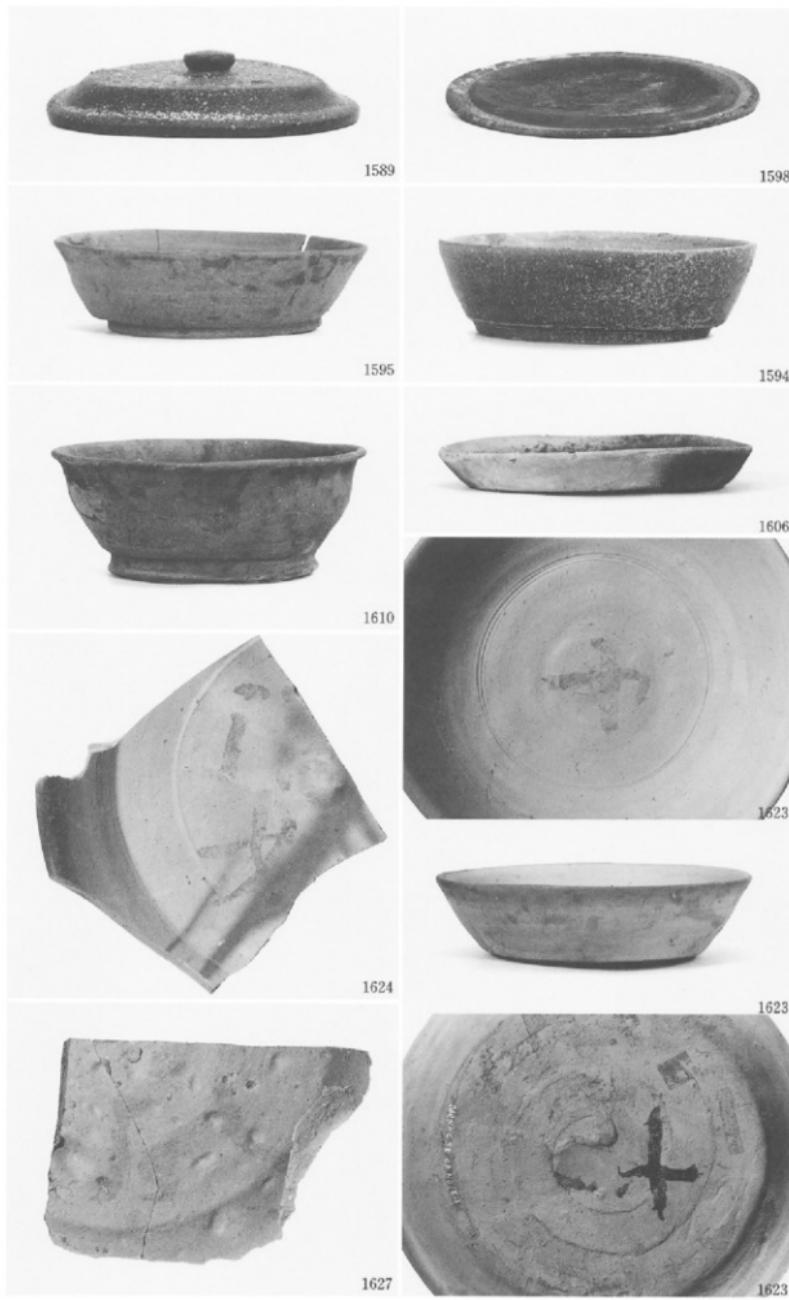
1423

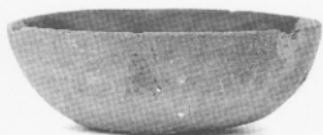




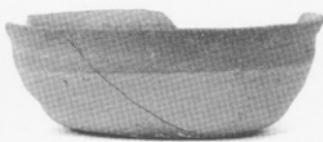




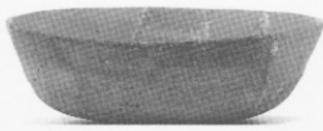




1656



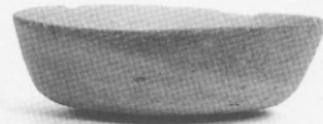
1658



1662



1663



1672



1673



1677



1681



1687



1692





1807



1808



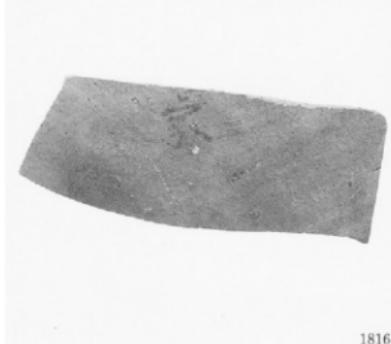
1809



1810



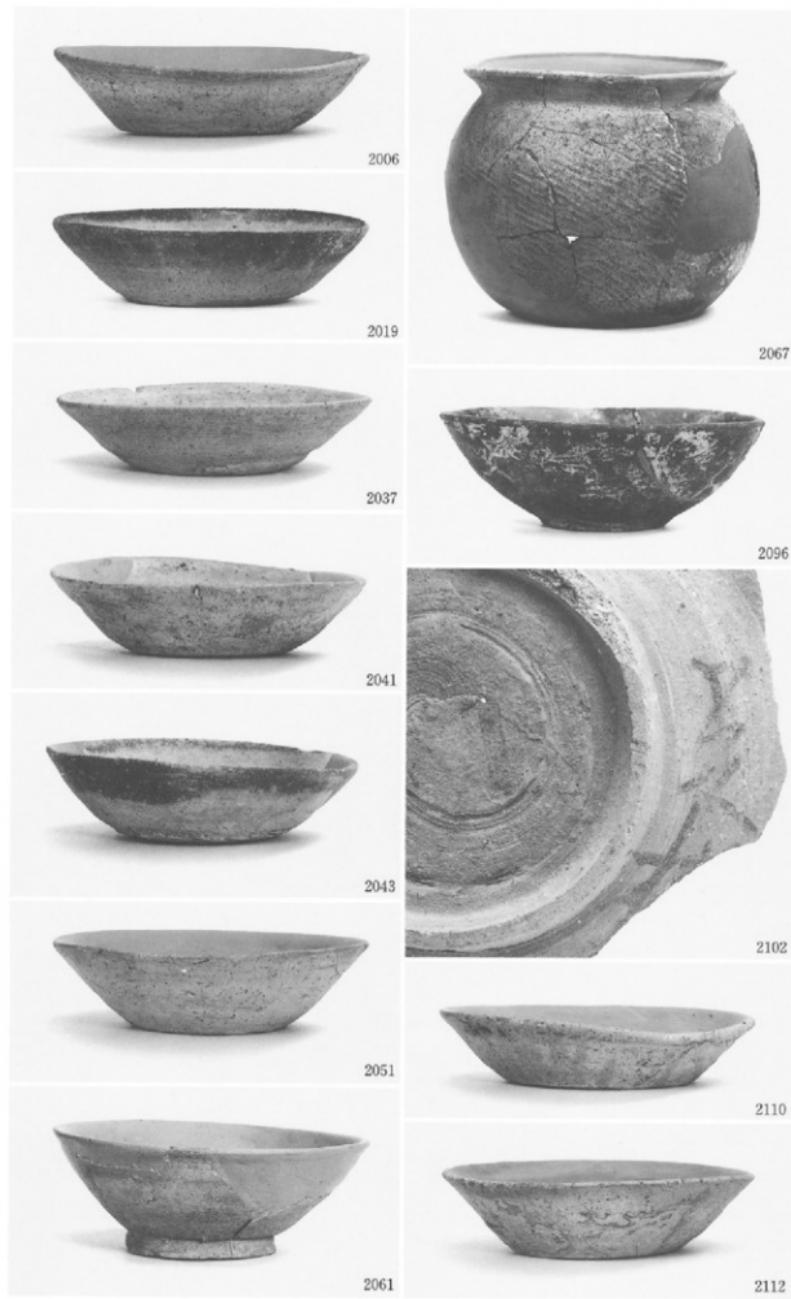
1811

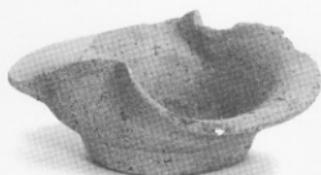


1816



1817

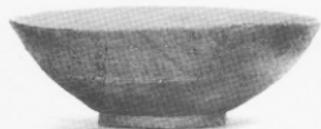




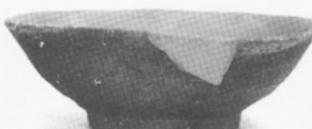
2122



2132



2136



2134



C 1



C 2



C 3



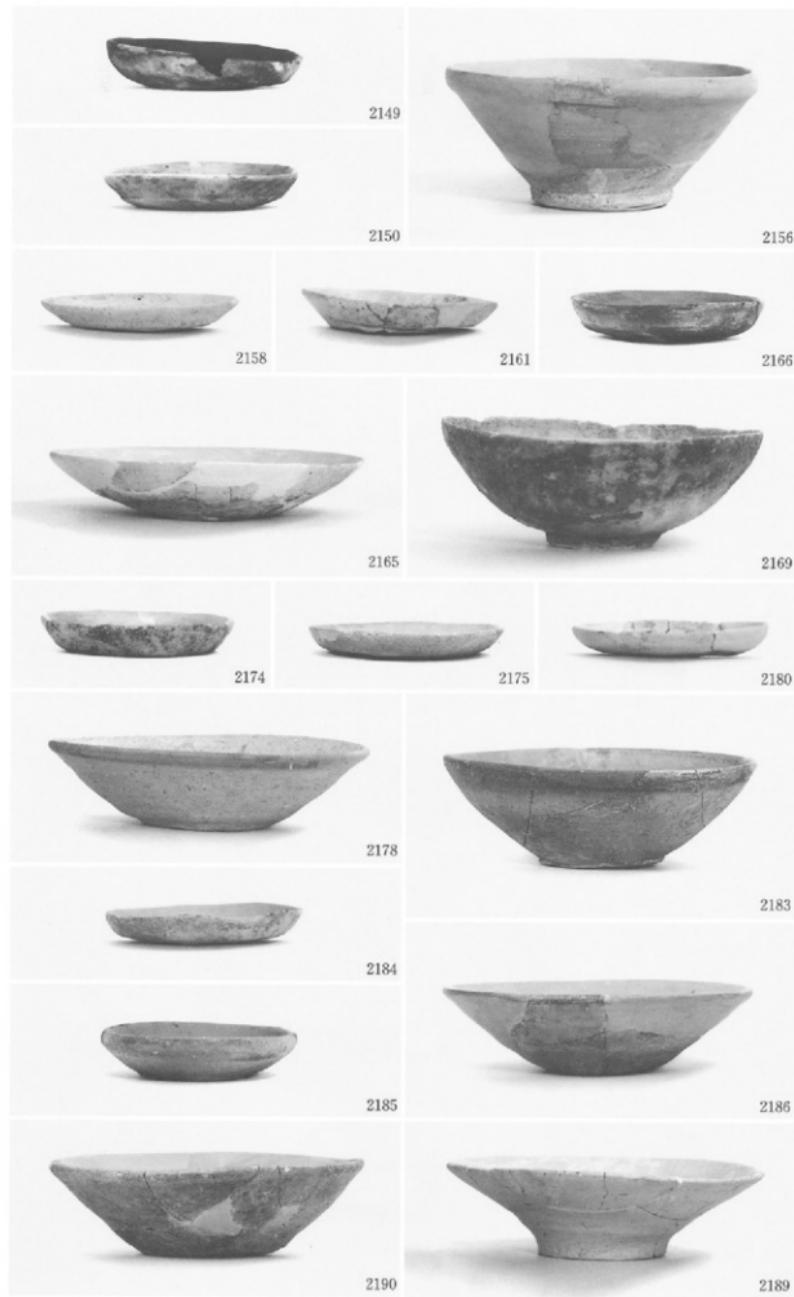
M 1

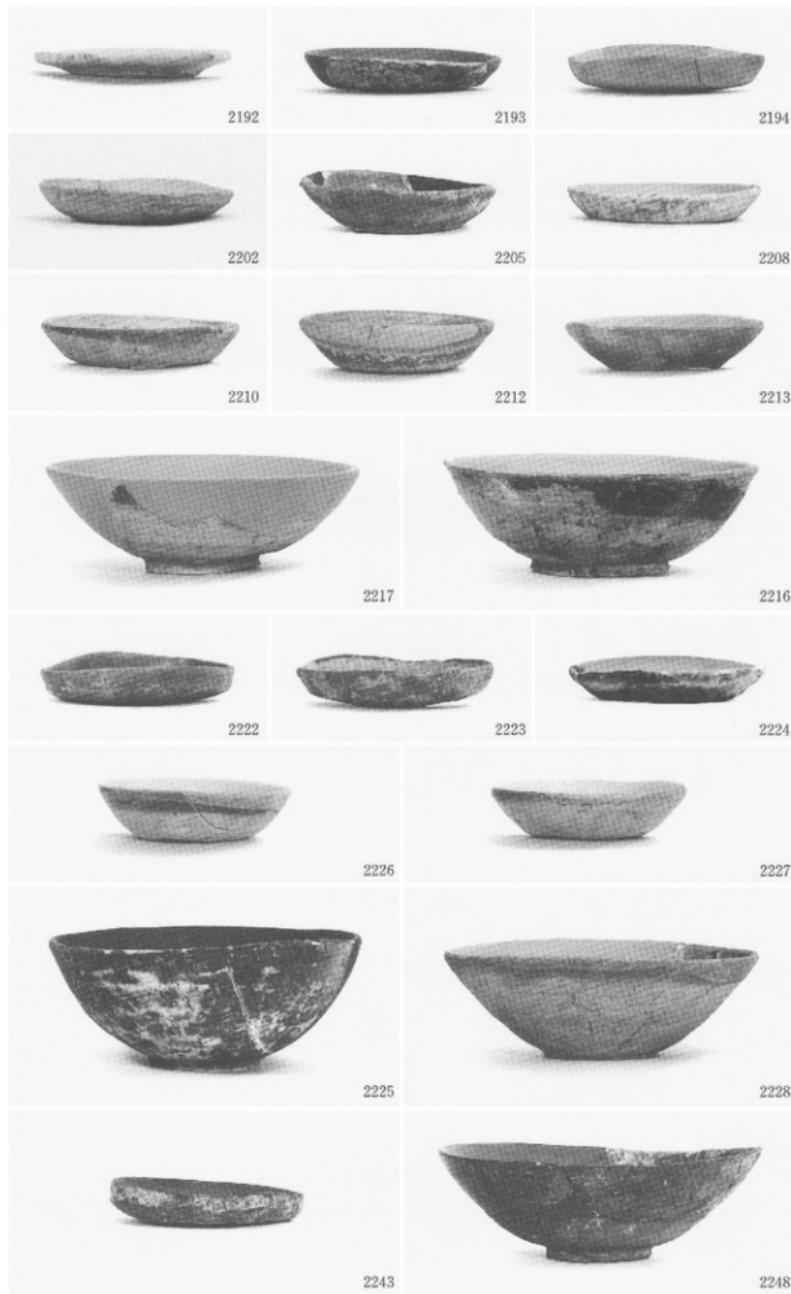


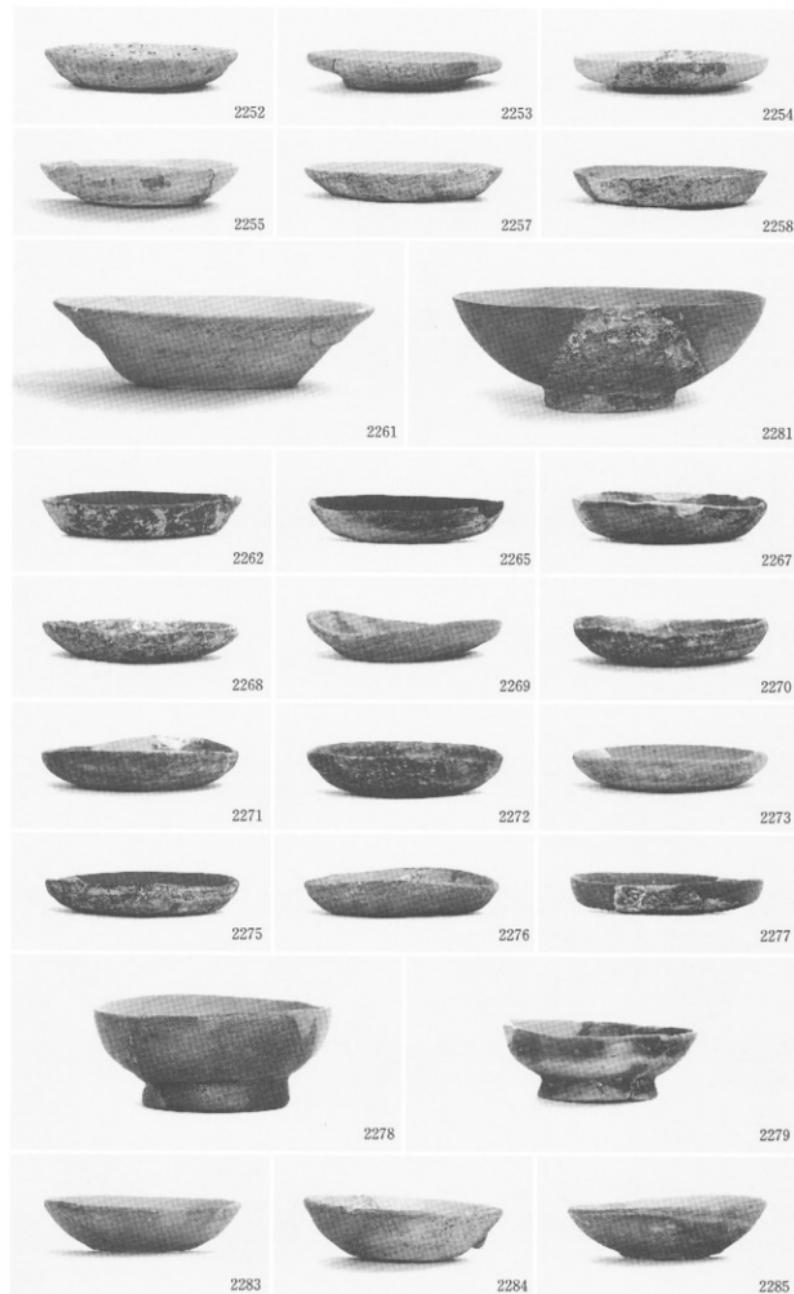
M 1

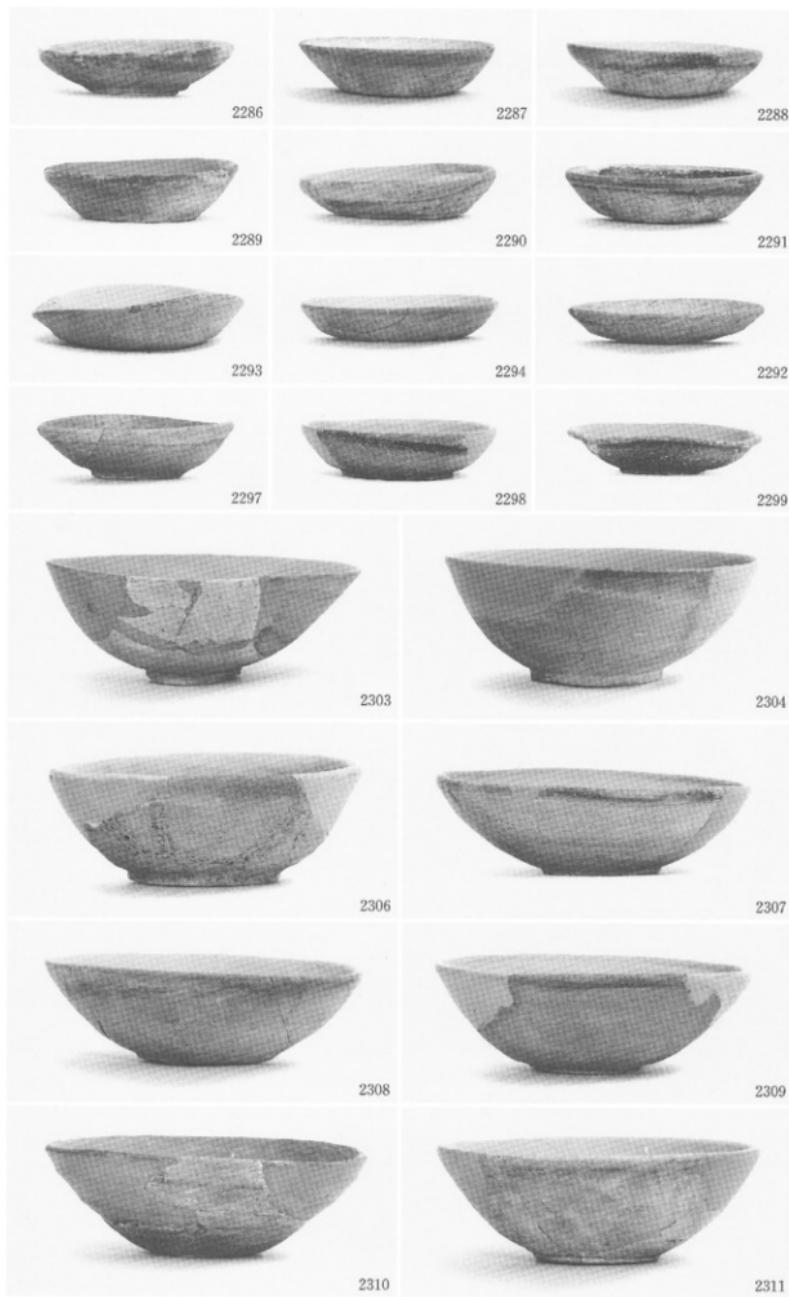


M 2











2313



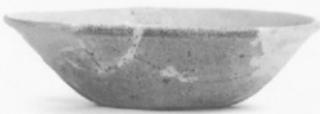
2317



2318



2321



2322



2324



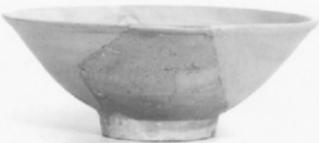
2326



2350

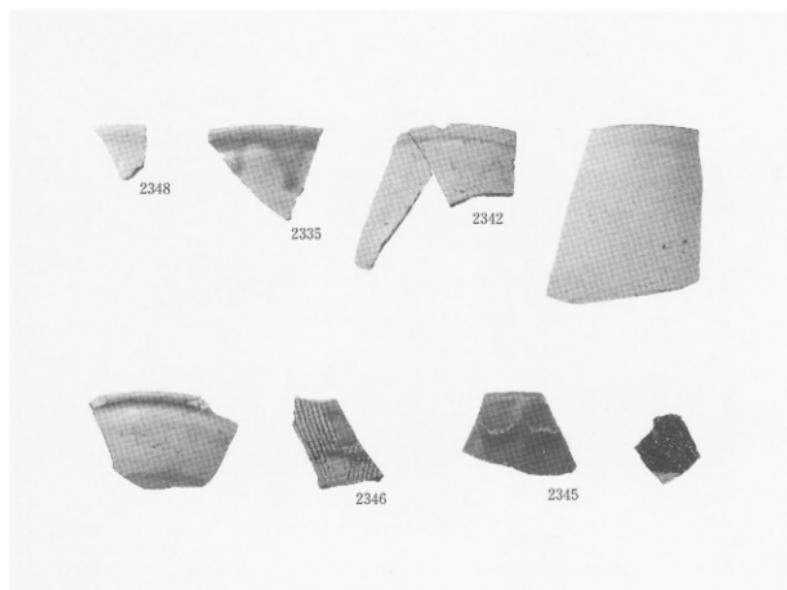
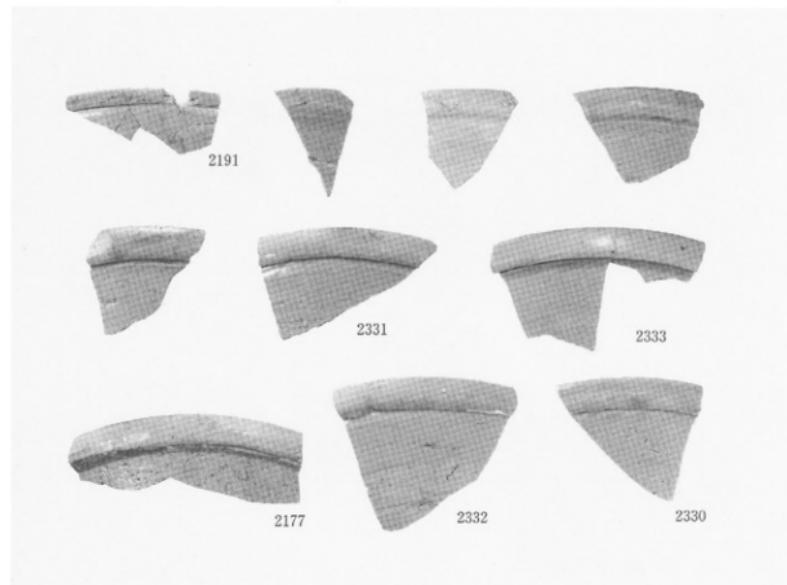


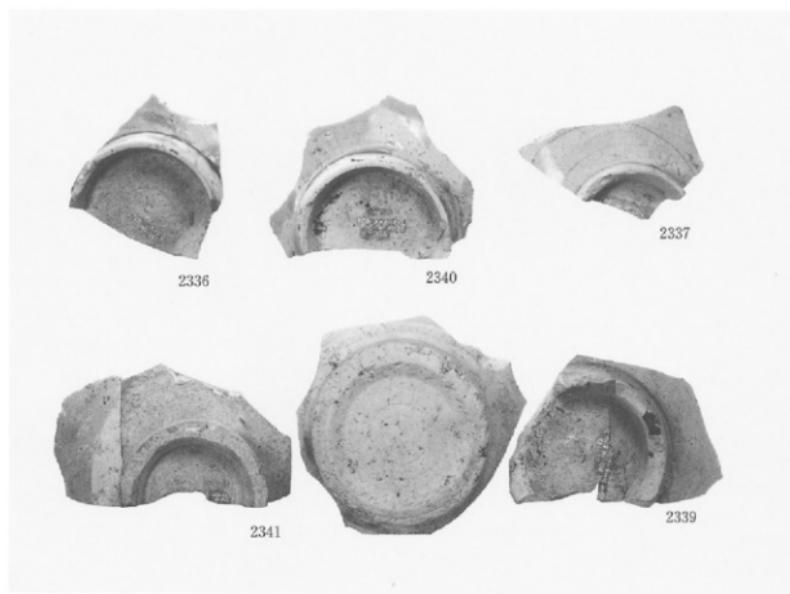
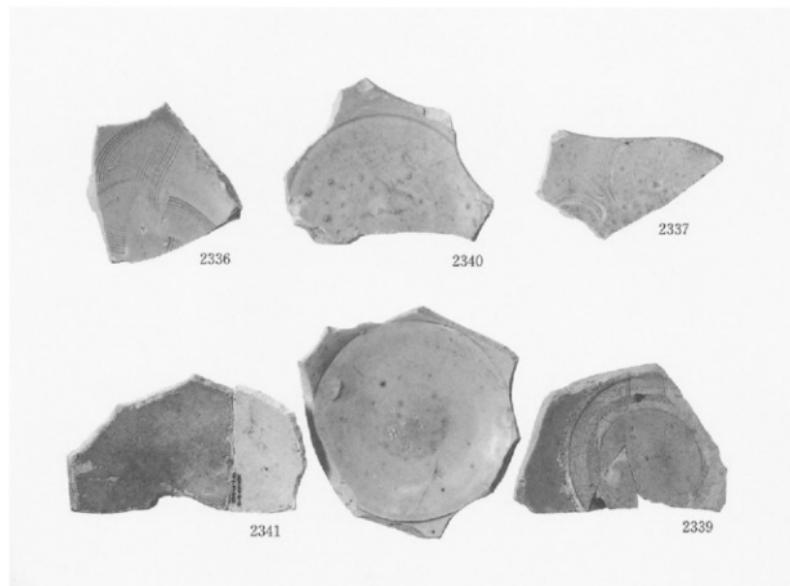
2328

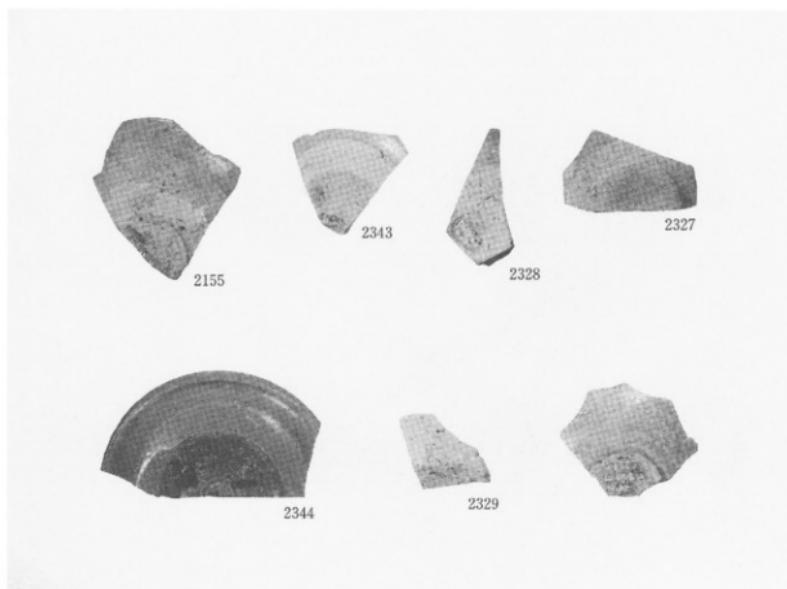
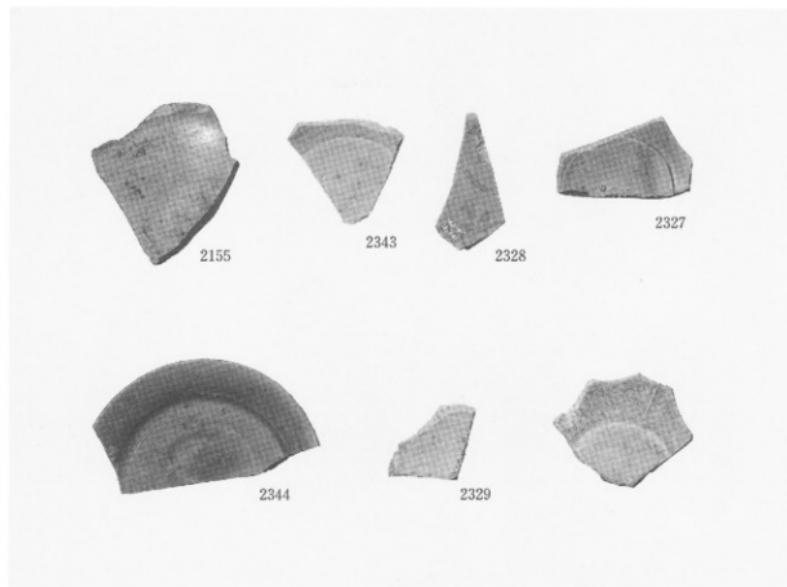


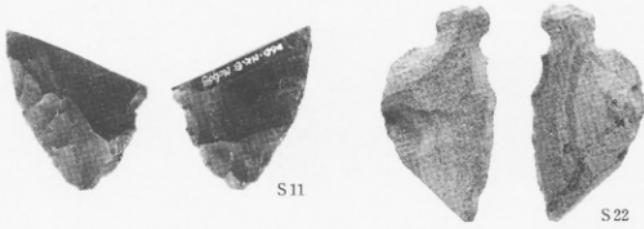
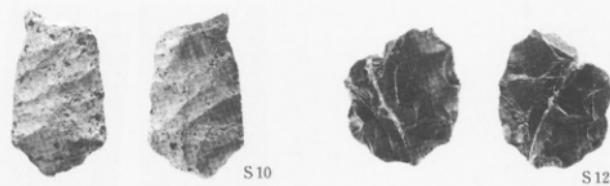
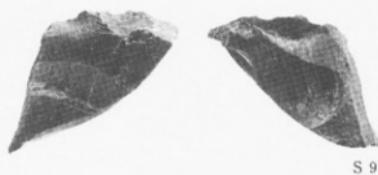
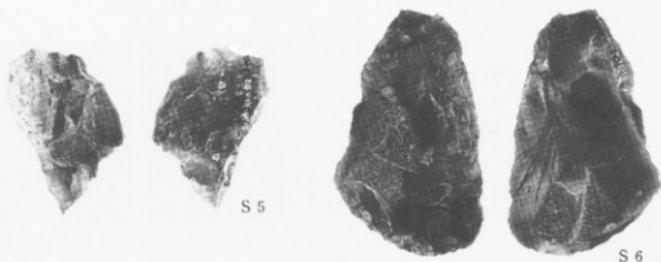
2334

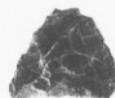




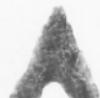








S 15



S 16



S 17



S 18



S 19



S 20



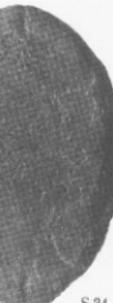
S 21



S 14



S 13



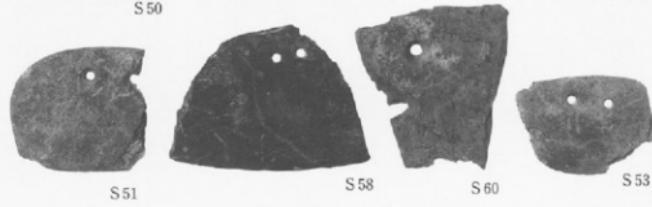
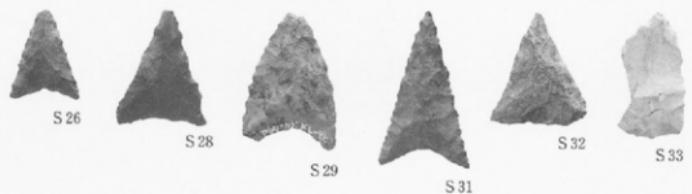
S 23

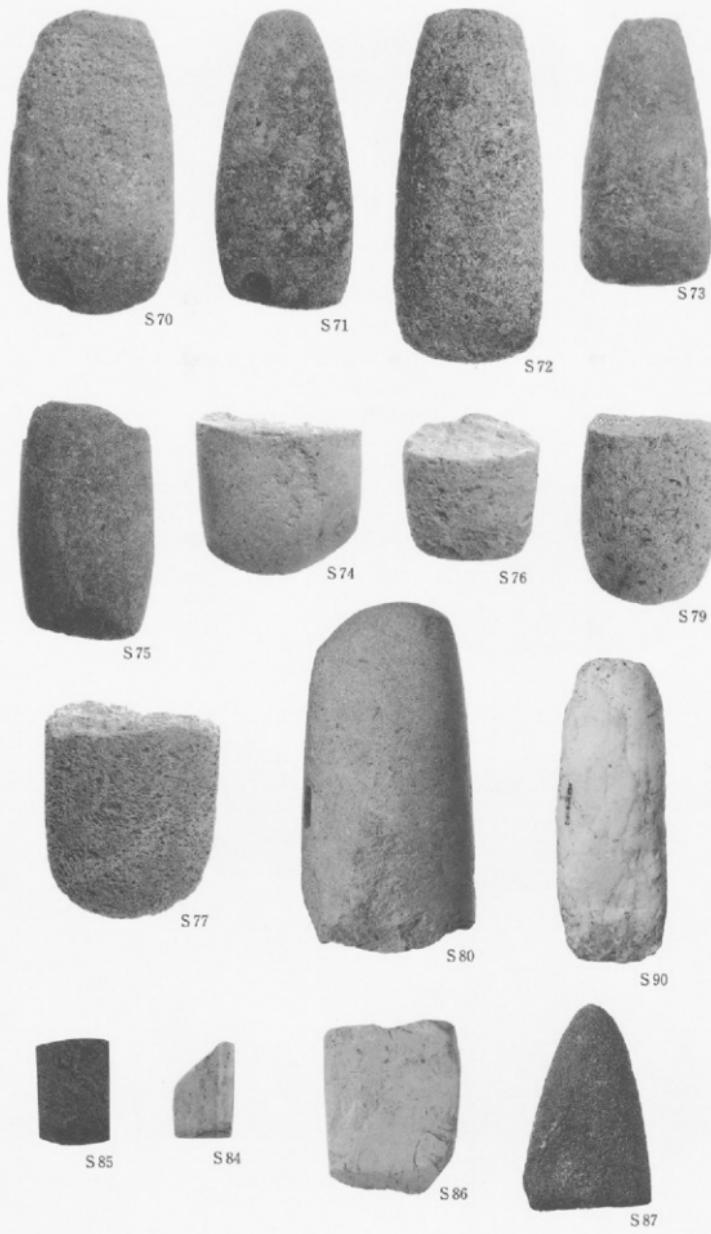


S 24



S 25







S 91



S 92



S 93



S 95



S 100



S 96



S 101



S 97



S 102



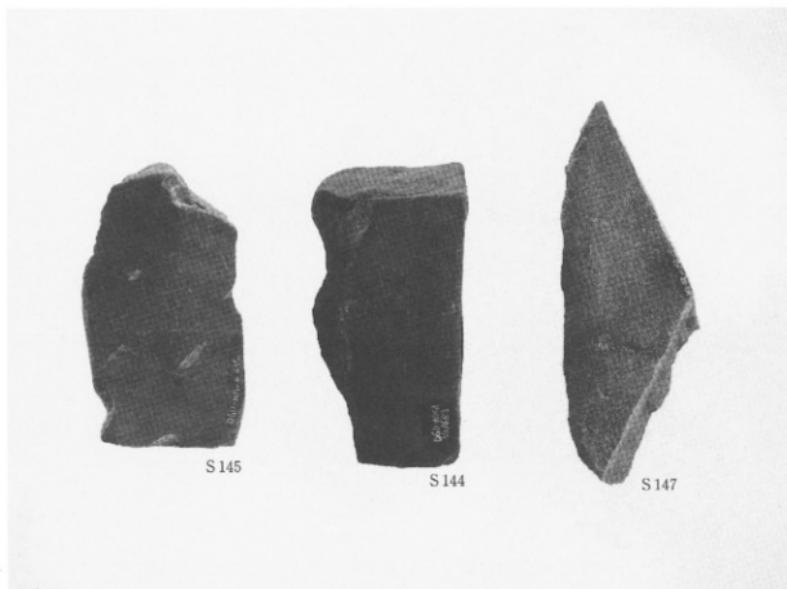
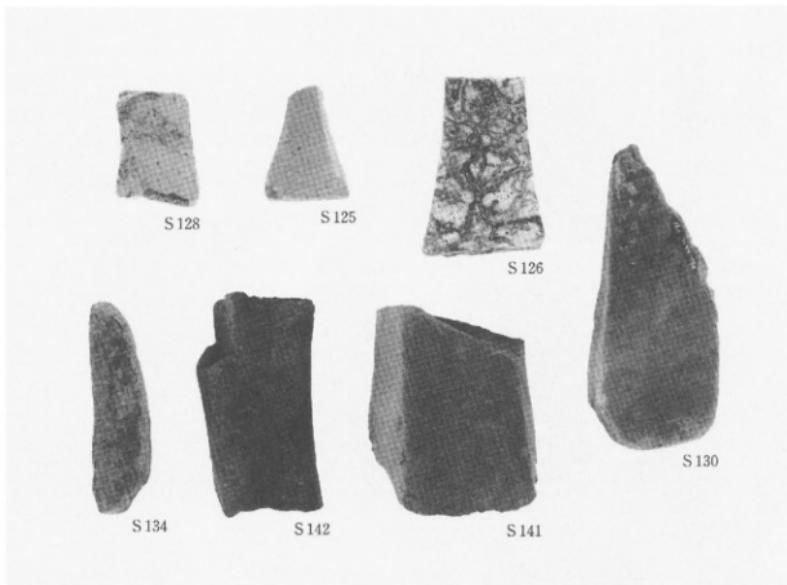
S 103

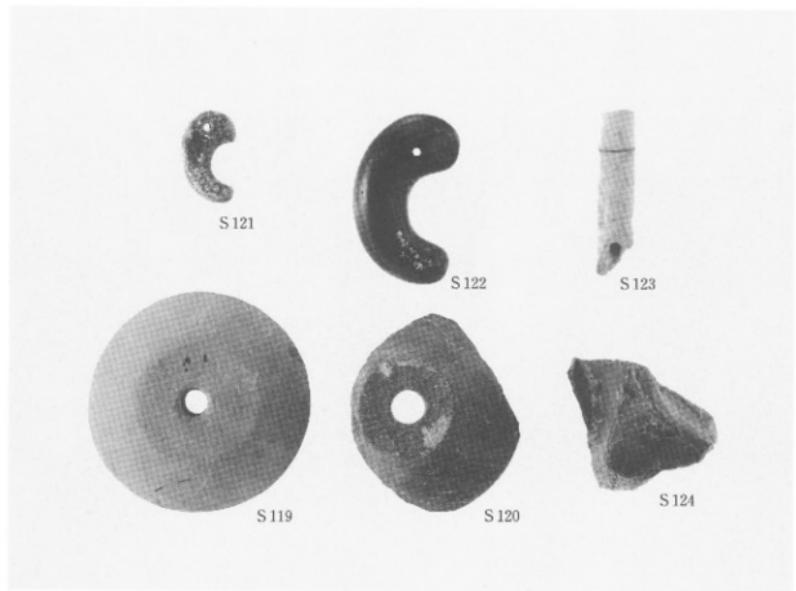
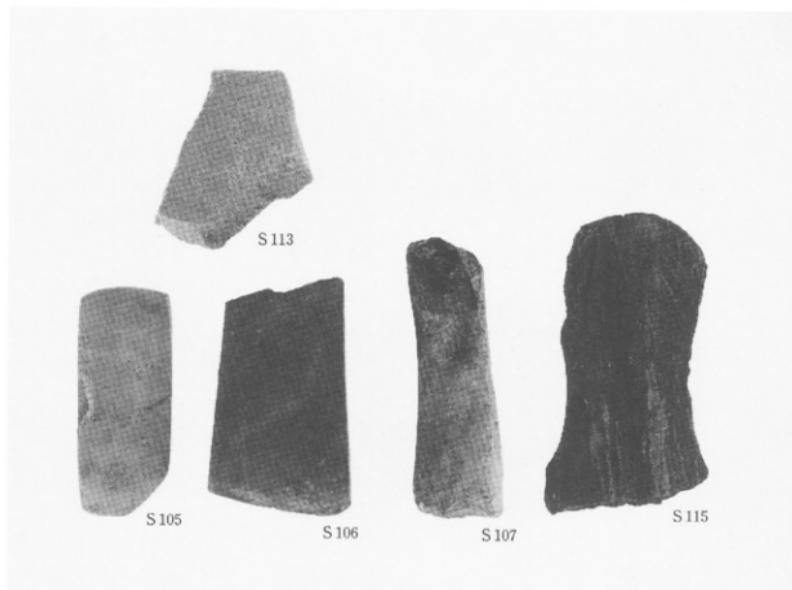


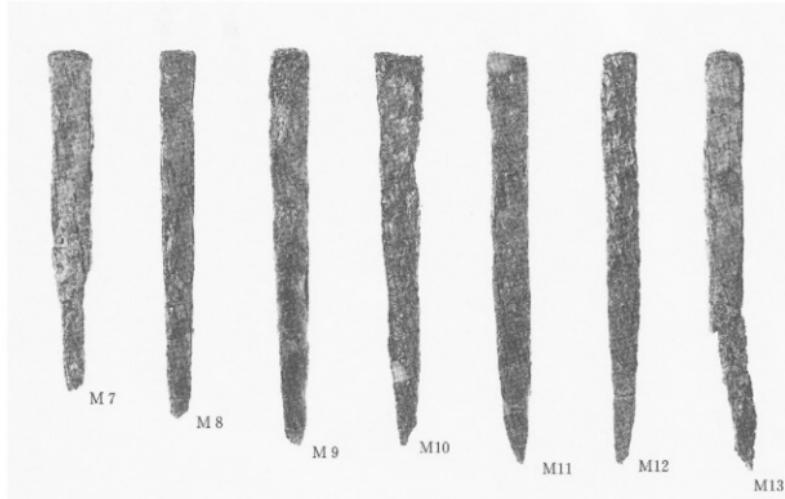
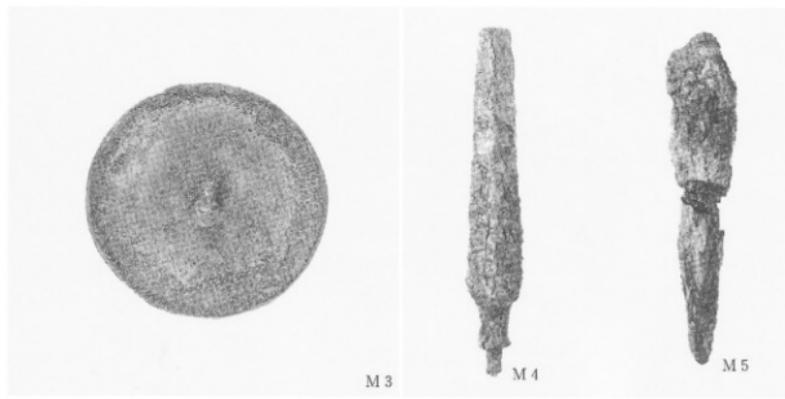
S 98



S 104







兵庫県文化財調査報告 第124冊

西木之部遺跡

近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書 XV

平成5年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
〒652 TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会
神戸市中央区下山手通5丁目10-1
〒650 TEL (078) 341-7711

印刷 光印刷株式会社
神戸市中央区下山手通2丁目16-12
〒650 TEL (078) 321-1551㈹